收容書目

本朝度量權衡攷

度量衡說統

金銀通用記評判

日本經濟叢書

卷三十

日本經濟叢書刊行會

日本經濟叢書卷三十目次

解題

本朝度量權衡攷

本書は本篇を本朝度攷、本朝量攷及本朝權衡攷の三篇に分ち、其の度攷に於ては、先づ初めにツカ(束)ヒロ(尋)及アタ(咫)等の字義及由來を辨じて、それよりツエ(丈)サカ(尺)キ(寸)キタ(分)等の辨に及び、續きて日本の尺度は元來支那の尺度を用ゐたるものなれども、大寳令前には高麗尺を用ゐたるものなりしが、令後唐制に改まりたる事を說き、又小尺大尺の考證に及び、日本の古に於ては延喜の時より總て大尺を常用となしたる事を論じ、尙又吳服尺・曲尺・鯨尺等の事を述べ吳服尺・鯨尺は民間の私尺にて官家は總て曲尺(卽ち大尺)を用ゐたるものなる事を辨明し、終りに錢譜を引きて自說の誤らざるを論證し、量攷に於ては古へ幾坂と稱へたるサカと云ふは、斛のことにて、斛は石

の字を充てゝその音讀セキより、サカ(坂)に轉訛したること、又古書に百坂四十坂、又は百坂五十坂などとあるは、百四十斛、又は百五十斛のことにて、百坂餘り四十坂、或は百坂餘り五十坂など云ふべきを、古は餘りの字を省略して、例へば十八日を「トヲカ、ヤウカ」と稱へ、二十七日を「ハツカ、ナヌカ」と稱へたると同格なることを辨じ、次ぎは龠・合・升・斗の解を明にし、古令にある斛・斗・升・合は今日の何量に當ると云ふことを示し、且つ撰定交替式を引き天平六年に東海道外六道の斛法を定められ、其の量數に多少の差異を付せられたるは、行程の遠近、山川の險易に從ひ、租稅の均輸を計らんとする主意に出でたるものなれば、全く租稅の斛法にて、常用量の斛法にあらざるも、此の斛法に依り古へ米穀を量るに三十龠の大量を用ゐられたる事疑ひなしと斷定したるが如きは、古書を閱讀する者の、最も注意すべき所なり、又古の官量絕えてより、國々の莊園其他所々に依りて、勝手の私量を用ゐ、總て一定の公量なかりし事を說き、最後に德川時代となりて、常用し來りたる江戶升は

不同ありて、不便尠なからざりしかば、寛文九年に京升に改められたる事を述べ、權衡攷は日本の權衡は度量と同じく唐制に據りしものなることを說き、度量に於て大尺小尺、又は大量小量あるが如く、兩にも亦大兩小兩ありて、藥を合する時の外は、皆大兩を用ゐたるを辨じ、古への銖・兩・斤は今の何匁何分に相當することを示し、それより延喜式の木工式及主稅式などを引證して、此等の式文に、斤兩の大小を云はざる時は、悉く大稱を用ゐたるものなることを論じ、終りに駄法を詳かに考證して本篇を完了し、更に其の本篇の所論を立證し、且遺漏を補はんが爲めに、最も重要なる附錄三卷五篇を加へ、其の上卷之上下二篇は和漢の諸書に徵して、支那歷代の尺制を詳にし、中卷は同じく諸書を參考して、支那の量制を說き、且つ西淸古鑑・博古圖・考古圖等に據り精確なる器物圖を示して之を論證し、下卷之上下二篇は是れ亦和漢のあらゆる古書を援き古器物の圖を掲げて支那の權衡に關する古制を、精細に考證したるものなり

著者は附錄上卷の初めに「予弱冠ノ頃ヨリ皇國ノ制度ヲ知ラント思ヒテ、國史律令格式ナドクリ返シ讀ムニ、知リ難キ事ノ多カル中ニ、度量權衡ハ今モ日日用フル物ナガラ、今ト古ト同ジカリシヤ、異ナリシヤ、タシカニ知ラレネバ、先達ノ人々ニ問質セシニ、委ク敎フル人モ無カリシカバ、其筋ノ事書ルモノドモ、彼是取集メテ讀見ルニ、能ク考ヘ明ラメタリト見ユルモ、ヲ、ササ無カリケレバ、何クレト尋求メテ考ヘシニ、皆李唐ノ制ヲ寫シ給ヒシナリケリ、爰ニ思ヒ起シテ其考三卷ヲ作リタリ、又ヨク思ヘバ、其據リ給ヒシ唐ノ度量權衡ノ本ナル周ノ時ノ事、其後唐マデノ有リシサマ、又唐ノ後今ノ淸ニ至ルマデノ沿革ハタ知ラデ有ルベキナラネバ、彼國ノ書ドモヲ考ルニ、尙書・左傳等ニ度量權衡ノ事見エタレドモ、其詳ナルコトハ知ルベカラズ」云々と述べ、以て本書著作の由來を記したるが、所謂「其考三卷」と云ふは、本篇の度攷・量攷及權衡攷の三卷にして、著者は此の三卷を著作したる後、尙進んで充分に精細の事を研究したる結果、更に附錄三卷五篇を書き加へたるものに

して、其の前後に於ける著者の苦心努力が如何に周到なりしかは、本書を一讀すれば自ら瞭然たり、殊に豐富なる引用書中には、往々容易に見ることを得ざる珍書あり、要するに棭齋其人にあらざれは到底斯の大著作を完成すること能はざりしや疑なきなり

著者狩谷棭齋、名は望之、字は雲卿(一に卿雲に作る)棭齋は其の號、三右衛門と稱す、其の先三州刈谷の人なり、數世の祖、江戸に遷り、狩谷を氏とす、刈狩國訓通ずるが故なり、棭齋は少くして律令の學に志し、心竊かに謂へらく、唐代の古書に渉らざれは、其の根據を窮むること能はずと、乃ち唐六典・唐律・通典及太平御覽等の諸書を精研して、遂に漢代に溯り、又進んで六經を修めて、大に發明する所ありと云ふ、棭齋又曾て思へらく、源順の和名類聚鈔は、我國の古書中、最も實益有用の書にして、上は天地より、下は草木に至り、源を窮め委を討ねて、網羅遺す所なし、然るに坊間の寫本は傳寫眞を失し、紕繆實を得ざるもの鮮なからずとし、百方多くの古寫本を集め、對校

疏釋して、箋注和名類聚鈔二十卷を著し、其他聖德法王帝說註・日本靈異記考證・扶桑略記校譌・古京遺文等若干卷を著し、皆其の家に藏せり。天保六年年六十一にして江戶に歿せり、棭齋は少より古錢・古鏡等を愛玩するの癖あり、自ら六漢老人と稱す、六漢とは漢鏡・漢錢・王莽の威斗・中平の双魚洗・三耳壺の五物を愛藏するが爲めなり、或人之を訝りて曰く、是れ五漢なり、其の一は何くに在ると、棭齋笑つて曰く、身は漢學を嗜む、乃ち亦た漢時の物にあらずやと、彼が和漢の學に該通して、近世考證學の大家たるは、世人の周く知る所の如し、本書は蓋し彼が畢生の心血を濺ぎて、著作したるもの。豈に大に珍重せざるべけん哉

本書は從來固より梓行したることなく、其の寫本にて傳はるものも亦甚だ稀少にして、現在の傳寫本數種中誤寫脫漏最も少しと思はるゝは、大藏省藏本是なり、本書の底本は此の大藏省本を借寫し兼て秘閣本・帝國圖書館本、并に福田博士收藏の横山由淸翁舊藏本を以て校讎したるものにして、其の校合は

福田博士自ら之を擔任せられ、本叢書の校者小西武治氏を助手となし、一々引用書と對照して、舛謬を正されたるは、編者の深く感銘する所なり、茲に一言して博士の厚意を謝す

度量衡說統

本書は前記狩谷棭齋の度量權衡考と、同種の著作にして、其の內容は大同小異なり、度量權衡に關する多くの著作中、本書は其の主たるもの丶一にして、從來徂徠兄弟の度量衡考（本叢書第三卷に收容す）等と並び稱せられたる有名の書なるも、度量衡考と同じく全篇悉く漢文にして、普通の人々には難解の所多きは、其の缺點とする所なり、我國漢學者の常習として、致方もなきことなれども、此の種の書藉は、現に本書の序文に於て、山本北山が云へる如く、眞に實用の著作にして、詩賦音韻の學とも違ふことなれば、棭齋の如く、邦文を以て記るし置きたらんには、世上を裨益すること、更に一層大なるも

のありしならん、然れども本書は既に文化元年より板本にて世上に行はれ、廣く學者間に重寶がられたるものにして、支那及日本古代の度量衡を考證するには缺ぐ可らざるものなり

著者最上德內、名は常矩、字は士規、德內は通稱にして、鶯谷と號す、出羽の人なり、寬政三年幕府の命を奉じて、蝦夷を巡見し、露人の狀況を視察して歸る、翌年復た命を受けて樺太を探撿し、其後又近藤守重等と所々を視察し、虜情を詳にして歸る、蓋し德內の學は、其の淵源する所、何人なるか明かならざれども、博學該通、尤も經濟に長じ、旁ら音韻の學を善くし、著す所は本書の外孝經古今異同考一卷・論語彝訓二十四卷・數談一卷・北陲祇役志八卷・北邊隨筆四卷、其他數部ありと云ふ

金銀通用記評判

本書は世上に流傳せる「金銀通用記」の本條の要旨を摘錄し、評曰の二字を記

るして、著者の意見を述べたるものなり、評語中往々粗野の言あり、又不妥當の説なきにあらざるも、亦大に參考として見るべきものなきにあらず、本書の初めに金銀通用記と云ふ題名の不可なる事を評し、啻だ金銀のみならず種々の雜件を記るしながら、之を金銀通用記と云ふは、名實相稱はずと論じ居るも、本書は原本即ち金銀通用記の各條に就き、一々之を評したるが故か、矢張り金銀通用の事のみを掲げたるにあらず、地方に關する事項を始めとし其他社會一般の人事、及武家の慣例風俗及歷史上に關する事柄も亦甚だ少なしと云ふ可らず、之を要するに本書は廣き意味に於ける經濟隨筆の類にして、單に金銀の通用に關する書にあらざれば、隨てそれだけ興味ある材料なきにあらず、行文頗ぶる拙劣なれども亦一讀の價値あるものなり

本書の著者は何人なるや審ならざれども、末文に之を著したる由來を記し、「先障堂不聰評書、門人探緒軒增補」とあり、又本文中の評には單に「評曰」としたるもあり、又「理交私曰」などとしたるもあり、其の體裁全く備はらずして

何れの部分を何人が評したるものなるや判然せず、且く此に其儘收容して、識者の判定を須つのみ

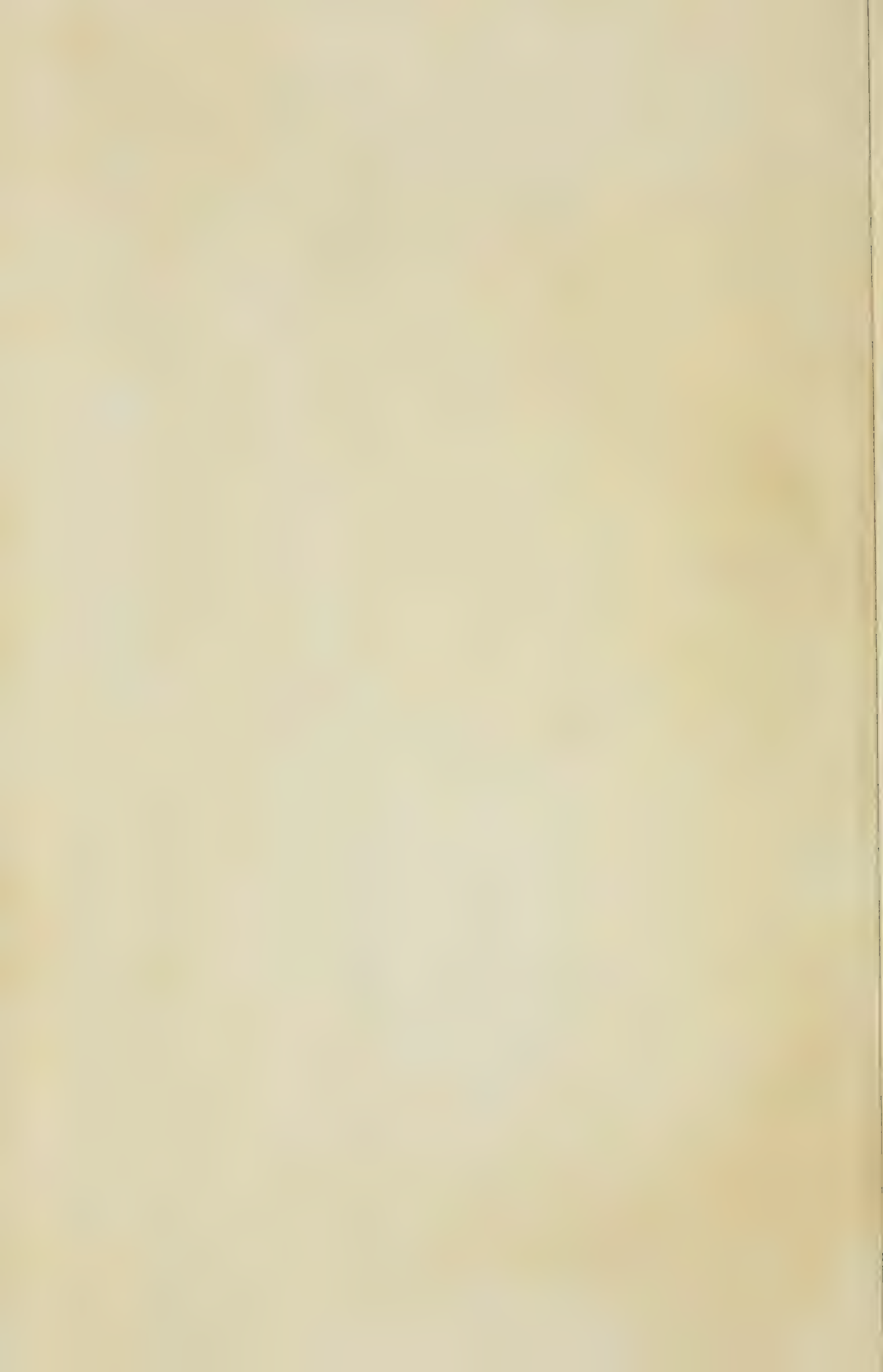
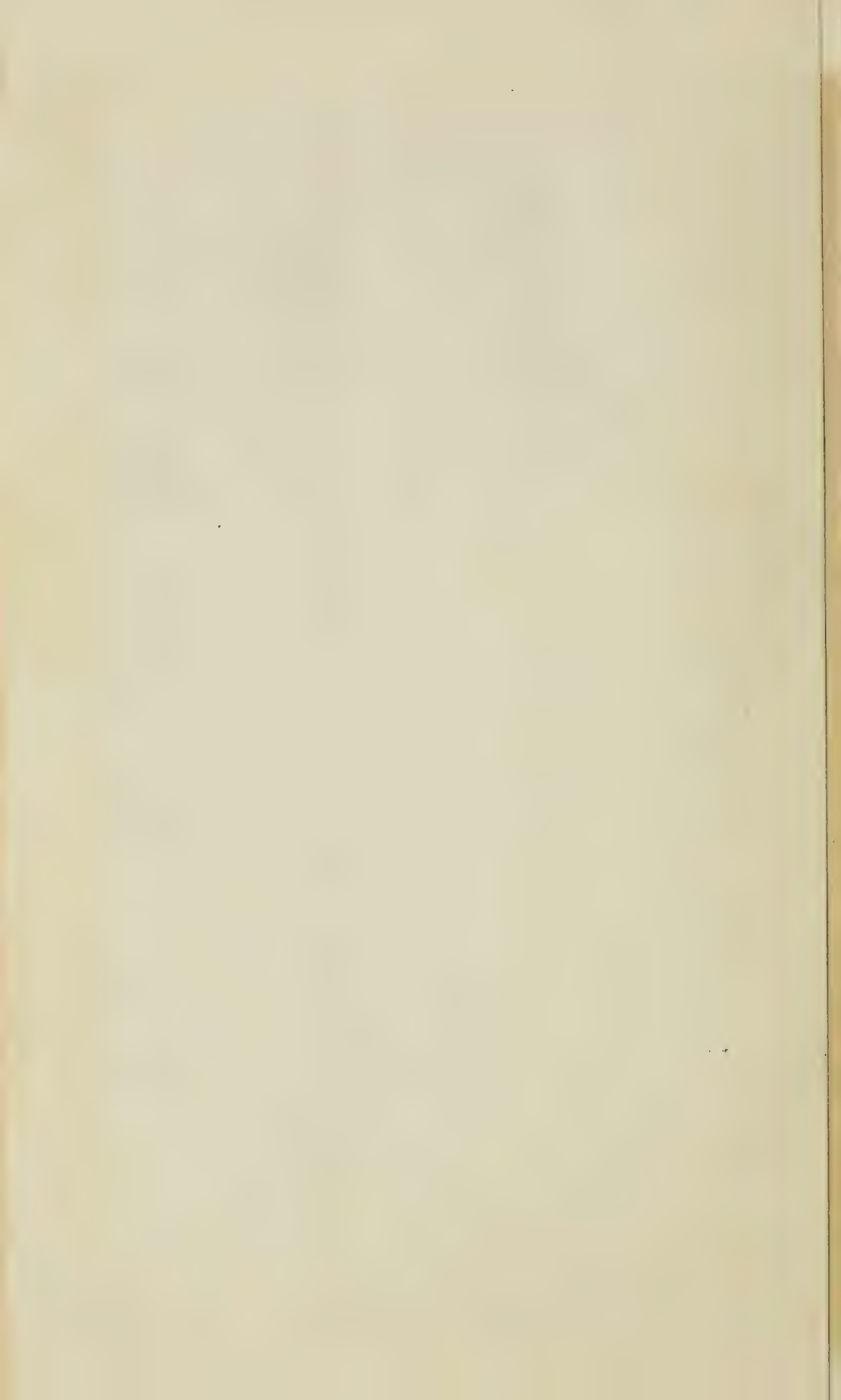
大正五年十一月　　瀧本誠一

解題終

本朝度量權衡攷

狩谷棭齋著

狩谷棭齋肖像

狩谷棭齋朝川善庵ニ與フル手簡

本朝度攷

狩谷望之著

皇國ニテ尺度(モノサシ)ヲ以テ諸物ヲ度ルコトハ西土ノ制ヲ學ビシニテ、上古ハサルコト無カリキ、タヾ長キ物ヲバ手ニテツカミテ、四指ノ廣サノ程ヲ度リ、是ヲツカト云ヒ、【十握劒(トツカツルギ)八拳(ヤツカ)ノ須(ヒゲ)八掬(ヤツカ)脛(ハギ)ナドノ類ナリ、後世モ矢ノ長ヲ度ルハ手ニテツカミテ何束ト云ヘリ、是ヲモ古ハ何ツカトゾ云ヒタリケン、然ルニ東字ヲツカヌト訓ムニヨリ、此字ヲ借リテ何束ト書シガ、遂ニハ字音ニノミ呼シナリ、（ツカヌトハ、穫タル稻ナドヲ手ニテツカミ聚メテ縛ルコトナリ、故ニ東字ヲ訓メリ、說文ニ「東ハ縛也」漢書ノ注ニ、李奇ヲ引テ「聚也」ナドアリ、ツカト云フ言ノ原ハ同ジケレド、其事ハ同ジカラズ）ツカニ握字ヲ用フルハ、儀禮ニ「箭籌八十、長尺有握」、又禮記ニ「宗廟之牛角握」ト云フ字ヲ當テタルナリ、拳ハ玉篇ニ「屈レ手也」ト注セリ、漢ノ鉤弋夫人手拳(セリ)」ト云ヒシモ是ナレバ、手ヲニギリタルニテ握ト云フニ同ジ、掬ハ韓詩ニ「四指曰レ匊」ト慧琳ガ一切經音義ニ引リ、玉篇ニ「匊四指也」トアルモ、韓詩ノ訓ヲ取リシナラン、（掬ハ匊ノ俗字ナリ）四指ノ廣サハ握拳ニ同ジケレバ、匊ヲモツカニ當シナリ、毛詩ニ「蕃衍盈レ匊」、マタ「不レ盈ニ一匊一」春秋傳ニ「舟中之指可レ掬」禮記ニ「受ニ珠玉一者以レ掬」ナドアルハ詩ノ毛傳ニ、「兩手曰レ匊」、公羊傳ノ注鄭玄ガ禮記ノ注モ同ジケレバ、兩手ヲ以テ物ヲ受ルコトナリ、唐ノ于良史ガ詩ニ「掬レ水(スレバ)

月在手」ト云ヒシモ、兩手ニテ水ヲムスブコトナレバ、是等ノ掬ハツカニハ當リ難シ、或人ノ云ヒケルハ、毛詩傳ニ「兩手曰匊」ト云ヘルヲ、釋文ニ「本或作一手曰掬」トアリ、ツカニ掬字ヲ用ヒタルハ此「一手曰掬」トアル本ノ毛傳ニヨリテ當テタルニヤト云ヘリ、然レドモ一手トアルモ猶ツカニハ當ラザレバ掬字ヲ用ヒシハ、韓詩ノ訓ニ依リシモノトスベシ、新井白石君美ノ東雅ニ、ツカハ指掌ヲ合セテハカリシナリト云ヒタレドモ、指掌ヲ合セタルヲツカト云フベキ理ナケレバ、其說ノ非ナルコト明ナリ】大ナル物ハ兩臂ヲヒロゲテ度リ、是ヲヒロト云ヒ【八尋殿千尋繩ノ類ナリ、今モ繩ナドヲバ、古ノマヽニ臂ヲ拓キテ度リ幾ヒロト云フ、尋字ヲ用フルハ、大戴禮ニ、「舒肘知尋」、說文ニ「度人之兩臂爲尋」ト云フ字ヲ當テタルナリ】サシモ大ナラヌ物ヲバ大指ト中指トヲヒロゲテ度リ、是ヲアタト云ヒシナリ【指ヲヒロゲテ度ルコト今人モスルコトニテ、八咫鏡八咫烏ノアタ是ナリ、（是ヲヤタカヾミヤタガラスト云フハヤトアタト云フ言ニアノ餘韻アル故ニ約リタルナリ）古事記ニハヤアタカガミヲ、八尺鏡ト書レタリ、アタニ尺字ヲ用ヒタルハアタハ手ヲヒロゲテ度レバ、大戴禮ニ「布手知尺」ト云フ字ヲ當テタルナラン、（北尺ハ周尺ナリ、周尺ハ曲尺ノ七寸六分ナル「附錄ニ詳ニス）後ニ日本紀ヲ作ラレシ時ハ、大指中指ヲヒラキタル長サハ、當時用フル尺ヨリモヤヽ短キ上ニ、アタハ手ニテ度ルモノナレバ、尺度ノ字ヲ當ンハ物遠シト思ヒテ、說文ニ「中婦人手八寸謂之咫」トアルニ依リ、改メテ手ヲ以テ度ル咫字ヲ當テタルナルベシ、然レドモアタハ大指ト中指トヲ拓キテ地ニ布キタルナレバ、大戴禮ニ手ヲ布キテ知ルト云ヒシ尺字コソアタニハ當ルベケレ、咫

ハ婦人ノ手腕ノ約文ヨリ、中指ノ末マデ度リタルニテ、手ッ布キテ定メシ尺ノ八寸ナレバ、アタニハ當リ難シ、然ラバ咫字ニ改メタルハ中々ニワロカリシナリ、ヤアタガラスヲバ、古事記ニモ八咫烏トアレドモ、是モ本ハ八尺烏トアリツランヲ、後人書寫ストテ日本紀ニ馴レタル心ヨリ、偶書改メタルナラン、（八尺鏡ハ下ニ訓注モアレバサスガニ誤ラザリシナリ）本居宣長ハ古事記ノ八咫鏡ヲ八咫鏡ノ誤リトシタリ、一ワタリ穩ナルヤウニ聞ユレドモ、實ハ是モ日本紀ニ馴レテ、咫ハアタト訓ムベク、又尺ハサカト訓ムベクシテ、アタトハ訓ムベカズト思ヒシニテ、深ク古ヲ考ヘザリシナリ（尺ヲサカト訓ムハ、古ナラヌヿ下ニ云ヘリ）又古事記ニヤアタヲ八尺ト書キシハ、周制「八寸爲レ尺」ト云フニヨリテ、八寸ノ咫ヲ即尺ト書シナリト云フ説アレドモ、是モ日本紀ニ八咫トアルニ本ヅキテ牽强シタル説ナレバ、八尺ヲ誤トハセザレドモ、八寸ノ尺ナラバ、アタニ當ラザルコト上ニ云ヘルガ如シ、サテアタノアハ、閉タル物ノ開ク意ノ言ニテ、アカアキアクアケト活用(ハタラ)ケリ、開字明字ナドヲ訓タル是ナリ、（赤字ヲアカシト訓ミ、緋ヲアケト訓ムモ、明ノ轉ジタルナリ）アタハ開手ノ義ニテ、手ヲ開キテ度ルヲ云ヘリ、但手ヲタト云フハ下ニ言アリテ、手何トアル時ノ事ニテ、（手折・手挾ノ類ナリ）上ニ言アリテ何手トアルヲバテト云ヒテ、タトハ云ハザレバ（衣手・道手ノ類ナリ）古ハアテトゾ云ヒケン、然ルニ古事記八尺鏡ノ訓注ニ「訓二八尺一云二八阿多一」トアルハ、（按ニ下ノ八ノ字ハ夜ノ誤ナルベシ、本居氏ハ正文ヲ八咫ニ改メ、訓注ヲ「訓レ咫云二阿多一」ニ作ルベシト云ヘリ）下ニカヾミト云フコトノアル傳エヌニ、アテトハ云ハズシテアタトハ注セシナリ、同書ノ高天原ノ注ニ、「訓二高下天一云二阿麻一」トアルモ、下ニ原ト云フコトノアルニヨリテ、アメトハ注セズシテ、アマト注セ

シト同ジ、（日本紀ニ猨田彥神ナ「其鼻長七咫」トアル咫ノ字ナアタト訓ミタレド、疑ラクハ古事記ノ訓注ニヨリテ誤リタルモノナルベシ）東雅ニ「咫讀デタト云ヒシハ手ナリ、手ヲ以テ度ルナリト云ヒタレドモ、ヤタカヾミ、ヤタガラスト云フハ、ヤアタカヾミ、ヤアタガラスノ音便ニテ約リタルコト、古事記ノ訓注ニテ明ナレバ（役高天原ナ訓注ニ阿麻トアレド、常ニタカマノハラト云フニ同ジ）讀デタト云フト云ヒシハ誤ナリ、手ニテ度ルト云ヒシモ其度法詳ナラズ、又或人ノ說ニハ、アタハアヒタト同ジ言ニテ、食指ト中指トヲ開キテ、其間ヲ以テ度リシナリト云ヒタレドモ、サル度法、西土ニモ、皇國ニモ、古モ今モ、絕テ有ルコト無シ、又食指ト中指トヲヒラキタル廣サ、古事記ニ尺字ヲ當テタルニモ、日本紀ニ咫字ヲ當テタルニモ合ハザレバ、其誤ナルコト著シ」此ツカ、ヒロ、アタノ外ニ、日本紀ニ丈ヲツヱ、尺ヲサカト訓メリ【萬葉集ノ歌ニ、「一杖不足八尺之嘆」ト詠ミ、又百積船ト詠ミシモ是ナリ、積ハ音ノ同ジケレバ、借リテ尺トシタルナリ】然レドモツヱハ杖ノ訓ヲ借リ、サカハ即尺ノ字ノ音ニテ、物ヲ度ル古語ニアラズ、「八尺勾璁」ノ八尺ハ、彌眞明ノ約リタルニテ、（彌玲瓏明ニテモアルベシ）八尺ト書ルハ字ヲ借リタルノミナリ、玉ヲ貫ク緒ノ八尺ナリト云フ說ハソロシト、本居氏云ヘリ、ゲニ神代ニ尺度ヲ用フベカラザル上ニ、尺ヲサカト云フハ字音ナレバ、長サ八尺ナリト云フ說ノ非ナルコトハ疑無シ】寸ヲキ、分ヲキタトモ訓メリ、是ハ共ニ古言ニテキハ物ヲ限ル言【切ヲキルト訓ミ、刻ヲキザムト訓ミ、痕ヲキズト訓ミ、際ヲキハト訓ミ、極ヲキハマルト訓ム、皆同語ナリ、萬葉集ニ刻字ヲキノ假字ニモ用ヒタリ】キタハ物ヲ切リ分ツ言ナルヲ、【神代紀「斬ニ軻遇突智ニ爲ニ三段ニ」ト云ヒ、「索ニ取

十握劍打折爲三段」ト云ヒシ段ノ字皆キタト訓メリ、又景行天皇紀ニ「到碩田國其地廣大亦麗、因名碩田也」ト云ヒ、本注ニ「碩田此云於保岐陀」トアル地、後ニハ豐後國ノ郡名トナリテ、大分ト書ク、分ヲキタト訓ム故ニ其字ヲ借リシナリ、天武天皇ノ紀ニ大分ノ君惠尺ト云フ人アリ、此地ニヨリシ姓ナルベシ、倭名類聚抄ニ豐後ノ郡名ノ讀ヲ於保伊多トアルハ、後ニ音便ニ壞レタルナリ、(古本ノ倭名類聚抄ニハ、國郡ノ部無シ) 又出雲風土記ニ、八束水臣津野命ノ國ノ餘有リシヲ折テ、足ラヌ處ニ補ヒシコトヲ云ヘル條ニ「國之餘有詔、而童女胸鉏所取而大魚之支太衝別而波多須々支穗振別而」トアルハ、國ノ餘リタル處アルヲ童女ノ乳房ノ大ナラデ、廣ラカナル胸ノ如キ、廣キ鉏ヲ取リテ、大魚ヲ捕リタル者ノ切分チテ持運ブ如ク、突キ分ケ居リ分ケテ、足ラヌ國ニ補ヒ給ヒシト云ヘルナリ、此「支太衝分」ト云ヘル支太モ段ノ字、分ノ字ヲキタト訓ミシト同語ナリ、本居氏ハ此支太ヲ鰓ノ轉ナリト云ヒ、内山眞龍ガ出雲風土記傳モ其說ニ依リシカド非ナリ】尺度ノ渡リ來リシ後ニ、分寸ノ訓ニ用ヒシニテ、物ヲ度ル古名ニハアラズ

或人難ジテ曰、本居氏ノ古事記傳ニ、八咫鏡ハ八頭鏡ノ借字ニシテ、八稜鏡ナリ、八咫烏モ八頭烏ニテ、頭八ツ有ル鳥ヲ云フ、八股蛇ノ八頭八尾アリシ類ナリト云ヘリ、此說出テ後、諸家異論無キニ、今咫ヲ字ノ如ク尺度ノ事トセシハ古義ニ非ルニ似タリ、如何、答、本居氏ハ倭姫命ノ世記御鎭座傳記・寶基本紀等ニ據リテ、八咫鏡ヲ八稜鏡トシ、天德ノ御記ニ「頭雖有小瑕事無損」

トアルヲ引キテ【是ハ天德四年ノ內裏ノ炎上ニ、內侍所ノ御鏡ノ燒ケタルコト村上天皇ノ御記ニ記シ給ヒシナリ、其書今傳ハラズ、釋日本紀ニ引キタルニ據リシナリ、內侍所ノ御鏡ハ、崇神天皇ノ御時天照大神ノ瓊瓊杵尊ニ賜ヒタル八咫鏡ヲ鑄寫シ奉リ給ヒシ物ナル故、爰ニハ引證シタルナリ】頭トアルハ、彼八稜ノ頭ナルベシト云ヒタレドモ、倭姫命世記以下ノ三書皆僞書ナレバ、證トナシ難シ【倭姫命世記ハ、大同本紀ヲ本トシテ後人ノ僞說ヲ書加ヘタルモノナルベケレバ、古說ト見ユルコトモアレドモ、此アタリハ後人ノ羼入ナルコト疑ナシ】又御記ノ頭字ハ、釋日本紀ニハタト訓ムベシト云ヘリ、即鏡邊ノコトニテ、稜ヲ云ヒシニハアラズ。然レバ八稜鏡トスベキ據ハ有ルコト無シ、且神代ニサル巧ナル形ノ鏡アルベシトモ思ハレズ【宣和博古圖。西淸古鑑ニ、古鏡ヲ多ク載セタルニ、稜邊ノ鏡ハ皆唐鏡ニテ、漢鏡ハイヅレモ圓鏡ナリ、漢鏡ダニカクノ如クナレバ、神代ノ鏡思ヒヤルベシ】況ヤ御記ニ「圓規幷蒂等甚分明」ト云ヒ、小右記ニ寬弘二年ノ內裏ノ炎上ニ神鏡ノ燒損ハレシコトヲ云ヘルニハ「鏡僅有蒂、白餘燒損無圓規」トアルヲヤ、【圓規トハ鏡形ヲ云ヒ、蒂トハ鏡鼻ヲ云フ、本居氏ハ御鎮座傳記寶基本紀等ニ、「八頭花崎、八葉形也、中臺圓形座也」、トアル處ヲ即此ニ云ヘル圓規トシタレドモ、其書僞撰ナレバ、證トスルニ足ラザル上ニ、モシ八稜ナランニハ、災ニ罹リテ形ノ損ハレタルヲ云ハンニ、必先稜ノ毀レシヲ云フベキニ稜ノコトヲバ云ハズシテ圓規トノミ云ヘルニテ、八稜ナラザリシヲ知ルベシ】本居氏又、ヤアタヲ

ヤアタマ、又ヤハタノ意ナリ【ヤアタマハ八頭、ヤハタハ八邊ニテ、彼八花崎ノ處ヲ云ヘリ】トセシカドモ、八稜ナラヌコトハ上ニ云ヘリ、モシ八稜ナランニモ、ヤサキ、又ヤカドナドハ云フベシ、八ハタト云ヒテハ其義聞エ難ク、八アタマト云フベキニモアラズ、【アタマハ顱會ノコトニテ、今俗ニヒヨメキト云フ處ナリ、頭ヲスベテアタマト云フハ、近俗ノ誤ナリ、俗ニモ戴勝鳥ヲ、ヤツガシラト云ヒ、園菜紫芋ノ一種ニ、ヤツガシラト云フ者アレドモ、ヤアタマトハ云ハズ】按ズルニ、ヤタハ本指ヲ拓キシ一アタノミナラデ、アタヲ重ネ度リタルナリ【ヤトハ、數ノ重リタル古語ニテ、彌ノ字ヲ訓ミシ即是ナリ、八ヲヤト訓ムモ、彼古語ノヤヲ後ニ數名ノ八ニ當テタルニテ、數名ノ八ヲ古ヨリヤト云ヒシニハアラズ、八股蛇ニ八ノ字ヲ書キタルトモ、是モ古語ノヤニテ、股ノ多キヲ云ヘルナリ、此蛇ヲ古事記ニ「有八頭八尾」ト云ヒシモ、ヤカシラ、ヤヲトハ頭モ尾モ多キコトニテ、實ニ其數各八ツアリシニハアラズ、古事記ノ其條ニ云ヒシ「其長度谿八谷峽八尾、又釀八鹽折酒、作八門、結八佐受岐」モ皆是ナリ、本居氏ハ八頭八尾ノ字ニ依リテ、頭モ尾モ各八ツ有リシト說キタレドモ、モシ頭ノ八アリトシタランニハ、門佐受岐ナドハ、其數八ツ作リシトモ云フベケレドモ、谿峽酒ナドノ八ナランハ由モ無キヲヤ、然ラバ八股八頭八尾モ、八門八佐受岐モ、谿八谷峽八尾八鹽折ナドト同ク、數多キコトトスベシ、此ノ外山城風土記ニ、「建角身命造八尋屋、竪八戶扉、釀八腹酒」（釋日本紀ニ引リ下ニ引ルモ同ジ）又神代紀ノ八衢八重雲八重席八目

鳴鏑、古事記ノ經ニ八年ニ、萬葉集ノ「梓弓八ッ多婆佐彌、比米加夫良、八多婆左彌、又虎云神乎生取爾、八頭取持來、鵰八頭可頭氣氏、又八岑越、八峯乃海石榴、八峯乃鳩、八船多氣又八年兒之片生乃時從、年之八歲乎吾竊舞師、歲乃八歲叫鑽髮、年之八歲乎待騰來不座、又八重山八隔浪八重六倉八穗蓼夜保許毛知」ナド皆數ノ多キヲ云ヘルニテ、實ニ數ノ八ッ有ルニハアラズ、又數ノ彌重リテ多キヲ八十八百八千ト云フ八モ同ジ、正シク八十八百八千ト數ヘタルニハアラズ、又古ナヽト云ヒシモ、ヤト同ジク數多キコトニテ、實ニ數七ッナルニハアラズ、神功皇后紀ノ「七枝刀、七子鏡」雄略天皇紀ノ圓大臣ノ歌ニ「多倍能婆伽摩鳴那々陛鳴絁」萬葉集ニ、戀草呼、力車ニ「七車、吾戀者千引乃石乎七許、又久有今七日許、等保久安良婆、奈奴可乃宇知波、我行者七日不過、及ニ七日家爾毛不來而、妹所云七日越來、又河瀨乎七湍渡而、麻都良我波奈々勢能與騰、明日香川七瀨之不行、又我王波七世申稱、奈々弁加流去呂毛爾麻世流、珠乃七ツ條、取替毛左佐羅能小野之七和菅、ト云ヒ、古事記ニ橘姫命ノコトヲ云ヒテ、「七日之後其后御櫛依于海邊」ト云ヒ、播磨風土記ニ「仍伐其楠造舟、其迅如飛、一檝去越七浪、仍號速鳥」(釋日本紀ニ引リ)ト云ヘルモ皆是ナリ、故ニナヽトモヤトモ通ハシ云ヘルアリ、數日ヲ七日ト云ヒシハ、上ニ引ル如クナルニ、神代紀ニ「八日已後方致天孫於海宮」ト云ヒシ八日モ、數日ノコトト聞ユレバ、七日ト云フニ同ジ、

又數日數夜ヲ鎮火祭祝詞ニ、「夜七夜晝七日」ト云ヒ、靈異記ニ小子部栖輕ガ卒セシニ、「勅留七日七夜、詠彼忠信」、又大部屋栖能古連公ガ卒セシニモ、「勅之七日使留、詠於彼忠」又栖輕ガ墓ニ落タル雷ヲ放チシニ、「慌七日七夜留在」ト云ヒ、舊事紀ニ饒速日尊ノ神去マシシヲ云ヒシニ「處其神屍骸日七夜七以爲遊樂」ト云ヒ、山城風土記ニ「神集集而七日七夜樂遊」ト云ヒシモ、古事記ニ天若日子ガ死シ時ニ喪屋ヲ作リテ、「日八日夜八夜以遊」トアルモ、同ジク數日數夜ト云フコトナリ、又同書ニ足名推ガ子ヲ「在八稚女」ト云ヒ、神武天皇ノ條ニ、「七媛女遊行於高佐士野」ト云ヒ、御歌ニモ「那々由久袁登賣」ト詠ミ給ヒシモ同ジコトニテ、少女ノ多キヲ云ヘリ、萬葉集ニ「吾身一彌七重花佐久八重花生跡」ト詠ルハ、後世ニ七重八重花ハサケドモナド云フニ同ジ、東遊歌ニ「奈々川乎乃也川乎乃古止」トアルモ、弦ノ數多キヲ云ヘルナリ、又倭建命ノ御從ニ仕奉リシ膳夫ヲ、七拳脛ト云ヒ、孝德天皇ノ紀ニモ越後風土記（是モ釋日本紀ニ引リ）ニモ、八掬脛ト云フ人アリ、姓氏錄ニモ八束脛ノ命ト云ヘルアリ、此人々ハ脛ノ長クテ名ヲ負シナレバ、七ツカト云ヒシモ、八ツカト云ヒシモ同ジコトト聞エタリ、古事記ニ「都夫良於美八度拜」ト云ヒ、空物語ニ俊蔭七度拜伏ム、又起居七度拜ミ給フト云ヘルモ數度拜ムヲ云（古事記ニ又四度拜トアルモ八度拜ト同ジ、ヤトヨトハ同音ニテ、彌ヲイヤトモ、イヨトモ云ヘリ、然ルニ太神宮儀式帳ニ、四段拜又八度拜ト云ヒ、延曆十八年ニ減四拜爲二拜トアルヲ見レバ、此頃ハ既ニ古義ヲ失ヒシナルベシ）如是ヤト云ヒ、ナヽト云フ、共ニ數ノ重リタルヲ云フ古語ニテ、西土ノ數字（上聲）ノ意ナルヲ、後ニ數名ノ七八ノ

字ヲ訓シヨリ、諸書ニ古ヘ數多キコトヲ云ヘルヤト云フ言ナヽト云フ言ニモ、七八ノ字ヲ書シ故、紛ラハシクハナリタルナリ】轉リテハ尋ニテ度ルベキホドニモアラヌ大ナル物ヲバ、總テヤタト云ヒシナリ【ヤツカハ一ツカナラデツカヲ重ネ度リタルヲ云ヘルガ轉リテ長キヲ云フ套語トナリ、ヤヒロハ一ヒロナラデヒロヲ重ネ度リタルヲ云ヘルガ、轉リテ大ナルヲ云フ套語トナリシト一例ナリ、神代紀ニ猿田彥大神ヲ其鼻長七咫トアルモハタト同ジク大ナルヲ云フ古語ナリ、八拳脛ヲ七拳脛トモ云フニ同ジ】然ラバヤタカヾミノ【本居氏曰、古來ヤタノカヾミト訓メシトモ、カヽル稱ノ古ノ例凡テ之ヲ添ヘネバ、ヤタカヾミト訓ムベシ、彼八咫烏ノ例ヲモ思フベシト云ヘリ、此言實ニ然リ、從フベシ、但八雲御抄ニモ、ヤタカヾミトアレバ、彼御抄ヲ書セ給ヒシ頃マデモ、ヤタノカヾミトハ云ハザリシト見エタリ】即大ナル鏡ト云フコトナリ【神代紀ニ、一八咫鏡一云ニ眞經津鏡、トアリ、經津ハ太ナレバ是モ大鏡ト云フコトナリ、（今モ筑紫人ハ物ノ大ナルヲフトシト云ヘリ）按ズルニ古事記神代紀ノヤタ鏡ハ、天照大神ノ石屋戸ヲ閉テ隱リ給ヒシ時、石凝姥命ニ作ラセタリシ御鏡ナリ、瓊々杵尊ノ此葦原中國ニ天降リ給フ時、天照大神我御魂トシテ賜ヒタリシヲ、崇神天皇ノ御時豐鍬入姬命ニ託テ、大倭國笠縫邑ニ祭リ給ヒ、後ニ伊勢國五十鈴川上ニ鎭マリ坐ス、即伊勢ノ大神宮ノ御體是ナリ、コノ御體ノ御鏡ヲ大神宮雜例集ニ方一尺ト云ヘリ、方一尺トハ徑一尺ト云ンベキヲ誤リシナラン、此御體ヲ納レ奉ル器ヲ御樋代ト云フ、其御樋代ヲ延暦ノ大神宮儀式帳ニモ、延

喜ノ大神宮式ニモ、内徑一尺六寸三分トアリ、文永ノ遷宮記ニハ口徑一尺トアレドモ、豐受宮ノ大物忌父橋村正殳神主ノ云ケルハ、今御筩作内人ノ作リ奉ル御樋代其大サ儀式帳大神宮式ニ載セシト同ジケレバ、文永遷宮記ノ今本ハ、徑一尺ノ下ニ脱字アルナラント云ヘリ、又此ヤタ鏡ヲ寫シ奉リ給ヒシ内侍所ノ御鏡ヲ、天德ノ御記ニ徑八寸許ト書セ給ヘリ、然ラバ伊勢ノ御體モ八寸許ナルモ知リ難シ、ヤタハ本ト一アタナラデ、アタヲ重ネテ度リシコトナレドモ、轉リテ大ト云フ套語ニナリタレバ、一尺ニテモ八寸ニテモヤタ鏡ト云フベキナリ、神代ニハソレホドノ鏡ハイト希ナル大鏡ニコソハ有リツラメ、又岩屋戸ノ鏡ノミナラズ出雲國造神壽詞ニ、「大穴持命乃己命乃云々、和魂乎八咫鏡爾取託天云々大御和乃神奈備爾坐マセ一、」トアレバ、ヤタ鏡ハ泛ク鏡ヲ褒メ稱ル常語ト聞エタリ、然ラバヨク照ラス鏡ヲ稱ヘ云フニハマスミ鏡ト云ヒ、（マス鏡ト云フモ此省ナリ）大ナルヲ褒メ云フニハ、ヤタカヾミ、マフツ鏡ト云ヒシナルベシ、譬ヘバ劍ノ利キヲ稱ヘ云フニハ、ツルギノタチト云ヒ、長キヲ褒メ云フニハ十握劍、八握劍ト云フガ如シ」此ヤタト云フ言大ナリト云フ套語トナリシ故ニ、大ナル烏ヲモヤタ烏ト云ヘリ、ヤタ烏ノコトヲ古事記序ニ、「神倭天皇經ニ歷于秋津島ニ云々、生尾遮レ徑大烏導ニ於吉野ニ」ト云ヒ、姓氏錄【山城神別鴨縣主條】ニ、「神日本磐余彦天皇【本注】諡神武】欲レ向ニ中州ニ之時山中嶮絶、跋渉失レ路、於レ是神魂命孫鴨建津之身命化如ニ大烏ニ、翔飛奉レ導遂達ニ中州ニ、天皇嘉ニ其有ヒ功特厚褒賞、天八咫烏之號從レ此始也【印

本誤字多シ、今ハ古寫本ト釋日本紀ニ引キタルトニ據レリ】トアリ、古事記・日本紀ト姓氏錄トハ、其說同ジカラザルトモ、ヤタ烏ノ大鳥ナリシコトハ異ナラズ、日本紀ニ頭八咫烏ト書レシハ、ヤタハ大ノ套語ナルコトヲシラデ、神代紀ノ八咫鏡ハ卽伊勢神宮ノ御體ナリ、伊勢ノ御體ノ鏡ホドノ大サナラン鳥ハ大鳥ニアラザルニヨリ、頭ノ大サノヤタナリシト强ヒタルモノナリ、頭字ヲ加ヘタルハ非ナレドモ、ヤタガラスノ大鳥ナルコトハ是モ一ツノ證トスベシ、サレバ八稜鏡・八頭烏ノ說ハ非ナリト知ルベシ

西土ノ古モ、「布指知寸、布手知尺、舒肘知尋」【大戴禮王言篇ニ載セタル孔子ノ語】「握謂長不出膚」【禮記王制篇ニ「宗廟之牛角握」トアル鄭玄ガ注、　按ズルニ儀禮鄕射記ニ箭籌ヲ長尺有握ト云ヒシ握モ是ト同ジ】鋪四指曰扶、【禮記投壺篇ニ矢ノ長サヲ「室中五扶、堂上七扶、庭中九扶」ト云ヒシ鄭玄ガ注】側手爲膚、按指爲寸【僖卅一年ノ公羊傳ニ泰山ノ雲ヲ起スコトヲ「觸石而出膚寸而合」ト云ヘル何休ガ注、今本ニハ按ヲ案トアリ、今ハ經典釋文ニ從フ　按ズルニ膚ハ禮記ノ扶ト同ジ、助ト訓ミ、膚ハ肌ト訓ミテ別字ナルヲ音ノ同ジキニヨリテ、共ニ假リテ度ノ名トシタリ、六書ニ所謂假借ナリ、　又按ズルニ是モ皇國ノツカニ當レリ】「寸十分也、人手却一寸、動脈謂之寸口、从又一」【說文寸部按ズルニ寸字篆ニハ[illegible]ニ作ル从又一トハ是ヲ云ヘルナリ、マタ說文ニ「又手也象形」ト云ヘリ、然レバ寸ノ又ニ從ヒタルハ、卽手ニ從ヒタルニテ、一ハ動脈ノ處ヲ指シ知ラセタ

ルナリ、六書ニ所謂指事ニシテ、一二ノ一ニハアラズ】「十寸爲レ尺、从レ尸从レ乙、乙所レ識也」【同上尺部　按ズルニ尸字篆ニハ[illegible]ニ作ル、　說文ニ象ニ臥之形ニトアリ、人字ヲ篆ニ[illegible]ニ作レバ[illegible]ハ人ノ臥タルニ象ドリタル字ナリ、人體ニ象リタル字ナル故ニ、尻屍居尻ナドノ字是ニ從フ、尺モ人體ニテ度ル故ニ尸ニ從フナリ、乙所レ識也トハ、史記ノ東方朔傳ニ朔ガ上書ヲ、「人主從ニ上方ニ讀レ之止輒乙ニ其處ニ」トアル乙ト同ジ、然レバ乙ハ尺ノ當ル處ヲ知ラセタルニテ、寸字ノ一ニテ動脈ノ處ヲ知ラセタルト同意ナリ】「咫中婦人手八寸謂ニ之咫ニ」【同上】尋度ニ人之兩臂ニ爲レ尋八尺也【同上寸部】仭伸レ臂一尋八尺【同上人部　按ズルニ仭ヲ四尺トモ五尺六寸トモ、七尺トモ八尺トモ云ヒテ其說區ナリ、清ノ程瑤田七尺ヲ以テヨシトス、其說通藝錄ノ數度小記ニ見エタリ】周制寸尺咫尋常仭諸度量、皆以人之體ニ爲レ法ニ【同上尺部　按ズルニ常ハ釋ニ名考ニ工ニ記ノ注ナドニ「倍レ尋曰レ常」ト云ヘリ、尋ハ兩臂ヲ度リシ長サナレバ、ソレヲ倍シタル常モ、人體ヨリ定メシ度ナリ】ナド云ヘバ西土ニテモ上古ハ人體ニテ度リ、其後尺度ヲ造リシモ、人體ヨリ定メシコト明ラケシ、【史記秦始皇本紀ノ注ニ、「譙ニ周曰、步以ニ人足ニ爲レ數、」ト云ヘリ、說文ニ「步行也、从ニ止𣥂相背ニ」トアリ、止ハ足ナレバ（說文ニ止下基也「象ニ艸木出有ニ阯故以レ止爲レ足」ト云ヘリ）人ノ左右ノ足ヲ進ムルヲ步ト云フ、是ヲ六尺ト定メテ、六尺ヲ一步トセシナレバ、田畝ノ數モ人體ヲ以テ定メシヨリ起レルナリ、又倶ニ舍ニ論ニ「七麥爲ニ指節ニ、三指節爲ニ一指ニ、二十四指橫布爲ニ一肘ニ」ト云ヒ、唐ニ僧道宣ガ四分律行事抄ニ、「一搩展ニ大拇指與ニ中指ニ相去也」ト云ヘバ、（絫モ皇國ノア

（タト全ク同ジ）天竺ニテモ物ヲ度ルハ人體ニテ定メシナリ、阿蘭陀ニテハ度ハ足ニテ起シ、跟ヨリ指頭ニ至ルヲフウトト云フ、（フウト是ト譯ス）此十二分ノ一ヲドイムト云フ、（ドイム大指ト譯ス）此四分ノ三ヲヒンゲルト云フ、（ヒンゲル指ト譯ス）ドイムノ十二分ノ一ヲリニイト云フ、（リニイ絲縷ト譯ス）此外ニ肩隅ヨリ腕ニ至ルヲエルト云フ、（エル臂肱ト譯ス）二ニフウトニ當ル一歩ヲハアデルト云フ、五フウトニ當ルト云ヘリ、カクノ如ク度ハ何國ニテモ人體ヨリ定メシコト疑無キヲ、漢書ノ律曆志ニ度量衡皆律ノ黃鍾管ヨリ起ルト云ヒシハ（律曆志ノ文下ニ引リ）後人ノ牽强ナリ、荻生茂卿ノ量考ニモ「大抵陰陽五行漢儒虛談、劉歆因レ造ニ三統曆一文レ之以レ律、而度量衡一本ニ諸黃鍾一、以輝ニ其學一、孟堅眩ニ其文辭一收ニ載志中一、遂爲ニ萬古定說一耳」、ト云ヒ、マタ「蓋律度量衡其用各殊、律揆レ聲、度揆ニ長短一、量揆ニ多少一、衡揆ニ輕重一、古聖人作レ此各取ニ其適一用耳、孔子曰、布レ指知レ寸、布レ手知レ尺、舒レ肘知レ尋、故何休亦曰、側レ手爲レ膚、案レ指爲レ寸、則度由ニ之體一生焉、舜典曰、歌永言、聲依レ永、律和レ聲、則律亦由ニ人聲一生焉、聖人以ニ人聲一定レ律、旣定之後假レ度以傳ニ其聲一、度豈生ニ於律一哉」ト云ヘリ、此論固ニ然リ、按ズルニ明ノ朱載堉ガ律學新說ニ、「近代凡爲ニ律呂之學一者、蓋皆取ニ法於班志一、然班志所レ述乃劉歆僞辭刪レ之未レ盡者也、沈約宋志云、班氏所レ志未レ能レ通ニ律呂本源一、徒煩ニ其文一、而爲ニ辭費一、欲レ符ニ劉歆三統之數一、假ニ託非類一、以飾ニ其說一、皆孟堅之妄矣、唐太宗晉志云、劉三統以說ニ左傳一、辨而非レ實、班固惑レ之采以爲レ志、觀ニ此二家之論一、蓋皆不レ取ニ班志一」トアリ、荻生氏ハ是ニ本ヅキタルモノナルベシ、又按ズルニ尺度ノ黃鍾管ヨリ起ルト

云ヒタルヲ牽强ナリトセシハ然ルコトナレドモ、國語（周語）ニ單穆公ガ「先王之制レ鍾也、大不レ出レ均
重不レ過レ石、律度量衡於レ是乎生」ト云ヒタルヲ見レバ、周ノ時ヨリカヽル俗傳モ有リシナレ、其後
王莽ガ元始中ニ、鍾律ニ通ジタル者ヲ徴シタリシニ、其者ドモ彼俗傳ヲ修飾シテ奏シケヲ、劉歆ガ
採リ用ヒタリケレバ、（元始中ノ「漢書律暦志ニ出ヅ）班固モコレニ惑ヒテ志ニ載セタルナリ、然レバ律ヨリ度量衡ヲ起
スト云フ説ハ、周ノ時既ニ始リシコトニテ、漢人ノ始テ牽强セシニハ非ズ】其尺度ヲ作リ始メシハ何レ
ノ時ナリケン、左傳（昭十七年）ニ「郯子曰、我高祖少皡摯之立也、鳳鳥適至、故紀ニ於鳥一、爲ニ鳥師一、而鳥名五
雉爲ニ五工正一、利ニ器用一正ニ度量一、夷ニ民者也」ト云ヒ、尚書【堯典　僞古文ニハ舜典トス】ニ「五歳一巡
狩同ニ律度量衡一」ト云ヒタレバ、古ヨリ有リシナレドモ何ノ時ニ作リシト云フコトハ詳ニ知リ難シ、
又皇國ニテ西土ノ尺度ヲ用ヒ始メ給ヒシハ何レノ御時ナリケン、是モ定カニ記セシモノ無シ、應神天
皇・雄略天皇ノ御代ニ、呉織・漢織・衣縫ナド渡リ來リ、仁賢天皇ノ御代ニ高麗ヨリ工匠ヲ獻リ、敏達
天皇・崇峻天皇ノ御代ニ、百濟ヨリ佛工・造寺工ヲ獻リシコト、古事記・日本紀ニ見エタリ、此時々必
尺度ヲモ齎來リツラン、サレドモ裁縫營造ニノミ用ヒテ、諸物ヲ度ルコトハイマダ無カリシナルベシ、
然ルニ古事記ニ「景行天皇ノ御身長一丈二尺、御脛四尺一寸、反正天皇ノ御身長九尺二寸半、御歯長
一寸、廣二分」ト云ヒ、日本紀ニ「猿田彦大神背長七尺、日本武尊身長一丈、仲哀天皇身長十尺、」景
行天皇十二年紀ノ筑紫ニ幸シ給フ條ニ、一栢峽大野ノ石ヲ長六尺・廣三尺・厚一尺五寸一、同十八年紀ニ

「御木ノ僵樹ヲ長九百七十丈」、「仁德天皇六十二年紀ノ氷室ノコトヲ云ヘル條ニ「掘地丈餘」、雄略天皇三年紀ノ栲幡皇女ノ經死シ給ヒシコトヲ云ヘル條ニ、「虹見如蛇四五丈」、同十八年紀ニ伊勢朝日郎ガ、聞物部大斧手ヲ射タルコトヲ「穿楯二重甲、幷入身內一寸」ト云ヒ、欽明天皇七年紀ニ、川原氏直宮ガ良駒ヲ見タリシコトヲ載テ、「超渡大內丘之壑十八丈」ト云ヒ、推古天皇十八年紀ニ、「天有赤氣、長一丈餘」、同三十五年紀ニ、蠅ノ集リシコトヲ凝累十丈ト載セタルハ、何レモ史ヲ修リシ人ノ言ニテ、其御々世々ニ尺度ヲ用ヒシ證トハナシ難シ、日本紀ニ又皇極天皇二年紀ニ、雹ノ大サヲ徑一寸、又茨田池ニ死蟲水ヲ覆ヒ、溝瀆モ凝結テ厚三四寸、三年紀ニ倭ノ菟田ノ押坂直ガ得タル紫菌ヲ高六寸、又大伴馬飼連ガ獻リシ百合華ノ莖ヲ長八尺ト云ヒシハ、實ニ尺度ニテ度リシカ、又ハ是モ史筆ニノミ云ヒシモ知ルベカラズ、孝德天皇ノ大化二年ニ、絹・絁・布等ノ長サ廣サ、又王臣ノ墓ノ濶サ高サヲ定メラレシヲ載セタルナドヲゾ【日本紀ニ、「孝德天皇大化二年春正月、甲子朔賀正禮畢即宣改新之詔云々、其四曰、罷舊賦役而行田之調、田一町絹一丈、四町爲匹長四丈廣二尺半、絁二丈二町爲匹、長廣同絹、布四丈廣同絹絁、一町成端別收戶別之調、一戶貲布一丈二尺、凡官馬者云々、其買馬直者一戶布一丈二尺、凡仕丁者云々、一戶庸布一丈二尺、三月甲申詔曰、葬者藏也、欲人之不得見也、廼者我民貧絶專由營墓、爰陳其制尊卑使別、夫王以上之墓者、其內長九尺濶五尺、（下ノ上臣・下臣ノ墓ノ制ニヨルニ、爰ニ高何尺ト云フコノ有リシガ脫タルナラン）其外域方九尋高五尋、上臣之墓者、其

内長濶及高皆准於上、其外域方七尋高三尋、下臣之墓者、其内長濶及高皆准於上、其外域方五尋、高二尋半トアリ】尺度ノ史ニタシカニ見エタル始トハ云フベキ【量衡ハ舒明天皇ノ御時ヨリ用ヒラレト云ヘバ、（量攷ニ詳ニス）度モ其頃ヨリゾ用ヒラレツラン、サレド記セル者無ケレバ考ヘ難シ、舒明天皇ノ元年ハ唐ノ太宗ノ貞觀三年ニ當リ、皇極天皇ノ二年ハ貞觀十七年ニ當リ、大化二年ハ貞觀二十年ニ當レバ、唐尺ヲ用ヒラレシナラン、大寶雜令ニ「度ニハ地用大、其外官私悉用小者」トアレバ、賦役令ニ載セタル絹絁布ノ長サ廣サハ小尺ナルニ大化ノ制ト略同ジケレバ、大化ノ時、絹布絁ヲ度リシハ小尺ナルベシ、然ラバ地ヲ度リシハ大尺ナルベキニ、大尺一尺二寸ノ尺ヲ用ヒタルカト思ハルヽコトアリ、下ニ詳ニス】天武天皇ノ十一年ニ法令ヲ作ラセ給ヒシカバ【日本紀ニ「天武天皇十年二月、庚子朔甲子、天皇皇后共居于大極殿、以喚親王諸王及諸臣、詔之曰、朕今更欲定律令改法式、故倶修是事、三月辛丑立禁式九十二條、十一年八月壬戌朔、令親王以下及諸臣各俾申法式應用之事、丙寅造法令」トアリ】必定尺ノ制ヲモ載セラレツランヲ其書傳ハラザレバ考ヘ難シ【思フニ大化ノ時ト同ジカリシナルベシ】正シク尺度ノ制ノ見エタルハ、文武天皇ノ大寶元年ニ、唐令ニ因循シテ新令ヲ撰バセラレシニ【續日本紀ニ「大寶元年八月癸卯、遣三品刑部親王（略）等撰定律令、於是始成、二年三月乙亥、始頒度量於天下」ト云ヘリ、按ズルニ唐六典ノ刑部ノ注ニ、唐令ノ篇目ヲ載セタルニ、其名モ次序モ本朝令ト略同ジク、且諸書ニ引キシ唐令ノ文、又六典通典唐書等ニ載セ

タル制度、多ク本朝令ト同ジケレバ、大寳令ノ唐令ニ依ラレシコト知ルベシ】其雜令ニ「凡度十分爲寸、十寸爲尺」【本注】「一尺二寸爲大尺一尺、十尺爲丈」ト云ヘリ【義解ニ「分者以北方秬黍中者一之廣爲分、秬者黑黍也」トアリ】唐ノ雜令ニ、「度以秬黍中者一黍之廣爲分、十分爲寸、十寸爲尺、一尺二寸爲大尺一尺、十尺爲丈」トアルニ因リ給ヒシナリ、唐令今傳ハラズ、今コヽニ引キタルハ、唐律疏議ニ引キシニ依レリ、唐律疏議ハ永徽四年ニ上リタレバ、引キタル令ハ貞觀令ノ文ナルベシ、但量稱度ト次第シテ、量ヲバ「以北方秬黍中者容一千二百爲龠」ト云ヒ、稱ト度トニハ北方ノ字無シ、量ニ云ヒタル故ニ、ソレヲ蒙ラセテ省キタルナリ、宋ノ錢易ガ南部新書ニ、開元令ヲ引キタルモ、其文同ジケレドモ、是ハ度量稱ト次第シタレバ、北方ノ字、度ノ下ニアルコト、令義解ト同ジ、開元令モ本朝令ト同ジキヲ見レバ、貞觀令ニモ度量稱ト次第シタリシニ、雜律ニ、「諸校斛斗秤度不平杖七十」トアルヲ釋セントテ、疏議ニ令ノ文ヲ引キタル故、律ノ文ニ從ヒテ、令ノ文ノ次第ヲ改メ引キタルナルベシ、度量稱ト次第セザレバ理ニモ合ハザルナリ、按ズルニ六典通典舊唐職官志（食貨志ノ文ハ少シク異ナリ附錄唐山東尺ノ條ニ引ケリ）等ニ載セタル度ノ制皆同ジ趣ナルハ、唐令ニヨリテ記セシナラン、秬黍ヨリ度ヲ起スコトハ、漢書律曆志ニ「度者分寸尺丈引也、所以度長短也、本起黃鍾之長、以子穀秬黍中者一黍之廣度之、九十分黃鍾之長、一爲一分、十分爲寸、十寸爲尺、十尺爲丈、十丈爲引、而五度審矣」ト云ヒシニ本ヅキタルナリ、唐小尺ハ隋ヨリ受傳ヘシ鐵尺ニテ、漢

尺ニ比ブレバ少ク譌長ハシタレドモ、歴代傳ヘ來リシ尺ナルニヨリ、卽漢書ノマヽニ令ニ著ハシタルナリ、秬黍ノ事ハ牽强ノ説ナレドモ、漢書ニ是ヲ載セショリ、後ノ尺度ノ起リヲ云フ者、皆コノ説ニ從ヒタリ、又按ズルニ漢書ノ子穀ヲ孟康ノ注ニ、「子北方、北方黑、謂黑黍也」、トアリ、子十二支ノ方位ニ於テ北方ナリ、北方ハ五色ニ於テ黑色ナレバ、子穀トハ黑黍ヲ云フト釋シタルナリ、然ルニ唐令ニ、「北方秬黍中者」トアルハ、孟康ガ注ノ北方黑ヲ北方ニ產スル黍ハ黑シト讀誤リシモノナルベシ、後魏ノ孝文帝ノ時、黍ヲ累ネテ尺ヲ作リシニハ、何處ノ黍ト云フコトハ云ハザリシニ、後周ノ宣帝ノ時、達奚震牛弘等ガ議ニ、上黨ノ羊頭山ノ黍ヲ以テ度ヲ起スコトヲ云ヘリ、（何レモ隋書律暦志ニ出ヅ、附錄ニ引ケリ）漢書地理志ヲ按ズルニ、羊頭山ハ上黨郡穀遠縣ニアリ、地理志ニ「又上黨郡秦置屬幷州」ト云ヘリ、周禮職方氏ノ職ニ「正北曰幷州」トアレバ、此人等始テ漢書ノ子穀ヲ北方ノ黍ト誤リシナラン、唐令ニ北方秬黍ト云ヒシハ、此誤ヲ襲タルナリ、此後宋ノ鄧保信阮逸胡瑗程迥明ノ朱載堉ガ輩、皆上黨羊頭山ノ黍ニヨリシハ、達奚震牛弘等ガ誤ナルヲ覺ラザリシナリ、此事今ノ清ニ至リテモ辨ゼシ人無キハイカニゾヤ】然レバ本朝令ノ大小尺ハ、卽唐ノ大小尺ニテ、今ノ曲尺ハ其大尺ナリ、【羽倉在滿ノ度制略考ニ、本朝令ノ小尺ハ唐ノ大尺ニシテ、今ノ曲尺ナリ、本朝令ノ大尺ハ高麗ノ度地尺ニテ、今ノ呉服尺ナリト云ヘリ、此說ニ依レバ大寶令ヲ定メラレシニハ、唐小尺ヲバ用ヒザリシトシタレドモ、モシ唐大尺ヲ小尺トシタランニハ、義解ニ、「以北方秬黍中者一之

廣爲ㇾ分」、トハ云フベカラズ、（一黍ノ廣サヲ一分トスルハ唐小尺ナリ）且和銅五年ニ寫シタル佛經ノ紙、唐小尺ノ度ニ合ヒタレバ、（此事下ニ詳ニス）本朝ノ小尺ハ即唐小尺ナルコト明ラケシ、又高麗尺ハ田令集解ニ引キタル古記ニ出シ說ニ據リタルナレドモ、本朝令ノ尺度ノ制ハ全ク唐令ニ因ラレタルニ、唐尺ヲ用ヒズシテ高麗尺ヲ用フベキ理有ランヤ、羽倉氏ノ說誤ナリ、按ズルニ政事要略ニ、弘仁十三年十一月五日ノ明法博士額田國造今足ガ勘文ヲ載セテ、「檢舊說令前租法熟田五十代以大方六尺ㇾ爲ㇾ步、二百五十步爲五十代、」慶雲三年格曰、准ㇾ令、（田令ナリ）以大方五尺ㇾ爲ㇾ步、三百六十步爲ㇾ段者、今案五十代與令段步積同、」トアリ、古ノ步ハ大ニシテ、大寶ノ大尺ニテ度レバ、方六尺ニテ、其積三十六尺ナリ、三十六尺ニ二百五十步ヲ乘ズレバ、九千尺ヲ得、令ノ步ハ大尺ノ五尺ナレバ、其積二十五尺ナリ、二十五尺ニ三百六十步ヲ乘ズレバ是モ九千尺ヲ得ル故ニ、古ノ二百五十步ナル五十代モ、令ノ三百六十步ナル段モ、同ジ積ナリト云ヘルナリ、皇國ニテ古ヨリ唐ノ制ニ倣ヒ、五尺ヲ步トシタレドモ、其時高麗ヨリ唐大尺ノ一尺二寸ナル尺ヲ得テ、其尺ニテ五尺ト定メシニ、大寶ヨリ改テ唐大尺ニテ五尺ヲ步トセシカバ、古ノ步ヲ大尺ニテ度レバ六尺ナル故ニ、令前ノ步ヲ「以大方六尺ㇾ爲ㇾ步」ト云ヒタルナラン、然ラバ令前ニハ高麗尺ヲ以テ地ヲ度リシニ、令ヲ定メラレシ時ヨリ、改テ唐大尺ニテ度リシナリ、（大寶二年三月紀ニ、「始頒度量於天下」トアルハ、高麗尺ヲ廢シテ唐尺ヲ頒タレシナルベシ）令集解ニ引キタル古記ニハ、令前ニ高麗尺ニテ地ヲ度リシコトヲ載セタリシヲ、集解ノ作者誤リテ令ノ時ノコトトシテ、令ノ大尺ヲ高麗尺ナリトハセシナルベ

シ、羽倉氏ハ是ニ惑ハサレタルナリ、又按ズルニ、唐大尺ノ一尺二寸ナル高麗尺ハ疑ラクハ東魏尺ニテ、唐大尺ノ一尺一寸七分五釐四豪三絲八忽餘ナリシヲ、（東魏尺ノコトハ附錄ニ詳ニス）大凡ニ一尺二寸ト云ヒタルカ、又ハ高麗ヲ經テ來リシ間ニ（東魏ノ地ハ高麗ニ近シ）譌長シテ皇國ニ入リシニヤ有リケン、此尺ノ長サ今ノ呉服尺ト略同ジケレドモ、呉服尺ハ明ノ裁衣尺ノ譌長セシモノト思ハルレバ、（此事下ニ詳ニス）此尺トハ其原同ジカラズ、又藤貞幹ノ好古小錄ニハ、本朝令ノ小尺ハ卽唐ノ小尺ニテ、今ノ曲尺ナリ、大尺ハ卽唐大尺ニテ、今ノ呉服尺ナリト云ヘリ、本朝令ノ大小尺ヲ卽唐ノ大小尺トシタルハ當リタレドモ、小尺ヲ曲尺トシ、大尺ヲ呉服尺トシタルハ誤ナリ、累黍ノ說ハ非ナレドモ、其長サハ大ヨリ違フベカラズ、試ニ黍ヲ累ネテ曲尺ノ小尺ニ非ザルヲ覺ルベシ、サレドモ年久シク傳ヘタレバ、今ノ曲尺ハ稍譌長セシモノナリ【凡尺度歲月ヲ經レバ必譌長スルコト、隋書律曆志ニ歷代ノ尺ヲ載セタルヲ見テ知ルベシ、此事附錄ニ詳ニス】故ニ古尺ノ今世ニ殘リ傳ハル者ヲ求ルニ、大和國法隆寺ニ象牙尺アリ、聖德太子ノ遺物ナリト云ヒ傳フ、吾友松崎慊堂（復）、コレヲ唐ノ鏤牙尺ナラント云ヘリ【鏤牙尺ハ六典ノ中尙令ノ注ニ、「毎年二月二日、進ニ鏤牙尺及木畫紫檀尺一」、新唐書百官志ニ、「中尙令歲二月獻ニ牙尺一」、季泌傳ニ、「泌請㆑廢ニ正月晦一、以ニ二月朔一爲ニ中和節一、因賜ニ大臣戚里尺一、謂ニ之裁度一」（是ニヨレバ六典ニ二日トアルハ傳寫ノ誤ナリ、德宗ノ貞元五年ノ紀ニモ、二月一日トアリ）宋ノ王應麟ガ玉海ニ、「貞元八年宏詞以㆑此命㆑題、李觀裴度有㆑詩、白居易謝㆑賜㆑尺表、紅牙爲㆑尺、白銀爲㆑寸、美而有㆑度、煥以相宜、恩尺之顏不㆑違、分寸之功未㆑效、呂頌

謝ニ金-鏤-牙-尺一ナド云ヒシモノナリ、先輩コノ尺ヲ壓尺ナランド云ヒシハ、鏤牙尺ナルコトヲ知ラザリシナリ】コノ說據リ信ズベシ、然ラバ聖德太子ノ遺物ニハアラデ、遣唐使歸化人ナドノ將來セシモノ、寺家ニ入リシガ傳ハレルナラン【長サ今ノ曲尺ノ九寸八分弱ナリ、又陸奧國耶麻郡大寺村ノ慧日寺ニ、瑠璃尺ト云フ尺ヲ藏ス、平將門ガ女如藏尼ノ遺物ナリト云ヘリ、其摹造シタルヲ見シニ、大體法隆寺ノ尺ト同ジ、タヾ法隆寺ノ尺ハ、紅ニ綵リタルヲ、是ハ靑ク綵リタルガ異ナルノミ、其質ハ牙尺ナレドモ、靑キニヨリテ、瑠璃尺トハ云ナリ、其長サ法隆寺ノ尺ニ比ブレバ、四釐許長シ、是モ唐ノ鏤牙尺ナルベシ】即唐ノ大尺ナルベケレドモ、儀物ニシテ用尺ニアラザレバ、據トナシ難シ、【今俗ノ破魔弓、又婚儀ニ用フル描金ノ砧絎張ナドノ類ニテ、用ニ充ン料ニ造リタル物ニアラザレバ、尺ノ長サ證トスベカラズ、法隆寺ノ尺モ慧日寺ノ尺モ、共ニ鏤牙尺ナルニ、四釐許ノ異アルニテモ、據リ難キヲ知ルベシ】又古キ寺々ニ律尺トテ藏スルアリ、【律トハ釋家ノ戒律ニテ音律ノ律ニハアラズ】予摹ヲ得シハ、叡山尺【曲尺七寸六分强、背ニ「山門僧惠定於ニ寶乘院ニ寫一」トアリ】、高野尺【曲尺七寸九分强、背ニ、「寶永九年於ニ高野山ニ酬恩菴僧久-竺寫」トアリ】東寺金蓮院尺【曲尺八寸一分强、背ニ大師所用ノトアリ】槇尾尺【曲尺八寸二分弱、背ニ東寺一體トアリ】泉涌寺尺【曲尺八寸二分、俊芿國師將來ノ物ト云傳フ、按ズルニ泉涌寺長典筆記ニハ、周尺事當世流-布ニ有ニ三不同一、佛所ノ用ハ金尺ノ八寸ナリ、建仁寺ノ相傳ハ八寸二分ニ餘ル、當寺ノ相承ハ八寸一分半ナリトアリ、此筆記ハ文龜永正ノ

間ノモノナリ、今彼寺ノ尺ヲ摹シタルヲ計レバ、八寸二分ナルニ、長典ハ八寸一分半ト云ヘリ、其校セシ長サ半分ノ異アルハ、其頃既ニ謁長ノ曲尺アリテ度リシニヤ、(今ノ曲尺ノ竹尺ハ工匠鐵尺ヨリハ七厘許長シ)中根璋ノ律原發揮ニハ八寸二分有奇ト云ヘバ、予ガ得シ摹尺ノ謁長シタリシニハアラザルベシ】大安寺尺【曲尺八寸二分半、背ニ「康永二年九月十四日、以ニ大安寺寶藏本一寫レ之、於ニ西大寺二聖院尊照法師寫レ之、大師將來御什物之内也」、トアリ】法壽菴尺【曲尺八寸三分、背ニ「南都瓦釜町法壽菴律尺」トアリ】生駒長福寺尺【曲尺八寸四分、背ニ「延寶七年己未於ニ和州金龍山長福寺一作」トアリ】コレ等ナリ、小倉ノ實起卿ノ摹シ傳ヘラレシ御府尺モ、即此物ニテ【此尺ノ事詳ニ附錄ニ見ユ、其長サ中村欽ノ三器考略ニハ、曲尺七寸九分五釐弱ト云ヒ、同人ノ律尺考驗ニ云フ所ニヨリテ計レバ、八寸〇〇五豪有奇ナリ、何レ正シキニカ詳ナラズ、背ニ周尺ノ二字アリト云ヘリ、唐小尺ヲ周尺ト云ヒシコト、四分律行事抄・宋僧元照ガ行事抄・資持記等ニ見エタリ、然レバ此尺モ律衣尺ナルヲ、僧徒ヨリ召サレテ御府ニ傳ハリシモノナルベシ】皆唐小尺ヲ摹シタルモノナリ、カク寺々ニ備ヘ置クコトハ、四分律行事抄ニ、唐小尺ニテ律衣ヲ制スルコトヲ云ヘルニヨリテナリ【サレドモ僧衣ヲ製スルコト皆工人ノ手ニ出デタレバ、律尺ハタヾ其物ヲ備ヘタルノミニテ、用ニハ充ザリシユヱ、强テ其長サヲ正スコト無カリシカバ、各寺ノ傳フル所一定ナラヌコト右ノ如シ】是モ儀物ニシテ用尺ニアラザレバ證トナシ難シ、然ラバ如何ニシテ古ノ尺ヲ見ルベキト云フニ法隆寺ニ洞簫ト云ヒ傳フル笛一管アリ、洞簫ト云フハ誤ニ

テ、【洞簫ハ漢書元帝紀ニ見ユ、注ニ「如淳曰、洞者通也、簫之無底者、」ト云ヘリ、文選ニ漢ノ王褒ガ洞簫賦アリ、沈約ガ宋書ノ樂志ニ、「前世有洞簫、其器今亡、蔡邕曰、簫編竹有底、然則邕時無洞簫、」ト云ヘリ、通典ニモ同ジ趣ニ載セタルハ、宋書ヨリ采リシナルベシ、然レバ洞簫ハ早ク後漢ノ時絕シモノナリ、宋ノ蘇軾ガ「客有吹洞簫者、」ト赤壁賦ニ書キタレド、他書ニ洞簫ノ事見エザレバ、宋ノ時ハ傳ハラザリシナリ、淸ノ方成培ガ香研居詞塵ニ、「今之簫非簫、唐尺八也、實源於古之編洞簫、故亦謚尺八爲簫也」、ト云ヘリ、然ラバ赤壁賦ニ云ヒシモ實ハ尺八ナルヲ、强テ洞簫ト書シナルベシ】尺八ナリ【コノ笛ヲ法隆寺古今目錄抄太子傳玉林抄等ニハ、卽尺八ト云ヘリ、中世マデハカク云傳ヘシト見エタリ】尺八ハ唐ノ呂才ガ作リシ笛ニシテ、其事唐書ニ見ユ【唐書ノ呂才ガ傳ニ、「貞觀時、上詔擧善音者、侍中王珪魏徵盛稱、才製尺八、凡十二枚、長短不同、與律諧契、」トアリ、律ノ黃鍾管ハ長サ九寸ナレバ、其音高クシテ人聲ニ親シカラヌニヨリ、ソレヲ倍シテ一尺八寸トシ、是ヨリ上生下生シテ、十二管ヲ作リ、人聲ニ近カラシメシ巧ナルベシ、寶龜十一年ノ西大寺資財帳ニ「斑竹尺八一口」ト載セタルモ、東大寺三倉寶物圖ニ載セタルモ、此法隆寺ニ傳ヘタルモ共ニ尺八ノ黃鍾管ナルベシ、又倭名類聚抄ニモ、尺八ヲ載セタレドモ、此笛絕エテ久シク用フルコト無カリシニヤ、空（ウツボ）竹取以下ノ物語ドモニ見ユルコト無シ、タヾ源氏物語ニ、紅葉ノ御賀アリシ時、大篳篥尺八ナド取リ出サレタルコトヲ云ヒシハ、是等ハ當時用ヒラレザル樂器ナレドモ、格別ノ御賀

ナレバサル物ヲサヘ取出サレタリト云フコトナレバ、源氏ノ時既ニ常ニハ用ヒザリシ趣ナリ、サレバ物語作者ノ頃ハ絶エタリシコト明ラケシ、保元三年ノ內宴ニ、此笛再興アリシコト續世繼ニ載セタレドモ、其後物ニ見ユル事無ケレバ、再絶エタルナルベシ、後世好事ノ者、曲尺一尺八分ノ笛ヲ製シ、是ヲ尺八ト云ヒ、又一節截トモ名ヅケテ玩ビシハ、此笛ノ傳ハルコトヲ知ラザリシナラン、尺八ト云ハンカラハ、一尺八寸ナルベキニ、一尺八分ニ作リシモ誤ナリ、又今薦僧ト云フモノヽ吹ク尺八ハ、曲尺一尺八寸ナリ、一尺八寸ニ造リタルハ當リタレドモ、呂才尺八ヲ作ルニ鍾律ヲ調フベキ小尺ニ依ラズシテ、俗用ノ大尺ニ依ルベキ謂無ケレバ、曲尺一尺八寸ニ作リシモ猶誤ナリ（鍾律ヲ調フルニハ、小尺ヲ用フルコト、隋志六典等ニ出ヅ、下文及附録ニ引ケリ）疑ラクハ此笛一節截ヨリハ後ニ製リシモノナルベシ、今世ノ人是等ノ尺八ニ目馴レテ法隆寺ノ笛ハ尺八ニ非ズト思ヒテ、サカシラニ洞簫ト名ヅケシモノナルベシ、又按ズルニ安藤爲章ガ年山紀聞ニ、尺八ヲ唐山ニテハ洞簫ト云フト心越禪師語ラレキトアリ、安藤氏ノ云ヘル尺八ハ、彼薦僧ノ尺八ナルベシ、然ラバ此法隆寺ノ古尺八ヲ洞簫ト名ヅケシモ、心越歸化ノ後ノコトニゾアリツラン】

此笛ノ長サヲ度ルニ、曲尺一尺四寸五分五釐、【東大寺三倉寶物圖ニ載セタル尺八ハ、長一尺四寸五分ト記セリ、大凡ニ度リタルカ、又ハ度リシ尺ノ譌長尺ナリシモ知ルベカラズ、香研居詞塵ニ、「如皐林九標、嘗以二鐵簫一示レ培、乾隆初浚レ河得レ之者、其第一孔去二吹口一五寸半、第二第三孔、皆相去一寸、第四五孔、中間相去九分許、後一孔、比二前一孔一高九分、後兩孔（本注 貫編者）以去二前第五孔一一寸半、兩孔

下寸半、又多ニ一孔、與ニ今簫異、（本注以上分寸皆今尺）用ニ周尺度之、恰長一尺八寸、圍徑四分、宋人樂器罕ニ周尺、此眞唐物矣、」トアリ、然レドモ「此笛第一孔去口五寸半、後兩孔又多一孔」ナド法隆寺・東大寺ノ尺八ト同ジカラズ、法隆寺東大寺ニ藏スル者ハ唐ヨリ傳來セシモノナルベシ、若然ラズトテモ、當時唐ノ尺八ヲ摸造セシモノナルコトハ疑無シ、然ラバ乾隆ノ時得タリシハ恐ラクハ唐物ニハアラジ、今尺ニテ度リタル樣明ナラズ、又用ニ周尺度之恰長一尺八寸ト云ヒタレドモ、其度リシ周尺ノ長サヲ云ハザレバ、鐵簫ノ長サモ詳ナラズ】是ヲ一尺八寸トシテ度ヲ起セバ、其一尺ハ曲尺八寸〇八釐三豪三絲三忽不盡、是唐ノ小尺ニテ、大尺ハ此一尺二寸ナレバ、曲尺九寸七分ナリ、又公式令ニ、「天子神璽内印【本注方二寸】外印【本注方二寸半】諸司印【本注方二寸二分】諸國印【本注方二寸】」トアルニヨリテ【内印ハ天皇御璽、外印ハ太政官印ナリ】今世ニ遺レル古ノ勅符牒券等ニ捺シタル璽印ヲ度レバ、度ヲ起スベキニヨリ、今コレヲ度リ試ムルニ、大凡大尺ノ度ニ合ヘドモ、皆少シヅヽノ異アレバ、【遠江國城東郡相良平田寺ニ、天平感寶元年ノ勅書ヲ藏ス、其勅書ニ捺シタル御璽ハ、方二寸八分五釐（是ヲ三寸トシテ度ヲ起セバ、一尺ハ曲尺九寸五分）集古十種ニ載セタル延長保延ノ御璽ハ方二寸九分三釐許（是ニテ一尺ハ曲尺九寸七分六釐餘）又延暦ノ太政官印ハ長二寸四分（是ヲ二寸五分トスレバ一尺ハ曲尺九寸六分）廣二寸三分三釐許（是ニテハ曲尺九寸三分二釐許）貞觀ヨリ承久マデノハ方二寸三分五釐、（是ニテハ九寸四分）嘉祿ヨリ正嘉マデノハ方二寸四分五釐（是ニテハ九寸八分）其外諸司ノ印ハ二寸二分以下（是ニテハ曲尺ト同ジ）一寸九分以上（是ニテハ八寸六分强）諸國ノ印モ二寸以下（是ニテハ曲尺ト同ジ）一寸九分以上（是ニテハ九寸五分）ニテ一樣ナラ

ズ、藤貞幹ノ金石遺文ニ載セタル璽印ノ大サ少シク出入アレドモ、一様ナラヌコトハ同ジ】璽印ニヨリテハ度ヲ起シ難シ、音律ハ豪釐ヲ爭フモノナレバ、今ハ尺八ニヨリテ小尺ヲ起シ、小尺ヨリ大尺ヲ定メシナリ【呂才ハ唐初ノ人ナレバ尺八ヲ造リシニハ隋ノ鐵尺ニゾ據リツラン、鐵尺ハ「比晉前尺一尺六分四釐」ト、隋書律暦志ニ見エタリ、唐ノ張文收ガ作リシ尺モ是ニヨリシナリ（是即唐小尺ナリ、張文收ガ尺ノヿハ下ニ詳ニス）玉海ニ宋景祐三年丁度ガ上言ヲ載セテ「今司天監景表尺和峴所謂西京銅望臬者洛都舊物也、五代不聞測景、此即唐尺、今以貨布錯刀貨泉大泉等校之、則景表尺長六分有奇」ト云ヒ、又「司天監景表尺、比晉前尺長六分三釐」トモ云ヒシ者、即張文收ガ尺ナルベシ、今漢錢ヲ以テ晉前尺ヲ起セバ、曲尺七寸六分ナリ（即周尺ナリ、此等ノ事附錄ニ詳ニス）此尺ニテ尺八ヨリ起シタル尺ヲ計レバ、一尺〇六分三釐五豪九絲六忽餘ニテ、隋ノ鐵尺ヨリハ四豪三絲六忽强短ク、宋ノ景表尺ヨリハ五豪九絲六忽餘長シ、但四五豪ノ異ハ目力ノ及ブベキナラネバ、今尺八ヨリ起シタル唐尺ノ誤ラザルヲ證スベシ、按ズルニ和峴ガ云フ所ノ西京銅望臬ハ唐ノ物ナリ、晉ノ荀勗ガ云ヒシ西京銅望臬ハ、前漢ノ物ニシテ是トハ同ジカラズ、荀勗ガ銅望臬ノコトハ附錄ニ出セリ】是ニ依レバ今ノ曲尺ハ唐大尺ノ三分强譌長セシモノト知ルベシ【藤貞幹ガ集古圖ニ伯耆守狛近家所傳尺ト阿波守狛近光所傳尺トヲ載ス、近家ノ尺ヲ度ルニ、曲尺九寸八分七釐、近光ノ尺ハ曲尺九寸九分强、是等ノ尺唐尺ニ比スレバ譌長シタレドモ、サスガニ樂家ノ古傳ニテ、イマダ今ノ曲尺ノ譌長セル如クニハアラザリシナリ、

按ズルニ今ノ曲尺ニ、工匠ノ用フル鐵尺ト竹尺トノ二ツアリ、竹尺ハ京ノ六條ニテ作ル念佛尺ト云フ者最精好ナリ、佗國ニテモ是ヲ摹シ造レドモ、工匠ノ鐵尺ニ比スレバ七釐許長シ、按ズルニ法隆寺古今目錄抄ニ、彼象牙尺ヲ「此尺者比二番匠等鈎金一短二分」ト云ヘリ、今按ズルニ、鐵尺ニテハ二分少强短カケレドモ、竹尺ニテ度レバ二分七釐許短シ、又東大寺ノ凝然上人ノ物ト云フ小硯匣ノ側面ニ畫キシ尺モ鐵尺ト同ジケレバ、竹尺ハ又謬長セシモノナルコト疑無シ、故ニ今此書ニ曲尺ト云フモノハ、皆工匠鐵尺ニ依リシナリ】

或人難ジテ云、雜令ニ「凡度レ地量二銀銅穀一者皆用レ大、此外官私悉用二小者一」トアレバ、公式令ニ載セタル璽印ノ度モ、小尺ナルベキニ略大尺ニ合フモノハ如何、答、雜令ニハ地ヲ度ルニノミ大尺ヲ用ヒ、其外ハ悉小尺ヲ用フベキ制ナリシニ、延喜ノ雜式ニ「度量權衡者官私悉用レ大、但測レ景合レ藥、則用二小者一」トアルヲ見レバ、後ニ制ヲ改メテ大尺ヲ常用トセラレシナリ、按ズルニ六典【金部職掌】ニ凡積二秬黍一爲二度量權衡一者、【小度・小重・小稱ナリ】調二鍾律一、測二晷景一、合二湯藥一、及冠冕之制則用レ之、内外官司悉用二大者一ト云ヘリ、【南部新書ニ開元令ヲ引キタルモ是ニ同ジ、通典舊唐書ニモ同ジ趣ニ載セタリ】唐ニテ小尺ヲ正シキ尺トシテ、鍾律・晷景・冠冕ナドヲ度ルニ、是ヲ用ヒシヲ見レバ、常用ニモ是ヲ用ヒマホシカリツラン、然ルニ周隋以來小尺ヲ作リシカドモ、民間ニテ用ヒザリシニヨリ、俗ニ隨ヒテ大尺ヲ常用トシタリシナリ、【西土ニハ古ヨリ所謂周尺ヲ用フ、晉ノ

後南北ニ別レ、南方ニハ宋・齊・梁・陳共ニ譌長ナガラモ、皆此尺ヲ用ヒシニ、北方ニテハ魏ニハ周尺ノ一尺二寸餘、東魏・北齊ニハ周尺ノ一尺五寸餘ノ長尺ヲ用ヒタリ、後周ニテモ始ハ魏尺ヲ用ヒシニ、古尺ニ非ルニヨリテ玉尺ヲ作リシカドモ、是モ猶古ニアラザレバ、後又宋尺ニ依リテ鐵尺ヲ頒チタリ、然レドモ市中ニハ魏尺ヲ用ヒ慣レテ、玉尺ヲモ鐵尺ヲモ用ヒズ、是ヲ後周市尺ト云フ、隋ノ初玉尺ヲ用ヒ、開皇ノ時ヨリ改メテ鐵尺ヲ用ヒ、律管ナドヲバ是等ノ尺ニテ定メシカドモ、市中ニハ魏尺ヲ用フルコト、後周ノ時ト同ジカリシカバ、魏尺ヲモ官尺トシテ、常用ニハ官私共ニ此尺ヲ用ヒシナリ、唐ニテモ是ヲ承ケテ、鐵尺ト開皇官尺トヲ大小尺トシ、法物ヲバ小尺ニテ度リタリシカドモ、民ノ便トスルニヨリテ大尺ヲ常用トセシナリ、此等ノコト附錄ニ詳ニス】皇國ニテモ土地銀銅米穀ナド數多ク計ルモノハ、小度・小稱・小量ニテハ不便ナレバ、令ヲ定メ給ヒシ時、唐ニ倣ヒテ、大度・大稱・大量ヲ用ヒ、其佗ハ小度・小稱・小量ヲ常用トセラレシニ、【本朝令ハ唐命ニ沿リ給ヒシカドモ、其中ニ制ヲ改メラレシモ、彼是見エタリ】西土ニハ專大尺ヲノミ用ヒシカバ【六典ニ「内外官司悉用二大者一」ト云ヒシコト上ニ引ケリ、又通典ニ「大-唐貞-觀-中、張-文-收鑄二銅斛、秤尺升合一、咸得二其數一、詔以二其副一藏二於樂署一、至三武-延-秀爲二大常卿一、以爲二奇玩一以三律與二古玉斗升合一獻焉、開元十七年將考二宗廟樂一有-司請レ出レ之、勅惟以二銅律一付二大-常一、而亡二其九-管一、今正聲有二銅律三百五十六銅斛二銅秤二銅甌十四一、斛左右耳臀皆正方積レ十、而登以至二於斛一、銘云、大-唐貞-觀十年、歲

次玄枵月旅黄鐘、依新令累黍尺、定律校龠、成茲嘉量、與古玉斗相符、同律度量衡、協律郎張文收奉勅脩定、秤盤銘云、大唐貞觀秤同律度量衡、匣上有朱漆題秤尺二字、尺亡其跡猶存、以今常用度量挍之、尺當六之五、量衡皆三之一」、ト云ヘリ、張文收ガ作リシハ小尺ナリ、大尺ハ其一尺二寸ニテ、是ヲ常用トセリ、張文收ガ尺ヲ開元ノ時常用尺ニテ度リシ故ニ、當六之五トハ云ヒシナリ、是常用ニハ大尺ヲノミ用ヒテ、開元ノ頃小尺ハ廢シタルガ如クナリシヲ知ルベシ、宋ノ程大昌ガ演繁露ニ「開元九年勅度以十寸爲尺、尺二寸爲大尺」ト載セタルハ、此時始テ大尺ヲ作リシ如ク聞ユレドモ「十寸爲尺、一尺二寸爲大尺」トハ、貞觀令ノ文ニテ、四分律行事抄ニモ「隋煬帝立尺度秤、準古立樣、余親見之、唐朝御宇任世兩用、不違古典」トアルハ隋ノ大業ノ時ニ開皇ノ官尺ヲモ鐵尺ヲモ止メテ、梁表尺ヲ用ヒシニ、（是ヲ準古立樣ト云ヘルナリ、此事附錄ニ詳ニス）唐ニテハ、又開皇ノ制ニヨリテ、大小兩尺ヲ用ヒシヲ云ヒタルナレバ、（不違古典トハ開皇ノ制ニ依リシヲ云フナリ。）大尺ハ唐初ヨリ用ヒテ、開元ノ時始リシニ非ルコト明ラケシ、程大昌ハ開元九年ニ令ノ趣ヲ述ベタル格文ヲ見テ、其源ニ溯ラズシテ其マヽニ引キシモノナルベシ、譬ヘバ、玉海ニ六典ヲ引キテ、「大府卿凡官私斗斛尺每年八月詣寺平挍」、トアル注ニ、「開元九年勅格」ト云ヒタレドモ、唐律疏議ニ、「依關市令每年八月詣太府寺平挍」、トアレバ、是モ貞觀令ノ文ナルヲ、開元勅格ト引キシニ同ジ】後ニ彼ニ倣ヒテ大尺ヲ常用トスル制ニ改メラレシモノナラン、ソレハ何レ

ノ御時改メラレツラント云フニ、寶龜元年ニ造ラセラレシ無垢淨光經ノ小塔ヲ度ルニ、【續日本紀ニ、「寶龜元年四月戊午、初天皇八年亂平、乃發ニ弘願一、令レ造ニ三重小塔一百萬基一、高各四寸五分、基徑三寸五分、露盤之下各置ニ根本自心相輪六度等陀羅尼一、至レ是功畢分ニ置諸寺一、」ト云ヘル塔ナリ、八年ノ亂トハ、天平寶字八年藤原惠美押勝ガ亂ヲ云フ、諸本自心ヲ慈心ニ作ル、予此塔三基ヲ藏ス、一基ニハ根本陀羅尼ヲ納メ、一基ニハ相輪陀羅尼ヲ納メ、一基ニハ自心印陀羅尼ヲ納ム、藏中ノ無垢淨光經ニモ、自心印トアリ、是ニヨレバ慈心トアルハ、音ノ近キニヨリテ、寫シ誤リシコト著ケレバ、改メ引リ、印字ハ寫シ脱シタルカ、又ハ史家ノ省文ナルカ詳ナラザレバ、今姑ク舊ニ依レリ】皆大尺ニ合ヒタレバ、寶龜ノ時ハ大尺ヲ常用トシタリシコト明ナリ、又賦役令ニ、「紙長二尺廣一尺」ト云ヘルニヨリテ、予ガ架中ノ古寫佛經ニテ考ルニ、和銅五年ニ寫シタルハ、其紙長サ小尺ノ二尺廣サ小尺ノ九寸四分半【本ハ廣サ一尺ナリシヲ、重裝ノ時經ノ上ヲ截リ揃ヘシニヨリテ、少シク短クナリタルナラン】令ニ云フ所ノ度ニ合ヘリ【此外和銅以上ノ文書、今世遺レルヲ聞カズ、博識人ニ尋ヌベシ】天平十二年ヨリ貞觀ノ頃マデニ寫シタル、長サ大尺ノ一尺九寸七分以下、一尺八寸三分以上、廣サ大尺ノ九寸六七分以下、九寸二三分以上ナリ【是ヲ小尺ニテ度レバ、長サ二尺三寸六分以下、二尺二寸以上、廣サ一尺一寸六分以下、一尺一寸一分以上ナレバ、令ノ制ニ合ハズ、然レバ是ハ小尺ニテ度リシニハアラデ、大尺ニテ長サ二尺、

廣サ一尺ナリシヲ、裴濆ノ時截リ縮メシナラン】和銅五年ノ經ハ、小尺ヲ常用トセラレシ時造リシ紙ニテ、天平十二年以後ノ經ハ大尺ヲ常用トスル制ニ改メラレシ後ニ造リタル紙ナルベシ【此外西土ノ紙ヲ以テ寫シタル經アリ、是ハ令ノ制ニ預ラザレバ論ゼズ】是ニ據レバ和銅五年ニハイマダ小尺ヲ常用トセシニ、天平十二年ニハ既ニ大尺ヲ常用トシタリト見ユ【天平十二年ハ寶龜ノ前三十年ナリ】又續日本紀ニ「養老三年五月制、諸國貢調短絹狹絁麁狹絹美濃狹絁之法、各長六丈濶一尺九寸」、トアルニ、延喜ノ主計式ニモ「諸國輸レ調絹絁各長六丈、廣一尺九寸、長幡部絁長六丈、廣一尺九寸」、トアリテ、其長サ廣サ全ク同ジケレバ、主計式ニ載セタルハ、即養老ノ制ナリ、式ノ時ハ大尺ヲ用ヒタルニ、養老ノ制ト尺寸ノ同ジキヲ見レバ、養老ノ時早ク大尺ヲ用ヒシコト知ルベシ【天平十二年ノ前二十年ナリ】然レバ大尺ヲ常用トセシハ和銅五年ノ後、養老三年ノ前ナリシコト明ラケシ、按ズルニ續日本紀ニ、又「和銅六年二月始制ニ度量一、四月頒ニ下新格及度量權衡於天下諸國一」、ト見エタリ、【養老三年ノ前六年ナリ】然ラバ是時始テ唐制ニ倣ヒテ、大尺ヲ常用トセラレシナルベシ、【故ニ養老ノ絹絁ノ長廣モ、天平ノ經ノ紙モ、寶龜ノ塔モ、皆大尺ニテ度リシナリ、(但天平二年ニ寫シタル經ニ、長サ小尺ノ二尺、廣サ小尺一尺〇四分ノ者アリ、小尺ニテ造リシ紙ノ少シク廣カリシナラン、是ハ改制以前ノ紙アリテ、ソレニ寫シタリシモノナルベシ)】按ズルニ、釋思託ガ延暦僧錄ノ光明皇后ノ傳ニ、「皇后在レ室、諸レ父入レ市教ニ諸賈人一用ニ於稱尺一、于時日本末レ行ニ稱尺一、新從ニ大唐一得ニ稱尺一、所以皇后入レ市教レ人用ニ稱尺一、父曰、汝當ニ助レ國宣ニ風、權衡稱尺非レ久、各流ニ天

下ニ、後帝納レ之」、トアリ、皇后ハ天平寶字四年春秋六十ニテ崩ジ給フ、聖武皇帝儲貳タリシ時納レテ妃トシ給ヒシハ、御年十六ノ時ナリト續日本紀ニ見ユ、然レバ皇后ハ大寶元年ニ生レ給ヒ、妃トナリ給ヒシハ靈龜二年ニテ、和銅六年ニハ御年十三ナリ、然ラバ皇后ノ家ニ坐シ時敎ヘ給ヒシハ、和銅六年改制ノ稱尺ナルベシ、尺ハ皇極天皇・孝德天皇ノ紀ニ見エ、稱ハ齊明天皇・天智天皇ノ紀ニ見エ、度量ヲ天下ニ頒タレシコト、文武天皇ノ紀ニ載セ、大寶ノ令ニモ正シク度量權衡ノ制ヲ擧ラレタルヲ思託ハ唐人ナレバ(鑒眞ニ從ヒテ歸化セシ僧ナリ)皇國ノ典故ヲ知ラデ和銅ノ時マデ皇國ニ稱尺無カリシヲ、皇后ノ始テ敎ヘ給ヒシト誤リタルナリ、其實ハ皇后ノ敎ヘ給ヒシハ、和銅改制ノ稱尺ニテ、此時稱尺ヲ始テ用ヒシニハアラズ、和銅六年ハ唐ノ開元元年ニ當レリ、又續日本紀ニ「養老四年五月癸酉頒ニ尺-様於諸-國ニ」トアルハ和銅六年ニ大尺ヲ常用トサセラレシカドモ、各國ノ尺正シカラザリシカバ、此時又尺樣ヲ頒タレシナルベシ、和銅六年ノ後七年ナリ】然ラバ此時ヨリ璽印モ改メテ、大尺ニテ製セラレシナラン、故ニ其度大尺ニ合ヒシナリ、【按ズルニ、正シキ尺ハ小尺ニテ大尺ヲ用フルハ簡便ニヨリタルナレバ、大尺ヲ常用トシタレドモ、小尺ヲ廢セシニハアラズ、故ニ式ニモ測景ニハ用ニ小者ニト云ヘリ、唐ニテハ初ヨリ大尺ヲ常用トシタレドモ、晷景ヲ測リ冠冕ヲ造ル等ニハ、小尺ヲ用フト云ヒ、其景表尺ハ小尺ニテ、宋ノ時マデモ殘リタリ、然ラバ常ニハ大尺ヲ用フトモ、法物ハ小尺ニテ定ムベキニ、御璽官印ヲシモ大ニテ度リ改メ造ラレシハ甚シキ誤ナリケリ、如レ此

何事ニモ押並ベテ大尺ヲ用フルコトトナリシカバ、小尺ハ影ヲ測ルニノミ用ヒテ、佗ノ事ニハ用ヒザリシナルベシ】若和銅以前ノ璽印傳ハリタランニハ、其尺必小尺ニゾ合フベキ【金石遺文ニ、大寶三年ノ勅書ニ捺シタリト云フ御璽ト大學寮印トヲ載セテ、大寶ノ時ハ晉前尺（曲尺七寸六分同人ノ集古圖ニハ曲尺七寸四分弱ト云ヘリ）ヲ用ヒ、養老四年ヨリ唐ノ大小尺ニ改メラレタリト云ヘリ、然レドモ晉前尺ハ晉ノ荀勗ガ考ヘ定メタル周漢ノ古尺ニシテ、當時スラ鍾律ヲ調フルニノミ用ヒテ常用トセズ（晉前尺ノコト附錄ニ詳ニス）況ヤ大寶令ハ唐令ニ倣ヒ給ヒシニ、唐尺ニ依ラズシテ荀勗ガ調律ノ尺ヲ用ヒラルベキ故アランヤ、彼勅書幕本ノミ傳ハリテ、原本ハ所在詳ナラズト云ヘリ、思フニ必贋造ノ物ナルベシ、又春田永年ノ延喜式工事通解ニ、和銅以後曲尺ヲ常用トシ、其一尺二寸ヲ大尺トシテ、布帛ヲ度ルト云ヒシモ誤ナリ、和銅以前モ和銅以後モ小尺ハ同ジ小尺、大尺ハ同ジ大尺ニテ、タヾ小尺ヲ常用トセシト、大尺ヲ常用トセシトノ變リタルノミナリ、令ノ大尺ヲ和銅ニ小尺トシ、其一尺二寸ヲ大尺トシタルニハアラズ、又大尺ヲ布帛ヲ度ルニノミ用フト云ヒタルモ、雜式ニ官私悉用大者トアルニモ合ハヌヲヤ】

或人難ジテ曰、古今目錄抄ト凝然ノ小硯匣トニ據リテ竹尺ヲ鴈長セシモノト定メタレドモ、近江國栗太郡木內某ガ家ニ藏スル鐵ノ尺範ハ、後冷泉院ノ御時ノ物ナルニ、其長サ竹尺ト同ジ、然ラバ古今目錄抄ニ云ヒシモ、凝然ノ小硯匣モ今工匠ノ用フル鐵尺モ、皆後ニ縮リタルモノニシテ、竹尺ゾ古ヲ失ハヌ尺ナルベキニ、是ヲ鴈長尺ト定メシハ如何、答、予嘗テコノ尺範ノ摹造ヲ得タリ、曲

尺（竹尺ト同シ）吳服尺（竹尺ノ一尺二寸ナリ）鯨尺（竹尺ノ一尺二寸五分五釐、今ノ鯨尺ヨリハ五釐長シ）三種ノ尺範ナリ【而ニ陽ノ字ヲ題シ、背ニ陰ノ字ヲ題ス、又人王七十代永承二、正月日ト鐫リタリ】凡度ハ手ヲ經ルニ隨ヒテ謬長スルコト上ニ云ヘリ、然ルニ此尺範却テ今ノ工匠鐵尺ヨリ長ケレバ、古ニアラザルコト著シ、又吳服尺・鯨尺ハ後世ノ私尺ニシテ、古此等ノ尺アルコト無ク、且年號ノ書法モ古ヲ知ラヌ者ノ所爲ニシテ、イト拙シ、尺樣ハ銅ヲ以テ造ルベキニ【南部新書ニ、開元令ヲ引テ「在京諸司及諸州、各給秤尺度斗升合等樣、皆以銅爲之」、ト云ヘリ、本朝雜令ニ、「凡用度量權、官司皆給樣、其樣皆銅爲之、」トアルモ、唐制ニ依ラレシナリ、カク銅ヲ用フルコトハ、漢書律暦志「凡律度量衡用銅者云々、銅爲物之至精、不爲燥濕寒暑變其節、不爲風雨暴露改其形、介然有常、有似於士君子之行、是以用銅也」ト云ヘルニ本ヅキシナルベシ】鐵ニテ造リタルモ違ヘリ【鐵ハ古色ヲ贋易キモノ故ニ、鐵ニテ造リシナラン】其長サ竹尺ト符合スルヲ見レバ、世ニ念佛尺ヲ賞スル故【念佛尺ノコト上ニ詳ニス】ソレニ依リテ作リシモノナルベシ、決シテ近世姦人ノ僞造ニシテ、古物ニアラザレバ、取リ證スルニ足ラズ

或人又曰、三種尺範ノ僞造ナルコトハサモ有リナン、但倭名類聚抄木工具ニ、曲尺ヲ載セテマガリガネト訓ミ、裁縫具ニ尺ヲ出シ、辨色立成ヲ引キテ竹量也、タカハカリト載セタレバ、古ヨリ工匠尺ト裁縫尺ト同ジカラザリシナリ、高倉家ニテ裁縫ニ用ヒラルヽハ鯨尺ナレバ、タカハカリハ後世

ノ鯨尺ナルベシ、然ルヲ古呉服尺・鯨尺等ハ無カリシト云フハ如何、答、タカハカリハ竹ニテ作リテ、其狀勾ラザルコト工匠尺ト異ナルノミ、其長サハ工匠尺ト同ジク大尺ナリ、其長サ同ジカランニハ並ベ載スベカラザルニ似タレドモ、營造ト裁縫ト用フル所同ジカラズ、其形モ異ナル故ニ南部共ニ載セタルナリ【同書ニ幡ヲ伽藍具ニモ征戰具ニモ載セ、頭巾裳ヲ僧坊具ニモ裝束部ニモ載セ、箜篌ヲ佛塔具ニモ音樂具ニモ載セ、鹿杖ヲ僧坊具ニモ行旅具ニモ載セ、鉸刀ヲ容飾具ニモ鍛冶具ニモ載セ、鐵槌ヲ工匠具ニモ鍛冶具ニモ載セタル、皆是ト同ジ】タカハカリノ長サ即大尺ナル證ハ、弘安元年、靈山ノ定圓ト云フ僧、法隆寺ノ寶物共ヲ皆歌ニ詠タリシニ、彼象牙尺ヲタカハカリト云ヒシニテ【此歌太子傳・玉林抄ニ載セタリ、裁縫尺ハモト竹ニテ造リシニヨリテ竹ハカリト云フ、コノ定圓ガ歌ニ、象牙尺ヲタカハカリト云ヒシヲ見レバ、木又ハ象牙ナドニテ作リタルヲモ勾無クテ、布帛衣裳ナド度ルベキハ皆タカハカリト云ヒシナルベシ、譬ヘバ鯨尺ハ鯨ノ鬚ニテ作リシヲ本ニテ、木ニテモ竹ニテモ其長サナルヲバ、皆クヂラサシト云フガ如シ、又奈良ニテ甲冑ノ用ナリトテ、鷹ハカリト云フ尺ヲ製ス、曲尺ノ一尺一寸五分ナリ、是モ古ニ無キ私尺ナリ】タカハカリノ長サ大尺ト同ジキヲ知ルベシ【下ニ引キシ荒木田氏經日記ニ、曲尺ヨリ長キ尺ヲ大タカハカリト云ヒシモ、タカハカリノ即曲尺ナルコトヲ證スベシ】和銅六年以後、小尺ハ影ヲ測ルニノミ用ヒテ【雜式ノ文上ニ引ケリ、又續日本紀ニ天平七年四月辛亥、入唐留學生從八位下下道朝臣眞備、獻唐禮一

百三十卷・大衍暦經一卷・大衍暦立成十二卷・測レ影鐵尺一枚・銅律管一部・鐵如ニ方響一寫ニ律管聲一十二條・樂書要錄十卷上」トアル影形鐵尺、即小尺ニテ、西土ニテモ此頃ハ影ヲ測ルニノミ用ヒシナリ】諸物ハ皆大尺ニテ度ルベキ定メナリシニヨリ、營造ニモ裁縫ニモ、何事ニモ大尺ノ一種ヲ用ヒシナリ、【好古小錄曰、續日本紀ニ天平八年五月、諸國調布長二丈八尺、濶一尺九寸」ト見エタリ、法隆寺ニ古調布アリ、布ノ端ニ「常陸國信太郡中家郷戶主大伴□□調布進納、天平勝寶六年十月」ノ廿七字アリ、共濶サ今ノ大尺（貞幹ハ曲尺一尺二寸ヲ大尺トス、即今ノ吳服尺ナリ）一尺九寸アリ、布帛ニ大尺ヲ用フルノ明證トスベシ、大尺ニ吳服尺ノ名アルモ、舊キコトト見ユト云ヘリ、按ズルニ此布ノ端ニ書キタルハ、賦役令ニ「凡調絹絁布兩頭、及絲綿囊具註ニ國郡里戶主姓名年月日一」トアル式ニ依レルナリ、賦役令ニ、「布廣二尺四寸」ト云ヘリ（小尺ニテ度リシナリ）小尺ノ二尺四寸ハ大尺ノ二尺ナレバ、天平八年ニ一尺九寸ト定メラレシハ大尺ナルベキニ、法隆寺ノ調布ノ幅ヲ度レバ大尺、（曲尺九寸七分）ニテハ、二尺五寸六分五釐餘、曲尺ニテハ二尺四寸八分、又吳服尺ニテ度レバ二尺〇七分、鯨尺ニテハ一尺九寸八分四釐ナレバ、貞幹ガ云ヒシ如ク、天平ノ頃ハ吳服尺カ鯨尺カヲ以テ度リシニ、法隆寺ノ調布ハ年ヲ經テ少シク伸ビタルニモアルベク思ハルレドモ、主計式ニ「調布長四丈二尺、廣二尺四寸」トアリ、（大尺ニテ度リシナリ）令ノ時ハ小尺ノ二尺四寸ナリシニ、和銅ヨリ世ニ普ク大尺ヲ用フルコトニナリタレバ、大尺ノ二尺ナリシヲ天平八年ニ改テ大尺ノ一尺九寸トシ、後ニ再大尺ノ二尺四寸ニ改メラ

レ、延喜ノ時マデモ其制ニ從ハレシナルベシ、然ラバ法隆寺ノ調布ハ大尺二尺四寸ノ制ニ改メラレシ後ニ、織リタル布ノ年ヲ經テ伸ビタルカ、又ハ制ヨリ少シ廣ク織リ成シヽモノナルベシ、式ニ載セタル二尺四寸ノ制、天平勝寶六年ヨリ後ニ定メラレシト云フ明證詳ナクバ、法隆寺ノ調布ヲ據リドコロトシテ、古吳服尺ヲ用ヒシ證トハナシ難シ、又按ズルニ法隆寺ノ調布ノ端ニ書キタル、大伴ノ下ノ二闕字ハ、部羊ノ二字ナリ、大伴部ハ姓ニテ羊ハ名ナルベシ、又調布ニハ天平寶勝八年トアリ、寶勝トアルハ當時偶書錯リタルナレドモ、六年ト云ヒシハ貞幹ガ誤ナリ】其後明ノ裁衣尺渡リ來リショリ、俗間ノ裁縫ニハ其尺ヲ用ヒ、是ヲ吳服尺ト云ヒタレドモ【曲尺ノ一尺二寸ナリ、明ノ裁衣尺ハ曲尺ノ一尺一寸三分ナレドモ、譌長セシモノ皇國ニ入リシカ、又ハ皇國ニ入リシ時ハ譌ラザリシヲ、後ニ譌リシニモアルベシ、淸ノ裁衣尺モ明ノ裁衣尺ヲ承ケタルニ、譌長シテ其中ナル者ハ曲尺ノ一尺一寸七分七釐餘、小ナル者ハ一尺一寸五分ノ者アリ（附錄ニ詳ニス）然ラバ大ナル者ハ一尺二寸ニモ及ベルナラン、此尺イヅレノ時渡リ來リシカ考ヘ得ズ、泉涌寺長典ガ筆記ニ、曲尺ヲ金尺ト云ヘリ、吳服尺ニ分タン爲ニ、金尺ト云ヒシニ似タレバ、文龜永正ノ頃ハ此尺アリシカ、又ハ周尺ヲ云ヘル條ナレバ、ソレニ分タントテ金尺ト云ヒシニモアルベシ、荒木田氏經寬正四年日次記ニ、大タカハカリト云ヒシモノモ（全文下ニ引ケリ）是ナルニヤ、寬正四年ハ明ノ天順七年ニ當レリ、明ノ開國ヨリハ八十七年ナリ、又按ズルニ安東郡專當沙汰文ニ】寬永三年ニ布帛ノ長サ廣サヲ定メラレシニ、

曲尺ヲ用ヒラレ【東武實錄ニ、寛永三年丙寅年十二月七日仰出サルル趣、一ツ絹紬之事壹反ニ付而、長サ大工ガネニテ三丈四尺、幅一尺四寸、一ツ布木綿之事、壹反ニ付而長サ大工ガネニテ三丈四尺、幅一尺三寸、右織物ノ寸尺如レ此御定ノ上ハ、長幅不足之絹紬布木綿賣候ニ於而ハ、來年四月朔日ヨリ見合候者可レ取レ之者也トアリ】寛文四年、再命セラレシモ、曲尺ニテ定メラレタレバ【寛文四年ノ八月三日ニモ、絹紬一端ニ付キ大工之カネニテ、長三丈四尺、ハヾ一尺四寸タルベキ事、布木綿之義壹端ニ付、大工之カネニテ、長三丈四尺、ハヾ一尺三寸タルベキ事ト命ゼラレタリ】關東ニモ官ニハ呉服尺ハ用ヒラレザリシナリ、然レドモ民間ニテ呉服尺ヲ便トセシカバ【寛永四年八月ニ作リシ吉田光好ガ塵劫記ニ、キヌモンメンノ丈尺ト云コトハ、大工ノカネニ一尺二寸ヲ御フクニテ一尺ト云フモンメン一タンニ付、ナガサハ二丈五尺ナリ、キヌ一タント云フハ、長ハ二丈八尺有リト云ヘリ、(呉服尺ノ二丈五尺ハ曲尺ノ三丈、呉服尺ノ二丈八尺ハ曲尺ノ三丈三尺六寸ナリ)如レ是呉服尺ニテ度リシヲ見レバ、此頃民間ニテ布帛ヲ度ルニハ專此尺ヲ用ヒシ事知ルベシ】寛文五年ヨリ呉服尺ニテ端匹ヲ度ル事ニ改定メラレシナラン、【玉露叢話ニ、寛文五年秋、絹布綿布丈ヲ二丈六尺ニ定メ給フト云ヘリ、呉服尺ノ二丈六尺ハ曲尺ノ三丈一尺二寸ナリ、版本和漢合運ニモ、此事ヲ載セタリ】然ラバ曲尺ニテ布帛ヲ度ルコトハ、此時ヨリ廢セシナルベシ【然レドモ奥羽越後ナドノ邊鄙ニハ、今モ曲尺ヲノミ用ヒテ、呉服尺ヲモ鯨尺ヲモ用ヒザル處モアリ、高野山ニテ衣服ヲ製スルニモ曲尺ヲ用フト云ヘリ】其後呉服尺ノ五分謫長

シタルヲ鯨尺ト云ヒシナラン【曲尺ノ一尺二寸五分ナリ、裁衣尺ハ官制ニアラザル故ニ、西土ニテモ其長漫ナリシト見エタリ、或人ノ云ヒケルハ、古ハ民間ニテ布帛ヲ度ルニ都ベテ呉服尺ヲ用ヒシニ、一人ノ姦商アリテ、五分長キ尺ヲ造リ、是ニテ度リ賣リシカバ、其家布帛ヲ買人多カリシトゾ、是ニヨリテ佗ノ布帛ヲ賣ル者モ此尺ヲ學ビ用ヒシカ、後ニハ裁縫ニモ是ヲ用フルコトニ成リシト云傳フト云ヘリ、按ズルニ乳母册子ニ、クヂラ、クワノモノサシトアルハ、鯨魚鬚、又ハ桑木ニテ作リタル尺ト云フコトニテ、曲尺一尺二寸五分ノ鯨尺ニハアラズ】裁衣尺ハ西土ニテモ明ヨリ始マリテ、ソレヨリ前ニハ別チ用フル事ナシ、況皇國ノ古此等ノ尺無カリシコト明ラケシ、【好古小錄ニ鯨尺ハ唐ノ御府尺ナリト云ヒシハ、何ニ據リタルニカ、御府尺ノ名物ニ見エタルコト無ケレバ信ジ難シ、按ズルニ呉服尺ハモシ田令集解ニ載セタル高麗尺ナルカ（高麗尺ハ東魏尺ナルベキコト上ニ云ヘリ）又ハ演繁露ニ載セタル南宋ノ京尺ニテ（附錄ニ詳ニス）鯨尺ハソレラノ譌長セシモノニヤトモ思ヘドモ、呉服尺・鯨尺共ニ近世ニ出タル上ニ、布帛裁縫ニノミ用ヒテ、其佗ノ事ニハ用ヒザレバ、必サニハアラデ、裁衣尺ノ傳ハリシモノナルベシ】サレバ呉服尺・鯨尺等ハ、皆後世民間ノ私尺ニシテ、官家ノ用ニ充ツベキ尺ニ非ズ、今高倉家ノ裁衣尺ハ鯨尺ヲ用ヒラルルト云ヘドモ、文化十二年高倉永雅卿、江戸ニ下リ給ヒシ時、從ヒ來リシ山田錦所（以文）ニ依リテ問ヒ申シヽニ、彼家ニモ古ハ曲尺ヲ用ヒラレシト答ヘ給ヒキ【或人曰、小忌ノ赤紐、高倉家ニテ長一丈、廣三分半ト傳ヘラル、是ヲ曲尺ニテ度レバ、長一丈二尺

五寸、廣四分四釐弱ナルヲ、綾小路俊量卿ノ記ニ、長一丈二尺、弘四分トアレバ、古曲尺ニテ度リシト云フ說ノ妄ナラザルヲ信ズベシト云ヘリ、然レドモ其長サ五寸ノタガヒ有ルニヨリテ考レバ、古ハ曲尺ニテ長サ一丈二尺廣四分ナリシヲ後ニ吳服尺ニテ度リ、長一丈廣三分半ト定メタルニ、(曲尺ノ一丈二尺ハ吳服尺ノ一丈、曲尺ノ四分ハ吳服尺ノ三分三釐不盡ナリ)再變シテ今ハ鯨尺ニテ長一丈、廣三分半トセラレシナラン、又荒木田氏經日次記ニ、寬正四年荒木田神主等ガ解狀ニ、御裝束ノ調進相違無シトイヘドモ、大略尺寸不足ト云ヒシニ、行事官ノ陳狀ニ御裝束事背ニ先例ニ大タカハカリヲモツテ御裝束ヲ禰宜等ノ中ヘ取リ、如ニ所存ニサシトルナリ、先例爲ニ官方ニ古來手尺ヲモテ、相共ニサシ渡、是ヲ請取處今度非ニ先規ニトイヘドモ、其用意心得餘分イタス間、如レ中無ニ相違ニ相渡者也ト云ヘリ、然ルニ禰宜等又上言シケルハ、御裝束尺寸ノ事禰宜等ガ中ニ取リ、大タカハカリヲモテ如ニ所存ニサシトル由以外ノソラ言ナリ、以往ヨリ定マレル鐵尺ヲモテ辨代ト一禰宜ガ前ニオイテ大藺筵ヲ敷、ソノ上ニ御唐櫃ノフタヲオキ、其上ニテ神宮ノ奉行幷物忌等サシマキラセ、行事官等相共ニ拜見仕リ如ニ先規ニサタヲ致ス所、如レ此申條以外ノ不當ナリト云ヘリ、是ハ此年大神宮遷宮ニヨリテ奉ラルヽ御裝束ヲ行事官伊勢ニ持行テ神官ニ渡シヽニ、禰宜等制法ノ尺寸ヨリ小サキ旨ヲ朝廷ニ申シヽカバ、行事官陳ジテ、禰宜ノ度リタルハ例ノ尺ニハアラデ、大ナル尺ヲ以テ度リシ故ニ、御裝束ノ尺寸短キナリト云ヒシヲ、禰宜等サニアラズ、常用ノ鐵尺ニテ度リシト申シヽナリ、今モ大神宮遷宮ノ時奉ラルヽ御裝束、又每年ノ幣帛何

レモ曲尺ニテ度レリ、古ヨリノ例ナルベシ、又伊勢大神宮司公文抄（此書永享嘉吉等ノ年號アリ）ニ載セタル御氣殿、御裝束ノ物サシノ圖ヲ度ルニ、長サ曲尺ノ一尺〇三分半許アリ、轉寫ヲ經テ謬長セシ物ナルベシ、謬長ハシタレドモ是モ御裝束ヲ度ルニ、吳服尺ヲ用ヒザル一ノ證トスベシ、按ズルニ氏經ノ日次記ニ云ヘル大タカハカリハ、後世ノ吳服尺ナルニヤ】然ラバ今鯨尺ヲ用ヒラルヽハ、衰頽ノ御代ニ古ヲ失ハレシヨリノ事ナルベシ、今ハ文運盛ニシテ萬事廢レタルヲ興シ、謬レルヲ糾シ、古ニ復サルル時ニシアレバ、イカデ是モ大尺ヲ用ヒラレマホシキワザニナン、

或人難ジテ曰、唐書ニ開元錢ノ徑八分ト云ヘリ【大尺ナリ】試ニ大樣ノ者ヲ撰ビ、十錢ヲ積テ曲尺ニテ度レバ、略八寸ナリ、今定メタル大尺【曲尺九寸七分】ニテ度レバ、八寸三分ニ餘レリ、凡錢年久シク續キテ鑄レバ、後ニ鑄タルハ初ニ鑄シヨリハ、薄小ニナルコト古今同ジ【朱載堉ガ律呂精義ニモ「凡錢初鑄、與レ制合、再入レ模即縮小」ト云ヘリ】サレバ八分ヨリ小キハアルベシ、八分ヨリ大ナルハ無キ理ナリ、然ルニ今開元錢ノ度ニ略合ヒタル曲尺ヲ謬長セシモノトシ、開元錢十枚ヨリ度レバ、三分餘短キ尺ヲ唐ノ大尺ト定メシハ如何、答、今開元錢ヲ度ルニ、實ニ云フ所ノ如シ、但開元錢ノ徑八分ト云フコト、六典通典等ノ唐人ノ書ニ見ユルコト無シ、因テ開元錢ノ徑何ヲ以テカク定メシニカト考ルニ、唐ノ時ノ度量權衡ノ制ハ、其實ハ隋ノ舊ニ沿リタレドモ、漢書律暦志ニヨリテ、黍ヨリ起シヽ趣ヲ云ヘバ、錢ヲ鑄ルモ隋ノ制ヲ承ケタルベケレドモ【隋ノ五銖錢ニ、徑重開元

錢ト全ク同ジキ者アリ、隋錢ノ事ハ權衡附錄ニ詳ニス】必古法ニ據リテ定メタリトハ云シナラン、古書ニ錢ノ徑ヲ載セシハ、漢書食貨志ニ「大泉五十徑一寸二分貨泉徑一寸」ト見エタルノミナリ、想フニ大泉ハ當五十ノ錢ナレバ、開元錢ハ當一ノ貨泉ニ依リテ、小尺一寸ト定メシナルベシ【然レドモ貨泉ハ漢ノ一寸ニテ、開元錢ハ唐小尺ノ一寸ナレバ、其大サハ同ジカラズ、譬ヘバ歷代五銖錢ヲ鑄タリシハ、漢ノ制ニヨリタルナレドモ、其重サハ其代々ノ五銖ニテ、漢ノ五銖錢ノ重サトハ同ジカラヌガ如シ、(權衡攷附錄ニ詳ニス)按ズルニ後ニ乾元當十錢ヲ小尺一寸二分ニ作リシハ、大泉五十ノ徑ニ據リタルニヤ】然ルニ石晉ノ劉昫等唐書ヲ作リシ時ハ【所謂舊唐書ナリ】小尺ハ廢シテ、年久シケレバ此錢ノ徑ヲ載セントテ、當時用フル大尺ニテ度リシニ、八分餘ナリシカドモ【小尺ノ一寸ヲ大尺ニテ度レバ、八分三釐三豪三絲三忽不盡ナリ】史ニ其奇零ヲ記スベキナラネバ、大凡ニ八分トハ記シケルナリ【宋ノ歐陽修等ガ新唐書ニモ、八分トアルハ、舊書ノ文ヲ用ヒタルナリ、按ズルニ宋ノ陳言ガ三因方ニ「唐武德年鑄ニ開元錢一、八分當ニ十二錢半ナレバ、得ニ一尺一、排ベテ錢比ブルニ之十二箇已ニ及ニ一尺ニ」ト云ヘルモ、開元錢ノ徑八分ナラバ、十二枚半ニテ一尺ナルベキニ、八分三釐三豪三絲三忽不盡ナル故ニ、十二枚ニテ一尺ナルヲ疑ヒシナリ、然レドモ宋ノ時ノ尺ハ、唐大尺ヨリハ少シク謁長シタレバ、(曲尺ノ一尺〇二分一釐五豪二絲ナリ、附錄ニ詳ニス)「已及ニ一尺ニ」トハ云ヒシナリ(「已及」トハ少シク足ラヌヲ云ヘリ)今本ノ三因方ニ十二箇ヲ十一箇ニ誤レリ、宋尺ニ十一箇ヲ排スレバ、徑九分二釐八豪六絲五忽餘ナリ、サル開元錢アルコト無ケレバ、

轉寫ノ誤ナルコト疑無シ】譬ヘバ唐ノ封演ガ錢譜ニ【此書今傳ハラズ、宋ノ洪遵ガ泉志ニ、舊譜ト引キシニ依レリ、下ニ引キタルモ皆同ジ、泉志ニ舊譜ト引キタル條々ヲ、事林廣記ニハ「封演曰、」ト云ヒ、泉志ニ「封演曰」トアルヲバ、却テ舊譜ト載セタルニテ、舊譜トアルハ封演ガ錢譜ナルコトヲ知レリ、封演ハ唐書藝文志ニ、封演古今年號錄ヲ載セテ天寶末ノ進士ト云ヘリ、又今世封氏聞見記アリ、朝散大夫部郎中兼御史中丞封演ト題ス、清ノ四庫全書提要ニ、聞見記中ノ語ニヨリテ、天寶ノ時大學生ニテ、德宗ノ朝ニ是官ニ終リシ人ナリト云ヘリ】乾元重輪錢ヲ徑一寸四分トアリ【小尺ニテ度リシナリ、今本ノ泉志ニ二寸四分トアルハ、轉寫ノ誤ナリ】小尺ノ一寸四分ナラバ、大尺ニテハ一寸一分六釐六豪六絲六忽不盡ナルニ、唐書ニ此錢ノ徑ヲ一寸二分【大尺ナリ】ト云ヘルモ、大凡ニ記シタルコト是ト同ジ、又唐書ニ乾元當十錢ヲ徑寸【大尺ナリ】トアルニ、封演ハ徑一寸二分小尺ナリト云ヘリ、封氏ガ度ル所皆小尺ナルヲ以テ見レバ【封氏ガ前代ノ古錢ヲ度リシモ、皆小尺ナリ、タヾ永安五銖徑九分常平五銖徑八分ト云ヒシモノ、小尺ニアラズ、疑ラクハ誤アルベシ、按ズルニ唐ニテハ大尺ヲ常用トシタレドモ、錢ノ徑ヲ定ムルハ、鍾律冠冕ヲ度ル類ニテ、俗尺ヲ用ンベキニ非ザル故ニ、小尺ニテ定メタルモノナレバ、封氏モ小尺ニテ度リシナリ、又按ズルニ藤貞幹前ニ大寶勅書ノ璽印ヲ考ヘシ時ハ、晉前尺ヲ七寸四分弱(集古圖)或ハ七寸六分(金石遺文)トシタリシガ、後ニ其說ヲ改メテ封演ガ云フ所ノ度ヲ晉前尺ナリト云ヒシハ(好古日錄)誤ナリ、是ハ封氏ガ譜ヲ泉志ニ舊譜ト引キタレ

バ、深クモ考ヘズシテイト古キ書アラント思ヒ、又貞幹ハ曲尺トシタレバ、舊譜ノ尺度ハ曲尺ノ八寸〇八釐三三不盡（唐小尺ナリ）ナレバ、曲尺ヨリ短キ故ニ晉前尺ナリト思ヒ誤リシモノナリ、貞幹ガ晉前尺ハ詳ニ附錄ニ辨ジタリ】封氏ガ錢譜ニハ、開元錢ノ徑モ必一寸トリ有リツラン【洪遵コレヲ引カズシテ唐書ヲ引キシヨリ、此事遂ニ逸シタリ、凡同ジコトヲ古書ニ云ヒシト、後ノモノニ記シタルトハ、後ノ方必委シキモノ故ニ、ソレニ從フ人多シ、史記ト漢書ト同ジコトヲ載セタルハ、史記ヲ引カズシテ漢書ヲ引キ、唐書ハ舊書ヲ捨テ新書ヲ取リ、皇國ノ書ニテモ古事記ヲ置テ、日本紀ニ從フ類ナリ、洪遵ガ封演錢譜ニヨラズシテ、唐書ヲ引キシモ是ニ同ジ。然レドモ後ノモノハ其實ヲ失ヘルコト多シ、心シテ引ベキナリ】今尺八ヨリ起シタル度ヲ以テ、開元錢ヲ度レバ正ニ一寸ナリ、又乾元錢ノ大ナル者ヲ撰ビテ度レバ、當十錢ハ一寸二分、重輪錢ハ一寸四分ニテ皆封氏ガ云フ所ニ合ヘリ【曲尺ヲ大尺トシテ小尺ヲ起シ、ソレニテ開元錢ヲ度レバ、九分七釐有奇、乾元當十錢ハ一寸一分七釐四豪重輪錢ハ一寸三分七釐九豪六絲四忽ナレバ、今ノ曲尺ノ譌長ナルコトヲ知ルベシ】然ラバ唐書ニ開元錢ノ徑八分トアルヲ以テ、尺八ニテ起シ、大尺ヲ疑フベカラズ

或人又難ジテ曰、唐ノ諸錢ハ小尺ニテ造リシニ、唐書ヲ作リシ時ハ大尺ヲノミ用ヒシ代ナレバ、大尺ニテ度リ史ニハ奇零ヲ捨テ記シヽコトサモアルベシ、然ルニ唐書ニ乾封泉寶錢徑一寸トアリ【乾字平聲ニ讀ムベシ「古寒反、音干燥也」ト訓ズ、字ノ如ク音虔ト讀ムハ誤ナリ】コノ錢今世傳ハレル

ヲ度リ試ムルニ、最大樣ナル者曲尺八分七厘ニ過ギズ、今起シ、大尺ニテ度リテモ九分弱ナリ、開元錢・乾元錢等ノ三釐餘ノ强弱ハ、大凡ニモ記スベシ、是ハ一分餘ノ違アレバ、大凡ニ一寸ト記シタリトハ云ヒ難シ、如何、答、此錢ノ事、封演ガ錢譜ノ文傳ハラサレバ、其定メシ徑知ルベカラザレドモ、開元錢ノ十ニ當テタレバ、唐書ニ徑一寸【大尺】ト云フサモアルベキニ似タリ【乾元當十錢モ徑大尺ノ一寸ナリ】然ルニ今傳ハルモノ、曲尺八分七釐ニ過ギザルコト云ハレタル如シ、按ズルニ乾元ノ當十錢・重輪錢、共ニ世ニ多ク傳ハレドモ、皆徑八分有奇ニシテ、唐書ニ所謂徑一寸許ノ當十錢ハ、纔ニ五品、徑一寸二分弱ノ重輪錢ハ三品ヲ見シノミ、況乾封錢ハ僅ニ一年ガ間通行セシカバ、鑄タリシ錢多カラズ、今見ル所薄小ナル者ヲ數ヘテモ、二三十品ニ過ギザレバ、初鑄錢ノ今傳ハラヌニヤモ思ハルレド、一寸ト定メタル錢ノ匝歲ノ程ニ九分弱ニ減ズルマデニハ至ルベカラズ、又唐書ヲ考ルニ、開元錢ハ重二銖四絫【新唐書ニ四參トアルハ字ノ形似タルヨリ誤リシナリ】乾封錢ハ重二銖六絫トアリ【新舊書共ニ六分トアルモ誤ナリ、抑開元錢ノ條ニハ、參ニ作リ、コヽニハ分ニ作リシハ、絫字常ニ多ク用ヒザル字ナレバ、轉寫スル時ニ誤リシモノナルベシ、按ズルニ禮記儒行篇ノ正義ニ、十黍爲レ參、十參爲レ銖トアルモ、絫字ヲ譌シナリ、又宋ノ沈括ガ夢溪筆談ニ「今蜀部亦以ニ十參一爲ニ一銖、參乃古之絫字」ト云ヘリ、是モ「以ニ十絫一爲ニ一銖、絫乃古累字」トアリシヲ寫シ誤リタルナラン、說文「二絫ハ垺也」トモ、十黍重也トモ注シ、槩ハ「綴テ得レ理也」トモ「大索

也（即繰纍ノ字ナリ）トモ注シテ別字ナルヲ、後世ハ纍ヲ借リテ、增纍ノ字トシ（省テ累ニ作ル）十黍ノ重サヲノミ絫ト云ヒシ故ニ絫乃古之累字ト云ヘルナルベシ】今稱ルニ開元錢ハ重一匁、乾封錢ハ重一匁餘、最重キハ一匁一分ニ餘ル者アリ【匁ハ泉字ノ草書ナリ、錢泉字通用スル故ニ、權衡ノ名ノ錢ヲ俗多ク匁ニ作ル、今是ニ從ヒタルハ錢貨ノ字ニ分タン爲ナリ】二銖四絫ヲ一匁トスレバ、二銖六絫ハ一匁〇八釐三豪二絲五忽ナリ、然ラバ今傳ハル乾封錢ハ後鑄薄小ニナリシモノニ非ズ【舊唐書ニ、「乾封元年封スル岳チ之後、改造テル新錢チ、文曰乾封泉寶ト、仍與舊錢並行、新錢一文當舊錢之十ニ、初開元錢俗謂之開通元寶ニ及鑄新錢乃同流俗ニ、乾字在上、封字在左、尋デ寤錢文之誤チ、又緣テ改鑄商賈不通米帛增シカバ價乃議ソ却用舊錢チ」ト云ヘリ、舊錢トハ開元錢ヲ云フ、按ズルニ錢文ノ誤ノミナラバ、封字ヲ下ニ置キ、泉字ヲ左ニ置テ、鑄改メテアルベキニ、商賈通ゼズ、米帛價ヲ增シタリシハ、二銖六絫ノ錢ヲ二銖四絫ノ錢ノ十ニ當テヽ通用セシニヨリ、民ノ肯ハザリシナレバ、此錢ヲバ止メテモトノ開元錢ヲノミ用ヒシナリ、是ニテモ乾封錢ノ大ナラザリシヲ知ルベシ】モシ一匁一分許ノ錢ヲ徑一寸ニ作ラバ、至テ薄ケレバ決シテ然ルニハアラズ【乾元當十錢ハ、徑一寸（大尺）重五銖ナリ】疑フラクハ劉昫等乾元當十錢ノ徑一寸ナルヲ以テ【乾元當十錢ハ乾封錢ノ通用セザリシニヨリテ民ノ肯フベク重大ニハ作リシナルベシ】乾封錢モ當十ナレバ同ジ大サナラント思ヒテ、推アテニ一寸トハ書シナルベシ【史ヲ修ルハ其事洪蘗ナレバ、日睫ノ間ノ事ヲ忘レタルモ多キモノナリ】サレバ此乾封

錢ノ徑ヲ一寸ト云ヒシハ、尺度ノ證トハナシ難シ

本朝量攷

狩谷望之著

皇國ニテ量ヲ用ヒシコト、古ニ見ユルコト無シ、日本紀ノ顯宗天皇ノ二年ノ末ニ「是時天下安平、民無徭役、歳比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛馬被野、」トアレドモ、紀ノ傍訓ニ斛ヲヒトサカト訓メリ、拾遺和歌集ニ、行基僧正ノ歌トテ、「百サカニ八十サカソヘテ賜ヘリシ乳房ノ報今日ゾ我ガスル」トアル百サカ八十サカモ、百八十斛ニテ、心地觀經ニ、「幼稚之前所飲母乳百八十石、」トアルヲ云ヘルナリ、（今本ニ百クサニ八十クサ添ヘテトアルハ誤ナリ、寶物集ニ此歌ヲ載セテ百サカニ八十サカトアルニ從フベシ）朝野群載ニ載セタル百度文外記廳申文等ニ、米三坂四坂、マタ百坂四十坂、百坂五十坂トアルモ、坂字ノ訓ヲ借リテ斛トシタルニテ、百坂四十坂ハ百四十斛、百坂五十坂ハ百五十斛ナリ、後世ノ語勢ニテハ、百サカ餘リ四十坂ナドイフベキヲ、古ハ百サカ四十サカトヤウニ云ヘリ、譬ヘバ十幾日廿幾日ヲ、今ハ十日餘リ幾日、廿日餘リ幾日ト云ヘドモ、榮花物語駒競ノ卷ニ、善滋爲政ノ行幸高陽院應製和歌序ヲ載セタルニ、長月ノトヲカヤウカト云ヒ、源順集ノ庚申夜奉和歌小序ニ、ハツカナヌカノ夜庚申ニ當レリト云ヒシ、皆是ト同ジ格ナリ、本居氏ノ玉勝間ニ爲政ノ序ニ、トヲカアマリヤウカト云フベキヲ省キテ云ヘルハ、イカガナリト云ヒ

シハ、此頃ノ書ザマヲ考ヘザリシナリ、按ズルニ斛ヲサカト云ヒシハ、斛ヲ石トモ云フニヨリテ、石字ノ音ヲモテサカト云ヒシニテ、度ノ尺ヲサカト云ヒシト同ジケレバ、古訓ニアラズ】此頃イマダ西土ノ制度ヲ用ヒザリシ時ナレバ【顯宗天皇ノ二年ハ、南齊ノ武帝ノ永明四年、北魏ノ孝文帝ノ大和十年ニ當レリ】史ヲ修リシ人其御代ノ豐穰ナリシヲ云ハントテ、漢文モテ潤色セシナルベケレバ、證トナシ難シ、【按ズルニ後漢書明帝紀十二年ノ末ニ、是歲天下安平、人無徭役、歲比登稔、百姓殷富、粟斛三十、牛羊被野、」トアリ、日本紀ノ文ハ是ヲ採リテ、少シ變ヘタルモノナリ、又按ズルニ此頃銀錢ヲ用ヒシコト佗ニ見エズ、天武天皇十二年四月紀ニ、「壬申詔曰、自今以後必用銅錢、莫用銀錢、乙亥詔曰、用銀錢莫止、」トアレドモ、是ハ同ジ三年ノ紀ニ、「對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國即貢上、」ト云ヒ、「凡銀有倭國初出于此時」ト云ヒタレバ、天武紀ノ銀錢ハ對馬ヨリ銀ノ出シ後ノ事ナリ、然ラバ天武紀ニモ銀錢アリ、又和銅元年ニモ銀錢ヲ鑄タリシ故(續日本紀ニ見ユ)古モ有リシモノト思ヒテ記シヽナラン、其實ハ顯宗天皇ノ御代ニ、銀錢ヲ用ヒシ事ハ無カリシナリ、是ニテ此紀ニ斛トアルモ證トナシ難キヲ知ルベシ】又欽明天皇ノ十二年ニ、麥種千斛ヲ百濟王ニ賜ヒシコト見エタレバ【梁ノ簡文帝ノ大寶二年、西魏ノ文帝ノ大統十七年、北齊ノ文宣帝ノ天保二年ニ當レリ】此頃既ニ量ヲ用ヒラレシカトモ思ヘドモイカヾアラン疑ハシ、扶桑略記ト一代要記トニハ、「舒明天皇十二年、定斗升斤兩、」ト云ヘリ、其據リドコロオボツカナケレドモ、推古天皇ノ御時始テ御使ヲ隋ニ遣ハサレショ

リ、相繼ギテ此御代ニモ唐ノ往來有リシカバ【日本紀ニ「推古天皇十五年七月庚戌、大禮小野臣妹子遣於大唐、十六年四月、小野臣妹子至自大唐、即大唐使人裴世清下客十二人、從妹子臣至於筑紫、八月癸卯、唐客入京、壬子召唐客於朝廷、令奏使旨、九月辛巳、唐客裴世清罷歸、則復以小野妹子臣為大使、副于唐客而遣之、是時遣於唐國學生倭漢直福因、奈良譯語惠明高向漢人玄理、新漢人大國學問新漢人日文南淵漢人清安志賀漢人惠隱漢人廣濟等並八人也、十七年九月小野臣妹子至自大唐、二十二年六月己卯遣犬上御田鍬、矢田部造(闕名)於大唐、二十三年七月、犬上君御田鍬矢田部造至自大唐、三十一年七月新羅遣大使智洗爾來朝、是時、大唐學問者僧惠濟、惠光、及醫惠日福因等、並從智洗爾等來之於是、惠日等共奏聞曰留于唐國學者、皆學以成業、應喚、且大唐國者法式備定珍國也、常須達、舒明天皇二年八月丁酉、以大仁犬上君三田耜大仁藥師惠日、遣於大唐、四年八月、大唐遣高表仁送三田耜、是時、學問僧靈雲僧旻、及勝鳥養新羅送使等從之、十二年十月乙亥大唐學問僧清安、學生高向漢人玄理傳新羅而至之」ト云ヘリ】西土ノ量法ヲ傳ヘラレシハ誠ニ此御時ニゾ有リツラン、然ラバ孝德天皇ノ大化二年ニ、一戶ヨリ庸米五斗ヲ出スコトヲ定メラレタルヲゾ【是モ日本紀ニ出ヅ、斗字ハコト傍訓セリ】量ノ史ニ見エタル始トハスベキ【其後天智天皇ノ元年ニ、百濟ノ鬼室福信ニ稻種三千斛ヲ賜ヒシコトモ、日本紀ニ見エタリ】推古天皇ノ御時ハ隋ヨリ唐初ニ當リ【推古天皇ノ十五年ハ隋ノ煬帝ノ大業三年

ニ當リ、十六年ハ大業四年ニ當リ、廿二年ハ大業十年ニ當リ、廿三年ハ大業十一年ニ當リ、卅一年ハ隋旣ニ亡ビテ唐ノ高祖ノ武德六年ニ當レリ】舒明天皇・孝德天皇ノ御時モ、唐ノ世ニ當レバ【舒明天皇ノ二年ハ唐ノ太宗ノ貞觀四年ニ當リ、四年ハ貞觀六年ニ當リ、十二年ハ貞觀十四年ニ當リ、孝德天皇ノ大化二年ハ貞觀二十年ニ當レリ】唐ノ量ニ依ラレシナラン【サレドモ全ク同ジカラザリシコト下ニ辨ズ】

唐ノ量ヲ考ルニ、六典ノ金部ノ職掌ニ、「凡量以ニ秬黍中者容ニ一千二百ヲ爲レ龠、二龠爲レ合、十合爲レ升、十升爲レ斗、三斗爲ニ大斗一斗、十斗爲レ斛、」トアリ【通典賦稅部舊唐書同ジ、タヾ舊唐書ニ龠ヲ籥ニ作ル、說文ニ龠ハ樂之竹管ト注シ、籥ハ書僮竹笘也ト注シテ、二字同ジカラズ、然ルヲ唐書ニ籥ニ作リシハ、龠ハ竹ニテ作リタルモノ故ニ、俗ニ竹冠ヲ加ヘシヨリ、書僮竹笘ノ字ト混ジタルナリ、諸ノ俗字、偏傍ヲ增シ、或ハ偏傍ヲ變ジテ佗字ト混ズル者多シ、經典管龠ノ字、皆籥ニ作リタレドモ、其實ハ非ナリ、按ズルニ漢書律曆志ニ、量者龠合升斗斛也、所ニ以量ニ多少ヲ也、本起ニ黃鐘之龠ヲ、用ニ度數ヲ審ニ其容ヲ、以ニ子穀秬黍中者千二百ヲ實ニ其龠ヲ、以ニ井水ヲ準ニ其槩ヲ、合レ龠爲レ合、十合爲レ升、十升爲レ斗、十斗爲レ斛、而五量嘉矣」トアリ、唐令ハ是ニ本ヅキシモノナリ、唐ノ小量ハ隋量ヲ承ケタルナレバ、漢書ニ比ブレバ少シク同ジカラザレドモ、漢以來受來リシ量ナレバ、漢書ノ文ヲ引キタルナリ】「容ニ一千二百ヲ爲レ龠」ト云フハ、龠ハ本黃鐘管ヲ云フ【說文ニ龠樂之竹管トアル、是ナリ】其管ニ秬黍千二百粒ヲ容ルヲ以テ、秬黍千二百粒ヲ容ル量ヲ即龠ト名ヅケシナリ【龠ノ事附錄ニ詳ニス】龠ノ積八百一

十分ナリ【上下四旁均ク、一分ノモノ八百一十箇ヲ容ルヲ云フ】二龠ヲ合トス、其積一千六百二十分、十合ヲ升トス、其積一萬六千二百分、十升ヲ斗トス、其積一百六十二寸【十六萬二千分ヲ容ルナリ、積ハ一千分ヲ一寸トス、上下四旁均ク一分ノモノ一千ヲ累ヌレバ、上下四旁均ク一寸ナレバナリ、故ニ是ヲ一百六十二寸ト云フ】十斗ヲ斛トス、其積一千六百二十寸ナリ【龠合升斗斛ノ積數、王莽ガ嘉量ノ銘ニ出ヅ(圖モ銘名モ附錄ニ載ス)是漢ノ斛法ニテ、唐ニテモ此法ニ據リシナリ】此一千六百二十寸ヲ容ル斛ヲ作ルニハ、方一尺、深一尺六寸二分ナリ、是ヲ唐ノ小尺ニテ作リ、曲尺ニテ度レバ方八寸〇八釐三豪三絲三忽不盡、深一尺三寸〇九釐五豪ナリ、此容受ヲ算スルニ、面冪曲尺六十五寸三十四分〇二釐七十七豪七十七絲七十七忽不盡【方面八寸〇八釐三豪三絲三忽不盡ヲ自乘シテ是ヲ得、九章算術方田ノ術ニ「廣從步數相乘得積步」注ニ「此積謂田冪、凡廣從相乘謂之冪」ト云ヘリ、廣ノ數ト從ノ數ト同ジカラザレバ、何レニテモ一ヲ實トシ一ヲ法トシテ乘ズレバ冪ノ數ヲ得、又廣從トモニ同ジ數ナレバ自乘シテ冪ノ數ヲ得ルナリ、孫子算經ノ棊局五曹算經夏侯陽算經方田ノ術モ皆是ト同ジ、面冪ハ百分ヲ一寸トス、面冪トハ上下四旁均ク一分ノ物ヲ其計ルベキ器ノ面ニ一通並ベタルヲ云フ、又平積トモ名ヅク冪字本ノ冖ニ作ル、說文ニ覆也ト注ス、方一分ノ物ヲ器ノ面ニ一通リ並ベタルハ物ニテ器ヲ覆ヒタルガ如クナレバ、面冖ト云フ、然ルニ其字畫少クシテ書難キヲ以テ、冪字ヲ借用フ、古音同ジケレバナリ、王莽ガ嘉量ノ銘ニ、冪何寸何分トアルハ是ナルヲ、西淸古鑑ニ寛ト釋シタルハ誤ナ

リ、後ニ巾ニ從ヒテ幎ニ作ル說文ニ「幎幔也、周禮有ニ幎人一」ト云ヘル是ナリ、今本ノ周禮ニハ、冪人ニ作ル、注ニ「以レ巾覆レ物曰レ冪」トアリ、算家ニモ此字ヲ用フ、然レバ冖ハ正字、冥ハ假借字、幎ハ今字ニテ冪ハ幎ノ異文ナリ、或ハ羃冪ナド作ルハ譌ナリ】積八百五十五寸六百三十〇分五百三十七釐七豪五百豪面冪ヲ置キ深サヲ乘ジテ是ヲ得、九章算術商功ノ方堡壔ヲ計ル術ニ、「方自乘以レ高乘レ之即積尺」ト云ヒシ是ナリ、孫子五曹夏侯陽ノ方窖ノ術是ト同ジ、積又體積トモ云フ、體積ハ千寸ヲ一寸トシテ、平積ノ百分ヲ寸トスルトハ同ジカラザルコト、既ニ上文ニ云ヘリ】此積ヲ今斛法六千四百五十五寸【徑四寸九分、深二寸七分ヲ升トス、所謂京升ナリ、此積ノ事下文ニ詳ニス】ニテ除スレバ、一三二五五三二有奇ヲ得、是ニテ量ヲ起セバ

斛　今一斗三升二合五勺五撮餘

斗　今一升三合二勺五撮餘

升　今一合三勺二撮餘

合　今一勺三撮餘

龠　今六撮餘【舊唐書食貨志ニ「量制公私不レ用レ龠、合內之分、則有ニ抄撮之細一」ト云ヘリ、然ラバ漢書ニヨリテ龠ヲ云ヒタレドモ、其實ハ龠ヲバ用ヒズシテ、合ヨリ內ヲバ勺撮抄ナド、量リシナリ、孫子算經・夏侯陽算經ニ、「十圭爲レ撮、十撮爲レ抄、十抄爲レ勺、十勺爲レ合、」トア

ルモノ是ナリ、隋書律暦志ニ孫子算術ヲ引キタルニハ、「十圭爲レ抄十抄、爲レ撮、十撮爲レ勺、十勺爲レ合、」トアリ、梁ノ陶弘景モ「十撮爲ニ一勺一、十勺爲ニ一合一、」ト云ヒシコト、證類本草序例ニ見ユ、皇國ニテモ、一勺ヲ十分シタルヲ一撮ト云フ、延喜式ニ何合何勺何撮ト量リ、拾芥抄ニモ、「十撮爲レ勺、十勺爲レ合、」ト云ヘリ、然ラバ孫子算經・夏侯陽算經等ノ今本ハ、誤リタルニヤ、又今本千金方ニ、陶弘景ガ言ヲ載セテ「兩勺爲レ合」トアルハ、漢書ニ「兩龠爲レ合」ト云ヒシヲ誤リ混ジタルナリ、古本ニハ「十勺爲ニ一合一」トアルコト、本草序例ニ載セタルト同ジ、按ズルニ今俗、撮ヲ才ニ作リテ、音哉ト云フ、是ハ古俗撮ヲ省キテ才ト書キシヲ、撮ト才ト音ノ近ケレバ、才字ヲ假借シタル者ト思ヒ誤リシナラン、撮ヲ省キテ才ニ作リシハ、有職家ニ權官ノ權字ヲ省テ才ニ作リ（唐俗書權字從レ手作レ㩲）算術家ニ冪字ヲ省キ巾ニ作ルガ如シ、常用ノ字ナル故省テ簡易ニ從ヒシモノナリ、埃嚢抄ニモ十撮ヲ一勺トシテ、撮ト云フヲ作（ツヽリ）ヲ略シテ、篇計ヲ用フル歟、抄物ニ或ハ作ヲ書キ、或ハ篇ヲ用ルコト常ノ習也トアリ【作トハ字ノ右旁ヲ云ヒ、篇トハ字ノ左旁ヲ云フ俗語ナリ】

コレ小量ニテ、唐ノ貞觀中、張文收ガ作リシ斛銘ニ、「依ニ新令一累黍尺一定レ律、按レ龠、成ニ茲嘉量一、」ト云、【全文度攷ニ引リ】「四分律行事抄ニ「唐朝文軌無レ二、至レ論レ用レ尺、五種不レ同、必以ニ姫周古尺一以定ニ官私衡量一、無ニ事不一レ平、」ト云ヒシハ、此量ニテ【五種尺ノ事、度攷附錄ニ詳ニス、此ニ云フ姫周古尺

ト、ハ、唐小尺ヲ云ヘルナリ】湯藥ヲ合スルニハ是ヲ用ヒタリ【湯藥ヲ合スルニハ、小量ヲ用フルコト、六典ニ見ユ、度攷ニ引リ】又宋ノ林億ガ校二正千金方一凡例ニ、「今之此書當下用二三兩爲二一兩、三升爲二一升一之制上、世之妄者乃謂古今之人大小有レ異、所下以古人服二藥劑一多上、無稽之言莫二此爲一レ甚、今之用レ藥定以二三兩一爲二今一兩、三升爲二今一升一」ト云ヒシハ、千金方ノ量ハ小量ニテ宋ノ常用量ハ大量ナレバ【千金方ニ三升トアルハ、宋ノ一升ナルヲ云ヘルナリ】大量ハ是ヲ三倍シタレバ【三斗ヲ大一斗トスルコト、唐令ノ文上ニ引リ】

斛【積　唐小尺四千八百六十寸】　今三斗九升七合六勺六撮弱

斗【積　唐小尺四百八十六寸】　今三升九合七勺六撮餘

升【積　唐小尺四十八寸六百分】　今三合九勺七撮餘

合【積　唐小尺四千八百六十分】　今四勺弱

房玄齡ガ管子注【國蓄篇】ニ「古之石、準二今之三斗三升三合一」ト云ヒ、四分律行事抄ニ、「唐朝雜令用二姫周三斗一、爲二一斗一、今此俗中例用二唐斗一」ト云ヒシモ、是ニテ【古ト云ヒ姫周斗ト云ヒシハ小量ニテ、今ト云ヒ唐斗ト云ヒシハ大量ナリ】湯藥ヲ合スル外ハ、悉ク此大量ヲ用ヒシナリ

或人難ジテ曰、唐ノ王孝通ガ緝古算經ニ、斛法二尺五寸ト云ヒ、【二尺五寸ハ一升ノ積ニテ、一斛ノ積ハ二千五百寸ナリ】元ノ朱世傑ガ算學啓蒙ニ、元ノ斛法ノ二尺五寸ナルヲ「依二唐時斛法一」ト云ヒ、

又明ノ斛法モ二尺五寸ナルヲ律學新說ニ與ニ唐制ニ大同小異ト云ヘリ、【元明ノ斛法ノ事ハ附錄ニ詳ニス】然ラバ一千六百二十寸ハ漢ノ代ノ法ニテ、唐ノ時ハ二尺五寸ノ法ヲ用ヒシナラン、然ルニ今一千六百二十寸ヲ以テ唐量ヲ起シタルハ如何、答、二尺五寸ノ斛法唐ノ時ニ用ヒシヲ聞カズ、王孝通ハ舊唐書【律曆志】ニ「武德九年五月二日、校曆人算學博士臣王孝通」トアル人ナラン、武德ハ唐ノ初ナレバ、是人始ハ佗國ノ人ニテ、後ニ唐ニ入リシ人ナルベシ、按ズルニ隋書【律曆志】ニ「齊以ニ古斗一斗五升ニ爲ニ一斗ニ」ト云ヘリ、【齊ハ北齊ナリ、隋書ノ今本ニ、「以ニ古升五升ニ爲ニ一斗ニ」トアルハ、誤ナルコト附錄ニ辨ズ】一千六百二十寸ノ古量ヲ以テ、二尺五寸ノ量ノ一斗ヲ量レバ、一斗五升四合三勺二撮有奇ナレバ、二尺五寸ト云ヒシハ北齊ノ斛法ニテ、「以ニ古斗一斗五升ニ爲ニ一斗ニ」ト云ヒシハ、大凡ニ計リタルモノナラン、然ラバ王孝通ハモト北齊ノ人ニテ、緝古算經ハイマダ北齊ニアリシ時作リシ書ナルベシ、朱世傑ガ元ノ斛法二尺五寸ナルヲ「依ニ唐時斛法ニ」ト云ヒシハ、北齊ノ二尺五寸ノ量、唐ノ時モ、北邊ニハ遺リテ蒙古ニ傳ハリ、元ノ時ニ至リテ世ニ普ク用ヒシヲ、唐ノ法ト云ヒ傳ヘタルカ、又ハ緝古算經ニ斛法二尺五寸トアルヲ見テ、王孝通ハ唐人ナレバ、元ノ斛法ハ唐ノ斛法ニ依リタルモノト思ヒシニモアルベシ、又明量ハ元量ヲ承ケタル故ニ、斛法二尺五寸ト云ヘリ、然ルニ其實ハ明ノ量地尺ノ二千九百四十寸ナレバ、【コノ事附錄ニ詳ニス】曲尺ニテハ三千七百五十五寸二百三十分有奇ナルヲ【明ノ量地尺ノ長サ、曲尺ノ一尺〇八分五釐ヲ、再自乘シ、又斛法二千九百四

十寸ヲ乘ズレバ此數ヲ得】律學新説ニ、「今校二鐵斛一與二唐制一大同小異」ト云ヒタレドモ、唐ノ大量ノ一斛ノ積ハ唐小尺ノ四千八百六十寸ナレバ、曲尺ニテハ二千五百六十六寸八百九十三分弱ナリ【唐ノ小尺ノ長サ曲尺ノ八寸〇八釐三三不盡ヲ再自乘シ、又大量ノ斛法四千八百六十寸ヲ乘ズレバ此數ヲ得】然レバ明ノ一石ハ唐ノ一斛四斗六升二合九勺四撮餘ナルヲ、大同小異ト云ヒシモ、朱-載-堉ガ妄説ナリ【唐ノ時ノ食料ハ日ニ二升ナルニ、此事下ニ詳ニス】明會典ニ食料ノ少キモノヲ云ヒタルニハ「監生醫生無二家力一者月給三斗」トアレバ、日ニ一升ナリ、是ニテモ唐ト明ト量ノ容受同ジカラザリシヲ知ルベシ】唐ノ量ハ秬黍ヨリ起ルト云ヒシコト、又其本漢書ニ據リタルコト皆上ニ云ヘリ、【唐ノ量ハ隋ノ量ヲ受ケタルニテ、其法鐵尺ト漢ノ斛法トニ依リタルモノナレドモ、唐人ハ鐵尺ヲ即漢尺トセシニヨリ、尺ト斛法ト漢ニ同ジカランニハ、即漢書ノ黍量ナリトシテ、秬黍ヨリ起シヽ趣ニハ記シタルナルベシ】秬黍ヨリ起シヽ説ニ從ヒタランニハ、必漢ノ一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒシ事疑無シ、又唐ノ時算法ヲ學ブニ用ヒタル九章・孫子・五曹・夏侯陽・張丘建等ノ算經、皆一千六百二十寸ヲ斛法トシタリ、【唐ノ時、是等ノ算經ヲ學ビシコト六典算學博士禮部尚書侍郎考功員外郎ノ職、新唐書選擧志等ニ見ユ】モシ唐ノ時二尺五寸ノ法ヲ用ヒタランニハ、李-淳-風、劉孝孫等此書トモヲ注釋スル時、【九章算術・孫子算經・五曹算經ノ首ニハ「李淳風等奉レ勅注釋」ト題シ、張丘建算經ノ首ニハ「李淳風等奉レ勅注釋、劉孝孫撰細草」ト題セリ、又唐會要ニ、「永隆元年十二月、太史李淳風進ニ注

釋五曹孫子等十部算經分爲二十卷一」トモ云ヘリ】イカデカ今ノ斛法ハ二尺五寸ト云フコトヲ云ハザルベキ、又宋量ハ唐量ニ沿リタルニ、【此事附錄ニ詳ニス】宋史【律曆志】ニ景祐四年ニ、范鎭ガ上言セシヲ載セタルニモ、今斛方尺、深一尺六寸二分トアレバ、宋ニテモ一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒタルニテ【一千六百二十寸ハ小量ノ斛ナリ、宋ニテハ大量ヲ用ヒタレバ、斛法ハ四千八百六十寸(小尺)ナレドモ、大量ハ小量ヲ三倍シタルモノニテ、其原ハ一千六百二十寸ヨリ定メタレバ、范鎭モカクハ云ヘリシナリ、今試ニ宋量ヲ一千六百二十寸ヲ三倍シテ、四千八百六十寸トシテ、宋人ノ漢量ヲ校ベシヲ考ルニ、皆今ノ一升一合前後ヲ斗トスルコト(附錄ニ詳ニス)略王莽ガ銅斛ト同ジク、淸人ノ考ヘシ漢量トモ合ヘバ、宋人モ一千六百二十寸三倍ノ量法用ヒシコト明ケシ】唐ノ時二尺五寸ノ斛法ヲ用ヒザリシコト證スベシ、【按ズルニ二尺五寸ハ、モシ唐大尺ヲ以テ唐大量ヲ計リシカトモ思ハルヽニヨリ、唐小尺一千六百二十寸、三倍ノ量ヲ大尺ニテ度レバ、小尺(大尺ノ八寸三分三釐三毫三絲三忽不盡)ヲ再自乘シテ大尺ノ六百九十四寸四百四十四分不盡ヲ得、又大量ノ斛法ヲ乘ズレバ、大尺ノ積三千三百七十五寸ニテ、大量ノ一升ハ大尺ノ三十三寸七百五十分ナレバ、二尺五寸ハ大寸ニテ大量ヲ計リシニモアラズ】

本朝雜令ニハ「量十合爲ㇾ升【本注】三升爲ニ大升一升ㇳ】十升爲ㇾ斗、十斗爲ㇾ斛」トアリ、義解ニ「謂以ㇾ秬黍中者容ㇾ一千二百ㇾ爲ㇾ籥、十籥爲ㇾ合也」ト云ヘリ、唐雜令ニ「量以ㇾ北方秬黍中者容ㇾ一千二百ㇾ爲ㇾ鑰」、【按ズルニ鑰モ龠ノ俗字ナリ、銅龠ナドノ有リシ故、金ニハ從ヒシナルベシ、又𨷲ノ字ヲモ俗

ニ鑰ニ作ル、闔ハ門下牡ニテ、金ニテ作ルモノナレバ、金ニ從ヒシナリ、遂ニ二字混ジテ別ツコト無シ】「十鑰爲㆑合、十合爲㆑升、十升爲㆑斗、三斗爲㆓大斗㆒、十斗爲㆑斛」、トアルニ因リ給ヒシナリ【唐令ノ文唐律疏議ニ引リ、南部新書ニ、開元令ヲ引キタルモ、其文同ジ、タヾ鑰ヲ籥ニ作リ、斗ヲ㪷ニ作リタリ、籥字ノコトハ上ニ云ヘリ、斗ヲ㪷ニ作リシハ、斗升ノ字形似テ紛レ易キ故ニ、斗ニ其音ノ豆字ヲ加ヘテ升字ニ別チシナリ、升ヲ佗書ニ或ハ勝ト書キタルモ、斗字ニ混ゼザラシメントテナリ、員數ノ字ヲ大字ニ書クト同ジ意ナリ、大字トハ壹貳參肆伍陸漆捌玖拾等ノ字ヲ云フ】唐令ニ「十鑰爲㆑合」ト云ヒシハ誤ニテ、六典通典【賦稅部】舊唐書等ニ、「二龠爲㆑合」トアルヲ正シトスベシ、【漢書ニ「合㆑龠爲㆑合」トアリテ、龠ヲ二ツ合セタル故ニ、其量ヲ合ト名ヅケシナリ、又王莽ガ嘉量ノ龠モ合モ徑ハ同ジクテ、龠ハ「深五分、積八百一十分、容祁如㆓黃鐘㆒」ト云ヒ、合ハ深一寸積千六百廿分容㆓二龠㆒、ト云ヒシニテ、合ハ二龠ナルコト疑無シ、故ニ算經トモニモ、斛法ヲ一千六百二十寸トモ、一尺六寸二分トモ云ヘリ、モシ十龠ヲ合トスレバ、斛ハ八千一百寸ナルニ、唐人然量リシコトアルコト無シ、但夏侯陽算經・尙書（舜典）正義・通典（權量條）ナドニ、漢書ヲ引キタルニモ、「十龠爲㆑合」トアレバ、唐宋ノ人ノ見タル漢書ニ、十龠ニ作リシ本モアリシナリ、唐令ハ偶ソレニ依リテ十龠トハ書シナルベシ、予ガ藏スル宋ノ元慶二年ニ刻セシ漢書ニモ、呂祖謙ガ十七史詳節ニ引シ漢書ニモ、十龠トアリ、是等ノ本ノ孫嗣ナラン、宋ノ阮逸胡瑗ガ皇祐新樂圖記ニ、天聖令ノ文ヲ載セテ、其下ニ「今令文誤作㆓十龠爲㆒㆑合」ト云ヒ

タレバ、宋令モ唐令ノ誤ヲ承シト見エタリ、又宋ノ宋祁ガ漢書ノ校書ニ、「合レ龠當レ作二十龠一」ト云ヒ、宋會要ニ景祐二年李照ガ權量律度式ヲ上リシコトヲ載セテ、「漢志合レ龠爲レ合、照誤云二十龠一、識者譏レ之」、ト玉海ニ見エタレバ、宋ニテ誤リシ人モ有リシナリ、升斗斛皆十ヲ積テ數ヲ爲セバ、思ヒ誤リテ十龠ヲ合トシタルナルベシ、清ノ王鳴盛ガ尙書後案ニモ、正義ニ十龠ト引キタル誤ヲ辨ジテ、「漢書合レ龠爲レ合、疏作二十龠爲一レ合誤矣」ト云ヒ、マタ「合レ龠當二即兩龠一、若十龠爲レ合、則一合乃有二黍一萬二千一、一升有二一百二十萬一」（一升ハ一斗ノ譌ナリ）毋二乃太多一、且一龠容二千二百黍一、重十二銖、兩龠爲レ兩、則二十四銖也、十六兩爲二一斤一、若十龠爲レ合、則一合乃有二五兩一、一升有二五十兩一、重三斤零二兩、亦覺二太重一、即以二今市中所一レ用量按レ之、米一升僅得二一斤零三兩一、稻米與レ黍其性輕重未レ詳、然今之量自當下大二于古一二三倍上、若古黍一升重三斤零二兩、則古之量反大二于今一、甚遠、必無二此事一」ト云ヘリ、清ノ量ヲ漢ノ量ノ二三倍ト云ヒシコト、又清ノ稱ト漢ノ稱ト同ジカラザルヲ考ヘザリシハ、共ニ誤リタレドモ、十龠ヲ誤トセシハ是ナリ、又按ズルニ說苑、玉燭寶典ニモ、「十龠爲レ合」トアレバ、此誤モ古キコトト見エタリ】然ルニ本朝ニテハ唐令ニ十龠トアルヲ受テ、實ニ十龠ヲ合ト定メ給ヒシナリ、【舒明天皇ノ御時ニ定メ給ヒシ量モ十龠ノ合ニゾアリツラン、モシ二龠ノ合ヲ用ヒラレタランニハ、大寶ノ時御テ誤ナル十龠ノ合ニ定メラルベキニアラズ】是ニヨリテ本朝ノ量ヲ起セバ

斛【積小尺八千一百寸】今六斗六升二合七勺六撮餘

斗【積小尺八百一十寸】今六升六合二勺七撮餘

升【積小尺八十一寸】今六合六勺三撮弱

合【積小尺八寸一百分】今六勺六撮强

龠【積小尺八百一十分】今六撮餘【倭名類聚抄稱量具ニ龠ヲ載セタレドモ、本朝令ニ合升斗斛ヲ擧ゲテ龠ヲバ載セズ、義解ニ龠ノ事ヲ云ヒタルハ、唐令ニヨリテ、合ノ容受ヲ示シタルニテ、此量アリシニハアラズ、延喜式ニモ何合何勺何撮トアリテ、龠ヲ以テ量リシモノ無シ、龠ハ唐ニテスラ用ヒザリシカバ、マシテ本朝ニテハ用ヒザリシナリ】

是小量ニテ大量ハ是ヲ三倍シタルモノナリ

斛【積小尺二萬四千三百寸】今一石九斗八升八合三勺弱

斗【積小尺二千四百三十寸】今一斗九升八合八勺三撮弱

升【積小尺二百四十三寸】今一升九合八勺八撮强

合【積小尺二十四寸三百分】今一合九勺九撮弱

是大量ナリ、雜令ニ、「凡度レ地量ニ銀銅穀ニ者皆用レ大、此外官私悉用ニ小者一」ト云ヒシハ、此大小量ヲ云ヘルナリ、【銀銅ハ大稱ニテ稱リ、穀ハ大量ニテ量ルヲ云フ、「稱ニ銀銅一量レ穀」ト云フベキヲ、「量ニ銀銅穀二」ト書シハ文ヲ省キシナリ】

或人難ジテ曰、唐ニテ令ニハ十龠ヲ云ヒタレドモ、其實ハ二龠ヲ用ヒタルヲ見レバ、本朝ニテモ義解ニハ十龠トアレドモ、實ハ二龠ヲ用ヒタルモ知ルベカラズ、モシ令ノ正文ニ、十龠ト云ハザレバ、十龠ヲ用ヒシトハ定メ難キニ似タリ、然ルヲ本朝ノ小量ヲ十龠大量ヲ三十龠ト定メシハ如何、答、雜令ニ穀ヲバ大量ニテ量ルト云ヘリ【全文上ニ引リ】二龠ヲ合トスレバ、大量ハ六龠ナリ、六龠ノ斛法ハ四百八十六寸【唐大量ノ條ニ詳ニス】又十龠ヲ合トスレバ、大量ハ三十龠ナリ、三十龠ノ斛法ハ二千四百三十寸ナリ、モシ二龠ヲ小量トシタランニ、穀ヲ量ルニハ六龠大量ノ斛法四百八十六寸ヲ用フベシ、然ルニ撰定交替式ニ、「天平六年、七道撿税算計法、東海道以㆓二千七百寸㆒爲㆓斛法㆒、東山道以㆓二千八百寸㆒爲㆓斛法㆒、北陸道以㆓二千八百寸㆒爲㆓斛法㆒、山陰道以㆓三千二百寸㆒爲㆓斛法㆒、山陽道以㆓二千七百寸㆒爲㆓斛法㆒、西海道以㆓三千二百寸㆒爲㆓斛法㆒、南海道以㆓二千八百寸㆒爲㆓斛法㆒」ト云ヘリ、皇國ノ小量ハ十龠、大量ハ三十龠ナレバ、斛法二千四百三十寸ナルニヨリ、七道行程ノ遠近山川ノ險易ニ從ヒ、各道租税ノ斛法ヲ增シ、或ハ二千七八百寸トシ【二千四百三十寸ノ斛法ニテ、二千七百寸ハ一斗一升一合一勺一撮一一不盡、二千八百寸ハ一斗一升五合二勺二撮餘ナリ】或ハ三千二百寸トシテ、【三千二百寸ハ一斗三升一合六勺八撮餘ナリ】收メシメシモノナルベシ、今世ノ租税モ假令バ一俵ヲ四斗ノ定メトスレバ、民ノ收ル所ハ四斗三五升ヲ以テ俵トスルガ如シ、其增ス數ハ國國ニヨリテ同ジカラザレドモ、必四斗ヨリハ多キナリ、然ラバ天平七道ノ斛法ハ租税ノ斛法ニテ、

常用量ノ斛法ニハアラザレドモ、古昔穀ヲ量ルニハ、二千四百三十寸ヲ斛法トスル三十龠ノ大量ヲ用ヒシヲ證スベシ、交替式ニ、「又寶龜七年畿内幷七道撿稅使算計法、委穀、經十年以上者、以二千七百寸爲斛法、糯幷新委不經年者、以二千八百寸爲斛法」ト云ヘリ、是ハ新穀古穀糯粟等、其物ノ精麤ニ依ラズ、斛ノ價ヲバ齊シクシテ量ル器ノ積寸ニ差等アラシメシモノナリ、九章算術【商功ノ條】ニ「程粟一斛、積二尺七寸、其米一斛、積一尺六寸五分寸之一、其菽荅麻麥一斛皆二尺四寸十分寸之三」、トアリテ、注ニ「此爲以精麤爲率而不等其槩也」ト云ヘル類ナリ、ソノ「委穀經十年以上者、以二千七百寸爲斛法、新委不經年者以二千八百寸爲斛法」ト云ヘルニテ是モ三十龠ノ大量二千四百三十寸ヨリ計リシニテ六龠大量ノ四百八十六寸ヨリ計リシニアラザルヲ知ルベシ、【九章ノ率ニ準ズレバ、米ノ斛法二千四百三十寸ナラバ、粟ハ四千〇五十寸ナリ、是ニテハ一斛ノ粟ニテ米六升ヲ得、粟二千九百寸ナラバ、米七斗一升九合七勺餘ヲ得ベシ、今試ムルニ一斛ノ粟ノ皮ヲ去レバ、多キハ米五斗ヲ得、少キハ四斗餘ヲ得ルナリ、然ラバ粟斛四千八百寸許ニ非レバ、二千四百三十寸ノ一斛ノ米ヲ得ベカラズ、若二百九十寸ノ粟ニテハ、米ヲ得ルコト六斗許ナレバ、寶龜ノ制ニ、粟穀二千九百寸ト云ヒシハ疑ハシ】是ニ據レバ、大寶ノ時ハ十龠ヲ小量トシ三十龠ヲ大量トセラレシコト明ナリ

或人又難ジテ曰、令ノ制三十龠ヲ用ヒシコトハ令ヲ聞リ、然ルニ延喜ノ雜式ニ、「凡公私運米五斗

爲レ俵、仍用ニ三俵ニ爲レ駄一ト云ヘリ、雜式ニマタ「度量權衡者官私悉用レ大、但測レ景合レ藥則用ニ小者ニ」ト云ヘバ、コノ五斗モ大量ニテ量リシコト知ルベシ、三十斛ヲ大量トスレバ五斗ハ今ノ九斗九升四合强ナレバ、俵トスルモ人力擧ルコト能ハズ、三俵ニテハ今ノ二石九斗八升二合餘、今ノ一升ヲ四百匁トシテ計レバ、其重サ百十九貫三百匁許ナレバ、駄トセンニ馬力堪フベカラズ、然ラバ運米ノ五斗ハ三十斛ノ量ニハアラデ六斛ノ大量ヲ用ヒシニハアラザルニヤ、答、和銅六年ニ度量權衡皆大ヲ用フベキ制ニ改ラレテヨリ、【此事詳ニ度攷ニ辨ゼリ】度衡ハ大ヲ用ヒタレドモ、本朝ノ大量ハ三十斛ナレバ、大ニ過ギテ不便ナリシニヨリ、市中ニ穀ヲ量ルニモ十斛ノ小量ヲノミ用ヒシナルベシ、【モシ大寶ノ小量二斛大量六斛ナランニハ大量ヲ用ヒテアルベキニ、大量ハ三十斛ナリシ故、大ニ過ギテ不便トハセシナリ】江談抄ニ、嵯峨天皇ノ御時ノ落書ニ市口月八三トアルハ上ヨリ下マデ竪畫ヲ通セバ、市中用ニ小斗一ト讀ムベキコトヲ載セタルナリ、是時官ニテハ大量ヲ用ヒ、民間ニテハ小量ヲ用ヒシカバ煩ハシキニヨリテ、上下通ジテ小量ヲ用ヒマホシキヲ諷シタルナラン、【按ズルニ事文類聚ニ李用晦ガ芝田錄ヲ引テ、「長慶中有レ人、雷震而死、背上粉書云、市中用ニ小斗一」ト云ヘリ、然ラバ此市中用小斗ノ落書アリシト云フハ、唐ノ故事ニ依リテ作リシ話ナルモ知ルベカラザレドモ、大斗ヲ便トセザリシコトノ有リシヨリ、カヽル事ヲ思ヒ寄リテ附會セシナルベシ】カク大量ヲ不便トセシカバ、後遂ニ官ニテモ十斛ノ小量ヲノミ用ヒラレ、【按ズルニ延曆二十三年ニ上リシ太

神宮儀式帳ニ載セタル食料米、既ニ十倫ノ量ニテ計リタリ、(下ニ詳ニス)然ラバ江談抄ニ嵯峨天皇ノ御時ト云ヒシハ傳聞ノ誤ニテ、十倫ノ量ヲ官ニテモ用ヒラレシハ、桓武天皇ノ御時カ、又ハソレヨリ前ノ事ナルベシ】延喜ノ時モソレニ沿ラレシナルベシ、十倫ノ量ニテ計レバ、五斗ハ今ノ三斗三升一合餘ニテ、今ノ俵ト略近ク、三俵ハ今ノ九斗九升四合餘、其重サ三十九貫七百匁餘ナレバ、佗ノ駄率トモ甚遠カラズ【駄率ノコトハ權衡攷ニ詳ニス】モシ唐量ト同ジク二倫ヲ小量トシ、六倫ヲ大量トシテ大量ノ五斗ヲ計レバ、今ノ一斗九升八合八勺餘ナリ、俵トセンニ甚少キニアラズヤ、其三俵ハ今ノ五斗九升六合餘ナリ、其重サ二十三貫八百匁餘ナリ、駄トセンニ甚輕キニアラズヤ、然ラバ式ニ運米ヲ計リシハ、十倫ヲ用ヒシニテ三十倫ニモアラズ、六倫ニモアラズ、又賦役令ニ載セタル調物ハ、小量小稱ニテ計リシヲ、式ニテハ度量衡皆大ヲ用フル定ナレバ、主計式ニ載セタル調物ノ斤兩ニテ稱リシ數ハ、概令ニ載セシ三ノ一ナルニ、【令ニ三十斤トアルハ、式ニハ十斤ト云ヘリ、令ノ斤ハ五十三匁三分三釐不盡ニテ、式ノ斤ハ百六十匁ナレバ、令ニ三十斤ト云フモ、式ニ十斤ト云フモ、其實ハ同ジク一貫六百匁ナリ】斗升ニテ計リシ物ハ、皆令ノ數ト同ジ、然ラバ主計式ニ載セタルモ、十倫ノ量ナルコト知ルベシ、又古ノ食料、日ニ八合ヲ以テ定トス、延曆ノ豐受大神宮儀式帳九月ノ例ニ、「賜ニ禰宜幷物忌一料稻、大物忌一人、御炊物忌一人、御鹽燒物忌一人、幷三人、起ニ正月一日一、盡ニ十二月卅日一、食料百七十四束七把」【本注】人別日一把六分】ト云ヒ、【百七十四束七把ヲ三人ニ分レ

バ、五十八束二把餘、コレヲ三百六十日ニ分レバ、一日ノ得ル所一把六分有奇ナリ、田令義解ニ「束稻舂得ニ五升一」トアルニヨリテ計レバ、一把六分ハ舂テ八合ヲ得ルナリ】貞觀儀式大嘗祭儀ノ食法ニ、「火長仕丁黒米八合、其從者行事五位已上三人、判官主典代二人、所々五位已上二人、人別白米八合、所々判官主典代一人、人別米八合」ト云ヒ、三代實錄元慶五年三月、出羽國司ノ上言ニ「兵士一千人每レ人充ニ日粮八合一」ト云ヒ、延喜式ニモ四時祭式ニ「白米三斗六升釀レ酒、女一人、驅使一人、十五日食料【三斗六升ヲ三人ニ分レバ、一斗二升ナリ、是ヲ十五日ニ分レバ毎日八合ナリ】大神宮式ニ物忌給ニ年中食料一日各八合【儀式帳ニ云ヒシハ此事ナリ】內匠式ニ、「苧割履女單世人食料、白米二斗四升、【本註】人別八合】玄蕃式ニ、「授戒使省寮官人食料、從六人、日各八合」、主稅式ニ「大原野社春日社、神殿守預從粮米、日八合、大炊式ニ、「鎭魂祭供奉諸司人別米八合、中宮鎭魂官人以下雜色以上料人別八合、宴會雜給四位五位并內命婦大歌別八合、每日料大舍人四人日各米八合、御火炬童四人料米日三升六合」【本註】一人一升二合、三人各八合】御厨子所膳部六人、日米四升八合【人別ニ八合ナリ】女孺四人日米三升二合、【人別ニ八合ナリ】候ニ同所一宮主日米八合、藥生日米八合、按書殿大舍人二人料一升六合、【是モ人別ニ八合ナリ】ナドアル是ナリ、【人ニヨリテ多ク給フヲバ計ヘズ、大炊式ニ內豎二百人、月料人別日米六合」トアルハ、內豎ハ兒童ナレバ、大人ノ食料トハ同ジカラズ、六典ニ「丁口日給ニ二升一中口一升五合、小口六合」トアルハ類ナリ、又主水式ニ、「凡運レ氷駄者

以二徭丁一充レ之、山城國葛野郡德岡氷室一丁輸二一駄一、愛宕郡小野栗栖野土坂賢木並二丁輸二一駄一、同郡石前一丁半輸二一駄一、大和國山邊郡都介六丁輸二一駄一、河内國讃良郡讃良四丁輸二一駄一、近江國志賀郡龍花【今本誤テ部花ニ作ル今考正ス】三丁輸二一駄一、丹波國桑田郡池邊五丁輸二一駄一、率レ駄丁給レ食一人、日米四合、鹽五撮」、ト見エタルハ葛野郡德岡ハ京近キ處ナレドモ、一丁一駄ヲ輸スト定メ、路程ニ準ジテ遠處ヲバ丁數ヲ增シタル故ニ、給ハル米ヲ一丁ニ四合トハ定メラレシナラン、譬ヘバ德岡ハ日ニ二駄ヲ運ブベケレバ、二丁ノ食米八合ヲ得、小野・栗栖野等ハ路稍遠クシテ、日ニ一駄ナラデハ運ビ難ケレバ、二丁ト定メテ是モ八合ヲ得ル類ナリ、主計式ニ、大和國ハ行程一日ナルニ六丁ト云ヒ、河内ノ國モ一日ナルニ、四丁ト云ヒ、近江國ハ上一日下半日ナルニ、三丁ト云ヒ、丹波國モ上一日下半日ナルニ、五丁ト云ヘリ、主計式ニ云ヒシハ、國府ヨリノ行程ニテ、主水式ニ載セタルハ、各國ノ氷室ヨリ計リシナルベケレバ、里數少シク異ナルコトモアルベシ、サレドモ同國ノコトナレバ、大ナル違ハアルベカラザレバ、此食料ハ常ノ食料トハ同ジカラザルナリ、又臨時祭式ニ「史生官掌神部粮米月別各白米一斗五升」、トアリ、是ニテハ日ニ五合充ナリ、五合ハ今ノ三合三勺一撮餘ナレバ、疑フラクハ一斗五升トアルハ、二斗五升ノ誤ナラン、二斗五升ヲ三十日ニ分レバ、日ニ八合三勺三撮不盡ナリ、又大神宮式ニ、「服部等造二一時神衣一」機殿祭ノ條ニ「神部二人料日米一升二合、」トアリ、是ニテハ日ニ六合充ナリ、是モ誤テ各字ヲ脱セシカ、又ハ二升二合トアリシヲ誤リタ

ルニモアルベシ】三十龠量ノ八合ハ今ノ一升五合九勺有奇ナレバ頗多ニ過ギ、六龠量ノ八合ハ今ノ三合一勺八撮强ニテ、一日ノ食ニ充ルニ足ラズ、十龠ノ八合ハ今ノ五合三勺有奇ニテ、今人ノ食料ト略同ジケレバ、是モ十龠ノ合ナルコト疑ヒ無シ、【按ズルニ唐宋ニハ六龠ヲ合トスル故ニ、日食二升ナリ、夏侯陽算經ニ「今有ニ兵若干人一給レ米二升一」ト云ヒ、六典膳部ノ「職掌凡親王以下常食料各有レ差」トアル注ニ、「毎レ日細白米二升」ト云ヒ、四品五品ノ注ト六品以下ノ注トニモ「毎レ日細米二升」ト云ヒ、都官ノ職掌ニハ「丁口日給ニ二升一」ト云ヒ、大倉ノ「職掌給ニ公糧一」トアル注ニモ「丁男給レ米二升」ト云ヒ、唐書食貨志ニ「少壯相均人食レ米二升」ト云ヒ、宋ノ沈括ガ夢溪筆談ニ軍糧ヲ運ブコトヲ云ヒシニ「米六斗人食日二升、二人食レ之十八日盡ル」ト云ヒ（十八日ハ十五日ノ誤ナルベシ）周密ガ癸辛雜識續集ノ杭城ノ食米ノコトヲ云ヘル條ニモ、「人以ニ二升一計レ之」ト云ヘルナド是ナリ、唐ノ二升ハ今ノ七合九勺五撮餘、宋ノ二升ハ七合六勺六撮餘ナリ、又唐ノ陸龜蒙ガ送ニ小雞山樵人一歌序ニ「余家大小之口二十、月費ニ米十斛一」ト云ヘリ、是ニテ一日ノ食ヲ計レバ、一升六合六勺六撮不盡ニシテ、今ノ六合六勺三撮弱ナリ、是ハ陸氏ガ家ノ食糧ヲ云ヒタルナレバ、官ヨリ給ハル粮料トハ同ジカラザルナラン、又宋ノ朱熹ガ繳下納南一康任一滿合ニ奏稟一事上狀ニ、「大人一斗五升、小兒七升五合、足レ爲ニ半月之糧一」トアリ、今計ルニ一日ノ食大人ハ一升、小兒ハ五合ニテ、一升ハ今ノ三合八勺三撮强、五合ハ今ノ一合九勺一撮餘ナリ、是ハ飢ヲ拯フコトヲ云ヒタルナレバ、常ノ食糧トハ同ジカラ

ザルナラン、本朝ニテハ十龠ヲ合トセシ故、唐ノ二升ノ法ニハ從ハズシテ八合ト定メシナルベシ】是等ニ依レバ延喜ノ時ニハ和銅ノ改制ニ從ヒテ、度ハ大尺ヲ常用トシ、稱モ大稱ヲ用ヒシカドモ、量ハ民ノ便トスルニ從ヒテ、穀ヲ量ルニモ十龠ノ小量ヲ用ヒシコト知ラレタリ、【穀ヲ量ルニスラ小量ヲ用ヒタレバ、其佗物ヲ量ルニ大量ヲ用ヒザリシコト知ルベシ】然ルニ延喜ノ頃ハ、既ニ久シク大度大稱ヲ常用トシタル代ナレバ、量ヲモ當時用フルハ、大量ゾト思ヒ誤リテ、和銅ノ制ノマヽニ「度量權衡官私悉用㆓大者㆒」トハ書レシナルベシ。【但民部式ノ貢蘇ノ條ニ、小升大升ヲ並ベ載セ、典藥式ニ蜜甘葛煎ヲバ小升ニテ量リ、朴消半夏附子麥門冬葵子山茱萸支子梔子大棗白粟黑大豆練胡麻鼓地黃煎乳等ノ藥物ヲバ大升ニテ量リタリ、小升ハ十龠ヲ合トセシ量ニテ、大升ハ三十龠ヲ合トスル量ナルヤ、又ハ常用量ヲ大升ト思ヒ違ヘテ、其三分ノ一ヲ小升ト云ヒシニヤ、詳ナラザレドモ、藥物ヲ常用量ヲ三倍シテ量ルベキナラネバ、大升ト云ヒシモノハ常用量ニテ、小升ト云ヒシハ其三ガ一ナルベシ、又按ズルニ雜式ニ「合ㇾ藥則用㆓小者㆒」ト云ヒタレバ、藥物ハ小升ニテ量ルベキニ、皆大升ニテ量リシハ、典藥式ニ載セシハ合藥ノ分量ニアラザレバ、大升ヲ用ヒタルニヤ】政事要略ニ、弘仁十三年ノ額田國造今足ガ勘文ヲ載セタルニ、舊記ニ「令前租法以㆓大方六尺㆒爲ㇾ步、步內得㆓米一升㆒」トアルヲ引キテ、此大升也ト注シ、又慶雲三年ノ格ニ「准ㇾ令以㆓大方五尺㆒爲ㇾ步、步內得㆓米一升㆒」トアルヲ引キテ、此升稱減大升ト注シタリ、又此勘文ヲ釋シタル文ノ內ニハ、十合升・

十二合升ト云ヘリ、十合升ハ減大升ニテ、十二合升ハ大升ナルベシ、大升ヲ令ノ大升トスレバ、減大升ハ令ノ大升ノ八合三勺三撮不盡ナリ、然レドモ減大升十二合升ノ事、他書ニ見エザレバ詳ナラズ

扶桑略記ニ、「後三條院ノ延久四年九月廿九日、斗升法可レ據二用長保例一之由下知」トアリ、【長保ハ一條院ノ年號ナリ、此御時ニモ斗升ノコト制セラレシト聞ユレドモ、其詳ナルコトハ知リ難シ】愚管抄ニ、「後三條院ノ御時、延久ノ 宣旨バカリ（稱）ト云フ物サダアリテ、今マデソレヲ本ニテ用ヒラル、斗マデ御サダアリテ、斗召シテ參リタレバ、清涼殿ノ庭ニテスナコ（砂）ヲ入レテタメサ（校）レケルナントヲバ、コハ（是）イミジキ（甚）コトカナトテメデ（感）仰グ人モ有リケリト」云ヒ、古事談ニ「延久善政ニハ、先器物被レ作ケリ、資仲卿藏人頭ニテ、奉二行之一云々、升ヲ召寄テ取廻々々、御覽ジテ籠折寸法ナドサヽセ給ヒケリ、米ヲバ穀倉院ヨリ召寄テ、於二殿上小庭一貫主以下藏人出納ナド見沙汰シテ、小舍人玉ダスキシテハカリケリ」ト云ヒシハ、卽此時ノ事ナリ、此帝政ヲ御心ニ入レサセ給ヒケレバ、從前用ヒ來リシ量ノ謬リシヲ、校正シ給ヒシナルベシ

或人難ジテ曰、東鑑ノ建長四年三月宗尊親王鎌倉ニ下向シ給フ條ニ、「白米二石宣旨斗定大豆三石同斗」マタ「上白米三斗宣旨斗」トアリ、愚管抄ノ宣旨稱ノ名ニ據レバ、宣旨斗モ延久改正ノ量ナルベシ、東鑑ニ殊更ニ宣旨斗ニテ量ルコトヲ云ヒタルヲ見レバ、常用量トハ同ジカラザリシナランヲ、今從來常用ノ量ヲ校正セシモノトシタルハ如何、答、愚管抄古事談ニ云ヒタルヲ合セ考フルニ、延久

ニハ用ヒ來リシ量ノ譌リシヲ正シ給ヒシニテ、量法ヲ改メ制シ給ヒシニハアラズ、【愚管抄ニ斗ヲ召シテ、砂ヲ量リテ校サレシトアルニテ、舊量ノ譌否ヲ考ヘラレシコト知ルベシ、古事談ニ先器物被レ作ケリト云ヘルハ、新量ヲ作ラレシ如クニモ聞ユレドモ、升ヲ取廻々御覽ジテ籠折寸法ナドサヽセ給ヒケリトアルニヨレバ、是モ舊量ノ内ニテ譌無キヲ撰ビ、ソレニ依リテ新量ヲ定メ造ラレシニテ、量法ヲ改メ給ヒシニハアラズ】從來ノ譌濫ヲ正サレンニハ、令式ノ法ニ依リ給フベケレバ、宣旨斗ハ令式ノ量ト同ジカルベシ、東鑑ニ殊更ニ宣旨斗ト云ヒタルハ、建久ノ頃ハ國々ニ莊園多クシテ、各私量ヲ用ヒ、【文永四年、東寺政所下ニ丹波國大山庄一、トアル文書ニ、「灌頂院能米參-斛陸-斗庄-斗定、西-院能-米-斛陸-斗同-斗定」、トアル庄斗、卽莊園ノ私量ヲ云フナリ】延久改正ノ量ハ京都ニテノミ用ヒシニ、親王ノ下リ給フ用途ナレバ、此度バカリ京ニテ用フル宣量ニテ量リシ故ニ、殊更ニ宣旨斗トハ云ヒシナラン、又厨事類記裏書ニ、「朝餉供御菜何斗宣旨斗」、ト云ヒ、參河僧正行遍ノ參語集ニ、「昔御供米管米ヲ被ニ下行一宣旨斗定也」、トアルヲ見レバ、京ニテモ市中宣旨斗ナラヌ私量ヲ用ヒタリシニヤ

或人問、好古小錄ニ宣旨升ヲ載セテ、「古量有下印ニ宣字烙印一者上、疑是矣」、ト云ヘリ、此量宣旨量ナラバ、十龠合ノ十合ノ升ナルヤ、答、宣字烙印量ノ圖、藤貞幹ガ集古圖ニ見ユ、【高橋圖南(宗直)ノ摹本ナリトゾ】外方五寸二分、內方四寸六分、深外二寸五分ト云ヘリ、【內ノ分寸ヲ載セズ】又大竹氏某藏

セラル、ハ、内方三寸六分有奇、深一寸九分弱、共ニ宣字ノ烙印アリ、【松崎氏コノ量ヲ見タリトテ、其尺寸ヲ慊堂日錄ニ記セリ】按ズルニ甲斐國ニテ今量三升ヲ一升トスル量ヲ用フ、【方七寸五分、深三寸五分】又其四分ノ一ノ量アリ、【今量ノ七合五勺ヲ受ク、方四寸四分八釐、深二寸四分五釐】コノ量ヲ俗ニセンジトモ、或ハ一杯入ハタゴ升トモ云フ、又コレヲ半ニシタル量ヲ【今量ノ三合七勺五撮ヲ受ク、方三寸六分、深一寸九分】ナカラセンジト云ヒ、又コレヲ半ニシタル量ヲ、【今量ノ一合八勺七撮半ヲ受ク、方二寸六分五釐、深一寸七分五釐】小ナカラセンジト云フ、集古圖ニ載セタル量ノ容受ハ、甲斐量ノセンジト略同ク、大竹氏ノ量ハナカラセンジト略同ジケレバ、並ニ甲斐ノ古量ナルベシ、【今ノ甲斐量ニハ、帝字ト珏字トヲ烙印ス】コノ量共ニ宣字アリテ甲斐量ノセンジ、ナカラセンジト容受ノ同キヲ見レバ、甲斐量ノセンジノ名ハ宣字ヲ印シタル量ト云フ義ナルベシ、是モ此量ノ甲斐量ニテ、延久ノ宣旨量ナラヌ一證トスベク、容受モ十龠合ノ升ト同ジカラズ、【十龠合ノ量ヲ以テ集古圖ノ量ヲ計レバ、一升一合一勺六撮餘、大竹氏ノ量ヲ計レバ、五合五勺八撮餘ナリ】又宣旨ニヨリテ量ヲ改正セラレタリトテモ宣字ヲ印スベキニ非レバ、此量決シテ延久宣旨量ニハアラズ、【甲斐量ノ一升ハ、今量ヲ三倍シテ造リシニ似タリ、然レバ古量トテモ元龜天正ヨリ以前ノ制ニハアラジ、又量ニ烙印スルハ近世ノ事ナルニ、宣字量ハ烙印ナレバ、延久ノ量ニ非ルヲ證スベシ】

北條・足利等世ノ權ヲ執リシ際、諸國互ニ凌奪シ、戰爭相繼ギシカバ、王綱弛ミ衰へ、官量ハ遂ニ絕

テ、各莊園ノ私量ヲノミ用ヒ、一定ノ公量ハ無カリシナリ【今モ國ニヨリテ異ナル量ヲ用フル處アリ、莊園ノ私量ノタマサカ殘レルモノナルベシ、又安東郡專當沙汰文ニ、糭納ノ升ノ寸法ヲ載セ、今モ伊勢ノ神宮ニ種々ノ量ヲ用ヒラルレドモ、神宮ニ限リタル量ニテ、世間公用ノ量ニアラズ、又法隆寺・藥師寺・東大寺等ノ古刹ニ古量ヲ藏スルアリ、是モ其寺々ニ限リテ用フル私量ニテ、公用ノ量ニハアラズ、文永四年東寺政所下ニ大山庄ニ文書ニ「油壹斗二升寺家銅器定」トアルモ、是類ノ量ナルベシ】但今世、今ノ八合許ヲ容ル古量ノ多ク傳ハレルヲ見レバ、其後諸國共ニ今ノ八合許ヲ一升ト爲シナルベシ、【是ハ何レノ時ニ定リシト云フコトハ無クテ、漸々ニ諸國共ニ如レ此ハナリシナラン、又好古小錄ニ、民部省廚斗、二月堂十合升・山科升・近江升・東大寺常十合升、其名同ジカラザレドモ、受ル所ハ十合ノ八合升ニテ、雜令ニ所謂十合ヲ升トスト云フ一升ノマスナリ、コノ三升ヲ大升ノ一升トス、民部省廚斗ハ摹本ノミ存スト云ヘリ、按ズルニ十合ノ八合升トハ、今量ノ八合ヲ受ル升ト云フコトナルベシ、民部省廚斗ハ今其圖ヲ見ルニ、烙印アレバ古製ニアラズ、假令古量ニ烙印スルコトアリトテモ、天下通行ノ量ナラバ印スルコトモアルベシ、民部省ノ廚ニテノミ用フル量ニ、烙印スル理アランヤ、其圖疑ラクハ大寶勅書ノ類ニテ、好事者ノ贋作ナラン、山科升・近江升ハ莊園ノ量ニテ、二月堂升・東大寺升ハ彼寺々ノ私量ナルベシ、何レモ公量ニアラザレバ、古量ヲ證スベカラズ、假令私量ナラズトモ、後世ノ量ナルベキニ、貞幹即雜令ノ量ナリト云ヒシハ、據無キ妄言ナリ】又多聞院日記ニ、天正十四年

十月九日、奈良中賣買ノ升、中坊ヨリ京番トテ、【番ハ判ノ借字ナルベシ、判トハ本ト判書ノコトナルヲ、後ニハ轉ジテ押字、又ハ印章ノ俗稱トナリ、押字ヲ書判トモ、印章ヲ印判トモ云ヘリ、此頃ヨリ量ニ押字烙印ヲシタリシカバ、再轉シテ量ヲ判ト云フ名ハ起リシナリ、通貨ノ金ニモ、後藤氏ノ花押アルニヨリ、大判小判ト云フト同ジ、然レバ京判トハ、京量ト云ハンガ如シ、今モ武佐判・八合判ナドノ名殘レリ】悉ク郷中ヘ被レ出、家毎ニ如レ此用意シテ、判ヲ可レ取、代二斗ヅヽト云々【量樣ヲ郷々ヘ出シ示シテ家毎ニ其大サニ倣ヒ造リ、押字烙印ヲ請テ用ヒヨト令シ、其量毎ニ米二斗充ヲ出サセシナリ】今迄ノ十合ノ二升入也、【今迄ノ十合トハ二月堂十合升・東大寺常十合升ノ類ヲ云ヘルナラン、然ラバコノ十合トアルハ、今ノ八合量ナリ、十合ノ二升入也トハ、今ノ八合ナル十合升ノ一斗ニ二升増タリト云ヘルナリ、十合升ノ今ノ八合ナルコトハ、好古小錄ニ見エテ上ニ引リ】今出タル一石ト申ハ【今頒行セシ量ノ一石ハト云フコトナリ】前ノ十合ニハ一石二斗在レ之云々、珍敷難義計被二申付一候也トアリ、是ニ據レバ豐臣氏ノ令ニテ、京判トテ、從前ノ常用量ノ一升二合ヲ一升トスル量ヲ用ヒシナリ、【從前ノ常用量ヲ今ノ八合トスレバ、其一升二合ハ今ノ九合六勺ナリ、然ルニ播磨國姫路野里村ノ人、芥田五郎右衞門ガ藏セル古升アリ、底ニ立五寸壹分、横五寸一分分半、フカサ二寸四分々半、但內ノリ也、此寫國中ヘ可二相渡一御諚ニ候也、天正十八年正月日トアリ、多聞院日記ニ云ヒシ京番ハ是ナルベシ、此量積六十四寸三百四十九分二百五十釐、今ノ九合九勺七撮弱ヲ容ル、此量ヲ一升二合ト

シタル量ヲ計レバ、今ノ八合三勺有奇ナリ、然ラバ多聞院日記ノ十合量ハ、其實ハ今ノ八合三勺有奇ヲ受シナルベシ】酒井家ニ參河以來用ヒ來リシト云フ量ヲ傳ヘラル、縱五寸、横四寸九分、深二寸六分【積六十三寸七百分、今ノ九合八勺七撮弱ヲ受ク】又昔升アリ、慶長ノ時伏見ニテ作ラレシト云傳フ、方五寸、深二寸五分ナリ、【積六十二寸五百分、今ノ九合六勺八撮强ヲ受ク、昔升ノ名及ビ尺寸積實、塵劫記ニ見エタリ、正木政幹ガ三器逢源考ニ、「此量緣ニ竹ヲ伏セテ、弦ハ無カリシ」ト云ヘリ、按ズルニ、集古圖ニ載セタル內侍所量ノ底ニ、元龜元年八月吉日、內横五寸、內立二寸五分、御內侍所ト記シタリ、昔升ハ是ニ依ラレシニヤ、然ルニ今曲尺ニテ內侍所量ノ圖ヲ度レバ、縱外五寸四分弱、內四寸七分强、横外五寸二分、內四寸六分半、高二寸五分强、內ノ圖ヲ載セザレバ深サ知ルベカラザレドモ、板ヲ五分許トスレバ深サ二寸强ナルベシ、皆記ス所ノ尺度ト合ハザルハ余ガ見シ圖、轉寫ノ誤アルニヤ、尙能尋ヌベシ】方四寸九分、深サ二寸七分ノ升ハ、寬永ノ初ニ改メラレシト見エタリ【中村欽ガ三器攷略ニ、「本朝升昔者有ニ大小二樣一、其大者割ニ方尺一爲ニ十六一、而用ニ其一一、本度內方五寸、而深二寸半、至ニ近世一官改ニ其制一、謂升口寬敞、則斛-槩之間、易レ容ニ奸巧一、於レ是約ニ其旁各一分一、以加ニ其深二分一、故新升方四寸九分、而深二寸七分矣」ト云ヘリ、昔トハ天正慶長ノ頃ヲ云フナルベシ、大ナル者ヲ內方五寸、深二寸五分トアレバ、大ハ昔升ニテ、小トハ八合ノ量ヲ云フナラン、「至ニ近世一官改ニ其制一トハ、昔升ヲ改メテ方四寸九分、深二寸七分ノ升トセラレシヲ云フナリ、是ヲ改メラレシハ、

何レノ年ノコトナルカ詳ナラザレドモ、元和八年ニ刻セシ攝津國武庫郡瓦林ノ人重能ガ算書ニ、京升ハ口五寸四方、深二寸五分トアリ、コレニ據レバ、是時ハイマダ所謂昔升ヲ用ヒシナリ、寛永四年ニ作リシ塵刧記ニハ、京升ノ圖アリテ、ヒロサ四寸九分、フカサ二寸七分トモ、新升ノ法六四八二七トモ云ヒ、今判トモ云ヘリ、又方五寸、深二寸五分ノ升ヲバ、昔升トモ古升トモアリ、是ニ依レバ寛永四年ニハ既ニ其制ヲ改メラレシコト知ルベシ、然ルニ塵刧記ニ、又京判ニテ何ホド、古升ニテ何程ト並べ計リタリ、古升ヲ停メテ年經タランニハ、サハ云フベカラザレバ、塵刧記ヲ作リシ時新升行ハレテ程無キニ似タリ、故ニ今寛永ノ初年ニ改メラレシトハ定メシナリ、此升ノ積六十四寸八百二十七分ナリ、塵刧記以下ノ算書トモニ、京升ノ法六四八二七トアルハ是ナリ（新升法トモアリ）然ルニ、中根璋ガ律原發揮ニハ、弦ノ積ヲ減ジテ、積六十四寸五百五十分トス、三器逢源考モ其說ニ從フ、今計リ試ルニ、實ニ中根氏ノ云フ所ノ如シ、故ニ今古量トモノ容受ヲ計ルニモ、皆是ニ依シナリ】其後江戸ノ量不同アリシカバ、寛文九年ニ改正セラレテ、今量ヲ世ニ普ク用フルコトニハナリシナリ、【寛文九年十一月二十九日ニ、江戸升不同有レ之ニ付而京升分量ニ今度改レ之、樽屋藤左衞門所ニ新升有レ之相求向後可レ被レ用候ト命ゼラレタリ】

本朝量攷

本朝權衡攷

狩谷望之著

皇國ニテ權衡ノコトノ見エタルハ、新撰姓氏錄ニ、「商長首上毛野同氏多奇波世君之後也」、【多奇波世君ハ、崇神天皇ノ皇子豐城入彥命ノ五世ノ孫ト同書ニ見ユ、仁德天皇紀ニ、「上毛野君祖竹葉瀨」トアル、卽此人ノコトナリ】三世孫久比、泊瀨部天皇【本注諡崇峻】御世被レ遣ニ吳國一、雜寶物等獻ニ於天皇一、其中有ニ吳權一、天皇勅此物也】（此句讀難シ、物字ノ上ニ何字ナドヲ脫シタルニヤアラン）久比奏曰、吳國以懸ニ定萬物一、令レ爲ニ交易一、其名云ニ波賀理一、【按、吳國ニテ倭語ヲモチ、波賀理ト云フベキニアラズ、此物渡リ來リシ後、皇國ニテ名ヅケシヲカク誤リ傳ヘタルモノナルベシ】天皇勅之勿レ令ニ佗人同一、久比男宗磨舒明天皇御代負ニ商長首一也」トアル始ナリ【印本錯亂アリ、今ハ古寫本ニ依レリ、按ズルニ崇峻天皇ノ元年ハ、隋ノ文帝ノ開皇八年ニテ、五年ニ蘇我馬子ガ天皇ヲ弑奉リシハ、開皇十二年ナリ、然ラバ久比ガ獻リシハ隋稱ナルベシ】サレドモ此御代ニ權衡ヲ用ヒラレシコト史ニ見エザレバ、世ニ普クハ用ヒザリシナルベシ、日本紀ニ推古天皇ノ十三年ニ高麗ノ大興王黃金三百兩ヲ上リシコトアレドモ、是ハ彼ヨリ云ヒオコセタ

ルマヽニ、史ニ載セタルモ知ルベカラザレバ、皇國ニテ此頃權衡ヲ用ヒラレシ證トモナシ難シ、孝德天皇ノ御世ニ、種々ノ制ヲ立ラレシニ、權衡ノ事ハ見エザレドモ、齊明天皇ノ五年ニ、高麗ノ使人罷皮ヲ携來リテ、價綿六十斤ヲ求メシコト、又天智天皇ノ元年ニ、百濟ノ鬼室福信ニ絲五百斤綿一千斤ヲ賜ヒ、七年ニハ、新羅王ニ絹五百斤、十年ニハ一千斤ヲ賜ヒシコト日本紀ニ見エタリ、扶桑略記一代要記ニ據レバ、是モ舒明天皇ノ御時ヨリゾ用ヒラレタルベキ【扶桑略記一代要記ノ文畧攷ニ引リ、按ズルニ始テ吳權ヲ獻リシ久比ガ男宗磨、此御代ニ姓ヲ商長首ト賜ハリシハ、權衡ヲ世ニ普ク用ラルヽニヨリテ賜ヒシニモヤアリケン】其後天武天皇ノ十四年ニハ、鐵一萬斤、持統天皇ノ五年ニハ、白銀三斤八兩、又銀二十兩ナドトモ見エタリ【紀ノ傍訓ニ斤ヲハカリ、兩ヲコロト訓メリ、コロノ義未考ヘ得ズ】度量ヲ唐制ニ從ハレタランニハ、權衡モ必唐制ニ依ラレシナルベシ

本朝令ニ、「權衡廿四銖爲兩【本注】三兩爲大一兩、十六兩爲斤、」義解ニ「謂以秬黍中者百黍重爲銖廿四銖爲兩」トアリ、是モ唐令ニ「秤權衡以秬黍中者百黍之重爲銖、二十四銖爲兩、三兩爲大兩一兩、十六兩爲斤」ト云ヒシニ因リ給ヒシナリ、【唐令ノ文、唐律疏議ニ引リ、南部新書ニ開元令ヲ引キタルモ同ジ、六典通典舊唐書ニモ皆同ジ趣ニ載セタリ、唐令ハ漢書律歷志ニ、「權者銖兩斤鈞石也、所以稱物平施知輕重也、本起於黃鐘之重、一龠容千二百黍、重十二銖、兩之爲兩、二十四銖爲兩、十六兩爲斤、三十斤爲鈞、四鈞爲石」トアルニ本ヅキシ也、唐ノ小稱ハ謬ナガラモ漢稱ノ傳リ

タルニテ、北魏北齊後周ナドノ稱ニアラザレバ、即漢稱トシテ漢書ノ文ヲ載セタルナリ、按ズルニ唐令ノ秤字ハ草書ノ稱字ノ正書ニナリタルナリ、(稱ニ作ルモ稱ノ草書ナリ)泉字ヲ匁ニ作リ、萬字ヲ万ニ作リ、莊字ヲ庄ニ作リ、葩字ヲ花ニ作ルナド皆是ト同ジク、草書ヲ正書ニナシタルモノニテ此類尙多シ、淸人ハ秤字ヲ平字ニ、禾傍ヲ加ヘタルモノトシタレドモ、未精シク考ヘザリシナリ】權衡ノ證トスベキ古器今存セズトイヘドモ【好古小錄ニ、天平以來ノ器ニ斤兩ヲ題シタルハ皆今ト同ジト云ヘリ、サモ有ベシ、然レドモ如何ナル器ヲ見タリシニカ、明ニ云ハザレバオボツカナシ、】【通典ニ「武德四年廢ニ五銖錢ニ【隋ノ五銖錢ナリ】鑄ニ開元通寶、每ニ十錢ニ重一兩、計ニ一千ニ重六斤四兩、每レ兩二十四銖、則一錢重二銖半以下」ト云ヒ、舊唐書ニ「開元通寶錢重二銖四絫、積ニ十文ニ重一兩、一千文重六斤四兩、」ト云ヘバ【イヅレモ大稱ニテ計リシナリ】開元錢ニヨリテ唐稱ヲ起スベシ、今開元錢ノ初鑄ト見ユル者ノ大樣ニシテ刓泐セザル錢ヲ稱レバ概重サ一匁ニシテ重キハ一匁一二分ニ至リ、輕キハ八九分ノ者アリ、【律原發揮ニモ「開元錢以ニ本邦等子ニ秤レ之、輕重不レ均、其至輕者八分許、其至重者一錢一分斗」ト云ヘリ、先輩或ハ八分ト云、或ハ八分五釐ト云ヒシハ、大樣ノ者ヲ得ザリシナルベシ、按ズルニ六典鑄錢監ノ注ニ「皇朝武德中悉除ニ五銖、更鑄ニ開通元寶、開元中以ニ錢濫惡江淮間尤甚、有レ勅禁ニ斷舊法、每ニ一千ニ重六斤四兩、近所レ鑄者多重七斤」ト云ヘリ、然ラバ今有ル一匁ニ餘ル者ハ、重七斤ト云ヒシ錢ニテ、八九分ノ者ハ江淮ノ濫錢ナルカ、又ハ久シク世ニ通行シテ刓泐セシ錢ナルベシ】【然ラバ今ノ一匁ハ唐ノ

大稱ノ二銖四絫ニシテ【又唐書ニ乾封泉寶錢ヲ重二銖六絫ト云ヘリ、一匁ヲ二銖四絫トスレハ、二銖六絫ハ一匁〇八釐三豪三絲三忽不盡ナリ、今此錢ヲ稱ルニ重一匁一分以下ナレバ、開元錢ノ稱法ト同ジ、又封-演-錢-譜ニ「乾元當十錢重五銖」ト云ヘリ、一匁ヲ二銖四絫トスレバ五銖ハ二匁〇八釐三豪三絲三忽不盡ナリ、今此錢ヲ稱ルニ重キハ二匁二分、輕キハ一匁九分ナレバ（徑小尺一寸二分ニ足バザル者ナバ數ヘズ）是モ開元錢ノ稱法ニ合ヘリ、封氏又乾元重輪錢ヲ重十二銖ト云ヘリ、十二銖ハ五匁ナルニ、此錢ヲ稱レバ重キハ四匁、輕キハ三匁三分ナリ（徑小尺ノ一寸四分ノ者）凡歷代ノ錢今傳ハル者ヲ稱リ試ムルニ、小平錢ハ大凡制ノ如クナレドモ、大錢ハ必制ヨリ輕ケレバ、是モ十二銖ノ錢ノ輕クナリタル者ナルベケレドモ、是ホドニ輕クナリタルハ、佗ニ有ルコト無ケレバ疑ハシ、又通典ニハ乾元當十錢ヲ每レ貫十斤ト云ヒ、重輪錢ヲ每レ貫二十斤ト云ヘリ（新唐書ニ十二斤トアルハ誤ナリ、舊唐書ニモ二十斤トアリ）是ニテ一箇ノ重サヲ計レバ、當十錢ハ三銖八絫四黍ニテ、今ノ一匁六分、重輪錢ハ七銖六絫八黍ニテ、今ノ三匁二分ナリ、此制封氏ガ當十錢ヲ五銖、重輪錢ヲ十二銖ト云ヒシニモ合ハズ、又二錢共ニ今存スル徑ノ合ヘル者ハ、皆通典ニ云ヒショリ重キモ疑ハシ】即宋以後ノ一錢ナリ、【宋ノ時二銖四絫ヲ一錢トシ、二絫四黍ヲ一分トセシヨリ銖絫ノ名遂ニ廢シタリ、附錄ニ詳ニス、】今一匁ヲ二銖四絫トシテ權衡ヲ起セバ

銖【三百黍】今四分一氂六豪六絲六忽不盡【氂正字ニハ犛ニ作ル說文ニ「犛彊曲毛可以著起衣从犛省來聲」トアル字ナリ、彊曲毛ノ字ナルニヨリ、後人來ヲ變ジテ毛ニ從ヒ、犛牛尾ト訓ズル氂字

ト混ゼシナリ、犛牛尾ト訓ズル氂字ハ、徐鉉ガ音莫交切音茅ナリ、廣韻ニモ十豪ト訓ズル氂ハ犛ト同ク、里之切音釐、マタ犛牛尾ト訓ズル氂ハ、莫袍切音毛ニテ犛トハ其音同ジカラズ、國語ノ晏萊ヲ左傳ニ晏氂ニ作リ、孟子ノ禽滑釐ヲ史記儒林傳ニ禽滑氂ニ作リ、後漢書岑彭ガ傳ニ彭ガ玄孫熙魏郡太守タリシ時、輿人ノ歌ニ「狗吠不驚、足下生氂、」トアリテ、災時茲ト韻ヲ押シハ、皆犛字ノ俗字ニテ、氂牛尾ノ氂字ニハアラズ、漢書王莽傳ニ、「以氂裝衣」トアルヲ、顏師古ガ、注ニ「毛之彊曲者曰氂、以裝褚衣令其張起也」ト云ヘリ、師古ガ注、說文犛字ノ義ト同ジケレバ、王莽傳ノ氂字モ犛ノ俗字ナルコト明ケシ、漢ノ劉屈氂ト云フ人ノ名モ犛字ナルベシ、屈犛ト云フハ彊曲毛ト云ヘルト同ジケレバナリ、慧林ガ一切經音義ニ、大般若經ノ初ニアル三藏聖教序、又六波羅蜜多經掌中論、皆豪氂ヲ豪犛ニ作リシト云ヘリ、六朝唐初ニハ正字ニ書タル本ノ傳ハリシナリ、然ルヲ慧琳ガ犛ハ本字ニアラズ、假借シタルナリト云ヘルハ、本義ヲ知ラザリシナリ、淸ノ王鳴盛ガ十七史商榷ニ、豪氂ハ豪釐ノ傳寫ノ誤トシ、趙翼ガ陔餘叢考ニハ、氂牛尾ト訓ズル氂字ト釐ト通ズト云ヘルハ、共ニ豪氂ノ氂ハ犛ノ俗字ニシテ、犛牛尾ト訓ズル氂字トハ形ハ同ジケレドモ別字ナルコトヲ知ラザリシナリ、或ハ釐字ヲ借用フ、俗又省テ厘ニ作ル、集韻ニ見ユ、又廛字ヲモ省テ厘ニ作ル、干祿字書ニ「厘廛上通下正」トアル是ナリ、故ニ二字混ジテ分ツコト無シ、本草ノ陟厘ヲ楊玄操ガ音義ニ音纏、又音氂ト二音ヲ出シヽハ（本ニ

草和名引リ）此厘字ヲ定メカネタルナリ（本草和名ノ今本ニ𨤲釐トアルハ、後人ノ改メタルナリ、モシ釐トアラバ音釐ト云フベキ理無シ）今俗豪ヲ毛ト云フ、豪字ヲ俗ニ毫ニ作ル、故ニソレヲ省キシ者ナルベシ、□□一絲又一秒トモ云フ、隋志ニ見ユ、今俗ハ一拂ト云フ、拂ノ名、何ヨリ出タルニカ詳ナラズ、或人ノ云ヒケルハ、拂ハ忽ノ譌音ニテ、ソレヲ誤リテ豪ヲ十分シタル數ノ名トセシナリト云ヘリ（忽ハ豪ヲ百分シタル者ナリ）錢ノ內ヲ分釐豪絲忽ト稱ルコトハ、度ノ小數ノ名ナルヲ、稱ノ小數ノ名ニ借リタルナレバ、上件ノ事ドモ度攷ニ云フベキヲ今俗專ラ稱ノ名ニ用フル故ニ、コヽニ如レ此ハ云ヘルナリ】

兩【七千二百黍】今十匁【通典ニ「每ニ十錢ニ重一兩」ト云ヒシハ是ナリ、按ズルニ說文ニ「兩二十四銖爲ニ一兩ニ」ト云ヒ、「㒳ハ再也トアリテ、二字同ジカラズ、後世ハ皆兩字ヲ用ヒテハ㒳字ハ廢レタリ

斤【一十一萬五千二百黍】今百六十匁【後世ハ銖絫ヲ廢シ、錢分ヲ以テ諸物ヲ稱レドモ、斤ト兩トハ唐ノ稱法ヲ變ズルコト無シ】

是雜令ニ「三兩爲ニ大兩一兩ニ」ト云ヒ、「量ニ銀銅穀ニ者皆用レ大」ト云ヒシ大稱ニテ、六典延喜式等ニ藥ヲ合スル外ハ悉大ナル者ヲ用フト云ヒシモ此稱ナリ、小稱ハコノ三分ノ一ナレバ

銖【百黍】今一分三氂八豪八絲八忽不盡

兩【二千四百黎】今三匁三分三氂三豪三絲三忽不盡

斤【三萬八千四百黍】今五十三匁三分三氂三豪三絲三忽不盡

銖ヲ十分シタルヲ絫ト云ヒ、絫ヲ十分シタルヲ黍ト云フ、【漢書ノ注ニ應劭ガ音義ヲ引テ、「十黍爲レ絫、十絫爲レ銖」ト云ヒ、說文ニハ「絫十黍之重也」ト云ヘリ、說文銖字ノ注ニ、「權十分黍之重也」トアルハ疑ハシ、黍ヲ十絫ネタルヲ絫ト云フハ、絫黍ト云フ意ナルベシ、コノ絫ヲ十絫ネタルヲ銖ト云ヘバ、今本ノ說文ニ十分黍トアルハ、十絫黍トアリシヲ誤リタルカ、又說文稱字ノ注ニ、「十二粟爲二一分一、十二分爲二一銖一」トアルニ據レバ「權十二分粟之重也」トアリシヲ誤リタルニモアルベシ】サレドモ漢書律曆志ニ、權衡ノ起ヲ云ヒシニモ、此名無ク、唐令本朝令ニモ、此二名ヲ載セズ、延喜式ニモ黍絫ヲ以テ稱ラザレバ、西土ニテモ皇國ニテモ絫黍ヲバ用ヒザリシト見エタリ、【通典又封演錢譜等ニ希ニ、此名見エタレドモ、算ニヨリテ微數ヲ云フ處ニシテ、常用ノ數ニハアラズ】又分ト云フ目アリ、【十分ヲ錢ト云フ、分ニアラズ、「十二粟而當二一分一、十二分而當二一銖一」ト云ヒシ分ニモアラズ】拾芥抄ニ「六銖爲二一分一、四分爲二一兩一、十六兩爲二一斤一」、【本注 小一斤也】トアレバ、分ハ六百黍ニテ今ノ八分三氂三豪三絲三忽不盡ナリ、【梁ノ陶弘景モ「六銖爲二一分一、四分爲二一兩一」ト云ヘリ、陶氏ガ云ヒシハ、藥稱ニテ、常用ノ稱法トハ同ジカラザレドモ、六銖ヲ分トシ、四分ヲ兩トスルコトハ異ナルコト無シ、陶氏ガ稱法ノ常用稱ト同ジカラザルコトハ附錄ニ詳ニス】後ニ大稱ヲ用フル世トナリテハ、分モ三倍シタ

レバ、千八百黍ニテ、今ノ二匁五分ヲ分トス、【宋ノ聖-惠-方ニ、「方中凡言レ分者、即二錢半爲ニ一分一也、」ト云ヒシ者是ナリ】齋宮式・縫殿式等ニ云フ所ノ分、是ナリ【左馬式ニ、「結ニ額髮一料緋絲大二分四銖、鞦縫絲大二分、」トアルハ大稱ナルコト論ナシ、大何斤何兩何分又ハ大何兩何分ト、上ニ大斤大兩ヲ蒙リタル分ハ大稱ナラン、類聚三代格ニ載セタル承和八年閏九月ノ官符ニ「鉛八千一百六十六斤十兩二分四銖トアルモ、大稱ナルベシ】式ニ又六百黍ノ小分アリ、【縫殿式ニ紅花小二兩二分、內匠式腰車ノ條ニ、水銀小三兩三分、屏風ノ條ニ、滅金小二兩二分、水銀小一兩一分、廚子ノ條ニ、水銀小二兩三分、伊勢初-齋-院裝-束計帳ノ條ニ、水銀小二兩二分、捺壺ノ條ニ、滅金小一兩三分、野宮裝束腰輿ノ條ニ、水銀小三兩二分ナド、小兩ノ下ニアル分ハ、皆小稱ナルベシ】又大斤大兩ヲ用ヒナガラ小分ヲ用ヒタルアリ、【大神宮式ニ、木綿六斤五兩六分、滅金九斤七兩八分四銖、縫殿式ニ生絲十三兩五分五銖、大膳式ニ木綿麻各八兩四分ナド云ヘル是ナリ、四分ニテ一兩ナルニ、是等ハ斤兩ハ大稱ニテ、分ハ小稱ナル故ニ、四分ヲモ兩ト云ハズ、又五分六分ナドモ云ヘリ、小稱ノ十二分ヲ大稱ノ一兩トスレバ、八分モ猶一兩ニ足ラザルナリ】カク樣々ニ紛ラハシク稱リシハ、如何ナル故ナリケン疑ハシ、【內膳式ニ、海藻十兩四分八銖トアルモ疑ハシ、六銖ヲ一分トスル定ナルニ、八銖トアレバ分ハ大稱ニテ、銖ハ小稱カトモ思ヘドモ、四分ヲ兩トスル定ナレバ、大稱ノ四分ナラバ十一兩八銖ト云フベシ、又コノ

分ヲ小稱トスレバ八銖ト云フベキニアラズ、此條誤字アルニヤ、尙考フベシ】

唐ノ貞觀ノ時、張文收ガ作リシ稱ヲ開元ノ時、常用ノ稱ニ比ブレバ三ノ一ト云ヒ、【通典ニ見ユ、度攷ニ引リ】本朝令ニ廿四銖爲レ兩ト云ヒシ權衡【令ニ、「又量ニ銀銅穀一者皆用レ大、此外官私悉用ニ小者一」トモ云ヘリ】卽是ナリ、然ルニ和銅ノ時ニ、制ヲ改メテ藥ヲ合スル外ハ大稱ヲ常用トセラレタリ、【詳ニ度攷ニ見ユ、雜式ニ「官私悉用レ大、但合レ藥則用ニ小者一」トアルハ、此時ヨリノ制ナルベシ、是ハ唐ニテ「凡積ニ秬黍一爲ニ權衡一者、所謂小稱ナリ合ニ湯藥一則用レ之、內外官司悉用ニ大者一」ト云ヒシニ依ラレタルナリ、按ズルニ宋ノ林億ガ校正千金方凡例ニ、「今之此書、當レ用下三一兩爲ニ一兩一之制上」ト云ヘルハ、千金方ノ稱ハ小稱ナルニ、宋ノ時ハ大稱ヲ用ヒタレバ、千金方ニ三兩トアルハ、宋ノ一兩ナルヲ云ヒシナリ、又皇國ノ制醫方書ハ小品方ヲ讀ムベキコト典藥式ニ見ユ、是モ唐ノ制ニテ、皇國ニテソレニ依ラレシモノナルベシ、小品方ハ隋ノ陳延之ガ作リシ書ナリ、隋ニモ大小稱有リシカドモ、藥ヲバ唐ノ千金方ニスラ小稱ニテ記シタレバ、マシテ小品方ハ小稱ナルベキコト知ルベシ、此ヨリ前六朝ノ時ハイマダ大稱無カリシ時ナレバ、其頃ノ醫方書ハ小稱ナリシコトハ云フヲ俟タズ、故ニ大稱ヲ用フレバ事ノ煩ハシキニヨリテ、藥ヲ合スルニノミ小稱ヲ用ヒシモノナルベシ】延喜式ニ云フ所ノ斤兩モ是ナリ、式ノ斤兩ノ大稱ナルコトハ、雜式ニ「官私悉用レ大」トアルニテ明ナレドモ、ナホ木工式ニ「以ニ埴十一斤一造ニ瓪瓦一枚、筒瓦九斤、宇瓦十八斤、鐙瓦十五斤」ト云ヒシニテ考ルニ、瓦ヲ作ルニハ削リ成ス故ニ、

其埴ヲ斉ルモ多カルベク、燒テハ其重サモ減ズレバ、今假ニ埴ノ重サノ半ヲ瓦ノ重サトスレバ

瓪瓦　重五斤半【倭名類聚抄ニ唐韻ヲ引テ、瓪ハ音板、牝瓦也ト云ヒ、女加波良ト訓リ、後世ニ云フ平瓦ナリ、其形平ニシテ版ノ如クナレバ版瓦ト云フ、版瓦ノ名漢書昌邑王傳ニ出ヅ、然ルヲ後ニ瓦ニ從ヒテ瓪ニハ作リシナリ】

筒瓦　重四斤半【其形竹筒ヲ割キタル如クナレバ筒瓦ト名ヅク、筒瓦ノ名、金匱要略狐惑病雄黃熏方ノ條ニ見ユ、淸ノ程敦ガ秦漢瓦當文字ニ、「屋瓦皆仰當ニ兩仰瓦之際ニ、爲ニ半規之瓦ヲ以覆レ之、俗謂ニ之筒瓦ト、漢筒瓦長二尺餘、兩端皆有ニ筍距ト」ト云ヘリ、又筩瓦トモ云フ、宋ノ陸游ガ渭南集、唐昭宗ノ與越武肅王錢鏐ニ賜ヒシ鐵券文ノ跋ニ、狀如ニ筩瓦ト云ヘリ、筩ハ正字、筒ハ假借字ナリ、又瓦ニ從ヒテ甋ニモ、甌ニモ作ル、後唐ノ重ニ修法門寺塔廟ヲ記ノ碑ニ「修ニ塔上層緑琉璃甋瓦ヲ」ト云ヒ、玉篇ニ「甋牡瓦也」トアルモ是ナリ、（唐韻ニ甋ヲ牡瓦也ト云ヒシ牡瓦トハ同ジカラズ）甌ハ廣韻ニ同ジト云ヘリ、淸俗モ甌ト云フト段玉裁ガ說文註ニ出ヅ、筒瓦ヲ後世ニハ丸瓦ト云フ、平瓦丸瓦ノ名、「應德二年造ニ法勝寺ヲ用途註文ニ見ユ、今俗モ然云フナリ、倭名類聚抄ニ辨色立成ヲ引テ、疏瓦、都々美加波良ト載セテ筒瓦ヲ載セズ、ツヽミカハラハ西大寺・廣隆寺ノ資財帳又木工式ニ堤瓦ト書リ、（木工式ノ今本ニ提瓦トアルハ誤ナリ）筒瓦・鐙瓦ヲ並ベ葺キタル狀ノ堤坊ニ似タレバ、名ヅケタルナリ、辨色立成ニ疏瓦ト云ヒシハ此瓦ヲ葺キタル狀上下ノミ接續シテ、瓪瓦宇瓦ノ如ク左右蜜緻ニハ並

ベザレバ、疏瓦ト名ヅケシナラン、然ラバツヽミカハラハ葺キタル上ノ名ニテ、瓦ノ名ニハアラズ、（羽倉在滿ノ木工式葺工考ニ、提瓦チ宇瓦トシ、提ハ踶ノ通借ナラント云ヒシハ非ナリ）瓪瓦宇瓦ヲ並ベテ葺キタルハ瓴甋（シキカハラ）ニ似タレバ甓瓦ト云フモ（甓瓦ノ名木工式ニ出ヅ、廣雅ニ甓ハ瓴甋也ト云ヘリ、木工式ノ今本ニ、壁瓦トアルハ誤ナリ）葺タル上ノ名ニシテ瓦ノ名ニハ非ルニテ筒瓦ト堤瓦ト同ジカラザルヲ知ルベシ、倭名類聚抄ニ疏瓦ヲ擧ゲテ筒瓦ヲ載セザリシハ、ツヽカハラトツヽミカハラト名ノ似タルヨリ誤リ混ジタルナルベシ】

宇瓦　重九斤【瓪瓦ノ屋宇ニ垂ルモノ故ニ宇瓦ト云フ、倭名類聚抄ニ、「唐韻云、甋牡瓦也、乎-加-波-良」トアル者是ナリ、屋宇ニ垂タル狀ノ堦砌ニ似タルヨリ、堦瓦ト名ヅケ、後ニ瓦ニ從ヒテ甋ニハ作リシナルベシ、瓪ハ藻文無ケレバ牝瓦トシ、甋ハ藻文アレバ牡瓦トセシナリ、（玉篇ニ甋チ牡瓦ト云ヒシトハ瓦ヅケシ所以名同ジカラズ）淸ノ朱楓ガ秦漢瓦圖記ニ是ヲ溝間檐際之瓦ト云ヘリ、今俗ハ唐草瓦ト名ヅク】

鐙瓦　重七斤半【倭名類聚抄ニ、辨色立成ヲ引テ「花瓦鐙瓦也、阿-布-美-加-波-良」トアル者ニテ、今俗ノ云フ巴瓦ナリ、古瓦ハ多ク花文ヲツケ、今ハ巴文ヲツクルニヨリテ、然名ヅケタルナリ、其瓦ヲ仰向レバ、舌長ト云フ馬鐙ノ形ニ似タル故ニ、鐙瓦ト云ヘリ（羽倉氏鐙瓦チ平瓦トシタルモ誤ナリ）此瓦ヲ西土ニテ瓦當又瓦頭ト云フ、瓦當ハ漢-書-司-馬-相-如-傳ノ注ニ見ユ、程敦ガ秦漢瓦當文字ニ「謂二之瓦當一者以三瓦文中有二蘭-池-宮當、宗-正-宮當、宜富貴當、八-風-壽-存當一、是秦漢時本-名」ト云ヘリ、瓦頭ノ名ハ元ノ李好文ガ長安志圖ニ出タリ、又明ノ王褘ガ集ニ、漢瓦硯記アリテ、「漢未央宮諸殿瓦

其身如ニ半筒一、而覆ニ簷際一者、則其頭有レ面外向ニ其面徑五寸、面背厚一寸弱、其背平可レ硯レ墨、唐宋以來人得レ之、即去ニ其身一以爲レ硯、故俗呼ニ瓦頭硯一也」トモ云ヘリ、秦漢瓦當文字ニ「漢筒瓦云云、（上ニ引リ）覆簷際之瓦一端下ニ鐍爲ニ正圓形一、徑五六寸、有下至ニ七八寸一者上」ト云ヒシ者即是ナリ】

同式ニ人擔ノ瓪ハ瓦十二枚、筒瓦十六枚、宇瓦七枚、鐙瓦九枚、沙土二斗五升爲ニ一擔一【コノ外ニ巨材・雜材・白土・赤土等ノ重サヲ載セタレドモ、準ズル所無ケレバ省キツ】若應ニ准積者大ハ六十斤爲ニ一擔一」ト云ヘリ、大六十斤ハ九貫六百匁ナレバ、墳瓦沙土モ大稱ニテ稱リシナリ

瓪瓦　【五斤半】十二枚【六十六斤　大稱ノ六十六斤ハ今ノ十貫〇五百六十匁ナリ】

筒瓦　【四斤半】　十六枚【七十二斤　大稱ノ七十二斤ハ今ノ十一貫五百二十匁】

宇瓦　【九斤】七枚【六十三斤　大稱ノ六十三斤ハ今ノ十貫〇〇八十匁】

鐙瓦　【七斤半】九枚【六十七斤半　大稱ノ六十七斤半ハ今ノ十貫〇八百匁】

沙　【十龠量一升四百二十匁】二斗五升【今十貫〇五百匁、十貫〇五百匁ハ大稱六十五斤十兩】

又内膳式ニ、「耕ニ種園圃一糞【糞ハ糞ノ俗字ナリ、干祿字書ニ見ユ、今俗ノ云フコヤシニテ、糞字ノ米ヲ去テ土ニ從ヒ、糞尿ノ字ニ別チシナリ、今本ニ糞ニ改メタルハ正字ナレドモ、延喜ノ舊ニハアラジ、今ハ古鈔本ニ依リテ引リ】擔別准ニ重六斤一」トアリ【大六斤ハ九百六十匁】六斤ヲ擔ハンコト輕キニ過ギタレバ、六十斤トアリシガ脱タルナラン、六十斤ナラバ是モ大稱ニテ木工式ト同ジ擔率ナルベシ、

是等ヲ以テ見レバ式ニ大小ヲ云ハザル斤兩ハ、皆大稱ナルコト知ルベシ、又大稱ヲ倍シタル稱アリ、主税式ニ「凡一駄率絹七十匹、絲三百絇、綿三百屯、銅一百斤、鐵卅廷」ト云ヘリ、【コノ外ニ絁布鍬等ノ率ヲ載セタレドモ、此物ドモ今世品類多クシテ輕重定マラザレバ、今ヲ以テ古ヲ知リ難キ故ニ省キツ】主計式ニ「上絲四兩、中絲五兩、麁絲七兩、各爲レ絇」【平均スレバ一絇ハ五兩八銖】綿ハ四兩爲レ屯、鐵ハ三斤五兩爲レ廷トアルニヨリ【絹ノコトハ後ニ云ヘリ】大稱ニテ一駄ノ重サヲ計レバ

絲三百絇　【百斤】　今十六貫匁

綿三百屯　【七十五斤】　十二貫匁

銅一百斤　【十六貫匁】

鐵三十廷　【九十九斤六兩】　十五貫九百匁

六典注ニ載セタル駄率トハ、略同ジケレドモ【度支郎中ノ注ニ、毎レ駄一百斤、車載一千斤ト云ヘリ】本朝格式等ニ載セタルト合ハザレバ【類聚三代格不動動用ノ條ニ、弘仁十三年ノ官符ヲ載セテ、近江國穀一十一萬五千斛、應レ運二進一十萬斛一、駄賃料一萬五千斛、駄五萬匹、匹別三斗、」トアリ、十萬斛ノ穀ヲ五萬匹ノ馬ニ駄スレバ毎レ駄二斛ナリ、二斛ハ今ノ一石三斗二升五合弱、今粟穀一升ヲ稱ルニ、凡二百八九十匁ナレバ、其重三十七貫七八百匁許ナリ、雜式ニ載セタル運米ノ駄ハ、三十九貫六百匁餘ナルコト量攷ニ引リ、又木工式ニ載セタル人擔ハ、凡十貫匁ナルニ、車載ハ略十倍スレバ、凡百貫匁ナリ、

車載ノ條ノ末ニ、「駄ハ減ニ三分之一ニ」トアレバ、三十三四貫匁許ヲ一駄トスベシ、六典注ノ車載十分ノ一ナルトハ同ジカラズ、又主水式ニ、「以ニ氷八顆ニ爲レ駄、准ニ一石二斗ニ」トアルハ、米ヲ以テ準ジタルナラン、一石二斗ハ今ノ七斗九升五合餘ニテ、其重サ三十一貫八百匁有奇ナリ、按ズルニ漢書ノ趙充國ガ傳ニ、「以ニ一馬ニ自佗ニ負三十日食ヲ、爲ニ米二斛四斗、麥八斛」ト云ヘリ、漢ノ二斛四斗ハ今ノ二斗六升四合餘、米一升ヲ三百二十六匁許トシテ計レバ、（此事附錄ニ出ヅ）其重サ八貫六百匁許、又八斛ハ今ノ八斗八升一合餘、麥一升ヲ三百六十匁トスレバ、其重サ三十一貫七百三十匁許（是ハ皇國ノ麥ヲ稱リテ定メタルナリ、西土ノ米ノ皇國ノ米ヨリ輕キヲ見レバ麥モ皇國ノ麥ヨリハ輕カルベケレドモ、證スル所無ケレバ姑ク皇國ノ麥ニテ計リシナリ）合セテ四十貫〇三百匁餘ニテ格式ノ駄法ニ稍近シ、六典注ニ毎駄百斤ト云ヒシハ、大凡今ノ米一俵ノ重サナレバ輕キニ過ギタルニ似タリ、疑フベシ】主税式ノ駄率ハ、皆大稱ヲ三倍シタルモノナルベシ、絲・綿・銅・鐵一駄ノ重サヲ大稱ノ三倍トスレバ

絲三百絇　四十八貫匁

綿三百屯　三十六貫匁

銅一百斤　四十八貫匁

鐵三十廷　四十七貫七百匁

今官ノ定【三十六貫匁】ヨリハ稍重ケレドモ、今モ私ニハ米三俵ヲ駄スト云ヘリ、【三俵ハ一石二斗、其重サ大凡四十八貫許ナリ】又主計式ニ、絹ハ長六丈、廣一尺九寸ヲ匹トス、今世ノ絹一匹、凡長曲

尺七丈二尺許、廣一尺一寸許ニテ、重サ凡三百二三十匁ナリ、今ノ一匹ノ重サヲ以テ古ノ一匹ノ重サヲ計レバ、凡四百四十匁許ナルベシ【今ノ絹ノ長七丈二尺ニ、廣一尺一寸ヲ乘ズレバ其積七千九百二十寸コレヲ法トシテ絹ノ重三百二十五匁ヲ除スレバ、方寸ノ絹重四氂一豪有奇ナリ、古ノ絹ノ長六丈ハ曲尺ニテ五丈八尺一寸三分弱（三分弱恐クハ九分強、猶攷フベシ）廣一尺九寸ハ曲尺ニテ一尺八寸四分有奇、コノ曲尺ノ長廣ヲ乘ズレバ、一萬〇六百九十四寸有奇、コレ古ノ絹ノ今尺ニテノ積ナリ、是ヲ法トシテ今ノ絹方寸ノ重四氂一豪有奇ニ乘ズレバ、四百三十八匁八分餘ヲ得、コレ古ノ絹一匹ノ重サナリ】是ニテ主稅式ノ駄率七十匹ヲ計レバ、三十貫匁餘ナリ、然レドモ古ハ織法今世ノ如ク精シカラザルベケレバ、絲モ太カリツラン、然ラバ一匹ノ重サ五百匁ニモ至リ、七十匹ハ三十五貫匁許ニモ及ビシナルベシ、是亦駄率ノ重サハ大稱ノ三倍ナルヲ證スベシ、【近衞式ニ「駄別運ニ繭十二斤」トアリ、大稱ノ十二斤ハ一貫九百二十匁、コレヲ三倍スルモ五貫七百六十匁ナリ、繭ハ輕浮ナル物ナレバ、常ノ駄率トハ同ジカラザルベケレドモ、六貫ニ足ラザルハ輕キニ過ギタリ】然ラバ此大稱三倍ノ稱ハ駄法ニノミ用ヒシカトモ思ヘドモ、内藏式ニ「奉ニ諸陵幣絲綵紅花綵蘇芳綵紫綵、絲白絲各四絇二兩【本注別各五兩】橡絲・皂絲・生絲、各一絇八兩【本注別各二兩】蘇芳綵紫綵紅綵支子綵縹綵、綿各三屯四兩【本注別各四兩】トアリ、別トハ十陵ニ別チ奉ラルヽナレバ、コヽニ云ヒシ一絇モ一屯モ各十二兩ニテ、主計式ニ「上絲四兩爲絇、綿四兩爲屯」ト云ヒシ三倍ナリ、七墓料陵墓雜給料ニ云ヒシモ同ジ、拾芥

抄ニモ「十二兩爲レ屯」ト云ヘリ、是等皆駄法ニ非レバ、駄法ニモ限ラザルニヤ、尚考フベシ、此三倍ノ稱何レノ御時始リシカ、後世此三倍ノ稱ノ絶タルモ、又宋制ニ倣ヒ、錢分【十分錢之一】ヲ以テ稱リ、銖分【六銖爲レ分】ノ名ノ廢シタルモ、何レノ御代ナリケン皆詳ナラズ

本朝權衡攷

本朝度量權衡攷附錄卷上之上

狩谷望之著

予弱冠ノ頃ヨリ皇國ノ制度ヲ知ラント思ヒテ、國史律令格式ナドクリ返シ讀ムニ、知リ難キ事ノ多カル中ニ、度量權衡ハ今モ日々用フル物ナガラ、今ト古ト同ジカリシヤ、異ナリシヤ、タシカニ知ラレネバ、先達ノ人々ニ問質シヽニ、委ク教フル人モ無カリシカバ、其筋ノ事書ルモノドモ、彼是取集メテ讀見ルニ、能ク考ヘ明ラメタリト見ユルモ、ヲヽサヽ無カリケレバ、何クレト尋求メテ考ヘシニ、皆李唐ノ制ヲ寫シ給ヒシナリケリ、爰ニ思ヒ起シテ其考三卷ヲ作リタリ、又ヨク思ヘバ、其據リ給ヒシ唐ノ度量權衡ノ本ナル周ノ時ノ事、其後唐マデノ有リシサマ、又唐ノ後今ノ淸ニ至ルマデノ沿革ハタ知ラデ有ルベキナラネバ、彼國ノ書ドモヲ考ルニ、尙書左傳等ニ度量權衡ノ事見エタレドモ、【皆度攷ニ引リ】其詳ナルコトハ知ルベカラズ、古ヘ度ハ人體ヨリ定メシモノナレドモ、【此事モ度攷ニ詳ニス】其定メタリシ人體ノ長短、今ヨリハ考ヘ知リ難ケレバ、コレニ依リテハ尺ヲ起スコトヲ得ズ、【大戴禮ニ「布レ手知レ尺」ト云ヒシニヨリテ、今人ノ手ヲ布テ度リ試ルニ、人ノ大小ニヨリテ其長サ異ナレドモ、大方ハ曲尺七寸以上八寸以下ナリ、是ニテ大凡ハ知ラルレドモ、其子細ナルコトハ知リ難シ、

コノ外寸咫尋仞ナド、人體ヨリ定メシト云フモ、其長サ今知リ難キコト皆是ニ同ジ、其尺、漢ノ尺ト同ジカリシコトハ、下ノ漢尺ノ條ニテ知ルベシ】隋書律曆志ニ度ノ起リヲ云ヒシニ、史記【夏本紀】ニ禹ノ事ヲ「聲爲律、身爲度、稱以出、」ト云ヒ、考工記【玉人】ニ「璧羨度尺好三寸以爲度」、ト云ヘルヲ引出タレドモ、史記ニ云ヒシハ禹ノ德ヲ贊シタルニテ、尺度ヲ作リシコトニハアラズ、考工記モ璧羨ノ度ヲ云ヒタルニテ、是ヨリ尺度ヲ起スコトニハアラズ、又易緯通卦驗ニ、「十馬尾爲一分、」ト云ヒ、【是モ隋志ニ引リ、今本ノ通卦驗ニハ此文無シ、タヾ「失之豪氂差以千里」ト云フ文アリテ、其鄭玄ガ注ニ「氂馬尾也」ト云ヘリ、十氂ニテ一分ナレバ、十馬尾ヲ一分トスル說ハ是ナルベシ、然ラバ隋志ハ其意ヲ取リテ、文ヲバ書改メタルモノナラン、サレドモ馬尾ノコトハ鄭注ニテ、通卦驗ノ本文ニハアラズ】淮南子【天文訓】ニ、「秋分蔈定、蔈定而禾熟、律之數十二、故十寸蔈而當一粟、十二粟而當一寸、律以當辰、音以當日、日之數十、故十寸而爲尺、十尺而爲丈」ト云ヒ、【注ニ「蔈古文作秒」ト云ヘリ、按ズルニ說文ニ、秒ハ「禾芒也」ト訓ジ、蔈ハ「末也」ト訓ズ、コヽハ秒字ノ義ナレドモ、蔈モ艸ニ從ヘバ末也トアルハ、草ノ末ノ細キヲ云フナルベシ、音モ同ジク義モ通ズル故ニ、蔈ヲ以テ秒トシタルナリ、同書主術訓ニ、「寸生於⿰禾票」トアルハ、蔈字ノ艸ヲ變ジテ禾ニ從ヒシナリ、宋書律志ニ、天文訓ノ文ヲ載セタルニモ、蔈ヲ皆⿰禾票トアリ、今本ノ主術訓ニ稞ニ作リシハ譌ナリ、然ルニ續字彙補ニ、稞ヲ載セ主術訓ヲ引テ、⿰禾票疾足切、音粟ト云ヒシハ、甚シキ誤ナルヲ、康熙字典モ

是ニ從ヒシハ非ナリ、説文【禾部稱字注】ニ「春分而禾生、日夏至晷景可レ度、禾有レ秒、秋分而秒定、律數十二、十二秒而當ニ一分一、十分而寸」、ト云ヒ、【淮南子ニヨリタルナリ、今本律數ノ下ノ十二ノ二字ヲ脱ス、字ノ重リタル故轉寫セシ時、脱シタルコト著ルケレバ、今補ヘリ、又淮南子ニヨレバ、「十分而寸」ハ「十二分而寸」トアリシガ脱タルニヤ、然レドモ説文ノ寸字ノ注ニハ、「十分也」ト云ヒ、程字ノ注ニハ「十分爲レ寸」アレバ、二ノ字ヲ脱シタリトモ定メ難ク、宋書ニ淮南子ノ文ヲ載セタルニハ、「十二穮而當ニ一粟一、十粟而當ニ一寸一」トアレバ、許愼・沈約等ガ見タル淮南子ハ、今ノ本ト同ジカラザリシモ知ルベカラズ、又主術訓ノ注ニモ、「十穮爲ニ一分一、十分爲レ寸、十寸爲ニ一尺一、十尺爲ニ一丈一」トアレドモ、天文訓ノ律數十二ヨリ、十二秒ト十二粟トヲ生ジ、日數十ヨリ十寸ト十尺トヲ生ズル説ニ合ハザレバ誤ナルベシ】又【木部程字注】「十髮爲レ程、一程爲レ分、十分爲レ寸」ト云ヒ、【段玉裁ガ注ニ「一程俗本作ニ十程一誤、大小徐舊本漢制考・小學紺珠・皆不レ誤、百髮爲レ分、斷無ニ是理一」ト云ヘリ、今段氏ガ改メシニ從フ】説苑【辨物】ニ、「度量權衡以レ黍生レ之、一黍爲ニ一分一、十分爲ニ一寸一、十寸爲ニ一尺一、十尺爲ニ一丈一」ト云ヒ、【今本一黍ノ二字ヲ脱ス、其誤明ナレバ今補ヘリ、隋書律暦志ニ引キタルニハ、「度量權衡以レ粟生、一粟爲ニ一分一」トアリ、淮南子ニヨレバ、十二粟ヲ一寸トスル定ナルニ、一粟ヲ一分トシ、十分ヲ一寸トシタランニハ短ニ過グベシ、然レドモカヽル俗傳ノ説ハ、必各家同ジカラザルベケレバ、淮南子ニ合ハズトテモ、「一粟爲ニ一分一」ト云ハンニ難ナカルベシ、孫子ガ「六粟爲ニ一圭一」ト

云ヒ、夏侯陽ガ「十粟爲二一圭一」ト云ヒテ同ジカラザルガ如シ、續漢書律曆志注ト、太平御覽トニハ、
「以レ粟生レ之、十粟爲二一分一」ト引リ、十粟ヲ一分トスルコトハ、極メテアルベカラザレバ誤ナリ、程瑤
田ガ通藝錄ニハ「以レ粟生レ之、十粟爲二一分一」ト引キテ、「本或譌作二十粟一」ト云ヘリ、是ハ淮南子主術
訓ノ注ニ據リシナルベシ、サレド彼注ニ十粟トアルハ、誤ナルベキコト上ニ辨ゼリ、按ズルニ今本ノ
黍ヲ以テ起シタルハ、漢書ノ文ニ合ヘドモ、隋書・續漢書注・太平御覽、皆粟ニ作リタルヲ見レバ、度
量衡、皆黍ヨリ起スコト、後世ノ通說ナルニヨリ、今本ハ後人ノソレニヨリテ改メタルモノナルベシ】
漢書【律曆志】ニ「度者分寸尺丈引也、所三以度二長短一也、本起二黃鐘之長一、以二子穀秬黍中者一、一黍之廣、度
レ之、九十分黃鐘之長一爲二一分一、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、十尺爲レ丈、十丈爲レ引、而五度審矣」ト
云ヒ、孫子算經ニ、「度之所レ起、起二於忽一、欲レ知二其忽一、蠶吐絲爲レ忽、十忽爲二一絲一、十絲爲二一毫一、十毫
爲二一氂一、十氂爲二一分一、十分爲二一寸一、十寸爲二一尺一、十尺爲二一丈一、十丈爲二一引一」ト云ヒシハ【夏侯陽算
經ニ田曹ヲ引キタルモ、忽ヨリ起ルコト孫子ト同ジ、タヾ「欲レ知二其忽一、蠶吐絲爲レ忽」ト云フ二句無
シ、按ズルニ史記正義、(太史公自序)ニ「忽一蠶口出絲也」ト云ヒシモ、孫子ガ說ニヨリタルナリ、然レド
モ蠶ノ吐タル絲ヲ忽ト云フコト如何アランオボツカナシ、思フニ忽ハ恍忽ノ義ニテ、素問注(靈蘭秘典論)ニ
算書ヲ引テ、「似レ有似レ無爲レ忽」トアルゾヨカルベキ、但今傳ル古算書トモニ此文無シ、王冰ガ引キ
シハ何等ノ書ナルカ詳ナラズ】皆古ノ俗傳ナルベケレバ、何レモ據リドコロトスルニ足ラズ、【姑ク是

等ノ說ニヨラントスルモ其物ニモ大小アルベク、絫ルコトノ麤密ニヨリテモ長短等シカラザルベケレバ、是モ人體ヲ以テ度ヲ起シ難キニ同ジ、後魏ノ大和十九年ニ、九十黍ヲ絫ネテ尺ヲ作リシニ、荀勗ガ尺ト豪釐同ジト云ヘリ、然レドモ古尺ハ百黍ヲ以テ一尺トスト云ヘルニ、九十黍ニテ古尺ニ符合セシハ疑ハシ、假令絫シ黍ノ大ニシテ、九十黍ニテ荀勗ガ尺ト同ジカリシナラバ、偶中ニシテ古ニ合ヒシニハアラズ、荀勗ガ尺ノ事ハ下ニ詳ニス】

【周八寸尺】周ノ末、六國ノ時ニ至リテ、八寸ヲ一尺トスル制アリ、漢人コレヲ周尺ト云フ、【周人其時ノ尺ヲ周尺ト云フベキナラネバ、此名秦漢ノ時ヨリ起リシナリ、荻生氏度考ニ、「此周字非ニ代名一、蓋指ニ京師一言、如ニ春秋時適レ周朝ヲ周皆是也、它邦之尺或失レ制、故以ニ京尺一爲レ正、猶如ニ後世謂ニ宮尺一耳」ト云ヒタレドモ、先秦ノ書ニ周尺ノ名見エザレバ、秦漢ノ際ニ云ヒ始メシコト疑無シ】禮記【王制】ニ「古者以ニ周尺八尺一爲レ步、今以ニ周尺六尺四寸一爲レ步」、ト云ヒ、【經典釋文ニ後漢ノ盧植ガ說ヲ引テ、此篇ハ漢文帝博士諸生ヲシテ作ラシメシト云ヘリ】說文【尺部咫字注】ニ、「中婦人手八寸謂ニ之咫一、周尺也」、又【夫字注】周制以ニ八寸一爲レ尺、十尺爲レ丈、人長八尺、故曰ニ丈夫一」トモ見エタリ、【人ノ長ハ八尺ナレバ、周ノ一丈ナル故、丈夫ト名ヅクト云フ說ハ、漢人ノ俗說ナルベキコト下ニ詳ニス】鄭玄【王制注】ハ「周尺之數未ニ詳聞一也、按禮制周猶以ニ十寸一爲レ尺」、【正義ニ、「玉人職云、鎭圭尺有二寸、又云、桓圭九寸、是周猶以ニ十寸一爲レ尺】ト云ヘリ、按ズルニ左傳（僖九年）國語（齊語）ニ「天威不レ違レ顏咫尺一ト

云ヒ、國語（魯語）列子問（湯問）ニ「長尺ㇾ有ㇾ咫」ト云ヘリ、咫ハ八寸ナルニ、咫尺トモ、尺有咫トモアレバ、尺ハ十寸ニテ、八寸ナラヌコト明ケシ】「蓋六國時、多變ニ亂法度一、或言周尺八寸、則步、更爲ニ六尺四寸一」ト云ヘリ、然ラバ古ヨリ盛周マデハ十寸ヲ尺トセシニ、六國ノ時ニ至リテ八寸ヲ一尺トスル尺ハ出來シナリ、【說文序ニ周ノ時ノ事ヲ云ヒテ、「其後諸侯力政不ㇾ統ニ於王一、分爲ニ七國一、田疇異ㇾ畮、車涂異ㇾ軌、律令異ㇾ法」ト云ヒシモ、鄭玄ガ「多變ニ亂法度一」ト云ヒシ時ノ事ナルベシ、カヽル時八寸ノ尺ハ出來シナラン、但八寸ノ尺ヲ用フル國モアリ、又古ノマヽニ十寸ノ尺ヲ用フル國モアリテ、一樣ナラザリシ故ニ、「許愼異ㇾ畮、異ㇾ軌、異ㇾ法」トハ云ヘルナラン、孟子荀子ナド皆六國ノ人ナルニ、人ノ長ヲ云ヒシハ皆十寸ノ尺ナレバ、周末ニモ悉ハ八寸尺ニ非ザリシヲ知ルベシ】秦尺 秦天下ヲ一統シテ後八寸ノ尺ヲ廢シ、盛周十寸ノ尺ヲ用ヒシナラン、【史記始皇本紀ニ、「二十六年一ニ法度衡石丈尺一」トアリ、一ニストハ各國ノ區ナリシ制度ヲ改メテ、一樣ニナシヽヲ云ヘルナリ】漢尺 漢ハ多ク秦ノ制ニ法リタレバ【始皇本紀ニ定メシ制度ヲ漢ニテ用ヒタルニテ、漢ハ多ク秦ノ制ニ沿リシヲ知ルベシ】度モ秦ニ因循セシナルベシ、然ラバ漢尺ハ卽眞ノ周尺ナリ、【晉ノ荀勗漢尺ニ依リテ尺ヲ造リ、其尺ヲ以テ律ヲ定メ、聲韵ヲ調ヘタリケルガ、其後魏襄王ノ冢ヲ發キテ、周ノ時ノ玉律鐘磬ヲ得タリシニ、其聲韵、闇ニ荀勗ガ律ト同ジカリシト、隋書律曆志ニ云ヘリ、（全文下ニ引リ）是漢尺ト周尺ト同ジカリシヲ證スベシ、故ニ隋志ニ、又周尺・漢志王莽時劉歆銅斛尺・後漢建武銅尺・晉泰始十年荀勗律尺、（晉前尺ナリ）祖沖之所ㇾ傳銅尺ヲ並

ベ擧テ皆同ジトセリ、（周尺ハ十寸周尺也）宋ノ蔡元定ガ律呂新書ニモ「漢去レ古未レ遠、古之律度量權衡猶在也、故班志所レ志、無ニ諸家異同之論一、王莽之制作、雖レ不レ足レ據、然律度量衡當レ不ニ敢變ニ於古一也」ト云ヒ、淸ノ孔尚任ガ漢銅尺記ニモ、「漢代去レ周未レ遠、且禮經皆出ニ漢儒一、漢尺之存、卽周尺之存也」ト云ヘリ、然ラバ漢ノ時ノ尺ハ卽周尺ナルヲ、漢人是ヲ周尺トハ云ハズシテ、八寸ノ尺ヲ周尺ト云ヒシハ、漢ノ時常ニ用フル尺ヲバ何ノ尺ト云フコトヲ辨明セズシテ、八寸ノ尺ハ當時用ヒザル尺ナレバ、周尺トハ云ヒシナルベシ、八寸ノ尺モ周ノ尺ニハアレドモ、周末六國ノ時出タル尺ニテ、眞ノ周尺ハ卽漢ノ常用尺ナルコトヲ知ラザリシナリ、漢人常用尺ノ周尺ナルコトヲ知ラザランコト有ルマジキ如クナレドモ、今モ常ニ用フル曲尺・鯨尺ノ何ノ尺トモ辨ヘザル人モ多キゾカシ、漢ノ人々此八寸ノ尺ヲ周尺ト云ヒシヨリ、大儒班固・許愼・蔡邕ガ輩スラ、其說ニ惑ヒタリ、然ルニ鄭玄ガ周尺ハ卽漢尺ナリト云ハザリシハ飽キ足ラネド、多クノ人ノ周尺ハ八寸ナリト云ヒタルニソレニハ從ハズシテ、未詳ト云ヒ、八寸ノ尺ヲバ或言ト云ヒテ、其說ヲ載セタレドモ、禮制ニハ十寸ヲ尺トシタレバ、八寸ノ尺ハ、六國ニテ法度ヲ變亂シタルコト多カリシ時ニ用ヒタリシナラント云ヒシハ、誠ニ漢代一人ノ卓見ナリケリ、此周ニハ八寸ヲ尺トスト云フコト、漢俗ノ通說ナリシカバ、遂ニ三代異尺ト云フ僞說ハ起リシナリ、三代異尺ノコトヲ白虎通ニハ夏ハ十寸、殷ハ十二寸、周ハ八寸トシ、（通典ニ引リ、今本ニハ無シ）獨斷ニハ、夏ハ十寸、殷ハ九寸、周ハ八寸トシテ、其說同ジカラザレドモ、周尺ノ八寸ナルコトハ異說無シ、是周尺八寸

ト云フ俗說ニ本ヅキテ附會シタレバナリ、其實ハ上古ヨリ周マデモ、尺度ノ異ナルコトハ無カリシナリ、又說文ニ、「人長八尺、故曰二丈夫一」ト云ヘリ、丈夫ト云フ言、周易・左傳以下ノ古書ニ見エタレバ、周初ヨリ八寸ノ尺有リシ如ク聞ユレドモ、周漢ノ書ニ人ノ長ヲ云ヒシヲ攷ルニ、「周禮（輈人大戴）列子（黃帝篇）荀子（勸學篇）國策（趙惠文王策）呂氏春秋（上農篇）淮南子（精神訓・氾論訓・脩務訓）說苑（脩文篇）等ニハ七尺トシ、考工記（車人）淮南子（天文訓）潛夫論（十列篇）論衡（祀義篇）等ニハ八尺トセリ、又尋ハ八尺ナルヲ、大戴禮ニ「舒レ肘知レ尋」ト云ヘリ、凡人ノ肘ヲ舒ベタルハ、其人ノ長ト同ジキモノナレバ、是モ人長八尺ト云フニ同ジ、カク七尺ト云ヒ、八尺ト云フコト多ケレドモ、說文ヲ除キテ人ノ長ヲ丈ト云ヒシハ、一ツモ有ルコト無シ、又丈夫ト云コトハ、「大戴禮（本命篇）ニハ「男子者言任二天地之道一、如レ長二萬物一之義也、故謂二之丈夫一、丈者長也、夫者扶也、言レ長二萬物一也」、ト云ヒ、毛詩正義（大雅甫田）ニハ「夫者有二傅相之德一、而可二倚仗一、謂二之丈夫一」ト云ヘリ、二說同ジカラザレドモ、皆丈尺ノ義ニアラズ、故ニ丈夫ト云フ言ハ、男子ト云フベキ處ニノミ云ヒテ、人ノ長ヲ云フ處ニハ云ヘルコト無シ、然ラバ丈尺ヲ以テ丈夫ノ義ヲ解キタルハ、漢人ノ俗說ニテ、唐人モ其說ヲバ用ヒザリシナリ、今丈夫ノ字ノ義マデ引出テ論ゼシハ、事繁クウルサキニ似タレドモ、八寸ノ周尺ハ俗尺ニテ、眞ノ周尺ナラヌヲ辨ゼントテノコトナリ】漢尺モ後世傳ハラザルニヨリ、先輩周漢ノ尺ヲ考ヘシニ、各家同ジ・カラズシテ一定ノ說無シ、今其說ドモヲ考ルニ皆非ナリ』、故ニ荀勗ニ倣ヒ、古器ニ依リテ尺ヲ起サントスルニ、【魏晉ニテ用ヒシ尺譌リ

テ長カリシカバ、荀勗古器古銭ニヨリテ改メ作レリ、是ヲ晋ノ前尺ト云フ、其事下ニ詳ニス】周漢ノ器ノ尺度ヲ知ルベキ者、今世傳ハラズ、證トスベキモノハ唯王莽ガ銭ノミナリ、【宋史律暦志ニ丁度胥偓高若訥韓琦ニ詔シテ大府寺尺、又鄧保信・阮逸・胡瑗ガ造リシ尺ヲ詳定セシメシ時、丁度等ガ上言セシヲ載セタル内ニモ、「前代制尺非特累黍、必求古雅之器、以雜校焉、晋荀勗等校定尺度、以古物七品勘定、而隋氏銷毀金石、典正之物罕復存者、夫古物之有分寸、明著史籍、可以酬驗者、惟有銭法而已、臣等撿詳漢志・通典・唐六典云、大泉五十重十二銖、徑一寸二分、錯刀環如大泉、身形如刀、長二寸、貨布重二十五銖、長二寸五分、廣一寸、首長八分有奇、廣八分、足股長八分、間廣二分、圜好徑二分半、貨泉重五銖、徑一寸、今以大泉・錯刀・貨布・貨泉四物、相參校分寸正同、或有大小輕重與本志微差者、蓋當時盜鑄既多、不必皆中法度、但當較其首足肉好長廣分寸皆合正史者用之、則銅斛之尺從可知矣」ト云ヘリ、玉海ニヨレバコノ上言セシハ、景祐三年十月十九日ノコトナリ、清ノ程瑤田ガ通藝錄ノ解字小記ニモ、「瑤田據食貨志、王莽所造貨布貨泉及大小泉流傳於今、擇其邊郭完好者、互相比較定爲莽時造錢布之尺、與此晋尺毫髪不爽、劉歆莽國師也、然則尺背所謂鎦歆銅尺者、卽余今所定之莽尺、於是可見、莽所造錢布、無不精美也」ト云ヘリ】是ニヨリテ今大泉五十、貨布・貨泉ノ剜渤セザル者ヲ擇ビ參ヘ校ヘテ尺寸合ヘル者ヲ以テ尺ヲ起ス、【宋史ニハ大泉・錯刀・貨布・貨泉ノ四品ニテ起スベシト云ヒタレドモ、今世錯刀ハ傳ハラザレバ三品ヲ以テ起シシナリ、

按ズルニ周禮（外府）注ニ「王莽改レ貨而異ニ祚泉布一、多至ニ十品一、今存ニ於民間一多者有ニ貨布・大泉・貨泉一」、ト云ヘバ、後漢ノ時既ニコノ三品ノ外ハ多ラザリシコト知ルベシ、通藝錄ニ王莽ノ錢ニテ尺ヲ造リシコトヲ云ヒタルニモ錯刀ヲ載セザレバ、西土ニモ今ハ傳ハラザルニヤ】其一尺ハ曲尺ノ七寸六分ナリ、近ゴロ清ノ沈彤ガ周官祿田考ヲ讀ムニ、古尺ノ圖ヲ載セテ、宋ノ秦熺ガ鐘鼎欵識ノ冊ニ載スルヲ摹スト云ヒ、【清ノ朱彝尊ガ曝書亭文集ニ、コノ欵識ノ跋アリテ、「宋紹興中、秦相當レ國、其子熺伯陽居ニ賜第一、十九年日治ニ書畫碑刻一、是冊殆其所レ集」一、ト云ヘリ、秦相トハ秦檜ガ事ナリ、跋ニマタ「秦氏既敗、冊歸ニ王厚之一、後轉入ニ趙子昂家一、隆慶六年、項子京獲レ之、尋歸ニ倦圃曹先生一、先生既逝、所レ收書畫多散失久レ之、是冊竟歸ニ于予一、宗人寒中嗜レ古、見而愛ニ玩之一、因以畀レ之」、トアリ、阮元ガ碑經室集ニ、「王復齋鐘鼎欵識」一ト云ヘルモ即此冊ノコトナリ、阮元ガ跋ニ、「嘉慶七年、予得ニ此冊于吳門陸氏一」ト云ヒ、又阮元ガ仿鑄漢建初銅尺歌ノ自注ニ、「宋王復齋、鐘鼎欵識、冊内有ニ晉前尺搨本一、其尺銘載與ニ周尺劉歆尺一相同、即沈冠雲據以著ニ周官祿田考一者、此冊今藏ニ予齋中一」トモアレバ、今ハ阮氏ニ藏スルコト知ラレタリ、通藝錄ニ此尺圖ノコトヲ云ヘルニモ、「阮中丞收藏宋拓本鐘鼎款識」トアリ、阮元ガ跋ニマタ「加以ニ攷釋一、摹刻成レ書」、ト云ヘリ、其摹刻本、予イマダ見ズ】冊ニ又尺底ノ篆文ノ銘ヲ載セテ、「一周尺・漢志劉歆銅尺・後漢建武銅尺・晉前尺、並同」、トアリト云ヘリ、【此銘文、清ノ阮元ガ積古齋鐘鼎欵識ニ摹シ出セルハ、首ノ一ノ字ハ無ク、周尺以下ノ十九字ニテ、沈彤ガ書ニ載セタル銘文ノ首ニ、

一ノ字多キハ誤リ衍シタルナリト云ヘリ』、按ズルニ尺銘ノ劉歆銅尺ハ劉歆銅斛尺ト云フベシ、荀勗ガ晉前尺ノ銘ニ、古器七品ニテ挍セシコトヲ云ヒテ、其目ヲ擧シニハ、銅斛トアリ、漢書(律暦志)ニ銅斛ヲ深尺ト云ヘルニヨリテ、荀勗コノ斛ノ深サヲモ古尺ヲ起ス一ツノ證トナシシニテ(荀勗ガ尺ノ銘全文下ニ載ス)劉歆ガ作リシ銅尺ノ傳ハリシニハアラズ、隋書(律暦志)ニ十五等ノ尺ヲ載セタルニハ、荀勗ガ尺ヲ第一ニ列シテ。「一周尺・漢志王莽時劉歆銅斛尺・後漢建武銅尺・晉泰始十年荀勗律尺、爲ニ晉前尺祖沖之所レ傳銅尺ニ」ト云ヘリ(一トハ十五等ノ尺ヲ並べ擧タルニ、此尺ヲ最初ニ載セタル故ニ一ト云ヒ、其次ヲバ二某尺、三某尺ト云ヘリ)漢書ノ銅斛ハ王莽ノ時劉歆ガ作リタル物ナレバ、隋書ニカクハ云ヘルナリ、秦熺ガ欵識ノ尺ノ銘ハ隋書ノ文ヲ節略シタルナレバ、漢志王莽時ノ五字ヲバ刪ルトモ、必銅斛尺ト云フベキニ、斛字ヲモ刪リテ劉歆銅尺ト云ヒシハ非ナリ、モシ今一字ヲ刪ラントナラバ、劉歆斛尺ト云フベシ、魏尺ノ條ニハ、隋書ニモ晉書ニモ此尺ヲ劉歆斛尺ト云ヘリ】沈氏コノ尺ヲ宋ノ高若訥ガ造リシ尺ナリトス、【高若訥ガ尺ハ玉海ニ、實錄ノ高若訥ガ傳ヲ引テ、「皇祐中詔累レ黍定レ尺、以制ニ鐘律一、爭論連年不レ決、若訥以ニ漢貨泉度一寸一依ニ隋書一定ニ尺十五種一上レ之」、ト云ヒシモノナリ(宋史志傳略同ジ)阮元ハ秦熺ガ款識ニ載セタル尺ヲ晉銅尺ト云ヒ(其說ニ引キタル江永ガ言ニモ、程瑤田ガ通藝錄ニモ、皆晉尺ト云ヘリ、晉ノ荀勗ガ尺ノ銘ハ八十二字アリテ、其文隋書ニ載セタレバ、全文晉前尺ノ條ニ引リ)此尺ハ荀勗ガ尺ニ非ザルコト明ラカニテ惑フベキニアラズ、然ラバ秦熺ガ款識ノ尺ハ宋ノ時高若訥ガ作リシ尺ナレドモ、其長サ荀勗ガ尺ト同ジキニヨリテ、即晉尺トハ云ヒシナルベシ】是モ其長サ曲尺七寸六分ニテ、【積古齋款識ニ此尺ノ五寸ノ圖ヲ出シテ、「右晉尺之半于

レ此倍レ之、可レ得ニ其杢度一」トアリ、今曲尺ニテ其圖ヲ度ルニ、三寸七分五毫ニレヲ倍スレバ七寸五分ナリ、然レドモ其圖麤略ニシテ、周官祿田考ノ圖ノ精細ナルニ及バズ、阮氏ハ銘文ヲ摹スルヲ專トシ、沈氏ハ長短ヲ考ルヲ主トスレバナルベシ、故ニ今沈氏ガ圖ニ從ヒテ、曲尺七寸六分ト定メシナリ是ヲ淸今尺ニテ度レバ、七寸二分弱ナルヲ、沈彤ガ言ニ、「古尺較ニ今尺一止七寸四分」ト云ヘリ、是ハ淸今尺ノ七寸四分ナル盧㡯尺ヲ（下ノ漢官尺ノ條ニ詳ニス）孔尙任ガ漢銅尺記ニ、「與ニ周尺一同」ト云ヒシ、說誣ニ（是モ下ニ引リ）誤ラレテ秦熺ガ尺圖ヲバ度リ試ミズシテ、秦熺ガ尺ハ周尺ト同ジケレバ、盧㡯尺ト同ジク七寸四分ナラント、偶思ヒ誤リシナルベシ、サレドモ尺圖ノ長サハ誤ラザレバ、其言ノ誤ナルコト明ケシ】余ガ王莽ノ錢ヲ以テ起シタル尺ト杢同ジ』又朱熹ガ家禮ノ卷首ニ、後人ノ附ケタル宋ノ潘時擧ガ尺式アリ、【嘉定癸酉季秋乙卯臨海潘時擧仲善文式ト題ス】司馬光ガ家ノ石刻ノ古尺ノ圖ニアル言トテ、【王海ニ、「近歲司馬備刻ニ周-尺漢劉-歆尺晉前-尺蓋文正-公光舊物也一」トアルモノナリ】「周尺當ニ三司布帛尺七寸五分弱一、當ニ浙尺八寸四分一」ト載セタリ、七寸五分弱ト云ヒシ弱ノホド、幾何ナリシカ知リ難ケレバ、布帛尺ヨリ計リシハ姑ク置ク、浙尺ハ曲尺九寸〇四毫ナレバ【浙尺ノコト下ニ詳ニス】其八寸四分ナル周尺ハ曲尺七寸五分九毫三豪六絲ナリ、又同圖ニ「三司布帛尺卽是省尺、又名ニ京尺一、當ニ周尺一尺三寸四分一」ト云ヘリ、三司布帛尺ハ曲尺一尺〇二分一毫五豪二絲ナリ、【三司布帛尺ノコト下ニ詳ニス】是ヲ一尺三寸四分ニ分チテ、周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分二毫三豪二絲八忽餘ナリ、【是

ニヨリテ「周尺當二三司布帛尺七寸五分弱一」ト云ヒシ七寸五分弱ヲ計レバ、七寸四分六氂二毫六絲八忽餘ナリ】司馬光ガ周尺ハ即高若訥ガ尺ナレドモ【律呂新書ニ、「今司馬公所レ傳此尺者、出二於王莽之法錢一、蓋丁度所レ奏高若訥所レ定者也、」ト云ヘリ】其比挍少シノ牴牾アルハ、算法ニテ計ラズ、目巧ニテ定メシ故ナリ、【司馬光ガ圖、皆豪氂ヲ云ハザルニテ、算法ヲ以テ計ラザルヲ知ル】若司馬光ヲシテ曲尺ニテ度ラセタランニハ、必七寸六分ト云フベシ

又漢書【律暦志】ニ嘉量ヲ深尺ト云ヘリ、【是王莽ガ銅斛ニテ荀勗ガ挍セシモノナリ】コノ量淸マデ傳ハリタルヲ西淸古鑑ニ載セテ、「深今尺七寸二分」ト云ヘリ、【其圖中卷ニ出ス】淸ノ今尺ハ、曲尺一尺〇六分ナレバ、【詳ニ下ニ見ユ】ソノ七寸二分ハ曲尺七寸六分三氂二毫ナリ、是ハ尺度ノ爲ニ度リシニアラザレバ、大凡ニ云ヘルモノナルベシ、「是書諸器ヲ度リシニ、皆氂豪ヲ云ハザルニテ、大凡ニ云ヒシヲ知ルベシ、曲尺七寸六分ヲ淸ノ今尺ニテ度ル時ハ、七寸一分六氂九豪八絲一忽强ナレバ、大凡ニ計リタランニハ、七寸二分ト云フベシ】故ニ今ハ王莽ガ錢ト洸形ガ圖トニヨリテ、曲尺七寸六分ト定ムルナリ、【下ニ載セタル慮虒尺ハ、漢官尺ナリ、隋書ニ漢官尺ハ「比二晉前尺一一尺三分七豪一」トアルニヨリテ、慮虒尺ヨリ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分一氂〇三絲六忽强、又王氷ガ云フ所ノ古尺ヲ漢官尺トシテ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分三氂三豪四絲三忽有奇、又法隆寺ノ尺八ヨリ起シタル唐小尺ヲ玉海ニヨリテ晉前尺ノ一尺〇六分三氂トシテ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分〇四豪二絲六忽餘、又

コノ唐小尺ヲ即宋氏尺トシ、隋書ニ「宋氏尺比ニ晉前尺六分四氂ニ」トアルニヨリテ、周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸五分九氂七毫一絲一忽餘ナリ（唐小尺ハ即宋氏尺ナルコト下ニ詳ニス）是等ヨリ求ムルモ大様違ハズ

漢官尺　後漢ノ章帝ノ時作リシ尺ヲ漢官尺ト云フ、曲尺七寸八分三氂三毫三絲二忽【隋書（律暦志）ニ漢官尺實比ニ晉前尺一尺三分七毫ニ蕭吉樂譜云、漢章帝時零陵文學史奚景於ニ冷道縣舜廟下ニ得ニ玉律ニ度爲ニ此尺ニ」ト云ヘリ、晉書（律暦志）略同ジ、但比ニ晉前尺ニ云々」ト云フコトハ無クテ、「以校ニ荀勗尺ニ勗尺短四分、漢官始平兩尺、長短度同」トアリ、是ニヨリテ計レバ曲尺ノ七寸九分一氂六毫六絲六忽不盡ナリ、按ズルニ大戴禮注ニハ、コノ事ヲ明帝ノ時ト云ヒタレドモ、風俗通漢書孟康注宋書樂志等皆章帝ノ時トアルコト、蕭吉樂譜ト同ジケレバ、明帝ノ時ト云ヒシハ誤ナルベシ、又按ズルニ玉律ニヨリテ改メ作リシ尺ノ晉前尺ノ一尺〇三分〇七毫ナルヲ以テ見レバ、章帝ノ時稍長シテ一尺〇四五分ニモ至リシ故ニ、玉律ニヨリテカクハ改メタルナラン、然レドモ其尺ノ三分〇七毫長カリシヲ見レバ、彼玉律モ猶後漢ノ物ニテ、前漢以上ノ物ニハアルベカラズ【清ノ孔尚任ガ得タル慮虒ノ銅尺ハ【孔尚任ガ湖海集ニ、漢銅尺記アリ、其略ニ「江都閔義行博雅好古、所レ藏銅尺、一朱碧繡錯、爲ニ賞鑒家所レ玩、余既得レ之、乃不下敢以ニ玩物ニ蓄上レ焉、此有レ文曰、慮虒【本注】音廬夷】銅尺建初六年八月十五日造、慮虒乃今五臺邑、建初則東漢章帝年號也、考、章帝時、冷道舜祠下得ニ玉律ニ以爲尺與ニ周尺ニ同、因鑄爲ニ銅尺ニ頒ニ郡國ニ謂ニ之漢官尺ニ、此或其遺與」ト云ヘリ、按ズルニ隋志ニハ、「漢官尺實比ニ晉前尺一尺三分七

豪二」ト云ヒ、晉志ニハ「按ニ荀勗尺ハ勗尺短四分」ト云ヘリ、然ルヲ孔氏ノ漢官尺ヲ「與ニ周尺一同」ト云ヒシハ、何ニ據リタルニカ、「因鑄爲ニ銅尺一頒ニ郡國二」ト云フ事モ出所ヲ見ズ、疑ラクハ慮虒銅尺ハ即漢官尺ナルコトヲ固クセントテ、如レ此云ヒ、又此尺ノ光輝ヲ增ントテ、「與ニ周尺一同」ト云ヒシニテ、皆孔氏ノ强說ナルベシ、此尺ノ事ヲ王子禎ガ居易錄ニ、「國士監博士孔尙任字東塘曲阜聖一裔、博一雅好古、丙寅丁卯間、從ニ故工部侍郞孫岷瞻ニ【在豐】治ニ下河一、在ニ江都一、得ニ漢銅尺一」ト云ヘリ、然ラバ孔尙任ガ此尺ヲ得タルハ、康熙二十五六年ノ間ノコトナリ】其長サ曲尺七寸八分四釐四豪、【孔尙任ガ周尺辨ニ、此尺ヲ「當ニ今工匠尺七寸四分一、當ニ今裁尺六寸七分二」ト云ヘリ、淸工匠尺ハ即淸今尺ニテ、曲尺ノ一尺〇六分テレバ、其七寸四分ハ、曲尺七寸八分四釐四豪ナリ、又友人伊澤蘭軒（信恬）淸ノ裁尺ヲ藏ス、淸今尺ヲ以テ比ブルニ、淸今尺ノ七寸四分ハ其六寸六分七釐餘ニ當レバ、孔氏ガ言ト略合ヘリ、又通藝錄ニ、江永ガ言ヲ引テ、「曲阜孔氏所レ藏慮虒銅尺、以較ニ此晉尺一、長二一分强」ト云ヘリ、晉尺ハ秦熺ガ款識ニ載セタル高若訥ガ尺ニシテ、淸今尺ノ七寸一分六釐九豪八絲一忽强、慮虒尺ハ淸今尺ノ七寸四分ナレバ、淸今尺ニテハ二分三釐〇一絲九忽弱長キヲ云ヘルニテ、晉前尺ヨリ計レバ三分二釐一豪〇五忽餘長キナリ、隋志ニ漢官尺ヲ「比ニ晉前尺一尺三分七豪二」ト云ヒシト、纔ニ一釐四豪有奇ノ異ナリ、又翁方綱ガ兩漢金石記ニ、內者雁足鐙ヲ載セテ、「以ニ建初尺一度レ之、通計高六寸、以ニ今營造尺一度レ之、通高四寸四分耳、」ト云ヘリ、今營造尺モ今工匠尺ト同ジク即淸今尺ナリ、淸今尺ノ四

寸四分ヲ慮虒尺ノ六寸トスレバ、慮虒尺ノ長サ淸今尺ノ七寸三分三氂三豪三絲三忽不盡ニテ、孔尙任ガ度リシニ比ブレバ、六氂六豪六絲六忽不盡短シ、恐ラクハ此鐙慮虒尺ノ六寸ト云ヒタレドモ、實ハ五寸九分七八氂ニテ淸今尺ニテ度レバ、四寸四分一二氂ナリシヲ收メテ、カクハ云ヒシナルベシ】卽漢官尺ナリ、【建初ハ章帝ノ年號ニテ、其長サモ略合ヒタレバ、慮虒尺ノ漢官尺ナルコト疑無シ、然ルニ兩漢金石記ニ、「沈冠雲著ニ周官祿田考一、所レ繪古尺圖、實與ニ此建初尺一無レ二、冠雲所レ摹初非ニ此建初尺一、而今驗ニ其圖一正相合、則建初尺之卽建武尺尤爲レ足レ信矣」ト云ヒ、淸ノ錢塘ガ律呂古義ニ「今曲阜孔氏所レ藏漢慮虒銅尺、建初六年八月造、當ニ今工匠尺七寸四分一、與ニ晉志云晉前尺卽劉歆鐘律尺、（鐘律尺ハ銅斛尺ノ誤ナリ）建武銅尺者一正同、卽司馬公家周尺亦無レ不レ同也」、ト云ヒ、積古齋鐘鼎款識ニ、周槃ガ言ヲ引タルニモ、曲阜孔氏所レ弆銅尺與ニ冠雲所レ用尺一同」ト云ヒ、金石萃編ニモ慮虒尺ヲ「按ニ建武尺一豪氂無レ爽」ト云ヒタルハ皆周官祿田考ノ圖ヲバ度ラズシテ、沈彤ガ誤テ今尺七寸四分ト云ヘル言ニツキテ、彼秦熺ガ款識ノ尺モ慮虒尺モ共ニ、淸今尺ノ七寸四分ナリト思ヒテ、カクハ誤リシナルベシ、（沈彤ガ言ノ誤ナルコトハ上ニ辨ゼリ）サレドモ江永ハ慮虒尺ヲ「較ニ晉尺一長二分强」ト云ヒ、淸ノ陳經ガ求古精舍金石圖ニハ、「建初尺與ニ晉尺略異」トモ云ヘリ、又西淸古鑑ニ王莽ガ銅斛ヲ「深今尺七寸二分」トアレバ、（實ハ七寸二分弱ナルベキコト上ニ云ヘリ）今尺七寸四分ナル慮虒尺ヲ卽晉前尺・銅斛尺・建武尺・司馬光ガ尺（卽高若訥ガ尺ナリ）トシタルハ誤ナリ、是ハ孔尙任ガ慮虒尺ヲ一與ニ周尺一同」ト云ヒシ誣說ヲ承テ誤リシモノナルベシ、律呂正義ニ載セタル淸今尺

ヲ以テ、周官祿田考ノ圖ヲ度リ見バ、其誤辨ゼズシテオノヅカラ明ナリ、】又唐ノ王冰ガ云ヒシ古尺モ略同ジケレバ、是モ漢官尺ナルベシ、【素問(六節藏象論)ノ注ニ、史記律書ニ「黄鐘之管九寸」トアルヲ引キテ、「古之九寸今之七寸三分」ト云ヘリ、唐ノ大尺ノ七寸三分ハ曲尺七寸〇八氂一豪ニテ、ソレヲ九寸トシタル古尺ハ、曲尺七寸八分六氂七豪七絲七忽不盡ナレバ是モ漢官尺ナルベシ、氂豪ヲ云ハザルハ大凡ニ計リタルベケレバ、少シノ異ハ有ルベシ

[魏尺] 魏ノ尺ハ【三國ノ魏ナリ、曹魏トモ云フ】曲尺七寸九分五氂七豪二絲【隋志ニ魏尺杜夔所レ用調律尺、比ニ晉前尺一尺四分七氂、魏陳留王景元四年、劉徽注ニ九章ニ云、王莽時劉歆斛尺弱ニ於今尺ニ四分五氂、比ニ魏尺ハ其斛深九寸五分五氂、即荀勗所レ云杜夔尺、長ニ於今尺ニ四分半是也」、ト云ヘリ(今本ノ隋志ニハ四分五氂ナ誤リテ四寸五氂トアリ、今ハ文獻通考ニ引タルト晉志トニ依リテ改ム) 今傳ハル九章算術注ヲ考ルニ、此ニ引タルハ商功ノ條ノ文ナリ、今本ニハ「王莽斛於ニ今尺ニ爲レ深九寸五分五氂」トアリテ、「劉歆斛尺弱ニ於今尺ニ四分五氂」ト云フ文ハ無シ、「杜夔尺長ニ於今尺ニ四分半」トアルハ「長ニ於古尺ニ」トアリシヲ誤リタルナリ、隋志ニ又徐廣・徐爰・王隱等ガ晉書ヲ引テ、荀勗後漢ヨリ魏ニ至リテ、尺ノ古ヨリ長キコト四分有餘ナルヲ知ルト云ヘル(全文下ニ引リ) 即此事ナリ、晉志ニモ「即荀勗所謂今尺長四分半是也」ト云ヘリ、按ズルニ「魏景元四年、劉徽注九章」ト云フコト、晉書モ同ジ、然レドモ九章算術ノ方田ノ注ニ、晉ノ武庫中ニ、漢ノ王莽ガ作リシ銅斛ノアリシコトヲ云ヘバ、劉徽晉ニ入リシ後、又增損アリシナリト、四庫全書提要ニ云ヘリ】漢

宮尺ノ年ヲ經テ譌長セシナリ

晉前尺 晉ノ時モ猶此尺ヲ用ヒシニ樂律ノ和セザリシカバ、荀勗尺ノ譌長シタルヲ考ヘ知リテ、古器古尺古錢ニ依リテ改メ作レリ、【隋志候氣ノ條ニハ、「至二于後漢一尺度稍長、魏代杜夔亦製二律呂一、以レ之候レ氣、灰悉不レ飛、晉光祿大夫荀勗得二古銅管一、校二所レ制、長レ古四分、方知不レ調事由二其誤一乃依二周禮更造二古尺一用レ之、定レ管聲韻始調、」ト云ヒ（荀勗ガ尺ノ銘ニヨレバ古銅管トアルハ古玉管ノ誤ナルベシ） 審度ノ條ニハ、「周尺・漢志王莽時劉歆銅斛尺・後漢建武銅尺・晉泰始十年荀勗律尺、爲二晉前尺一祖沖之所レ傳銅尺（祖沖之ハ劉宋ノ時ノ人ニテ其傳ヘタリシ銅尺ハ、即荀勗ガ作リシ尺ナリ） ヲ皆同ジトシ、又徐廣・徐爰・王隱等ガ晉書ヲ引テ、「晉武帝泰始九年、中書監荀勗校二大樂一、八音不レ和、始知レ爲下後漢至レ魏尺長二於古一四分有餘上、勗乃部二著作郎劉恭一、依二周禮一制レ尺、所謂古尺也、依二古尺一更ヨ鑄銅律呂一、以調二聲韻一、以レ尺量二古器一、與二本銘尺寸一無レ差、又汲郡盜發二魏襄王冢一、得二古周時、玉律及鐘磬一與二新律一聲韻闇同、于時郡國或得二漢時故鐘一、吹二新律一命レ之皆應」ト云ヒ、文梁武帝ノ鐘律緯ヲ引テ、祖沖之所レ傳銅尺、其銘曰、晉泰始十年中書考二古器一揆レ校、今尺長四分半、所レ校古法有二七品一、一曰、姑洗玉律・二曰、小呂玉律・三曰、西京銅望臬・四曰、金錯望臬・五曰、銅斛・六曰、古錢・七曰、建武銅尺・姑洗微强、西京望臬微弱、其餘與二此尺一同、【本注 銘十二字】此尺勗新尺也、今尺者杜夔尺也、」ト云ヘリ、尺度ノ譌リシヲ改正スルコト、是ヲ始トス】其長サ曲尺七寸六分、所謂晉前尺ナリ、【此尺後世傳ハラズ、其攷ヘシ古器モ今知ルベカラザレドモ、王莽ガ銅斛ト錢トニヨリタレバ、其長

サ曲尺七寸六分ナルコト知ルベシ】是ニヨリテ裴頠度量權衡ヲ改ムベシト奏シケレドモ用ヒラレザリキ、【晉書裴頠傳ニ、「勗之脩ニ律度一也、檢ニ得古尺一短ニ世所レ用四分有餘、頠上言宜レ改ニ度量大醫權衡一、不レ見レ省」、ト云ヘリ】

〔始平銅尺〕荀勗彼尺ニテ鐘律ヲ作リシニ、阮咸ハ其聲ヲ高シト譏レリ、其後始平ト云フ處ニテ、地ヲ掘リテ銅尺ヲ得タリシニ、荀勗ガ尺ニ按ブレバ、勗ガ尺ハ四分短カリシカバ【荀勗ガ尺ニ按ベシニ荀勗ガ尺四分短クバ、荀勗ガ尺ハ始平ノ尺ノ九寸六分ナリ、然ラバ始平ノ尺ハ荀勗ガ尺ニ比ブレバ、一尺〇四分一氂六豪六絲六忽不盡ニテ、曲尺七寸九分一氂六豪六絲六忽不盡ナリ】時人阮咸ガ音律ニ妙ナリシヲ感ジタリトゾ【隋志ニ傳暢ガ晉諸公讃ヲ引テ、「荀勗造ニ鐘律一時、人並稱ニ其精密一、唯陳留阮咸譏ニ其聲高一、後始平掘レ地得ニ古銅尺一、歲久欲レ腐、以按ニ荀勗今尺一短四分、時人以レ咸爲レ解、」ト云ヘリ（今本ノ隋志ニハ四分ノ上ニ按字アリ衍ス、今世說注ニ引タルニヨリテ刪レリ）此事ヲ晉志ニハ、「勗作ニ新鐘律一、與ニ古器一諧レ韻時、人稱ニ其精密一、惟散騎侍郎陳留阮咸譏ニ其聲高一、高則悲、非ニ興國之音一亡國之音、亡國之音悲以思、其一人一困、今聲不レ合レ雅、懼非ニ德正至和之音一、必古今尺有ニ長短一所レ致也、會咸病卒、武帝以ニ勗律與ニ周漢器一合上故、施ニ用之一後始平掘レ地得ニ古銅尺一、歲久欲レ腐、不レ知レ所レ出ニ何代一、果長ニ勗尺一四分、時人服ニ咸之妙一、而莫ニ能厝ニ意焉、」トアリ、晉志ニ度量權衡ヲ云ヒシハ、皆隋志ノ文ヲ節略シテ載セタリト見ユルニ、此處ノミ隋志ヨリ委シキハ別ニ據リドコロアリシナラン、今並ベ擧テ考ニ備フ】然レドモ荀勗ガ尺ハ、古器ニ依リタレバ、其尺

ニテ作リシ律管、周漢ノ樂器ト、其聲韻同ジカリシナリ、【隋志ノ文上ニ引リ】サレバ其尺正度ヲ得メリシコト明ラケシ、【武帝阮咸ガ議ヲ用ヒズシテ、荀勗ガ律ヲ施行セシハ誠ニ然アルベキ事ナリ】阮咸ガ律ハ、始平ニテ得シ尺ニ合ヘルノミニテ、正律ニハアラザリシナリ、【晉書ニ此事ヲ論ジテ、「勗於二千歲之外一、推二百代之法一、度數既宜聲韻、又契可レ謂切密信而有レ徵也、而時人寡レ識、據二無レ聞之一尺一、忽二周漢之兩器一、雷臧同否、何其謬哉」ト云ヒシハ、ゲニサルコトナリ、荻生氏ノ度考ニ「按阮咸素好二音律一世傳樂器號二阮咸一者、謂咸所レ造、（此說誤ナリ、然レドモココニ用無ケレバ論ゼズ、）其器非二雅樂所一レ用、未レ知咸於二音律一如何、世又傳下咸譏二荀勗一之言上、然未レ知下咸以二何尺一爲上レ是、咸死後始平得二古銅尺一、於レ是世爭稱二咸之妙一、然非下咸以二此尺一爲上レ善、畢竟世人臆度之言無レ憑甚矣、但世賤二荀勗之爲一レ人、而晉尋喪亂、咸爲二竹林之一一、時論附レ之、故此說遂傳耳、羿爲二篡逆一、而射稱二萬世一（夏后相ヲ滅シテ其位ヲ簒ヒシ羿ハ、十日ヲ射タル羿トハ別人ナレバ、此ニ云フ所ハ誤レリ、然レドモ今用無ケレバ詳ニ辨ゼズ、）古不二以レ人廢一レ言、況藝乎」ト云ヘリ、是論モ理明ナリ、按ズルニ、隋志ニ晉時始平掘レ地得タル古銅尺ヲ漢官尺ト同ジトシ、晉志ニモ「漢官・始平兩尺長短度同」ト云ヘリ、今計ルニ、始平尺ハ漢官尺ヨリハ八釐三豪三絲四忽餘長ケレバ、其實ハ古尺ニハアラデ、即漢官尺ノ少シク爲長セシ者ナルベシ、又按ズルニ晉書阮咸傳ニ「荀勗每與レ咸論二音律一、自以爲レ遠不レ及也、疾レ之出補二始平太守一」トアリ、荀勗ハ古器ニヨリテ律ヲ定メシニ、阮咸ガコレヲ高シト議リシハ己ガ耳ヲ以テ計リシノミニテ、別ニ徵スル所無キヲ以テ見レバ、荀勗ガ律ヲ定メシ時、阮咸無根ノ異說ヲ出シテ是ヲ議リシニ、雷同

スル人モ多カリシカバ、音律ヲ定ムル妨ナリシ故、阮咸ヲ出シテ始平太守ニ補シ、其障ヲ除キシモノナラン、荀勗阮咸ト律ヲ論ゼシニ遠ク及バザリシカバ、疾ミテ始平太守ニ補セシトアルハ、カノ「以レ咸爲レ解」ト云ヒシ類ナルベシ、又阮咸ガ始平太守ニ補シタリシニ依リテ考フレバ、後ニ始平ニテ掘得シ尺ハ、荀勗ノ定メシ尺ヲ阮咸ガ肯ハズシテ、別ニ作リシ尺ノ地中ニ埋レタリシニハアラザルニヤ

[田父玉尺] 其後田父ノ地中ヨリ得タリシ玉尺ハ、曲尺七寸六分五氂三豪二絲【隋志ニ晉田父玉尺、實比ニ晉前尺一尺七氂一世說稱有ニ田父、於ニ野地中一得ニ周時玉尺一、便是天下正尺、荀勗試以挍ニ己所レ治金石絲竹一、皆短挍ニ一米一」ト云ヘリ（今本ノ隋志ニ「挍已所治」ヲ「挍尺所造」トアリ、字形ノ近クテ譌リシナリ、今世說ニヨリテ改ム、晉志ニモ「挍已所治」トアレバ今本ノ隋志ハ轉寫ノ誤ナルコト疑無シ）按ズルニ此尺ヲ周時玉尺トアレドモ、建武尺ヨリ曲尺五氂三豪二絲長ケレバ、周ノ時ノ物ニハアラデ、後漢ノ初ツガタ、イマダ譌長甚シカラザリシホドノ物ナルベシ、荻生氏度攷ニ「世說即術解篇載レ之、以爲ニ周時玉尺一只是相傳言レ之、以爲ニ天下正尺一、亦劉義恭語別無レ憑、隋志亦疑而不レ決、以下其比ニ晉前尺一少上證一左、故列ニ第二一」ト云ヘリ、サモアルベキコトナリ】是ニヨリテ尙書古ヲ以テ正スベシト奏シケルニ、潘岳ガ今ノ尺ハ用ヒ慣レテ久シケレバ改ムベカラズト云ヒシヲ、摯虞ハ奏スル所ノ如クスベシト駁シタリ、【晉書摯虞傳ニ、「將作大匠陳勰掘レ地得ニ古尺一、尙書奏、今尺長ニ於古尺一、宜ニ以レ古爲上正、潘岳以爲習一用已久、不レ宜ニ復改一、虞駁曰、昔聖人有ニ以見ニ天下之賾一、而擬ニ其形容一、象レ物制レ器以存ニ時用一、故參レ天兩レ地、以正ニ算數之紀一、依レ律計レ分、以定ニ長短之度一、其作レ之也有レ則、故用レ之也有レ徵、

考ニ步兩儀一、則天地無レ所レ隱ニ其情一、準ニ正三辰一、則懸象無レ所レ容ニ其謬一、施ニ之金石一、則音韻和レ諧、措ニ之規矩一、則器用合レ宜、一本不レ差而萬物皆正、及ニ其差一也事皆反レ是、今尺長ニ於古尺一幾ニ於半寸一、樂府用レ之律呂不レ合、史官用レ之曆象失レ占、醫器用レ之孔穴乖錯、此三者度量之所ニ由生一、得失之所レ取レ徵、皆絓閡而不レ得レ通、故宜ニ改レ今而從一レ古也、唐虞之制、同ニ律度量衡一、仲尼之訓、謹レ權審レ度、今兩尺並用、不レ可レ謂ニ之同一、知レ失而行、不レ可レ謂ニ之謹一、不レ同不レ謹、是謂レ謬レ法、非レ所ニ以軌レ物垂一レ則、示ニ人之極一、凡物有ニ多而易一レ改、亦有ニ少而難一レ變、亦有ニ改而致一レ煩、有ニ變而之一レ簡、度量是人所ニ常用一、而長短非ニ人所ニ戀惜一、是而易レ改者也、正ニ失於得一、反ニ邪於正一、一時之變永世無レ二、是變而之レ簡者也、憲章成式、不レ失ニ舊物一、季末苟合之制、異端雜亂之用、當ニ以レ時釐-改貞ニ夫一一者也、臣以爲宜レ如レ所レ奏、」ト云ヘリ、荻生氏度攷ニ、「陳勰掘レ地、得ニ古尺一、卽田父玉尺也、」トアリ】サレドモ尺ヲ改メシコトヲ載セズ、此後モ猶譌長ノ尺ヲ用ヒタレバ、其言用ヒラレザリシナリ、【按ズルニ尺ノ譌長シタランニハ、樂律ノタガフ事ハアルベシ、律ノ高低ニ依リテ國ノ興亡スルト云フハ、儒者ノ常言ナレドモ、國ノ興亡ハ政ノ善惡ニアリテ、律ノ高低ニアヅカルベキニ非ズ、サレドモ是ハ西土ノ常ナレバ、サモ云フベケレドモ、樂律ハ既ニ荀勗ガ尺ニヨリテ改メタレバ、（此事上ニ見ユ）今カク云フベカラズ、又測景尺ハ人ノ造リテ天度ヲソレニ合セシモノナレバ、始定ムル時ノ定ニ從ヒテ、何レノ尺ニテモ害無キモノニテ、尺ノ長短ニヨリテ、曆象ノタガフモノニ非ズ、今淸ノ古尺モ、今尺モ實ハ古尺トハ異ナレドモ、曆象ノ事ハ前

代ニ比ブレバ詳ヲ加ヘ、皇國近代ノ測影尺ハ、曲尺ヲ用フレドモ、測量タガフ事無キニテ、尺ノ長短ニアヅカラザルヲ知ルベシ、摯虞是等ノ事ヲ引出テ論ゼシハイカヾ、其奏セシ論當ラヌ事ナレバ、其言ノ用ヒラレザリシハ宜ナル哉、モシ摯虞古尺ヲ用フベキヲ論ゼントナラバ、今ノ尺ノ古ニ合ハヌコトヲ云ヒテ、既ニ荀勗ガ尺ヲ以テ律ヲ改メタル上ハ、常用ノ尺ヲモソレニ從ヒテ改ムベシ、常用尺ノ譌長シタルヲ知ナガラ、兩尺ヲ並ベ用ヒンハ、堯舜ノ制ニモ、孔子ノ訓ニモタガフベケレバ、奏スル如クスベシト論ジテアルベキナリ、然レドモ民間ニ用ヒ慣レタル尺ハ禁ズレドモ改メ難キモノト見エテ、後魏ニテ長尺ヲ用ヒシニ後ニ其古ニ非ザルヲ知リテ改メ、又後周ニテモ玉尺鐵尺ヲ造リタレドモ、猶市中ニハ後魏ノ長尺ヲ便ナリトシテ用ヒシ故、隋唐ニテハ遂ニ傳來ノ古尺ト、後魏ノ長尺トヲ並ベ行ヒシニ、後ニハ古尺ハ絶タルガ如クニテ、長尺ヲノミ用フルナリ、然ラバ摯虞ガ論ニ從ヒテ尺ヲ改メタリトモ、恐ラクハ行ハレザルベシ】

[晉後尺] 晉元帝江東ニ遷リシ後用ヒシ尺ハ曲尺八寸〇七氂一豪二絲、晉後尺是ナリ、『隋志ニ「晉後尺實比ニ晉前尺一尺六分二氂一、蕭吉云、晉氏江東所レ用、」ト云ヘリ】元帝ノ時劉曜僭號シテ國ヲ趙ト云フ、【詳ニ晉書載記ニ出ヅ】ソノ光初中ニ渾天儀土圭ヲ作リシ尺ハ曲尺七寸九分八氂[趙劉曜渾儀尺]【隋志ニ「趙劉曜渾-天-儀土-圭尺長ニ於梁法尺一四分三氂實比ニ晉前尺一尺五分一、梁武鐘律緯云、宋武-平中-原送ニ渾天儀土圭一云、是張衡所レ作、驗ニ渾儀銘題一、是光初四年、鑄土圭是光初八年作、並是劉曜所レ制、非ニ張衡一也、

制以爲レ尺、長二今新尺一四分三毫、短二俗間尺一二分、新尺謂二梁法尺一也」ト云ヘリ、劉曜ガ光初四年ハ、晉元帝ノ大興四年ニ當リ、光初八年ハ元帝ノ大寧三年ニ當レリ、梁法尺ヨリ計リシニヨレバ、曲尺七寸九分八毫二毫二絲八忽餘、梁俗間尺ヨリ計リシニヨレバ、曲尺七寸九分七毫六豪八絲有奇ナリ】荀勗ガ尺ハ、晉律ヲ調ヘシノミニテ、民間ニハ流布セザリシ故、江東ニテ用ヒシ尺モ、劉曜ガ尺モ、魏尺ト稍近シ、皆魏尺ヲ承用ヒシガ稍長シタルモノナリ、【晉志ニ「荀勗新尺惟以調二音律一、至二於人間一未二甚流布一、故江左及劉曜儀表並與二魏尺一略相依-準」、ト云ヘリ、江左ハ卽江東ノコトナリ

[宋氏尺] 晉亡ビテ宋ノ代、【南宋トモ劉宋トモ云フ】用ヒシ尺ハ、又少シク稍長シテ曲尺八寸〇八毫六豪四絲、謂ユル宋氏尺ナリ、【隋志ニ宋氏尺實比二晉前尺一一尺六分四毫一、此宋代人間所レ用尺、傳二入齊梁陳一以制二樂律一」ト云ヘリ、宋ノ錢樂之ガ渾天儀尺モ此尺ト同ジト同書ニ見ユ、卽當時ノ尺ヲ用ヒシナリ】南齊・梁・陳モ皆此尺ヲ用ヒタリ【隋志ノ文上ニ見ユ】

[梁法尺] 梁ニ又法尺ト云フ尺アリ、是ハ昔ヨリ周ノ時ノ物ト云ヒ傳ヘタル銅尺ト、古玉律トノ有リツルニ、銅尺ハ失タリシカバ、玉律ニ據リテ武帝ノ造リシ尺ナリ、祖沖之ガ傳ヘ持タル荀勗ガ尺ニ按シニ、半分長カリシト云ヘリ、曲尺七寸六分五毫三豪二絲【隋志ニ、「梁法-尺實比二晉前尺一一尺七毫一、梁武帝鐘-律緯稱主-衣從-上相承、有二周時銅尺一枚、古玉律八枚一、檢主-衣周尺東昏用爲二章信尺一、不二復存一、玉律一口蕭餘定七枚、夾鐘有二昔題刻一、迺制爲レ尺、以相參驗、取二細豪中黍一積、次訓ニ定今尺一最爲二詳

密一、長ニ祖沖之尺一按ニ半分一以ニ新尺一制爲ニ四器一名爲レ通、又依ニ新尺一爲笛以命ニ古鐘一按刻夷則以笛命、歆和韻夷則定合、」ト載セ、玉海ニモ「鐘律緯辨宗第一」ト引テ（荻生氏曰、辨宗蓋篇名）主衣云、從上相承、有ニ周時銅尺一枚古玉律八枚一尺不ニ復存一夾鐘玉琯有ニ昔題刻一迺制爲レ尺、以相參驗、長ニ祖沖之尺一按ニ半分一今爲レ鐘者、莫ニ能取レ齊、律管之妙罕レ有ニ能知一京房準法傳而莫レ曉、今以ニ新尺一證ニ分豪一製爲ニ四器一名レ之爲レ通、」ト載セタリ、荻生氏度考ニ玉海ニ引タルヲ載セテ、「隋書律曆志亦載レ之、但文錯誤、不レ可レ讀、故今載ニ玉海文一」ト云ヘリ、隋志ノ文讀メ難ケレバ、荻生氏ノ云ヒシ如ク錯誤アルナラン、然レドモ玉海ニ載セタルモ、鍾律緯ノ舊文ノマヽトモ見エザレバ、今兩ナガラ引テ考ニ備フ、一「但長ニ祖沖之尺一按ニ半分一」トアルニヨレバ、晉前尺ノ一尺〇〇五氂〇二絲五忽强ナレドモ、前ニ「比ニ晉前尺一尺七氂一」トアレバ、祖沖之ガ尺ヨリ半分長カリシト云ヘルハ、大凡ニ計リシナルベシ、按ズルニ玉律ニヨリテ作リシ尺ノ荀勗ガ尺ヨリ長キヲ見レバ、彼玉律、周ノ時ノ物ニハアラデ、後漢ノ初ノモノニテ、彼田父玉尺ト同時ノモノナルベシ】

［梁表尺］又表尺アリ、祖暅ガ造リシ尺ナリ、曲尺七寸七分六氂七豪九絲六忽有奇【隋志ニ「梁表尺實比ニ晉前尺一尺二分二氂一豪有奇一蕭吉云、出ニ於司馬法一梁朝刻ニ其度於影表一以測レ影、案此卽奉朝請祖暅所ニ算造一銅圭影表者也、經ニ陳滅一入レ朝、大業中議以レ合レ古乃用レ之、調律以制ニ鐘磬等八音樂器一」ト云ヘリ】此兩尺ハ調律測影ノ尺ニテ、通行ノ尺ニ非ズ、俗間ニテ用ヒシ尺ハ曲尺八寸一分三氂九豪六絲

梁俗間尺【隋志ニ「梁朝俗間尺長ニ於梁法尺一六分三氂、於ニ劉曜渾儀尺一二分、實比ニ晉前尺一尺七分一氂一」ト云ヘリ、コヽニ曲尺ニテ比校セシハ、晉前尺ニ比セシニヨレリ、劉曜ガ尺ヨリ計リタルハ、晉前尺ニテ計リシト全同ジ法尺ニテ計リシニヨレバ、曲尺八寸一分一氂九毫一絲九忽餘ナリ、按ズルニ梁武帝ノ鑄タリシ五銖錢ハ、肉好皆周郭アリ、泉志ニ梁ノ顧烜ガ譜ヲ引テ、「天監元年鑄、徑一寸」ト云ヘリ、今此錢ノ傳ハル者ヲ度リ試ルニ、徑曲尺八分二三氂ナレバ、顧氏ガ度リシハ即梁俗間尺ナリ】宋氏尺ノ少シ譌長セシモノナリ、【隋志宋氏尺ノ條ニ、「傳入ニ齊・梁・陳一、以制ニ樂律一、與ニ晉後尺及梁時俗尺・劉曜渾天儀尺一、略相依一近、當ニ人間恒用增損譌替之所一レ致也」、ト云ヘリ】

後魏尺 又晉ノ武帝ノ時、拓跋珪北狄ヨリ起リ國ヲ立テ、魏ト云フ【所謂後魏ナリ、又北魏トモ、元魏トモ云フ】其初ニ用ヒシ尺ハ曲尺九寸一分七氂三毫二絲、中ゴロ用ヒシ尺ハ曲尺九寸二分〇三毫六絲、後ニ用ヒシ尺ハ曲尺九寸七分三氂五毫六絲、【隋志ニ「後魏前尺實比ニ晉前尺一尺二寸七氂一、中尺實比ニ晉前尺一尺二寸一分一氂一、後尺實比ニ晉前尺一尺二寸八分一氂一、後尺卽開皇官尺及後周市尺」ト云ヘリ、中後ノ二尺ハ前ノ漸譌長シタルモノナルベシ、前尺ハ何ニヨリテ定メタルカ詳ナラズ、狄生氏ハ「此尺乃後世大尺祖也、蓋夷狄無レ尺、只傳ニ漢粟斛一、以レ此量レ米以爲ニ米斛一、後篡ニ中原一、驟聞ニ嘉量之制一、輙以ニ其斛一爲ニ嘉量一、以ニ漢粟法一算レ之、六斗四升、方一尺二寸、深一尺二寸以ニ六四一歸レ之、則積二千七百寸、故以ニ漢一尺二寸一爲ニ其一尺一、此云ニ一尺二寸七氂一者、譌ニ長七氂一也」ト云ヘリ、此尺後世ノ大尺ノ祖ナ

ルコトハ、荻生氏ノ言ヘルガ如シ、漢ノ粟斛ニヨリテ此尺ヲ造リシコトハ、如何アランオボツカナシ】

[後魏大和尺] 孝文帝ノ大和十九年ニ、【拓跋氏國ヲ建シヨリ、大和十九年マデ百十年ヲ經タリ】一黍ノ廣サヲ分トシ、九十黍ノ長サニテ銅尺ヲ定メタリ、【魏書高祖紀ト（高祖ハ即孝文帝ナリ）北史孝文紀トニ「大和十九年六月戊午詔改㆓長尺大斗㆒、依㆓周禮制度㆒、班㆓之天下㆒」ト云ヒ、魏書律曆志ニハ「大和十九年高祖詔以㆓一黍之廣㆒用成㆓分體㆒、九十黍之長以定㆓銅尺㆒」ト云ヘリ、又北史元匡傳ニ「高-陽-王雍等議以-爲、晉中書監荀勗所㆑造之尺、與㆓高祖所㆑定豪釐略同㆒」ト云ヘルニヨレバ、其長サ晉前尺ト同ジカリシコト知ルベシ、通鑑ニハ「改㆓用長尺大斗㆒」トアレドモ、北史張普惠傳ニ「高祖廢㆓大斗㆒去㆓長尺㆒」トアレバ、改用ト云ヒシハ誤ナルコト著シ

[後魏永平尺] 又宣武帝ノ永平年中ニ、【永平元年ハ大和十九年ノ後十三年ナリ】公孫崇・劉芳・元匡等、各黍ヲ累ネテ尺ヲ起シケルガ、三家皆同ジカラザリシニ、【公孫崇ハ縱黍、劉芳ハ横黍、元匡ハ一黍半周】芳ガ尺高祖ト同ジカリシカバ、遂ニ金石ヲ脩ムルコトヲ典ラシム【魏書ニ「永平中崇更造㆓新尺㆒、以㆓一黍之長㆒累爲㆓寸法㆒、尋太常卿劉芳受㆑詔、脩樂以㆓秬黍中者一黍之廣㆒即爲㆓一分㆒、而中尉元匡以㆓一黍之廣㆒度㆓黍二縫㆒、以取㆓一分㆒、三家紛競久不㆑能㆑決、而芳尺同㆓高祖所㆑制、故遂典㆑脩㆓金石㆒」ト云ヘリ、按ズルニ高祖ノ銅尺ハ九十黍ニテ、劉芳ガ尺ハ百黍ナリ、元匡ガ傳ニ「芳造㆑寸唯止㆓十黍㆒」トモ、「帝曰、劉芳學高㆓一時㆒、深明㆓典故㆒、其所㆑據者與㆓先朝尺㆒、乃寸過㆓一黍㆒」トモ云ヒシ是ナリ、然レバ

高祖ノ一寸ハ、劉芳ガ九分ニテ、高祖ノ一尺ハ劉芳ガ九寸ナレバ、寸ノ長サハ異ナレドモ、累ネシ黍ハ横ノ廣サヲ取リシニテ、其長サ全ク同ジカリシ故ニ、「同ニ高祖所ヲ制」トハ云ヘルナルナラン、大和ノ九十黍ノ尺ヲ晉前尺ニ同ジト云ヒシニヨレバ、劉芳ガ百黍ノ尺ハ晉前尺ニ比ブレバ、一尺一寸一分一毫一忽不盡ニテ、曲尺ノ八寸四分四毫四絲四忽不盡ナリ、然ルニ隋志ノ歷代ノ尺ヲ載セタル中ニ、大和・永平ノ兩尺ノ比挍ヲ云ハザリシハ疑ハシ】是等ノ尺ハ後魏尺ノ古ニ非ザルニヨリテ、黍ヲ累ネテ尺ヲ起シタルナリ、大和ノ時長尺ヲ改ムト云ヒタレバ、此時後魏尺ハ廢シタルガ如ク聞ユレドモ、後周ノ初ニ用ヒシ尺ノ魏ノ後尺ト同ジカリシヲ見レバ、【後周イマダ、玉尺ヲ造ラザリシ前、魏尺ヲ用ヒシコト隋志ニ見ユ、後周市尺モ魏後尺ト同ジカリシコト、同書ニ出ヅ、上文ニモ下文ニモ引リ】後尺ハ魏ノ亡ブルマデモ用ヒテ、周ニ入リシナリ、サレバ大和・永平ノ兩尺ハ、魏代ニモ民間マデ盡クハ行ハレザリシナラン

此後魏分レテ二ツトナリ、東魏ニハ【東後魏トモ云フ】孝靜帝ノ天平三年齊王高歡【コノ時高歡政ヲ攝シタリ、高歡卒シテ後其二子高洋、東魏ノ禪ヲ受テ國ヲ齊ト云フ、所謂北齊ナリ、是ヲ文宣帝トス、高歡ヲ追謚シテ獻武帝ト云フ、後主ノ時改メテ神武帝ト謚ス】請テ元匡ガ尺ヲ用ヒタリ、曲尺一尺一寸四分〇六毫〇八忽、北齊モ此尺ヲ用ヒシナリ、東魏尺【北齊書本紀ニ「天平三年八月丁亥、神武請均ニ斗尺ー班ニ於天下ー」ト云ヒ、隋志ニ「東後魏尺、實比ニ晉前尺一尺五寸八豪ー、此是魏中尉元延明累レ黍、用ニ半周

之廣ニ爲レ尺、齊朝因而用レ之」ト云ヘリ、按ズルニ元延明ハ文成帝ノ孫ニシテ、安豐王猛ガ子ナリ、勅シテ金石ヲ監セシメシコトハ、傳ニ載セタレドモ尺ヲ造リシコトハ見エズ、中尉ニナリタルコトモ載スルコト無シ、又隋志ノコヽニ載セシ文ノ次ニ魏書ヲ引テ、【中尉元匡以ニ一黍之廣一度ニ黍之二縫一、以取ニ一分一」ト云ヘリ、（是律曆志ノ文ナリ、詳ニ上ニ引リ）元匡ハ穆帝ノ孫ニシテ、陽平幽王新成、（文成帝ノ弟ノ子ナリ）度量ヲ論ゼシコトモ中尉ニナリタルコトモ傳ニ載セタレバ、元延明ト云ヒシハ、元匡ノ誤ナリ、此尺永平ノ時元匡ガ作リシ尺ナレドモ、當時ニハ用ヒラレズシテ、東魏ニ至リテ始テ世ニ用ヒシナリ、高歡ガ請テ用ヒシ尺ナレバ、北齊ニテモ是ヲ用ヒタリシニ、後周ニ滅ボサレテ、尺モ隨テ亡ビタリ】西魏ニハ宇文泰【後周閔帝元年ニ、文帝ト追諡ス】政ヲ攝シタリ、廢帝ノ元年ニ蘇綽ヲシテ音律ヲ正サセシニ、宋氏尺ヲ得テ定メシカドモ、未就ラザリシホドニ、宇文泰卒シ、其子宇文覺【閔帝ト諡ス】西魏ノ禪ヲ受ケ、國ヲ周ト云フ、【後周トモ、北周トモ、宇文周トモ云フ】此時閔帝喪ニ居リ、又北齊トノ軍モアリシ紛ニ、其事世ニ行ハレザリキ、【隋志和聲ノ條ニ、鐘律緯ヲ引テ、「西魏廢帝元年、周文攝レ政、又詔ニ尚書蘇綽一、詳ニ正音律一、綽時得ニ宋尺一、以定ニ諸管一、草創未レ就、會下閔帝受レ禪政由ニ冢宰一方有ニ齊冠上、事竟不レ行」一、ト云ヘリ】武帝ノ始マデモ魏尺ヲ用ヒシガ【後周市尺】【隋志ニ「後魏前尺・中尺・後尺・後周市尺、此後魏初及ニ東西分レ國、後周未レ用ニ玉尺一之前雜ニ用此等尺一」ト云リ、按ズルニ後周ノ初、魏後尺ヲ承用ヒ、其後玉尺・鐵尺ナド造リテ行ヒタレドモ、民間ニハ猶用ヒ慣レタル魏後尺ヲ用ヒシナリ、是ヲ後周市

尺ト云フ、然ルニ隋志ニ、「又後周市尺比ニ玉尺一尺九分三釐一」ト云ヘリ、是ニテ曲尺九寸六分一釐九毫二絲七忽餘ナレバ、魏後尺トハ一分一釐六毫三絲二忽餘ノタガヒ有リ、官尺ナラザレバ少シヅヽノ錯アリシナルベシ、隋志ニ又甄鸞算術ヲ引テ「周朝市尺得ニ玉尺九分三釐一」トアルハ玉尺ノ下ニ一尺ノ字ヲ脱セシナリ】保定年中ニ黍ヲ累ネテ尺ヲ造ラシメントシケレドモ、縱横ノ論定マラザリシニ、晉國ニテ倉ヲ脩ムルトテ、地ヲ掘リケレバ、古玉斗ヲ得タリシヲ正器ナリトテ、ソレニ據リテ律度量衡ヲ作リタリ、此尺後周ノ亡ブルマデモ用ヒシナリ、「後周玉尺」是ヲ後周玉尺ト云フ、曲尺八寸八分〇〇八絲】【是モ魏尺ノ古ニ非ザルヲ以テ、改メ作リシナリ、隋志ニ一「後周玉尺實比ニ晉前尺一尺一寸五分八釐一、後周武帝保定中、詔遣ニ太-宗-伯盧景宣上-黨-公長-孫紹-遠岐-國公俐-斯徵等一累レ黍造レ尺、縱横不レ定後因レ脩レ倉掘レ地、得ニ古玉斗一以爲ニ正器一據レ斗造ニ律度量衡一因用ニ此尺一大-赦改ニ元天和一百司行-用終ニ於大象之末一其律黃鍾與ニ蔡邕古籥一同」ト云ヘリ、同書嘉量ノ條ニハ一「後周武帝保定元年辛巳五月、晉國造レ倉獲ニ古玉斗一暨ニ五年乙酉冬十月一詔改制ニ銅律度一」ト云ヘリ、天和ト改元セシハ六年正月ナリ、按ズルニ其得タリシ玉斗何レノ時ノ物ナリシカオボツカナシ、尺度ノ譌長梁ノ俗間尺ニ過タルハ無シ、ソレダニ曲尺八寸一分餘ナルニ、曲尺八寸八分有奇ノ尺ニテ造リシ斗有ルベキニアラズ、然ラバ此斗ハ物ヲ量ル斗ニハアラザリシニヤ、「其律黃鐘與ニ蔡邕古籥一同」トハ、長孫無忌ガ言ニシテ、後周ノ時比校シタルニハアラズ、其古籥ハ、隋志ニ「從-上相承有ニ銅籥一一以レ銀錯-題、其銘曰、籥、黃鐘之宮、

長九寸、空圍九分、容ニ秬黍一千二百粒、稱重十二銖、兩之爲ニ一合、三分損益轉生十二律、祖孝孫云、相承傳是蔡邕銅籥」トアルモノナリ、按ズルニ此銅籥、後周ノ玉尺ト其長サ同ジカリシヲ見レバ、蔡邕ガ作リシ物ニハアラジ、魏ノ杜夔ガ時ダニ建武尺ヨリハ四分七氂ノ譌長ニテ、劉宋ニ至リテスラ、六分二氂ノ譌長ナルニ、蔡邕ガ一寸二分餘長カルベキ理無シ、思フニ此籥卽後周ノ時玉尺ニヨリテ作リシ管ノ隋唐ノ時マデ傳ハリタルヲ、蔡邕ガ作リシ籥ト誤リ傳ヘタルモノナルベシ、荻生氏モ「所謂蔡邕銅籥者亦無ニ他憑、乃以ニ劉曜爲ニ張衡比也」、ト云ヘリ

又建德六年【天和ノ後十一年ナリ】北齊ヲ平ラゲシ後、蘇綽ガ作リシ尺ヲ【上ニ見ユ】以テ律度量ヲ同ウシテ、天下ニ頒チ行ヒタリ、是ヲ「後周鐵尺」後周ノ鐵尺ト云フ、【其長サ宋氏尺ト同ジ、隋志ニ宋氏尺ト後周鐵尺トヲ並ベ擧テ、周ノ「建德六年平齊後、卽以此同ニ律度量頒ニ于天下」ト云ヘリ、後魏尺ノ古ニ非ザルニヨリテ、玉尺ヲ造リシカドモ、猶古ニ合ハザレバ、改メテ蘇綽ガ尺ニヨリシナリ、蘇綽ガ尺ニ依リシコト、達奚震・牛弘等ガ議ニ見ユ、下ニ引リ】此尺ヲ作リシ後モ、猶玉尺ヲ用ヒシニ、【荻生氏ハ、「周平齊之後、用ニ此鐵尺、作ニ律度量、其後改用ニ玉尺」ト云ヒタレドモ、鐵尺ヲ止メテ玉尺ヲ用ヒタルコト物ニ見ユルコト無シ、宣帝ノ時、達奚震・牛弘等玉尺ヲ止メテ鐵尺ヲ用フベキコトヲ議セシニヨリテ、カク云ヘルニヤ、然レドモ其議ノ始ニモ、今之鐵尺トアレバ、宣帝ノ時鐵尺。玉尺ノ兩尺トモニアリシコト明ナリ、建德六年ニハ鐵尺ヲ用フル定メナルニ、玉尺ヲ以テ量ヲ作リシコト見エタレ

バ(中卷ニ引リ)鐵尺ヲ作リシ後玉尺ヲモ止メズ、兩尺ヲ並べ用ヒシナルベシ】宣帝ノ時、【武帝ノ子】達奚震・牛弘等、玉尺ヲ止メテ鐵尺ヲ用フベキコトヲ議シケレドモ、定ムルニ及バズシテ亡ビタリ、【隋志ニ「宣帝時達-奚-震及牛弘等議曰、竊惟、權衡度量經邦懋軌、誠須下詳ニ求故實一考校得上衷、謹尋今之鐵-尺、是太-祖遣ニ尚書故蘇綽一所レ造、當時檢-勘用爲ニ前周之尺一、驗ニ其長短一、與ニ宋尺一符同、即以調ニ鐘律一、幷用均レ田度レ地、今以ニ上黨羊頭山黍一、依ニ漢書律曆志一度レ之、若以ニ大者一稠累依レ數滿レ尺、實ニ於黃鍾之律一、須ニ撼乃容一、若以ニ中者一累レ尺、雖ニ復小稀一實ニ於黃鍾之律一、不レ動而滿、計ニ此二事之殊一、良由ニ消息未レ善、其於ニ鐵尺一終有ニ一會一、且上-黨之黍有レ異ニ他鄉一、其色至-烏其形圓重、用レ之爲レ量・定不ニ徒然一、正以下時有ニ水旱之差一地有中肥瘠之異上、取レ黍大-小未ニ必得一レ中、案許愼解ニ秬黍體一、大本異ニ於常一、疑今之大者正是其中、累レ百滿レ尺、即是會レ古、實レ籥之外纔剩ニ十餘一、此恐闕徑或差、造レ律未レ妙、就若ニ撼動取下滿、論理亦通、今勘ニ周漢古錢一大小有レ合ニ宋氏渾儀一、尺度無レ舛、又依下淮南累ニ粟十二一成上寸、明ニ先王制法一、索レ隱鉤レ深、以レ律計レ分、義無ニ差異一、漢書食貨志云、黃金方寸、其重一斤、今鑄レ金校-驗鐵尺爲レ近、依レ文據レ理符-會-處多、且平レ齊之始已用宣-布、今因而爲レ定、彌合ニ時宜一、至ニ於玉尺一累レ黍以レ廣爲レ長、累既有レ剩實復不レ滿、尋ニ訪古今一、恐不レ可レ用、其晉梁尺量過爲ニ短小一、以レ黍實レ管、彌復不レ容、據レ律調レ聲、必致ニ高急一、且八音克-諧、明王盛-範、同ニ律度量一、哲-后通-規、臣等詳ニ校前經一、斟ニ量時事一、謂用ニ鐵尺一於レ理爲レ便、未レ及ニ詳定一、高祖受レ終」、ト云ヘリ(高祖ハ隋ノ高祖ナリ)】

隋ハ後周ノ玉尺ヲ受用ヒシニ、【是ハ樂律ノ尺ニテ民間ノ常用ニハ後周市尺ヲ受用ヒシナルベシ】牛弘・辛彥之・鄭譯・何妥等鐵尺ヲ用フベシト議シケレドモ、久シク決セザリシニ、開皇八年陳ヲ平ラゲテ後高祖江東ノ樂ヲ華夏ノ舊聲ナリトテ、是ヨリ玉尺ヲ廢シ、鐵尺ヲ用ヒテ樂律ヲ正シ、〔隋調律尺〕【隋志ニ高祖受レ終、牛弘・辛彥之・鄭譯・何妥等久議不レ決、既平レ陳上以二江東樂一爲レ善曰、此華夏舊聲、雖二隨レ俗改一變、大體猶二是古一法、祖孝孫云、平レ陳後廢二周玉尺一、律便用二此鐵尺律一、以二一尺二寸一即爲二市尺一」ト云ヘリ、隋志ニ「又後周鐵尺、開皇初調鐘律尺及平レ陳後調鐘律水尺」トアリ、水字ハ衍文ナリ、荻生氏ハ水尺ノ上ニ一ノ尺ノ字ヲ脫セリト云ヒシハ非ナリ、水尺ハ萬寶常ガ造リシ律尺ニシテ、是トハ同ジカラズ、（水尺ノコトハ下ニ詳ニス） 按ズルニ鐵尺ハ陳ヲ平ゲテ後用ヒシコト、上ニ引ル文ニテ明ラカナリ、陳ヲ平ラゲシハ開皇八年ナルニ、又重ネテ開皇初調鐘律尺トアルハ疑ハシ】

〔隋官尺〕後周ノ時ヨリ市中ニテ常用トセシ魏後尺ヲモ官尺トシテ【所謂開皇官尺ニテ鐵尺ノ一尺二寸ナリ、隋志ニ開皇官尺、即鐵尺一尺二寸ト云ヒ、又祖孝孫ガ言ヲ引シニモ、鐵尺律ノ一尺二寸ヲ市尺トスト云ヘル、（上ニ引リ、是ナリ） 其實ハ鐵尺ヨリ後周市尺ヲ計レバ、一尺一寸八分九氂五豪六絲三忽有奇、魏後尺ヲ計レバ一尺二寸〇三氂九豪四絲七忽餘ナルヲ、一尺二寸ト定メテ、開皇官尺ト爲シヽナリ】仁壽年中マデ兩尺ヲ並ベ用ヒシナリ、官尺ノ長サ曲尺九寸七分〇三豪六絲八忽【鐵尺ノ一尺二寸ヲ計リシナリ、按ズルニ晉ノ時荀勗尺ヲ改メ作リテ、音律ヲ正シケレドモ、常用ニハ從前ノ尺ヲ用ヒ、後周ノ

時玉尺ヲ作リ、後鐵尺ヲモ用ヒ、又市尺ナドモ有リツレバ、兩尺並ビ行ハルルコトモ、是ヨリ前ニモアリシカドモ、正シク兩尺ヲ用ヒヨト制セシコトハ無カリシニ、是時ニ至リテ兩尺ヲ並ベ用フル制ハ始マリシナリ、是ハ後周ノ時玉尺鐵尺ヲ行ヒシカドモ、民間長尺ニ慣レテ市中ニハ魏後尺ヲ用ヒ、隋ノ時モ初ハ玉尺ヲ用ヒ、陳ヲ平ラゲテ後ハ鐵尺ヲ以テ、樂律ノ尺トシタレドモ、後周ノ時ヨリ民間ニハ玉尺ヲモ鐵尺ヲモ便ナリトセズシテ、魏尺ノミ用ヒシカバ、民俗ノ改メ難キヲ知リテ、魏尺ヲモ官尺トシテ鐵尺ト並ベ用ヒシナリ、隋志ニ又「或傳、梁時有誌公道人、作此尺、寄入周朝、云與多鬚老翁周太祖及隋高祖、各自以爲謂己、周朝人間行用、及開皇初著令以爲官尺、百司用之、終于仁壽」ト云ヘリ、然レドモ後周市尺開皇官尺ハ、上ニモ云ヘル如ク魏尺ヲ受用ヒシニテ、別ニ造リシ尺ニ非ザレバ、誌公道人ノ事ハ好事ノ者ノ附會ニ出シナルベシ、荻生氏モ「誌公道人即寶誌和尚、其言顧靈、故周太祖・隋高祖亦遵用其言」ト云ヒタルハ、此尺ノ後魏以來市中ニ傳來リシ事ヲ考ヘザリシナリ】開皇十年ニ、萬寶常ガ造リシ水尺ハ律呂ヲ調フルノミノ尺ニシテ、他ニハ用ヒザリキ、曲尺九寸〇一毫三豪六絲【隋志ニ開皇十年、萬寶常所造律呂水尺、實比晉前尺一尺一寸八分六釐、今太樂庫及內出銅律一部、是萬寶常所造、名水尺律、說稱其黃鍾律當鐵尺南呂倍聲、南呂黃鍾羽也、故謂之水尺律」ト云ヘリ、按ズルニ後周ノ時火尺・木尺・土尺・水尺アリ、詔シテ水尺律樂ヲ施用セシコト、隋志和聲ノ條ニ見ユ、萬寶常ガ水尺律ノ名モ、是ニ依リシナルベシ、ソノ尺何ニ依リテカク定メシニカ詳ナラ

ズ、明ノ郎瑛ガ七修類稿ニ、此水尺ヲ木尺ニ作リテ、「以前多銅爲レ之、至レ此用レ木」ト云ヒシハ甚シキ誤ナリ】

〔大業調律尺〕煬帝ノ大業ノ時、鐵尺開皇官尺ノ兩尺ヲ止メテ、梁表尺ヲ用ヒシカドモ【隋志審度ノ條ニ、梁ノ表尺ヲ蕭吉ヲ引テ、「經ニ陳滅一入レ朝、大業中議以レ合レ古乃用レ之、調律以制ニ鐘磬等八音樂器一」ト云ヘリ、是ヲ和聲ノ條ニハ、「大業二年乃詔改用ニ梁表律一調ニ鐘磬八音之器一比ニ之前代一最爲レ合レ古」ト云ヒ、本紀ニハ「大業三年四月壬辰、改ニ度量權衡一並依ニ古式一」トアレバ、二年ニハ樂器ヲノミ改メ、三年ニ至リテ度ハ梁表尺ヲ常用トシ、量衡ハ開皇ノ三ガ一ヲ用ヒタルカ、又ハ紀志ノ內、何レカ年紀ヲ誤リタルモ知ルベカラズ、一事ノ紀ト志ト年紀ノ異ナルモ、史ニ常ニ有ルコトナリ】民間ニハ或ハ私ニ開皇官尺ヲ用ヒタリ【隋志ニ「周一朝人一間行一用及開皇初、著レ令以爲ニ官尺一、百司用レ之終ニ于仁壽一、大業中人間或私用レ之、」ト云ヘリ】

〔唐大小尺〕カヽリシカバ唐ハ隋ノ高祖ノ制ニ沿リ、鐵尺ト開皇官尺トノ兩尺ヲ兼用ヒタリ、所謂唐大小尺是ナリ、【律行事抄ニ「隋煬帝立ニ尺度秤一準レ古立レ樣、余親見レ之、唐一朝御レ宇任レ世、兩用不レ違ニ古典一」ト云ヒシハ是ナリ、唐令又張文收ガ斛銘ニハ、秬黍ニヨリテ尺ヲ起シタルコトヲ云ヒシカドモ、(共ニ全文度攷ニ引リ)隋志鐵尺ヲ「比ニ晉前尺一尺六分四釐一」ト云ヒ、玉海ニハ趙宋ノ司天監ノ表尺ヲ「此卽唐尺比ニ晉前尺一長六分三釐一」ト云ヘバ、其長略同ク、又開皇官尺ハ鐵尺ノ一尺二寸ナルニ(上文ニ見ユ)唐大尺モ小尺ノ一尺二寸ナレバ(度攷ニ見ユ)唐小尺ハ卽隋ニテ用ヒタル鐵尺

ニテ、唐大尺ハ開皇官尺ナルコト明ラケシ、サレドモ改マリタランニハ、制度モ改メズシテハ有ルベカラザレバ、其實ハ隋尺ヲ用ヒナガラ、唐令ニハ新ニ黍ヲ累ネテ小尺ヲ作リ、其一尺二寸ヲ大尺ト定メシ如クニハ云ヒシナリ、譬ヘバ律呂正義ニ淸ノ康熙ノ時、黍ヲ横ニ累ネテ古尺ヲ定メ、其黍ヲ縱ニ累ネテ今尺ヲ作リシト云ヒタレドモ、今尺ノ長サ明ノ營造尺ト全同ジキヲ見レバ、其實ハ今尺ハ明營造尺ニ法リ、其八寸一分ヲ古尺ト定メタルト同ジ、按ズルニ唐ハ煬帝ヲ亡ボシテコレニ代リタレバ、大業ノ尺ニヨルベキニ、ソノ尺ヲ用ヒザリシハ、大業ノ時尺ヲ改メシカドモ、民間ニテハ開皇官尺ヲ便トセシカバ、唐ニテハコレニ從ヒタルナラン、サレドモ開皇官尺ハ俗尺ナレバ、正シキ物ヲバ開皇ノ制ニナラヒテ、鐵尺ニテ度リシナリ、隋志和聲ノ條ニ、大業二年梁表律ヲ用ヒシコトヲ云ヒテ、「其制-度文-議並在ニ江都ニ淪喪」トアルニテ、大業ノ尺ノ唐ニ入ラザリシヲ見ルベキナリ】【但小尺ハ律ヲ調ヘ影ヲ測リ、冠ヲ製ルナドニノミ用ヒテ、內外官悉ク大尺ヲ用ヒタリ』【六典ニ出ヅ、唐尺ノコトハ、度攷ニ詳カニス】然レバ唐小尺ハ漢尺ノ【即周尺ニテ晉前尺モ同ジ長サナリ】漢官尺【晉前尺一尺〇三分〇七毫】魏尺【晉前尺一尺〇四分七釐】晉後尺【晉前尺一尺〇六分二釐】宋氏尺【晉前尺一尺〇六分四釐】ト次第ニ謁長セシ尺ヲ後周【鐵尺】隋【開皇調律尺】ト承來リシニ依リタルナレバ【南齊・梁・陳ニテモ此尺ヲ用ヒシナリ、然レドモ梁ノ尺ハ晉前尺一尺〇七分一釐ニテ宋氏尺ヨリハ又七釐謁長セリ】周尺ノ裔孫ナリ【故ニ唐人此尺ヲ周尺トモ、古尺トモ云ヘリ】又唐大尺ハ後魏尺ヲ後周【市尺】隋【開皇

官尺ト傳ヘタルニ依リシモノナレバ、拓跋氏ノ尺ノ流派ナリ

唐ニ又山東尺アリ【コノ尺ハ魏後尺・後周市尺・開皇官尺ニテ、即唐大尺ナルベシ、舊唐書職官志ニ、度量權衡ノコトヲ載セタルハ、唐令・六典・通典等同ジケレドモ、食貨志ニハ、凡權衡度量之制度、以ニ北方秬黍中者之廣一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、十尺爲レ丈」ト云ヒ、一尺二寸ヲ大尺トスルコトハ無クテ、量衡ノ事ヲ載セ、其後ニ「山東諸州以ニ一尺二寸一爲ニ大尺一、人間行ニ用之一」トアリ、唐ノ時小尺ノ正尺ナルコトヲバ知リタレドモ、山東ニテハ猶此尺ヲ用ヒシガ弘マリテ、遂ニ大尺ヲ常用トセシヲ云ヘルナリ、然ルニ律行事抄ニ、「唐朝文軌無レ二、及レ論レ用レ尺、五種不レ同」、トアルヲ資持記ニ釋シテ「五種者舊云、南呉尺【本注】短レ周二寸】姫周尺【本注】十寸爲レ尺】唐尺【本注】加レ周、二寸尺二爲レ尺】山東尺【本注】加レ唐二寸尺四爲レ尺】潞州羅柯尺【本注】加ニ山東二寸尺六爲レ尺】ト云ヘリ、「山東尺加レ唐二寸尺四爲レ尺」トハ、唐書ニ「山東諸州一尺二寸爲ニ大尺一」トアル尺ヲ大尺ノ一尺二寸ト思ヒ誤リシニハ非ザルカ、然レドモ程大昌ガ云ヒシ京尺ハ、其長サ大尺ノ一尺二寸ナレバ、資持記ニ載セタル山東尺ハ、其原ナルモ知ルベカラズ、然ラバ「加唐二寸」ト云ヒタルモ、誤ニハ非ザルニヤ尚能ク考フベシ、程大昌ガ云ヒシ京尺ハ下ニ見ユ】又江淮呉越ノ尺アリ、【コノ尺ハ宋氏尺・鐵尺ニテ、即唐小尺ナリ、孫思邈ガ千金方ニ、鍼穴ノ分寸ヲ論ジテ、「其尺用ニ夏家古尺一、司馬六尺爲レ歩、今江淮呉越所レ用八寸小尺是也」ト云ヘリ、夏家古尺トハ、荻生氏ノ「此謂下六朝遺尺存ニ于唐一者上、

其稱ニ六朝一爲ニ夏家一、猶如下隋高祖稱ニ六朝樂一、爲中華夏舊聲上也」ト云ヘル是ナリ、此尺雖長ナガラモ、周尺ノ孫嗣ニテ、六朝傳ヘ來リシ尺ナレバ、北狄ヨリ出タル大尺ニ對シテ、夏家古尺トハ云ヘルナリ、周禮注ニ、「司馬法曰、六尺爲レ歩、」トアレバ、コヽノ司馬ノ下ニモ法字アリシヲ脱セシナルベシ、八寸トハ大尺ニテ度リシナリ、隋ニテモ唐ニテモ大尺ヲ常用トシタルニ、江淮ニテハ宋氏尺・梁俗尺ヲ用ヒ慣レタレバ、大尺ヲ用ヒザルヲ云ヘルナリ、然レバ江淮尺ハ其長サ大尺ノ八寸三分二釐三毫三絲三忽不盡ナルヲ、孫氏ガ八寸ト云ヒシハ、其大數ヲ擧シナリ、資持記ニ載セシ南呉尺モ即是ナルベシ、然ルニ「短周二寸」ト云ヒシハ、「八寸小尺」トアルヲ小尺ノ八寸ト誤リシモノナルベシ、歴代ノ尺長短樣々ナレドモ、周尺ヨリ短キハアルコト無シ】

又潞州羅柯尺アリ【資持記ニ、「潞州羅柯尺加ニ山東一二一寸、尺一六爲レ尺」ト云ヘリ、此尺他書ニ見ユルコト無シ、按ズルニ潞州ハ河東道ニ屬シテ、モト魏周ノ地ナレバ疑ラクハ羅柯尺ハ、即後魏尺ナルヲ「尺六爲レ尺」トハ强テ五種ノ尺ヲ充ントテ、然云ヒシニハ非ザルカ、又宋ノ陳言ガ云フ所ノ京尺ハ、小尺ノ一尺六寸ナレバ、コノ「尺六爲レ尺」ト云ヒシ尺ノ北邊ニ傳ハリテ、金ニテ用ヒシヲ南宋ニテ京尺ト云ヒシニハ非ザルカ、尙考フベシ、陳言ガ京尺ノコトハ下ニ見エタリ】五代ニ至リテ周ノ王朴ガ律管ヲ定メシ尺ハ、曲尺七寸七分五釐九豪六絲【五代會要ニ周顯德六年正月、樞密使王朴ガ上疏ヲ載セテ、「以ニ臣曾學ニ律曆一、宣ニ示古今樂錄一、令ニ臣討論一、臣雖ニ不敏一敢不レ奉レ詔、遂依ニ周法一以ニ秬黍一挍ニ定

尺度一、長九寸虛徑三分、爲ニ黃鍾之管一、用所レ補雅樂旋宮八十四調一、幷ニ所レ定尺寸、所レ吹黃鍾管、所レ作律準議一、並上進」、ト云ヘリ、玉海ニ、「王朴律準尺比ニ晉前尺一、長二分一犛、比ニ梁表尺一短一犛」ト云ヒ、「又比ニ景表尺一短四分」ト云ヘリ、晉前尺ヨリ求メタルハ曲尺七寸七分五犛九豪六絲、梁表尺ヨリ求メタルハ曲尺七寸七分六犛〇一絲九忽餘、景表尺ハ即唐ノ測景尺・宋ノ司天監景表尺ナリ、是ヨリ求ムレバ曲尺七寸七分五犛五豪六絲五忽弱、此尺古尺ヲ再興シタルナレドモ、黍ヨリ起シタル故ニ、高若訥ガ漢錢ニテ起シヽ如クハ精シカラザリシナリ】是ハ律ヲ定メタルノミニテ通用ノ尺ニハアラズ【宋ノ建隆元年、新尺ヲ用フルマデ、此尺ヲ以テ樂律ヲ定ム】趙宋ニテハ唐ノ制ニ依リテ大小尺ヲ用フ、【皇祐新樂圖記ニ、天聖令ヲ引テ、「諸度以ニ北方秬黍中者一黍之廣一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、〔本注〕一尺二寸爲ニ大尺一尺一】十尺爲レ丈」ト云ヘリ、其文唐令ト全ク同ジケレバ、唐制ニ依リタルコト疑無シ】〔宋景表尺〕小尺ハ司天監ニテ影ヲ測ルニノミ用ヒテ【宋ノ司天監ノ景表尺ハ、即唐尺ニテ、晉前尺ヨリ六分三犛長カリシコト、丁度ガ上言ニ見ユ、既ニ度攷ニ引リ】大尺ヲ常用トスルコトモ、唐ト同ジ、【資持記ニ、「今朝私用ニ周尺一、公用ニ唐尺一」ト云ヒシ、今朝トハ宋朝ヲ指シタルナリ、公用大尺トハ、大尺ヲ常用トスルヲ云ヒ、私用周尺トハ江淮呉越ニテ小尺ヲ用フルヲ云ナラン】然レドモ大尺ノ長サ少シク謌長シテ、曲尺一尺〇二分一犛五豪二絲ナリ、〔宋布帛尺〕是ヲ三司布帛尺ト云フ、【又、大府寺尺トモ云フ、玉海ニ見ユ、又省尺トモ京尺トモ云フ、司馬光ガ圖ニ、「三司布帛尺、即是省尺、又名ニ

京尺、「當ニ周尺一尺三寸四分一、當ニ浙尺一尺一寸三分一」ト云ヘリ、是ニヨリテ周尺ヨリ求ムレバ曲尺一尺○一分八氂四豪、浙尺ヨリ求ムレバ曲尺一尺○二分一氂五豪二絲ナリ、律呂新書ト玉海トニハ、「比周尺ニ一尺三寸五分」トアリ、コレニヨレバ曲尺一尺○二分六氂、玉海ニ又「比ニ律準尺一長三寸二分強」ト云ヒシニテハ、曲尺一尺○二分五氂八豪許ナリ、何レカ正シカラン、詳ナラザレドモ、周尺ノ比按ハ二說同ジカラズ、律準尺ノ比按ハ强ト云ヒテ、正シク氂豪ヲ云ハズ、浙尺ヨリ求メタルハ、宋ノ楊輝ガ續古摘奇算法ニ載セシ圖ト全ク合ヘバ、（清ノ鮑廷博ガ知不足齋叢書ニ收メタル本ハ、寫節ノ本ニテ、尺圖モ縮寫ナレバ據ルニ足ラズ、今ハ朝鮮ノ刊本ニ從フ）浙尺ヨリ求メタルニ從ヘリ、朱載堉ガ律呂精義ニハ「宋大府尺以ニ大泉之徑一爲ニ九分一、今營造尺卽唐大尺、以ニ開元錢之徑一爲ニ八分一、宋尺之八寸一分爲ニ今尺之八寸一」ト云ヘリ、明營造尺ノ八寸ハ曲尺八寸四分八氂、是ヲ八寸一分トシタル大府尺ハ曲尺一尺○四分六氂九豪一絲三忽餘ナリ、又大泉ノ徑ヲ宋尺ノ九分トスルコト、朱氏ノ私說ナレバ、據ルニ足ラザレドモ、姑ク其說ニ從ヒテ、大府尺ヲ求ムレバ、朱氏ガ依リシ大泉ハ、十枚ヲ營造尺八寸九分ニ排スルコト、律學新說ニ見エタリ、營造尺ノ八寸九分ハ曲尺九寸四分三氂四豪ナレバ、大泉一枚ノ徑ハ曲尺九分四氂三豪四忽ナリ、是ヲ九分トシタル大府尺ハ曲尺一尺○四分八氂二豪二絲二忽不盡ナリ、二說共ニ司馬光・蔡元定・王應麟ガ說ニモ、楊輝ガ圖ニモ同ジカラズ、朱氏ノ見タリシ大府尺モシ其云フ所ノ如クナラバ、例ノ譌長セシ尺ナルベシ】

【浙尺】兩浙ノ間ニテハ、民間浙尺ヲ用フ、【浙尺ハ千金方ノ江淮吳越尺、資持記ノ南吳尺ノ譌長セシモノ

ナルベシ、【コノ尺ドモノコト上ニ詳ニス】司馬光ガ圖ニ、周尺ハ「當ニ浙尺八寸四分ニ」トアルニヨリテ、周尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸〇四菴七豪六絲二忽弱、農政全書ニハ周尺ヲ浙尺ノ八寸、鈔尺ノ六寸四分ニ當ルト云ヘリ、周尺ノ長サハ誤リタレドモ、浙尺・鈔尺ハ共ニ當時通行ノ尺ナレバ、浙尺ノ八寸ハ鈔尺ノ六寸四分ナルコトハ證トスベシ、今鈔尺ヨリ浙尺ヲ求ムレバ、九寸〇四菴ナリ、又明ノ浙江道紹興府餘姚縣ノ人朱之瑜、萬治中歸化シテ江戸ニ居タリシニ、中村欽、人ニ託テ鈔尺幷ニ彼國通行ノ尺ヲ求メシニ、長短二尺ヲ摹シ授ケテ云ヒケルハ、長キヲ官尺ト云フ、衣服ヲ裁縫フニ用フ、鈔尺モ是ニ近シ、短キヲ鄉尺ト云フ、宅ヲ建、或ハ器ヲ作ルニ用フト云ヘリ、是ヲ比ブルニ短ハ長ノ八寸、長ハ短ノ一尺二寸五分ナリ、其鄉尺ト云フハ卽浙尺ナリト、律尺考驗ニ見エタリ、按ズルニ明ノ裁衣尺ハ卽鈔尺ナルコト、律學新說ニ見エタルニ、鈔尺モ是ニ近シト云ヒタルハイカヾ、又浙尺ハ裁衣尺ノ八寸、裁衣尺ハ浙尺ノ一尺二寸五分ナラバ、浙尺八寸ハ裁衣尺ノ六寸四分ナルコト、徐光啓ガ比挍セシト同ジケレドモ、朱氏ハ裁衣尺ヲ曲尺一尺一寸五分半ト云ヘバ、其八寸ナル浙尺ハ九寸二分四菴ナリ、然レドモコノ裁衣尺律學新說ニ載セタル圖ニ比ブレバ、曲尺二分半長シ、明季ニハ謬長シタルカ、又ハ朱氏齎來リシ尺ノ正シカラザリシナラン、然ラバ曲尺九寸二分四菴ナル浙尺モ謬長セシ尺ナリ、又按ズルニ徐光啓ガ周尺ヲ鈔尺ト浙尺トニ比ベ、朱之瑜ガ鄉尺ト云ヒテ齎來リタルヲ見レバ、明ノ時モ浙江ニテハ此尺ヲ用ヒシコト知ルベシ、淸ニテモ浙ニテハ、今ニ此尺ヲ用フト見エタ

リ】又建隆新尺【玉海ニ、一學士竇儼編ニ古今樂事一、爲ニ正樂一、皇朝受レ命儼仍兼ニ太常一、建隆元年、詔レ儼專ニ其事一、儼乃改ニ周樂ニ太祖謂、雅樂聲高近ニ於哀思一、詔ニ和峴ニ討一論、峴奏議謂、西京銅望臬可レ按ニ古法一、卽今司天臺影表上有ニ銅臬一、下有ニ石尺一是也【本注】丁度謂卽一是唐一尺】今以ニ王朴所レ定尺一量、短ニ影一表上石尺一四分、知今雅樂之高皆由ニ於此一、帝乃令下依ニ古法一別造中新尺幷黃鍾九寸管上一ト云ヘリ、然レバ建隆ノ新尺ハ司天監ノ影表尺ト同ジ、卽唐小尺ヲ再興セシモノナリ【阮逸・胡瑗ガ尺【皇祐新樂圖記ニ、「臣逸・臣瑗所レ制聖朝樂尺、皆稟ニ聖旨一用ニ上一黨一羊一頭一山秬黍中者、一黍之廣一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、比ニ於大府寺見行布帛尺七寸八分六釐一、與ニ聖朝銅望臬影表尺一符同、」ト云ヘリ、按ズルニ此尺羊頭山ノ黍ヲ累ネテ定メシト云ヒタレドモ、其長サ影表尺ト符合セシト云フヲ見レバ、其實ハ百黍ノ廣サヲ累ネ試ミシニ、略影表尺ト同ジカリシカバ、卽影表尺ノ長サヲ以テ定メシナラン、影表尺ハ卽唐尺ナレバ（上ニ見ユ）曲尺八寸〇八釐六豪四絲ナリ、是ヲ布帛尺ヨリ計レバ、七寸九分一釐六豪〇四忽餘ナルヲ、布帛尺七寸八分六釐ト云ヘルハイカゞ、モシ布帛尺七寸八分六釐ナラバ、曲尺八寸〇二釐九豪一絲四忽餘ニテ、唐尺ニ比ブレバ、五釐七豪二絲五忽餘短シ、疑ラクハ皇祐ノ頃ニハ、布帛尺稍長シテ曲尺一尺〇二分九釐弱ニ至リシナラン、其尺ニテ計リシ故ニ、七寸八分六釐トハ云ヘルナルベシ】鄧保信ガ尺【玉海ニ「景祐三年六月丙寅、鄧保信上ニ所レ制樂尺幷龠一」ト云ヒ、律呂新書ニ、此尺ヲ縱ニ累百黍一、短ニ于大府尺一九分、長ニ于胡瑗尺一九分五釐一」ト云ヘリ、大府尺ヨリ

求ムレバ曲尺九寸二分九氂五豪八絲三忽强、胡瑗尺ヨリ求ムレバ曲尺八寸八分五氂四豪六絲有奇ニテ、四分四氂有奇ノ異アリ、然ルニ玉海ニハ、「以二王朴律準尺一爲レ率、則保信尺長一寸九分强一トアリ、是ニテハ曲尺九寸二分四氂許ニテ、大府尺ヨリ求メタルト略同ジケレバ「長二于胡瑗尺一九分五氂」ト云ヒシハ誤リナルベシ】ナドアレドモ、樂律ノ尺ニシテ、通行ノ尺ニアラズ』

[大晟樂尺] 徽宗ノ時ニハ大晟樂尺ヲ作リテ、律ヲ定メ、又天下ニ頒チ行ヒタリ【徽宗ノ指ノ長サヲ以テ起シタル尺ナリ、玉海ニ「崇寧三年正月二十九日、魏漢津言、伏羲以二一寸之器一名爲二含微一、其樂曰二扶桑一、女媧以二二寸之器一名爲二葦籥一、其樂曰二光樂一、黃帝以二三寸之器一名爲二咸池一、其樂曰二大卷一、三三而九、乃爲二黃鍾之律一、至二唐虞一未二嘗易一、禹效二黃帝之法一、以レ聲爲レ律、以レ身爲レ度、用二左手中指三節三寸一、謂二之君指一、裁爲二宮聲之管一、用二第四指三節三寸一、謂二之臣指一、裁爲二商聲之管一、第五指三節三寸謂二之物指一、裁爲二羽聲之管一、第二指爲レ民爲レ角、大指爲レ事爲レ祉、故不三用爲二裁レ管之法一、得二三指一合レ之爲二九寸一、則黃鍾之律定、餘律生焉、漢儒用二累黍之法一、晉末法廢、隋牛弘用二萬寶常水尺一、唐田疇周王朴並用二水尺之法一、今請二聖人三指一爲レ法、均レ絃裁レ管從レ之、大觀四年四月己卯、【[本注] 十一日】翰學張閣請レ頒二指尺于天下一、政和元年五月六日、頒二大晟樂尺一【[本注] 自二七月朔旦一行レ之】比二官小尺一短五分有奇一ト云ヘリ、文獻通考ニモ、「大觀四年、詔以二所レ定樂指尺一、頒二之天下一、其長短濶狹之數、以二今尺一計定、政和元年、詔二諸路轉運司一、以二所レ頒樂尺一製給二諸州一、州製以給二屬縣一、自二今年七月一爲レ始、毀二棄舊尺一、二

年臣僚上言、請以二大晟樂尺帝指一爲レ數、制二量權衡式一、頒二之天下一、仍釐二正舊法一、又言新尺既頒、請條内尺寸宜下以二新尺一經定上、仍令下二民間舊有斗升秤尺一限二半年一、首納上、出二限許一人告斷レ罪給レ賞」トアリ、玉海ニ官小尺ト云ヒシハ大府尺ノ事ナルベシ、南宋ニ京尺ト云フ長尺アレバ、ソレニ對シテ大府尺ヲ小尺トハ云ヘルナラン、（南宋ノ京尺ハ下ニ見ユ、司馬光ガ圖ノ京尺ニハ非ズ）今大府尺ヨリ五分有奇短キ長サヲ求ムレバ、曲尺九寸七分許ナリ、又律呂新書ニ、此尺ヲ「長二于王朴尺一二寸一分、和峴尺一寸八分弱、阮逸胡瑗尺一寸七分、短二于鄧保信尺一三分、大府帛尺四分」ト云ヘルニヨリテ、王朴尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸三分八氂九豪一絲一忽餘、和峴尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸五分許、和峴尺ハ即建隆新尺ナリ、阮逸胡瑗尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸三分九氂四豪一絲有奇、鄧保信尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸〇一氂六豪九絲五忽餘、大府尺ヨリ求ムレバ曲尺九寸八分〇六豪五絲九忽有奇ナリ、求ムル尺ニヨリテ少シノ異同ハ有ルベケレドモ、蔡氏ガ計リシ鄧保信尺ト大府尺トニテハ曲尺七分九氂許ノ異アルハ疑ハシ、荻生氏「短于」ノ二字大府帛尺ノ上ニアルベシト云ヘリ、鄧保信尺ヨリ三分長シトシテ求ムル時ハ、曲尺九寸五分七氂四豪七絲有奇ナレバ、其說從フベキニ似タリ】然ルニ紹興十六年ニ、【高宗ノ時ナリ】皇祐中黍尺ヲ以テ、樂器制度ノ準トシ【玉海ニ「紹興十六年五月十八日、給事中段拂等言、禮器局準二降下景鐘制度大晟樂書幷金字牙尺二十八量及太常少卿李周等所レ立碑刻大樂尺圖本一、付レ局參照、欲下依二樂書制度一、以二皇祐二年大樂中黍尺一爲上レ準、從レ之」、ト云ヘリ、制度ハ大晟樂書ニ依リ、尺ハ皇祐ノ中黍尺ヲ以テ度

リシナリ、皇祐中黍尺ハ阮逸・胡瑗ガ尺ニテ、即唐小尺ナリ】同三十二年、玉璽ヲ作リシニモ、此尺ヲ用ヒタリ、【玉海ニ「三十二年七月十一日、工部言、尊號玉寶廣四寸九分、厚一寸二分、用ニ皇祐中黍尺一」トアリ】後禮部祭祀ノ儀式ヲ攷チシニハ、造禮器尺ヲ用フ、曲尺一尺〇〇三釐二豪【玉海ニ「後禮部攷ニ祭祀儀式畫一、到造ニ禮器尺一、比ニ周尺一尺三寸二分一」トアリ、其長布帛尺ト略同ジクシテ、少シ短キヲ見レバ、布帛尺ノ譌長ナルヲ知リテ改正セシ尺ナルベシ】是等ニヨレバ、高宗ノ時ニハ大晟樂尺ハ廢セシコト知ラレタリ【徽宗宣和七年十二月、位ヲ皇太子ニ禪ル、是ヲ欽宗トス、欽宗位ニ即キ、年號ヲ靖康ト改ム、是歳金ニ汴京ヲ破ラレ、明年四月金人帝・太上皇后・妃・宗戚ヲモ虜ニシテ去ル、五月欽宗ノ弟康王順天府ニシテ位ニ即キ、之ヲ建炎ト改ム、是高宗ナリ、建炎ハ四年ニテ終リ、翌年改テ紹興ト號ス、大晟樂尺ハコノ靖康ノ亂ニ亡ビシナルベシ】又南宋ノ尺ヲ程大昌ハ官尺ハ【省尺トモ云フ】即浙尺ニシテ、淮尺ノ八寸、京尺ハ淮尺ノ一尺二寸ナリト云ヒ【演繁露ニ、「今雖ニ國有ニ度定一、俗不レ一レ制、曰ニ官尺一者、與ニ浙尺一同、僅比ニ淮尺十八一、而京尺者又多ニ淮尺一十二、公私隋レ事致レ用、元無ニ定則一」ト云ヘリ、コヽニ云フ官尺・浙尺ハ唐小尺ニテ、（此事下ニ詳ニス）司馬光ガ云ヒシ浙尺トハ、其長サ同ジカラズ、淮尺モ唐大尺ニテ、孫思邈ガ云ヘル江淮呉越尺ニハアラズ、京尺モ淮尺ノ一尺二寸ナレバ、是モ司馬光ガ云フ京尺ニアラズ】陳言ハ小尺ヲ以テ計ルニ、淮尺ハ一尺二寸、京尺ハ一尺六寸、樂尺ハ一尺二寸五分ト云ヘリ、【三因方ニ、「觀ニ今之尺一數等不レ同、如ニ周尺長八尺、京尺長一尺六寸、

淮尺長一尺二寸、樂尺長一尺二寸五分、並以二小尺一爲レ準、小尺自二三微一起、郤自可レ準、」トアリ、小尺ハ唐宋ノ令、皆秬黍ノ廣ヲ一分トシタレバ、漢書（律暦志）ニ「分者自二三微一而成」ト云ヒシ尺ナリ、然ラバ黍ニテ其長サハ知ラル丶ナリ、周尺八尺トアルハ八寸ノ誤ナリ、明ノ周定王ノ普濟方ニ、此文ヲ載セタルニモ八尺トアルヲ、律樂新說ニ引キテ八寸ニ作ルベシト云ヘルニ據ルベシ、周尺長八寸トハ宋人モ小尺ヲ即漢尺トシタレバ、彼「周制八寸爲レ尺」ト云フ說ニヨリテ、小尺ノ八寸ヲ周尺トセシモノナリ】然ラバ南宋ニテ云フ淮尺ハ、唐大尺ニテ、【程氏ガ官尺ヲ淮尺ノ八寸トシタルハ、陳氏ガ淮尺ヲ小尺ノ一尺二寸ト云ヒシニハ少シ異ナレドモ、大凡ニ云ヒタルニテ、其實ハ淮尺ノ八寸三分三毫三毫三絲三忽不盡ナリシコト、程氏ガ又官尺ノ四十八尺ハ淮尺ノ四丈ナリト云ヒシニテ知ルベシ、（此事下ニ引リ）モシ官尺ヲ淮尺ノ八寸トスレバ、官尺ノ四十八尺ハ淮尺ノ三丈八尺四寸ニテ其數合ハズ】官尺ハ【省尺トモ、浙尺トモ、小尺トモ云フ】唐小尺ナリ、【演繁露ニ、「唐帛每二四丈一爲二一匹一、用二丈尺一準レ之、蓋秬尺四十八尺也、今官帛亦以二四丈一爲レ匹、而官帛乃今官尺四十八尺、準以二淮尺一正其四丈也、國朝事多本レ唐、豈今之省尺即唐秬尺爲レ定耶、不レ然何爲官府通用二省尺一、而縑帛特用二淮尺一也」ト云ヘリ、唐ノ帛ハ大尺ノ四丈ヲ匹トスル定ナレバ、小尺ニテ計ル時ハ四丈八尺ナリ、宋ノ官帛モ四丈ヲ匹トスル制ナルニ、官尺ニテ度レバ、四丈八尺、淮尺ニテ度レバ四丈ナリ、宋ニテハ諸事唐ノ制ニ本ヅキタルガ多ケレバ、南宋ノ官尺ハ、唐小尺ニテ淮尺ハ唐大尺ナリト云ヘルナリ】南方ニテハ從來小尺

ヲ用ヒシ故、【孫思邈ガ云ヒシ江淮呉越尺ナリ】南渡ノ後ハ是ヲ官尺ト爲シシナラン、【浙尺ハ司馬光ガ時、既ニ譌長シテ曲尺九寸〇四氂ナリシヲ、程氏ガ「官尺與ニ浙尺一同」ト云ヒシハ疑ハシ】京尺ハ【程大昌ガ淮尺ノ一尺二寸ト云ヒシニ從ヘバ、小尺ニテハ一尺四寸四分四氂四豪四絲四忽不盡ニテ、曲尺一尺一寸六分四氂四豪四絲一忽餘、陳言ガ小尺ノ一尺六分ト云ヒシニ從ヘバ、淮尺ノ一尺三寸三分三氂三豪三絲三忽不盡ニテ、曲尺一尺二寸九分三氂八豪二絲四忽、二說其長サ同ジカラズ】唐ノ時北方ニテ用ヒシ尺ノ【程氏ノ說ニ從ヘバ、資持記ノ山東尺、陳氏ノ說ニ從ヘバ、潞州羅柯尺ナルベシ、此尺疑ラクハ東後魏尺ノ傳ハリテ、譌長セシモノナラン】金ニ傳ハリ、南宋ノ時汴京ニテ用ヒシ尺ナルベシ【金汴京ヲ奪ヒテ後ハ、其地方此方ヲ用ヒタルヲ汴京ハ北宋ノ都ナリシカバ、南宋ノ人是ヲ京尺ト云ヒシナラン、其長サ陳程二說同ジカラズシテ定メ難シ、東後魏尺ノ譌リタルモノトスレバ、程氏ガ說稍近ケレドモ、元ノ官尺ハ古尺ノ一尺六寸六分有奇ト云フ者、コノ尺ヲ承ケタル如ク思ハルレバ、陳氏ガ說ニ從フベキニ似タリ】樂尺ハ【コノ三因方ノ文ヲ普濟方ニ載セタルヲ律學新說ニ引シニハ約尺トアレドモ、疑ラクハ誤ナルベシ】大晟樂尺ヲ云ヘルナラン、【大晟樂尺ハ求ムル所ニヨリテ異同アレドモ、蔡元定ガ大府尺ヨリ計リシモノ最長クシテ曲尺九寸八分有奇ナリ、コヽニ載セタル樂尺ハ、小尺ノ一尺二寸五分ト云ヘバ、譌爲キ唐小尺ニテ度リタランニモ、曲尺一尺〇〇八氂七豪五絲ナレバ、曲尺二分八氂有奇ノ異アリ】金ニテハ南宋ニテ京尺ト云ヒシ尺ヲ用ヒタリケンコト上ニ云ヘリ、【此

時淮尺・南宋官尺・浙尺ナドアレドモ、淮尺ヲ金ニテ營造尺ト名ヅケテ、田畝ヲ度ルニ用ヒタリトアレ
バ（金史ノ文下ニ引リ）別ニ官尺アリシコト知ルベシ、南宋官尺・浙尺ハ南方ノ尺ニテ、唐北宋ニテスラ京ニテハ
用ヒザリシカバ、金ニテ用フベキ理無シ、然ラバ必南宋ニテ京尺ト云ヒシ尺ヲ用ヒシナルベシ】又營
造尺アリ、田畝ヲ度ルニハ此尺ヲ用フ【金史食貨志ニ「一量レ田以ニ營造尺五尺一爲レ步、」ト云ヘリ、按
ズルニ禮記ノ王制ニ、「古者以ニ周尺八尺一爲レ步、今以ニ周尺六尺四寸一爲レ步」、トアリ、然レドモ正義
ニ是ヲ「經文錯亂、不レ可レ用也」ト云ヘバ、此說ハ據ルベカズ、漢書食貨志ニ、殷・周ノ制ヲ說キシニ
「六尺爲レ步」ト云ヒ、周禮小司徒ノ注ニ、司馬法ヲ引キタルニモ「六尺爲レ步」ト云ヘリ、是等ニ依レバ
古ヨリ步ハ六尺ナリシコト知ルベシ、史記始皇本紀ニハ「二十六年、六尺爲レ步」トアレドモ、ソノ注
ニ「譙周曰、步以ニ人足一爲レ數、非ニ獨秦制然一也」ト云ヘリ、古モ步ハ六尺ニテ、始メテ六尺ニ定メシニ
ハ非ザルヲ云ヘルナリ、律學新說ニ「國語、單穆公曰、目之察レ度也、不レ過ニ步武之間一、荀子曰、立視ニ
前六尺一、然則荀卿所謂六尺者步也、單穆公所謂步者六尺也、故司馬法曰、六尺爲レ步、太史公失ニ於詳考一、
因ニ漢儒王制之誤一、遂謂六尺爲レ步者乃秦始皇之所ニ創制一、夫步生ニ於人之足跡一、亙レ古至レ今無レ有レ異也、歷
代改ニ正-朔一易ニ服-色一、而豈能改ニ易人之肢體一、使ニ步者盈縮一哉、周以レ木王木-之-數八、秦以レ水王水-之-
數六、則六尺爲レ步、若然漢以レ火王、魏晉以ニ土金一王、其以ニ七尺・十尺・九尺一爲レ步可乎、此蓋司遷之
謬、譙周辨レ之當矣」ト云ヒシハゲニサルコトナリ、但朱載堉ガ步ハ人ノ足跡ヨリ生ズ、人ノ足跡ハ古

モ後世モ同ジケレバ、古ノ歩モ後世ノ歩モ異ナルコト無シ、始皇ニ始マリシニハアラズト云ヒタレドモ、初歩ヲ定ムル時コソ、足跡ニテ定ムレ、田畝ノ廣サノ名トナリタラン上ハ、名ハ歩ト云フトモ、五尺ニセンモ、七尺ニセンモ、害無カルベシ、譬ヘバ尺ハ人手ニテ定メタレドモ、北魏ノ一尺二寸ナルヲ、北齊ノ一尺五寸ナルヲモ、皆尺ト云フガ如シ、サレバコレヲ改メザリシハ民ノ便トセザリシ故ニテ、足跡ヨリ定メタル故ニ改メ難キニハアラズ、然ラバ古ヨリ歩ハ六尺ナルヲ、六國ノ時ハ法度ヲ變亂シテ、各國ノ歩法心々ナリシニ、秦一統ノ後、古ニ復シタルナルベシ、其後歷代六尺ヲ歩トスルコト異ナラザリシニ、六典ニ「凡天下之田、五尺爲レ歩」トアレバ、唐ノ時ハ五尺ヲ歩トセシコト明ナリ、然レバ六典工部ノ注ニ「今ノ京城ハ隋文帝開皇二年六月、詔ニ左僕射高穎、(穎當作熲)所レ置至ニ三年三月一移入ニ新都ニ焉、名曰ニ大興城一、東西十八里一百一十五歩、南北十五里一百七十五歩」トアルモ、五尺ノ歩ナルニ、隋書地理志ニモ「開皇三年、置ニ雍州城一、東西十八里一百一十五歩、南北十五里一百七十五歩」トアレバ、隋ニテモ唐ト同ジク五尺ヲ歩トセシコト知ルベシ、思フニ歩ハ古ヨリ六尺ナリシニ、開皇ノ時、古尺ノ一尺二寸ヲ官尺トシタレバ、古ノ六尺ヲ官尺ニテ度ル時ハ、五尺ナル故ニ、歩ノ大サハ舊ニ依リタレドモ、六尺ヲ歩トスルヲ改メテ、五尺ヲ歩トセシナラン、唐ニテ開皇ノ官尺ヲ大尺トシ、田畝ヲモコノ尺ニテ度リシ故、歩ヲ五尺トスルコトモ、隋ノ制ニ依リシナリ、然レバ古ニ六尺ヲ歩トスト云ヒシモ、隋唐以來五尺ヲ歩トスルモ、其實ハ同ジト知ルベシ、其後明淸ニ至リテモ五尺ヲ歩トスレバ、

少ノ訛替アリト云ヘドモ、古ヨリ今ニ至リテモ歩ノ廣サハ異ナルコト無シ、カク古ヨリ後マデモ同ジカリシハコレヲ改ムルヲバ民ノ便トセザリシニヨリテナリ、金ノ官尺ハ南宋ニテ云フ京尺ナルベケレドモ、歩ノ大サハ改メ難ケレバ、隋唐以來用ヒ來リシ大尺ヲ以テ五尺ヲ歩トスルコトモ、前代ノ制ニ從ヘリ、但萬事ハ官尺ヲ用ヒタレバ、從來ノ大尺ヲバ營造尺ト云ヒテ、官尺ニ分チシナルベシ、但元明ノ量地尺モ此尺ナルニ、宋尺ヨリハ六分モ謫長セリ、金ノ時ハ如何ナリシカ、其詳ナルコトハ知リ難シ、按ズルニ營造尺ノ名ニヨレバ、田ヲ度ルノミナラズ、屋宅ヲ作ルニモ、此尺ヲ用ヒシナラン】

元ノ官尺ハ、古尺ノ一尺六寸六分有奇ト云ヘリ、然レドモ州縣ノ間ニテハ、猶營造尺ヲ用ヒシナリ、

【明ノ方以智ガ通雅ニ「傳聞元尺至レ大志無レ考焉」トアリ、此官尺ヲ云ヘルナリ、官尺ハ元ノ王與ガ無冤錄ニ「國朝權衡度尺已有ニ定制一、至レ若レ驗ニ屍傷一、度然后知ニ長短一、夫何州縣間捨ニ官尺一用ニ營造尺一乎、考ニ之古制一、度者分寸尺丈引也、以ニ北方秬黍中者一黍之廣一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、一尺二寸爲ニ大尺一、往々即營造尺耳、省部所レ降官尺、比ニ古尺一尺六寸六分有奇一、天下通行公私一體、竊見ニ麗水開件一、作ニ檢屍一、並用ニ營造尺一、思レ之既非ニ法物一、較ニ勘豪釐有レ差、長短無レ準、況明有ニ禁制一、若官府緣レ公行使而責下民間私用是不レ揣ニ其本一而齊中其末上、遂毀而棄レ之、即求ニ官尺打量一」ト云ヘリ、古尺トハ、即宋ノ鐵尺ニテ、隋ノ開皇ノ調律尺・唐ノ小尺・宋ノ司天監ノ影表尺モ皆是ナリ、此尺ノ一尺六寸六分有奇ナル元ノ官尺ハ、灤州羅柯尺ヨリ出デ、陳言ガ云ヒシ南宋ノ京尺ノ謫長シタルモノナラン、其長サ小尺ノ

一尺六寸六分有奇ハ、曲尺ノ一尺三寸四分有奇ナレドモ、元ノ時謂無キ唐尺ハ傳ラザルベケレバ、營造尺ヲ大尺トシ、其六ノ五ヲ小尺トシテ、其一尺六寸六分有奇ヲ求ムレバ、曲尺ノ一尺五寸有奇ナリ、無冤錄ニ云ヒシ趣ヲ見レバ、元ノ時コレヲ官尺トシタレドモ、民間ニハ金ノ營造尺ヲ用ヒシナリ、營造尺ハ魏以來用ヒ慣レタレバ、元ノ官尺ヲ不便トセシナルベシ】其地ヲ量ルニ用ヒシ尺ハ、明ノ量地尺ト同ジ、【元ノ劉應季ガ翰墨大全ニ、「庶人墓田向ヨ去心、各九步、即是四圍相去十八步、按レ式度レ地五尺爲レ步、則是每ニ一向ニ合レ得ニ四丈五尺、以ニ今俗營造尺ニ計レ之、五丈四尺小尺也」トアリ、俗營造尺ハ朱之瑜ガ賚來リシ鄉尺ト云ヘルモノナルベシ、鄉尺ハ宅ヲ建、器ヲ作ルニ用フト云ヘバ、俗營造尺トアルニ合ヘリ、鄉尺ハ即司馬光・徐光啓ガ云ヒシ浙尺ナルコト、上ニ云ヘリ、浙尺ノ五丈四尺ハ、曲尺ノ四丈八尺八寸一分六氂、是ヲ四丈五尺トスレバ、其一尺ハ曲尺ノ一尺〇八分四氂八豪、コレ元ノ量地尺ナリ、其長サ明ノ量地尺ト同ジ】明ニテハ營造尺・量地尺・鈔尺ノ三尺ヲ用フ【律學新說ニ「今見ニ常用官尺ニ有ニ三種、皆國初定制」ト云ヒ、一曰、鈔尺、二曰、曲尺即營造尺、三曰、寶源局銅五尺、即量地五尺也」ト云ヘリ】其圖律學新說ニ見エタリ、營造尺ハ曲尺一尺〇六分、量地尺ハ曲尺一尺〇八分五氂弱、【此尺其長サ營造尺ト近ク、又金ニテ田ヲ量ルニ、營造尺ヲ用ヒタルニヨレバ、量地尺ハ即營造尺ヲ用ヒシニ、營造尺ハ細ク度レバ謂長セズ、地ヲ量ルハ粗キ故ニ、謂長シテ遂ニ兩尺トハナリシナルベシ、量地尺ノ長サ元明同ジケレバ、元ノ時既ニ謂長セシト見エタリ】鈔尺ハ曲尺一尺一寸三分【即

裁衣尺ニテ「織染所欽降金星尺」ト云フモ是尺ナリ、其長サ明ノ寶鈔ノ紙ノ長サト同ジキ故ニ、鈔尺ト云フ、是モ營造尺ノ譌長セルモノ歟、或ハ是ハ相承ノ尺ニハアラデ、別ニ明ノ寶鈔ニ據リテ作レル尺ナル歟詳ナラズ、寶鈔ハ俗ニ云フ銀札ニテ、其制詳ニ明會典ニ見エタリ、其大サハ律學新說ニ圖セリ】コノ外浙江ニテハ浙尺ヲ用フ、【浙尺ノ事ハ上ニ詳ニス、又朱氏談綺ニ、四尺ヲ載ス、一ニハ「明朝木匠尺・量地尺・營造尺・浙尺小尺・曲尺・準尺、鄉尺、皆同比ニ日本木匠曲尺玖寸三分弱ニ」二ニハ大明銅尺・量地尺、明以レ之作レ升、比ニ日本木匠曲尺一尺二分强ニ」三ニハ大明鈔尺・裁衣尺也、比ニ日本木匠曲尺一尺陸分半ニ」四ニハ「明裁衣尺・銅尺・裁縫尺・官尺・織染所牙尺、比ニ日本木匠曲尺一尺一寸五分半ニ」トアリ、浙尺ノ長サ司馬光ガ圖ヨリ長ク、三種尺モ皆朱載堉ガ圖ニ同ジカラザルハ、明末ニ至リテハ譌リシモノモアルベケレバ、今皆取ラズ、浙尺ヲ量地尺・又曲尺ト云ト云フコト、裁衣尺ニ長短二種アルコト、其長キ者ヲ銅尺トモ云フナド、皆疑ハシ】明會典ニハ、三種尺アルコトヲ載セザレドモ、朱載堉ハ、即明ノ鄭恭王厚烷ノ世子ナレバ、其圖證トスベシ【朱載堉ガ律呂精義・律學新說等ニ說ク所ノ三代以下ノ諸尺、皆牽强附會ニシテ、一モ證トスルニ足ラザレドモ、明代ノ制度ニ至リテハ、誤有ルベカラズ、故ニ今朱氏ノ圖ニ從フ、荻生氏ハ「唐大尺・明營造尺・吾邦今尺全同、惟律學新說圖ニ此尺一長六分、因レ此裁衣・量地係ニ于短小一、蓋爲僞ニ造三代尺一、故長ニ此尺一、將レ通ニ其說一、今不レ取ニ圖說ニ」ト云ヒタレドモ、コレハ朱氏ガ明營造尺ハ即唐大尺ナリト云ヒシヲ以、唐大尺ナラバ本朝ノ曲尺ト同ジカ

ルベキニ、（本朝曲尺モ謂長シテ唐尺ヨリハ三分許長キコトチ度攷ニ云ヘリ） 營造尺又ハ曲尺ヨリ六分許長ケレバ、カクハ云ヒシナリ、然レドモ朱氏モシ三代尺ノ說ヲ立ントテ、當時行ハル、營造尺ヲ長ク圖シタランニハ、時人肯ハザルベク、ソレニヨリテ三代尺ヲモ信ゼザルベケレバ、必サハアルマジキ事ナリ、營造尺ヲ承ケタル淸尺モ、其長サ朱氏ガ圖ト全ク同ジケレバ、決シテ朱氏ガ殊更ニ長ク圖シタルニハアラジ、營造尺モ本朝曲尺モ、共ニ唐大尺ヲ承ケタレドモ、千餘歲ヲ經テ傳ヘタレバ、是ホドノ謂長ハアルベキ事ナリ、荻生氏マタ「明三種尺見二朱載堉書一以爲太祖所レ定、然會典不レ載、且裁衣・量地・營造在レ古未レ聞二其異一レ尺、而太祖立二此三種尺一極可レ疑矣、然載堉明人言二其當世之事一、亦當レ不レ謬、因思レ之、太祖建レ國初、造鈔量田之際親審二其度一、時値二草昧一、萬事苟且、吏之所レ稟尺有レ不レ齊、太祖一時隨稟隨定、不三復用二レ意、其尺各官守レ之、後世遂謂有二三種尺一矣、其實明尺惟營造曲尺一而已」ト云ヘリ、此論サモアルベシ、淸ニモ今尺（即營造尺）古尺ノ外ニ量地尺・裁衣尺ナドアレドモ、淸會典ニハ載セズ】コノ外明ニ種々ノ尺アレドモ詳ナラズ』【明ノ方中履ガ古今釋疑ニ「度量衡之大小豈獨古今不レ同、而當時亦已不レ一、如二近代之尺一、則有二鈔尺一、有二三司布帛尺一、有二工匠尺・術家尺・魯班九天玄女尺一、曆家有二晷度尺一、醫家有二全身尺一、或有下長二於前代一者上、或有下短二於前代一者上、量衡更異同不レ能レ使二之齊一也」ト云ヘリ】淸ニテハ古法ヲ考ヘテ、橫ニ百黍ヲ累ネテ古尺トシ、縱ニ百黍ヲ累ネテ今尺トスト云ヘリ、【淸會典ニ、「聖祖仁皇帝考二古法一、以制レ度、而量與二權衡一準焉、以二纍黍一定二分寸之率一、一黍之廣度爲二一分一、橫纍二十黍一得二古尺一寸一、一黍之縱度

爲二一分一、直累二十黍一得二今尺一寸一、今尺八寸一分當二古尺十寸一」トアリ、聖祖ハ康熙帝ナリ、コノ古尺ヲ律尺トモ云ヒ、今尺ヲ工部營造尺トモ云フ、是モ淸會典ニ出ヅ】其圖即聖祖ノ律呂正義ニ載セタリ、横黍古尺ハ、曲尺八寸五分八毫、縱黍今尺ハ曲尺一尺〇六分ナリ、然レドモ其今尺ノ長サ明營造尺ト全ク同ジキヲ見レバ、【錢塘ガ溉亭述古錄ニモ「今之營造尺即明之營造尺」ト云ヘリ】實ハ明尺ヲ即今尺トシ、明尺ニ百黍ヲ縱ニ絫ネ、其百黍ヲ横ニ絫ヌレバ、明營造尺ノ八寸一分ナルヲ古尺ト定メシナリ【朱載堉ハ營造尺八寸ニ、縱黍八十一、横黍百ヲ排列セリ、然ラバ營造尺一尺ニハ、縱黍百〇一黍四分黍ノ一ヲ排スベシ、淸ニテハ朱載堉ニ本ヅキ、今少シ大ナル黍ヲ用ヒ、營造尺ニ縱ニ百黍ヲ排シ其百黍ヲ横絫スレバ、縱絫セシ八十一黍ニ當ルヲ古尺トシタルナリ、淸會典ニハ先黍ヲ絫ネテ古尺ヲ定メ、其古尺ニヨリテ新尺ヲ作リシト云ヒタレドモ、然シテ作リシ今尺ノ明尺ト全ク同ジカルベキニアラズ、實ハ明尺ヲ今尺トシ、其尺ニ黍ヲ絫ネテ、ソレニテ古尺ヲ作リタルナリ、然レバ淸尺ハ絫黍尺ナレドモ、其黍ハ今尺ニテ大サヲ定メシ黍ナレバ、淸尺ノ絫黍ヨリ尺ヲ生ジタルニハアラデ、營造尺ヨリ黍ヲ生ジタルナリ】世ノ改マリタルトテ、度ヲ改メンハ上ニ益無ク、民ハ不便ナルベケレバ、其實ハ明ノ度ニ沿リナガラ、表ニハ黍ヲ絫ネテ古尺ヲ作リ、ソレニヨリテ今尺ヲ作ルヨシニ云ヘルナルベシ、【唐ニテモ黍ヲ累ネテ尺ヲ造リシト云ヒタレドモ、實ハ隋尺ニヨリシト同ジ】然ラバ宋ノ布帛尺・造禮器尺・南宋ノ淮尺・金元明淸ノ營造尺、皆唐大尺ヨリ出タルモノナリ」

清ニ又量地尺【孔尙任ガ周尺辨ニ、慮虒尺ヲ「當ニ今量地尺六寸六分ニ」ト云ヘリ、是ニテ求ムレバ、曲尺ノ一尺一寸八分六氂三豪六絲有奇ナリ、同人ノ周尺考ニ「我朝丈-田稍增ニ尺數一、毎レ尺加ニ一寸一、以ニ明官尺五尺五寸一爲ニ一步ニ」トアリ、淸ノ量地尺ノ一尺ハ、明ノ量地尺ノ一尺一寸ナルヲ云ヘルナリ、明ノ量地尺ノ一尺一寸ハ曲尺ノ一尺一寸九分三氂强ナレバ、周尺辨ニ、慮虒尺ヲ度リシ、量地尺ト略同ジ、又周官祿田考ニ、「一步五尺、見ニ唐杜氏通典一、宋迄ニ明沿レ之、國朝以ニ五尺五寸一爲レ步、見ニ孔氏尙任周尺考一、今仍以ニ五尺一爲レ步、凡歷-代步-弓-尺長短不レ一、今步之尺乃乾隆元年、工部所ニ重頒一、當ニ今裁衣尺之中者九寸ニ」トアリ、康熙ノ量地尺ハ明ノ量地尺ノ一尺一寸ヲ一尺トシタリシニ、乾隆元年ニ重ネテ頒行セシ量地尺ハ、裁衣尺ノ中ナル者ノ九寸ナリシヲ云フナリ、孔尙任ガ慮虒尺ヲ度リシ裁衣尺ニテ九寸ヲ計レバ、曲尺ノ一尺〇五分七釐九絲有奇ニテ今尺ノ長サト略同ジク、淸會典今尺ノ外ニ量地尺ヲ載セザレバ、乾隆元年重頒ノ量地尺ハ、即縱黍今尺ナルベシ、又沈氏ハ歷代步弓尺長短不一ト云ヒタレドモ、古ヨリ今ニ至ルマデモ大ナル異ハ無カリシナリ、其事金營造尺ノ條ニ云ヒシヲ見テ知ルベシ】裁衣尺【周尺辨ニ慮虒尺ヲ「當ニ今裁尺六寸七分ニ」ト云ヘリ、是ニテ求ムレバ曲尺ノ一尺一寸六分八氂六豪五絲六忽餘ナリ、沈彤ハ乾隆重頒ノ量地尺ヲ裁衣尺ノ中ナル者ノ九寸ト云ヘリ、乾隆ノ量地尺ヲ縱黍今尺トスレバ、裁衣尺ノ中ナル者ハ、曲尺ノ一尺一寸七分七氂七豪七絲七忽不盡ナレバ、孔尙任ガ度リシ裁衣尺ハ中ニ及バザル者ナルニヤ、伊澤氏藏スルハ曲尺ノ一尺一寸六分三氂、中

村佛庵（連）ガ藏スルハ、曲尺ノ一尺一寸五分、皆孔氏ガ度リシ尺ヨリ短ケレバ、是等ハ裁衣尺ノ小ナル者ナルベシ】河北大布尺、【周尺辨ニ盧虒尺ヲ「常ニ今河北大布尺四寸七分ニ」ト云ヘルニテ求ムレバ、曲尺ノ一尺六寸六分五犛九豪五絲七忽有奇ナリ】ナドアリ、量地尺ハ即明ノ量地尺ニテ【康熙ノ量地尺ノ明ノ量地尺ノ一尺一寸ナリシハ、清ニテ然改メタルニハアラデ、譌長シタルモノナルベシ、故ニ乾隆ニ重頒シテ改メタルナラン】裁衣尺ハ明ノ鈔尺ノ譌長セシモノナリ【鈔尺ハ即明ノ裁衣尺ナリ】河北大布尺ハ元ノ官尺ノ遺リテ譌長シタルモノナルベシ

本朝度量權衡攷 附錄卷上之上

本朝度量權衡攷附錄卷上之下

狩谷望之著

先輩周漢ノ尺ヲ攷ヘシニ、各家同ジカラズシテ、一定ノ說ナク、其說ドモ皆非ナリト云フ者ハ

宋ノ饒魯ハ曲尺五寸八分三釐七豪二絲五忽餘

其說ニ周ノ七寸ハ今ノ四寸許【孟子集注大全公孫丑下篇】

按ズルニ是三司布帛尺ニテ度リシナラン、布帛尺ノ四寸ヲ周ノ七寸トシテ周尺ヲ起セバ、布帛尺ノ五寸七分一釐四豪二絲八忽餘、曲尺ノ五寸八分三釐七豪二絲五忽餘ナリ、然レドモ大凡ニ許ト云ヒタレバ、其審ナルコトハ知リ難キ上ニ、其說據リドコロヲ云ハザレバ、證トスルニ足ラズ、【按ズルニ此尺ハ「潘時擧ガ尺式ニ「程氏文集溫公書儀多誤注爲ニ五寸五分弱ニ」ト云ル類ノ尺ナルベシ、其誤ナルコト、潘氏コレヲ辨ジタリ、又按ズルニ司馬光書儀ニハ、周尺ヲ布帛尺ノ五寸五分トシタルコト、潘氏ガ說ノ如クナレドモ、其家ニ刻セシ周尺圖ニハ、「周尺當ニ三司布帛尺七寸五分弱ニ」ト云ヘリ、五寸五分ノ誤ナルヲ知リテ後ニ改メタルナルベシ】

元ノ吾衍ハ「欲レ知ニ古尺ハ以ニ小半兩錢ニ準レ之言ニ徑寸ニ也」ト云ヘリ、【間居錄】

按ズルニ小半兩錢トハ、四銖半兩ヲ云ヘルナラン、半兩錢ノ徑一寸ト云フコト、史漢ヲ始メ、歷代ノ食貨志・泉志等ニモ見エズ、何ニ據リテ如レ是ハ云ヘルニカ、據リ所タシカナラザレバ、其說證トスルニ足ラズ、【疑ラクハ貨泉徑一寸ト漢書食貨志ニ云ヒタルヲ誤リ記セシナルベシ】假令其事出處アリトモ、今傳ル半兩錢大小一ナラザレバ、尺ノ長短定メ難カルベシ

明ノ丘濬ハ曲尺七寸二分許

其說ニ、朱熹家禮神主ノ制度程頤ノ說ニ本ヅキタレドモ尺式ナシ、後人潘時擧ガ得シ司馬家ノ尺式ヲ卷首ニ圖シタルモ、刻本短ケレバ、其圖モ隨テ短シ、唯鄭霖ガ刻セシ家禮尺式ヲ橫ニ畫ガキシハ體ヲ得タレドモ、準ズル所無ケレバ、武林ノ應氏ガ圖ト貨泉錢トヲ以テ周尺ヲ定メ準ズルニ、今ノ鈔尺ヲ以テスレバ、其六寸四分弱ニ比ス【朱熹家禮儀節】

按ズルニ鈔尺六寸四分ハ、曲尺七寸二分三氂二毫ナレバ、六寸四分弱ハ曲尺七寸二分許ナルベシ、武林ノ應氏ガ圖ト云フ者今知ルベカラズ、又貨泉ヲ以テ定ムト云ヒタレドモ、丘氏ノ尺ニテハ貨布ト合ハザレバ、其據リタル貨泉後鑄縮少ノ錢ナルベシ、然ラバ據トナシ難シ

徐光啓ハ曲尺七寸二分三氂二毫

其說ニ浙尺八寸ニ當リ、今織—染—所欽—降金—星牙尺六寸四分ニ當ル【農政全書】

按ズルニ浙尺八寸ハ、曲尺七寸二分三氂二毫ナリ、司馬光ガ浙尺ノ比按ハ、八寸四分ト云ヘリ、其

說ヲ用ヒズシテ別ニ說ヲ立ントナラバ、司馬光ガ說ノ非ナルヲ辨ジ、己ガ據ル所ヲ顯シテコソ立ツベキニ、然ハアラデ、タヾ八寸トノミ云ヒシハ如何、【思フニ鈔尺六寸四分ヲ周尺ト定メ、鈔尺六寸四分ヲ浙尺ニテ計レバ八寸ナルニヨリ、然云ヘルニテ、司馬氏ノ圖ヲ考ルマデニ及バザリシナルベシ】織染尺ハ裁衣尺ト同ジキコト、朱之瑜ガ文集ニ見エ、裁衣尺ハ即鈔尺ナルコト、律學新說ニ出タレバ、織染尺ハ即鈔尺ニシテ、其六寸四分ハ曲尺七寸二分三氂二豪ナルコト、浙尺ヨリ計リシト同ジ、此說モ出處ヲ擧ゲズ、疑ラクハ丘濬ガ六寸四分弱ト云ヒシニ據リテ、弱ノ字ヲ脫シタルナラン、丘濬ガ說ノ據ルニ足ラザルコトハ、上ニ云ヘリ、況ヤ此ハ弱ノ字ヲ脫シタレバ、マヽスヽ證トナシ難シ【タヾ織染尺ト浙尺トノ比挍ヲ云ヒタレバ、織染尺ニヨリテ浙尺ヲ求ル據トスベシ】

朱載堉ハ周尺ハ曲尺六寸七分八氂四豪、【李之藻ガ判宮禮樂疏張介賓ガ類經圖翼、皆是ニ從フ】其說ニ殷尺最大ナリ、今ノ木匠曲尺是ナリ、魯般ガ家ヨリ傳ヘテ唐ニ至リ、唐人コレヲ大尺ト云フ、唐ヨリ今ニ至ルマデ用ヒテ今尺ト云フ、又營造尺トモ云フ、是殷湯ノ尺ナリ、【按、明營造尺ハ唐大尺ノ九分三氂弱謁長セシモノナリ、本朝ノ曲尺ヨリハ六分許長キナリ】、此尺ノ二寸ヲ去リタルハ【營造尺八寸】夏禹ノ尺ナリ、夏禹ノ尺ノ二寸ヲ去リタルハ【營造尺六寸四分】周武王ノ尺ナリ、【律學新說】黃鍾ノ長サヲ【黃鍾ハ夏禹ノ尺ナリト律學新說ニ云ヘリ】五段ニシテ、其一段ヲ去リテ尺トスル者周尺ナリ【律呂精義】

按ズルニ三代尺ヲ異ニスル說、白虎通・祭邕獨斷ニ出ヅ、白虎通ニハ各三寸ヲ異ニシ、【杜氏通典、吉禮部歷代所尙ノ條ニ、「夏后氏十寸爲レ尺、殷人十二寸爲レ尺、周人八寸爲レ尺」ト云ヘル注ニ引リ、玉海ニ載セタル景祐三年九月十一日阮逸ガ上言ニモ、御製樂髓新經ニ、「白虎通八寸」ト引キタリト云ヘリ、今本白虎通ニハ此文無シ】獨斷ニハ各一寸ヲ異ニスト云ヘリ【獨斷ニ「夏以二十寸一爲レ尺、殷以二九寸一爲レ尺、周以二八寸一爲レ尺」トアリ】宋ノ劉恕ガ通鑑外紀鄭樵ガ通志モ白虎通ニ依リタレドモ、此事古經ニ徵スル所無ケレバ信ジ難シ、【三代異尺ノ俗說ナルコト、周尺ノ條ニ辨ゼリ、荻生氏ノ度考ニモ正謬トテ、詳ニ論ジタリ】朱載堉二寸ヲ異ニスルノ說ニ本ヅキ、殷ハ十二寸ヲ尺トスト云フヲ改メテ【是ニテ殷尺ヨリ夏尺ヲ計レバ八寸三分三氂不盡ナリ】殷尺ノ二寸ヲ去リテ、夏尺トスト云ヘリ、然ラバ殷尺ハ夏尺ノ一尺二寸五分ナリ、此說古ニ有ルコト無シ、據ドコロトスベカラズ

漢尺ハ九尺四分一氂六豪六絲六忽不盡

其說ニ、「漢尺一寸、當二大泉十枚一」トモ【律學新說】漢尺以二大泉之徑一爲二一寸一【律呂精義】ト云ヘリ

按ズルニ律學新說ニ裁衣尺七寸五分ニ、大泉九枚ヲ排スル圖ヲ載ス、裁衣尺七寸五分ハ曲尺八寸四分七氂五豪、コレヲ九ニ分レバ九分四氂一豪六絲六忽不盡ナリ、然レドモ大泉ノ徑ヲ一寸トスルコト據無シ、律呂精義ニ、「又志云、大泉徑寸二分者、謂莽以二漢尺之寸一爲二其尺之寸二分一、故云、變二漢

制一非レ變ニ周制一也」一ト云ヒタレドモ、王莽漢ノ尺ヲ改メシコトモ證スル所無シ、又食貨志ニ「王莽居レ攝變ニ漢制一」ト云ヒシハ、從前五銖錢ノミヲ用ヒシニ、王莽ガ時ニ當五十ノ大泉ヲ鑄タルヲ云ヘルコトナリ、シカルヲ從前大泉ノ徑一寸ナリシヲ、王莽ガ時一寸二分トシタリト云フハ誤ナリ【漢ノ時周景王ノ大錢ヲ一寸トシタルコト據無キコト上ニ云ヘルガ如シ】又同書ニ貨泉ニテ尺ヲ起シ、是ヲバ劉歆ガ僞周尺ナリトシ、僞尺辨疑ヲ作リテ荀勗ガ尺ハ漢錢・漢銅斛ニヨリテ造リタレバ、周尺ニアラズ、是ヲ周尺ト云フハ魏ノ襄王ノ塚ヨリ得タル玉律ニ合ヒタル故ニ周尺ト云フナレドモ、是ハ晩周ノ物ニテ盛周ノ律度ト云フベカラズ、劉歆ガ銅斛・王莽ガ錢貨ハ本ヨリ法トスルニ足ラズ、西京望臬・建武銅尺モ王莽劉歆ニヨリテ作リシ者ナルベケレバ、是モ依ルニ足ラズ、「郡國所レ得漢時故一鐘モ是ト同ジケレバ尤信ズベカラズトテ、荀勗ガ尺ノ周尺ニ非ルヲ論ジ、高若訥ガ荀勗ニヨリテ貨泉ヲ以テ起シタル周尺ニ、司馬光・蔡元定等ノ從ヒシヲ誤トシタリ、然レドモ盛周ノ器ノ徵トスベキ物無カラン上ハ、晩周ノ物トテモ空論臆談ノ私說ニ勝ルニアラズヤ、【銅斛錢ナド王莽ガ造リシ物ニヨリテ起シタル晉前尺ノ晩周ノ律ニ合ヒタリト云ヘバ、王莽ガ晩周ノ度制ヲ改メザリシヲ證スベシ】朱氏ガ立ル所ハ明營造尺ヲ殷尺トシ、ソレヨリ夏尺ヲ求メ、夏尺ヨリ周尺ヲ求メタルナリ、【三代異尺ノ據ルベカラザルハ上ニ云ヘリ】其明營造尺ハ、北魏尺ノ傳ハリタルモノニシテ、殷尺ニ非ルコト、上文ニ擧タル沿革ヲ見テ知ルベシ、魯般ガ家ヨリ傳ヘタリト云フモ、據ドコロナキ

妄說ナリ、【工匠コノ尺ヲ以テ營造ヲ計ル故ニ、カヽル俗說モ出來シナリ】假令コノ尺魯般ガ家ヨリ出タリトモ【魯般ハ公輸班ニテ魯哀公ノ時ノ人ナリ】イカデ殷尺トハ定ムベキ、其說皆證トスルニ足ラズ

淸ノ錢塘ハ曲尺六寸八分六氂八毫八絲

其說ニ晉志ニ、十五等ノ尺ヲ列シ、晉前尺ヲ以テ主トシテ是ヲ周尺ト云フ、玉海ニ、六等ノ尺ヲ列シ、司馬ガ摹セシ高若訥ガ漢錢尺ヲ主トシテ周尺ト云フ、是等ハ皆漢尺ニテイマダ周尺ヲ見ザリシナリ、今曲阜孔氏ノ盧虒尺ハ、今ノ工匠尺七寸四分ナリ、此尺モ晉前尺司馬光尺ト同ジク漢尺ナリ、周尺ハ曲阜ノ顏氏ニ藏ス、今尺ノ六寸四分八氂ナリ、昔人漢尺ヲ周尺トセシハ非ナリ、周ニ八寸尺アリ、十寸尺アリ、顏氏ガ尺ハ七寸尺ニテ此尺四分ノ一ヲ加レバ今尺ノ八寸一分是十寸尺ナリ、昔人コレヲ夏尺ト云フ【潛研堂文集錢塘別傳載其所著律呂古義】

按ズルニ漢尺ノ即周尺ナルコトハ上ニ辨ズ、又盧虒尺ハ漢官尺ニテ、淸今尺七寸四分、晉前尺司馬光尺ハ淸今尺七寸二分ナレバ同ジカラザルヲ、【隋志ニモ「漢官尺實比晉前尺一尺三分七毫」トモアリ】盧虒尺ヲ晉前尺・司馬光尺ト同ジト云ヒシハ誤ナリ、【此事モ上ニ辨ズ】又曲阜顏氏ノ尺ハ朱載堉ガ周尺ノ傳ハレルモノナルベシ【朱載堉ガ尺ヨリ八氂四毫八絲長キハ譌長セシナラン】然ラバ據ルニ足ラザルコト前條ニ云ヘルガ如シ、八寸尺十寸尺ノ事モ既ニ周尺ノ條ニ辨ジタリ、十寸尺ヲ夏尺トス

ルコト、例ノ三代尺ノ僞說ナレバ云フニ足ラズ

任兆麟ハ曲尺六寸八分許

其說ニ吳ノ市ニテ古尺ヲ獲タリ、今ノ戶部ノ頖尺ニテ挍スルニ、長サ六寸四分強ナリ、鄭玄ガ禮記注ニ周尺八寸ト云ヘリ、八々六十四ナレバ、戶部頖尺ニテ六寸四分ナルニ合ヘリ、其冪ニ陽文ニテ「長安銅尺三十枚、第二十元延二年八月十八日造」ト云フ篆書ノ銘十八字アリ、元延ハ前漢ノ成帝二十二年ナリ、此尺ニテ貨布ヲ度レバ、寸度豪氂ヲ爽ハズ、又慮虒尺・銅斛尺・荀勗律尺ニ比挍スルニモ異ナルコト無シ、又半兩錢ヲ得テコノ尺ニテ度リシニ、周四寸・中函二寸・徑二寸有奇、重十銖有半ナレバ、通考泉志ニ載セタル重サト合ヘリ、【有竹居集、漢元延尺記】

按ズルニ戶部頖尺ハ即淸今尺ナリ、此周尺長サ六寸四分强ナラバ【淸今尺ノ六寸四分ハ曲尺六寸七分八氂四豪ナレバ、六寸四分强ハ曲尺六寸八分許ナルベシ】是モ朱載堉ガ周尺ニ依リシモノナルベシ、李之藻・張介賓等モ朱氏ノ說ニ從ヒ、朱載堉ガ三代異尺ノ說ヲ立ショリ、淸ニ至ルマデモ是ヲ非トセシ者無カリシカバ、六寸四分ト云フコト定說ノ如クナル故ニ、【但丘濬鈔尺六寸四分弱ト云ヒシニ從ヒシニモアルベシ】此等ノ尺世ニ殘リシモノナルベシ、周尺八寸ト云フコトノアルニヨリテ、此尺ヲ漢ノ時作レル八寸ノ周尺トシテ十寸尺ヲ求レバ、淸今尺ノ八寸ニテ共一寸ハ淸今尺ノ八分ナレバ、八々六十四ト云ヒシナラン、サレド漢尺ヲ淸今尺ノ八寸トセシ說他ニ見ユルコト無ケレバ從ヒ

雖シ、假令サル說アリトテモ、漢ノ時用ヒザル八寸ノ周尺ヲ元延ノ時鑄作ルベキ理アランヤ、然ルニ元延二年ニ作リシト云フ銘アルハ、後世好事ノ者ノ僞作ナルコト疑無シ、又虛虒尺ハ淸今尺七寸四分ナレバ、任氏ガ得シ尺ヨリハ一寸弱長キヲ、虛虒尺・銅斛尺・荀勗律尺ト異ナルコト無シト云ヒシモ違ヘリ、【虛虒尺ノ銅斛尺・荀勗尺ト同ジカラザルコト前條ニ云ヘリ】又此尺ニテ貨布ヲ度レバ、毫髮タガハズト云ヒシニヨリテ任氏ガ說ノ漢尺【淸今尺八寸】ヲ以テ、二寸五分【漢書貨布長二寸五分】ヲ度レバ、淸今尺ノ二寸ニテ曲尺二寸一分二釐ナリ、然ルニ今見ル所ノ貨布ヲ度レバ皆一寸九分ナリ、律學新說ニ摹シ出セシ貨布ノ圖モ全ク同ジケレバ、此尺ヨリ貨布ヲ度レバ、毫髮タガハズト云ヒシハ、僞ナルコト明ラケシ、是等ノ說、皆朱載堉ガ說ニ依リテ作リシ尺ヲ、八寸周尺トセントテ誣タルニテ、其實ハコレニ二寸ヲ增セバ、虛虒尺ニテ貨布ニモ合ハザルナリ、又半兩錢ヲ計リシ說モ疑ハシ、圜周四寸ナラバ徑ハ一寸二分五釐六豪六絲三忽餘ナルヲ、徑二寸有奇ト云ヒシハイカヾ、面二寸ト云ヒシハ彌心得ラレズ、又重十銖半トハ何ノ稱ヲ以テ計リシニカ、又半兩錢ハ重十二銖【漢書食貨志ニ、「秦兼㆓天下㆒、銅錢質如㆓周錢㆒、文曰㆓半兩㆒、重如㆓其文㆒」ト云ヘリ、一兩ハ二十四銖ナレバ、半兩ハ十二銖ナリ】ナルベキニ、十銖半ナルヲ通考泉志ニ合ヒシト云ヘルモ、例ノ誣ヒタルナリ、【文獻通考モ、泉志モ、漢書ノ文ヲ載セタルノミニテ異說無シ】カヽル僞物ヲ造リテ世ヲ惑ハスハ、惡ムベキノ甚キナリ、不鑒ノ人ハ欺カレテ、遂ニハ牽强ノ說モ出來ル

ナリ

陳經ハ曲尺五寸五分〇二豪四絲

其說ニ嘉慶十七年古劍一ヲ買得タリ、晉尺【曲尺七寸六分】ヲ以テ度ルニ、臘ノ廣サ【考工記注ニ「臘謂二兩刄一」トアリ】一寸八分一氂【曲尺一寸三分七氂五豪六絲】莖長サ【鄭司農云莖謂二劍爽人所一レ握鐔以上一也】三寸六分二氂【曲尺二寸七分五氂一豪二絲】首ノ徑一寸二分、【曲尺九分一氂二豪】身ノ長サ一尺八寸一分【曲尺一尺三寸七分五氂六豪】ナリ、考工記ニ「桃氏爲レ劍臘廣二寸有半寸、以二其臘廣一爲二之莖圍一長倍レ之（長五寸鄭玄云莖）參ニ分其臘廣一去レ一以爲二首廣一而圍レ之」【注ニ首圍其徑一寸三分寸之二】身長五二其莖長一【莖ノ長サ五寸ヲ五ツ合スレバ二尺五寸莖ト共ニ三尺ナリ、注ニ上制長三尺トアル是ナリ】トアルニヨリ、臘ノ廣サヲ二寸五分トシ、莖ノ長サヲ五寸トシ、首ノ徑ヲ一寸六分六氂六豪六絲六忽不盡トシ、身ノ長サヲ二尺五寸トシテ周尺ヲ計レバ、晉尺ノ七寸二分二氂周尺ノ一尺ナリ、【今臘身莖ヨリ計レバ、七寸二分四氂、首ヨリ計レバ七寸二分ナリ、二氂ト云ヒシハイカヾ】後又一劍ヲ得シニ莖ノ長サ前劍ト豪氂ヲタガハズ、【タヾ「環首不同口徑一寸六分餘皆合」ト云ヘリ】王厚之ガ鐘鼎欵識【即秦熺ガ欵識ナリ】ニ載セタル晉尺ヲ今人周尺トスレドモ、是ハ荀勗ガ劉恭ニ造ラセシ周尺ニテ即晉尺ナリ、然ラバ周ノ尺ト云フ慥ナル證モ無ケレバ、余ハ周劍ニヨリテ莖ヲ五寸トシ、是ヲ倍シテ周尺ヲ定ムルナリ【求古精舍金石圖】

按ズルニ晉尺三寸六分二氂ナル劒莖ヲ周尺五寸トスレバ、周尺一尺ハ晉尺七寸二分四氂ニテ、曲尺五寸五分〇二豪四絲ナリ、【陳經ガ周尺ヲ晉尺七寸二分二氂ト云ヒシニヨレバ、曲尺ニテ計レバ五寸四分八氂七豪二絲ナリ、然ルニ陳氏ガ新定周尺ノ圖ヲ度レバ、曲尺五寸三分六七氂ナルハ疑ベシ】氂前尺ノ即周尺ナルコトハ上ニ辨ゼリ、陳氏是ニ從ハズシテ劒莖五寸ヲ以テ尺ヲ起シ、コレヲ周尺トス、然レドモ此古劒桃氏ノ作リシト云フ證モ無ケレバ、六國ニテ制ヲ異ニセシ時作リタルモノナルモ知ルベカラズ、又古ニ云フ尺度ニ合ハザル古器モ多ケレバ、偏ニ此劒ノ孤證ニ依リテ周尺ヲ定ムルコトヲ得ベカラズ、晉前尺ニテ作リシ鐘磬ノ聲韻周ノ樂器ニ合ヘリト云ヒ、今按ルニ王莽ノ銅斛又錢トモ合ヘバ、晉前尺ヲ卽周漢ノ尺トスルノ徴アルニシクベカラズ、又古昔人體ヲ計リシハ、中婦人手八寸」ト云ヒ、又五尺童子、六尺ノ孤ト云ヒ、人ノ長ヲバ或ハ七尺、或ハ八尺ト云ヘリ、今曲尺七寸六分ヲ一尺トシテ計レバ、八寸ハ曲尺六寸〇八氂、今ノ中婦人ノ手ヲ度ルニ略同ジ、五尺ハ曲尺三尺八寸ニテ、十一二歳ノ童ノ長六尺ハ曲尺四尺五寸六分ニテ、十四五歳ノ長ナリ、七尺ハ曲尺五尺三寸二分ニテ、今ノ常人ノ度ニ合ヒ、八尺ハ曲尺六尺〇八分ニテ、今ノ偉人ノ度ニ合ヘリ、【是ニ依レバ古昔人ノ長ヲ七尺ト云フハ常人ノ度ニテ、八尺ト云フハ偉人ヲ云ヒシナルベシ、今モ常ニハ男子ノ長ヲ凡五尺三寸トスレドモ、大ナル人ヲ云フニハ六尺男ト云ヘリ】又陳經ガ定ムル所ノ曲尺五寸五分〇二豪四絲ヲ一尺トシテ度レバ、八寸ハ曲尺四寸四分〇一豪九絲二忽、五尺ハ曲

尺二尺七寸五分一氂二豪、六尺ハ曲尺三尺三寸〇一氂四豪四絲、七尺ハ曲尺三尺八寸五分一氂六豪八絲、八尺ハ曲尺四尺四寸〇一氂九豪二絲ナレバ、皆今人ノ度ニ合ハズ、又周禮廩人ニ「凡萬民之食レ食者、人(ゴトニハ)四鬴上也、三鬴中也、二鬴下也、若食不レ能ニ二鬴一、則令ニ邦移レ民就一レ食」、鄭注ニ「此皆謂ニ一月食米一也、六斗四升曰レ鬴」ト云ヘリ、今曲尺七寸六分ノ尺ヲ以テ計レバ、鬴ハ今ノ六升八合有奇【此事量考附錄ニ詳ニス】四鬴ハ今ノ二斗七升二合、三鬴ハ今ノ二斗〇四合、二鬴ハ今ノ一斗三升六合ナリ、四鬴ナレバ一日ノ得ル所今ノ九合〇六撮大半撮是ヲ上トス、三鬴ナレバ一日ノ得ル所今ノ六合八勺是ヲ中トス、二鬴ナレバ一日ノ得ル所今ノ四合五勺三撮小半撮是ヲ下トス、四合五勺三撮小半撮ヲ得ルコト能ハザレバ、一日ノ食ニ充ルニ足ラザル故ニ、民ヲ食ノ有ル方ニ遷スナリ、又陳經ガ尺ヲ以テ鬴ヲ作リ、【方一尺・深一尺】曲尺ノ積ヲ計レバ一日六十六寸五百九十二分八百九十五氂〇五十三豪八百二十四絲ナリ、今ノ斛法【六千四百五十五寸】ニテ除スレバ、鬴ハ今ノ二升五合八勺有奇、四鬴ハ今ノ一斗三合二勺有奇ニテ、一日ノ食今ノ三合四勺四撮有奇、三鬴ハ今ノ七升七合四勺有奇ニテ、一日ノ食今ノ二合八勺七撮有奇、二鬴ハ今ノ五升一合六勺有奇ニテ、一日ノ食今ノ一合七勺二撮有奇ナリ、一日ノ食三合四勺四撮有奇ナルヲ上ト云フベキニアラズ、又一日ノ食一合七勺二撮有奇ニ及バザルニ至リテ、始テ民ヲ移シテ食ニ就シムベキニ非ザレバ、此尺據トナシ難シ

林春齋(恕)ハ農政全書ニ載セタル圖ニ據リテ神主ヲ作ル、曲尺六寸四分强ナリ、【泣血餘滴】

按ズルニ農政全書ニ周尺ノ圖ヲ載セテ、其下ニ「計周尺一尺當ニ浙尺八寸、當ニ今織染所欽降金星牙尺六寸四分ニ」トアリ、尺圖ハ形ヲ繪ガキシノミニテ、尺準ニハ非ルヲ、其圖ノ長サヲ度リシニ曲尺六寸四分强ナル故ニ、織染尺六寸四分トアルニ適同セシニヨリ、織染尺ハ郎曲尺ニテ、彼圖ハ周尺ノ眞ナリト思ヒ誤リシナルベシ、【朱氏家禮ニ載セタル尺圖諸本縮寫ナルコト、丘濬ガ儀節ニ云ヘリ、康熙帝ノ律呂正義ニ繪ガキシ淸尺活字原本ハ、橫圖•縱圖共ニ尺準ナリ、律曆淵源ニ載セタル本ハ、橫圖ハ尺準ナレドモ、縱圖ハ縮寫ナリ、淸會典ニ載セシ尺圖ハ共ニ縮圖ナルコト言ヲ俟タズ、農政全書ニ圖シタルモ此類ナリ】徐氏ガ說據ドコロ詳ナラザルコト上ニ云ヘリ、況ヤソノ縮圖ヲ周尺ノ長サナリト誤リタルナレバ、據トナスベカラズ

中村惕齋(欽)ハ或ハ曲尺七寸八分三氂二毫强ト云ヒ、或ハ曲尺七寸七分八氂二毫强トモ云ヘリ、其說ニ、古來禁裏ノ御府ニ竹尺アリ、弘法大師將來ノ物ト云傳フ、背ニ周尺ト刻メリ、小倉實起卿一年勅ヲ承テ御府ノ書籍ヲ晒サレシ時、コレヲ見テ精摹セラレケルガ、其後寬文元年內裏炎上ノ時、古尺ハ燒亡タリ、此尺ニテ漢唐ノ錢ヲ度リ見ルニ、此尺唐ノ淮尺ニテ即梁表尺ナリ、梁表尺ハ「比ニ晋前尺一尺〇二分二氂一豪有奇ニ」ト隋書ニ見エタルニ因リテ、此尺ヲ一尺〇二分二氂一豪ニ分チテ、其一尺ヲ古周尺ト定ム、大尺ノ七寸八分三氂二豪ニ比ス、【律尺考驗】古尺當ニ曲尺七寸七分八氂二豪强、淮尺當ニ曲尺七寸九分五氂弱ニ【按ズルニ七寸九分五氂弱トアル一〇二二一ヲ以テ除スレバ、七寸七分七氂七豪一絲

二忽餘ニテ、此ニ七寸七分八釐二毫强ト云フニ合ハズ、故ニ七寸九分五釐四毫ヲ一〇二二一ヲ以テ除スレバ、七寸七分八釐二毫〇一七四强ヲ得レバ、此ニ七寸九分五釐弱トアル弱字ハ强字ノ誤ナルベシ】

本朝御府周尺亦是也【三器攷略】

按ズルニ律尺考驗ニヨリテ、曲尺七寸八分三釐二毫ヲ周尺トシ、一尺〇二分二釐一毫ヲ以テ乘ズレバ、御府尺ノ長サ八寸〇五毫〇八忽七二ナリ、三器攷略ニ七寸九分五釐弱ト云ヒシニ合ハズ、二書一人ノ手ニ出デ、其長サ同ジカラザルコト疑フベシ【御府尺ハ一ナレドモ度リシ曲尺ニ長短アリシ故ニ、同ジカラザリシニヤ】又按ズルニ實起卿ノ摹サレシハ、唐小尺ノ謠尺ナリ、【度攷ニ詳ニス】中村氏是ヲ淮尺トシ、【淮尺ハ其長サ唐小尺ト同ジキコト上ニ云ヘリ】、然レバ御府尺ヲ淮尺ナリト云ヒシハ當レリ】淮尺ヲ即梁表尺トシテ、周尺ヲ求メタレドモ、梁表尺ハ祖暅ガ作リシ尺、淮尺ハ宋氏尺ノ南朝ニ傳ハリシ尺ニテ、表尺ヨリシ出シモノニ非ズ、其長サモ同ジカラザレバ此説徵トナシ難シ、【淮尺ヲ即梁表尺トシタルハ、蕭吉ガ梁表尺ヲ「出二於司馬法一」ト云ヒシヲ、隋書ニ載セ、又千金方ニ淮尺ヲ「夏家古尺、司馬六尺爲レ步」ト云ヒ（法字ヲ脫シタルナラン）共ニ司馬法ヲ引キタレバ、同ジ尺トシタルナルベシ、梁表尺モ淮尺モ原ハ皆周尺ヨリ出デ、後魏ノ長尺ニ非ル故ニ、並ニ司馬法ノ尺ナリト云ヒシニテ、其長サ全ク同ジキニハアラズ、猶晉前尺ヲモ唐小尺ヲモ、共ニ周尺ト云ヘドモ、其長サ同ジカラザルガ如シ】況御府尺ハ謠尺ナレバ、コレニヨリテハ周尺ヲ起スコトヲ得ズ

朱舜水(之瑜)ハ二說ヲ擧ケ、一ハ曲尺六寸四分弱

其說ニ「周尺黃鐘之長均作二五段一、去二一段一作二神主尺一」【舜水文集】

按ズルニ此說朱載堉ガ說ニ據リシナリ、朱載堉ノ周尺ハ明營造尺ノ六寸四分ナルヲ舜水其說ニ據リナガラ、六寸四分弱ト云ヒシハ、丘濬ガ鈔尺六寸四分弱ト云ヒタルヲ混ジテ、誤衍シタルナラン、朱載堉ガ三代尺ノ說據ルベカラザル上ニ、其周尺ハ營造尺六寸四分ナレバ、本朝ノ曲尺ニテハ六寸七分八氂四豪ナルニ、朱之瑜ハ本朝曲尺ヲ即明營造尺ナリト思ヒテ、曲尺六寸四分弱トハ云ヒシナルベシ【朱載堉營造尺ヲ「今木匠曲尺也」ト云ヒ、マタ「唐人謂二之大尺一」ト云ヒシヲ以テ、本朝曲尺ヲ即明營造尺ナリトハ思ヒシナリ、營造尺モ本朝曲尺モ共ニ唐大尺ヨリ出タレドモ、曲尺ハ三分ノ譌長ナルニ、營造尺ハ九分一氂譌長シタリ、然レバ營造尺ト本朝曲尺トハ六分一氂ノ違アルナリ】其據リタル朱載堉ガ說ノ證トスルニ足ラザルノミナラズ、弱擧ヲ衍シ、且明營造尺・本朝曲尺ヲ誤混シタレバ、其說據トナシ難シ

一ハ曲尺七寸三分強

其說ニ「當二明裁尺六寸四分弱一、家禮所謂六寸四分弱鈔尺也」【同上】

按ズルニ朱熹家禮ニモ、後人ノ家禮ニ附ケタル潘時擧ガ尺式ニモ、六寸四分弱ト云フコト無シ、是ハ丘濬ガ家禮儀節ニ「比二今鈔尺六寸四分弱一」トアルヲ引キシナラン、鈔尺ノ六寸四分弱ハ曲尺七

寸二分許ナルヲ、朱之瑜ハ鈔尺ヲ曲尺一尺一寸五分半トシタレバ、【是モ文集ニ見ユ】六寸四分弱ヲ曲尺七寸三分强トハ云ヒシナリ、然レドモ丘濬ガ說據リドコロ明ナラザル上ニ、朱之瑜ガ鈔尺譌長セシモノナレバ、是說モ據リ難シ、【朱之瑜ガ說ノ曲尺一尺一寸五分半ノ鈔尺ニテ農政全書ニヨリテ浙尺ヲ求ムレバ、曲尺九寸二分四氂ナリ、此浙尺ヲ以テ司馬光ガ圖ニヨリテ布帛尺ヲ求ムレバ、曲尺一尺〇四分四氂一豪二絲ニテ、續古摘奇算法ニ載セタル圖ニ合ハズ、又コノ布帛尺ヨリ周尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸七分九氂一豪九絲四忽有奇ニテ、西淸古鑑ニ載セタル王莽ガ銅斛ニモ、周官祿田考ニ載セタル秦熺ガ欵識ノ古尺ニモ、今世傳ハル王莽ガ錢貨ニモ合ハザレバ、朱之瑜ガ鈔尺ハ譌長セシモノナルコト明ラケシ、朱載堉ガ圖ニ從ヒテ、鈔尺ノ長サハ曲尺一尺一寸三分ト定ムベシ】

中根玄珪(璋)ハ曲尺六寸五分六氂有奇

其說ニ黃鐘ノ長サ【卽夏尺】五分ノ一ヲ加ヘタルヲ商尺トス、夏尺ノ十二寸ナリ【法隆寺牙尺卽是ニテ、曲尺九寸八分四氂二豪餘ニ當ルト云ヘリ、法隆寺尺ヲ余ガ度リシハ九寸八分弱ナリ、中根氏ハイカニ度リシニカ】黃鐘ノ長サ五分ノ一ヲ減ジタルヲ周尺トス、夏尺ノ八寸ナリ【律原發揮】

按ズルニ是モ朱載堉ガ說ニ本ヅキシナリ、【中根氏原書ヲバ見ズシテ、類經圖翼ニ引キタルニ據ルト云ヘリ】但朱氏ハ明營造尺ヲ殷尺トシ、其八寸ヲ夏尺トス、夏尺ヨリ殷尺ヲ度レバ、一尺二寸五分ナリ、中根氏ハ朱氏ノ說ニ從ヒテ法隆寺尺ヲ殷尺トシタレドモ【朱氏ガ明營造尺ハ卽唐大尺ニテ、

殷尺是ナリト云ヒシニ從ヒ、法隆寺尺ハ即唐大尺ナレバ明營造尺ト同ジト思ヒ、遂ニ殷尺ト定メシナリ、假令法隆寺尺ヲ九寸八分四氂二豪トスルモ、營造尺ヨリハ七分五氂八豪短シ、中根氏朱氏ノ原書ヲ見ザリシ故、營造尺ノ圖アルヲ知ラズシテ、即唐大尺ト云ヒシ文ニヨリテ、法隆寺尺ト同ジト思ヒシナリ】白虎通ニ「殷人十二寸爲レ尺」ト云ヒシヲ以テ、朱氏ガ殷尺八寸ヲ夏尺トスル說ヲ改メテ、殷尺【法隆寺尺ヲ云】八寸三分三氂三豪三絲三忽不盡ヲ夏尺トス、【コノ夏尺ヨリ殷尺ヲ度レバ一尺二寸ナリ】コノ夏尺ヲ五分シテ一ヲ去テ【夏尺ノ八寸】周尺ト定メシナリ【殷尺ハ曲尺九寸八分四氂二毫、夏尺ハ曲尺八寸二分〇一毫六絲六忽不盡、周尺ハ曲尺六寸五分六氂一毫三絲三忽不盡】三代異尺ノ說從フベカラズ、明營造尺ヲ殷尺トセシモ妄說ナル上ニ【是等ノ事朱載堉ガ尺ノ條ニ云ヘリ】法隆寺尺ヲ明營造尺ト同ジト誤リタレバ、其說マヽスヽ據ルベカラズ【度制略考ニ玄珪晩年臣ニ語テ云、往年律原發揮ヲ著シテ今大ニ悔ユ、何ントナレバ權衡度量皆律ヨリ生ズルニ非ズ、是一ツ、法隆寺ノ尺ハ度ニ非ズ、壓鎭ノ類ノミ、是二ツト云ヒシトアリ、權衡度量律ヨリ生ズルニ非ズト云ヘルハ、荻生氏ノ說ニ服シタルナルベシ、法隆寺尺ヲ壓尺ニテ尺度ニ非ズト云ヒシハ、唐ノ鏤牙尺ナルコトヲ知ラザリシナリ、玄珪晩年ノ定說ハイカナリシカ知ラザレドモ、思フニ荻生氏ノ範圍ヲ出ルコト能ハザリシナラン】

荻生徂徠（茂卿）ハ七寸一分九氂六豪三絲一忽餘

其說ニ後周ノ玉尺ハ武帝ノ保定中ニ作リシ尺ナリ、唐ニテ是ヲ法尺トシ律冠冕ヲ制スルニ用ヒ、【唐小尺ナリ】其他ハ大尺ヲ用ヒシナリ、唐大尺ハ今ノ曲尺ナレバ、唐小尺ハ曲尺八寸三分三氂三豪三絲三忽不盡ニテ、是即後周ノ玉尺ナリ、隋書ニ「玉尺比ニ晉前尺一尺一寸五分八氂一」トアレバ、玉尺ノ長サヲ一一五八ニテ除シ、此長サヲ得ルナリ【度考】

按ズルニ荻生氏ガ唐小尺ヲ、即後周玉尺ト爲シハ、通典ニ貞觀十年張文收新令累黍尺ヲ以テ嘉量ヲ作リシニ、古玉斗ト符スト云ヒシ【全文度攷ニ引リ】古玉斗ヲ即後周ノ時掘得タリシ物ト思ヒシヨリ、後周玉尺ヲ唐尺ト同ジトシタレドモ、【律呂新書ニ後周玉尺ノコトヲ「唐之度量權衡與ニ玉斗一相符者、即此尺爾」ト云ヒシ誤リヲ襲ヒタルナリ】張文收ガ尺ハ隋以來用ヒ來リシ鐵尺ニヨリタルコト疑無ケレバ、【說唐度ノ條ニアリ】ソレニ符合シタル古玉斗ヲ後周ノ古玉斗トハ云ヒ難シ、【コノ玉斗唐小尺ニ合ヒシヲ見レバ、劉宋以後ニ作リシモノカ、後周ノ時蘇綽ガ尺ニ依テ度量ヲ作リシ時ノモノニモアルベク、又晉後尺モ其長サ鐵尺ト粗同ジケレバ、東晉ノ時作リシモノナルモ知ルベカラズ、山田正珍ノ「詳ニ通典權量篇全文一、始擧ニ虞書漢志之文一、中及ニ魏隋一、終則載ニ唐張文收所レ鑄銅斛秤尺皆與ニ古玉斗一符之說上、而中間無下一字及ニ後周玉尺玉斗一者上、由レ此觀レ之、其所レ謂古玉尺指ニ周漢器物一言レ之無レ疑矣」ト云ヒシモ、後周ノ玉斗ニ非ズトシタルナリ、然レドモ周漢ノ器トシタルハ誤ナリ、次ノ條ニ辨ズ】モシ玉尺ト唐尺ト同ジカランニハ、隋書ニ「玉尺比ニ晉前尺一尺一寸五分八氂一」曲尺八寸八分〇〇八絲ト

アルヲ、玉海ニ宋ノ司天監ノ景表尺ハ即唐尺ナリ、晉前尺ニテ校スレバ長キコト六分三氂【晉前尺ノ一尺〇六分三氂ハ曲尺ノ八寸〇七氂八豪八絲】ト云フベキニアラズ、【玉尺ハ唐ノ小尺ニ比スレバ曲尺ニテ七分二氂二豪長シ】

伊藤東涯(長胤)ハ六寸餘

其說ニ孟子ニ「棺七寸槨稱之」ト云ヘリ、大全ニ「饒氏曰、周七寸、只如今四寸許」トアリ、大様周ノ一尺ハ六寸餘ト心得ベシ【制度通】

按ズルニ饒氏ノ說據リ難キコト上ニ云ヘリ、饒氏ノ說ニ從ヘバ曲尺五寸七分餘ナルヲ、六寸餘ト云ヒシモ違ヘリ

正木瀨平(政幹)ハ曲尺七寸七分八氂

其說ニ明和四年三月京ノ書肆含英堂ニテ半兩錢ト、五銖錢トヲ見タリ、半兩錢ニハ邊郭無シ、五銖錢ニハ背ニ郭有リテ、面ノ郭無シ、泉志ヲ考ルニ、梁武ノ天監元年ニ公式女錢ヲ鑄ル、徑一寸、文ヲ五銖ト云フ、張台ガ曰、背肉孔郭有ル者、公式女錢ト云フト、今ノ秤ニテ計リシニ、五分六氂、是ニ據リテ秤ヲ作リ梁秤トシ、諸秤ヲ推シテ唐ノ秤ニ至リシニ今ノ一匁弱ナリ、然レバ此錢公式女錢ナルコト疑無シ、又今ノ曲尺ヲ以テ度リシニ、其正ヲ得ザルニヨリ法ニヨリテ、錢ノ徑ヲ六累ネテ、四寸七分ヲ得、コレヲ右ニ置キ又梁ノ法尺ハ晉前尺ノ一尺〇〇七氂ナレバ、是ヲ六累ネテ六尺〇四分二氂ヲ得、

コレヲ左ニ置キ【錢徑ヲ六累ネタルニヨリ、是ヲモ六累ネテ等數ヲ求メシナリ】約術ヲ以テ約スレバ、等數二氂ヲ得、【右ノ四寸七分ヲ以テ左ノ六尺〇四分二氂ヲ減ズルコト十二度ニ至レバ、左四寸〇二氂殘ル、此四寸〇二氂ヲ以テ右四寸七分ヲ減ズレバ、右六分八氂殘ル、此六分八氂ヲ以テ左四寸〇二氂ヲ減ジ、五度ニ至レバ左六分二氂殘ル、此六分二氂ヲ以テ右六分八氂ヲ減ズレバ、右六氂殘ル、此六氂ヲ以テ左六分二氂ヲ減ジテ十度ニ至レバ、左二氂殘ル、此二氂ヲ以テ右六氂ヲ再減スレバ、右二氂殘リテ、左右共ニ二氂トナル、是ヲ等數二氂ヲ得ト云フ】此二氂ヲ以テ、左ノ六尺〇四分二氂ヲ約スレバ、三千〇二十一ヲ得、右ノ四寸七分ヲ約スレバ二千三百五十ヲ得、即晉前尺ノ長サハ曲尺ヲ三千〇二十一ニ分チタル二千三百五十ナルコトヲ知ル、是ニテ求ムレバ周尺【即晉前尺】ハ曲尺七寸七分七氂八豪八絲八忽强ナリ、【母子ヲ分チ、母ノ三千〇二十一ヲ以テ、子ノ二千三百五十ヲ除スレバ、此數ヲ得、按ズルニ母子ヲ分ンニハ此ノ如ク計ルベケレドモ、周尺ヲ曲尺ノ何ホドヽ計ンニハ、此錢六枚ヲ累ネテ曲尺四寸七分ヲ得、コレヲ六歸スレバ一錢ノ徑曲尺七分八氂三豪三絲三忽不盡ナリ、是ヲ梁法尺ノ一寸トセバ、コノ徑ヲ一〇〇七ニテ除スレバ、晉前尺ノ長サハ知ラルヽナリ】古錢ハ多クノ年ヲ經タルニヨリ、少シノ刓泐ハアルベケレバ、今曲尺七寸七分八氂ト定メシナリ【三器逢源考】

按ズルニ隋書食貨志ニ、「梁武帝乃鑄レ錢、肉好周郭、文曰二五銖一」【所謂內郭五銖ナリ、從前ノ五銖ハ肉郭ノミテ、好郭ハ無カリシヲ、梁ニテ鑄タル五銖ハ肉好トモニ郭アリシナリ】同書ニ、「又別鑄二五

銖、除二除肉郭一謂二之女錢一」ト云ヘリ、【內郭五銖ノ好郭ノミアリテ肉郭無キモノナリ、泉志ニ顧烜ヲ引テ、「天監元年鑄二公式女錢一、徑一寸、稱兩如二新鑄五銖一、但邊無二輪郭一」トモ云ヘリ】又泉志ニ張台ヲ引テ、「背有二好郭一者謂二之公式女錢一、背無二好郭一者正謂二之女錢一」ト云ヘリ、【面ニハ好郭アリテ肉郭無ク、背ニハ肉好共ニ郭アルハ官ニテ鑄タル女錢ナル故ニ、公式女錢ト云ヒ、民間ニテ鑄タリシハ面ハ公式女錢ト同ジケレドモ、背ハ肉郭ノミアリテ好郭無シ、是ヲバ公式トハ云ハデ女錢トノミ云ヒシトナリ】余童年ヨリ古錢ヲ好ミ普ク諸家ノ珍藏ヲ見タレドモ、イマダ女錢ヲ見シコト無ク、同好ノ人々モ見タリシト云フコトヲ聞カズ、正木氏ノ見シハ眞ニ女錢ナリシヤ、オボツカナシ【正木氏ノ見シ五銖錢好郭アルコトヲ云ハズ、モシ好郭無クバ女錢ニアラズ、疑ラクハ正木氏ノ見タリシハ、漢ノ五銖ノ至テ細緣ナルモノカ、或ハ對文錢ノ類ニハアラザルニヤ】又梁ノ五銖錢ヲ法尺ノ一寸ニ作リシコトモ史ニ見ユルコト無シ、顧烜ガ徑一寸ト云ヒシハ、顧氏其錢ヲ度リシニ一寸ナリト云ヘルナレバ、其度ハ梁ノ俗間尺ナルベシ【今世傳ハル內郭五銖ヲ度ルニ、曲尺八分一二氂ニテ、略梁ノ俗尺ノ一寸ナリ、內郭五銖ヲモ公式女錢ヲモ、顧烜共ニ徑一寸ト云ヒタレバ、モシ女錢ノ傳ハリタランニハ、是モ必曲尺八分一二氂ナルベキニ、正木氏ノ見シ五銖錢ハ徑七分八氂三毫三絲三忽不盡ナリシト云ヘバ、是モ女錢ナラザリシ一證ナリ】然ラバ正木氏ノ見タリシ錢、假令眞ニ女錢ナリシトモ梁俗尺ニヨリテ算ヲ起スベキニ【女錢ノ徑ヲ曲尺七分八氂三毫三絲三忽不盡トシ、是ヲ

梁俗尺ノ一寸トスレバ、周尺ハ曲尺七寸三分一釐四豪〇三忽餘ナリ】法尺ヲ以テ算セシモタガヘリ、
且梁稱ヲ作リテ唐稱ヲ求メシ說モ明ナラザレバ、此說據トナシ難シ

山田圖南（正珍）ハ曲尺八寸三分三釐三豪三絲三忽不盡

其說ニ唐貞觀中張文收銅斛尺升合ヲ鑄シヲ樂署ニ藏メタリシニ、則天ノ時武延秀ソレ等ト律マタ古玉尺玉斗升合ヲモ獻ジタリ、【按ズルニ玉尺ノコト唐書ニハアレドモ、通典ニハ載セザレバ誤ナラン】其斛ノ銘ニモ、「與古玉斗相符」トアリシト云ヘリ、此古玉斗ヲ後周ノ時得タリシ物ト、荻生氏ノ云ヒタルハ誤ニテ【辨證上ノ條ニ引リ】周漢ノ物ナルベシ、張文收ガ尺、ソレニ符合スレバ唐小尺ハ即周尺ナリ、長孫無忌ガ、唐律ニ「以大尺六之五爲古尺」ト云ヒ、隋書ノ志モ同人ノ作ナルニ、晉前尺ヲ古尺トシタレバ、晉前尺モ大尺ノ六ノ五ナルコト明ラケシ【權量撥記】

按ズルニ張文收ガ云フ所ノ古玉斗、何レノ代ノ物ナルコト定カニ知ラレザレバ、ソレニ同ジトテ、唐小尺ヲ即晉前尺トハ定ムベカラズ、【コノ古玉斗疑ラクハ東晉以後ノ物ナルベキコト前條ニ云ヘリ】又唐律ニ「以大尺六之五爲古尺」ト云ヘリト引キタレドモ、魏徵等ガ唐律ニモ長孫無忌ガ疏議ニモサル文アルコト無シ、是ハ通典ニ貞觀ノ尺ヲ開元ノ時通行ノ尺ニ校ベタリシニ、六ノ五ニ當ルト云ヒシヲ思ヒタガヘシナルベシ、貞觀ノ尺ハ小尺、開元ノ通行尺ハ大尺ナレバ、通典ニ云ヒシハ大尺ト、小尺トノ比校ニテ、コヽニ引證スベキニ非ズ、然ラバ晉前尺ノ唐小尺ト同ジキ證ハアルコト

無シ、況玉海ニ唐尺ヲ晉前尺ヨリ六分三氂長シトアレバ、唐尺ノ晉前尺ニ非ルコト明ナルヲヤ

田村西湖（善之）ハ曲尺七寸八分三氂二豪〇八忽有奇

共說ニ今ノ曲尺ハ唐大尺ニテ、曲尺八寸三分寸ノ一唐小尺ナリ、唐小尺ハ卽宋氏尺ナレバ、隋書ニ「宋氏尺實比ニ晉前尺一尺六分四氂ニ」トアルニヨリテ、曲尺八寸三分寸ノ一ヲ一零六四ヲ以テ除スレバ、七八三二零八有奇ヲ得、是晉前尺ナリ【度量小識】

按ズルニ諸家ノ周尺ヲ求メタルヤウ、皆誤リタルニ、獨コノ考共法ヲ得タリ、但唐書ニ開元錢ヲ徑八分ト云ヒシヨリ、今ノ曲尺ヲ唐大尺ノ誤無キモノト思ヒシハ非ナリ、【今ノ曲尺ハ唐大尺ナレドモ、三分譌長セシコト度攷ニ云ヘリ】曲尺ヲ卽唐大尺トシタルニヨリ、周尺モ二分三氂餘長カリシナリ、モシ周尺ヲ曲尺七寸八分三氂二豪〇八忽有奇トシテ布帛尺ヲ求ムレバ、曲尺一尺〇四分九氂四豪九絲八忽餘【司馬光ガ圖ニ布帛尺ヲ「當ニ周尺一尺三寸四分ニ」ト云ヒシニヨル】浙尺ハ曲尺九寸三分二氂三豪九絲有奇【司馬光ガ圖ニ周尺ヲ「當ニ浙尺八寸四分ニ」ト云ヒシニヨル】鈔尺ハ曲尺一尺一寸六分五氂四豪八絲七忽餘ニテ【農政全書ニ「浙尺八寸當ニ今織染所欽降金星牙尺六寸四分ニ」ト云ヒシニヨル、織染所尺ハ卽鈔尺ナリ】布帛尺ハ楊輝ガ圖ニ合ハズ、鈔尺ハ朱載堉ガ圖ニ合ハズ、共周尺ハ王莽ガ錢貨銅斛秦熺ガ欵識ノ古尺ニモ合ハザレバ、此說モ據リ難シ

藤蒙齋（貞幹）ハ三說アリ、一說ハ七寸六分

其說ニ大寶ノ勅書ニ捺シタル天皇御璽【方曲尺二寸三分弱】大學寮印【方一寸六分】ヲ載セテ、嘗テ元狩五銖・五行大布・太貨六銖・大和五銖・布泉・白錢五銖・貨泉・貨布等ノ錢ヲ以テ泉志ノ言フ所ニヨリテ別ニ度ヲ起シヽカバ、今ノ曲尺七寸六分ニ當レリ、是晉前尺ナリ、凡泉志ニ舊譜トテ古泉ヲ度リシハ皆此晉前尺ナリ、此尺ニテ大寶勅書ノ御璽ヲ度レバ、方三寸大學寮印ハ方二寸二分ニテ、正ニ令ニ云ヒシト合ヘリ、是ニヨレバ大寶令ヲ作リシ時ハ、晉前尺ヲ用ヒシナラン【金石遺文】

按ズルニ藤氏ノ說ニヨリ、泉志ニ引キタル舊譜ニテ尺ヲ起セバ、元狩五銖ニテハ、【舊譜ニ徑一寸ト云ヘリ、今度ルニ曲尺八分五釐】曲尺八寸五分ヲ一尺トス、五行大布ニテハ【舊譜ニ徑一寸一分ト云ヘリ、今度ルニ曲尺九分弱】八寸一分餘ヲ一尺トス、布泉ニテハ【舊譜ニ徑一寸トアリ、今度ルニ曲尺八分强】八寸餘ヲ一尺トス、白錢五銖ノ【舊譜ニ徑一寸トアリ、今度ルニ大ナル者ハ曲尺八分三釐、小ナル者ハ曲尺七分五釐】大ナル者ニテハ八寸三分ヲ一尺トシ、小ナル者ニテハ七寸五分ヲ一尺トス、【舊譜ニ徑一寸ト云ヒシハ、大ナル者ヲ云フナルベシ】多ク八寸以上ナレバ舊譜ニ計リシ尺度ハ皆唐小尺ナリ、【舊譜ハ唐ノ封演ガ錢譜ナレバ其度リシ尺ハ唐小尺ナリ、此事度攷ニ詳ニス】又太貨六銖ハ舊譜ニ徑度ヲ載セズ、大和五銖ハ今世傳ハラザレバ、此二錢ハ尺度ノ證ニハナシ難シ、貨泉ハ泉志ニハ張台ヲ引テ、「有二徑寸四分者一、有二徑六分者一」ト云ヒ、李孝美モ「有下徑寸五分至二四分一者上」ト云ヘバ、泉志ニヨリテハ度ヲ起スコト能ハズ、然レバ元狩五銖以下ニテ尺ヲ起シシカ曲尺七寸六

分ニ當リシト云フハ僞ナリ、タヾ貨布ノ條ニ張台ヲ引テ、以二今尺一量レ之、得二寸九分一ト云ヘリ、曲尺一寸九分ヲ二十五分シテ一分ヲ得、【漢書食貨志ニ貨布長二寸五分トアリ】ソレヨリ一尺ヲ求ムレバ、曲尺七寸六分ナル故ニ、晉前尺ヲ曲尺七寸六分ト定メシナルベシ、サレドモ張台ハ唐人ナレバ【張台ガ唐人ナルコト宋ノ周輝ガ清波雜志ニ見ユ、晁公武ガ讀書志ニモ、唐張台有泉譜兩卷】ト云ヘリ、謁長セシ曲尺ニテ度ルベキニ非ズ【曲尺ハ唐大尺ノ三分謁長セシモノナリ、度攷ニ詳ニス】必唐大尺ニテ度リシナラン、唐大尺ノ一寸九分ハ曲尺ノ一寸八分四耄三豪ナレバ、是ヲ二十五分シテ尺ヲ求ムル時ハ、曲尺七寸三分七耄二豪ナリ、【唐大尺ヨリ三分謁長セシ今ノ曲尺ヲ以テ貨布ヲ度ルニ、一寸九分アレバ、張台ガ一寸九分ト云ヒシハ、大凡ニ度リタルニテ、其實ハ一寸九分五六耄モアリシナルベシ】然ラバ藤氏ノ七寸六分ト云ヒシハ偶中ニテ眞ニ其度ヲ得タルニハ非ズ、【故ニ或ハ七寸四分弱トモ云ヒ、後ニハ八寸許ナドト云ヒテ七寸六分ヲ定說トナサズ】又大寶勅書ノ璽印ヲ證トシテ、大寶ノ時ハ晉前尺ヲ用ヒシナラント云ヒタレドモ、大寶ノ時ハ唐ノ大小尺ヲ用ヒテ【此事度攷ニ云ヘリ】晉前尺ハ用ヒザリシニヨレバ、彼勅書ハ張台ガ言ニヨリテ曲尺七寸六分ノ度ヲ起シ、其尺ニテ璽印ヲ作リ贋造セシモノナルベシ

一ハ七寸四分弱

同人ノ集古圖ニハ其說金石遺文ト全ク同ジクシテ、タヾ七寸六分ヲ、七寸四分弱トアリ

按ズルニ是ハ今ノ曲尺ノ謂長尺ナルコトヲ知リテ、曲尺九寸七分三釐許ヲ唐大尺トシ、【法隆寺尺ニヤ據リツラン】一寸九分ヲ度レバ曲尺一寸八分四釐八豪四絲ナリ、是ヲ二十五分シテ一尺ヲ求ムレバ、七寸三分九釐四豪八絲ナレバ、七寸四分弱ト云ヒシナルベシ、然レドモ張台ガ一寸九分ト云ヒシ言精シク度リシニ非ザルニ似タレバ、證トナシ難キ上ニ、七寸四分弱トスレバ、古泉・銅斛・古尺・布帛尺・鈔尺ノ圖ニモ合ハザレバ、コノ尺モ據リ難シ

一ハ八寸許

其說ニ伯耆守近家宿禰ノ說ニ、曲尺六寸六分五釐弱ヲ周尺トシ、周尺ノ一尺二寸ヲ古尺トス、是所傳ノ祕說ナリト云ヘリ、幹按ズルニ古尺ハ卽晉前尺ナリ、余嘗テ古錢【原注】元狩鑄五銖錢・鍾官赤側錢・太貨六銖錢・常平五銖錢・布泉錢・五行大布錢・白錢。五銖錢、已上眞正大樣者】ヲ以テ晉尺ヲ起ス、一尺ハ曲尺ノ八寸許ナリ【好古日錄】

按ズルニ近家宿禰ハ樂家辻氏ナリ、云フ所ノ曲尺六寸六分五釐弱ヲ周尺トシ、ソノ一尺二寸ヲ一尺トシタル古尺ハ曲尺七寸九分八釐弱ナレバ、卽愓齋ガ云フ所ノ御府尺ナルベシ、然ラバ御府尺ヲ古尺トシ、古尺ノ八寸ヲ周尺ト定メタルモノナラン、【周尺ヨリ古尺ヲ起シシ如ク云ヒタレドモ、周尺ヨリ古尺ヲ起シタルニハアラデ、古尺ヨリ周尺ヲ求メタルモノナルベシ、但古尺ノ八寸ヲ周尺トスレバ、古尺ノ一尺二寸五分ナルヲ、周尺ノ一尺二寸ヲ古尺トスト云ヒシハ非ナリ、此誤往々アルコト

ナリ】所傳ノ祕說ナリト云ヒシカドモ、御府尺ヨリ起シタレバ、律尺考驗ニヨリテ立テタル說ナルベシ、然ラバ此說古傳說ニハアルベカラズ、八寸ノ尺ハ戰國ニ出テ、眞ノ周尺ニ非ザルコト、鄭玄コレヲ辨ジタリ、【上ニ引リ】況鄭玄ノ辨ジタルハ漢尺【卽周ノ十寸尺ナリ】ヨリ八寸ナルヲ、是ハ唐小尺【御府尺ノ唐小尺ナルコトモ上ニ云ヘリ】ヨリ八寸ト定メタレバ、其說據ルベカラザルコト辨ヲ俟タズ、藤氏コノ古尺ヲ晉前尺ナリト云ヒシハ、初泉志ノ張台ガ言ニヨリテ七寸六分ヲ晉前尺ト定メ、舊譜ニテ起シタルモ七寸六分ナリト誣ヒタレドモ、實ハ舊譜ノ度ル所ハ唐小尺ナレバ【此事度攷ニ詳ニス】曲尺八寸餘ナルニヨリ、一モ合ハザルヲ以テ其說ヲ改メテ、辻氏云フ所ノ古尺ヲ晉前尺ト定メシナリ、【藤氏呉服尺ヲ唐大尺トシ、曲尺ヲ唐小尺トシタリ、舊譜ニ云フ所ノ度ハ八寸許ニテ、曲尺ヨリハ稍短ケレバ、晉前尺ナリト思ヒシナルベシ、藤氏ガ大小尺ノ說ノ誤ナルコトハ度攷ニ辨ゼリ】然レドモ辻氏ノ古尺ハ御府尺ニテ、卽唐小尺舊譜ニ度リシ尺モ唐小尺ナレバ、何レトモ王莽ガ銅斛・錢貨・秦熺ガ古尺ノ圖ニモ合ハズ、是ヨリ計レバ布帛尺ハ一尺〇六分九毫强、浙尺ハ九寸五分弱、鈔尺ハ一尺一寸八分七毫五豪弱ニテ、皆合ハザレバ此尺ノ晉前尺ニ非ルコト明ナリ、【晉前尺ハ荀勗ガ古器古錢ニヨリテ造リシ尺ナリ、今古錢ヲ以テ尺ヲ起セバ、曲尺七寸六分ナレバ、晉前尺ノ八寸許ナラザルコト辨證ヲ俟タズ】藤氏又古錢七品ヲ擧テ、是ニヨリテ八寸許ノ尺ヲ起スト云ヒタレドモ、【是卽唐小尺ニテ晉前尺ニ非ザルコト上ニ云ヘリ】其七品ノ古錢ヲ考フルニ、布泉・五

行大布・白錢五銖【大樣者】ニテ起セバ、八寸餘ナレバ云フ所ノ如シ、元狩五銖ニテ起セバ、八寸五分ニテ頗長シ、【此五銖徑曲尺八分五毫ナレバ、唐小尺ニテハ、一寸〇五毫五豪許ナルヲ、舊譜ニ徑一寸ト云ヒタルハ大凡ニ度リシナリ】然レドモ是ハ强テ八寸許トモ云フベケレドモ、常平五銖ハ舊譜ニ徑八分ト云ヘリ、今曲尺ニテ度ルニモ大凡八分ナレバ、是ニヨリテハ爭デ八寸許ノ尺ヲ起スコトヲ得ン、又太貨六銖ハ舊譜ニ尺度ヲ云ハズ、鍾官赤側錢ハ今世傳ハラザレバ、此二錢ニテハ尺ヲ起スコト能ハズ、サレバ赤側・太貨・常平等ノ錢ニ依リテ、八寸許ノ尺ヲ起シタリト云ヒシハ僞ナリ、信ズベカラズ

最上德內(常矩)ハ曲尺七寸五分許

其說ニ我邦中人ノ長曲尺五尺四五寸ナリ、今試ニ曲尺五尺七八寸ヲ周人中ノ上トシテ求ムレバ、周尺ハ大率曲尺七寸二分【按ズルニ曲尺五尺七寸六分ヲ八尺トシタルナリ】戰國秦漢ノ事跡ヲ推スニ能合ヘドモ、其重サヲ考古圖・博古圖・古錢ニ考フレバ當ラザルナリ、【度ニヨリテ權ヲ起ス法、假令バ、一尺ノ長サ曲尺七寸二分ナラバ七寸二分ヲ再自乘シ、是ニ漢ノ斛法千六百二十寸ヲ乘ジテ實トシ、今ノ斛法六十四寸五百五十分ヲ以テ除シ、漢ノ斛ハ今ノ幾何ナルヲ知リ、今ノ一升ハ重サ略四百匁ナレバ、四百匁ヲ以テ乘ズレバ、漢斛ノ重サ幾何ナルヲ知ル、漢ノ一石ノ重サ百二十斤ナレバ、百二十斤ヲ以テ除スレバ、漢ノ一斤ノ重サ今ノ三十一匁有奇ナルコトヲ知ル、十六兩ヲ斤トスル故、十六兩ヲ以テ

除スレバ、兩ハ今ノ一匁九分五毫强ナリ】又周人ノ長ヲ曲尺五尺八九寸トシテ、古器ニ挍ベ考フルニ是モ當リ難シ【五尺八寸五分ヲ八尺トスレバ、其一尺ハ七寸三分一釐二毫五絲、是ヨリ一斤ノ重サヲ求ムレバ、三十二匁五分七釐有奇ナリ】又曲尺六尺一二寸トスレバ【六尺一寸五分ヲ八尺トスレバ、一尺ハ七寸六分八釐七毫五絲ナリ】隋書ニ云フ所ト同ジカラズ、故ニ今其間ヲ以テ曲尺六尺ヲ定トス、ソレニ據リテ周尺ヲ求ムレバ曲尺七寸五分ナリ、【度量衡說統】

按ズルニ考古圖・博古圖ニ載セタル器ノ斤兩ヲ知ルベキ者ヲ考フルニ、輕キ者ハ一斤、今ノ三十七匁五分餘、重キ者ハ今ノ七十匁餘【平均スレバ五十三匁七分五釐ナリ】古錢ノ至テ重キ者ヨリ計レバ今ノ九十六匁ニ至ル者アリ、【至テ輕キ者ヲ合セテ平均スレバ五十九匁六分八釐ナリ】周尺ヲ曲尺七寸二分トスルモ、七寸三分一釐二毫五絲トスルモ、古器ニ合ハザルコト最上氏ノ云ヘルガ如シ、然レドモ最上氏ノ說ニ從ヒ、周尺ヲ曲尺七寸五分トシテ一斤ヲ求ムレバ、今ノ三十五匁一分四釐有奇ニテ、是モ考古圖・博古圖ノ古器ニモ古錢ニモ合ハズ、然ラバ所謂五十步ヲ以テ百步ヲ笑フノ類ナリ、【漢ノ一斤ハ六十匁許ナルコト下卷ニ證セリ、今試ニ上ノ算法ニヨリテ求ムレバ曲尺八寸五分許ノ尺ニアラザレバ一斤ノ重サ六十匁ナルコト能ハズ、度權比挍ノ說ハ通ゼザルナリ、米一石重百二十斤ト云フノ依リ難キコトモ、下卷ニ辨ジタリ】又人ノ長ヲ曲尺六尺一二寸トスレバ、隋書ニ合ハズトハ何書ヲサシテ云ヘルニカ、【最上氏人ノ長曲尺六尺トシ、周尺ヲ曲尺七寸五分ト定メタルニヨリ

テ、醫書ニテ其說ニ合フ者ヲ考フルニ、靈樞經水篇ニ「八尺之士」トアリ、曲尺六尺ヲ古ノ八尺トシテ八ニ分テバ、一尺ノ長七寸五分ナレバ、是ヲ云ヘルカ、然レドモ人ノ長八尺ト云フコトハ、考工記・說文等ニ出タレバ是ヲ引テ證スベキニモアラズ、況骨度篇ニハ「人長七尺五寸」ト云ヘリ、是ニヨリテ今人ノ長ヲ曲尺六尺トシ、是ヲ古ノ七尺五寸トシテ一尺ヲ求ムレバ、曲尺八寸ニテ其立テタル七寸五分ノ說ト合ハザレバ、靈樞ニ依リシニモアラジ、猶其說ヲ尋ヌベシ】又人ノ長ヲ曲尺六尺トシ、八ニ分テバ周尺ハ曲尺七寸五分、又曲尺六尺一寸五分トシ、是ヲ八ニ分テバ曲尺七寸六分八氂七豪五絲ナリ、何ヲ以テ曲尺七寸五分ナレバ、醫書ニ合ヒ七寸六分八氂七豪五絲ナレバ、醫書ニ合ハザルニカ其說明ナラズ、又凡形ノ大ナル物ニ依リテ度ヲ起セバ必密ナラザルニ、況定マルコト無キ人ノ長ヲ推シ量リテ古尺ヲ起シタレバ、據トスルニ足ラズ

諸葛鬒髮（畚）ハ曲尺六寸四分二氂

其說ニ、古八尺ヲ以テ人ノ常度トス【考工記・淮南子（天文訓）說文・素問・靈樞】或ハ七尺五寸トシ、【靈樞】或ハ七尺トス【列子（黃帝篇）荀子（勸學篇）淮南子（精神篇）】皆中人ノ大概ヲ擧ゲテ云ヒシナリ、今人ノ常度ハ大抵曲尺五尺三四寸、或ハ五尺一二寸ナリ、予ガ長大抵常人ト同ジ、試ニ度ルニ曲尺五尺一寸四分强ナリ、八ヲ以テ是ヲ除スレバ、六寸四分二氂五豪ヲ得、コレ周尺ナリ、【淮南子・說文載スル所モ周人ト同ジケレバ又漢尺度タガハザリシナリ】又黑黍ヲ得テ殼ヲ去テ百ヲ累子テ度リシニ、曲尺六

寸四分二毫ナリ、又予ガ友人肥前ニ往シガ黍ヲ得テ還リシヲ以テ百ヲ累ネテ度リシハ、六寸四分ナリ、室師禮ノ駿臺祕書ニ、井上河内守ニ命ジテ周尺ヲ考ヘサセラレシニ、山崎闇齋四方ノ黍ヲ聚メ中黍ヲ擇ビテ尺ヲ作リシカバ、曲尺六寸四分弱ト云ヒ、朱舜水モ古尺ハ本邦ノ曲尺六寸四分弱ト云ヘリ、故ニ今身度ニヨリテ曲尺六寸四分二毫ヲ周漢ノ一尺ト定ム【律量全編】

按ズルニ古書ニ人ノ長ヲ八尺トモ、【按ズルニ潛夫論（十列篇）論衡（祀義篇）ニモ八尺トアリ】七尺五寸トモ云ヘリ【按ズルニ周禮卿大夫・趙策・呂氏春秋上農篇・淮南子氾論訓・脩務訓・說苑脩文篇等ニモ七尺トアリ】七尺トハ常人ノ度ヲ云ヒ、八尺トハ傀偉ナル人ヲ云ヒシモノナルベシ、然ルニ諸葛氏三說ヲ並ベ引ナガラ、八尺ト云フノミヲ取レルハイカガ、【モシ八尺ヲ常人ノ度トシタランニハ、七尺ト云ヒシハ矮人ヲ度リタルモノトセンカ、人ノ度ヲ云フニ偉人ヲバ度ルベケレドモ、矮人ヲ度ルベキニアラズ、今モ常人ヲバ五尺二三寸トスレドモ、偉人ヲバ、六尺男子トモ云ヘリ】又自己ノ身度ヲ以テ周漢ノ尺ヲ起シタランニヨリ、古尺ニ符センヤ符セザランヤ、論ゼズシテ人其非ヲ覺ルベシ、山崎闇齋ガ黍ヲ以テ定メタル尺ノ長サニ合ヒタリト云ヒタレドモ、黍ヲ累ネテ度ヲ起シ難キコト既ニ云ヘリ、又朱之瑜ガ古尺ニ合ヒタリトスレドモ、朱之瑜ガ周尺ハ朱載堉ガ僞說ニヨリテ、又誤リタルモノナルコトモ上ニ辨ジタリ、然ラバ皆證トスルニ足ラザレバ此說モ據リ難シ

藤本□□（廉）ハ曲尺六寸八分九毫五豪五絲有奇

其說ニ小倉實起卿ノ傳ヘラレシ御府尺、長サ今尺ノ七寸九分八氂五豪【三器考略ニハ此尺ヲ「當ニ曲尺七寸九分五氂弱」ト云ヒ、律尺考驗ニ此尺ヲ一尺〇二分二氂一豪有奇ニ分チテ、古尺ヲ曲尺七寸八分三氂二豪ト定メシニ據リテ算スレバ、曲尺八寸〇〇五豪有奇ナリ、二說同ジカラザレドモ、共ニ此ニ云フ所ト同ジカラズ、藤本氏ハ何ニ依リテカク云ヒシニカオボツカナシ】周尺ト題セリ、空海唐ヨリ賚歸リテ朝ニ獻ゼシ物ナリ、隋唐ノ僧徒ノ周尺ト稱スルハ、後周ノ玉尺ニテ即唐小尺ナリ、後周玉尺ハ晋前尺ノ一尺一寸五分八氂ト隋書ニ見エタレバ、御府尺ノ長サヲ一尺一寸五分八氂ニテ除スレバ、晋前尺ノ長サヲ得【三器彙考】

按ズルニ御府尺ハ律衣尺ナリ、是ヲ唐小尺ナリト云ヒシハ是ナリ、其長サ後周ノ玉尺ト同ジケレバ、周尺ト云フト思ヒシハ誤ナリ、唐小尺ハ南朝歷代傳來ノ古尺ニシテ、周漢ヨリ傳ハリタルモノナル故ニ、時俗コレヲ周尺ト云ヒ、大尺ハ其一尺二寸ヲ一尺トシタル尺ナレバ唐尺ト云フ、【猶古尺今尺ト云フガ如シ】故ニ唐僧道宣・宋僧元照等唐小尺ヲ姬周尺ト云ヘリ、是周尺ト云フハ後周ノ尺ト云フコトニアラザルヲ證スベシ、唐小尺ヲ後周ノ玉尺ナリト云ヒシハ荻生氏ノ說ニテ、其誤ナルコトハ既ニ辨ゼリ、然ラバ藤本氏ノ說ハ惕齋ガ固陋ニテ、獨御府尺ニ據リテ他ニ傳ハレル律衣尺ヲ考ヘザルト、荻生氏ガ唐小尺ヲ即後周尺トセシ誤トヲ合セテ立テタルナレバ、是モ據ルニ足ラズ

仁井田南陽（好古）ハ曲尺六寸八分二氂六豪

其說ニ丘濬周尺ハ鈔尺六寸四分弱ト云ヘリ、又營造尺ノ八寸ハ裁衣尺ノ七寸五分ト朱載堉ガ云ヒシニ據リテ、鈔尺【即裁衣尺】ヲ求ムルニ營造尺ハ唐大尺ニテ即曲尺ナレバ、曲尺八寸ヲ七寸五分トシタル鈔尺ハ今ノ一尺〇六分六氂ナリ、是ニ六寸四分ヲ乘ズレバ今ノ六寸八分二氂六豪ヲ得、是周尺ナリコノ周尺ヲ以テ黃鐘成ガ尙書通考ニ載セタル漢錢ノ圖ニ按ルニ、豪髮ノ差無シ、又司馬光ノ圖ニ「以二周尺一按レ之、布帛尺正是七寸五分弱」ト云ヒシニ據リ、七寸五分ヲ以テ此周尺ヲ除スレバ、曲尺九寸一分〇一豪三絲ヲ得、是ヲ布帛尺トス【稽古雜編】

按ズルニ丘濬ガ說據リ難キコト上ニ云ヘリ、鈔尺ハ曲尺一尺一寸三分ナルコト是モ既ニ云ヘリ、然ルヲ一尺〇六分六氂トシタルハ、明ノ營造尺ヲ朱載堉ガ即曲尺ナリト云ヒタルニ據リテ、即本邦ノ曲尺ト同ジト思ヒシヨリノ誤ナリ、【明ノ營造尺ハ曲尺ノ一尺〇六分ナルコト、是モ上ニ云ヘリ、律學新說ニ營造尺・量地尺・鈔尺トモニ圖ヲ出セリ、仁井田氏朱載堉ガ說ニ據リナガラ、此圖ヲ證トセザルハイカヾ】丘說信ジ難キ上ニ鈔尺ノ長サモ誤リタレバ據トスベカラズ、尙書通考ニ載セシ漢錢ノ圖ニ合ヒタリト云ヒタレドモ、其書傳刻ヲ經タルモノニテ畫ガケル圖モ甚拙ケレバ證トナシ難シ、今世傳ハル貨布ヲ見テ、其圖ノ證スルニ足ラザルヲ知ルベシ、又此周尺ニテ布帛尺ヲ起シ、曲尺九寸一分強ト定メタレドモ、宋ハ唐ノ制ニ沿リタレバ、然ル尺ヲ用フベキニ非ズ【今朱載堉ガ鈔尺ノ圖ニヨリ、徐光啓ガ比按ニ從ヒテ淅尺ヲ定メ、司馬光ガ圖ヲ以テ布帛尺ヲ起セバ、曲尺一尺〇二分

一氂五豪二絲、楊輝ガ續古摘奇算法ニ載セタル宋尺ノ圖全同ジ、律呂新書ト玉海トニテ起セバ、曲尺一尺〇二分六氂ナリ、又至大重脩博古圖ハ宋版ノ博古圖ノ元ノ代マデ傳ハリシヲ至大ノ時漫漶ノ處ヲ補修セシ本ナリ、其圖每ニ「或依元樣製」ト云ヒ、「或減小樣製」ト云ヘリ、【今本ノ博古圖ハ皆縮寫ナリ、故ニ是等ノ語悉ク刪去レリ】今布帛尺ヲ一尺〇二分許トシテ彼元樣ニ依リタル圖ヲ計ルニ、其錄スル所ノ尺度ト略合ヘバ、布帛尺ヲ曲尺九寸一分强ト云ヒシハ據ルベカラザルコト明ラケシ、モシ布帛尺ヲ曲尺九寸一分强トシテ浙尺ヲ求ムレバ、曲尺八寸〇五氂三豪有奇、コノ浙尺ヨリ鈔尺ヲ求ムレバ曲尺〇〇六氂六豪有奇ニテ、仁井田氏ノ一尺〇六分六氂ト定メシニモ合ハズ、況朱載堉ガ圖ニ比レバ一寸二分餘短キヲヤ】

此他尙有ルベケレドモ、今ハ見及ブ所ヲ論ズルノミナリ、【荻生氏ノ度考ニ、「貨泉・大泉世或有レ之、年代久遠眞僞不レ可レ知、且周漢古錢世多賓レ之、故多ニ贋物一不レ可レ爲レ憑」ト云ヘリ、讀書人ハ多クハ不鑒ナル者ナレバ、古錢ニヨリテ尺ヲ起サンコトハ難カルベシ、周官祿田考・西淸古鑑ノ二書ニ據レバ、周尺ノ長サ辨ヲ俟タザレドモ、此二書ハ近年舶來シタレバ、古人ハ見ザリシ故、是ニヨリテ周尺ヲ定ムルコトモ能ハザリシナリ、然レドモ明ノ鈔尺ハ律學新說ニ圖アレバ其長サ知ルベシ、農政全書ニ鈔尺・浙尺ノ比挍アレバ、鈔尺ニヨリテ浙尺ヲ起スベシ、又司馬光ガ圖ニ浙尺・布帛尺・周尺ノ比挍アレバ、浙尺ヲ以テ周尺ヲ定ムベシ、中根氏・正木氏ノ輩ハ云フニ足ラズ、春齋・惕齋・徂徠・東涯等ノ諸先生コ

レラノ書ヲ見ザリシ人ニアラザルニ、是ニ心ツカザリシハ如何ナリシコトニカ疑ハシ】

本朝度量權衡攷附錄卷上之下

本朝度量權衡攷附錄卷中

狩谷望之著

周量 周ノ量ハ左傳【昭三年】ニ「齊舊四量、豆區釜鍾、四-升爲レ豆、各自ニ其四一以登ニ於釜一、釜十則鍾」杜預ガ注ニ、「四-豆爲レ區、區斗六升、四-區爲レ釜、釜六斗四升、鍾六斛四斗」ト云ヒ、【釜ハ積千寸ナルコト下ニ引キシ考工記ニテ知ルベシ、然ラバ鍾ハ萬寸、區ハ二百五十寸、豆ハ六十二寸五百分、升ハ十五寸六百二十五分ナリ】考工記ニ「粟氏作レ量、深尺、内方尺、而圜ニ其外一」【宋ノ胡琦ガ耕祿槀ニ「擬木斛除度支誥ヲ載テ「茲選ニ爾中通而外直體圜而用方一」ト云ヒ、又代木斛謝表ニ「乾圜合制粗守均平」トアルモ、皆コノ量ノ形ヲ云ヘルナリ、陔餘叢考ニコノ耕祿槀ヲ證トシテ、趙宋以前ノ斛ハ圓製ナリト云ヒシハ、胡琦ガ古斛ノ形ヲ云ヒタルヲ誤リテ、當時ノ斛ノ形ヲ云ヒシト思ヒシナリ】其實一鬴【釜ノ正字ナリ】其臀一寸、【鄭玄ガ注ニ其底深一寸】其實一豆、【深サ一寸ニテ一豆ヲ容ンニハ、方古尺ノ七寸九分〇五氂六絲九忽餘ナリ、一豆ノ積六十二寸五百分ヲ深一寸ニテ除スレバ、冪六千二百五十分ナリ、コレヲ方ニ開キテ此數ヲ得、此術九章算術少廣ノ條、孫子算經卷中夏侯陽算經論步數不等ノ條、五經算術千乘國ノ條等ニ見エタリ、所謂開方ナリ】「其耳三寸・其實一升」ト云ヘリ、【深

サ三寸ニテ一升ヲ容ンニハ、方古尺ノ二寸二分八厘二豪一絲七忽餘ナリ、一升ノ積十五寸六百二十五分ヲ深三寸ニテ除スレバ、冪五百二十〇分八厘三豪三絲三忽不盡、是ヲ方ニ開キテ此數ヲ得、深サヲノミ云ヒテ、方面ヲ云ハザルモノハ其實一豆、其實一升ト云ヒシニテ、方面ハカクノ如ク求メ知ルベキ故ニ省キシ古文ノ巧ナリ、荻生氏「以ニ其圓一故止曰ニ一寸三寸一」ト云ヒタレドモ、圓ナル證モ無ク、又圓ナレバ、タヾ一寸三寸ト云フベキ理モ無ケレバ、從ヒ難シ、鬴ハ方寸トアリテ其下ニ「其臀一寸其耳三寸」トアレバ一寸モ三寸モ方ノ字ヲ蒙ラセタルナルベケレバ、今ハ豆ヲモ升ヲモ方トシテ計リシナリ】然レバ鬴ハ深尺方尺ニテ、其面冪ハ百寸、【面冪ハ百分ヲ一寸トス、律呂正義面冪ノ注ニ「平方定位法、百釐成」分、百分成」寸、故曰、幾十幾分、幾十幾厘」ト云ヘリ】積ハ千寸【積ハ千分ヲ一寸トス、律呂正義體積ノ注ニ「立法定位法千釐成」分、千分成」寸、故曰、幾百幾十幾分、幾百幾十幾釐」ト云ヘリ】是ニテ六斗四升ナレバ、一斛ノ積ハ千五百六十二寸五百分ナリ、【千寸ヲ六斗四升ニ分チテ升ノ積十五寸六百二十五分ヲ得、コレヲ百乘シテ斛ノ積數ヲ得ルナリ】故ニ隋書【律暦志】ニ栗氏ノ嘉量ヲ載セテ「祖沖之以ニ算術一考」之、積凡一千五百六十二寸半方尺、而圓ニ其外一減ニ傍一氂八豪一其徑一尺四寸一分四豪七秒二忽有奇、而深尺、卽古之斛也」、ト云ヒ、【是ハ考工記ノ量ハ千寸ニシテ、六斗四升ヲ受ル方器ナレバ、其一斛ハ千五百六十二寸五百分ナル故ニ、千五百六十二寸五百分ノ斛ヲ受ル圓器ヲ作ル法ヲ云ヘルナリ、今祖氏ノ說ニヨリテ方一尺ノ弦ノ内ニテ、左右各一氂八豪ヲ減ジ、其徑ヲ一

尺四寸一分〇四豪七絲二忽トスレバ（是ニテハ方一尺ノ弦ハ一尺四寸一分〇四豪七絲二忽ナリ、コノ祖氏ガ云フ所ノ弦ノ數イカナル法ニテ求メシカ詳ナラズ、今勾股弦ヲ求ムル術ニヨリテ算スレバ、一尺ノ弦ハ一尺四寸一分四釐二豪一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八有奇ナリ、此事下ノ漢ノ嘉量ノ條ニ詳ニス）周ハ四尺四寸三分一釐一豪二絲八忽餘ナリ（祖氏ガ圓周ヲ求ムル密法ハ徑一丈周三丈一尺四寸一分五釐九豪二絲六忽餘ナリ、下ニ詳ニス）是ヲ折半シテ半徑ヲ乘ジテ冪ヲ得、又深尺ヲ乘ジテ積ヲ求ムレバ一千五百六十二寸四百九十五分六百五十八釐二百一十〇豪六百〇八絲二百三十四忽餘ヲ得、祖氏ガ一千五百六十二寸半ト云ヒシハ、是ヲ云ヘルナリ、半周・半徑ヲ乘ジテ冪數ヲ知ルハ、九章算術方田ノ條ニ、「有ニ圜田、周幾步、徑幾步、問、爲ニ田幾何、答曰幾、術曰、半周・半徑相乘得ニ積步ニ」トアルニヨル、又術ニ「周徑相乘四而一」ト云ヒシモ同ジ、又「術曰、徑自相乘三之四而一、又術曰、周自相乘十二而一」ト云ヒシ二術ハ周三徑一ノ率ニヨリタルナレバ精シカラズ】鄭玄ガ考工記ノ注ニハ「方尺積千寸、於レ今粟米法少二升八十一分升之二十二、其數必容レ鬴、此言ニ大方ニ耳」ト云ヘリ、【是ハ考工記ノ一鬴ハ一千五百六十二寸五百分ナルニ、漢ニテハ千六百二十寸ヲ一斛トスル故ニ千〇三十六寸八百分ニテ、六斗四升ナリ、考工記ノ鬴ハ千寸ニテ六斗四升ナレバ漢ノ六斗四升ニ比スレバ三十六寸八百分足ラザレバ、如レ此ハイヘルナリ、三十六寸八百分ヲ千六百二十寸ノ斛法ニテ除スレバ、二升〇四千四百分ヲ得、是ニテ考工記ノ六斗四升ハ漢ノ六斗四升ヨリ二升ト積四千四百分少キコトヲ知ル、一升ノ積ハ一萬六千二百分ナレバ、其四千四百分ヲ一萬六千二百分升之四千四百分ト云フベケレドモ、然云ハンハ煩ハシキニヨリテ、一升ノ積一萬六千二百分（分母ナリ）ト奇零ノ四千四百分（分子ナリ）トヲ約分術ニテ約スレバ【約分ノ術ハ九

章算術方田ノ條ニ、「副ニ置分母子之數一、以レ少減レ多、更相減損求ニ其等一也」ト云ヘル是ナリ、此事孫子算經卷中ニモ見エタリ】等數二ヲ得（分母ノ一萬六千二百分ヲ左ニ置キ分子ノ四千四百分ヲ右ニ置、左ノ一萬六千二百分ノ内ニテ、右ノ四千四百分ヲ三度引ケバ、左三千分トナル、又右ノ四千四百分ノ内ニテ、左ノ三千分ヲ引ケバ、右千四百分トナル、左ノ三千分ノ内ニテ、右ノ千四百分ヲ二度引ケバ、左二百分トナル、右ノ千四百分ノ内ニテ、左ノ二百分ヲ六度引ケバ、右モ二百分トナリテ左右トモニ二百ノ數ヲ得、是ヲ等數二ヲ得ルト云ナリ）此二ヲ法トシテ一萬六千二百分ヲ除スレバ八十一分ヲ得、四千四百分ヲ除スレバ二十二分ヲ得、コレヲバ「十一分升之二十二」ト云ヘルナリ、是四千四百分ハ一升ヲ八十一ニ分チタル二十二分ナリ、是ハ四千四百分ヲ斛法千六百二十寸ニテ除シ行ケバ、二合七勺一撮六〇四九三八二七有奇ニテ、其數盡ルコト無キ故ニ一升ヲ八十一ニ分チタル二十二分ト云ヘルナリ、律呂新書ニ范鎭ガ說ヲ引テ、「周禮方尺者八寸之尺、深尺者十寸之尺方八寸、圓ニ其外一、庣ニ其旁一、則冪一百三十六分八釐深八寸、則積一千三十六寸八分、與ニ漢斛一同レ法無レ疑也」ト云ヒテ、鄭玄ガ「方尺積千寸、又圓ニ其外一者爲ニ之脣一」ト云ヒシ說ヲ皆非ナリトセリ、然レドモ其說ニ從ヒテ積ヲ求ムルニ、八寸ノ弦ハ一尺一寸三分一釐三豪七絲〇八四九八九八四七六有奇、兩庣ヲ加ヘテ一尺一寸五分〇三豪七絲〇八四九八九八四七六、是ヲ徑トスレバ周ハ三尺六寸一分三氂九豪九絲六忽六〇六八一五三有奇、是ニテ冪數ヲ求ムレバ一十〇寸三十九分三十六氂七十〇豪八十七絲〇十二忽餘、積數一千〇四十一寸〇七十五分八百四十一氂七百三十五豪三百九十九絲二百四十一忽餘ナレバ、云フ所ノ積一千〇三十六寸八分ノ數ト合ハズ、且「庣ニ其旁一」ト云フコトハ、漢ノ嘉量ノコトニシテ、考工記ニハ其事無ク、又一器ヲ度ルニ、潤ハ八寸尺ヲ用ヒ、深サハ十寸尺ヲ用

フベキニ非ザレバ、此說ノ誤ナルヲ知ルベシ】考工記云フ所ノ積寸皆古尺ナルニヨリ、今漢錢尺ヲ以テ方尺深尺積千寸ノ量ヲ作リ、【所謂鬴ナリ】曲尺ニテ度レバ方七寸六分、深サモ同ジ方面ヲ自乘シテ冪五十七寸七十六分ヲ得、又深ヲ乘シテ積四百三十八寸九百七十六分ヲ得、今ノ斛法【六千四百五十五寸】ヲ以テ除スレバ、六八〇〇五五七七有奇ヲ得、是ニテ量ヲ起セバ

鬴　積千寸、容六斗四升、【漢ノ千六百二十寸ヲ斛トスル法ヲ以テ計レバ、千寸ハ六斗一升七合二勺八撮餘ニテ、周ニテ計リシ六斗四升ヨリハ二升二合七勺一撮餘少シ、鄭玄ガ「少二升八十一分升之二十二」ト云ヒシハ是ナリ、一升ヲ八十一ニ分チテ、ソレヲ二十二合スレバ二合七勺一撮餘ナリ、然レドモ鄭玄又「此言大方耳」ト云ヘリ、周漢ノ量ハ本同ジコトニテ、古ハ後世ノ如ク精ク計ラザリシ故、少シノ異有リシト云ヘルナリ、下ノ諸量是ニ倣ヘ、愚按ズルニ千寸ニテ六斗四升ヲ容レバ、斛ハ千五百六十二寸五百分ナルコト上ニ云ヘル如シ、然ルヲ漢ニテ千六百二十寸トセシハ古斛ニ依リナガラ少シク改メタルナルベシ、其コト漢量ノ條ニ辨ズ】曲尺積四百三十八寸九百七十六分、今六升八合有奇【漢ノ六斗四升ハ積千〇三十六寸八百分ナレバ、曲尺ノ積四百五十五寸一百三十〇分三百一十六毫八百豪、今ノ七升〇五勺一撮弱ナリ】

區　積二百五十寸、容一斗六升【二百五十寸ハ漢ノ一斗五升四合三勺二撮有奇】曲尺積百〇九寸七百四十四分、今一升七合有奇、【漢ノ一斗六升ハ積二百五十九寸二百分、曲尺積一百一十三寸七百

八十二分五百七十九毳二百毫、今ノ一升七合六勺三撮弱ナリ】

豆　積六十二寸五百分、容四升【六十二寸五百分ハ、漢ノ三升八合五勺八撮有奇】曲尺積二十七寸四百三十六分、今四合二勺五撮有奇【漢ノ四升ハ積六十四寸八百分、曲尺ノ積二十八寸四百四十五分六百四十四毳八百毫、今ノ四合四勺一撮弱】

升　積一十五寸六百二十五分【一十五寸六百二十五分ハ、漢ノ九合六勺四撮餘】曲尺積六寸八百五十九分、今一合〇六撮有奇【漢ノ一升ハ積一十六寸二百分、曲尺積七寸一百一十一分四百一十一毳二百毫、今ノ一合一勺有奇】

鍾　積一萬寸容六斛四斗【一萬寸ハ漢ノ六斛一斗七升二合八勺四撮餘】曲尺積四千三百八十九寸七百六十分、今ノ六斗八升〇〇五撮餘、【漢ノ六斛四斗ハ積一萬〇三百六十八寸、曲尺積四千五百五十一寸三百〇三分一百六十八毳、今ノ七斗〇五合〇八撮強】

此外ニ

㲉【周禮旊人ニ「豆實三而成㲉」トアリ、豆實三ハ一斗二升ナリ】積一百八十七寸五百分【漢ノ一斗一升五合七勺四撮有奇】曲尺積八十二寸三百〇八分、今ノ一升二合七勺五撮有奇【漢ノ一斗二升ハ積百九十四寸四百分、曲尺積八十五寸三百三十六分九百三十四毳四百毫、今ノ一升三合二勺二撮有奇】

庾【周禮陶人ニ「庾實二㲉」トアリ、二㲉ハ二斗四升ナリ。論語ニ「與ニ之釜ヿ、請レ益、曰、與ニ之庾ニ」トアルモ、六斗四升ノ釜ノ外ニ二斗四升ノ庾ヲ增シタルナリ、包咸ガ注ニ「十六斗曰レ庾」ト云ヒタルハ庾ト籔ト音近キ故ニ、誤混ジタルナリ、此語傳注（往々アリ）益シタル數、本ノ數ニ過グベカラザレバ、十六斗ニハアラジト、漢ノ戴震ガ考工記圖ニ見エタリ】積三百七十五寸【漢ノ二斗三升一合四勺八撮强】曲尺一百六十四寸六百一十六分、今ノ二升五合五勺有奇【漢ノ二斗四升ハ積三百八十八寸八百分、曲尺積百七十〇寸六百七十三分八百六十八毫八百豪、今ノ二升六合四勺四撮有奇】

籔【儀禮聘禮記ニ、「十六斗曰レ籔」、注ニ「今文籔爲レ逾」トアリ、籔ト庾ト音近キ故、傳注往々庾ト混ズルモノアリ】積二千五百寸【漢ノ一斛五斗四升三合二勺一撮弱】曲尺積一千〇九十七寸百四十分、今ノ一斗七升〇〇一撮餘【漢ノ一斛六斗ハ積二千五百九十二寸、曲尺積一千一百三十七寸八百二十五分七百九十二毫、今ハ一斗七升六合二勺八撮弱】

秉【聘禮記ニ「十籔曰レ秉、注ニ「十六斛」トアリ】積二萬五千寸【漢ノ十五斛四斗二升二合一勺弱】曲尺積一萬〇九百七十四寸四百分、今ノ一石七斗〇〇一勺二撮餘【漢ノ十六斛ハ積二萬五千九百二十寸、曲尺積一萬一千三百七十八寸二百五十七分九百二十毫、今ノ一石七斗六升二合七勺九撮餘】

溢【喪服傳注ニ「溢爲二米一升二十四分升之一一」トアリ、喪大記注モ同ジ、一升二十四分升之一ハ一升〇四勺一撮六六不盡ナリ】積一十六寸二百七十六分〇四豪一絲六忽六六不盡【漢ノ一升〇〇四撮餘】曲尺積七寸一百四十四寸七百九十一分六百六十六氂六百六十六毫六百六十六絲六百六十六忽不盡、今ノ一合一勺一撮弱【漢ノ一升〇四勺一撮六六不盡ハ、積一十六寸八百七十四分九百九十九氂九九不盡、曲尺積七寸四百〇七分七百一十九分九百九十九氂九九不盡、今ノ一合一勺五撮餘】

斞　考工記弓人ニ「漆三斞」、注ニ「斞輕重未ㇾ聞」ト云ヘリ、說文ニモ「斞量名也」トノミアリナドアリ、猶度ノ分寸尺丈引ノ外ニ咫尋仞ナドアル類ナリ

【秦量】秦量ノ銘、積古齋鐘鼎款識ニ載セタレドモ、【銘文卷末ニ摹出ス】量ノ尺寸ヲ云ハザレバ、其積數知ルベカラズ

【漢量】漢ニテハ龠合升斗斛ト量リタリ、【按ニ斛ハ儀禮(聘禮記)ニ、「十斗曰ㇾ斛、」ト云、莊子(田子方篇)ニ、「鍾斛不三敢入二於四竟一」ト云ヘリ、斗ハ晏子(諫下)「合二升斗之微一以滿二倉廩一」、墨子(備城門篇)「令二陶者一作ㇾ甖容二四十斗以上一、」戰國策(秦策)ニ「斗食」ト云ヒ、史記(廉頗傳)ニ「一飯斗米」ト云ヘリ、升ハ左傳、考工記ニ見エテ上ニ引ケリ、考工記(梓人)ニ「一獻而三酬、則三豆矣」ト云ヒ、「飮二一豆酒一」ト云ヒシヲ、共ニ鄭玄ガ注ニ、「當ㇾ爲ㇾ斗」トモ云ヘリ、然ラバ漢ニテ升・斗・斛ト云フ量ノ名ハ、イヅレモ先秦ノ制ヲ

承クルナリ、タヾ合龠ノ名、古書ニ見エズ、然ラバ合龠ノ名ハ王莽ガ時、劉歆ガ定メシニヤ、但漢ノ時モ龠ヲ以テ量リシコト見エタルコト無キニヨリテ考フレバ、度ハ分・寸・尺・丈・引、稱ハ銖・兩・斤・鈞・石ト、各五ヲ以テ計ルニヨリ、量モ升・斗・斛ノ外ニ、合・龠ト云フ量ヲ増シテ、五度・五權・五量トシ、合ヲバ用ヒタレドモ、實ハ龠ヲバ用ヒザリシナルベシ】漢書【律曆志】ニ、「量者龠合升斗斛也、所以量多少也、本起於黄鍾之龠、用度數審其容、以子穀秬黍中者千有二百實其龠、以井水準其槩、合龠爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛、而五量嘉矣、」ト云ヘリ、サレドモ荻生氏ノ量考ニ、量ノ黍ヨリ起リシニ非ルヲ論ジテ、「黄鍾之管所容爲一龠、兩龠爲一合、本於班志、其說出於劉歆、是據周禮栗氏其聲中黄鍾之宮、與書舜典同律度量衡、而杜撰者、豆籩豆之豆、篆文可徴、以人一次食立制、鬴即釜、一釜所受、以人家一次炊立制、鍾同、一鍾所受、其它庾秉亦必爾、但不可考耳、則量亦取適人用焉、權衡亦當爾、何關黄鍾、」ト云ヘリ、豆・區・釜・鍾ノ量ノ黍ヨリ出ザルコトサモアルベシ、思フニ合・升・斗・斛モ黍ヨリ生ゼシニハアラジ、【小爾疋ハ據リ難キコト多キ書ナレドモ、「兩手謂之掬、掬四謂之豆、」ト云ヒシハ古義ナルニ似タリ、是ヲ以テ考ルニ、左傳ニ「四升爲豆」トアルハ即四掬ノコトナルベシ、毛詩椒聊ノ篇ノ首章ニハ、「椒聊之實蕃衍盈升」ト云ヒ、二章ニハ「蕃衍盈匊」ト云ヘルモ同ジホドナレバ、文ヲ易ヘタルノミニテ、其實ハ同ジコトナルベシ、サレバ升ハ一掬手ヨリ定メシモノニテ、ソレヲ十絫シテ斗ト名ヅケ、斗ヲ十絫シテ斛ト名

付シナラン、然ラバ是等モ黍ヨリ定メタルニハアラデ、人體ヨリ定メシモノナルベシ、然レドモ龠ト合トハ、其名ニヨレバ、黄鐘管ヨリ起リシト聞ユレバ、ソレヨリ升•斗•斛モ十桑シテ名付タランニハ、皆黍ヨリ起リシトモ云フベケレドモ、熟考スルニ、度ノ寸•尺•尋ハ人體ニテ定メシニ、尋ヲ倍シテ常ト云ヒ、尺ヲ十桑シテ丈ト云ヒ、又寸ノ内ヲ十分シテ分ト云ヒシハ、後ニ定メシ度法ナラン（尨毫絲忽ハ又其後ニ出シナルベシ）是ニヨレバ量モ古手ヲ掬シテ升ヲ定メ、ソノ四掬ヲ豆ト云ヒ、四豆ヲ區ト云ヒ、四區ヲ釜ト云ヒ、十釜ヲ鍾ト云ヒシニ、後ニ十升ヲ斗ト云ヒ、十斗ヲ斛ト量リ、又升ノ内ヲ十分シテ合ト量リシハ、十ヲ桑ネテ登レバ數フルニ便ナルニヨリテ、豆•區•釜ナド量ルコトハ廢セシコト、猶權衡ノ錢分ヲ用ヒテ後ハ、銖•兩ナド稱スルヲ便トモセザルト同ジキナルベシ、龠ハ疑ラクハ、又後ニ合ノ半ヲ名ヅケシナラン、然ルヲ漢書ニ度ヲ分ヨリ起ルト云ヒ、量稱ヲモ龠ヨリ起リ、ソレヲ桑ネテ合•兩トシ、合•兩ヲ桑ネテ升•斤トスナド云ヒテ、度量衡皆小ニ始マリテ大ニ至ルモノトシタルハ、度量稱ヲ皆黍ヨリ起サントテ、牽强シタルナリ、但升ヲ十ニ分チテ合トシ、合ヲ二ツニ分チテ龠トセシニ、其積八百一十分ニテ、黄鐘管ノ積ト符節ヲ合セタルガ如ク全ク同ジカルベキコト有ルマジキニヨリテ考ルニ、古ハ考工記ニ云ヒシ如ク積千寸ヲ鬴トシタレバ、升ハ積一萬五千六百二十五分（コノ升ハ掬手ヨリ定メタルベキコト上ニ云ヘリ）斛ハ積一千五百六十二寸五百分ナリシヲ後ニ五量ニ定メントテ、積千五百六十二分五百荛ノ合ヲ二ツニ分チテ、積七百八十一分二百五十荛ノ量ヲ造リシカドモ、其積數ヨル所無キ故、改メテ黄鍾管ノ積ニヨ

リ、八百一十分トシテ龠ト名ヅケ、二龠ノ合ヲ千六百二十分、升ヲ萬六千二百分、斗ヲ百六十二寸、斛ヲ千六百二十寸ト定メタルナルベシ、然ラバ千六百二十寸ノ量ハ、古ノ千五百六十二寸五百分ノ量ヲ隱括シタルナレドモ、龠ノ積ヨリ定メタレバ、黃鍾管ヨリ定メタリト云フベシ、カク古ノ千五百六十二寸五百分ヲ改メテ、千六百二十寸トセシハ、何レノ時ナリケン詳ナラズ、疑ラクハ王莽ノ時ナドニヤ、改メタリケン】タトヒ黍ヨリ生ズル說ニヨランニ、黍ニ大小アレバ、今ヨリ黍ヲ以テ量ヲ起シ難キコト、黍ニテ度稱ヲ起シ難キニ同ジ、然ラバ今日漢量ヲ定メントナラバ、王莽ガ嘉量銘古算書ドモニ、斛法千六百二十寸ト云フニヨリテ、漢量ヲ定ムベシ、【王莽ガ嘉量ノ銘ニ、「斛積千六百二十寸、斗積百六十二寸、升積萬六千二百分、合積千六百二十分、龠積八百一十分、」ト云ヒ、九章算術ノ商功ノ條ニ「米一斛積一尺六寸五分之一、注謂積一千六百二十寸、」五曹算經・張丘建算經ニ、「斛法一尺六寸二分（一升ノ積ナリ、孫子侯陽ノ算經モコレニ同ジ、下ニ詳ニス）ト云ヒ、鄭玄ガ考工記ノ注ニ今粟法ト云ヒシモ、千六百二十寸ノ斛法ナリ】

說苑【辨物篇】ニ、「度量權衡以ㇾ黍生ㇾ之、千二百黍爲二一龠一、十龠爲ㇾ合、十合爲二一升一、十升爲二一斗一、十斗爲二一石一、」ト云ヒタルモ、漢書ニ載セタルト略ミ同ジ【續漢書注ト太平御覽トニ引キタルニハ、「以ㇾ粟生ㇾ之、千二百粟爲二一龠一、」トアリ、然ラバ劉向ガ說ハ漢書ニ載セシ說トハ同ジカラザリシナルベシ、今本ノ說苑ニ、「以ㇾ黍生ㇾ之、千二百黍一、」トアルハ、後人漢書ニ依リテ改メタルナラン、續

漢書注・太平御覽、一石ヲ一斛ニ作レリ、斛ト石トハ同ジケレバイヅレニテモアルベシ、「十龠爲合」ト云ヘルハ誤ナルコト、詳ニ量攷ニ云ヘリ】古ヘ量ヲ定メシハ、黍ヨリ生ゼシニハアルマジキコト、タトヒ黍ヨリ生ジタリトモ、今日黍ヲ以テ量ヲ起シ難キコト上ニ云ヘリ、孫子算經ニハ「量之所起起於粟、六粟爲一圭、十圭爲一撮、十撮爲一抄、十抄爲一勺、十勺爲一合、十合爲一升、十升爲一斗、十斗爲一斛、斛得六千萬粟、所以得知者、六粟爲一圭、十圭六十粟爲一撮、十撮六百粟爲一抄、十抄六千粟爲一勺、十勺六萬粟爲一合、十合六十萬粟爲一升、十升六百萬粟爲一斗、十斗六千萬粟爲一斛」ト云ヒ、【今漢錢尺ヲ以テ一千六百二十分ノ合ヲ作リ粟ヲ容レテ數フルニ、一萬粟有奇ナリ、孫子ノ説ニヨレバ一合ハ六萬粟ト云ヘリ、假令粟ニ大小アリトモ、是ホドノ異アルベキナラネバ、此説ノ據難キヲ知ルベシ】夏侯陽算經ニハ、倉曹ヲ引テ、「量之所起起於子粟、十粟爲一圭、十圭爲一撮、十撮爲一抄、十抄爲一勺、十勺爲一合、十合爲一升、十升爲一斗、十斗爲一斛」ト云ヒタレドモ【十粟ヲ一圭トスレバ一撮ハ百粟、一抄ハ千粟、一勺ハ萬粟、一合ハ十萬粟ナリ、十萬粟ハ漢ノ九合餘ナレバ其説ノ誤最甚シ】二書共ニ倉廩等ノ積數ヲ計リシニハ、此斛法一尺六寸二分トアルヲ見レバ、六粟・十粟ナド云ヒシハ量ノ起リヲ説クニ、カヽル俗傳アリシヲ擧タルノミニテ、算スルニハ必一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒシナリ、一千六百二十寸斛法ノ通數ナリシカバ、粟ヨリ起ル説ノ當否ハ論ズルニ及バザリシナリ

或人問、漢ノ斛積千六百二十寸ナルコトハ、王莽嘉量銘・九章算術以下皆同ジケレバ論無シ、コレニヨレバ龠ノ積ハ八百一十分ナリ、然ラバ龠ヲ定メシ黄鐘ノ管モ、其積八百一十分ナルベキニ、黄鐘管ハ空圍九分【鄭玄ガ禮記ノ注ニ見ユ、隋志ニ載セタル蔡邕ガ銅龠ト云フモノ、銘モ同ジ、韋昭ガ國語ノ注、孟康ガ漢書ノ注ニハ「圍九分、徑三分」ト云ヘリ、圍九分ノ徑ヲ三分トシタルハ圓徑ヲ計ル古法ニテ、孫子算經ニ「周三徑一」ト云ヘル是ナリ】長サ九寸ナリ【漢書(律曆志)ニ、「黄鐘爲ニ天統律長九寸ニ」トアリ、律呂正義ニ、「律呂新書言、黄鐘九寸、寸作ニ十分ニ爲ニ九十分ニ又言、黄鐘九寸、寸作ニ九分ニ爲ニ八十一分ニ夫九十分乃黄鐘之正數、而八十一分原ニ於管子絃音五聲度分ニ史記・淮南子遂以爲ニ管音度分ニ新書雖ニ兼取ニ之、而九寸之說、實不レ可レ易」ト云ヘリ】九章孫子夏侯陽等ノ算書ニ載セタル術ニヨリテ其積ヲ求ムレバ【九章算術商功ノ圓堢壔ノ積ヲ計ル術ニ、「周自相乘以レ高乘レ之、十二而一」ト云ヒ、孫子算經圓窖ヲ計ル術ニ、「先置レ周相乘、以レ深乘レ之、以ニ十二ニ除レ之」ト云ヒ、夏侯陽算經圓窌ヲ計ル術ニ、「置ニ周尺ニ自相乘、以ニ高數ニ乘レ之十二而一、得ニ積尺ニ」ト云ヒ、五曹算經圓囷ヲ計ル術ニ、「列周自相乘、以レ高乘レ之、以ニ十二ニ除レ之」ト云ヘリ】空圍ノ九分ヲ自乘シ、又長九寸ヲ乘ジ、十二ヲ以テ除スレバ、六百〇七分五百釐ヲ得、一龠ノ積八百一十分ニ比レバ、二百〇二分五百釐足ラザル者ハ如何、答、韋昭・孟康等ガ圍九分、徑三分ト云ヒシハ、鄭玄ガ「空圍九分」ト云ヒシヲ誤讀ミタルナリ、「空圍九分」ト云ヒシハ、空積ノコトニシテ、【即冪積ナリ】圓周ノコトニハアラズ、【律呂新

昔ニ「鄭康成月令注云、凡律空圍九分、蔡邕銅龠銘亦云、空圍九分、蓋空圍中廣九分也」ト云ヒ、律呂正義ニハ「言圓面積九方分也」ト云ヒシモ、皆空圍九分ヲ冪積ノコトトシタルナリ】冪九分ニ長九寸ヲ乘ズレバ、所謂八百一十分ヲ得ルナリ、故ニ胡瑗ハ「徑三分四釐六豪、周十分三釐八豪」トシタリ、【蔡元定是ニヨル】然レドモ其術粗ニシテ多キニ過タリ、【徑三分四釐六豪ノ周ヲ十〇分三釐八豪トシタルハ、周三徑一ノ法ヲ用ヒシナリ、是ニヨリテ算スレバ冪八分九十七釐八十七豪ヲ得、然レドモ祖氏ノ密法ニヨリテ、徑三分四釐六豪ノ周ヲ求ムレバ、十〇分八釐六豪九絲九忽一〇五六九、是ニテ算スレバ冪九分四十〇釐二十四豪七十二絲六十四忽二一八五、長サ九寸ヲ乘ジテ、積八百四十六分二百二十二釐五百三十七豪七百九十六絲六百五十〇忽ナレバ三十六分餘多シ】律呂正義ニ「徑三分三釐八豪五絲一忽、周十分零六釐三豪四絲六忽」トシタル者ヲヨシトス【然レドモ是ニテ冪積ヲ求ムレバ、八分九釐九豪九絲七忽九六一一六ヲ得テ二忽有奇足ラズ、是ハ祖氏ノ密率ニヨリシ故イマダ精シカラズシテ、徑ニハ三七五有奇ノ尾數、周ニハ一忽二三有奇ノ尾數足ラザリシニヨリテナリ、コノ尾數ヲ加ヘテ求ムレバ、冪八分九釐九豪九絲九忽九九九有奇ヲ得、冪積ニヨリテ圓徑ヲ求ムル術ハ下ノ嘉量ノ條ニ詳ニス】然ラバ周九分、徑三分トセシハ誤ナレバ、從フベカラズ徑ノ長ニヨリテ周ノ長サヲ知ルコトハ、古ハ周三、徑一トテ、徑一尺ナレバ、圍ヲ三尺ト定メシナリ、劉宋ノ祖沖之ニ至リテ、徑數一、周數三一四一五九二六餘ト定メタリ、【隋志ニ「古之九數圓周

率三、圓徑率一、其術疏舛、自二劉歆・張衡・劉徽・王蕃皮・延宗之徒一各設二新率一、未レ臻二折衷一、宋末南徐
州從事史祖沖之、更開二密法一以二圓徑一億一爲二一丈一圓周盈數三丈一尺四寸一分五釐九毫二秒七忽一
(古板本・毛晉本等ニ三丈チ二丈トアルハ誤ナリ、南雍本ニ、三丈トアルニ從フベシ) 朒數三丈一尺四寸一分五釐九毫二秒六忽、正數在二盈朒二限之間一」
ト云ヘリ、諸家ノ圓率中是最密ニ近シ、然ルニ元明ニ至ルマデノ算書、皆周三、徑一ヲ以テ算セシ
ハ疑フベシ】其說是ニシテ淸ノ數理精蘊モ其數ニテ諸物ヲ計リタレドモ、【徑數一、周數三一四一五
九二六五」ト云ヘリ、即祖沖之ガ密法ノ盈朒二數ノ間ナリ、四庫全書提要ニ、「割圓術古以二徑一圍
三一爲二周徑之率一、宋祖沖之用二圓容六邊一起レ算、元趙友欽用二圓容四邊一起レ算、皆屢求二勾股一得二徑一
者周三一四一五九二六五一、泰西法亦同、其率古今周率之密無レ逾二於是一」ト云ヒ、「又圓出二於方一、方
出二於矩一、傳下自二周髀一古人徑一圍三之術上固疎、至二劉祖之輩所一レ推已近レ密、而湯若望之周徑定率、
乃用二內弦外切一屢求二勾股之法一、漸近二圓周一、合下成二一線一與周髀所上レ傳、圓出二於方一之義暗合、所レ定
徑一周三一四一五九二六五、自レ六以上、又皆與二劉祖之密率一合、是以數理精蘊採二用之一」ト云ヘリ、
提要ニ「二六五」ヲ「六二五」トアリ、誤ナリ、今數理精蘊ニ依リテ改ム、元ノ李治ハ三一四二六
九六八〇五二四トシ、淸ノ錢塘ハ三一六以上トシ、顧長發ハ三一二五トシタレドモ、其說皆明ラカ
ナラザレバ、今ハ數理精蘊ニ從ヘリ】猶未尾數ヲ盡スコト能ハザルニヨリ、假ニ圓徑二兆ト定メ、
內ニ六觚形ヲ容レ、【劉徽祖沖之皆此法ヲ用ヒシナリ、九章算術方田ノ條ノ注ニ見エタリ】屢勾股ヲ

求メ、一千〇三十億〇七千九百二十一萬五千百〇四邊トスレバ、一面六十〇【小餘九五四九一九九六九四六四九八六七一三七〇有奇】形數相乘ズレバ、六兆二千八百三十一億八千五百三十〇萬七千百七十九【小餘五八六四七七二五八一六〇有奇】ヲ得、圓徑二兆ヲ以テ除スレバ、三一四一五九二六五三五八九七三二三八六二九〇有奇、是徑數一ノ周數ナリ、今予ガ算スルハ皆此新率ヲ用フ、【今コノ有奇ト云フモノ、皆纖微ノ數アレドモ、此書小數ノ名氂毫絲忽ノ外ハ古書ニ見ユルコト無ク、且要スル所ニアラザレバ今截去リシナリ】

漢尺【曲尺七寸六分】ヲ再自乘シテ、曲尺四百三十八寸九百七十六分ヲ得、コレニ漢斛法一千六百二十寸ヲ乘ズレバ、曲尺ニテ斛積七百一十寸一百四十分一百二十氂ナリ、今ノ斛法ヲ以テ除スレバ一一〇一六九〇有奇ヲ得、是ニテ量ヲ起セバ

斛　今一斗一升〇一勺七撮弱

斗　今一升一合〇一撮餘

升　今一合一勺有奇

合　今一勺一撮有奇

龠　今五撮半有奇

古ハ升・豆【四升】區【一斗六升】釜【六斗四升】ト四ヲ累ネヲ計リタレドモ【左傳ノ文上ニ引リ、

齊ノ田氏ハ五ヲ彙ネシコトモ左傳ニ出ヅ】四ヲ彙ネテ多クノ數ヲ計ルハ不便ナレバ、後二十ヲ彙ネテ斛・斗・升・合ト改メシモノナルベシ、譬ヘバ古ハ銖・兩【二十四銖】斤【十六兩】ト稱リシニ、十ヲ彙ネザル故不便ナレバ、後世錢分ヲ以テ稱ルガ如シ

【漢嘉量】漢書ニ嘉量ヲ作ル法ヲ載セテ、「其法用ニ銅方尺ニ而圜ニ其外、旁有庣焉、其上爲斛、其下爲斗、左耳爲升、右耳爲合龠、其狀似爵以縻ニ爵祿、上三下二、參天兩地、圜而函方、左一右二、陰陽之象也、其圜象規、其重二鈞、備ニ氣物之數、合萬有一千五百二十（三十斤ヲ鈞トス、鈞ハ萬一千五百二十銖ナリト孟康ガ注ニ見エタリ）聲中ニ黄鍾、始ニ於黄鍾而反覆焉」ト云ヘリ、是即王莽ガ銅斛ナリ、九章算術注ニ、其銘ヲ載セテ、「律嘉量斛內方尺、而圜ニ其外、庣旁九氂五豪、冪一百六十二寸、深一尺、積一千六百二十寸、容七斗」ト云ヘリ、【西淸古鑑ニ此量ヲ載ス、銘文九章ニ載セタルト全ク同ジ、其全文及圖、此卷末ニ出ス】律呂新書ニ斛銘ヲ釋シテ、「方尺者所ニ以起數也、圜ニ其外循ニ四角而規ニ圜之、其徑當ニ一尺四寸有奇也、庣旁九氂五豪者徑一尺四寸有奇之數猶未足也、冪百六十二寸者方尺冪百寸、圜ニ其外每旁約十五寸、合六十寸、庣ニ其旁約二寸也、深尺積一千六百二十者以十而登也、容ニ十斗者一寸冪、百六十二寸爲ニ容一斗ニ積十寸容一千六百二十寸、爲ニ容十斗也」ト云ヘリ【按ズルニ「庣旁八氂五豪」トアレドモ、庣旁一分〇九豪有奇ナラザレバ、一千六百二十寸ヲ容ルコト能ハズ、其算、下ニ詳ニス】漢ノ嘉量ハ考工記ノ嘉量ノ「內方尺而圜ニ其外」トアルニ依リテ作リタレドモ、考工記ニ內方尺ト云ヒシハ、穀

ヲ受ル處上下四旁各一尺、其積千寸ニシテ鬴ヲ容ルヲ云ヒ「圜ニ其外ニ」トハ量ノ形ヲ云ヘルナリ、【鄭玄ガ注ニ、「圜ニ其外ニ者爲ニ之脣ニ」ト云ヒシハ是ナリ、脣トハ此量外圓クシテ內ノ殼ヲ受ル處方ナルニヨリテ、量ノ口邊弦ヲ張リタル弓ノ狀ノ如クナルヲ云フ】漢ノ嘉量ハ考工記ニ「內方尺」ト云ヒシニ本ヅキテ、先內ヲ方一尺ト定メ、其方一尺ノ弦ヲ徑トシテ造リタル圓器ナリ、「圜ニ其外ニ」トハ彼先定メシ方一尺ノ外ヲ圓クシテ、殼ヲ容ルヲ云ナリ、【內方尺而圜ニ其外ニ」ト云バ、考工記モ漢書モ同ジ文ナレドモ、其形ハ同ジカラズ、荻生氏ガ此量ノ形ヲ說キシハ甚ダ誤レリ】漢ノ時ハ鐘・鬴・區・豆ノ量ハ用ヒズシテ斛・斗・升・合ヲ以テ量リシニ、王莽ガ時萬事古ニ效ヒシカバ、考工記ニヨリテ嘉量ヲ作ラントセシカドモ、鬴・區等ノ量ハ當時用フル所ニアラザレバ、周ノ嘉量ノ脣ヲ去テ圓器トシテ千寸ノ鬴ヲ受ルヲ改メテ、一千六百二十寸ノ斛ヲ受クベク、臀ノ一豆ヲ受ルヲ改メテ一升ヲ受クベク、又兩耳共ニ一升ヲ受ルヲ改メテ一耳ハ一升ヲ受クベク、一耳ハ上ニ合、下ニ龠ヲ受クベク造リシナリ、【斛ト升ト合トハ上ニ向ヒ、斗ト龠トハ下ニ向フ、故ニ「上三下二、參天兩地、」ト云ヒ、一耳ハ升ヲ受、一耳ハ合ト龠トヲ受ル、故ニ「左一右二」ト云ヘルナリ】然ドモ方尺ノ弦ハ一尺四寸一分四釐二毫一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八有奇ナレバ、【弦ヲ求ムル法、孫子算經等ニ「方五斜七」ト云ヒシニ依レバ、方一尺ノ弦ハ一尺四寸ナレドモ、其術粗ニシテ據ルニ足ラズ、九章算經ニ、「勾股各自乘幷而開方除レ之即弦」ト云ヒ、周髀算經注ニモ、「勾股各自乘幷レ之爲レ弦、實開方除レ之即弦一」トアルヲ、後周甄鸞ガ釋ニ

「假令勾三自乘得レ九、股四自乘得ニ十六一、幷レ之得ニ二十五一、開方除レ之得レ五爲レ弦也」ト云ヘリ、故ニ今一方面ヲ自乘シテ百寸ヲ得、又一方面ヲ自乘シテ百寸ヲ得、合セテ二百寸ヲ弦實トシ、方ニ開キテ弦ノ數ヲ得ルナリ】周ハ四尺四寸四分二氂八豪八絲二忽九三三〇八一六三一九六三有奇【徑ヨリテ周ヲ得ル法ハ、上ノ黃鍾管ノ條ニ詳ニス】其深サ一尺ニテハ積千五百七十〇寸七百九十六分三百二十四氂九百九十九豪八百九十六絲四百六十九忽餘、【積ヲ求ムル法モ黃鍾管ノ條ニ云ヘリ】ナレバ、一千六百二十寸ノ斛ヲ容ルコト能ハザルニヨリ、弦ノ兩旁ニ各九氂五豪ノ庣ヲ增シ加ヘ】漢書ノ注ニ「鄭氏曰、庣過也、算方一尺所レ受一斛、過ニ九氂五豪一、今尙方有ニ王莽時銅斛制一、盡與レ此同」ト云ヒシヲ引キテ、顏師古ハ「庣不レ滿之處也」ト云ヘリ、律學新說ニモ「庣者言ニ一尺之外有餘之數一、所謂九氂五豪是也」トアリ、說文ニ斛字ヲ載セテ、「斛旁有庣也」ト云ヒシモ是ナリ、然ルニ說文ニ斛字ノ從ヒシ庣字ヲ載セズ、段玉裁ハ窕字ノ異文ナリト云ヘリ、然ラバ爾雅ニ「窕間也」トアル者卽此義ナリ、按ズルニ鄭氏ガ「算方一尺所レ受一斛」ト云ヒシハ疑ハシ、恐ラクハ方一尺ノ下ニ其弦ヲ徑トシテ圓器ヲ作リシコト、又深一尺ナルコトノ有シガ脫タルナラン、同ジ文字ノアル所ヨリ脫スコト常有ルコトナリ】周圍ヲ寬メ大ニシテ一千六百二十寸ヲ容ルベク作リシナリ、然ルニ今庣旁九氂五豪ヲ加ヘテ、積ヲ求ムレバ、一千六百一十三寸二百八十七寸二百四十三氂〇三十三豪九百二十一絲一百〇六忽餘ニテ、【方尺ノ弦一尺四寸一分四氂二豪一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八强ニ、庣九氂五豪兩庣合セテ

一分九氂ヲ加フレバ、一尺四寸三分三氂二毫一絲三忽五六二三七三〇九五〇四八八强、是ヲ徑トスレバ周ハ四尺五寸〇二氂五毫七絲三忽一九七四三〇九八一九六有奇ナリ、深サ一尺ナル故ニ、コノ積數ヲ得】一千六百二十寸ヲ容ンニハ、六寸七百一十二分七百五十六氂九百六十六毫〇七十八絲八百九十三忽餘足ラズ、是ハ漢ノ時算法イマダ精シカラザリシカバ、増シタル庣ノ數猶足ラザリシナリ、今算スルニ兩庣各一分〇九毫八絲九忽三一八八有奇【兩庣ヲ合スレバ二分一氂九毫七絲八忽六三七六有奇ナリ】ヲ加ヘテ、其徑一尺四寸三分六氂一毫二絲二忽二有奇ニ非レバ、一千六百二十寸ヲ容ルコト能ハズ、【積千六百二十寸ヲ深一尺ニテ除スレバ、冪百六十二寸即平積ナリ、別ニ徑率三三一〇二ヲ四倍シテ一三二四〇八ヲ得、コレヲ以テ百六十二寸ニ乘ズレバ二一四五〇〇九六ヲ得、周率一〇三九九三ヲ以テ除スレバ二〇六二六四八〇六二四七有奇ヲ得、是ヲ方ニ開キテ徑ノ數ヲ得、九章算術少廣ノ條、開圓ノ術ニ有二積△歩一、問、爲二圓周一幾何、答曰、△歩、術曰、置二積歩數一、以二十二一乘レ之、以二開方一除レ之、即得二周一ト云ヘリ、然レドモ是ハ周三徑一ノ率ナレバ粗ナルニヨリ、劉徽ハ三一四ノ率ニテ算シ、李淳風ハ祖沖之ガ密率ニヨリテ算シタリ、然レドモ猶精密ナラザレバ、今ハ冪積百六十二寸ニ割圓ノ新率ヲ四倍シテ以テ乘ジ、方ニ開キテ此數ヲ得、九章算術ハ圓周ヲ求ムル故、積ヲ四倍シ周三ヲ乘ズ、「以二十二一乘レ之一ト云フモノ是ナリ、圓田ノ平積ヲ求ムル「周自相乘十二而一」ト云フ術ヲ反覆シタルモノナリ、祖沖之ガ密律ハ徑率一一三、周率三五五トシタレドモ、其周率少シク强シ、數理精蘊モ

コレニヨリテ此率ヲ十二万七千三百二十四トシタレドモ、祖沖之ノ徑率ニ四ヲ乘ジ、周率ヲ以テ除スレバ、十二萬七千三百二十三九一五餘ナルヲ二十四ト收メタルナレバマヽス丶粗ナルニヨリ、今新率徑三三一〇二、周一〇三九九三トス、隋志ニ漢書ノ嘉量ヲ作ル法ヲ載セテ、「祖沖之以二圓率一考レ之、此斛當二徑一尺四寸三分六氂一豪九秒二忽一、庣旁一分九豪有奇、劉歆庣旁少二一氂四豪有奇一、歆數術不レ精之所レ致也」ト云ヒシハ是ナリ、徑一尺四寸三分六氂一豪九絲二忽ノ內ニテ、方一尺ノ弦一尺四寸一分四氂二豪一絲三忽餘ヲ去レバ、殘ル二分一氂九豪七絲八忽餘是兩庣ナリ、是ヲ二ニ分レバ一分〇九豪八絲九忽餘、故ニ祖氏庣旁一分九豪有奇ト云ヘリ、コノ一分〇九豪八絲九忽餘ノ內ニテ、劉歆ガ云ヒシ庣九氂五豪ヲ去レバ、一氂四豪八絲九忽餘ナリ、「劉歆庣旁少二一氂四豪有奇一」トハ是ヲ大凡ニ云ヘルナリ】然レバ庣旁九氂五豪ト云ヒタルハ算術ノ精シカラザリシナレバ【律呂新書ニ「漢志止言レ有レ庣焉、不レ言二九氂五豪一者、數猶有レ未レ足也」ト云ヘリ、然ラバ班固ハ九氂五豪ノ非ナルコトヲ知リタリシニヤ】積千六百二十寸トアルニ從ヒテ、庣旁九氂五豪ト云ヒシニハ據ルベカラズ【コノ嘉量今清朝ニ傳ハリ、西淸古鑑ニ載セテ、「斛深七寸二分、徑一尺四分」ト云ヘリ、清ノ縱黍今尺ニテ度リシナリ、斛銘ニ深尺ト云ヒタレバ、清ノ今尺ノ七寸二分ヲ漢ノ一尺トシテ、漢尺ノ徑一尺四寸三分六氂一豪九絲二忽ヲ求ムレバ、清ノ今尺ノ一尺〇三分四氂〇五絲八忽餘ナルヲ一尺四分ト云ヘルハ、此書度量ノ爲ニ作リシモノニ非ル故ニ、大凡ニ度リタルコト氂豪ヲ云ハザルニテ知ラレタリ、モシ實ニ徑清

尺ノ一尺〇四分ナラバ、漢尺（清尺ノ七寸二分）ニテハ一尺四寸四分四氂四毫四絲四忽不盡、其周ハ四尺五寸三分七氂八毫五絲六忽〇五ナリ、深一尺其積千六百三十八寸六百七十〇分二百四十〇氂二百七十七毫七百七十七絲七百七十七忽不盡ナレバ、必一尺〇四分ニハアラジ】

宋以來諸家ノ定メシ漢量又漢器ニ容受ノ欵識アル者ノ後世マデ傳ハリタルヲ量リタルモ、各同ジカラズシテ聚リ訟フルガ如クナレバ、今皆概シテ據トナサズ

夏侯陽算經ニ、「至ニ漢王莽一改鑄ニ銅斛一用ニ深一尺九寸二分ニ」ト云ヘリ、王莽ガ銅斛ハ、一千六百二十寸ナルコト嘉量ノ銘ニテ異論無キヲ、一千九百二十寸トシタルハ疑ハシ、今暫其說ニ從ヒテ算スルニ、【漢錢尺ヲ再自乘シ、又一尺九寸二分ヲ乘ズ】曲尺ノ積八百四十二寸八百三十三分九百二十氂ヲ得、今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗三升〇五勺七撮有奇【斗升合準ヘ知ルベシ】

此事他ニ絕エテ見ルコト無ケレバ、返々疑ハシ

【魏嘉量】魏ノ杜夔、周ノ嘉量ニ傚ヒテ斛ヲ作リタリ、【通典ニ「魏初杜夔造レ斛、即周禮所レ謂嘉量也、深尺方尺、實一鬴、臀一寸、實一豆、耳三寸、實一升」ト云ヘリ、此事他書ニ載セズ】深尺方尺ナルコトハ考工記ニ依リタレドモ、魏尺ハ曲尺ノ七寸九分五氂七毫二絲ナレバ、曲尺ニテ度ル時ハ、即方七寸九分五氂五毫二絲、深サモ同ジ、コノ積六十三寸三十一分七十〇氂三十一毫八十四絲ニテ積五百〇三寸八

百二十六分二百八十五氂七百五十七豪二百四十八絲、コレ一斛【六斗四升】ノ積ナレバ、六十四分シテ一升ノ積七寸八百七十二分二百八十五氂七百一十四豪九百五十七絲ヲ得、今ノ斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗二升一合九勺五撮餘

斗　今一升二合一勺九撮餘

升　今一合二勺二撮弱

合　今一勺二撮有奇

按ズルニ是ヨリ後ナル景元ノ大司農ノ斛【隋志ニ「魏陳留王景元四年、劉徽注九章商功曰、當今大司農斛云々」ト云ヘリ】却テ漢量ニ近ケレバ、杜夔ガ量ハ古ニ倣ヒテ作リシノミニテ、普ク世ニハ用ヒザリシナラン

魏大司農量　魏ノ大司農ノ斛ハ、徑一尺三寸五分五氂深サ一尺ナリ、【魏劉徽ガ九章算術商功ノ注ニ「當今大司農斛圓徑一尺三寸五分五釐、正深一尺、於二徽術一爲レ積一千四百四十一寸、排成餘分、又有二十分寸之三一」ト云ヘリ、今コレヲ算スルニ徑一尺三寸五分五氂ニ劉徽ガ率三一四ヲ乘ズレバ（九章算經音義ニ、徽率周一百五十七、徑五十ト云ヘリ、五十ヲ以テ一百五十七ヲ除スレバ、三一四ヲ得ルナリ）周四尺二寸五分四氂七豪、深サ一尺ニテコノ冪一百四十四寸一十二分七十九氂六十二豪五十絲、積一千四百四十一寸二百七十九分六百二十五氂ナルヲ、一千四百四十一寸十分寸之三トハ大凡ニ計ヘシモノナラン、十分寸之三トハ三百分ヲ云フ】此斛ヲ曲尺ニテ度レバ徑一尺〇七分

八毫二毫〇〇六、深サ七寸九分五毫七毫二絲、コノ周三尺三寸八分七毫二毫六絲七忽〇八〇一八五五九ニテ、冪九十一寸三十〇分三十八毫三十五毫〇〇絲〇四忽三二〇一二三三八五、積七百二十七寸五百二十二分八百七十六毫八百六十五毫四百三十七絲六百〇八忽餘ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗一升二合七勺有奇

斗　今一升一合二勺七撮有奇

升　一合一勺二撮餘

合　一勺一撮餘

其容ルコト漢斛ト略同ジケレバ、魏ニテハ漢量ニ依リシナリ、一荻生氏是ヲ「漢斛之存ニ于魏ニ者、其於ニ漢斛ニ積有ニ少不ヒ合、乃截ニ去尾數ニ、太峻所レ致也」ト云ヘリ、漢斛ノ魏マデ遺リシハサルコトナレドモ、尾數ヲ截去タルニヨリテ、漢斛ト同ジカラズト云ヒシハ非ナリ、モシ尾數ヲ截去タランニハ漢斛ヨリ小ナルベキニ却テ大ナルニテ其誤ナルコト明ナリ、魏斛ノ漢斛ニ依リナガラ、漢斛ヨリ大ナルハ年ヲ經テ訛リタルニテ、度ノ年ヲ經テ訛長スルガ如キナルベシ、漢斛ハ漢斛ヨリ少シク大ニシテ、漢ノ一斛ハ魏ノ九斗七升七合四勺八撮餘ナリ【九章算術ノ注ニ、大司農斛ノ度積ヲ云ヒシニ、又「王莽銅斛於ニ今尺ニ爲ニ深九寸五分五毫、徑一尺三寸六分八毫七毫ニ以ニ徽術ニ計レ之、於ニ今斛ニ爲ニ容九斗七升四合有奇ニ」トアリ、今尺トハ魏ノ尺ニテ今斛トハ魏ノ斛ナリ、隋志ニ此文ヲ引キテ、一此魏

斛大、而尺長、王莽斛小、而尺短也」ト云ヘリ、今劉徽ガ言ニ從ヒ、王莽ガ斛ヲ徑一尺三寸六分八氂七豪トシ、徽ガ圓法三一四ヲ乘ズレバ周四尺二寸九分七氂七豪一絲八忽ニテ、冪一千四百七十〇寸五十七分一十六氂五十六豪六十五絲、是ニ深サ九寸五分五氂ヲ乘ジテ積一千四百〇四寸三百九十五分九百三十二氂一百〇〇豪七百五十絲ヲ得、是ヲ魏ノ斛積一千四百四十一寸十分寸之三ニテ除スレバ、漢ノ一斛ハ魏ノ九斗七升四合三勺九撮餘ナルヲ、大凡ニ九斗七升四合有奇トハ云ヒシナリ、然レドモ隋志ニ「魏尺比ニ晉前尺一尺四分七氂」ト云ヘリ、是ニヨリテ魏尺ヨリ漢尺ヲ計レバ、其實ハ九寸五分五氂一豪〇九忽八三七六有奇ニテ、漢斛ノ徑ハ魏尺ノ一尺三寸七分一氂七豪二絲一忽三弱、コノ周四尺三寸〇七氂二豪〇五忽弱、コノ積一千四百一十〇寸七百六十五分二百一十〇氂二豪餘ナルヲ、大凡ニ漢尺ヲ九寸五分五氂トシ、漢斛ノ徑ヲ一尺三寸六分八氂七豪トシタル故ニ、積少クシテ九斗七升四合有奇ト云ヒタレドモ、魏斛ノ積一千四百四十一寸十分寸ノ三ヲ以テ、魏尺ニテ計リシ漢斛ノ積ヲ計レバ、其實ハ九斗七升七合四勺八撮餘ナリ

晉・宋・南齊ノ間、量ノ制聞エズ、隋志ニ「梁陳依古」ト云ヒタレバ、晉ヨリ陳マデモ、魏斛ノ舊ニ依リシナルベシ、【此時北方ニハ北魏・北齊ノ斛アレドモ、梁・陳マデモ曹・魏ヨリ受テ改ムルコト無リシト云ヘルナラン、サレドモ度ノ年ヲ經テ訛長シタリシヲ見レバ、量モ少シノ訛アリシモ知ルベカラズ、今證トスベキモノ無ケレバ考ヘ難シ】

夏侯陽算經ニ「至ニ宋元嘉二年一、徐受重鑄【銅斛ヲ鑄タルヲ云フ】用ニ二尺三寸九分一、至ニ梁大同元年甄鸞校レ之、用ニ二尺九寸二分二」ト云ヘリ、夏侯陽算經ニ王莽ガ斛法ヲ云ヒシコト疑ハシケレバ、是モ固ク信ジガタケレドモ、姑其說ニ依リテ算フルニ宋氏尺【曲尺八寸〇八氂六毫四絲】ヲ再自乘シテ、曲尺五百二十八寸七百六十八分六百〇四氂〇一十二毫五百四十四絲ヲ得、云フ所ノ積二千三百九十寸ヲ乘ズレバ、曲尺ニテ斛積一千二百六十三寸七百五十六分九百六十三氂五百八十九毫九百八十〇絲一百六十忽ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗九升五合七勺八撮弱

「至ニ梁大同元年ニ」トハ法尺ヲ作リシ後、コノ量ヲ廢シタリト云ヘルニヤ、「甄鸞校レ之、用ニ二尺九寸二分ニ」ト云ヒシニ據リテ、甄鸞ガ技セシヲ求ムレバ、其曲尺ノ六寸六分一氂八毫六絲六忽餘ナリ、【宋斛ノ積二尺三寸九分ヲ置キ、二尺九寸二分ヲ以テ除スレバ、八一八四九三一五〇有奇、是ニ宋尺ノ長サ八寸〇八氂六毫四絲ヲ乘ズレバ、コノ長ヲ得ルナリ】此ノ如キ尺歷代有ルコト無ケレバ、是モ疑ハシ尚ヨク考フベシ

[北魏量] 北魏ノ量ハ古ニ一倍セリ、【左傳定八年ノ正義ニ、「魏齊斗稱於ニ古二ニ而爲レ一」ト云ヘリ、隋志ニハ此事ヲ載セザレドモ、大和ノ時長尺大斗ヲ改ムト云ヒタレバ、魏ノ初大量ヲ用ヒシコトハ明ラケシ、北齊ノ斗稱ハ、古ノ二ニ非ルベキコト下文ニ詳ニス】古トハ漢量ヲ云フナルベシ【唐八ハ唐小量ヲ古

量ト云ヘリ、五經正義ハ唐初ニ作リタレバ、ソノ古ト云フハ唐小量カトモ思ヘドモ、唐小量ハ鐵尺ヨリ起シタル量ナリ、北魏ノ初イマダ鐵尺無ケレバ古ト云フモノハ必漢量ヲ云ヘルナルベシ】漢量ヲ倍スレバ

斛　今二斗二升〇三勺四撮弱

斗　今二升二合〇三撮餘

升　今二合二勺有奇

合　今二勺二撮有奇

【後魏大和量】北魏ノ孝文帝、漢志ニヨリテ斗尺ヲ作リシハ、【隋志ニ「後魏孝文時一依漢志作斗尺」トアリ】大和十九年ノ事ナルベシ、【後魏書ニ「大和十九年改長尺大斗依周禮制度」ト云ヘリ、詳ニ上卷ニ引リ】大和ノ尺ハ荀勗ガ尺ニ同ジト云ヘバ【上卷ニ詳ニス】量モ漢量ト同ジカリシナラン、サレドモ大和ニモ永平ニモ、度ヲ改メタレドモ、民間猶魏後尺ヲ用ヒタリシニ據レバ、大和ノ量モ普ク民間ニハ用ヒザリシナルベシ

【北齊量】北齊ノ量ヲ考フル隋志ニ、「齊以古升五升爲一斗」トアリ、按ズルニ此時ニ至リテ、漢量ノ半ナル小量ヲ用フベキ理無シ、左傳正義ニ「魏齊斗稱、於古二而一」ト云ヒシニ據レバ、「以古斗一斗爲五升」トアリシガ錯リタルカト思ヒシニ、北齊ノ尺ハ周尺ノ一尺五寸ニテ稱モ古ノ一升半ヲ斤トシタ

レバ、量モ古ノ一斗五升ヲ一斗トシタルナルベシ、【北齊ノ稱ヲ隋志ニハ、「齊以ニ古稱一斤八兩一爲ニ一斤ニ一ト云ヒ、左傳正義ニハ「魏齊斗稱、於ニ古二ニ而爲レ一ニ」ト云ヒテ二説同ジカラザレドモ、今北齊ノ常平五銖錢ヲ稱ルニ共五銖ノ重サ隋志ノ説ニ合ヒテ、左傳正義ノ説ニハ合ハザレバ、斗モ「於レ古二而爲レ一ニ」ト云ヒシハ誤ナルベシ】然ラバ隋志ニハ「齊以ニ古斗一斗五升一爲ニ一斗ニ」トアリシヲ誤リ脱シタルナリ、【隋志ニ「又玉斗一斗得ニ官斗一斗一升三合四勺ニ」トアルベキヲ、今本ニ「玉升一升得ニ官斗一升三合四勺ニ」ト誤リ、同書ニ「又周朝市尺得ニ玉尺一尺九分三釐ニ」トアルベキヲ、今本ニ得ニ玉尺九分三釐ニ」ト誤リタルト同ジ誤ナリ】漢ノ一斗五升ヲ一斗トスレバ、今ノ一升六合五勺二撮餘ナレドモ【唐ノ小量ノ一斗五升ヲ一斗トシタルカトモ云フベケレドモ、隋志ニ北齊ノ尺ヲ晉前尺ノ一尺五寸〇〇八豪ト云ヘリ】如レ此度ヲ晉前尺ヨリ計リタレバ、量モ唐量ヨリ計リシニハアルベカラズ、疑ラクハ緝古算經ニ、斛法二尺五寸ト云ヒシ者コノ斛法ナラン、【量攷ニ詳ニス】古尺ニテ二尺五寸ノ量ヲ起セバ、曲尺ノ積一千〇九十七寸四百四十分【漢鐵尺ヲ再自乘シテ二尺五寸ニ乘ズレバ此數ヲ得】

今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗七升〇〇一撮餘

斗　今一升七合有奇

升　今一合七勺有奇

合　今一勺七撮有奇

此一斗ヲ漢量ニテ計レバ、一斗五升四合二勺二撮餘ナルヲ、一斗五升ト云ヒシハ、大凡ニ計リシナラン、【唐小量ニテ計レバ、一斗二升八合一勺一撮、五ナレバ一斗五升ト云ヒシハ、唐量ヨリ計リシニハアラジ】按ズルニ「東魏天平三年、均二斗尺一班二於天下一」ト北齊書ニ見エタレバ、此量東魏ノ時ニ造リテ、北齊ニテモコレヲ用ヒシナルベシ【北齊ニテ用ヒシ一尺五寸ノ尺ハ、東魏ニテ作リシ尺ナルヲ承用ヒタルコト上卷ニ出セリ、又北齊ニテ一斤半ヲ一斤トスル稱モ、東魏ヨリ承ケタルベキコト下卷ニ云ヘリ、然ラバ量モ天平三年ニ班チタルヲ、北齊ニテモ用ヒシナラン、東魏ノ制度ハ北齊ノ文宣帝ノ父、高歡東魏ノ政ヲ攝シタル時定メタレバ北齊ニテ遵ヒ用フベキ理ナリ】

〔後周玉斗〕後周ノ初ニハ後魏尺ヲ用ヒタレバ【上卷ニ詳ニス】量モ後魏ノ量ヲ承用セシナルベシ、保定ノ時作リシ斛ハ徑七寸一分、深二寸八分、是ヲ玉斗ト云フ、【隋志ニ、「後周武帝保定元年辛巳五月、晉國造レ倉獲二古玉斗一、暨二五年乙酉冬十月一詔改二制銅律度一、遂致二中和一、累レ黍積レ籥、同二玆玉量一、與レ衡度無レ差、準爲二銅升一、用頒二天下一、内徑七寸一分、深二寸八分、重七斤八兩、天和二年丁亥正月癸酉朔十五日戊子挍定、移二地官府一、爲レ式、此銅升之銘也、其玉斗銘曰、維太周保定元年、歳在二重光一、月旅二蕤賓一、晉國之有司修二繕倉廩一、獲二古玉斗一、形製典正、若二古之嘉量一、大師晉國公以聞、敕納二於天府一、暨二五年歳在二協洽一、皇帝廼詔二狀稽二準繩一、考二灰律一、不レ失二圭撮一、不レ差二累黍一、遂鎔レ金寫レ之、用頒二天下一、以合二太

平權衡度量ハ、今若以レ數計レ之、玉斗積玉尺一百一十八寸八分有奇、斛積一千一百八十五分七氂三毫九秒」ト云ヘリ、按ズルニ玉升銅升トアルハ、皆玉斗銅斗ノ訛、累黍ハ纍黍ノ假借ナリ、又此斗ノ積ヲ算ルニ、祖沖之ガ率ニヨリテ求ムルハ、徑七寸一分ノ周ハ二尺二寸三分〇五毫三絲〇七八一五ニテ、冪三十九寸五十九分一十九氂二十一毫三十七絲一十六忽二五、深サ二寸八分ヲ乘ズレバ其積一千一百〇八寸五百七十三分七百九十八氂四百〇五毫五百絲ナリ、是ヲ斛積一千一百八十五分七氂三毫七秒九忽ト云ヘルナレバ、今本ニ八十五分トアル十ノ字ハ寸ノ字ノ誤ニテ、九秒トアルモ七秒九忽ノ脫誤ナリ、又斗ノ積ハ斛ノ十分一ナレバ、一百一十〇寸八百五十七分三百七十九氂八百四十〇毫五十絲ナリ、是ヲ玉斗積玉尺一百一十寸八分有奇ト云ヒタルナレバ、今本ニ一十八寸トアル八ノ字ハ衍文ナリ】玉尺【曲尺八寸八分〇〇八絲】ニテ度リシナリ、曲尺ニテ度レバ、徑六寸二分四氂八毫五絲六忽八、深サ二寸四分六氂四毫二絲二忽四、コノ周一尺九寸六分三氂〇四絲五忽五三〇一八二五二ニテ、冪三十〇寸六十六分五十五氂五十八毫七十〇絲六十一忽〇三八二一五七八四積七百五十五寸六百六十八分〇五十七氂三百六十九毫八百九十九絲八百三十六忽餘ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗一升七合〇六撮餘

斗　今一升一合七勺有奇

升　今一合一勺七撮有奇

合　今一勺二撮弱

[後周官斗] 又後周ニ官斗アリ、斛積玉尺ノ九百七十七寸有奇ニテ、玉斗ノ一斗ハ官斗ノ一斗一升三合四勺餘ナリ、【隋志ニ、「甄鸞算術云、玉升一升、得官斗一升三合四勺、此玉升大、而官斗小也、以數計之、甄鸞所據後周官斗、積玉尺九十七寸有奇、斛積九百七十七寸有奇」ト云ヘリ、】「玉升一升得官斗一升三合四勺」ト云ヒシニ據リテ、一三四ヲ以テ玉斗ノ斛積一千一百〇八寸五分七氂三豪七秒九忽ヲ除スレバ、官斗ノ斛積八百二十七寸餘トナリテ其數合ハズ、故ニ官斗ノ斛積九百七十七寸有奇ト云フニヨリテ、九七七ニテ玉斗ノ斛積ヲ除スレバ、玉斗ノ一斗ハ官斗ノ一斗一升三合四勺六撮七強ナリ、是ニヨレバ玉升一升トアルハ玉斗一斗ノ誤ニテ、官斗一升三合四勺トアルモ、一升ノ上ニ一斗ノ字ヲ脱シタルナリ故ニ一一三四ヲ以テ玉斗ノ斛積ヲ除スレバ、九百七十七寸五百七十八分強、コレ官斗ノ斛積ナルヲ約シテ、九百七十七寸有奇ト云ヘルナレバ、今本ノ隋志ニ「玉升一升得官斗一升三合四勺、此玉升大、而官斗小也」トアルハ「玉斗一斗得官斗一斗一升三合四勺、此玉斗大、而官斗小也」トアリシヲ誤リタルコト明ナリ】今玉尺ヲ再自乘シテ、【曲尺六百八十一寸六百五十七分八百七十二氂八百九十六豪五百一十二絲】官斗ノ斛積【九百七十七寸五百七十八分三百〇五氂四百七十二豪二百二十二絲二百二十二忽不盡】ニ乘ズレバ、曲尺ニテ斛積六百六十六寸三百七十三分九百四十八氂二百九十七豪九百七十一絲六百三十六忽餘ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今一斗〇三合二勺三撮餘

斗　今一升〇三勺二撮餘

升　今一合〇三撮強

合　今一勺餘

隋志ニ玉斗ノ徑深、斗斛ノ積ヲモ詳ニ記シ、官斗ノ比量、其斗斛ノ積ヲモ載セタルコト右ノ如クナルニ、荻生氏コレニ從ハズシテ別ニ玉尺千寸ノ嘉量ヲ起シタレドモ、【正木氏・最上氏皆コレニ依ル】千寸ノ量ヲ作リタルコト物ニ見ユルコト無シ、藤本氏ハ方七寸一分、深二寸八分ノ方量トシタレドモ、隋志ニコノ量ヲ徑ト云ヒテ方ト云ハザレバ、方量ニアラザルコト明ラケシ、【方七寸一分、深二寸八分ノ量ハ、ソノ積一千四百一十一寸四百八十分ニテ、玉斗ノ斛積一千一百〇八寸五分八釐三豪七秒九忽ナルニモ合ハザルヲヤ】田村氏コレヲ圓量トシタル者是ナリ、【但周尺ノ長サヲ誤リシ故、玉尺ノ長サモ隨ヒテ誤リシカバ、其容受モ稍多キニ過ギタリ】然ルニ斛積ノ論ニ及バザリシヲ見レバ、イマダ隋志ノ文ヲ熟ク解セザルニ似タリ、中村氏・中根氏・山田氏ハ此量ヲ載セズ、又官斗ヲバ諸家トモニ皆載セザリシハ如何ナル故ナルカ、【律呂新書ニモ玉斗官斗ヲ載セズ】ヲ思フニ隋志ノ玉斗ノ斗積ニハ一十寸ヲ一十八寸ト誤リ、斛積ニハ八寸五分七釐三豪七秒九忽ヲ八十五分七釐三豪九秒ト誤リ、官斗ノ比按ニハ玉斗一斗ヲ玉升一升ト誤リ、官斗ノ下ニ一斗ノ字ヲ脱シタル故ニ、諸家皆コノ條ヲ讀カネテ、

或ハ其說ヲ改メ作リ、或ハ省キシモノナルベシ

[後周建德尺] 建德六年鐵尺ヲ作リ律度量ヲ同クシテ、天下ニ頒ツトアレバ、【上卷ニ出ヅ】是時鐵尺ニヨリテ、一千六百二十寸量ヲ作リシナルベシ、【但シ建德ニ鐵尺ヲ用ヒ、ソレニヨリテ律量ヲモ改メシトアレドモ、玉尺ノ條ニハ玉斗ニヨリテ、律度量衡ヲモ作リ、大象ノ末マデ用ヒシトアレバ、保定ノ時ヨリ建德マデハ玉尺・玉斗ヲ用ヒシニ、建德ノ時鐵尺ノ度量ヲ作リテ後、大象マデハ度量トモニ玉尺・鐵尺ノ兩制アリシナルベシ、隋志ニ「後周玉斗幷副金錯銅斗及建德六年、金錯題銅斗實同」ト云ヘバ、建德ノ銅斗ニモ玉斗ト同ジカリシモアリシナリ】鐵尺【曲尺八寸〇八氂六豪四絲】ヲ再自乘シテ、曲尺五百二十八寸七百六十八分六百〇四氂〇一十二豪五百四十四絲ヲ得、千六百二十寸ニ乘ズレバ、曲尺ニテ斛積八百五十六寸六百〇五分一百三十八氂五百〇〇豪三四二十一絲二百八十忽ナリ、今斛法ニ除スレバ

斛　今一斗三升二合七勺有奇

斗　今一升三合二勺七撮有奇

升　今一合三勺三撮弱

合　今一勺三撮强

[後周三倍量] 是、隋唐小量ノ本ヅク所ナリ、然ルニ左傳正義ニ「周隋斗升於ニ古三ニ而爲レ一」ト云ヘリ、

【コノコト隋志ニハ載セズ】按ズルニ後周ノ初ニハ、後魏ノ度量ヲ用ヒシニ、保定ニ改メテ玉斗ヲ用ヒ、建德ニハ鐵尺ニヨリテ量ヲ作リシカドモ、並ニ其量小クシテ不便ナリシカバ、後ニ建德ノ量ヲ三ツ併セタル俗量ヲ作リシナルベシ、【保定ニハ玉尺ヲ作リ、建德ニハ鐵尺ヲ用ヒタレドモ、市中ニハ是ヲ不便ナリトシテ、猶後魏ノ尺ヲ用ヒシモ、是ト同ジ、然レドモ是ハ民間ノ私ニテ、官量ニハアラザリシ故ニ、隋志ニハ載セザルナラン】鐵尺ヲ古尺トセシ故ニ、【蓬溪震・牛弘等ガ議セシコト詳ニ上卷ニ引リ】建德ノ量ヲ古ナリトシテ、「於古三而爲一」ト云ヒシナラン、建德ノ量ヲ三倍スレバ

斛　今三斗九升八合一勺一撮有奇

斗　今三升九合八勺一撮強

升　今三合九勺八撮強

合　今四勺弱

是隋唐大量ノ本ヅク所ナリ、然ラバ大小量並べ用フルコトハ、後周ヨリ始リシナリ、【諸葛氏ハ周漢既ニ大小量アリトシ、毛詩ノ「酌以大斗」トアルヲ以テ、周ニ大小斗アリシ證トシ、漢書ニ「合龠爲合」トアルヲ小量トシ、說苑ニ「十龠爲合」トアルヲ大量トシ、又金匱要略ニ鱠ヲ食ヒタルガ心胸ノ間ニアリテ化セズ、吐ケドモ出ザルヲ治スル方ノ藥劑ヲ「以水一大升煮」ト云ヒ、紅藍花酒ノ方ニ「以酒一大升煎」ト云ヒ、漢書貨殖傳ニ「黍千大斗」トアルヲ、顏師古ガ注ニ「大斗者異於量米粟之

斗㆒也、今俗猶有ニ大量㆒ト云ヒシヲ引テ、漢ニ大小量アリシ證トセリ、然レドモ予ヲ以テ見レバ、皆周漢大小量ヲ用ヒシ證トスルコトヲ得ズ、先毛詩ノ斗ハ鄭箋ニ、「以ニ大斗㆒酌而嘗㆑之」トアレバ、酒ヲ挹ム器ニシテ量器ニアラザレバ、枓ノ借字ナリ、斗ハ斗升ノ字ニテ、音當口反、枓ハ枓勺ノ字ニテ、音之庾反ナレバ、二字同ジカラザルヲ、古ハ文少カリシカバ斗・枓古音同ジキニヨリ、斗字ヲ借リテ枓トシタルナリ、故ニソノ釋文ニ「大斗字又作㆑枓」ト云ヘリ、毛詩ニ「又維北有㆑斗、不㆑可㆔以挹㆓酒漿㆒」トアルモ是ナリ、釋文ニ此二ツノ斗字ノ音、イヅレモ、都口反、徐音主」トアリ、都口反トアルハ非ニテ、音主トアルニ從フベシ、周禮鬯人ノ職ニ、「大喪之大渳設㆑斗」注ニ「斗所㆓以沃ヲ尸也」トアル、釋文ニハ音主トノミアリテ、都口反ノ音無キハヨロシ、毛詩ハ人ゴトニ塾師ニ就テ誦讀ヲ學ビシニ、村鄕ノ俗儒誤テ都口反ニ讀傳ヘシヲ、陸德明モ考ヘ正スニ及バズシテ載セシナルベシ、然レドモサスガニ徐邈ガ音ノ誤ラデ傳ハリシヲモ載セタルニハ喜ブベキコトナリ、周禮ハ俗儒ノ誦傳ヘザリシ故、其音誤ラザリシナルベシ、又漢書王莽ガ傳ノ威斗ヲ、宋ノ韓王汝ガ家ニ藏シタルニハ銘ニ「銅枓」トアリシコト、葉少蘊ガ避暑錄話ニ見エ、史記趙世家ニ趙襄子請ニ代王ニ使ム廚人操銅枓食ニ代王㆙」トアルヲ張儀ガ傳、又呂氏春秋列女傳等ニ載セタルニハ、「皆斗」トアルニテ、古斗ヲ借リテ枓トセシヲ證スベシ、然レバ毛詩ノ大斗ハ勺ノ大ナル者ニシテ、斗升ノ事ニハ非ズ、又說苑ノ十龠ハ偶誤リタルモノナルコト既ニ量攷ニ辨ジタリ、又金匱要略ニ鱠ヲ食テ化セザルヲ治スル方ニ「水一大升」トアレドモ、此方ヲ千金

方ニ載セタルニハ、「酒二升」トアレバ、仲景ノ舊ニアラジ、又紅藍花酒ヲ外臺祕要ニ、近效方ヲ引テ載セタルニハ、「清酒半升」トアリ（近效方ハ唐人ノ撰ナリ）又金匱要略ノ此方ノ原注ニ「疑非二仲景方一」ト云ヘリ、ゲニ仲景ノ方ナラバ王燾コレヲ擱テ近效方ヲ引ベキニアラズ、宋ノ陳自明ガ婦人良方ニハ此方ヲ載セテ、「一本出二肘後一」ト云ヘリ、肘後方ハ晋ノ葛洪ガ作ナレバ、是モ仲景ガ方ニ非ルヲ證スベシ、然ラバ此方ハ後人ノ續添ナリ、總テ金匱要略ハ是ノミナラズ、後人ノ羼入多キ書ナリ、又此書ニ藥ヲ何錢ト稱リシモアリ、稱ニ何錢ト云フコト、唐末宋初ヨリノコトナレバ、此書ノ稱ハ仲景ノ舊ニアラズ、コレニヨレバ此一大升モ後人ノ改メシニ疑ナシ、又漢書ニ黍千大斗トアレドモ、史記ニ此事ヲ載セタルニハ、「漆千斗」トアリテ大ノ字無ケレバ、漢書ノ大ノ字ハ衍文ナルヲ顏師古是ニ心付ズシテ、唐ニ大小斗アルヲ以テ古モアリシモノト思ヒテ注シタルナリ、然レバイヅレモ古大小量ヲ並ベ用ヒシ證トハナシ難シ、凡ソ大小量ヲ並ベ用フルコトハ、後魏ニテ古ヨリ無キ大量ヲ用ヒシガ、後ニ其古ニアラザルニヨリテ改メテ古ニ反シ、又玉尺鐵尺ナドニヨリテ量ヲ作リタレドモ、民ノ大量ヲ用ヒ慣レテ、古量ヲハ便トセザリシ故ニ、官ニテハ小量ヲ用ヒ、民間ニハ大量ヲ用ヒシナレバ、量ニ大小アルハ六朝ノ時ヨリ起リシナリ、然ラバ周漢ノ時大量アルベキ理ナシ】

[隋量] 隋ニハ後周ノ俗量ニヨリテ三倍ノ量ヲ用ヒタリ、【左傳正義ニ「周隋斗稱、於二古三一而爲レ一」ト云ヒ、隋志ニハ「開皇以二古斗三升一爲二一升一」ト云ヒ、通典ニモ「隋制前代三升、當二今一升一」ト云ヘ

リ】按ズルニ隋ノ初、尺度ハ後周ニ受テ玉尺ヲ用ヒ、陳ヲ平ラゲテ後玉尺ヲ廢シテ、鐵尺ヲ以テ律ヲ調ヘ百司ハ後周市尺ヲ用ヒタレバ、【上卷ニ詳ニス】量モ隋ノ初ニハ玉斗ヲ用ヒ、陳ヲ平ラゲシ後、古ニ三倍セシ量ヲ用ヒシカトモ思ヘドモ、サハ無クテ、後周ノ市中ニテ用ヒシ三倍ノ量ヲ隋初ヨリ民間ニ承用ヒタルヲ、即官量ニナシタルナラン【大業ノ時ノ贖銅ノ斤兩ノ數ハ、開皇元年ニ定メシ贖法ノ三倍ナレドモ、大業ノ斗稱ハ開皇ノ三ノ一ナレバ、其實ハ同ジト隋書刑法志ニ云ヘリ、(全文下卷ニ引リ)是ニヨレバ、開皇元年既ニ三倍ノ量ヲ用ヒテ開皇八年陳ヲ平ゲシ後ニ、始テ此量ヲ用ヒタルニハアラズ、然レバ隋ニテハ初ヨリ玉斗ヲバ用ヒザリシナリ】

隋大業量 煬帝ノ時ハ三倍ノ量ヲ廢シテ、古量ヲ用ヒタリ、【隋書本紀ニ「大業三年度量權衡並依二古式一」ト云ヒ、律歴志ニモ「大業初依二復古斗一」ト云ヘリ】コノ時梁ノ表尺ヲ用ヒタレバ量モソレニ依リテ作ルベキ理ナルニ、梁尺ニハ依ラズシテ、開皇三分一ノ量ヲ用ヒタリ、即建德ノ量ト同ジ、【隋書刑法志ニ「煬帝即位時、升稱皆小舊三倍」ト云ヘリ、詳ニ下卷ニ引リ】然レドモコノ時度ハ梁表尺ヲ用フベキニ、民間ニテ或ハ開皇官尺ヲ用ヒタリト云ヘバ、量モ私ニハ開皇ノ量ヲ用ヒシナルベシ

唐大小量 唐ニテハ隋ノ大小二量ヲ令ニ著シタレドモ、湯藥ノ外ハ皆大量ヲ用ヒシナリ、【六典等ニ出ヅ、隋ノ開皇ノ制ニ依リシナリ、開皇ニハ古ノ三斗トセシニ、(上ニ見ユ)唐ノ房玄齡ガ管子ノ注ニモ古ノ一石ハ唐ノ三斗三升三合ニ準フト云ヒシニテ、唐大量ト開皇量ト同ジカリシヲ證スベシ、大業ノ制ニヨラ

ザリシハ民ノ便トセザリシ故ナリ、唐量ノコトハ量攷ニ詳ニス】

【宋量】宋ノ量ハ、皇祐新樂圖記ニ、天聖令ノ文ヲ引テ、「諸量以秬黍中者容一千二百黍爲龠、合龠爲合、十合爲升、十升爲斗、【原注】三斗爲大斗】十斗爲斛」ト云ヒ、「合龠爲合、今令文誤作十龠爲合」ト云ヘリ、皆唐令ノ文ト全ク同ジク、「建隆元年八月丙戌、有司新量衡ヲ造リテ天下ニ頒ント請ヒシニ、「精考古制、按前代舊式作之」ト詔シ、【玉海ニ見ユ】景祐四年范鎮ガ上書ニモ、「今斛方尺、深一尺六寸二分」ト云ヒタレバ、【宋史律暦志ニ出ヅ、按ズルニ、方一尺、深一尺六寸二分ハ、即其積一千六百二十寸ニテ、小量ノ斛ナリ宋ニテハ大量ヲ用ヒタレドモ、大量モ本小量ヲ三倍シテ起シタルモノナレバ、如此ハ云ヒシナリ】宋ノ量ハ唐ノ量ニ依リシナリ、又唐ノ常用量ハ古ノ三升ハ今ノ一升ト云ヒ、【傷寒總病論、芍藥・甘草湯注、及上蘇端明論。傷寒論書。又林億ガ千金方凡例・隱篋雜志ニ引キタル王仲弓ガ傷寒證治論注。徽宗ノ聖濟總錄等皆同ジ】又唐宋ノ食糧同ク二升ナルニテ【量攷ニ詳ニス】唐宋ノ量ノ同ジカリシヲ證スベシ、サレドモ皇祐ノ時、阮逸・胡瑗等ガ定メシ尺ニテ、【曲尺八寸〇二毫九豪一絲四忽七二】一千六百二十寸ノ量ヲ作リシニ【曲尺八寸〇二毫九豪一絲四忽七二ヲ再自乘シテ曲尺五百一十七寸六百一十六分六百七十六毫五百八十四豪七百〇二絲五百一十六忽弱、コレヲ斛法一千六百二十寸ニ乘ジテ、曲尺斛積八百三十八寸五百三十九分〇一十六毫〇六十七豪二百一十七絲三百二十三忽餘ヲ得、今斛法ニテ除スレバ其一斛ハ今ノ一斗二升九合九勺有奇ナリ】其二升九合一

龠ハ、大府寺量ノ一升ニテ、其二斗九升五合ハ大府寺量ノ一斗ナリト云ヘリ、【皇祐新樂圖記ニ出ヅ、大府寺升斗ハ卽宋ノ通用量ナリ、皇祐量ハ樂律ヲ定メントテ造リシ量ニテ、通用ノ量ニハアラズ、皇祐量大府寺量比挍ノ全文及ビ圖卷末ニ載ス】今阮逸・胡瑗ガ言ニヨリテ大府寺量ヲ計レバ

斗　今三升八合三勺二撮强

升　今三合八勺三撮强

コレニ依レバ宋量ハ唐量ヨリハ少シク小サカリシナリ

〔宋政和量〕政和二年ニハ大晟樂尺ニヨリテ、量權衡ヲモ作リ、天下ニ頒行ヒタリ【玉海ニ、一政和二年八月、詔量權衡以ニ大晟樂尺一爲レ度一ト云ヘリ、コノ事文獻通考ニモ出ヅ、上卷ニ引リ】大晟樂尺ヲ以テ一千六百二十寸ノ小量ヲ作リシナラン、又コレヲ三倍シタル大量ヲ作リシニモアルベシ、然ルニ其尺蔡元定ガ計リシ四說、又王應麟ガ說皆同ジカラズ【上卷ニ詳ニス】其尤短キヨリ此量ヲ起セバ【鄧保信ガ尺ニ比挍セシ者尤短クシテ曲尺ノ九寸〇一氂六豪九絲五忽ナリ、是ヲ再自乘シテ曲尺七百三十三寸一百二十六分六百一十二氂〇三十七豪二百七十七絲三百七十五忽ヲ得テ、一千六百二十寸ニ乘ズレバ、曲尺斛積一千一百八十七寸六百六十五分一百一十一氂五百〇〇豪三百八十九絲三百四十七忽餘】

斛　小量ナラバ、今一斗八升三合九勺九撮强

大量ナラバ、今五斗五升一合九勺七撮强

其最長キヨリ起セバ【大府尺ニ比按セシモノ最長クシテ、曲尺ノ九寸八分〇六毫五絲九忽ナリ、再自乘シテ曲尺九百四十三寸〇九十一分九百八十七毫八百七十二毫三百三十一絲一百七十九忽ヲ得、一千六百二十寸ニ乘ズレバ、曲尺斛積一千五百二十七寸八百〇九分〇二十毫三百五十三毫一百七十六絲五百一十忽弱】

斛　小量ナラバ、今二斗三升六合六勺八撮餘

大量ナラバ、今七斗一升〇〇六撮弱

此事徵スル所無ケレバ、今審ニ知リ難シ

【南宋量】南宋ニテハ大晟樂尺ヲ廢シタレバ【此事上卷ニ詳ニス】量モ舊ニ復セシナリ、【朱熹ハ南宋ノ人ナルニ、ソノ晦庵語錄ニ「今之一升卽古之三升」ト云ヘリ、北宋ノ人ノ云ヒシト同ジケレバ舊ニ復セシコト疑無シ】然レドモ南宋ノ末ニハ稍大ニナリテ、斛積大府寺尺ノ二千七百寸ナリ【南宋ノ楊輝ガ續古摘奇算法ニ「輝伏覩京城見ニ用官斛一號ニ杭州百合一、浙郡一體行用、未レ較ニ積尺積寸一者、蓋斛勢上闊、下狹、準ニ板凸突一、又有ニ堤欒難ニ於取用一、況栲栳藤斛循習爲レ之、今將下官勝與ニ市尺一較證、少補中日用萬一上、毎立方三寸（原注謂四維各三寸、高三寸、積二十七寸）受ニ粟一勝一毎方五寸深五寸四分（原注積一百三十五寸）受ニ粟五勝一毎方一尺、深二寸七分（原注積二百七十寸受粟一斛毎方一尺、深一尺三寸五分）受ニ粟五斛毎方一尺深二尺七寸受ニ粟一石一」、ト云ヒ、マタ尺樣五寸ノ圖ヲ載セタリ、（圖上卷ニ出セリ）コレヲ度ルニ曲尺ノ五寸一分强ナレバ、コヽニ市尺ト云フモノハ卽大府寺尺ナルベシ、

此書德祐元年ノ自序アリ】大府寺尺【曲尺一尺〇二分一釐五毫五絲】ヲ再自乘シテ、曲尺一千〇六十五寸九百五十九分二百九十七釐三百三十五毫八百〇八絲ヲ得、斛法二千七百寸ニ乘ズレバ【此書ニ斛法ヲ二尺七寸トシタレドモ、南宋ノ末ニ量ヲ然定メタルニハアラズ、本小尺ノ千六百二十寸ヲ三倍シテ、四千八百六十寸ニ作リシ量ノ、南宋ニ至リテ訛リテ大ニナリシモノヲ、楊輝ガ大府尺ニテ度リテ、二千七百寸ト定メシナリ】曲尺斛積二千八百七十八寸〇九十〇分一百〇二釐八百〇六毫六百八十一絲六百忽ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今四斗四升五合八勺七撮弱

斗　今四升四合五勺八撮餘

升　今四合四勺六撮弱

合　今四勺四撮餘

大府寺量ノ漸訛リテ大ニナリシ物ナルベシ、【大府寺量ヨリ計レバ、コノ一斗ハ一斗一升四合八勺三撮弱、唐大量ヨリ計レバ一斗一升二合一勺二撮餘ナリ】

[元量] 元ノ量ハ二千五百寸ヲ斛法トス、コノ法東魏北齊ヨリ受タルモノナラン、【元ノ朱世傑ガ算學啓蒙ニ、「斛法二尺五寸、此依ニ唐時斛法ニ」ト云ヘリ、按ズルニ唐ハ一千六百二十寸ノ法ヲ用ヒタルニ、朱世傑ガ二尺五寸ヲ唐ノ斛法ニ依ルト云ヒシハ疑ハシ、然ルニ唐ノ王孝通ガ緝古算經ニモ、「斛法二尺五

寸トアリ、思フニ二尺五寸ハ唐ノ斛法ニハアラデ、魏齊ニテ用ヒシ斛法ナルベシ、【此事量攷ニ詳ニス】然レドモ北齊ニテハ古尺ノ二尺五寸ナリシヲ、【此事上文ニ云ヘリ】元ニテ用ヒシ斛ハ、北齊ノ尺ニテ二尺五寸ニ定メシモノナルベシ、【是ハ北齊ニテ後ニ改メタルカ、又ハ後世ニ改メシカ詳ナラズ、按ズルニ元ニ官尺・營造尺ノ兩尺アリ、今試ニ官尺（曲尺一尺五寸有寄）ヲ再自乘シテ曲尺三千三百七十五寸ヲ得、斛法二尺五寸ニ乘スレバ曲尺斛積八千四百三十七寸五百分、今斛法ニテ除スレバ今ノ一石三斗〇七合一勺二撮餘ナリ、又營造尺（曲尺一尺〇八分五氂）ヲ再自乘シテ曲尺一千二百七十七寸二百八十九分一百二十五氂ヲ得、二尺五寸ニ乘ズレバ曲尺斛積三千一百九十三寸二百二十二分八百一十二氂五百毫、今斛法ニテ除スレバ斛ハ今ノ四斗九升四合六勺九撮弱ナリ、共ニ元斛ヲ承ケタル明斛ト大ニ異ナレバ、如レ此ハ思ヒヨリシナリ】北齊尺【曲尺一尺一寸四分〇六毫〇八忽】ヲ再自乘シテ曲尺一千四百八十三寸九百一十五分七百三十四氂八百七十五毫六百三十五絲七百一十二忽ヲ得テ、二尺五寸ニ乘ズレバ、曲尺斛積三千七百〇九寸七百八十九分三百三十七氂一百八十九毫〇八十九絲二百八十忽ナリ、今斛法ニテ除スレバ

斛　今五斗七升四分七勺一撮餘

斗　今五升七合四勺七撮強

升　今五合七勺五撮弱

合　今五勺七撮餘

然ルニ算學啓蒙ニ、「以ニ斛法二尺五寸一約レ之、此依ニ唐斛法一」ト云ヒタルニ次テ、「以ニ今斛法一考レ之有レ異、緣ニ各朝代尺法不レ同、不レ可レ爲ニ定法一也」トアリ、元ノ斛ヲ二尺五寸ト云ヒ傳ヘタルニヨリテ、元ノ尺ニテ度リシニ、二尺五寸ニ非ルヲ云ヘルナリ、【元量ハ元尺ノ二尺五寸ニ非ルコトハ上ニ云ヘリ】朱世傑各朝ノ尺ノ異ナリシニヨリ、斛ノ同ジカラザルコトハ知リタレドモ、元ニテ用フル斛法ノ二尺五寸ハ何ノ尺ナルベキヲ尋ネザリシハ精シカラザルナリ、又元史食貨志ニ「宋一石當ニ今七斗一」ト云ヘリ、宋ノ一石ハ今ノ三斗八升三合二勺ニ撮有奇、是ヲ七ニテ除シテ斗ヲ得、又十倍スレバ斛ヲ得、今ノ五斗四升七合四勺五撮餘ナリ、然レドモ合勺ノ奇零ヲ云ハザレバ大凡ニ計リシト聞ユル上ニ、元量ヲ承タル明量五斗八升有餘ヲ一斛トスレバ、猶前說ニ從フベシ、【宋ノ一石ヲ前說ノ五升七合四勺七撮有奇ノ量ニテ量レバ、六斗六升六合八勺有奇ナリ、是ヲ大凡ニ七斗トハ云ヘルナラン】

明量 明ノ量ハ算法統宗ニ、斛法二尺五寸ト云ヘリ、元ノ斛法ト同ジキヲ見レバ、元量ニヨリシナリ、然ルニ成化ノ鐵斛ハ口內方九寸、底方一尺五寸、深一尺、積一千四百七十寸、【清ノ斛モ其形是ト同ジ、陔餘叢考ニ、「今之斛式、上窄下廣、乃宋賈似道之遺、明人農田餘話云、今之官斛、起ニ於賈似道一、元至元間、中丞崔或上言、其式口狹底廣、出入之間、盈虧不ニ甚相遠一、遂頒ニ行之一」(原注亦見ニ元史崔或傳一)トアリ、然レドモ崔或傳(元史傳六十)ニハ此事無シ】コレ斛ノ積ニテ、【明ニテ斛ト云フハ五斗ナリ、下ニ詳ニス】石ノ積ハ二千九百四十寸ナリ、【律學新說ニ、大明頒ニ行鐵斛算法一、依ニ寶源局量一、斛口內方九寸、底內方一尺五寸、深一

尺、置口九寸、自來得二八十一寸一、置底一尺五寸、自乘得二一百二十五寸一、又以二口底一相乘、得二一百三十五寸一、三宗相併、得二四百十一寸一、三歸得二一百四十七寸一以二深一尺一乘レ之、得二一千四百七十寸一、是爲二鐵斛五斗實積一、倍レ之得二二千九百四十寸一、是兩鐵斛、卽十斗實積、一ト云ヘリ、實源局尺ハ卽量地尺ナリ、鐵斛ノ圖卷末ニ出ス、按ズルニ此鐵斛ノ積ヲ計ル算法ハ、卽九章算術ノ商功ノ條ニ、一今有二方亭一、下方五丈、上方四丈、高五丈、問、積幾何、答曰、一十萬一千六百六十六尺大半尺、術曰、上下方相乘、又各自乘幷レ之、以レ高乘レ之三而一一トアル術ナリ】明ノ量地尺【曲尺一尺〇八分五𥝱】ヲ再自乘シテ、曲尺一千二百七十七寸二百八十九分一百二十五𥝱ヲ得、鐵斛ノ積二千九百四十寸ニ乘ズレバ、曲尺斛積三千七百五十五寸二百三十〇分〇二十七𥝱五百豪、今斛法ニテ除スレバ

石　今五斗八升一合七勺五撮餘

斛　今二斗九升〇八勺八撮【明淸ニテ斛ト云フハ五斗ニテ、十斗ヲバ石ト云フ、律學新書ニ、一古人未下嘗以二五斗一爲上レ斛、五斗爲レ斛者蓋自二唐宋一始也、一ト云ヒタレドモ、六典・通典・唐書一皆十斗爲レ斛一ト云ヒタレバ、唐ノ斛ハ十斗ナリシコト明ナリ、倭名類聚鈔ニ、唐令私記ヲ引テ、一大倉署函斛函者受二五斗一、形如二此間酒槽一耳一ト云ヘリ、然レバ唐ニモ五斗ヲ受ル量ハ有リツレドモ、五斗ヲ斛トハ云ハザリシナリ、然ルニ陔餘叢考ニ、一按二葦航記談一宋韓彥古爲二戶部尙書一、孝宗問曰、十石米有二多少一、對曰、萬合千升百斗二十斛、然則五斗爲二一斛一宋已然一ト云ヒ、續古摘奇算

法ニ、「每立方△受ニ粟一勝、每方△深△受ニ粟五勝、每方△深△受ニ粟一㪷、每方△深△受ニ粟五㪷、每方△深△受ニ粟一石」ト云ヒシ「受粟五㪷」ノ下ニ、求ニ圓斛術ヲ擧ゲタレバ、五斗ヲ斛トセシハ、宋ノ時ヨリ有リシナルベシ、サレドモ算學啓蒙ノ（大德三年ノ序アリ）倉囤積粟ノ算法ニ斛ト云ヒシハ、皆十㪷ニテ、元ノ丁巨算法（至正十五年ノ作ナリ）ニモ、石・斗・升・合・勺トノミ量リテ斛ノ名無ケレバ、元ニ至リテモ專ラ五斗ヲ斛トスルコトハイマダ無カリシナリ、明ノ陶穀ガ碧里雜存ニ「今官制五斗爲ニ一斛蓋取ニ其輕而易擧耳、實當ニ古斛之半也」ト云ヒ、正字通ニモ今制五斗曰レ斛、十斗曰レ石」トアリ、今官制ト云ヒ、今制ト云ヘバ、五斗ヲ斛トシ十斗ヲ石ト定メシハ、明ヨリ始マリシナルベシ、玉海ニ「建隆元年八月丙戌、有司請下造ニ新量衡以放中天下上、詔精ニ考古制、按ニ前代舊式作レ之、禁ニ私造者」トアレバ、宋初ノ量法唐制ニ依リタルコト知ラレタリ、故ニ天聖令ニモ、「十斗爲レ斛」ト云ヘリ、其後乾德・紹聖・政和等ノ時モ、量衡ノ制アリシカドモ、五斗ヲ斛トスルコトハ見エズ、「紹興七年三月十九日、製ニ五斗斛放ニ諸路」、二十五年四月四日、製ニ一石斛放レ之、以革ニ倉庾之敝」ト玉海ニ載セタレバ、紹興七年ニ始テ五斗ヲ斛トシタリシ如ク聞ユレドモ、二十五年ニ一石斛トモアレバ、コヽニ云フ斛ハ量ト云フニ同ジクテ、五年ヲ斛ト名ヅケタルニハアラジ、又算法統宗ニ、「斛古一石、今五斗或二斗五升」トアレバ、明ニハ二斗五升ヲ斛トスル俗量モ有リシト見エタリ】

斗　今五升八合一勺七撮餘

升　今五合八勺二撮弱

合　今五勺八撮强

朱載堉コノ鐵斛ハ二千九百四十寸ナルニ依テ、二千五百寸ト云フ、斛法ハ算家ノ杜撰ナリト云ヒタレドモ、【律學新説ニ、二千九百四十寸、是爾鐵斛、卽十斗實積、然則今之斛法非二二千五百一也、民間俗傳算術多以二二千五百一爲二斛法一者、疑術士杜撰也一トアリ】思フニ二千五百ハ東魏・北齊ノ斛法ニテ唐宋ノ時モ北邊ニ遺リ、元ニ至リテ南方マデモコレヲ用ヒ、古ヨリ唐宋マデ用ヒ來レル一千六百二十寸ノ法ハ廢シタリシニ、其量明ニ入リテ鐵斛ヲバ作リシナラン、鐵斛ヲ作リシ時、元ヨリ受タル量ナレバ、別ニ其積ヲ糺スコトモナカリシカバ、明ノ算家モ元人ノ言ニ從ヒテ二尺五寸ト傳ヘシモノナルベシ、【鐵斛ノ石積二千九百四十寸ハ、成化ノ鐵尺ヲ朱載堉ガ量地尺ニテ計リシニテ、初鐵斛ヲ作リシ時積ヲ改メテ二千九百四十寸ト定メシニハアラズ、明ニテ此量ヲ用ヒタルニ、算術家明尺ノ二千五百寸ノ斛法ヲ用ヒシハ誤ナレドモ、二千五百寸ト云フコトハ元ヨリ傳ヘタルヲ守リシニテ、明ノ算術家ノ杜撰ニハアラズ、然ルヲ朱載堉ガ鐵斛ヲ度リ算セシニ、石ハ明尺ノ二千九百四十寸ナリシ故、二千五百寸ト云フハ算家ニ妄ニ云出セルモノト思ヒシハ、二千五百寸ノ斛法ヲ魏齊ヨリ元明ニ至ルマデ受ケ來リシヲモ、二千五百寸ハ元匠ガ尺ニテ計リタルヲモ知ラザリシナリ、數理精蘊ニモ、石法二尺五寸ト

擧ゲテ、今現行斛積爲二一千五百八十寸一、石積三千一百六十寸、舊算書所レ載數各不レ同、古今量法亦不レ一、須三先求二其斗斛之積數一、然後用二其積數一、比例之方得密、合レ今設例從二舊數一」ト云ヘリ、然ラバ清ニテモ、算書ニハ二尺五寸ヲ石法トスルコト明ノ算家ト同ジ】又朱氏談綺ニハ、唐山ノ升不同ナリ、餘姚ノ升ハ日本ノ四合ヲ一升トス、是ヲ鄕升ト云フ、官升ハ六合ヲ一升トス、【按ズルニ鄕升ト云フモノハ宋量ノ訛リシモノニテ、官升ト云フモノハ鐵斛ナルベシ、何レモ奇零ヲ云ハザレバ、大凡ニ計リシナラン】然レドモ處々不レ同、河南ノ升ハ日本ノ八合五勺ヲ一升トス、大方通用ハ日本ノ五合五勺ホドヲ一升トスル也ト云ヘリ、明ニ樣々ノ俗量アリシト見エタリ

［清康熙量］清ノ康熙ノ量ハ方八寸・深五寸・積三百二十寸ナリ、【清ノ余金ガ熙朝新語ニ、「康熙四十三年、造二新樣斗一、具方八寸、深五寸一、積數見方得二三十二萬分一」ト云ヘリ、清ノ今尺（曲尺一尺〇六分）ニテ度リシナリ】コノ斗ヲ曲尺ニテ度レバ方八寸四分八毫、深サ五寸三分ニテ、冪七十一寸九十一分〇四毫、積三千八百一十一寸五十一分二百毫【清ノ今尺ヲ再自乘シテ、積三百二十寸ニ乘ズルモ此數ヲ得】今斛法ニテ除スレバ

石　今五斗九升〇四勺三撮餘

斛　今二斗九升五合二勺一撮餘

斗　今五升九合〇四撮餘

升　今五合九勺有奇

合　今五勺九撮强

又數理精蘊ニハ石積三千一百六十寸ト云ヒ、【數理精蘊聖祖ノ時ニ作ル】淸會典ニモ一升方四寸・深一寸九分七氂五豪・積三十一寸六百分ト云ヘバ、【全文及ビ圖卷末ニ載ス、此書乾隆二十三年御製ノ序アリ】其後制ヲ改メタルナルベシ、コノ升ヲ曲尺ニテ度レバ方四寸二分四氂、深二寸〇九氂三豪五絲ニテ、冪一十七寸九十七分七十六氂、積三十七寸六百三十六分一百〇五氂六百豪、今斛法ニテ除スレバ

石　五斗八升三合〇五撮餘

斛　今二斗九升一合五勺二撮餘

斗　今五升八合三勺有奇

升　今五合八勺三撮有奇

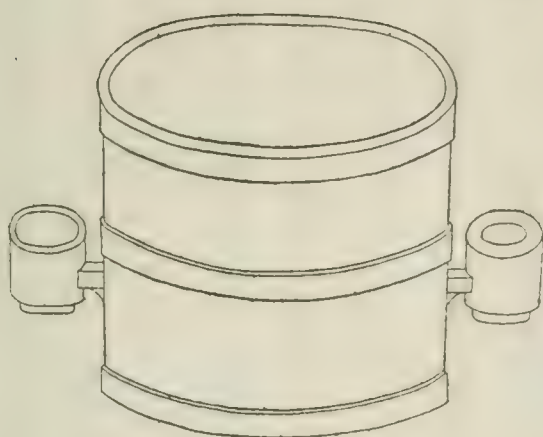
合　今五勺八撮餘

余嘗テ底板ニ「福州布政司較準官升」ト刻セシ升ヲ見タリ、方曲尺四寸三分、深二寸〇三氂【積三十七寸五百三十四分七百氂】今ノ五合八勺一撮餘ヲ容ル、【明ノ鐵斛ト略同ジ、又方曲尺四寸三分、深二寸〇三氂五豪五絲トスレバ、積三千七寸六百三十六分三百九十五氂ニテ、今ノ五合八勺三撮有奇ニテ、略數理精蘊・淸會典ニ云フ所ト合ヘリ、豪絲ニ至リテハ目力ニ及バザレバ、是卽官升ナルコト疑無シ】又蘇

州ノ陳元順ガ賚來リシ升ハ、「口方曲尺四寸六分、底方二寸二分、深三寸」ト云ヘリ、【度量衡說統ニ載タリ、積三十六寸一百二十分】今ノ五合五勺九撮餘ヲ容ル、大坂ノ人木村世肅ガ藏スル淸升ハ口方曲尺四寸八分三釐、底方二寸三分八釐、深二寸九分八釐、【積四十〇寸二百一十八分七百七十五釐三百三十三豪三百三十三絲三百三十三忽不盡】今ノ六合二勺三撮有奇ヲ容ル、成形圖說ニ載セタル淸升ハ、口方曲尺五寸一分、底方二寸六分、深三寸二分、【積四十九寸〇九十八分六百六十六釐六百六十六豪六絲六百六十六忽不盡】今ノ七合六勺有奇ヲ容ル、陳元順以下ノ升ハ皆諸國ノ私量ニテ、官量ニハアラザルベシ、【陔餘叢考ニ、「至市市斗稱則又有隨ニ地不レ同者一、如ニ今川斛大ニ於湖廣一、湖廣斛又大ニ於江南稱一、則有ニ行稱官稱之不レ同、庫平市平之各別、又非ニ禁令所ニ能畫一一、而市儈牙行自能參ニ校錙黍一、不爽則雖レ不ニ畫一ニ而仍通行也」ト云ヘリ】

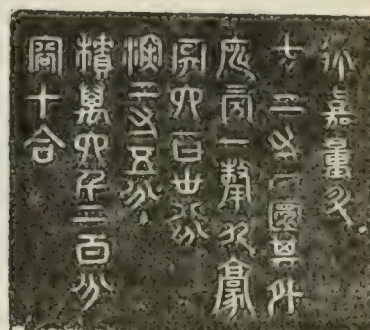
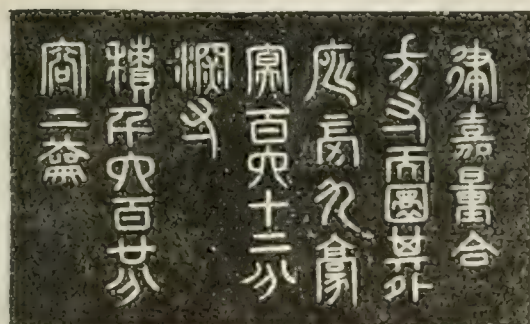
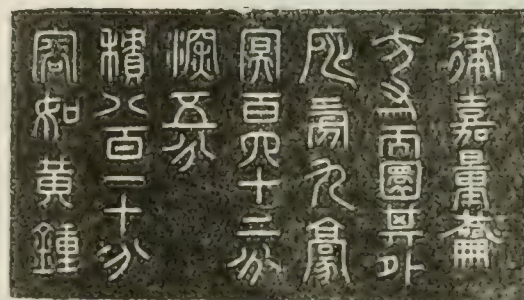
秦量銘

積古齋鐘鼎欵識

廿六年皇帝□并兼天下
□□黔首大安立□□皇帝□
詔丞相□□灋□量則□
壹歉疑者明壹□

黃帝初祖
德帀于虞
虞帝始祖
德帀于新
歲在大梁
龍集戊辰
戊辰直定
天命有民
據土德受
正號即眞
改正建丑
長壽隆崇
同律度量衡
稽當前人
龍在己巳
歲次實沈
初班天下
萬國永遵
子子孫孫
享傳億年

律嘉量斛
方尺而圜其外
庣旁九釐五豪
寬百六十二寸
深尺
積千六百廿寸
容十斗

望之按當釋冥百六十二寸冥讀爲冂後作冪此釋爲寬非是隋志及九章算術方田注引並作冪百六十二寸

律嘉量斗
方尺而圜其外
庣旁九釐五豪
寬百六十二寸
深寸
積百六十二寸
容十升

律嘉量升
方二寸而圜其外
庣旁一釐九豪
寬六百卌八分
深二寸五分
積萬六千二百分
容十合

律嘉量合
方寸而圜其外
庣旁九豪
寬百六十二分
深寸
積千六百廿分
容二龠

律嘉量龠
方寸而圜其外
庣旁九豪
寬百六十二分
深五分
積八百十一分
容如黃鍾

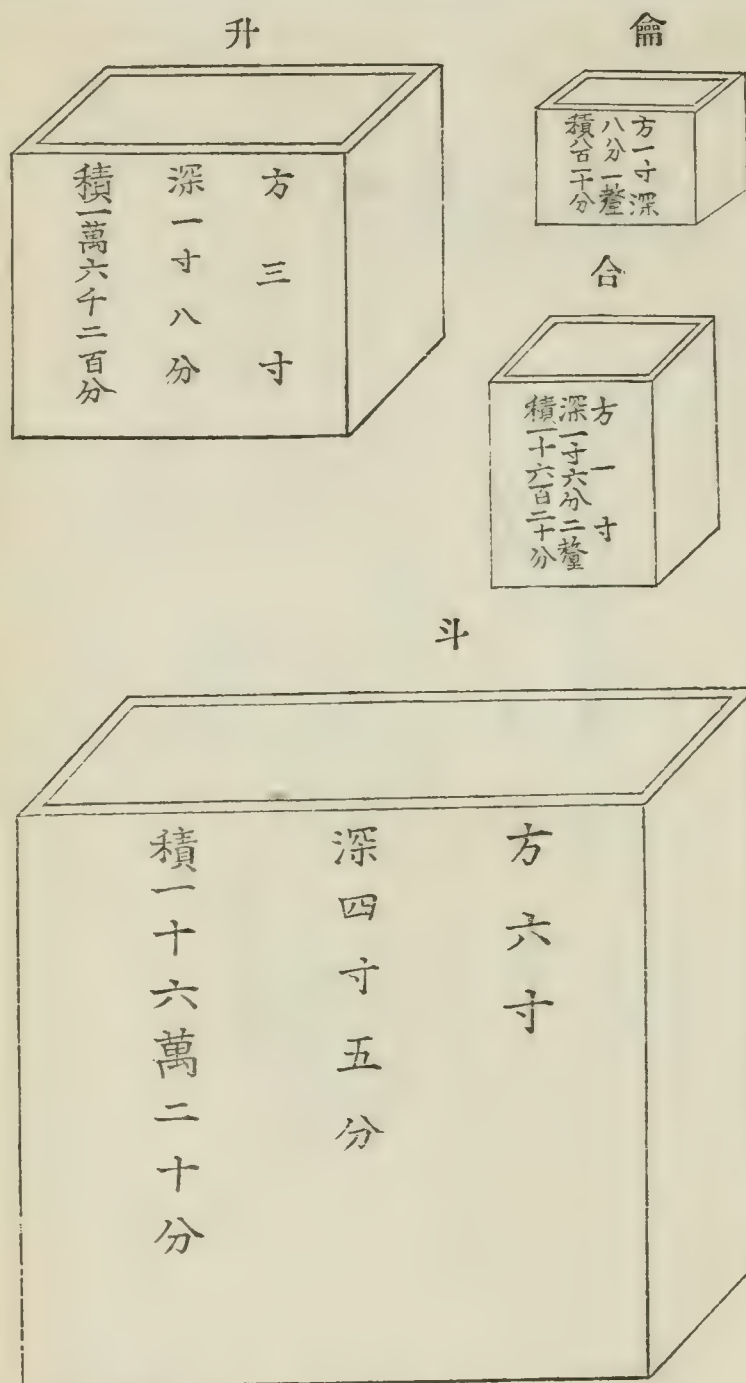
右斛斗升合龠凡五統曰量爲一器合今尺通高八寸二分通濶一尺六寸五分斛深七寸二分徑一尺四分斗深七分有二徑與斛同升深一寸八分有一徑二寸一分合七分有二徑一寸一分龠深三分有六徑一寸蓋莽尺每一尺當今七寸二分

通重三百六十三兩

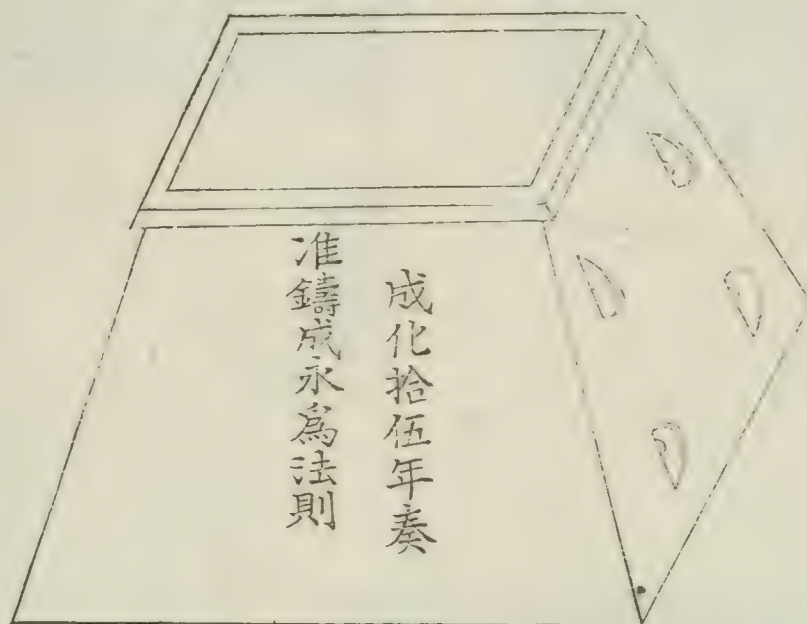
皇祐新樂圖記

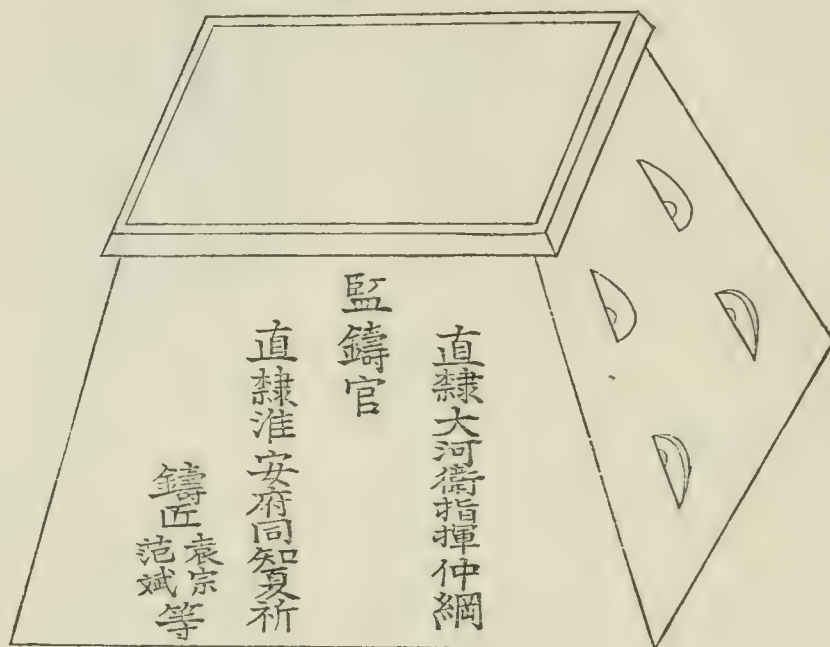
宋皇祐四量 是ハ皇祐新定尺ニテ作リシ小量ニテ宋朝常用ノ量ニ非ズ

臣逸臣瑗謹詳周禮漢志及歷代至聖朝天聖令文量法制成皇祐龠合升斗以今太府寺見行升斗校之二升九合一龠弱得大府寺升一升以二斗九升五合得太府寺斗一斗

謹圖四量形制於左

臣逸臣瑗謹按隋志開皇中以古斗三斗爲一斗今以黍斗校之尙少五合未合三斗者蓋自隋開皇至聖朝五百餘年矣其間制造得無差舛哉

明鐵斛前面小樣

律學新説

依寶源局量地銅尺斛口外方一尺内方九寸斛底外方一尺六寸内方一尺五寸深一尺厚三分平秤重一百斤依古横黍

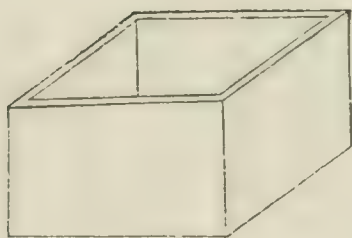
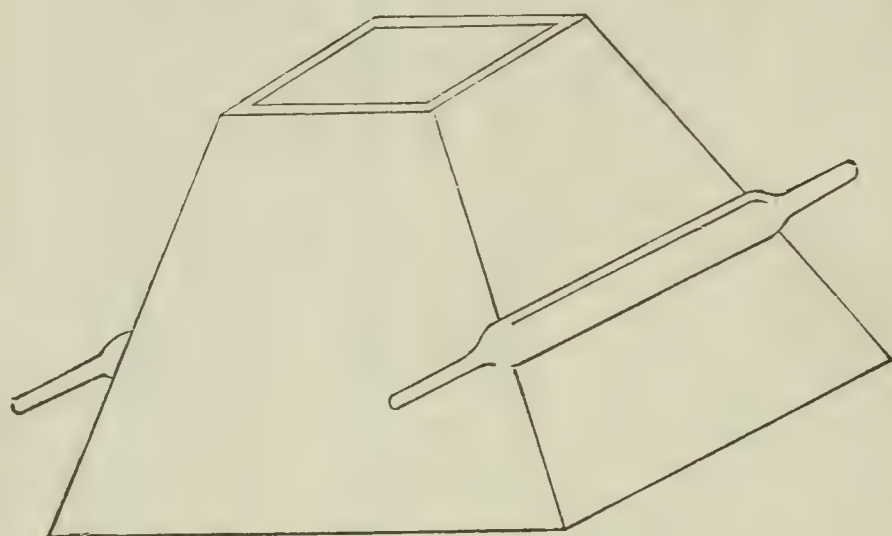
明鐵斛後面小樣

度尺斛口外方一尺二寸八分內方一尺一寸五分有奇底外方二尺〇五分內方一尺九寸二分深一尺二寸八分厚四分

大清會典

清量

以寸法定容積之率

升、方積三十一寸六百分面底方四寸、深一寸九分七釐五豪

斗、方積三百一十六寸面底方八寸、深四寸九分三釐七豪五絲

斛、方積一千五百八十寸、口方六寸六分、底方一尺六寸、深一尺一寸七分

兩斛爲石、容積三千一百六十寸、各得容量之準、斛之制、由部定式、工部鑄造以鐵頒倉場侍郎、漕運總督、直省布政使司、布政使司、如式造木斛、通頒所屬、以出納倉糧

或人問、漢器ニ容受ノ款識アルモノ皆同ジカラズシテ、量ヲ起スコト能ハズ、諸家ノ定メシ漢量モ皆據ルベカラズト云フ者如何、答、歐陽脩ガ集古錄ニ、「始元四年ノ谷口銅甬ヲ載ス、【珊瑚鉤詩話ニ是ヲ銅斛ト云ヒシハ誤ナルベシ】銘ニ「容ニ十斗」トアリ、「劉原父以ニ今量ニ校レ之容ニ三斗」」ト云ヘリ

宋ノ量ハ今ノ三升八合三勺二撮餘ヲ一斗トス、三斗ハ今ノ一斗一升四合九勺六撮餘ナリ、此三斗ヲ受ル甬ニ「容ニ十斗」トアルニヨリテコレヲ十分スレバ

斗　今一升一合四勺九撮餘

王黼ガ宣和博古圖ニ【晁公武ガ讀書志ニ、王楚撰トアルハ誤ナリ、蔡條ガ鐵圍山叢談ニ、大觀ノ初、李公麟ガ考古圖ニ倣ヒテ、宣和殿博古圖ヲ作ルト云ヘリ、陳振孫ガ書錄解題ニ、黄伯思ガ博古圖說ヲ採リテ刪改シタリト云ヒシハ非ナリ、又此書ヲ洪邁ガ容齋隨筆ニモ、錢曾ガ讀書敏求記ニモ、宣和年間ニ成リシト云ヒタレドモ、殿ノ名ニヨリテ宣和ト名ヅケタルニテ、年號ヲ冠ラセタルニハアラズ、年號ノ宣和モ後ニ此殿ノ名ニヨリテツケタルナリ、此コトモ鐵圍山叢談ニ見ユ、蔡條ハ蔡京ガ子ニテ、博古圖ヲ作リシヲバ目ノアタリ見タリシ人ナレバ、大觀ノ時ニ作リシト云フモ宣和殿ニヨリタルコトモ誤ニハアラジト、四庫全書提要ニ云ヘリ、此事世人多ク誤ル故ニ驚カシ置ナリ】載セタル元康元年ノ梁山鋗ノ銘ニ「二斗」トアルヲ、「容ニ六升」ト云ヒ、始建國元年ノ「注水匜」ハ銘ニ「容ニ一升」トアル「容ニ三合」トアリ、皆谷口甬ト同ジ量法ナリ

綏和元年ノ壺ノ銘ニ、「容二一斗一」トアルヲ「容二六升二合一」ト云ヘリ

宋ノ六升二合ハ今ノ二升三合七勺六撮弱ナリ、コレヲ二分スレバ

斗　今一升一合八勺八撮弱

建武二十年ノ大官鍾ノ銘ニ「容二一斛一」トアルヲ「容二二斗九升五合一」ト云ヘリ

宋ノ二斗九升五合ハ今ノ一斗一升三合〇五撮弱、コレヲ十分スレバ

斗　今一升一合三勺有奇

呂大臨ガ考古圖ニ載セタル好時共廚鼎ノ銘ニ、「容二九升一」トアルヲ【以下四器ノ款識皆年號ヲ載セズ】

「容二三升一合一」ト云ヘリ

宋ノ三升一合ハ今ノ一升一合八勺八撮弱、コレヲ九分シ、又十併スレバ

斗　今一升三合二勺弱

軹家釜ノ銘ニ、「容二四斗一」トアルヲ、「容二斗有二升九合一」ト云ヘリ

宋ノ一斗二升九合ハ、今ノ四升九合四勺三撮餘、コレヲ四分スレバ

斗　今一升二合三勺六撮弱

軹家釜ノ銘ニ、「容二三斗三升一」トアルヲ「容レ斗」ト云ヘリ

宋ノ斗ハ今ノ三升八合三勺二撮強、コレヲ三三ニテ除スレバ

斗　今ノ一升一合六勺一撮餘

積古齋鐘鼎款識ニ載セタル陶陵鼎ノ銘ニ、「容二一斗一」トアルヲ「以二今官倉斗一較レ之得二一升八合一」ト云ヘリ、【硏手經室集同】

淸ノ量ハ今ノ五合八勺三撮有奇ヲ一升トス、其一升八合ハ

斗　今一升〇四勺九撮餘

以上ノ諸器、其容ル所皆同ジカラザレバ、證トナシ難シ【軹家釜・軹家甑ハ一時ニ造リシモノナルニ、其容受同ジカラザルニテ漢器ノ證トナシ難キヲ覺ルベシ】

諸家ノ說ノ據トナシ難キハ

沈括ガ夢溪筆談ニ二說ヲ載ス、一ハ今ノ一升一合四勺三撮餘ヲ漢ノ一斗トス

其說ニ「予考二樂律一受レ詔改二鑄渾儀一求二秦漢以前度量一計六斗、當今之一斗七升九合一」ト云ヘリ【宋ノ一斗七升九合ハ今ノ六升八合六勺弱、コレヲ六分スレバ、漢ノ一斗ハ今ノ一升一合四勺三撮餘ナリ】

一ハ今ノ一升〇三勺四撮餘

其說ニ「漢之一斛今之二斗七升、」ト云ヘリ、【宋ノ二斗七升ハ今ノ一斗〇三合四勺七撮弱、コレヲ十分スレバ、漢ノ一斗ハ今ノ一升〇三勺四撮餘ナリ】

王懋ガ野客叢書ニハ三說ヲ載ス、其一ハ今ノ七合六勺六撮餘

其說ニ「漢二斗七升、當ニ今五升四合ニ」ト云ヘリ、【宋ノ五升四合ハ今ノ二升〇六勺九撮餘、コレヲ二七ニテ除スレバ、漢ノ一斗ハ今ノ七合六勺六撮餘ナリ】陳言ガ三因方ニ「以ニ紹興一升ー得ニ漢五升ニ」ト云ヒシモ是ト同ジ、【按ズルニ王懋ガ下ノ二說及ビ諸家ノ考ル所ノ漢斗、皆今ノ一升以上ナレバ此比校ハ誤ナリ】

一ハ今ノ一升〇三勺四撮餘

其說ニ、「八升當ニ二升一合六勺ニ」トモ【宋ノ二升一合六勺ハ今ノ八合二勺七撮餘、コレヲ八歸スレバ一斗ハ今ノ一升〇三勺四餘ナリ】「五升當ニ一升三合有半ニ」トモヘリ、【宋ノ一升三合有半ハ、今ノ五合一勺七撮餘、是ヲ五歸シタルモ、今ノ一升〇三勺四撮餘ナリ】

一ハ今ノ一升〇二勺二撮弱

其說ニ「六升當ニ今一升六合ニ」ト云ヘリ【宋ノ一升六合ハ今ノ六合一勺三撮强、コレヲ六歸スレバ今ノ一升〇二勺二撮弱ナリ】

清ノ閻若璩ガ、孟子生卒年月考ニハ、今ノ一升一合七勺九撮餘

其說ニ「古量甚小、漢二斗七升、當ニ今五升四合ニ、然則古之五纔當ニ今之一ニ也」ト云ヘリ、【康煕ノ五升四合ハ今ノ三升一合八勺四撮餘、コレヲ二七ニテ除スレバ、一斗ハ今ノ一升一合七勺九撮餘ナリ、按ズルニ康煕ノ量ハ四十三年ニ造リシコト上ニ引リ、潜研堂文集ニ閻若璩ガ傳ヲ載セテ、康煕四十三年

ニ卒ストアレバ、閻氏ノ校セシハ康熙ノ量ニハアラズ、然レドモ淸初ノ量、徵スル所無ケレバ、今姑ク康熙ノ量ニヨリテ計リシナリ】周官祿田考ニ、此說ヲ載セ、又有下容二六升一者上、當二今一升二合一、是古之十當二今之二一也【原注容二六升一者彤親見而較レ之】トアルモ同ジ量法ナリ

以上諸說、皆據ルトコロヲ云ハザレバ、其說明ナラズ

皇國ニテ中村氏ノ三器攷略【一升〇七勺九撮二弱】荻生氏ノ量考【九合三勺一撮二九】正木氏ノ三器逢源考【一升一合八勺二撮弱】山田氏ノ權量撥亂【一升四合四勺六撮七】田村氏ノ度量小識【一升二合】最上氏ノ度量衡說統【一升〇五勺弱半】皆周尺ヲ以テ、一百六十二寸ノ斗ヲ起シタルナリ

以上諸家定メタリシ周尺ノ長サ異ナリシカバ、量モ從ヒテ同ジカラズ、然ルニ定メシ周尺イヅレモ誤リタレバ【詳ニ上卷ニ辨ゼリ】其量モ皆據ルニ足ラズ

諸葛氏ノ律量全編ニハ六合四勺五撮強ヲ一斗トス【原書六合五勺八撮トアリ、算ノ誤ナリ】其說ニ定ムル所ノ周尺ヲ以テ黃鍾ノ龠ヲ作リ、ソレニ黍千二百粒ヲ容レテ今ノ京量ニ校スルニ三十一龠ニシテ一合ヲ得、故ニ三一ヲ以テ一合ヲ約スレバ、三撮二二五八有奇ヲ得、【原書三撮二圭九トアリ、算ノ誤ナリ】是龠ニシテ二龠ノ合ハ六撮四五一六ナリ、【原書誤テ六撮五圭八トアリ】

是モ其定メタリシ周尺誤リタレバ據ルニ足ラズ、【周尺ヲ定メタランニハ其一千六百二十寸ヲ計リテ積ヲ知ルベキニ、黃鍾管ヲ作リ、ソレヨリ求メシモ迂遠ナリ】

藤本氏ノ三器彙考ニハ、周鬴ヨリ斗ヲ求ムレバ、今ノ七合九勺有奇、秦漢ノ斗ハ今ノ七合九勺四撮餘、東漢ノ斗ハ今ノ八合一勺九撮强

其定ムル所ノ周尺ヲ以テ千寸ヲ度リ、是ヲ周ノ鬴トシ【今ノ五升〇五勺七撮餘、鬴ハ六斗四升ナレバ今ノ七合九勺有奇ナリ】又方尺ノ弦ヲ徑トシ、深サ一尺ナル圓量ヲ作リ、劉徽ガ率ニ依リテ一千五百七十寸ヲ得、是ヲ秦漢ノ斛トシ、【斗ハ今ノ七合九勺四撮餘ナリ】秦漢ノ斛ニ庣ヲ加ヘテ、一千六百二十寸トシタルヲ東漢ノ斛トス、【斗ハ今ノ八合一勺九撮强ナリ】

秦漢ノ斛一千五百七十寸ナルコト徵スル所無ク、且周尺モ誤リタレバ、此説モ據トナシ難シ

朱載堉ガ律學新説ニハ、今ノ九合五勺有奇ナリ

其説ニ考工記ノ嘉量ヲ漢ノ嘉量ノ庣無キ圓量トシ、是ヲ古ノ八斗トス、【考工記】ニ一深尺、內方尺而圜ニ其外一、其實一鬴、一トアルヲ、朱載堉ガ考正ニ、一深尺方尺、圜ニ其外一、當ニ徑一尺四寸一分四氂二毫一絲三忽五微六纖一、周四尺四寸四分四氂四毫四絲四忽四微、面冪一百五十七寸一十三分四十八氂四十毫、積實一千五百七十一寸三百四十八分四百氂、容古八斗一トアルニ依リテ算スルニ、（三一四二六九六七七九有奇ノ周法ナリ）朱載堉ガ周尺ハ營造尺ノ六寸四分ナレバ、六四ヲ再自乘シテ營造尺二百六十二寸一百四十四分ヲ得、嘉量ノ積一千五百七十一寸三百四十八分四百氂ニ乘ズレバ、營造尺ノ鬴積四百一十一寸九百一十九分五百五十四氂九百六十九毫六百絲ナリ、營造尺ハ曲尺ノ一尺〇六分ナルニヨリ一〇六ヲ再自乘シ

テ曲尺一千一百九十一寸〇一十六分ヲ得、營造尺ノ積ニ乘ズレバ、曲尺鬴積四百九十〇寸六百〇二分七百八十〇釐六百八十一毫六百七十三絲一百一十三忽餘、今斛法ヲ以テ除スレバ、今ノ七升六合有奇、是一鬴ニテ古ノ八斗ナリ、是ヲ八ニテ除スレバ、斗ハ今ノ九合五勺有奇ナリ】

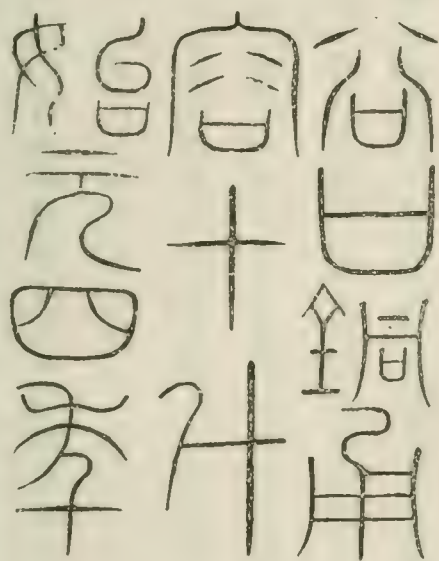
考工記ノ嘉量ヲ圓器トスルコト、明證無ク、【宋ノ范鎮ハ圓量トシタレドモ、其非ナルコト上ニ辨ゼリ】又鬴ヲ八斗トスルコトハ齊ノ陳氏ガ民ノ心ヲトラントテノ所爲ナレバ、【左傳昭三年ニ見ユ】齊ノ釜モ六斗四升ニテ、考工記ノ注ニ云ヒシト同ジコトナルハ、杜預ガ注ニモ明ニ云ヘリ、コノ陳氏ガ量ノ外ニ鬴ヲ八斗ト云ヒシコト絕テ無シ、又朱氏度ノ咫・仞・常・尋、皆八ニテ數ヘタレバ、鬴鍾モ八ヲ以テ數フベシ、十ヲ以テ數フルハ、河圖ノ全數八ハ、八卦ノ變數ナリナド云ヒテ、漢儒六斗四升ノ說ヲ非トシタレドモ、皆彼ガ嚮壁虛造ノ說ニシテ、古ニ徵スルコト無ケレバ、總テ據トスルニ足ラズ

谷口甬

薛氏鐘鼎款識

谷口銅甬

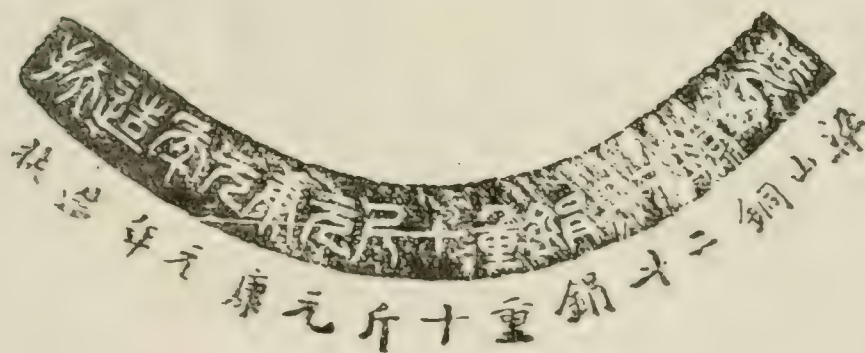
容十升

元始四年

南方
左馮翊造
谷口銅甬容十升
重廿斤甘露元年
十月計椽章平
左馮翊府

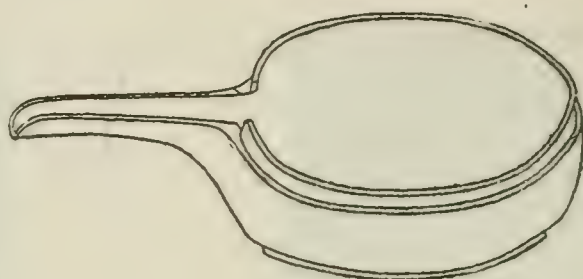
北方曁南

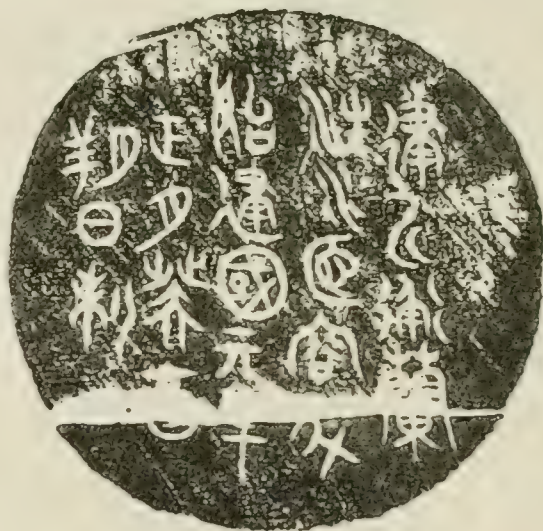
右古器物銘云谷口銅甬舊藏劉原父家一器而再刻銘
集古錄云漢谷口銅甬原父在長安時得之其前銘云谷口
銅甬容十共下減兩字始元四年左馮翊造其後銘云谷口
銅甬容十斗重四十斤甘露元年十月計椽章平左馮翊府
下減一字原父以今權量校之容三斗重十五斤

漢梁山銷

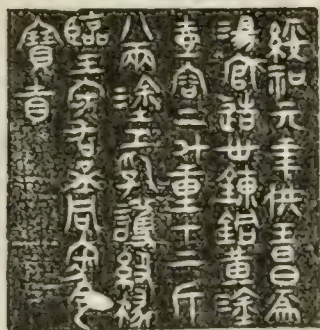
宣和博古圖

右高四寸二分深四寸一分口徑七寸四分腹徑七寸六分容六升重二斤十有三兩

漢注水匜

宣和博古圖

右高一寸二分深一寸一分徑三寸容三合重五兩

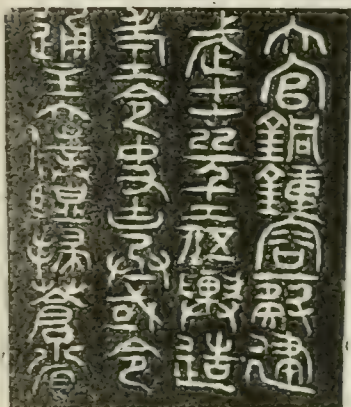
據江朔堂所藏舊搨本

律斤衡蘭注水匜容一升始建國元年正月癸酉朔日制

漢綏和壺

宣和博古圖

綏和元年供王昌爲
湯官造卅錬銅黄塗
壺容二斗重十二斤
八兩塗工乳護級掾
臨主守右丞同主令
寶省

右高八寸七分深七寸四分口徑三寸七分腹徑六寸四分容六升二合重五斤有半

漢大官壺

宣和博古圖

大官銅鍾容一斛建
武十十選工伍與造
考工令史由丞或令
通主大僕監掾蒼省

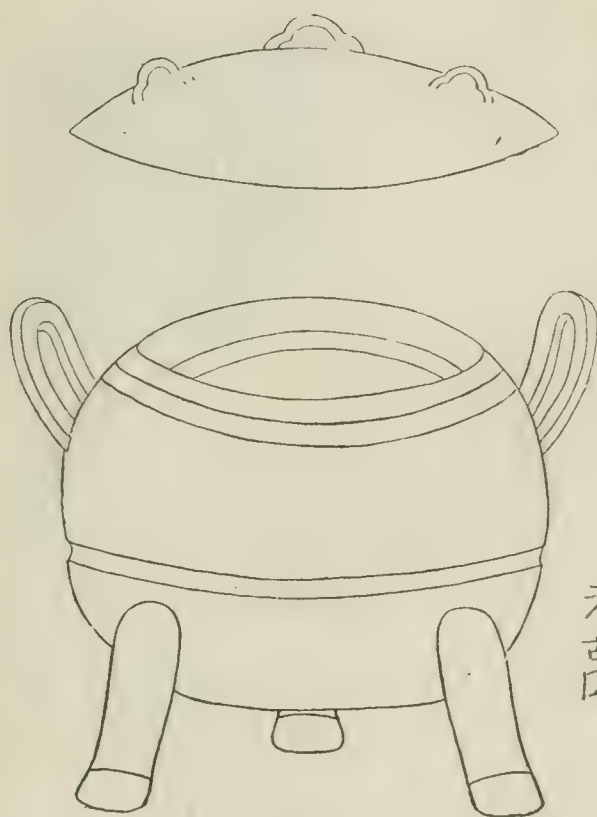
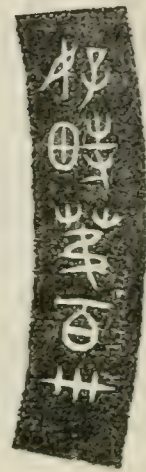
右高一尺五寸五分深一尺三寸口徑五寸八分腹徑一尺一寸容二斗九升五合重二十一斤二兩

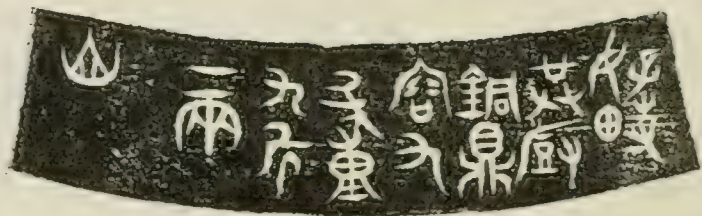
據江朔堂所藏舊搨本摹入　建武十十者二十年也薛氏款識銘文脫一十字且以十十選工四字釋作二十五年二當是傳抄之訛史凶凶字釋作右亦誤

好時共厨鼎　盧江李氏

考古圖

好時第百卅

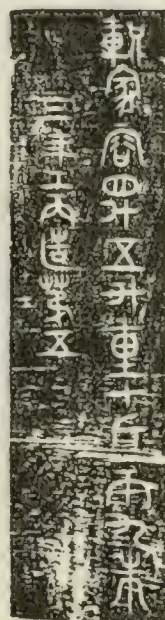
盖

大官中丞令第百六十

長樂飼官二斤十一兩四百廿五

好時供厨銅鼎容九升重九斤一兩山

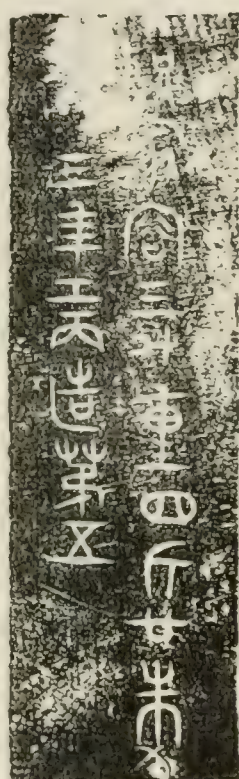
右不知所從得高五寸深三寸徑五寸有半容三升一合重三斤六兩有銘十五字在腹二十有一字在蓋據下解廿有六字

此器刻云重九斤一兩今重三斤六兩今六兩當漢之一斤與車宮槃之法同

軹家釜　京兆孫氏　　考古圖

形制與今同

軹家容四斗五升重十斤一兩九銖
三年工丙造第五

軹家甑　同上

形制與今同

軹家容三升重四斤廿銖
三年工丙造第五

右二器皆得於京兆形制與今器同更不圖寫　釜重二斤十一兩六銖容斗有二升九合銘廿有一字　甑重一斤七兩容斗銘一十七字

以今權量校之釜四兩七銖甑五兩十八銖當漢之一斤釜三斗弱甑三斗一升當漢之一斗二品亦不同

漢陶陵鼎

積古齋鐘鼎款識

蓋

隃麋陶陵共廚

銅斗鼎蓋幷重十一

斤

器

隃麋陶陵共廚銅鼎一合

容一斗幷　重十斤

右漢陶陵鼎銘蓋鑿銘、大字十五、小字四、器銘大字十七、小字十六、元所ㇾ藏器銘云、幷重十斤、又云、重八斤、一兩、則蓋當ㇾ重一斤十五兩ㇾ矣、今除ㇾ蓋以ㇾ庫平法ㇾ馬稱之、重五十三兩七錢二分、銘云、容一斗以ㇾ今官倉斗ㇾ較ㇾ之得ㇾ一升八合ㇾ

本朝度量權衡攷　附錄卷中

本朝度量權衡攷 附錄卷下之上

狩谷望之著

權衡ハ隋書ニ、「古有二黍絫錘錙鐶鈞鋝鎰之名一、歷代差變其詳未レ聞」、ト云ヘリ、（貞按、隋書文亦出二晉書一「第十六」鎰作レ溢、歷代以下文句有レ異）

今按ズルニ

黍絫【漢書（律曆志）ニ、「權輕重者不レ失二黍絫一」トアリ、注ニ、「應劭曰、十黍爲レ絫、十絫爲レ銖」ト云ヒ、說文ニモ、「絫十黍之重也」、ト云ヘリ、黍トハ黍一粒ノ重サナリ、黍絫ノ名、先秦ノ書ニ見エザレバ、是ヲ以テ輕重ヲ云フハ、秦漢以後ノコトナルナルベシ】

錙錘 呂氏春秋（應言篇）ニ、「割國之錙錘矣、而因得大官」、淮南子（詮言訓）ニ、「割國之錙錘以事レ人、又（說山訓）無錙錘之禮」ナド見エタリ、高誘ガ詮言訓注ニハ、「六兩曰レ錙、倍レ錙曰レ錘」、ト云ヒ、說山訓注ニハ、「六銖曰レ錙、八銖曰レ錘」、ト云ヘリ、說文ハ說山訓注ト同ジ、又荀子（議兵篇）ニ、「得二一首一者、賜二贖錙金一」、又（富國篇）割國之錙銖以賂レ之、禮記（儒行篇）ニ、「雖レ分二國如二錙銖一」ナドトモアリ、是等ノ注ニハ皆「八兩爲レ錙」トアリ、廣韻ニハ「八銖爲レ錙」ト見エタリ、六兩八兩ト云ヒシハ誤ナルベシ】

鍰 【環ト同ジ、環ハ鍰ト通ズ、考工記冶氏ノ注ニ、一今東萊稱或以ニ大半兩一爲レ鈞、十鈞爲レ環、環
重六兩大半兩一、トアル即是ニテ、環ヲ借リテ鍰トシタルナリ、故ニ尙書正義（呂刑）ニ、此注ヲ
引キタルニハ、一十鈞爲レ鍰一トアリ、漢書（五行志又外戚傳）ニ、一宮門銅鍰一トアルヲ、注ニ一鍰、讀與
レ環同一、ト云ヘルモ、鍰環通ジ用ル字ナル故、鍰ヲ以テ環トシタルナリ、淸ノ浦鏜ガ十三經正
字ニ、冶氏ノ注ノ環ヲ鍰ノ譌ト云ヒシニ、戴震モコレニ從ヒタルハ環ハ鍰ノ假借ナルコトヲ知ラ
ザリシニヤ、阮元ガ周禮（校勘記）ニ宋ノ余仁仲ガ刻本ニハ、環字空缺シタリト云ヘリ、余氏モコ
ノ環字ヲ讀カネテ缺タルナラン、宋ノ岳珂ガ刻本、又足利學校ニ藏スル宋版巾箱本ニハ、環トア
ルコト今本ト同ジ、但經典釋文冶氏ノ條ニ環字ヲ擧ザレバ、陸德明ガ據リシ本ニハ鍰トアリシ
ニモアルベシ、戴震ガ考工記ノ解ニ、此鍰字鋝字ト形似タルニヨリテ互ニ誤ルコト多シ、冶氏
ノ注ニ、一十鈞爲レ鍰、鍰重六兩、兩大半、一ト云ヒシハ鋝ノ重サナルヲ誤リテ鍰ノ重サトシ、
說文鋝字ノ注ニ、一十一銖二十五分銖之十三一ト云ヒシハ、鍰ノ重サナルヲ誤リテ、鋝字ヲ注セ
シナリ、呂刑ニ一「其罰百鍰」一トアルハ、鋝ソ誤ニテ、弓人ニ一膠三鋝」一トアルハ、鋝ヲ誤レル
ナリ、又冶氏ニ一重三垸」一トアルハ、コノ鍰字ノ假借ナリ、故ニ注ニ一垸讀爲レ丸一ト云ヘリ、
段玉裁ガ周禮（漢讀考）ニ、一讀爲」一ハ一讀如」一ニ作ルベシトアリ

鈞 【冶氏ノ注ニ一今東萊稱、或以ニ大半兩一爲レ鈞一ト云ヘリ、大半兩ハ十六銖ナリ、又左傳（定八年）

ニ「顔高之弓六鈞、周禮（大司寇）ニ「入鈞金」、管子（小匡篇）ニ一ト罰入以鈞金、」呂氏春秋（仲秋紀）ニ、「正鈞石」ナドアリ、注ニ「皆三十斤」ト云ヘリ、漢書（律曆志）ニモ「三十斤爲レ鈞」トアレバ、漢ニテモ此稱ヲ用ヒシナリ、此鈞ハ冶氏ノ注ノ鈞トハ同ジカラズ】

鋝【冶氏ニ「重三鋝」トアル、注ニ「玄謂、許叔重說文解字云、鋝鍰也、今東萊稱、或以ニ大半兩一爲レ鈞、十鈞爲レ環、環重六兩、大半兩、鍰鋝似同矣」、ト云ヘルヲ、戴震ハ六兩大半兩ハ鋝ナリ、說文ニ「鍰鋝也トアルニヨリテ、鄭玄十鈞ヲ鍰トシタレドモ、鍰ト鋝ト篆體ノ似テ混ジタルニテ、恐ラクハ同ジカラジト云ヘリ、又說文ニ、「北方以ニ三十兩一爲レ鋝」、トアルヲ、「戴震爲ニ三鋝一」ニ作ルベシ、三ノ字ヲ脫シタルナリト云ヘリ、二十兩ヲ三鋝トスレバ鄭玄ガ「三鋝爲ニ一斤四兩一」ト云ヒシニ合ヘリ、一斤四兩ハ二十兩ニテ、四百八十銖ナレバ、一鋝ハ百六十銖ナリ、百六十銖ハ六兩大半兩ナル故、鄭玄ガ「十鈞爲レ鍰、鍰重六兩大半兩」ト云ヒシハ、鋝ノ重サヲ誤テ注シタルナリトハ云ヘルナリ、戴震又云ヘルハ、冶氏ノ鄭臬ガ注ニ一鋝讀爲レ刷」トイヘリ、故ニ率・選・饌・撰等ノ字ヲ假借ス、刷ト古音同ジケレバナリ、史記周本紀ニ共罰百率平準書ニ白選漢書蕭望之傳ニ金選、尙書大傳ニ罰二千饌、漢書ニハ撰ニ作ル、皆鋝ノ假借ナリ、今ノ尙書呂刑ニ「共罰百鍰」トアルハ、此鋝ノ誤ニテ、弓人ノ「膠三鋝」ハ鍰ノ誤ナリト云ヘリ、周禮（漢讀考）ニ此「讀爲」ヲモ「讀如」ニ作ルベシトアリ】

鎰【古溢ニ作ル、鎰ハ俗字ナリ、儀禮（喪服傳旣夕記・禮記・間傳喪大記）ニ一溢米、孟子（梁惠王篇）ニ萬溢、戰國策（秦策）ニ黃金萬溢（趙・韓・燕・衞等ノ策ニモアリ）、呂氏春秋（異寶篇）ニ金千鎰、穆天子傳ニ黃金四十鎰、史記（平準書）ニ「黃金以レ鎰爲レ名、」漢書（食貨志）ニモ、「黃金以レ溢爲レ名」トアリ、注皆二十兩ヲ溢トスト云ヘリ、國語（晉語）ニ黃金四十鎰トアル、注ニハ「二十四兩爲レ鎰」ト云ヘリ、文選永懷詩ノ李善注ニ、國語ノ賈逵注ヲ引キタルニモ、一鎰二十四兩トアリ、韋昭ハ是ニヨリシナルベシ、吳都賦ニ、「金鎰磊砢」トアル、劉良ガ注ニモ「二十四兩爲レ鎰」トアリ】

秦權ノコト、顏氏家訓【書證篇】ニ見エ、其圖銘文考古圖薛氏阮氏鐘鼎款識等ニ載セタレドモ【卷末ニ摹出ス】其重サハ知リ難シ

漢ニテハ、銖・兩・斤・鈞・石ト稱リタリ、漢書（律曆志）ニ「權者銖・兩・斤・鈞・石也、所三以稱レ物平レ施知二輕重一也、本起二於黃鍾之重一、一龠容二千二百黍一、重十二銖、兩レ之爲レ兩、二十四銖爲レ兩、十六兩爲レ斤、三十斤爲レ鈞、四鈞爲レ石」ト云ヘリ、【石ハ尙書（五子之歌）ニ、「關石和鈞、」國語（周語）ニ、「重不レ過レ石」ト云ヒ、鈞ハ周禮・左傳・管子・呂氏春秋等ニ見ユ、（上ニ引リ）兩ハ史記（平準書）ニ、「秦並二天下一云々、銅錢識曰、半兩重如二其文一」ト云ヘリ、是ヨリ先ニ兩ト云フコト見エザレバ、兩ハ秦ノ制ナルカ、斤ト銖トハ漢書食貨志ニ、「太公爲レ周立二九府圜法一、黃金方寸而重一斤、錢圜函方輕重以レ銖」トアリ、戰國策（東周秦齊楚等策）ニモ、斤ヲ以テ黃金ヲ稱リタレバ、斤銖ヲ以テ稱ルコトハ、周初ヨリアリテ、戰國ノ時モ

同ジカリシナルベシ、然ルニ食貨志ニマタ「漢興以爲ニ秦錢重難ニ用、更令ニ民鑄ニ莢錢黄金一斤ニ」ト云ヘルヲ顏師古ガ注ニ、「復ニ周之制ニ更以レ斤名レ金一」トアレバ、秦始皇・漢高祖ノ時ナドハ、斤ヲ以テハ稱ラザリシニヤ、是等ヲ合セ考レバ、漢ニテ銖・兩・斤・鈞・石ト五權ヲ定メシハ、周秦ノ制ヲ受タルモノナルベシ、荻生氏ノ量考ニ度量ヲ黄鍾管ヨリ起シヽハ劉歆ガ牽强ナリト云ヒ〔今文變改ニ引リ〕「權衡亦當爾、何關ニ黄鍾ニ」ト云ヘリ、錢銖ナドノ古稱ハ本ヨリノコトニテ、銖斤鈞石ナドモ黄鍾ヨリ出タルニハアラザルベケレドモ、兩ノ名ハ漢書ニ龠ヲ兩合セダルヨリ、兩ト云フトアルヨリ外ニ說無ケレバ、黍ヨリ起ラズトモ定メ難カルベク、兩ノ名周ヨリアルヲ見レバ、劉歆ガ牽强トモ云ヒ難カルベシ】權ノ起リヲ云フ說據リ難ケレドモ、姑ク此說ニ依リテ黄鍾管ヲ作リ、ソレニ千二百ヲ容ル黍ヲ擇ビテ、稱リタリトモ黍ニ虛實モアルベケレバ、稱ヲ起スベカラザルコト黍ニテ度ヲ起シガタキニ同ジ、況說苑【辨物篇】ニハ「十六黍爲ニ一豆ニ、六豆爲ニ一銖ニ、」ト云ヒ是ニテハ一銖ハ九十六黍ニテ漢書ニ百黍ヲ一銖トセシニ比レバ、四黍少シ、續漢書注ニ說苑ヲ引タルニハ、「十粟重一圭、十圭重一銖」、トアリ、是ニテハ一銖ハ百粟ナリ、今本ノ說苑黍トアルハ、後人ノ改竄ナルベキコト上卷ニ辨ゼリ】淮南子【天文訓】ニハ「其以爲重【今本量ニ作ルハ譌ナリ、今說文ニ依リテ改ム】十二粟而當ニ一分ニ、十二分而當ニ一銖ニ」ト云ヒテ【是ニテハ百四十四粟ナリ、說文モ此說ニ從ヒタリ】漢人ノ說モ一定ナラザレバ、今是等ニ據リテハ稱ヲ起スコトヲ得ズ【余嘗テ漢書ニ依リ、漢錢尺ニテ黄鐘管ヲ作リ、ソレニ千二百

ヲ容ル黍ヲ擇ビテ稱リシニ、其重一匁七分四釐ナリキ、是ニテ兩ヲ求レバ三匁四分八釐、斤ハ五十五匁六分八釐ナリ、此黍ヲ以テ說苑ノ說ニヨリテ一斤ヲ求レバ、五十三匁四分五釐二毫八絲ナリ、朱載堉ガ稱リシ黍ハ千二百黍ニテ、三匁程瑤田ガ稱リシハ大者二匁六分八釐弱、中者二匁四分五釐强ト云ヒテ、各同ジカラズ、又淮南子ニ依リテ百四十四粟ヲ稱レバ、八九釐ノ間ナリ、是ヲ平均シテ兩ヲ求レバ、一匁〇三釐九毫有奇斤ハ三十二匁六分二釐餘、續漢書ニ引タル說苑ニヨレバ、二十六匁九分七釐餘ナリ、程瑤田ガ稱リシハ「十二銖千七百二十八粟、重一匁八分八釐强」トイヘリ】

儀禮喪服傳ノ一溢米ノ注ニ、「二十兩曰溢、爲米一升二十四分升之一」ト云ヘリ【禮記喪大記注同ジ、一升二十四分升之一トハ、一升ノ外ニ、一升ヲ二十四ニ分ケタル一分ヲ增シタルナリ、五經算術ニハ、「一斛米重百二十斤」ト云ヘリ、一斤ハ三百八十四銖ナレバ、一斛米ノ重サノ百二十斤ハ、四萬六千〇八十銖ニテ、一升ノ重サハ四百六十〇八絫ナリ、是ニテ一升二十四分升之一ノ重サヲ計レバ、四百八十銖ナリ、二十四銖ヲ一兩トスル故、四百八十銖ニテハ二十兩ナリ、此說卽鄭注ニ依リタルナリ】是ニ依レバ一升二十四分升之一ノ米ヲ稱リテ稱ヲ起スベシ、漢ノ一升二十四分升之一ハ【一升〇四勺一撮六六不盡ナリ】今ノ一合一勺四撮七六弱ニテ、其米ノ重サ四十五匁九分有奇【今皇國ノ米ヲ稱ルニ、大凡一升ノ重サ四百匁ナリ、今是ニ準ジテ計リシナリ、按ズルニ夢溪筆談ニ「今人以粳米一斛之重爲一石、凡石以九十二斤半爲法」ト云ヘリ、其計リシハ大量大稱ナリ、宋ノ一斛ハ今ノ三

斗八升三合二勺强、九十二斤半ハ十四貫八百匁ナレバ、今ノ一升ニテハ其重サ三百八十六匁二分强、今ノ一合一勺四撮七六弱ヲ計レバ、四十四匁三分二毫强ナリ、又尙書後案ニハ、今市中所レ用量、按レ之米一升、僅得ニ一斤零三兩ニ」トアリ、淸ノ一升ハ今ノ五合八勺三撮有奇、一斤〇三兩ハ百九十匁ナレバ、今ノ一升ハ三百二十五匁七分餘、今ノ一合一勺四撮七六弱ハ三十七匁三分八毫强ナリ】是一溢ノ重サニテ一兩、【二十分溢之一】ハ二匁二分九毫五毫强【夢溪ニヨレバ二匁二分一毫六毫强、後案ニヨレバ一匁八分七毫弱】一斤【十六兩】ハ三十六匁七分二毫三毫三絲三忽不盡、【夢溪ニヨレバ三十五匁四分五毫八毫三絲有奇、後案ニヨレバ二十九匁九分有奇ナリ、又五經算術ニヨリテ計レバ、漢ノ一斛、今ノ一斗一升〇一七弱ヲ實トシ、米一升ノ重サヲ乘ジ、百二十斤ニテ除スレバ、斤ノ重サヲ得ルナリ】是ニテ五銖ヲ求レバ四分七毫八毫强【夢溪ニヨレバ四分六毫强、後案ニヨレバ三分九毫弱】然ルニ今漢ノ五銖錢ヲ稱レバ、最輕キ者モ七分以上ニテ【是ニテ一斤ヲ求レバ五十匁以上ナリ】其重サ合ハザレバ、鄭玄ガ一溢ノ重サヲ米一升二十四分升之一ト云ヒシモ據リ難シ、漢書食貨志ニ、「黃金方寸而重一斤」ト云ヘルハ據ルベキニ似タリ、故ニ今精絕ノ赤金ヲ稱ルニ、曲尺方寸ノ重サ百三十四匁五分ナリト云ヘリ、【荻生觀ノ衡考ニ「享保十四年十一月、該部使ニ下局官一鑄上金、今尺方寸得ニ時稱十三兩ニ」トアルハ其金ノ未妙ナラザリシナルベシ】是ヲ以テ漢ノ方寸【曲尺ニテハ方七分六毫】ノ重サヲ計レバ、五十九匁〇四毫二毫二絲七忽强【七分六毫ヲ再自乘シテ曲尺積四百三十八分九百七十六毫ヲ得、曲尺

方一分ノ金ノ重サ一分三釐四豪五絲ヲ乘ズレバ此數ヲ得】又淸會典ニハ「赤金方寸重十六兩八錢ト云ヘリ、是ニ依リテ漢ノ方寸ノ重サヲ計レバ、六十一匁九分一釐九豪九絲二忽强ナリ、【淸今尺ハ曲尺一尺〇六分ナレバ、漢ノ一寸ハ淸尺七分六釐ヲ一〇六ニテ除スレバ、漢ノ一寸ハ淸尺七分一釐六豪九絲八忽强ナリ、是ヲ再自乘シテ淸尺積三百六十八分五百七十〇釐九百六十八豪五百二十〇絲三百九十二忽ヲ得、十六兩八錢ヲ乘ズレバ此數ヲ得】古ノ金ハ其實如何ナリシカ詳ニ知ルベカラザレバ、是モ的證トハナシ難シ、又王莽ガ銅權ノ銘二器ヲ積古齋鐘鼎款識ニ載セタレドモ、【銘文卷末ニ載ス】其輕重知ルベカラズ、タヾ西淸古鑑ニ、王莽ガ嘉量ヲ載セテ、「重三百六十三兩」ト云ヘリ、【三百六十三兩ハ三貫六百三十匁ナリ、嘉量ノ圖及銘文共ニ中卷ニアリ】コノ嘉量ヲ漢書【律曆志】ニ「重二鈞」トアルニ依リテ、【全文中卷ニ引リ、漢書ニ「又三十斤爲鈞」トアレバ、二鈞ハ六十斤ナリ】コレヲ六十分スレバ、一斤ノ重ナリ、一斤ヲ十六分スレバ、一兩ノ重サ、一兩ヲ二十四分スレバ、一銖ノ重サナリ、此嘉量今淸マデ傳ハリタルニ、刓缺ノコトモ聞エザレバ、是ニ從ヒテ漢稱ヲ起スベシ【淸ノ陳經ガ求古精舍金石圖ニ「以庫平較周權、則庫平之六兩五分、卽得周權一觔矣」トアリ、庫平トハ官稱ト云フガ如シ、觔ハ斤ノ俗字ナリ、其重サ予ガ起シヽト全ク同ジ、タヾ其據リドコロヲ云ハザルハ憾ムベシ】

銖　今一分五釐七豪五絲五忽强

兩　今三匁七分八氂一豪二絲五忽

斤　今六十〇匁五分

鈞　今一貫八百十五匁

石　今七貫二百六十匁

コノ外、漢器ノ銘ニ其重ヲ記シタル者、又古錢ノ重ヲ稱リ試ルニ、皆同ジカラザレバ其等ニヨリテハ稱ヲ起スコトヲ得ズ、又宋明ノ人ノ定メシモ皇國先輩ノ說々モ、或ハ明證無ク、或ハ其說誤リタレバ、皆據トナシ難シ

或人難ジテ曰、銘文ニ其重サヲ記シヽ銅器、又史ニ重サヲ載セタル嘉量錢貨等、其重サヲ稱ルニ皆同ジカラヌハ、總テ徵トスベカラザルニ、他ノ銅器。錢貨ニハ從ハズシテ、獨嘉量ニノミ據リテ、漢稱ヲ起シヽハ如何、答、欵識ニ重サヲ載セタル銅器ハ、鼎壺鋗鍾釜甑鐙錠燭槃熏爐ノ類ニテ、重サヲ主トセシモノニ非レバ、其記セル重サ大凡ニ云ヒシナラン、故ニ器每ニ其重サ同ジカラザルナルベシ、錢ハ年ヲ經テ數多ク鑄ルモノナレバ、始ニ鑄シハ法制ノ如クナレドモ後ニ鑄タルハ輕小ナルコト度考ニ云ヘリ、且錢ハ微物ナレバ、深ク心ヲ用ヒズシテ鑄タル時、既ニ少シノ輕重モアルベク、又鑄タリシ時ハ全ク同ジ重サナリトモ、土ニ埋レテ近ゴロ世ニ顯レシ者ト、人間ニ通用シテ刓濁スル者トハ、其輕重懸隔ナルコト云フヲ俟タズ、王莽ガ嘉量ハ氣物ノ數ヲ備ヘテ、萬一千五百

二十ヲ合スナド云ヒテ、重二鈞ニ作リタレバ【一鈞ハ萬一千五百二十銖ナリ、此事漢書律暦志ニ出ヅ、全文中卷ニ引リ】其重サ必精ク稱リテゾ造リツラン、然ラバ是ニヨリテ稱ヲ定ムベケレバ、今コレニ從ヒテ漢稱ヲ起シヽナリ、抑北宋ノ時古器多ク世ニ出デ、考古圖・博古圖】嘯堂集古錄・鐘鼎款識・集古錄・金石錄等ノ諸書アリト云ヘドモ、此嘉量ヲ載セズ、和峴・丁度・阮逸・胡瑗・鄧保信・蔡元定ノ輩、又元明ノ人々モ絕テ見ザリシニ、清ニ至リテ漢ノ度量權衡皆徵ヲ此ニ取ルコトヲ得ルハ、尊ムベク喜ブベキニ非ズヤ

或人又曰、宋以來此器ノ事云ヒ及ボセルモノ無カリシニ、清ニ至リテ驟ニ顯レタルコト疑ハシ、且清人ノ度量權衡ヲ云フモノ、此器ニヨリテ證スルコト無キヲ見レバ、此嘉量後人ノ僞作ニハ非ルニヤ、答、物ノ隱顯ハ常ナラザレバ、古ニ聞エズシテ、後世出タルモ多ケレバ、ソレニ依リテハ疑フベキニ非ズ、思フニ此器、宋ヨリ以前戰爭ノ際、早ク案外ヘ奪行キタルヲ【荀勗ガ晉前尺ヲ作リシ時、證ヲ此器ニ取リシコト隋書ニ出ヅ、又此器晉ノ武庫中ニアリシコト、劉徽ガ九章算術ノ注ニ云ヘリ、其後諸書ニ見エザレバ、晉ノ江東ニ遷リシ時ノ亂ナドニヤ、北方ニ奪行キタリケン、按ズルニ漢書律暦志注ニ、鄭氏曰、云々、今尙方有二王莽時銅斛一ト云ヘリ、鄭氏何レノ時ノ人ナルカ詳ナラズ】韃靼ニ傳ヘ、清一統ノ後北京ニ入リシニモアルベシ、清ノ學者ノ是ヲ證セザリシハ疑ハシキニ似タレドモ、祕府ニ藏メタル器ハ容易ク臣下ノ見ルコト能ハザルベク、又此器ノ圖、西淸古鑑ニ載セタ

レドモ、其書乾隆十四年ニ就リタレバ、ソレヨリ前ナル閻若璩・沈彤ガ輩ハ、今世此器ノ傳ハリタルヲ知ラザリシナルベシ、其製度古ニ合ヘル上ニ、隋志ニ載セタル後魏ノ景明中ニ、王顯達ガ獻リシ王莽ノ銅權ノ銘ハ、此量ノ銘ト同ジケレドモ【隋志ノ全文下ニ引リ】戊辰ノ二字重リタルヲ脱シタル故ニ、八十一字ト云ヒシニ合ハザルニ、此量ノ銘ニハ戊辰ノ二字重リテ正ニ八十一字ト云フニ合ヘリ、【錢大昕ガ二十二史考異ニ、隋志ノ銅權ヲ「按黄帝初祖以下、凡七十九字、并律權石重四均六字、計レ之則爲二八十五字一矣」ト云ヘルハ、隋志ノ權銘ヲ算ヘシニ七十九字ニテ、隋志ニ「銘八十一字」トアルニ合ハズ、又上ノ律權石重四鈞ノ六字ヲ合セテ計フレバ、又八十五字ニテ是ニテモ隋志ノ言ニ合ハザルヲ疑ヒシナリ、錢氏コノ嘉量ヲ以テ證シタランニハ、戊辰ノ二字ノ脱タルヲ知ルベカリシニ、此ニ心ヅカザリシナルベシ、書ヲ讀ン人ハ古器ニ心ヲ留メテ考フベシ、必益アルモノナリ】權ノ銘ニ、「德市于辛」トアル辛ハ新ノ譌ナルヲ、量ノ銘ニハ譌ラズ、【北史ノ元匡ガ傳ニ、彼權銘ヲ引キタルニハ譌ラズシテ新トアリ】又冪ヲ冥ニ作リシモ、後人ノ思ヒヨルベキニアラサレバ【西清古鑑ニ冥ヲ皆寛ト釋シタルハ、冥ヲ借リテ冪トシタルコトヲ知ラデ誤リタルナリ】古物ナルコト、疑無カルベシ

或人又難ジテ曰、隋唐ノ小度・小量・小稱ハ漢ノ制ノ承ケタルモノナルニ、年ヲ經ルコト久シケレバ譌替シテ、尺ハ漢尺ヨリハ六分長ク、斛ハ漢斛ヨリ二升餘多ケレバ、稱モ漢稱ヨリハ重カルベキニ、

漢ノ一斤ヲ六十匁〇五分ト定ムレバ、唐ノ一斤却テ漢ノ一斤ヨリハ七匁餘輕キハ如何、答、尺度ノ年ヲ經テ譌長スルコトハ古ヨリシテ然リ、量ハ尺度ニテ起セバ【所謂千六百二十寸ト云フ、是ナリ】是モ年ヲ經テハ其容ルコト多クナルベキ理ナリ、稱ハ尺度ニテ定ムル者ニアラザレバ、譌晉ノ樣同ジカラザリシト見エタリ、【唐大尺ハ皇國ニテモ、西土ニテモ、今ニ其制ヲ承用フルニ、此ニテモ彼ニテモ譌長シ、量モ共ニ後世ハ古ヲ失ヒテ大ニナリシニ、稱ノミ皇國モ西土モ、皆唐ノ時ト同ジキモ、度量ニ關ラズシテ傳ハリシ故ナルベシ】今傳ハレル漢ノ五銖錢ヲ稱ルニ七八分ノ者多ク、【漢ヲ一斤ヲ六十匁〇五分トスレバ、五銖ハ七分八釐七豪七絲七忽不盡ナリ】隋ノ五銖錢ヲ稱レバ六分餘ナル者多シ【隋唐ノ小稱ハ一斤五十三匁三分三釐三豪三絲三忽不盡ナレバ、五銖ノ重サハ六分九釐四豪四絲四忽不盡ナレドモ、隋書(食貨志)ニヨルニ、隋ノ五銖錢ハ實ハ四銖七釐五黍有奇ナレバ、今ノ六分六釐弱ナリ】コレニ依レバ隋唐ノ稱ハ漢ノ稱ヨリ輕カリシヲ證スベシ【荻生氏以下ノ定メタル漢稱、皆隋唐ノ小稱ヨリ輕シ、漢ノ五銖ノ重サト、隋ノ五銖錢ノ重サトヲ挍ブレバ、諸說ノ非ナルコト辨ゼズシテ明ナルベシ】

或人又難ジテ曰、漢稱諸家ノ說、李時珍十六匁ヲ一斤トスル者最輕シ、然レドモ傷寒論ノ藥劑多クハ煎ジ難シ、【タトヘバ桂枝加ニ大黃湯ノ劑藥二十兩、水七升ニテ煮テ、三升ヲ取リ分テ三服ストアリ、十六匁ヲ一斤トスレバ、二十兩ハ二十匁ナリ、水七升ハ今ノ七合八勺九撮弱、三升ハ今ノ三合三勺

八撮强、假ニコレヲ三服ニ分テバ一服ノ藥劑六匁六分六毛不盡、水二合六勺三撮弱ヲ以テ煎ジ、一合一勺二撮餘ヲ取ルベケレバ、藥多ク水少クシテ煎ジ難シ】況六十匁有奇ヲ一斤トセバ絕テ煎ズルコト能ハズ【六十匁〇五分ヲ一斤トスレバ煎方二十兩ハ七十五匁六分二毛五毫ナリ、モシ三服ニ分テバ、一服ノ藥二十五匁二分有奇ナレバ、前ニ云ヒシ水ノ量ニテハイヽヨヽ煎ジ難シ、三因方ニ、按ニ藥書一、漢方湯液大劑三十餘兩、小劑十有餘兩、用水六升或七升、多煎取ニ二升三升一、並分ニ三服一、若以ニ古龠量一、水七升煎ニ今之三十兩一、未ニ淹得レ過、況散末藥、只服ニ方寸一、刀圭七丸子如ニ梧桐子大一、極至ニ三十粒一、湯液豈得ニ如レ此懸絕一トヒシモ煎湯ノ藥劑ノ多キヲ疑ヒタルナリ、古龠量トハ宋ノ小量小稱ヲ云ヘルナラン、宋小量ノ七升ハ今ノ八合九勺四撮强、宋小稱ノ三十兩ハ百匁ナリ】今一斤ヲ六十匁〇五分ト定メタラバ古藥方ノ煎ジ難キヲ如何、答、此事度量權衡ヲ考ル大疑關ニシテ、度量權衡ノ本末ヲバ略考得ルモ此ニ至リテ、皆通ズルコト能ハズ、【今ノ世ニテ古ノ度量權衡ヲ知ラデ在ルベカラザルハコノ古醫方ノ一事ノミナリ】是ハ常用ノ稱ヲ以テ藥劑ヲ稱ル故ニ、【此ニ常用稱ト云フハ、漢魏ノ時常ニ用フル權衡ヲ云ヘルニテ、唐宋大稱ノ事ニハアラズ】煎ズル事能ハザルナリ、醫家ノ稱ハ常用ノ稱トハ同ジカラズ、常ノ稱ノ一斤ヲ古醫方ノ十斤トス、其故ハ漢書ニハ「一龠容ニ千二百黍一重十二銖」トアレバ、一銖ハ百黍ノ重サナルニ、名醫別錄ニハ「古稱惟有ニ銖兩一無ニ分名一」今則以ニ十黍一爲ニ一銖一、六銖爲ニ一分一、四分爲ニ一兩一、十六兩爲ニ一斤一、雖レ有ニ子穀秬黍之制一、從來均レ之已久、正爾依レ此用レ之」

ト云ヒ、【此書今逸シテ傳本ナシ、證類本草ニ載セタルニ據ル】千金方ニ其文ヲ載セタルニモ、「十黍爲レ銖」トアリテ、其末ニ「此則神農之稱也」ト云ヘリ、【朱載堉コノ十黍ヲ「當レ作ニ百黍ニ」ト云ヘリ、張介賓モ此說ヲ承用ヒタレドモ、醫心方ニ引キタル范汪方ニモ、「六十黍粟爲ニ一分ニ」トアリ、（黍粟トハ、黍ノイマダ舂蒸ザルヲ云ヘルニテ、蒸穀ノ粟ニハアラズ）分ハ六銖ナレバ、是モ十黍ヲ一銖トセシナリ、然レバ朱氏ガ百黍ニ作ルベシト云ヒシハ、誤リテ藥稱ト常用稱トヲ混ジタルナリ、淸ノ王丙ガ攷正古方權量說ハ、其說誤多クシテ據ルニ足ラザル書ナレドモ、張介賓ガ朱載堉ノ誤ヲ承ケテ、「當レ作ニ百黍ニ」ト云ヒシヲ非ナリトセシハ當レリ、李時珍ガ十六匁ヲ一斤トスト云ヒシモ、百六十匁ノ十分ノ一ナリ、百六十匁ハ明ノ一斤ニテ、其本ハ隋唐大稱ノ一斤ナルヲ、卽古ノ一斤ト思ヒシハ誤ナレドモ、其十分ノ一ヲ一斤トセシハ、十黍ノ說ヲ用ヒシナリ】是ニヨレバ十黍ヲ銖トスルハ、醫家傳來ノ稱法ニシテ、百黍ヲ銖トスル常用ノ稱トハ同ジカラズ【十黍ヲ銖トスル時ハ、十銖ハ漢ノ常用ノ一銖ニシテ、十兩ハ漢ノ常用ノ一兩、十斤ハ漢ノ常用ノ一斤ナリ、然レバ古醫方ノ一銖ハ、今ノ一㲉五毫七絲五忽餘、一兩ハ今ノ三分七㲉八毫一絲二忽餘、一斤ハ今ノ六匁〇五㲉ナリト知ルベシ】故ニ陶弘景ハ漢書ニ子穀秬黍ノ制アレドモ、醫家ニハソレニハヨラズシテ、十黍ヲ銖トスルコトヲ云ヒ、孫思邈ハ「神農之稱也」ト云ヒテ、百黍ノ銖ニ非ルヲ示シタリ、【此稱法何レノ時始リシカ其實ハ知ラレザレドモ、古來醫家ニコレヲ用ヒテ、常用ノ稱ト同ジカラザル故ニ、俗ニ神農ノ稱ナリト云ヒナラハシ、モノナ

ラン】今十黍ヲ銖トシテ、傷寒論ノ「桂枝加二大黄湯一」ノ方ヲ計レバ、藥劑二十兩ハ今ノ七匁五分六釐二毫五絲ナリ、是ヲ分テ三服トスレバ、一服ノ藥二匁五分二釐有奇ニテ、【水ト煎法ハ前ニ云ヘルト同ジ】一日ノ服スル所三服ハ、三合三勺八撮强ナレバ、今人ノ藥ノ煎法ト甚異ナルコト無シ、【コノ他ハ此方ヨリ皆藥少ク、水多ケレバ、煎ズベカラザル方無シ、余別ニ傷寒論權量表アリ、故ニ是ニハ具ニ載セズ、モシ百黍ノ銖ヲ以テ計レバ、七十五匁六分二釐五毫ナレバ、煎ジ難キノミナラズ、イカデ是ホドノ藥ヲ一日ニ飲得ベキ、三因方ニ丸散ト煎湯ト服スル分量ノ甚異ナルヲ疑ヒシハ、卽コレヲ云ヘルナリ】サレバ古昔醫家ニ云フ所ノ稱ハ、常用稱ノ十分ノ一ト知ルベシ、【小島寶素君(尙質)曰、從來權量ヲ考ヘシ人々、醫家ニテ十黍ヲ銖トスルコトヲ知ラズシテ、常用稱ヲ以テ古方ヲ論ズル故、皆藥劑多ク水少クシテ煎ズルコト能ハザリシナリ、十黍ヲ一銖トスレバ、古方ノ分量ニテ今皆煎ズベシ、又古藥方ハ其合劑ノ時世ヲ正シ、稱量ノ沿革ヲ考ヘザレバ、其分量ヲ誤ルコト多シ、刀圭ノ家必コヽニ心ヲ用フベキ事ナリト云ヘリ、小島君此說ヲ演ベテ、漢魏六朝隋唐宋元諸方ノ稱量ヲ歷代ノ沿革ニ考ヘ、經方權量考ヲ選集セラル、其書未全ク就ラズト云ヘドモ、日アラズシテ稿ヲ脫スベシ、是ヲ見テ諸家ノ論ゼシ藥方權量ノ說ノ誤リタルヲ覺ルベシ】

魏晉宋齊權衡ノ制聞エズ【宋書文帝紀ニ、「元嘉七年冬十一月戊午、立二錢署一鑄二四銖錢一」トアリ、漢ノ四銖ハ今ノ六分三釐〇二絲有奇ナルニ、此錢ノ傳ハリタルヲ稱レバ、其重サ五分三釐、是ヨリ一斤

ヲ求レバ、五十匁〇三分三氂ナリ、漢稱ニ比レバ頗輕シ、然レドモコノ錢今世傳ハルモノ多カラズシテ、數錢ヲ按スルコト能ハザレバ、此孤證ニヨリテ、宋稱ヲ定ムルコトヲ得ズ、梁陳ノ時ノ稱是ヨリ重キヲ以テ見レバ、今傳ハル四銖錢ハ初鑄錢ヨリ輕薄ニ作リシ者カ、又ハ世ニ傳ハルコト久シウシテ刓泐セシモノナルベシ】隋書ニ「梁陳依二古稱一」ト云ヒタレバ、魏ヨリ陳ニ至ルマデ、古ノマヽナリシト見エタリ、【按ズルニ、隋書食貨志ニ、「梁武帝乃鑄レ錢、肉好周郭、文曰五銖、重如二其文一」トアリ、所謂内郭五銖ナリ、漢ノ五銖ヲ計ルニ、今ノ七分八氂七豪七絲五忽有奇ナリ、然ルニ顧烜ガ錢譜ニ、此錢ヲ「重四銖二絲二黍、毎百枚重一斤二兩」ト云ヘリ、是ニ依レバ銘文ハ五銖ナレドモ、其實ハ五銖ニ及バザリシナリ、漢ノ四銖三絫二黍ハ、今ノ六分八氂〇六絲二忽弱ナリ、今此錢ヲ稱ルニ、重キハ七分五氂、輕キハ五六分ナレバ、漢稱ト甚異ナルコト無シ、又同ジ食貨志ニ「陳宣帝大建十一年、鑄二太貨六銖一」ト云ヘリ、漢ノ六銖ハ今ノ九分四氂五豪三絲ナルニ、今此錢ヲ稱レバ重キ者八分五氂ナリ、假ニ八分五氂ヲ六銖トシテ一斤ヲ求レバ、五十四匁四分ニテ、漢ノ一斤ヨリハ五匁六分少シ、然ラバ今世ニ傳ハル錢ノ初鑄錢ニアラザルカ、又ハ陳ノ頃ハ漢ノ稱ヨリモ輕クナリテ、唐ニ至リテハ遂ニ五十三匁三分三氂三豪三絲三忽不盡ニナリシニモアルベシ、然ラバ陳ノ稱ハ譌リテ漢ノ稱ヨリ輕クハナリタレドモ、北魏・北齊・後周ナドノ如ク、別ニ作リシ稱ニアラザレバ、隋書ニ「依二古稱一」トハ云ヘルナラン、制ヲダニ改メズバ譌リタルトテモ、史ニハ「依二古稱一」ト云フベキコトナリ、只度ノ年ヲ

經テ次第ニ譌リタルヲ見レバ、稱モ少シヅツノ異ハ必アリシナラン、然レドモ證トスルモノナケレバ、子細ニハ考ヘ難シ】

左傳正義【定八年】ニ、魏齊斗稱【北魏。北齊ナリ】「於ニ古ニ二ニ而爲レ一」トアレバ、後魏ノ初ニハ、古稱ニ倍シタル稱ヲ用ヒシナルベシ【隋志ニハ此事ヲ載セザレドモ、北史ノ張普惠ガ傳ニ、北魏ノ高祖重稱ヲ改メシ事見エタレバ、其重サヲ知ルベカラズトイヘドモ、後魏ノ始重稱ヲ用ヒシコトハ疑無シ、北齊ノ稱ヲ古ニ倍ストシタルハ誤ナルベキコト下ニ辨ズ】古稱ト云ヒシハ、漢稱ヲ指テ云ヒタルカ、唐小稱ヲ云ヒタルカ、又ハ陳隋ノ稱ヲ云タルカ詳ナラズ、【漢稱ヲ古稱トスルハ論無シ、唐人ハ唐小稱ヲ卽周漢ノ稱ナリトシテ古稱ト云ヘリ、唐小稱ヲ漢稱ニ比レバ、譌ハシタレドモ、北朝ノ稱ノ如ク別ニ作リシモノニアラザル故ニ、唐人コレヲ古稱ト云ヒシナルベシ、陳稱ノコトハ上ニ云ヘリ】漢稱ヲ倍スレバ、

斤　今百二十一匁

兩　今七匁五分六氂二毫五絲

銖　今三分一氂五毫一絲有奇

唐ノ小稱ヲ倍スレバ

斤　今百〇六匁六分六氂六毫六絲六忽不盡

兩　今六匁六分六𨫞六毫六絲六忽不盡

銖今二分七𨫞七毫七絲七忽不盡

後魏ノ孝文帝ノ時、此重稱ヲ停メタリ、【北史張普惠ガ傳ニ、「高祖廢ニ大斗一、去ニ長尺一改ニ重稱一以愛レ民薄レ賦」ト云ヘリ、高祖ハ即孝文帝ナリ、後魏書ニモ、北史ニモ、本紀ニハ大和十九年ニ「改ニ長尺・大斗一」トアリテ稱ノコトハ見エズ、隋志權衡ノ條ニモ、「後魏孝文時一依ニ漢志一作ニ斗尺一」トノミアリテ、稱ヲ改メシコトハ云ハザレドモ、是ヲ權衡ノ條ニ載セタルニテ稱ヲモ改メシコト知ルベク、且張普惠ガ傳ニ改重稱トアルニテ其事明ラケシ、斗尺ヲ改メシハ大和十九年ナレバ（上卷ニ詳ニス）稱ヲ改メタルモ、必其時ナルベシ】其改メシ稱ハ漢稱ト同ジカリシナラン、其故ハ宣武帝ノ景明中ニ【大和二十三年、孝文帝崩ジテ太子位ニ卽ク、是宣武帝ナリ、翌年景明ト改元ス】王莽ガ銅權ヲ獻リタルヲ、公孫崇ガ漢志ニ依リテ作レル稱ニテ、稱リタルニ符契ヲ合セタルガ如クナリシト云ヒ【隋志ニ「後魏景明中幷州人王顯達、獻ニ古銅權一枚一、上銘八十一字、其銘云、律權石重四鈞、又云、黄帝初祖德帀ニ于虞一、虞帝始祖德帀ニ于辛一、歲在ニ大梁一、龍集戊辰、直定ニ天命一、有レ人據ニ土德一、受ニ正號一、即レ眞、改レ正建レ丑、長壽隆崇同ニ律度量衡一、稽ニ當前人一、龍在ニ己巳一、歲次ニ實沈一、初班ニ天下一、萬國永遵、子々孫々、享傳億年、此亦王莽所レ制也、其時大樂令公孫崇依ニ漢志一先修ニ稱尺一、及レ見ニ此權一、以ニ新稱一稱レ之、重一百二十斤、新稱與レ權、合如ニ符契一、於レ是付レ崇調レ樂」ト云ヘリ、北史ノ元匡ガ傳ニ權銘ヲ引キタルト、西清古鑑ニ載セタル王

莽ノ銅斛ノ銘トニ依ルニ、「德市于辛」トアル辛字ハ新ノ譌ナリ、又斛銘ニヨルニ、戊辰ノ下、直定ノ上ニ、又「戊辰」ノ二字アルベシ、モシ此二字無ケレバ八十一字ト云ヒシニ合ハズ、又「有人」ヲ斛銘ニハ「有民」トアリ、然ラバ權銘ニモ「有民」ト有リツルヲ、隋書ヲ作リシ時太宗ノ名ヲ避ケテ改メシナルベシ、按ズルニ「公孫崇依漢志先修稱尺」トハ大和ノ稱ヲ云ヘルナルベシ、大和ノ稱ヲ公孫崇ガ作リシコト北史ニモ、北魏書ニモ見エザレドモ、景明ヨリ先ニハ大和ノ時ヲ置テハ外ニ稱尺ヲ改メシコト無ケレバナリ、但景明ノ後、正始ノ時、公孫崇ガ造リシ尺ハ黍十二ヲ一寸トセシコト、北史元匡ガ傳ニ見エ、永平ノ時ハ公孫崇縱黍ノ說ヲ立シコト北魏書律曆志ニ見エテ、共ニ古ニ背キシニ、稱ノミ王莽ガ權ト符契ヲ合セタルガ如クナリシハイブカシキコトナリ、公孫崇ト云ヒシハモシ誤ニハアラザルカ】孝莊帝ノ永安二年ニ【景明ノ後二十餘年ナリ】鑄タル五銖錢ノ【後魏書ノ食貨志ニ、「孝莊永安二年秋、詔改鑄、文曰永安五銖」ト云ヘリ】今世ニ傳ハレルヲ稱ルニ、其重サ七分餘、八分ニ及バズシテ漢ノ五銖錢ト略同ジケレバ、此ゴロノ稱、漢ト同ジカリシヲ證スベシ、然レドモ大和ヲ時改メタル尺ヲ民間ニテ用ヒザリシヲ見レバ、此稱モ普ク世ニ行ハレザリシニモアルベシ

別志ニ「齊以古稱一斤八兩爲一斤」ト云ヘリ、是北齊ノ稱ナリ、漢ノ一斤八兩ヲ一斤トスレバ

斤　今九十匁〇七分五釐

兩　今五匁六分七釐一毫八絲七忽餘

銖　今二分三釐六毫三絲三忽弱

唐小稱ノ一斤八兩ヲ一斤トスレバ、

斤　今八十匁

兩　今五匁

銖　今二分〇八毫三絲三忽不盡

北齊ニテ鑄タル五銖錢ノ【北史齊文宣帝紀ニ、「天保四年春正月、自ニ魏末一用ニ永安錢一、又有ニ數品一、皆輕濫、己丑鑄ニ新錢一、文曰ニ常平五銖一」トアリ、隋書食貨志ニ此錢ヲ截テ、「重如ニ其文一」ト云ヘリ】今ノ世ニ傳ハル者ヲ稱ルニ、大凡一匁前後ニシテ、一斤八兩ヲ一斤トスト云ヘルニ略合ヘリ、【北齊ノ一尺ハ漢ノ一尺五寸許ナリ、北齊ノ一斗モ漢ノ一斗五升許ナルベク思ハルレバ、北齊ノ稱ノ一斤八兩ヲ一斤トスルモ、漢稱ヨリ計リシニ似タリ、然ラバ此ニ云フ古稱ハ漢稱ヲ指ス如クナレドモ、漢ノ一斤八兩ヲ一斤トスレバ、五銖ハ一匁一分八釐一毫六絲四忽有奇ニテ、常平錢ヨリハ少シ重シ、又唐小稱ノ一斤八兩ヲ一斤トシテ五銖ヲ求レバ、一匁〇四釐一毫六絲六忽不盡ニシテ、常平錢ノ重サト略合ヘバ、唐小稱ヨリ計リシモノナルガ、又ハ陳ノ頃ノ南方ノ稱ヲ云ヘルモ知リ難シ、又左傳正義ニハ、「魏齊斗稱於ニ古二ニ而爲レ一ニ」ト云ヒタレドモ、試ニ其說ニ從ヒテ漢稱ヲ倍シテ五銖ノ重サヲ求ムレバ、一匁五分七釐五毫五絲二忽有奇、唐小稱ヲ倍シテ求ムルモ、一匁三分八釐八毫八絲八忽不盡ニテ、共ニ常平錢ノ重

サト合ハザレバ、北齊ノ稱ヲ古ニ倍スト云フ說ハ非ナルベシ】按ズルニ此稱北齊ニ始リシニハアラデ、東魏ノ天平三年【孝靜帝卽位ノ三年】ニ均ニ斗尺ニトト云ヘル時、改メシ制ナルベシ、【天平三年斗尺ヲ均クセシコトハ北齊書ニ出デ、上卷ニ引リ、但權衡ノコトヲ云ハザレバ斗尺ヲノミ改メタリシ如ク聞ユレドモ、後魏ノ大和ノ時、度量衡共ニ改メタルヲ、後魏書ニモ隋書ニモ衡ノコトヲバ云ハズシテ、皆斗尺ヲ改ムトノミ云ヘルト同ジク、文ヲ略シタルモノナリ、西土ニハ文法ノ簡易ナルヲ貴ブ故ニ、カヽル事ヲモ省キテ、其實ヲ失フコトマヽ有リ、書ヲ讀ン人ヨク心ヲツクベシ、大和ノ時ノ事ハ上ニ云ヘリ】其故ハ後魏ノ永安五銖錢ハ徑曲尺七分五毫、重八分ニ及バザルニ【徑、漢ノ一寸、重、漢ノ五銖ニ造リシモノナルベシ】一種徑曲尺八分、重一匁ノモノアリ、徑・重常平錢ト同ク略北齊ノ五銖ノ重サニ合ヒテ、後魏ノ五銖ノ重サト同ジカラズ、銅色製作モ常平錢ニ似タレバ、北齊ノ錢ナルベク思ハルレドモ、北齊ニハ永安錢ヲ鑄ザレバ【隋書食貨志ニ、一齊神武霸政之初、承レ魏用ニ永安五銖ニ云々、文宣受レ禪除ニ永安之錢ヲ、鑄ニ常平五銖ニトアリ、齊神武霸政之初トハ、後魏ノ末ニ齊王高觀、高靜帝ヲ擁立シ政ヲ攝シテ東魏ト云ヒシ時ノコトナリ、神武ハ北齊ニテ高觀ヲ追諡セシ號ナリ、「文宣受禪」トハ高觀ガ次子高洋、東魏ノ禪ヲ受テ國ヲ齊ト改メシ時ノコトニテ、（所謂北齊ナリ）文宣ハ高洋ガ諡ナリ、高洋禪ヲ受テ年號ヲ天保ト改メ、其四年ノ春ニ至リテ常平錢ヲ鑄タリ、然ラバ三年ノ冬マデハ東魏ヨリ用ヒ來リシ永安錢ヲ用ヒシナルベシ、モシ三年マデニ錢ヲ鑄タリトモ、既ニ國號年號ヲモ改メタル上ハ、

永安ノ號ヲ用フベキニアラザレバ、北齊ニテハ必永安錢ヲバ鑄マジキ理ナリ】此錢ハ後魏書食貨志ニ、武定六年文襄王【文襄ハ高歡ガ長子高澄ナリ、武定五年高觀卒シテ後、嗣テ政ヲ攝シタリ、武定七年高澄卒シ、翌年其弟高洋遂ニ東魏ノ禪ヲ受テ國ヲ齊ト號ス、後兄澄ヲ文襄ト追謚セシナリ】以二錢文五銖一名須レ稱レ實、宜下稱錢一文重五銖者聽上レ入二市用一計二百錢一重一斤四兩二十銖、自餘皆準レ此爲レ數」ト云ヘル錢ナラン【泉志ニモ「此錢當レ槩之、東魏董逌謂二之北齊永安五銖一非也」ト云ヘリ、武定六年ハ孝靜帝卽位ノ十年ニテ、斗尺ヲ均クセシ天平三年ヨリハ八年ノ後ナリ、然レバ此時ハ既ニ古ノ一斤半ヲ一斤トスル稱ヲ用フル時ナレバ、其稱ニテ後魏ノ永安錢ヲ稱レバ、三銖三絫三黍不盡ニテ五銖ト云フ名ノ實ニ稱ハザルニヨリ、天平ノ稱ノ五銖ニ永安錢ノ鑄改メシナリ、天平稱ノ五銖ハ古稱ノ七銖半ナル故ニ、此錢ノ重サ一匁許ニシテ、後魏ノ永安錢トハ同ジカラザルナリ、此錢今世ニ傳ハルコト後魏ノ永安錢ヨリ少キモ、行用ノ間僅ニ五年ナレバ、鑄シ錢多カラザリシ故ナルベシ、朽木龍橋公（昌綱）泉貨鑑ニモ、後魏ノ永安五銖錢ハ周郭渾厚ニシテ、形勢隋ノ五銖錢ニ似タリ、此錢ハ周郭細ク背ノ好郭少シ返張ヲナシテ、常平錢ニ彷彿タリ、後魏ノ永平錢ニ比ブレバ大ニ異ナリト云ヘリ、徑重ノコトマデハ考ヘラレザリシカドモ、製作ヲ考ヘテ東魏ノ錢トセラレシハ、サスガニ凡庸ノ鑒識ニハ非リシナリ】此錢ノ重サ北齊ノ五銖ニ合ヘルヲ見レバ、東魏ノ武定六年、既ニ古稱一斤八兩ヲ一斤トセシ稱ヲ用ヒシナリ、然ラバ古稱一斤八兩ヲ一斤トスルハ、北齊ニ始マリシニハアラデ、東魏ノ天平三年ナリシ

コト明ナリ、此魏ヲ北齊ニテモ用ヒシハ、東魏ノ制ニ從ヒシナリ、【東魏ノ制度ハ高歡ガ立テタルニ、北齊ノ文宣ハ高歡ガ二子ナレバ、東魏ノ制ニ從フベキ理ナリ、東魏ノ尺ヲ北齊ニテ承用ヒシヲモ思フベシ】隋志ニ、「周玉稱四兩、當ニ古稱四兩半一」ト云ヘリ、周トハ後周ヲ云ヘルナリ、【コノ稱法、何ニ依リシカ詳ナラズ】漢稱ノ四兩半ヲ四兩トスレバ

斤　今六十八匁〇六毫二毫五絲

兩　今四匁二分五毫三毫九絲有奇

銖　今一分七毫七毫二絲四忽餘

唐小稱ノ四兩半ヲ四兩トスレバ

斤　今六十匁

兩　今三匁七分五毫

銖　今一分五毫六毫二絲五忽

按ズルニ隋志ニ又「後周玉斗并副金錯銅斗、及建德六年金錯題銅斗實同、以ニ秬黍一定レ量、以ニ玉稱一權レ之、一斗之實、皆重六斤十三兩」ト云ヘリ、【一斗ノ實ヲ今本ニ一升之實トアルハ、傳寫ノ誤ナリ】玉斗ノ一斗ハ今ノ一升一合七勺有奇ナリ、今ノ米ノ重サニヨリテ今ノ一升ヲ四百匁トシテ此重サヲ計レバ、四百六十八匁許コレヲ六斤十三兩トシテ一斤ヲ求レバ六十八匁餘ニシテ、稱漢ヨリ計リシニ近ク、

王鳴盛ガ云ヒシ米ノ重サニヨリテ今ノ一升ヲ三百二十六匁許トスレバ、玉斗ノ一斗ハ三百八十匁許、一斤ハ五十六匁餘ニテ、唐小稱ヨリ計リシニ近シ、今何レトモ定メ難ケレドモ、常平錢ノ重サモ唐稱ヨリ計リシニ似、隋稱ヲ計リシ古稱ハ全ク唐小稱ナルベケレバ、古稱四兩半ト云ヒシハ、唐小稱ヲ云ヘルカ、又ハ上ニモ云ヒシ如ク、南方ニ漢稱ヨリハ輕ク、唐稱ヨリハ重キ譌稱アリテ、ソレヲ古稱ト云ヒシニモアルベシ

隋志ニ、「開皇以古稱三斤爲一斤」ト云ヘリ、【通典ニ、隋ノ權衡ヲ「前代三兩當今一兩」ト云ヘリ、前代トハ漢魏ヨリ梁陳マデヲ云ヒ、今トハ隋ヲ云フナリ、千金方ニ「隋人以三兩爲一兩」ト云ヒシモ、即是ナリ】按ニ唐大稱ハ、即此稱ニ依リタルナレバ【上卷中卷、唐ノ度量ノ條併セ見ルベシ】コヽニ古稱ト云ヘルハ、唐小稱ナルベシ、開皇ノ稱ヲ唐大稱トスレバ

斤　今百六十匁

兩　今十匁

銖　今四分一釐六豪六絲六忽不盡

按ズルニ後周ノ時、市中ニテ度ハ一尺二寸ノ尺、量ハ三倍ノ量ヲ用ヒタルヲ、開皇ノ時ニ至リテモコレヲ民ノ便トスルニ從ヒテ、官尺・官量トシタルニ準ズレバ、三斤ヲ一斤トスル稱モ後周ノ市中ニ用ヒタリシヲ、開皇ノ時ニ官稱トセシモノナルベシ、常ニハ此稱ヲ用ヒシカドモ、法物ヲ稱ルニハ此稱三

分一ノ古稱ヲ用ヒタリ、【此時鐵尺一尺二寸ノ尺ヲ官尺トシテ常用トシタレドモ、鍾律ヲ調フルニハ鐵尺ヲ用ヒタルト同ジ】其證ハ此時鑄タル五銖錢ハ其重サ實ハ四銖七絫五黍ナリト云ヘルニヨリ【隋書ノ高祖紀ニ「開皇元年九月、行二五銖錢一」ト云ヘリ、食貨志ニハ「高祖受二周禪一以二天下錢貨輕不一レ等、仍更鑄二新錢一背面肉好皆有二周郭一文曰二五銖一而重如二其文一毎一千重四斤二兩」トアリ、是ニヨレバ其實ハ一錢ノ重サ四銖七絫五黍ナリシナリ、（四斤二兩ハ大稱ナリ）故ニ封演ガ錢譜ニハ此錢ヲ重一銖六絫トアリ（今本泉志ニ一銖六絫トアルハ傳寫ノ誤ナリ）是ハ大稱ニテ稱リシナリ、大稱ノ一銖六絫ハ小稱ノ四銖八絫ナレバ、實ハ大稱ノ一銖五絫八黍三分黍之一ナレドモ、大凡ニ一銖六絫ト云ヘルナルベシ】四銖七絫五黍ヲ大稱ニテ計レバ、一匁九分七氂九豪一絲六忽餘、小稱ニテハ六分五氂九豪七絲二忽有奇ナリ、今此錢ノ傳ハル者ヲ見ルニ、徑曲尺七分五氂許ノ者多シ、コレヲ稱ルニ重六分餘ナレバ、隋ノ五銖錢ノ小稱ニテ定メシコト知ルベシ、【又此錢ニ一種製作渾厚ニシテ、徑曲尺八分五氂重一匁ノモノアリ、是ハ隋志ニ「開皇三年四月、詔二四面諸關一各付二百錢一爲樣不レ同者、即壞以爲レ銅入レ官、京師及諸州邸肆之上、亦皆立レ榜置レ樣爲レ準、不レ中レ樣者不レ入二于市一」トアル時、改鑄タリシモノナルカ、然レドモ一匁ハ大稱ノ二銖四絫小稱ノ七銖二絫ニテ五銖ト云フニ合ハズ、其重サ東魏北齊ノ五銖錢ノ重サト略同ジキニヨリテ考フルニ、此時民間東魏北齊ノ錢ノ重キヲ好ミテ、隋ノ錢ノ輕小ナルヲ不便トセシニヨリ、隋ニテモ後ニ東魏北齊ノ錢ノ重サニ倣ヒテ鑄改メシナラン、然ラバ大稱ノ二銖五絫、小稱ニテハ七銖五絫ナルベキニ、大稱ノ二

銖四絫、小稱ノ七銖二絫ナリシハ、（大稱二銖四絫、小稱七銖二絫ハ東魏北齊ノ四銖八絫ナリ）其據リタル東魏・北齊ノ錢、其實重サ五銖ナラザリシカ、又ハ開皇元年五銖錢ヲ鑄シ時實ハ四銖七絫五黍ナリシヲ思ヘバ、東魏・北齊ノ錢ハ制ノ如クナリシカドモ、（カク見ル時ハ今傳ハル東魏・北齊ノ錢ハ初鑄錢ニアラザルカ）隋ニテ鑄シ大様ノ五銖ハ、東魏・北齊ノ四銖八絫ニ造リシモ知ルベカラズ、此事史ニ見エザレドモ唐ノ開元錢ヲ大稱二銖四絫ニ作リシモ、民ノ此錢ヲ便トセシニヨリテ、此錢ノ重サニ沿リシモノナルベケレバ、必然カアリシナラン、開元錢ヲ如レ此造リシ故ニ民ノ好ニ合ヒテ通行甚便ナリシニヨリ、唐書ニ開元錢ヲ「得ニ輕重大小之中一」ト云ヒ、コノ後ノ諸錢皆開元錢ノ輕重ヲ法則トセシナリ】

「大業中依ニ復古稱一」ト、是モ隋志ニ出ヅ【煬帝紀ニ、「大業三年、度量權衡並依ニ古式一」ト云ヒシモ此事ナリ】此時三倍ノ大稱ヲ止メテ小稱ヲ用ヒシナリ、【隋書刑法志ニ、高祖開皇元年ニ新律ヲ定メシコトヲ云ヒ、其贖法ヲ載セテ、「笞十者銅一斤、加至ニ杖百一則十斤、徒一年贖銅二十斤、毎等則加ニ銅十斤一、三年則六十斤矣、流一千里贖銅八十斤、毎等則加ニ銅十斤一、二千里則百斤矣、二死皆贖銅百二十斤」ト云ヘリ、又其文ニ次テ「煬帝即位、又勅修ニ律令一、時升稱皆小舊三倍、其贖銅亦加ニ三倍一爲レ差、杖百則三十斤矣、徒一年者六十斤、毎等加ニ三十斤一爲レ差、三年則一百八十斤、流無ニ異等一、贖二百四十斤、二死同贖三百六十斤、其實不レ異ニ開皇舊制一」トアルハ、大業律ヲ制セシ事ヲ云ヘルナリ、大業ノ稱ハ開皇ノ三分ノ一ナレバ、大業贖銅ノ數ハ開皇贖銅ニ三倍シタレドモ、其實ハ同ジキヲ云フナリ】唐ノ

小稱ハ此稱ニヨリタレバ、【律行事抄ニ「隋煬帝立ニ尺度秤ニ準レ古立レ樣、余親見レ之、唐朝御宇任ニ世兩用ニ不レ違ニ古典ニ」トアリ、兩用トハ開皇ノ稱ヲ大稱トシ、大業ノ稱ヲ小稱トシテ、並ベ用フルヲ云フナリ】

此稱ノ重サ唐ノ小稱ト同ジ

斤　今五十三匁三分三氂三毫三絲三忽不盡

兩　今三匁三分三氂三毫三絲三忽不盡

銖　今一分三氂八毫八絲八忽不盡

唐ニハ大小二稱並ベ用フ【開皇ノ舊ニ依リシナリ】但湯藥ヲ合スル外ハ悉ク大稱ヲ用ヒシナリ、【六典・通典・舊唐書又南部新書ニ引キタル開元令ニ見ユ、唐稱ノコトハ既ニ權衡攷ニ詳ニス】

宋ノ稱ハ建隆元年、精シク古制ヲ考ヘ、前代ノ舊式ヲ按ジテ作ルベシト詔シタリ、【玉海ニ「太祖受命之初、受ニ藏吏歲輸ニ金幣權衡失レ準、建隆元年八月丙戌、有司請下造ニ新量衡ニ以敘ニ天下上、詔精ニ考古制ニ按ニ前代舊式ニ作レ之、禁ニ私造ニ者」トアリ、宋史モ同ジ】前代ノ舊式ト云ヒタレバ、唐稱ニ依リシコト知ルベシ、又皇祐新樂圖記ニ、天聖令ヲ引テ、「諸權衡以ニ秬黍中者ニ以ニ百黍之重ニ爲レ銖、二十四銖爲レ兩、十六兩爲レ斤」ト云ヘリ、唐令ノ文ト全ク同ジケレバ、是モ宋稱ノ唐稱ニ依リシヲ證スベシ、但三斤ヲ大一斤トスルコトヲ載セザレバ、小稱ヲ常用トセシ如クナレドモ、宋人皆今ノ一兩ハ古ノ三兩

ト云ヒタルニテ、【傷寒總病論、林億ガ「千金方凡例、成無己ガ傷寒論注、傷寒證治論注】大稱ヲ用ヒシコト明ラケシ、【新樂圖記ニハ、樂律ノ爲ニ引證セシ故、大斤ノコトハ用無ケレバ載セザリシナリ、天聖令ニハ必其事アリシナルベシ】又唐人開元錢ヲ【十錢重一兩、一千重六斤四兩、毎兩二十四銖、則一錢重二銖半以下」ト云ヘルニ、【六典・通典等ニ出ヅ、權衡攷ニ引リ】宋ノ淳化錢ヲモ重二銖四絫、ソノ錢二千四百ニテ重十五斤ト云ヒ、【玉海ニ「景德中劉承珪加ニ參定一、而權衡之制益備、以ニ御書眞草行三體一、淳化錢較定、重二銖四絫、爲ニ一錢一者、以ニ二千四百一得ニ十五斤一、爲ニ一稱之則一」トアリ、宋史ニ載セタルモ是ニ同ジ、二千四百ニテ十五斤ナレバ、一斤ニテハ六斤四兩、十錢ニテハ一兩ナリ】咸平錢十文ヲモ重一兩ト云ヘリ、【陸友仁ガ硯北雜志ニ、「咸平錢十文、重一兩」トアリ】今淳化。咸平ノ錢ヲ稱ルニ、開元錢ト同ジケレバ、宋稱ハ唐稱ニ依リタルコトヲモ、又大稱ヲ常用トセシコト唐ト同ジカリシヲモ證スベシ【上ノ諸錢ヲ稱リシモノ皆大稱ナリ、但イヅレモ後ヨリ稱リシニテ、錢ヲ造ル時、大稱ニテ定メタルニハアラズ】又宋ノ時ヨリ大稱二銖四絫ナル開元錢ノ重サヲ一錢トシ、其十分ノ一ヲ一分トシ、氂毫絲忽ヲ以テ稱リタリ、【度ノ尺寸ハ人體ヨリ定メ、ソノ寸ヲ十分シタルヲ分ト云ニヨリテ、稱ニソノ名ヲ借リテ一錢ヲ十分シタルヲ分ト云ヒ、氂毫絲忽モ皆度ノ名ヲ借リテ稱ノ名ニ用ヒシナリ、按ズルニ開元錢ノ重サハ、隋ノ大様ノ五銖錢ノ重サニヨリシナルベシ、隋ノ大様ノ五銖錢ノ重サハ東魏・北齊ノ五銖錢ニ依リタルベキコト上ニ云ヘリ、然ラバ一錢ト云フ稱ノ本ハ、東魏ノ天

平ノ稱ノ四銖八絫ノ重サヨリ出タルモノナリ】此事何レノ時定メタルカ、サダカニ記セルモノ無シ、【淸ノ王鳴盛ガ十七史商確ニモ、「分本度名、今人乃以爲權之名、不知起於何時」ト云ヘリ】玉海ニ「淳化三年三月、癸卯、詔曰、秬黍之制、或差毫氂捶鉤、爲姦害及黎獻、宜詳定稱法著爲通規、事下有司、內藏庫使劉承珪・劉正叢言、太府寺銅式【宋史ニハ銅式ノ上ニ舊字アリ】自一錢至十五斤ニ【宋史ニ十斤トアルハ脱シタルナルベシ】凡五十一、輕重無準、府藏歲受黃金、必自毫氂計之、式自錢始、則傷於重、權衡法以十黍爲絫、十絫爲銖、二十四銖爲兩、度法起於忽、十忽爲絲、至十氂爲分、每分二絫四黍、以開元通寶錢肉好周郭均者挍之、十分爲一錢、積十錢爲一兩トアリ、【權衡法ト云ヨリ以下、宋史ニ無シ、淸ノ趙翼ガ陔餘叢考ニ、「宋太宗詔更定權衡之式、崇儀使劉蒙劉承珪等乃取樂尺積黍之法、移於權衡、於是權衡中有絲忽毫氂分錢之數、此近代兩錢分氂毫忽絲之所由起也」ト云ヒシモ此事ナリ】此文脱簡アルカ其義明ナラザレドモ、古來銖兩ヲ以テ稱リシニ、此時ヨリ開元錢ノ重サヲ錢ト名ヅケ、其內ヲバ度ノ名ヲ借リテ、分氂毫絲忽ト稱リタルヲ云ヘルナリ、【按ズルニ錢分ノ稱法ハ、開元錢一枚ヲ一錢ト定メ、ソレヲ十分シタルヲ分ト云ヒ、分ヲ十分シタルヲ氂ト云ヒテ、絲忽ニ至リシナリ、宋史ニ忽ヨリ起リ、十絫シテ終ニ錢兩ニ至ルト云ヒシハ、倒ニ誤レリ】サレドモ是ヨリ前ノ太府寺ノ銅式ニ【銅式ハ法馬ノコトナルベシ、法馬ハ今ノ分銅ナリ】重一錢ノモノアリト云ヒ、歲ゴトニ黃金ヲ受ルニハ、毫氂ヲ以テ計ルコトヲ云ヒタレバ、

錢分釐毫ヲ以テ稱ルコト淳化ノ時ニ始マリシニハアルベカラズ、又太平聖惠方ニモ藥種ヲ計ルニ何錢ト云ヘリ、【書錄解題ニ、聖惠方ヲ載セテ「太平興國中求集名方淳化三年御製序」ト有】唐マデノ醫方書ハ皆銖兩ヲ以テ云ヒタルニ、聖惠方ニハ錢ヲ以テ記シヽハ、此時世專銖ニテハ稱ラズ、錢ニテ稱リシ故ナルベシ、モシ此年始テ錢分等ヲ用ヒタランニハ、イマダ世ニ普ク用フルニハ至ラザルベケレバ、忽ニ方書ニ是ヲ以テ記サンコトハ不便ナレバ、必サハアルマジキナリ、按ズルニ貞元廣利方ハ唐ノ德宗ノ時ニ撰ビシ書ナルニ「治中惡客忤睡死麝香一錢重」ト云ヘリ、【此書今世傳ハラズ、今證類本草ニ引シニ據ル】一錢重トハ開元錢一枚ノ重サト云フコトニテ、稱ノ名ニハ非ルベケレドモ、錢ヲ以テ輕重ノ準トスルコトハ、既ニ唐ニ始マリシナリ、【三國志、華佗ガ傳ニ、「與レ君散二兩錢一」トアルハ、錢五七ノコトニテ、稱ノ名ニハアラズ、思ヒ混ズベカラズ、錢五七ハ本草序例ニ「錢五七者今五銖錢、邊五字者以抄レ之、亦令不落爲レ度」ト云ヘルモノナリ】是一兩【大稱】ヲ十分シタル一ナレバ、數フルニ簡便ナルヲ以テ、唐末五代ノ間、市中コレヲ用ヒ、又錢ノ十分ノ一ヲ分、分ノ十分ノ一ヲ釐ナド、稱リ、銖ヲ以テ稱ルヲバ不便ナリトセシカバ、宋ノ淳化ニ至リテ、官ニテモ遂ニ錢分釐毫絲忽ト云フ稱法ヲ用ヒ、古ヨリノ銖絫ト並ベ行ヒシナルベシ、【隋唐ニテ古稱、今稱ヲ並ベ用ヒシト同ジ】故ニ景德中ニハ銖絫ヲ以テ稱ルト、錢分ヲ以テ稱ルトノ權衡二ツヲ制シタリ、【玉海ニ「景德中承珪。重加參定、而權衡之制大備云々、從二其大樂之尺一就成二二術一因二度尺一而求レ氂、自二積黍一而取レ絫、以二御書

眞草行三體一淳化錢較定、實二銖四絫爲二一錢一」ト云ヘリ（宋史同）「就成二二衡一」トハ權衡二ツヲ造ルヲ云ヒ、「因二度尺一而求レ毫」トハ度ノ名ヲ借リテ稱ノ名トシ、錢分ヲ以テ稱ル權衡ヲ作ルヲ云ヒ、「自二積黍一而取レ絫」トハ舊ノ如ク銖絫ヲ以テ稱ル權衡ヲ作ルヲ云ヘルナルベシ、玉海又會要ト紀トヲ引タルニ依レバ、是ヲ定メシハ景德二年八月丙戌ノ事ナリ、按ズルニ稱ノ一錢ハ開元錢ヨリ始マリシハ本ヨリサルコトニテ、淳化ノ時モ開元錢ニテ定メタレドモ、景德ノ時カク淳化錢ヲ一錢ト定メテ權衡ヲ造リ、後世是ニヨル時ハ今ニテハ一錢ノ稱ハ淳化錢ヨリ定メタルモノトスベシ】如レ是錢分ヲ以テ稱ルコト始マリテハ、從來ノ稱ハ二十四銖ヲ積テ兩トスル故算計容易ナラズ、錢分ハ十ヲ以テ登レバ數多キモ算フルコト便利ナルニヨリ、ソレノミ俗間ニ行ハレテ銖絫ヲ以テ稱ルコトハ停止セシニハ非レドモ、オノヅカラ廢セシガ如クナリシナラン、【隋唐ノ小度・小量・小稱ノ、後ニハ廢セシガ如クナリタルト同ジ、今世皇國ニテモ西土ニテモ、錢分ヲ以テ稱レドモ、銖絫ヲ廢セシニハ非ズ】其錢分ノ重サハ今世用フル稱ト全ク同ジカリシナリ、【今開元錢ヲ稱ルモ、淳化咸平等ノ錢ヲ稱ルモ、刓漶セザル者ハ其重サ一匁ナレバ、宋ノ稱ノ今ノ稱ト同ジキヲ知ルベシ、權量撥亂ニハ「友人田村元雄、家嘗藏二宋明二秤一、試以二本邦今秤一挍レ之、宋一兩當二今九錢六分一、明一兩當二今九錢八分一」トアリ、此二稱今モ田村氏ノ家ニ藏セラルヽヲ借挍スルニ、宋稱ト云フモノモ明稱ト云フモノモ共ニ今ノ稱ト全ク異ナルコト無シ、又田村氏ノ度量小識ハ權量撥亂ト同年ノ撰ナルニ、此稱共ノ今ノ稱ト異ナルコトヲ云ヘルコトモ無シ、

山田氏ハ如何ニ稱ラレシカ、オボツカナシ】

政和二年ニ大晟樂尺ニヨリテ量權衡ヲモ作リ、天下ニ頒チ行ヒタリ、【文獻通考ニ出ヅ、全文上卷ニ引リ、玉海ニモ「政和二年八月詔、量權衡以ニ大晟樂尺一爲レ度」トアリ】然レドモ其輕重考フベキモノ無シ、南宋ニテハ大晟樂尺ヲ廢シ、權衡モ舊ニ復セシナリ【朱熹ノ語錄ニ、「今之一兩、古之三兩」ト云ヒ、三因方モ紹興ノ時ニ作リシ書ナルニ、「宋廣秤以ニ開元錢十箇一爲レ兩」ト云ヘルコト、皆唐人・北宋人ノ云ヒシト同ジケレバ、南宋ニテハ北宋ノ舊ニ復セシナリ】

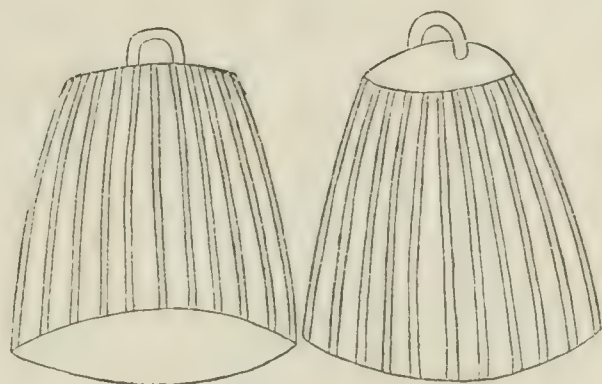
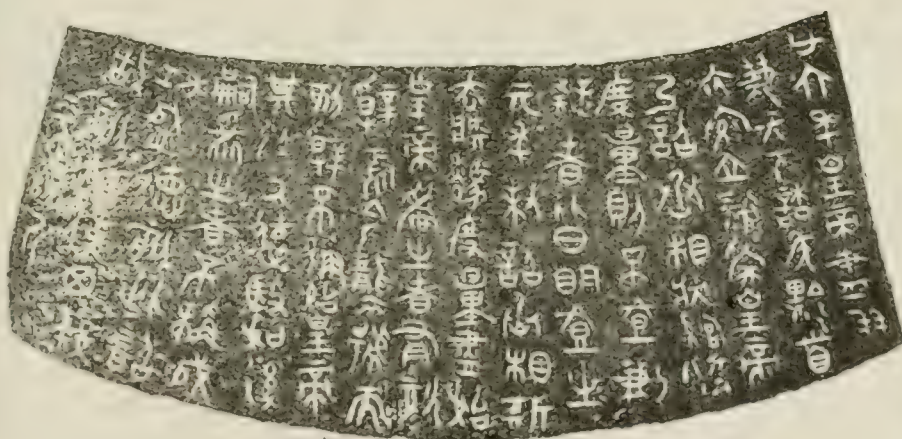
元ノ王好古ガ「湯液本草ニ「六銖爲レ分、即二錢半也、二十四銖爲レ兩、古云三兩、即今之一兩、云二兩即今之六錢半也」ト云ヘリ、【古ノ三兩元ノ一兩ナラバ、古ノ二兩ハ元ノ六錢六分七釐六毫六絲六忽不盡ナルヲ、六錢半ト云ヒシハ大凡ニ計リシナリ、或ハ六錢大半トアリシ大字ヲ脫シタルニヤ】古ノ三兩ヲ一兩トスルコト、宋人ト同ジケレバ、元稱ハ宋稱ニ沿リシナリ

明ノ稱ハ律學新說ニ、「按杜氏通典、唐以ニ其尺之八分一爲ニ開元錢之徑一、以ニ開元錢十枚之重一爲ニ一兩一、嘗以ニ其錢一按ニ今之稱尺一、全與レ唐同、不レ差ニ分豪一」ト云ヘリ、【開元錢ヲ徑八分ト云ヒシコト通典ニ載セズ、唐書ノ文ヲ誤リ引シモノナルベシ】開元錢ヲ徑八分ト云ヒ、明尺ノ八分ニ合ヒシト云ヒシハ非ナレドモ、【唐書ニ開元錢ヲ徑八分ト云ヒシハ、大凡ニ計リシニテ、眞ノ度ニアラズ、實ハ唐小尺一寸ニテ大尺ノ八分三釐三毫三絲三忽不盡ナレバ、曲尺ニテハ八分○八毫三絲三忽不盡ナルコト、詳ニ度攷

ニ辨ジタリ、又明尺ハ唐尺ヲ承ケタレドモ、唐尺宋ニ至リテハ五分許謌長シ、明ニテハ又四分許謌長シタレバ、明尺ノ八分ハ曲尺ノ八分五氂六豪八絲三忽三三不盡ナルヲ、强テ明尺ヲ唐尺ノ謌無キモノトセントテノ說ナレバ、其說據ルベカラズ】開元錢十枚ヲ一兩トスルコトハ唐ノ時ト同ジケレバ、明稱ハ宋元ノ稱ニ沿リタルナリ、又明會典ニ、「令下ニ戶部及各行省ニ鑄中洪武通寶錢上、其制凡五等、當十錢重一兩、當五錢重五錢、當三當二重皆如ニ其當之數一、小錢重一錢」ト云ヘリ、【明史食貨志ニモ、「頒ニ洪武通寶錢ニ其制凡五等、曰當十、當五、當三、當二、當一、當十重一兩餘、遞降至ニ重一錢ニ止」ト云ヘリ】今此諸錢ヲ稱ルニ皆少シヅヽ輕ケレドモ、略其云フ所ト同ジ、【新撰錢譜ニ此錢ヲ「今世所レ見當一重一錢、當二重一錢七分、當三重二錢八分、當五重四錢九分、當十重九錢五分以下」ト云ヘリ、余ガ稱リ試シモ大凡同ジ、總テ諸古錢ヲ稱リ試ルニ、小平錢ノ刓泐セザル者ハ其重サ大概法制ノ如クナレドモ、大錢ハ刓泐セザルモノモ、多クハ法制ヨリ輕キ者ナリ、然ルニ泉貨鑑ニコノ錢ヲ、「當一重一錢、當二重二錢、當三重三錢、當五重五錢、當十重十錢」トアルハ、後ニ初鑄錢ヲ得テ稱ラレタルカ、又ハ明史會典ナドニヨリテ其文ノマヽニ記サレタルニハ非ルニヤ】且明稱ノ今世ニ傳ハル者ヲ稱リ挍ルニ、今稱ト全同ジケレバ、明稱ハ宋元ノ種ニヨリテ、即唐ヨリ出シモノナリ

淸會典ニ權衡ノコトヲ載セタレドモ、準ズベキ所無シ、然レドモ淸人ノ賚來リタル積ヲ今稱ニ比ブルニ豪氂ノ異無ケレバ、淸稱ハ明稱ニ沿リシナリ、抑度量ハ代々漸ク謌リシニ、權衡ノミ隋唐ノ舊ヲ失

ハザリシハ如何ニト云フニ、度量ハ其計ル物粗ナレドモ、權衡ハ金銀藥物ヲ量レバ、代々ノ人コレヲ重クシテ濫ニセザリシ故ナルベシ、【皇國ノ度ニ今鐵尺・竹尺ノ異アリ、量ニモ私量、又ハ國々ノ量アリ、西土ニモ今私度・私量アルコト上中卷ニ云ヘリ、然ルニ權衡ニ至リテハ、皇國ニモ、西土ニモ私稱アルコトヲ聞カザルハ此故ナルベシ、按ズルニ隋志ニ歷代ノ度ヲ擧テ、豪釐ニ至ルマデ詳ニ論ジタレドモ、量稱ノコトハ甚粗略ナリ、又漢稱唐小稱ハ同ジ稱ナレドモ、七匁餘ノ異アルニ至ル、思フニ尺度ハ長短ニヨリテ音律ニ高下アリ、音律ノ高下ハ國ノ興亡ニカヽルナド、儒者ノ常ニ云フ故ニ詳ニ論ジタレドモ、量稱ハ音律ニアヅカラザルヲ以テ、少シノ譌替ハ論ゼザリシニヨリ、カクハ異アリシナルベシ、後世ニ至リテハタマサカ音律ノ論モアリシカドモ、常用ノ度ト音律ヲ定ムル度トハ同ジカラザル故ニ、常用ノ度ハ譌リタルマヽニ改ムルコトモ無ク、量モ二尺五寸ノ法ヲ用ヒテ、千六百二十寸ノ法ハ知ル人モ無ク、二尺五寸モ譌リテ二尺九寸四分ニナリ、三百二十寸ニナルニ至リシニ、權衡ハ市中ニテ利ノタメニヨク守リツレバ、隋唐ヨリ今ニ至ルマデモ、譌替ノ無カリシナルベシ】

秦權

秦權銘　考古圖

右秦權銘一百字此與ニ下一器ハ（秦斤ナリ）皆據ニ江郡堂所藏嚴氏舊搨本ニ摹入、右秦斤銘一百三字器舊藏平湖

高文恪士奇家、家不レ知ニ所在一

新莽銅權二器

律石衡蘭
奉□□容六升
始建國元年
正月癸酉
朔日制

積古齋鍾鼎款識

律石
始建元年
正月癸酉
朔日制

右新莽銅權二器上一器二十二字、摩滅者二字、下一器可レ釋者十三字、皆據ニ陳仲魚摹本一編入

本朝度量權衡攷附錄卷下之上

本朝度量權衡攷附錄卷下之下

狩谷望之著

漢器古錢ニ據リテ古稱ヲ起スコトヲ得ズ、先輩ノ說モ皆據リ難シト云フモノハ、
集古圖ニ載セタル谷口銅甬ノ銘ニ【始元四年】「重四十斤」トアルヲ、「劉原父以二今權一校レ之重十五斤」ト
云ヘリ

宋ノ十五斤ハ二貫五百匁ナリ、【明淸皇國ノ稱皆同ジ】コレヲ四十分スレバ

斤　今六十匁

博古圖梁山鋗ノ銘ニ【元康元年】「重十斤」トアルヲ、「重二斤十三兩」ト云ヘリ

二斤　十三兩ハ四百五十匁ナリ、コレヲ十分スレバ

斤　今四十五匁

考古圖甘泉內者鐙ノ銘ニ【元康二年】「重二十五斤十一兩」トアルヲ「重十斤四兩」ト云ヘリ

十斤四兩ハ一貫六百四十匁ナリ、コレヲ四百十一分シテ、【二十五斤十一兩ハ四百十一兩ナリ】兩ノ
重ヲ得、十六兩ヲ斤トスルニヨリテ、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今六十三匁八分四氂四豪二絲七忽有奇

齊安熏爐ノ銘ニ、【神爵四年】「重五斤六兩」トアルヲ「以二今權一挍レ之、三兩十八銖、當二漢一斤一」ト云ヘリ

三兩ハ三十匁、十八銖ハ七匁五分ナレバ

斤　今三十七匁五分

首山宮鴈足鐙ノ銘ニ【永始四年】「重六斤」、甘泉上林宮行鐙銘ニ【五鳳二年】「重六斤十兩」トアルヲ、

「共重三斤、十四兩」ト云ヘリ

三斤十四兩ハ六百二十匁ナリ、コレヲ二百〇二分シテ【六斤ト六斤十兩トヲ合セテ十二斤十兩ハ二百〇二兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六併スレバ

斤　今四十九匁一分〇八豪九絲一忽有奇

車宮承燭槃ノ銘ニ【五鳳四年】「重三斤八兩」トアルヲ、「重一斤五兩」ト云ヘリ

一斤五兩ハ二百十匁ナリ、コレヲ五十五分スレバ【三斤八兩ハ五十六兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六併スレバ

斤　今六十匁

兩漢金石記內者雁足鐙ノ銘ニ【建昭三年】「重三斤八兩」トアルヲ「重一斤八兩」ト云ヘリ

一斤八兩ハ二百四十匁ナリ、コレヲ五十六分シテ【三斤八兩ハ五十六兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六併

スレバ

斤　今六十八匁六分五氂六豪二絲九忽弱

博古圖綏和壺ノ銘ニ【綏和元年】「重十二斤八兩」トアルヲ「重五斤有半」ト云ヘリ

五斤半ハ八百八十匁ナリ、コレヲ十二半ニ分レバ

斤　今七十匁〇四分

積古齋鍾鼎款識尙方鴈足鐙ノ銘ニ、【永元二年】「重九斤」トアルヲ、「以二今權一分レ之、則永元時權一斤、重今權七兩有奇耳、」ト云ヘリ

コレニテハ

斤　七十匁有奇

考古圖好畤共廚鼎ノ腹ノ銘ニ、【此器款識ニ年號無シ、下ノ六器皆同ジ】「重九斤一兩」トアルヲ、「今重三斤六兩、今六兩當二漢之一斤一與二東宮槃之法一同」ト云ヘリ

三斤六兩ハ五百四十匁ナリ、コレヲ百四十五分シテ【九斤一兩ハ百四十五兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六併スレバ

斤　今五十九匁五分八氂六豪二絲一忽弱

軹家釜ノ銘ニ、「重十斤一兩九朱」トアルヲ、「重二斤十一兩六銖」ト云ヘリ

二斤十一兩六銖ハ四百三十二匁五分ナリ、コレヲ三千八百七十三分シテ、【十氂一兩九銖ハ三千八百七十三銖ナリ】銖ヲ得、ソレヲ二十四倂スレバ兩ヲ得、又十六倂スレバ

斤　今四十二匁八分八氂七豪八絲八忽有奇

別家甑ノ銘ニ、「重四斤二十朱」トアルヲ、「重一斤七兩」ト云ヘリ

一斤七兩ハ二百三十匁ナリ、コレヲ千五百五十六分シテ【四斤二十銖ハ千五百五十六銖ナリ】銖ヲ得、ソレヲ二十四倂シテ兩ヲ得、又十六倂スレバ

斤　今五十六匁七分六氂〇九絲二忽有奇

博古圖虹燭錠ノ銘ニ、「重二十二斤四兩」トアルヲ、「重四斤八兩」ト云ヘリ

四斤八兩ハ七百二十匁ナリ、三百五十六分シテ【二十二斤四兩ハ三百五十六兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今三十二匁三分五氂九豪五絲五忽〇有奇

西淸古鑑ニ、「食官鍾」一器ヲ載ス、一器ノ銘ニ「重五十斤四兩」トアルヲ「三百二十七兩」ト云ヘリ

三百二十七兩ハ三貫二百七十匁ナリ、コレヲ八百〇四分シテ【五十斤四兩ハ八百〇四兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

斤　今六十五匁〇七氂四豪六絲三忽弱

一器ノ銘ニ「五十斤」トアルヲ、「重三百四十兩」ト云ヘリ

三百四十兩ハ三貫四百匁ナリ、コレヲ五十分スレバ

斤　今六十八匁

積古齋鐘鼎款識陶陵鼎ノ蓋ノ銘ニ、「重十一斤」ト云ヒ、器ノ銘ニ「重十斤」、又倒書シテ「重八斤一兩」トアルヲ、「蓋當ニ一斤十五兩ニ矣、今除レ蓋以ニ庫平法馬ニ稱レ之、重五十三兩七錢二分」ト云ヘリ、【十斤ハ蓋ヲ併セタル重サニテ、器ノミニテハ八斤一兩ナル故ニ、蓋ノ重一斤十五兩ナルベシト云ヘリ、然ルニ蓋ノ銘ニ「重十一斤」ハアルモノハ、「揅經室集ノ焦山定陶鼎考ニ「此鼎蓋與ニ器銘ニ辭不ニ相應ニ者、當時共帶正多、不レ知ニ何時互錯ニ也」、ト云ヘリ、然ラバ此鼎數多ク造リシニ、第二十ハ器ノミ存シ、第三十五ハ蓋ノミ殘リタルヲ取リ合セタルモノニテ、第三十五ノ鼎ハ器蓋ヲ併セテ十一斤アリシナルベシ】

五百三十七匁二分ヲ百二十九分シテ【八斤一兩ハ百二十九兩ナリ】兩ヲ得、ソレヲ十六併スレバ

斤　今六十六匁六分二氂九毫四絲六忽弱

律學新說ニ、王莽ガ錢ニテ稱リシニ【其說ニ、「臣家所レ有漢錢數十枚、凡若干種、毎種雖ニ度數分寸彷彿ニ而厚薄輕重不レ均、以ニ漢食貨志ニ按レ之、彼志云貨泉重五銖、貨布重二十五銖、大布重十二銖、大布重二十四銖、臣以ニ今時等子將錢ニ、毎種或十枚、或五枚總稱レ之以均ニ其輕重ニ、而用ニ算法ニ乘除以求ニ漢之一兩ニ、則大泉合ニ今三錢三分ニ、貨泉合ニ今三錢五分ニ、貨布合ニ今三錢七分ニ、大布合ニ今三錢八分ニ各爲ニ

漢之一兩、而率皆乖異、與二呂氏考古圖之說一相同也、大率漢之一兩惟有二今之三錢强半一」ト云ヘリ】大
泉五十ニテハ漢ノ一兩ハ三匁三分ニ當ルト云ヘリ

三匁三分ヲ十六併スレバ

斤　今五十三匁八分

貨泉ニテハ漢ノ一兩ハ三匁五分ニ當ルト云ヘリ

三匁五分ヲ十六併スレバ

斤　今五十六匁

貨布ニテハ漢ノ一兩ハ三匁七分ニ當ルト云ヘリ

三匁七分ヲ十六併スレバ

斤　今五十九匁二分

大布ニテハ漢ノ一兩ハ三匁八分ニ當ルト云ヘリ

三匁八分ヲ十六併スレバ

斤　今六十匁〇八分

如レ此其重サ異ナレドモ、大率漢ノ一兩ハ今ノ三匁半强ナリト云ヘルハ、大泉・貨泉・貨布・大布ニテ度リシ漢ノ一兩ヲ平均スレバ、三匁五分七氂五豪ナルヲ以テ、三匁半强トハ云ヒシナルベシ、三匁五分

七耄五豪ヲ十六倂スレバ

　斤　今五十七匁二分

清ノ顧炎武ガ日知錄ニハ、「貨布重四匁二分」ト云ヘリ

四匁二分ヲ二十五分シテ【貨布重二十五銖】銖ヲ得、ソレヲ三百八十四倂スレバ【一斤ハ三百八十四銖ナリ】

　斤　今六十四匁五分一耄二豪

今世傳ル所ノ古錢ヲ稱ルニ、秦ノモノト思ハルヽ半兩錢ノ重キモノハ、二匁五分ナリ、コレヲ倍シテ【漢書食貨志ニ、「秦兼天下、銅錢質如周錢、文曰、半兩、重如其文」史記索隱ニ「顧氏案古今註云、秦錢半兩、徑寸二分、重十二銖」トアリ、顧氏ハ梁ノ顧烜ナリ、錢譜一卷アリ、隋書經籍志ニ見ユ】兩ヲ得、ソレヲ十六倂スレバ

　斤　今八十三匁二分

輕キモノハ一匁

　斤　今三十二匁

漢ノ莢錢ト覺シキハ、四分八耄、コレヲ三分シテ【食貨志ニ、「漢興、以爲秦錢重難用、更令民鑄莢錢」史記索隱ニ「顧氏案、古今註云、莢錢重三銖、」トアリ、泉志ニ「伏無忌曰、漢鑄莢錢重三銖

ト引シモ同ジ、泉志ニ「又顧烜曰、今世猶有二小錢一、重一銖半、徑五分、文曰漢興小篆文、余按、班馬二史、皆云、莢錢不レ載二錢文一、顧烜之説蓋近レ之矣、金光襲董遹皆因レ之、」ト見エタレドモ、淸ノ陳萊孝ガ鐘官圖經ニ、「莢錢文曰二半兩一、」ト云ヘリ、コノ説是ニ似タリ、今コレニ從フ】銖ヲ得、ソレヲ三百八十四倂スレバ

斤　今六十一匁四分四毛

八銖錢ナルベク見ユルハ、重キモノハ一匁四分、コレヲ八分シテ【漢書高后紀ニ、「二年七月行二八銖錢一」泉志ニ舊譜ヲ引テ「重八銖、曰二半兩一」ト云ヘリ】銖ヲ得、ソレヲ三百八十四倂スレバ

斤　今六十七匁二分

輕キモノハ八分

斤　今三十八匁四分

四銖錢ナルベキモノ、重キハ八分五毛、コレヲ四分シテ【食貨志ニ「孝文五年、更鑄二四銖錢一、其文爲二半兩一」ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四倂スレバ

斤　今八十一匁六分

輕キモノハ五分五毛

斤　今五十二匁八分

五銖錢ノ重キモノハ一匁二分五釐、コレヲ五分シテ銖ヲ得、又三亓八十四併スレバ

斤　今九十六匁

輕キモノハ七分

斤　今五十三匁七分六釐

王莽ガ大泉五十ノ大ナル者ハ二匁强、コレヲ十二分シテ【食貨志ニ「王莽居レ攝變ニ漢制一、以ニ周錢有ニ子母一相權、於レ是更造ニ大錢一、徑寸二分、重十二銖、」ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四併スレバ

斤　今六十四匁

小ナル者ハ七分三釐

斤　今二十三匁三分六釐

貨泉ノ重キハ九分二釐、コレヲ五分シテ【食貨志ニ「貨泉徑一寸、重五銖」ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四併スレバ

斤　今七十匁〇六分五釐六毫

輕キハ五分

斤　今三十八匁四分

貨布ノ重キハ四匁八介、コレヲ二十五分シテ【食貨志ニ「天鳳元年罷ニ大小錢一改作ニ貨布一、重二十五銖」一

ト云ヘリ】銖ヲ得、又三百八十四併スレバ

　斤　今七十三匁七分二氂八豪

輕キハ三匁七分四氂

　斤　今五十七匁四分四氂六豪四絲弱

漢器古錢ノ重サ此ノ如ク皆同ジカラザレバ、據リテ稱ヲ定ムルコトヲ得ズ

宋明又皇國ノ人々ノ定メシモ據リ難シト云フハ

皇祐新樂圖記ニハ七十八匁九分五氂許ヲ一斤トス

其說ニ「謹詳周禮及歷代至聖朝令文之制定、成銖秤、一鈞秤、一石秤、以太府寺見行、秤法物校之、得太府寺秤七兩二十一銖半弱」ト云ヘリ、【七兩ハ七十匁、二十一銖半ハ八匁九分五氂八豪三絲三忽不盡ナリ】

　按ズルニ、其考ヘ定メシ據ヲ云ハザレバ、其說明ナラズ

同書ニ、「謹按、隋志開皇中、以古秤二斤爲一斤【原注隋書誤作、三斤爲一斤】則今太府寺十五斤秤、乃古一鈞之權衡也、然今黍秤十六兩比太府寺八兩、尙少三銖半强者、亦以年代浸遠而制造有差也」ト云ヘリ

　按ズルニ、古ヲ考ヘテ七十八匁九分五氂許ト定メシヲ、【黍秤ト云ヒタレバ、黍ヲ稱リテ定メシニヤ】

開皇ノ百六十匁ノ稱ニ校レバ、大凡半ナルヲ以テ、「以古稱三斤爲一斤」トアルヲ「以二斤爲一斤」ノ誤トセシモノナリ、然レドモ通典ニモ、千金方ニモ、隋ニハ古ノ三兩ヲ一兩トスト云ヒタレバ、隋書ノ誤ニハアラズ、又二斤ノ誤ナランニハ、「大業中依復古稱」トアレバ、煬帝ノ時ハ開皇ノ半ナルベキニ、刑法志ニ煬帝ノ時ノ升稱皆舊ノ三分ノ一ナレバ、贖銅ノ數ハ三倍シタレドモ、其實ハ異ナラズトアルニテ、【全文上ニ引リ】、開皇ノ一斤ハ古ノ三斤ナルコト明ナレバ、其說ノ誣タルヲ知ルベシ

夢溪筆談ニ、古稱ノ比校ヲ載スルモノニ、其重少ク同ジカラズ、一ハ四十三匁三分三厘三毫不盡ヲ一斤トス

其說ニ「予考樂律、受詔改鑄渾儀、求秦漢以前度量、秤三斤當今十三兩」ト云ヘリ、【十三兩ハ百三十匁、コレヲ三分スレバ、四十三匁三分三厘三毫不盡ナリ】

一ニハ四十二匁六分六厘六毫不盡ヲ一斤トス

其說ニ「鈞石之石百二十斤、以今秤計之當三十二斤」ト云ヘリ、【三十二斤ハ五貫百二十匁、コレヲ百二十分スレバ、四十二匁六分六厘六毫不盡ナリ】

二說トモニ據ドコロヲ云ハザレバ、其說明ナラズ

三因方ニハ四十八匁ヲ一斤トス

其說ニ「每兩則古文六銖錢四箇、開元錢三箇、至ニ宋廣秤一以ニ開元錢十箇一爲レ兩、今之三兩得ニ漢唐十兩一明矣」ト云ヘリ、【六銖錢四箇ニテハ二十四銖ナレバ即一兩ナリ、是ニヨリテ六銖錢四箇ヲ稱リ試ルニ、開元錢三箇ニ當ル、然ラバ開元錢三箇ハ古ノ一兩、三十箇ハ十兩ナリ、又宋ノ稱ニテ開元錢ヲ稱レバ十箇ニテ一兩、三十箇ニテ三兩ナレバ、宋ノ三兩ハ古ノ十兩ナリト云ヘルナリ、開元錢三箇ハ三匁ナレバ、三匁ヲ一兩トシ、コレヲ十六併シテ一斤ヲ求ムレバ、四十八匁ナリ】

按ズルニ、六銖錢ハ陳ノ宣帝ノ鑄タル太貨六銖錢ナリ、】陳書宣帝紀ニ、「大建十一年秋七月辛卯、初用ニ太貨六銖錢一」ト云ヘリ】「梁陳依ニ古稱一」トアルニ依レバ、陳ノ六銖ハ即漢ノ六銖ナリ、今予ガ藏スル六銖錢ノ內ニテ、形質完厚ノ者ヲ稱ルニ、重八分五釐、【朽木龍橋公ノ藏セラレタルハ八分二釐、其佗予ガ見ル所ノ六銖錢二十餘品、何レモ此二錢ヨリ輕シ】是ニテ一斤ヲ求ムレバ五十四匁四分ナリ】是ヲ初鑄錢トモ定メ難ケレバ、コレヨリ重キガアリシモ知ルベカラズ、王莽ガ銅斛ニ據レバ初鑄錢ハ九分四釐五豪餘ナルベシ、然レドモ陳ノ頃ハ譌リテ一斤五十四五匁ナリシモ計リ難シ、此事陳稱ノ條ニ詳ニス】然レバ陳言ガ見タリシ錢ハ【三匁ヲ四箇ニ分テバ、一箇ノ重サ七分五釐ナリ】後鑄ノ錢カ、又ハ通行ヲ經テ刓㓕セシモノナルベケレバ、稱ヲ起スベキ證トハナシ難シ

淸ノ沈彤ガ果堂集ニハ、七十二匁〇三釐〇七絲二忽ヲ一斤トス

其說ニ漢書ニ「貨布重二十五銖」ト云ヘルニヨリ、其最完善ナル者ヲ稱レバ、今ノ布政司等【即淸ノ宮稱

ナリ】四錢六分八釐九豪五絲ナリ、然ラバ一銖ハ今ノ一分八釐七豪五絲六忽【八忽ノ誤】十二銖ハ今ノ二錢二分五釐〇九絲六忽ナリト云ヘリ、【是ニテ一兩ヲ計レバ、四匁五分〇一豪九絲二忽、一斤ハ七十二匁〇三釐〇七絲二忽ナリ】

按ズルニ、偏ニ貨布ニヨリテ稱ヲ定ムルコトヲ得ザルコト前ニ論ゼリ、況ヤタヽ一枚ノ貨布ニヨリテ稱ヲ起スコトハ彌定說トナスベカラザレバ、其說據リ處トナシ難シ、【モシ見ル處最重キ者ニヨリタルト云ハヾ、予ガ藏スル貨布ノ內ニ四匁八分アルモノナリ】

三器攷略ニハ七十二匁ヲ一斤トス

其說ニ「周漢古稱一兩當二今四錢半一、古稱權重今以二寸金一斤及漢錢參伍一校驗得二其大約一矣」ト云ヘリ、【四匁半ヲ一兩トシテ一斤ヲ求ムレバ七十二匁ナリ】

按ズルニ、「寸金一斤」ト云フニヨリテ、中村氏ノ定メシ七寸八分三釐二豪ノ周尺ヲ以テ方寸ノ金ヲ計レバ、其重サ六十四匁六分一釐六豪〇四忽弱ナリ、漢錢ニテ稱ヲ起シ難キコトハ上ニ云ヘリ【モシ上ニ稱リシ古錢ヲ平均スレバ、五十九匁七分餘ナリ】然ルニ七十二匁ト定メシモノ、其據リドコロ詳ナラザレバ證トナシ難シ

律原發揮ニハ九十六匁ヲ一斤トス

其說ニ「古稱神農稱也、梁陳皆依レ此、一斤九十六錢」ト云ヘリ

按ズルニ、「神農稱也」トハ、孫思邈ガ醫家ニテ用フル稱ヲ云ヒシ言ナリ、【醫家ノ稱ハ常ノ稱ト同ジカラズ、詳ニ下文（下文恐上文誤）ニ證セリ】是ヲ周稱ヲ云ヘルト思ヒシハ、朱載堉ガ誤ヲ受シナリ、「梁陳皆依」此」、トハ隋志ニ「梁陳依ニ古稱ニ」トアルニヨリタルニテ、梁陳マデモ漢魏ノ舊ニ依リシヲ云フ、【醫家ニテ用フル神農ノ稱ニ依リタルニハ非ズ】朱載堉ハ漢稱ハ周稱ニ非ズトシタレドモ、中根氏ハ周漢ノ稱ヲ一ナリトセシ故ニ、隋志ノ文ヲコヽニ引シナリ、一斤ヲ九十六匁ト定メシハ、又朱載堉ガ周稱ノ説ニ從ヒタルナリ、朱説ノ非ナルコトハ下ニ辨ズ、中根氏朱氏ガ定メタル周稱ヲ漢魏モ同ジト思ヒシハ誤ナリ、【朱載堉ガ定メシ漢稱ハ五十七匁二分ナルコト詳ニ上ニ載ス】

荻生氏觀衡考ニハ、四十七匁四分〇七豪四絲〇七四不盡ヲ一斤トス

其説ニ古稱ノ四兩半ハ玉稱ノ四兩ニ當リ、玉稱ノ三兩ハ今ノ一兩ニ當リ、玉稱ノ一斤ハ五十三匁三分三毫三豪三絲三忽不盡ナレバ【唐小稱ト同ジ】古稱ノ一斤ハ、四十七匁〇七豪四絲〇七四不盡ナリト云ヘリ

按ズルニ、玉稱ヲ即唐小稱トシタルハ、徂來ノ玉尺ヲ唐小尺トセシ説ヲ承テ衡モ玉稱ヲ唐小尺ト定メシナラン、然レドモ玉尺ト唐小尺トハ同ジカラズ【上卷ニ辨ゼリ】又玉稱ノ唐小稱ナルコトハ、絕テ證トスル所無ケレバ、其説據ルニ足ラズ

三器逢源考ニハ十六匁ヲ一斤トス

本草綱目序例ニ「古之一兩今用ニ一錢ニ可也」トアルニ據ル

按ズルニ、李時珍ガ定メタル古稱其據ル所詳ナラズ、思フニ明ニテハ百六十匁ヲ一斤トスレバ、一銖ハ三百黍ナルヲ、【大稱ナリ】誤リテ百黍ノ銖【小稱】ナリトシ、又陶弘景孫思邈ガ「十黍爲レ銖」ト云ヘルヲ以テ【此事下ニ詳ニス（注下恐上譌）】明稱ノ十分ノ一ヲ神農ノ稱トセシモノナルベシ、李氏醫家ノ稱ヲ常ノ稱ノ十分ノ一トスル説ヲ用ヒタルハ當リタレドモ、三百斤ヲ銖トスル大稱ノ十分ノ一トシタルハ誤ナリ、又李氏ガ云フ所ハ合藥ノ稱ナルヲ正木氏古ノ尋常通行ノ稱トシタルモ誤ナレバ、據ルニ足ラズ

權量撥亂ニハ四十五匁六分ヲ一斤トス

其説ニ唐小尺ハ、即周漢ノ尺、唐小稱ハ即周漢ノ稱ナリ、「開元錢積十錢、重一兩」ニ【大稱】ト云ヒシニヨリ、開元錢ヲ稱ルニ十箇ノ重サ八匁五分ヨリハ强、六分ヨリハ弱ナレバ、唐ノ大一兩ハ今ノ八匁五分五厘、是ヲ三分スレバ、二匁八分五厘、唐ノ小一兩ニテ、即周漢ノ一兩ナリ

按ズルニ、唐小尺ヲ即周漢ノ尺トセシハ誤ナルコト、上卷ニ辨ゼリ、唐小稱モ周漢ノ稱ト同ジカラズ【上ノ後魏稱ノ條、隋稱ノ條合セ見ルベシ、然レバ開元錢ヲ三分シテ漢稱トスルハ誤ナリ、又開元錢ノ輕重中ヲ得ル者ハ一匁ナルコト權衡攷ニ詳ニス、山田氏ノ八分五厘半トセシハ、千年來人間ニ通行シテ刓泐セシ錢ヲ稱リテ定メタルモノナルベケレバ、其唐稱モ據トナシ難シ】

度量小識ニハ四十二匁六分六氂六毫六絲六忽不盡ヲ一斤トス

其說ニ、今開元錢十箇ヲ稱レバ、重八匁ナレバ唐ノ一兩ハ八匁ナルコト知ルベシ、通典ニ六朝ノ賦稅ヲ論ジテ「歷ニ宋齊梁陳ニ皆因而不レ改」ト云ヒ、【是ハ賦稅ノ法ヲ改メザルニテ稱ヲ改メズト云ヒシニハ非ズ】「稱則三兩、當ニ今一兩ニ」ト云ヒタレバ、八匁ヲ三分シテ、漢魏六朝ノ稱ヲ定ム

按ズルニ、唐ノ一兩ハ古ノ三兩ト云ヒシハ、大凡ニ云ヘルナレバ的證ニ非ズ、且開元錢ノ十箇重八匁ナリシハ、刓潤ノ錢ニテ據ルニ足ラザルコト上ニ云ヘリ

度量衡說統ニ、前漢ノ一斤ハ三十五匁許、後漢魏晉ノ一斤ハ三十八匁ト云ヘリ

同書ニ、傷寒論ヲ引テ、「桂枝加ニ大黃湯ニ」ノ一斤三兩ヲ四十一匁ト云ヒ【一斤三兩ハ十九兩ナレバ、四十一匁ヲ十九ニ分レバ、二匁一分五氂餘、漢ノ一兩ナリ、コレヲ十六併スレバ、三十四匁五分餘、コレ一斤ナリ】大靑龍湯ノ條ニハ、一斤六兩半ヲ四十九匁ト云ヘリ、【一斤六兩半ハ二十二兩半ナリ、四十九匁ヲ二十二半ニ分レバ、二匁一分八氂弱、漢ノ一兩ナリ、是ヲ十六併シテ三十四匁八分四氂有奇ヲ一斤トス】前漢ノ一斤三十五匁許ト云ヒシ稱ヲ用ヒテ定メシナルベシ

按ズルニ、其定メシ據ドコロヲ云ハザレバ、證トナシ難シ

同書ニ「唐小稱一兩、大約漢一兩三四銖也」、ト云ヘリ、【最上氏唐大稱ノ一兩ヲ八匁五分有奇ト定メタレバ、小稱ノ一兩ハ二匁八分三氂餘ナリ、一兩四銖ハ二十八銖ナレバ、是ヲ二十八分スレバ一分有奇、

漢ノ一銖ナリ、又是ヲ三百八十四併スレバ、三十八匁餘ヲ得】コレ後漢魏晉ノ斤三十八匁許ト云ヒシモノナルベシ

按ズルニ、唐大稱ノ一兩ハ十匁ニシテ、八匁五分有奇ト定メシハ、刓渤ノ開元錢ニヨリシナレバ、證トスルニ足ラズ、又唐小稱一兩ヲ、漢ノ一兩三四銖ナリト云フモ、明徵無ケレバ據ドコロトナシ難シ

律量全編ニハ三十七匁九分二毫ヲ一斤トス

其說ニ、西國ノ黍ヲ稱ルニ、今ノ一合ノ重サ三十六匁七分四毫ナリ、是ニテ漢ノ二龠ヲ計レバ、今ノ二匁三分七毫、東國ノ黍ハ今ノ一合ノ重サ三十七匁弱、漢ノ二龠ハ二匁四分ナリ、周尺西國ノ黍ニ合ヘバ、今ハ西國ノ黍ニヨリテ定メシナリ

二龠ヲ計ルト云ヒシハ漢書ニ「一龠容ニ千二百黍一兩レ之爲レ兩」ト云フニヨリテ、一兩ノ黍ヲ計リシナリ、サレドモ黍ニ虛實モアルベケレバ、黍ニテハ稱ヲ起シ難キコト上ニ辨ジタリ、又黍ニテ稱ヲ起スコトヲ漢書ニハ二千四百黍ヲ一兩シトタレドモ、說苑ニハ二千三百〇四黍ヲ一兩トシテ、【全文上ニ引リ】其說同ジカラズ、今イヅレヲカ正シトハ定ムベキ、又其造リシ龠ノ長サモ六寸四分ノ尺ヲ用ヒタレバ、此說モ據リ難シ

三器彙考ニハ四十六匁〇八毫ヲ一斤トス

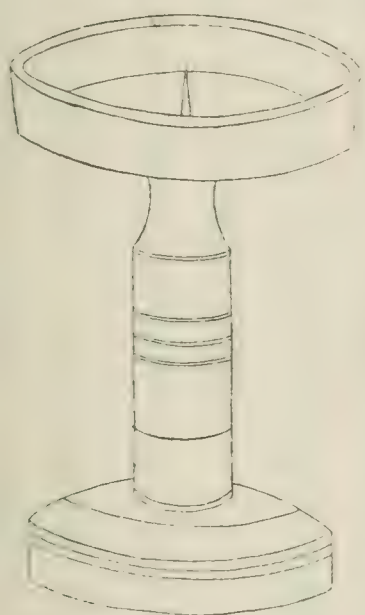
其說ニ三因方ニ、六銖錢四箇ハ二十四銖ナレバ卽一兩ナリ、開元錢三箇ニ比ストアリ、六銖錢今世ニ希ナルヲ、宋ノ代マデハ甚久シカラザレバ、陳氏其眞錢ヲ得テ是ニヨリ古稱ヲ定メタレバ、其法精覈ニシテ據ドコロトスベシ、開元錢三箇ハ今稱ルニ二匁八分八釐、是古ノ一兩ナリ

按ズルニ、陳言ガ見タリシ六銖錢ハ、後鑄輕小ノモノナレバ、證トナシ難キコト上ニ云ヘリ、藤本氏開元錢三箇ヲ二匁八分八釐ト云ヘリ、三分スレバ一箇ノ重サ九分六釐ナリ、開元錢ノ一匁ニ足ラザルモノハ、初鑄錢ニ非レバ準トナシ難ケレバ、此說モ據リ難シ

律學新說ニハ漢稱ヲ非ナリトシテ、【同書ニ漢稱ヲ王莽ガ錢ニテ起シタルコト上ニ引リ】別ニ周稱ヲ起ス、九十六匁ヲ一斤トス

其說ニ國語ニ、「單穆公曰、先王之制鍾也、大不レ出レ均、重不レ過レ口、律度量衡於レ是乎生、」トアルヲ引キテ、「則三代之制、權衡之起、信亦出二於律一矣」ト云ヒ、「今考、羊頭山秬黍以二時制等子一秤レ之、其中者百粒爲二一分五釐一、整積至二兩龠二千四百粒一、秤重六錢、然則今之六錢爲二古一兩一、古之一斤今之九兩六錢也」ト云ヘリ、【九兩六錢ハ九十六匁ナリ】又大率漢之一兩惟有二今之三錢半强一、是漢三兩爲二今之一兩强一、與二秬黍之法一不レ同者、蓋因下劉歆誤以二秠黍一爲セ秬、故律度量衡皆失二之小一、其餘龠率多二舛謬一、王莽僞錢益無レ足レ取、今宜以二秬黍一爲レ法可也」トモ云ヘリ

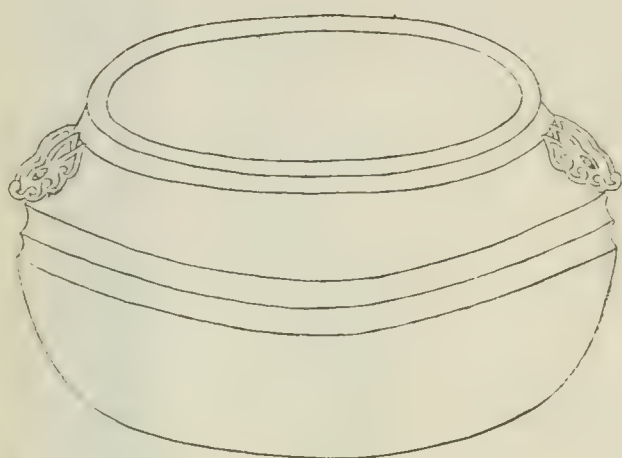
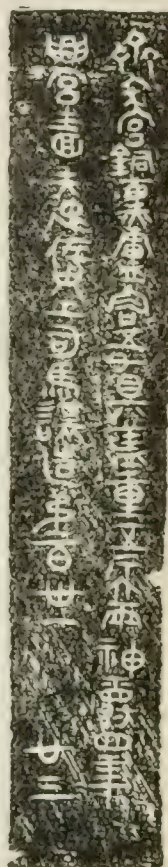
按ズルニ、漢書ノ度量衡秬黍ヨリ生ズル說取ルベカラザルコトハ、朱載堉既ニコレヲ云ヘリ、然ル

ニ又國語ニ依リテ秬黍ヲ以テ衡ヲ起シヽハ如何、國語ヲ信ジテ漢書ヲ取ラザルニヤ、然ラバ兩龠二千四百黍ヲ兩トスルコトハ何ニ據リタルニカ、又漢ノ律度量衡皆小ニ失ヘリト云ヒタレドモ、漢錢ニヨリテ度ヲ起セバ曲尺七寸六分ナルニ、朱氏ガ周尺ヲ營造尺六寸四分【曲尺六寸七分七釐一毫二絲】トセルハ漢度ヨリ小ナルニ非ズヤ、又考ルニ朱氏ガ定メシ衡ノ重カリシハ、營造尺八寸ヲ夏尺トシ、卽黄鍾トス、【曲尺八寸四分六釐四毫】是ニ百黍ヲ排シテ其黍ヲ稱リシニ二分五釐ナリシヨリ稱ヲ起シタレバ、此ノ如ク重クハナリシナリ、明尺ノ八寸ヲ夏尺トスルコト、是ヲ黄鍾トスルコト、ソレニ據リテ稱ヲ起スコト皆朱氏ノ和說ニシテ徵スル所無ケレバ、據トスルニ足ラズ、【中根氏是ニ從ヒシハ非ナリ】

甘泉內者鐙　京兆陳氏　　考古圖

內者元康二年三月河東安邑守者宣王軒造重廿五斤十一兩

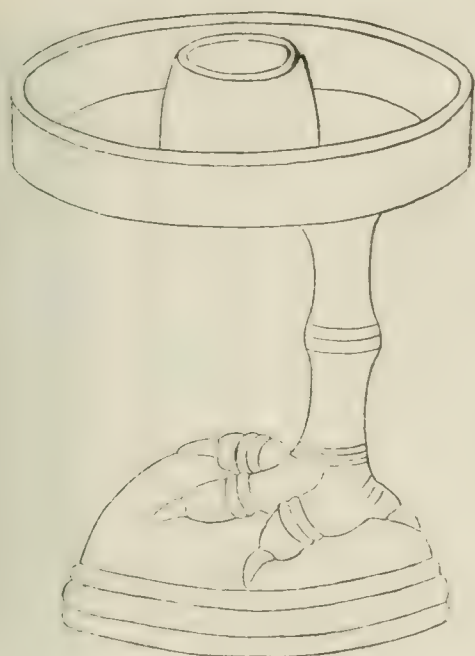
右不知所從得高尺有一寸面徑六寸三分底徑五寸七分中有仰錐長二分重十斤四兩銘大小三十字

熏爐 盧江李氏

同上

齊安宮銅熏鑪容五升具蓋重五斤六兩神爵四年
典官嗇夫忠佐史工司馬讓造第一百一卅一廿三

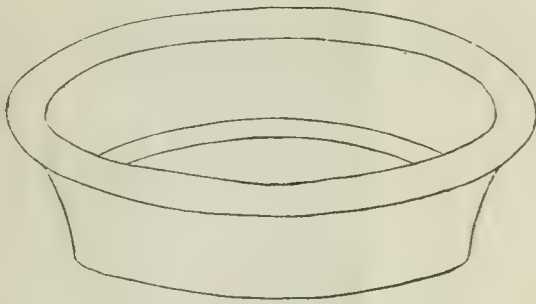
右得於京師重一斤三兩銘三十有六字
銘云重五斤六兩以今權校之三兩十八斤當漢之一斤
三十三　薛氏欵識作廿三

首山宮鴈足鐙　京兆李氏

考古圖

蒲反首山宮銅鴈足八寸蓋重六斤永始四年二月工買慶造

望之按當釋登重六斤登讀爲鐙即今俗燈字呂氏釋爲蓋非是

右不知所從得高六寸三分面徑四寸有半足縮四寸衡三寸七分銘廿有四字

甘泉上林宮行鐙　同上

河東爲甘泉上林宮造行鐙重
六斤十兩五鳳二年王同夫山工
誼作第二
俞□

右不知所從得惟承槃存徑七寸有半深寸有二分銘三十一有一字并鴈足燈共重三斤一十四兩

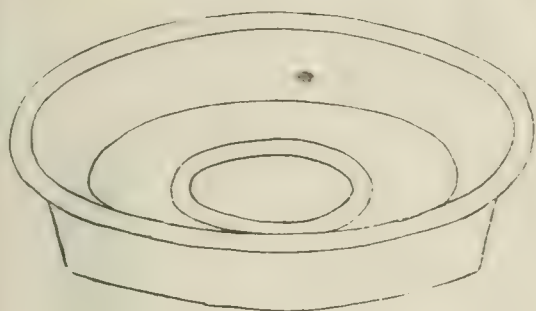
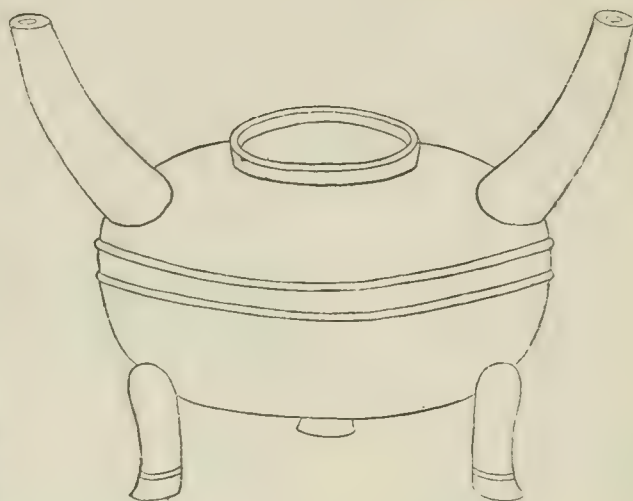
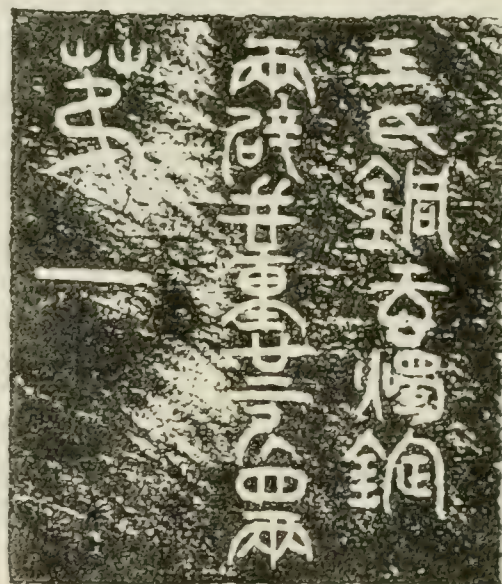
車宮承燭槃　京兆毌氏

同上

車宮銅丞燭槃重三斤八兩五鳳四季造　扶

右不知所從得面徑七寸六分深八分底徑四寸三分重一斤五兩

銘十七字

以上四鐙皆漢宣帝時器所權輕重以今權校之首山上林二鐙五
兩奇內者鐙六兩半有奇車宮槃六兩當漢之一斤數皆不同

漢虹燭錠

博古圖

王氏銅虹燭錠

兩辟并重二十二斤四兩

第一

右高五寸四分深四寸五分口徑三寸容四升八合重四斤八兩三足銘一十八字自三代至秦器無斤兩之識此器顯其斤重與漢五鳳鑪款識相類寔漢物也

積古齋鐘鼎款識

永元鴈足鐙

永元二年中尚方造銅鴈足鐙重九斤工宋次等作

永元二年中尚方造銅鴈足鐙重九斤工宋次等作

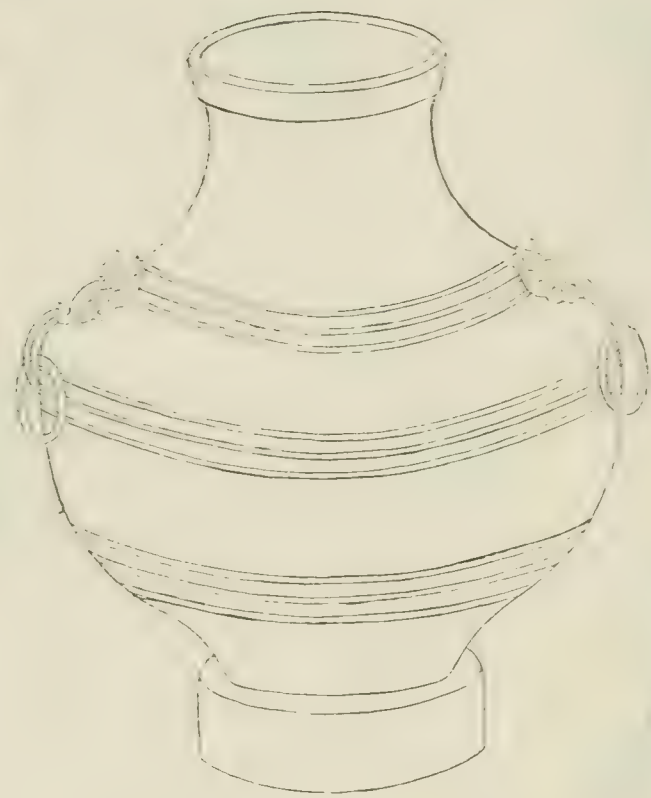
右永元鴈足鐙銘二十字秦太史所藏器 中略 江鄭堂云文云重九斤以今權分之則永元時權一斤重今權七兩有奇耳

內者雁足鐙欵　金石萃編

建昭三年考工々輔爲內者造銅雁足鐙重三斤八兩護建佐博嗇夫福椽光主右丞
宮令相省中宮內者第五　故家
今陽平家畫一至三陽朔元年賜
後大廚

欵文云重三斤八兩而以今權權之重一斤八兩則漢權之較今權殺不及半兩　漢金石記

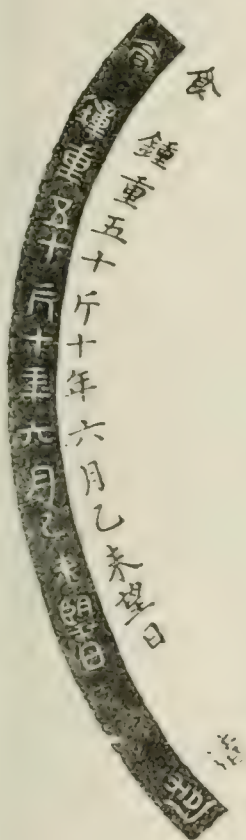
漢食官鍾

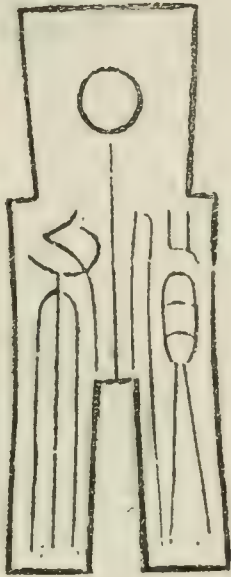
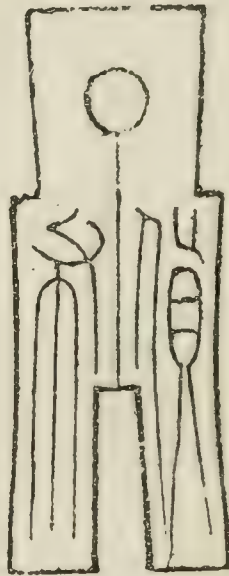
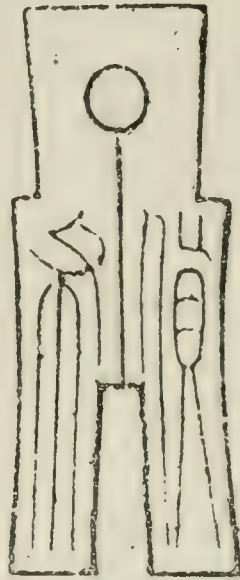
西淸古鑑

食官一朋造
重五十斤四兩

右高一尺三寸九分深一尺一寸六分口徑六寸腹圍三尺五寸二分重三百二十七兩　下識云五十斤四兩按律

歴志三百八十四銖爲一斤合易二篇之爻又十六兩爲斤者四時成四方之象也則斤爲十六兩古今所同此五十斤四兩當爲八百四兩今權重三百二十七兩則漢之毎百兩今四十兩六錢七分有奇也

漢食官鍾

同上

右高一尺三寸七分深一尺二寸五分口徑五寸二分腹圍三尺四寸二分重三百四十兩耳有環制與前器同銘亦云重五十斤而今權重三百四十兩則漢之每百兩今又爲四十二兩五錢矣與前二種異按三才圖會載漢薰鑪重一斤三兩銘云重五斤六兩以今權較之三兩十二銖八絫有奇當漢之一斤觀此器則六兩一十九銖二絫當漢一斤矣與圖會亦弗合

本朝度量權衡攷圖譜

漢錢起尺

漢書食貨志
大泉五十徑
寸二分
貨布長二寸五分
布
廣一寸
足間廣
二分
首長八分
有奇
廣八分
圓好
徑二
分半
足枝長八分
貨泉徑一寸
皇國曲尺七寸六分

古尺圖

周官祿田考

右圖摹宋秦熺鐘鼎款識冊所載冊又載尺底篆文銘云一周尺漢志鎦歆銅尺後漢建武銅尺晉前尺並同按宋高若訥依隋志定十五等尺第一為周尺即此也詳蔡氏律呂新書蓋此於後人所定周尺中為近古且最著云

清縱黍今尺七寸一分六釐九毫八絲一忽强

晉銅尺 即上所古尺

積古齋鐘鼎款識

周尺漢志鎦歆銅尺後漢建武銅尺
晉前尺並同

右晉銅尺銘十九字據宋王氏款識搨本摹入 沈彤下略 所摹銘文建下一字正作武惟首多一字係誤衍

清縱叅今八七寸四分

漢建初銅尺

積古齋鐘鼎款識

慮俿銅尺建初六年八月十五日造

江寧周槳云曲阜孔氏所弆銅尺重今廣法平十八兩

面廣準此尺一寸側厚準此尺五分

清裁衣尺六寸七分

法隆寺藏撥牙尺

西寺藏撥牙尺

東寺藏梓竹尺

宋市尺圖　即大府寺布帛尺

尺樣

一寸	二寸	三寸	四寸	五寸

續古摘奇算法　朝鮮刻本

清康熙二種尺

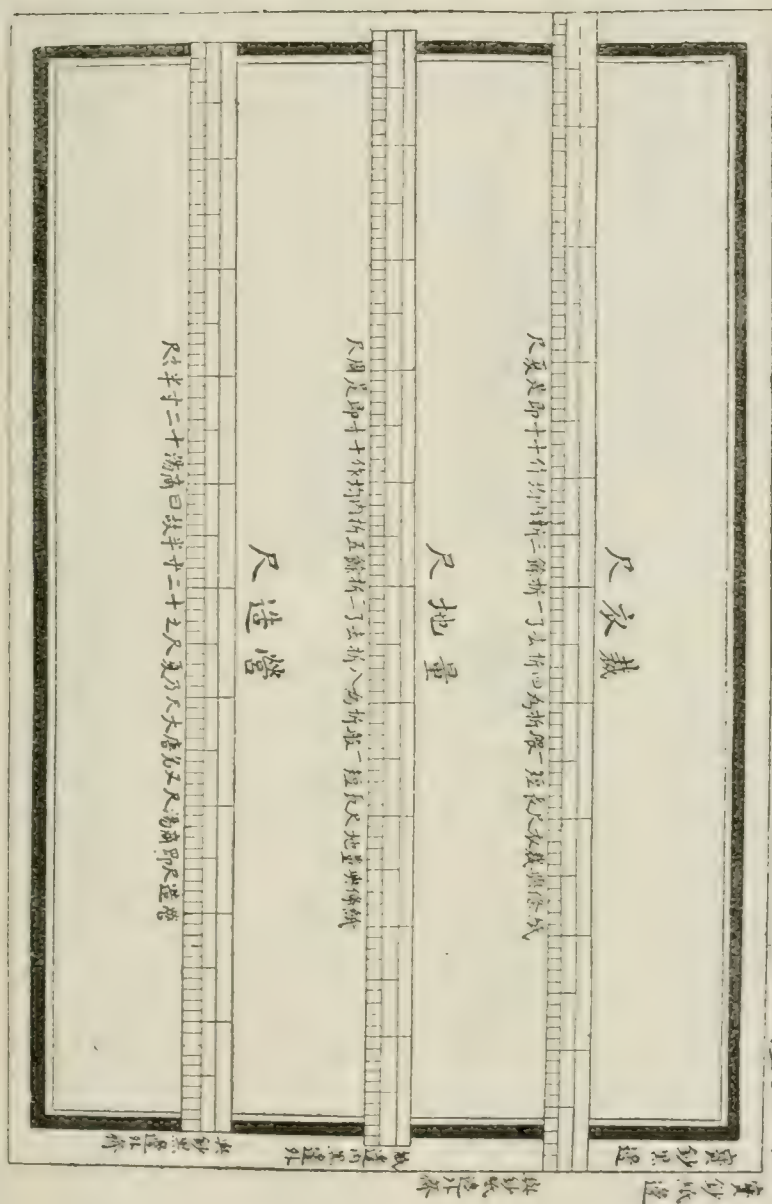
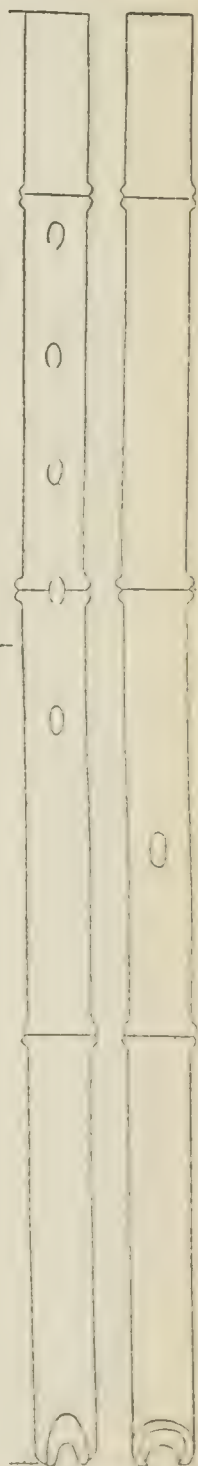
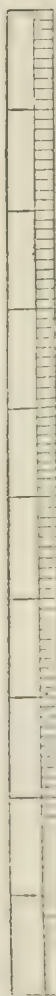
黍ハ縱横トモ各一寸間十粒ヲ容ルヽナリ

律呂正義

横黍尺

縱黍尺

古尺

今尺

雜令曰一尺二寸爲大尺一尺

封演錢譜曰乾元重寶重輪錢徑一寸四分

封演錢譜曰乾元當十錢徑寸二分

按スルニ無垢淨光大陀羅尼經一卷唐ノ則天皇后ノ時天竺ノ沙門彌陀山等譯ス宋藏元藏ニハ過字函ニアリ高麗藏ニテハ知字函ニアリ明藏ニテハ彼字函ニアリ

和銅五年寫經　紙長曲尺一尺六寸一分餘、廣七寸六分餘

大般若波羅蜜多經卷第廿三

藤原宮御宇　天皇以慶雲四年六月
十五日登遐三光慘然四海遏密長屋
殿下地極天倫情深福報乃為
天皇敬寫大般若經六百卷用盡酸割
之誠焉

和銅五年歲次壬子十一月十五日庚辰竟

用紙一十七張　北宮

是ハ長屋王文武天皇ノ御爲ニ寫シ奉リ給ヒシ經ナリ長屋王ハ天武天皇ノ御孫高市親王ノ御子ニテ文武天皇ノ御從弟ナリ後罪アリテ天平元年二月死ヲ賜リテ自盡シタマヘリ

長一尺九寸廣八寸九分

瑜伽師地論卷第七十

維天平十二年歲次庚辰三月十五日正三位藤原夫
人奉爲　亡考贈左大臣府君
敬寫一切經律論各一部莊嚴已訖
設齋敬讃藉此勝因　伏願府君道濟
迷途神遊淨國　登上品陶開悟妙
蔵無垢
聖朝萬壽國土清平百辟盡忠兆人安樂及
檀主藤原夫人常遇善縁必成勝果俱出
塵勞同登彼岸

藤原夫人名詳ナラズ天平九年二月戊午正三位ニ敘シ寶字四年正月辛卯薨ス正一位ヲ贈ルト續日本紀ニ見エタル夫人ナリ亡考贈左大臣府君トハ房前公ヲ云ヘルナリ

天平二年寫　紙長一尺六寸一分餘、廣八寸四分有奇

大般若波羅蜜多經卷第五百十五
天平二年歲庚午三月上旬始寫大般若經一部
　　　　　　　　　　　　　　　　方平羣郷都善臣足嶋
羅蜜多經

平羣郷ハ大和國平羣郡ニアリ都善臣足島解信共ニ考無シ

大集經卷第七

敬寫經一部
　　　　　　　　　　　　書寫大納言行
右以長門國司日置山守家刀自
二首郡爲父母敬寫奉如件
　　　　　　　　　　天平勝寶四年二月上旬

華嚴八會剛目章一卷

天平神護元年四月廿二日東大寺僧興
顯此書字者重內□不又當成眞佛子迴
此功德施法界皆願當得寂靜樂

妙法蓮華經卷第二

若夫法海洞曠辟彼滄溟慧日高明等斯
宣曜受持頂戴福利无邊讀誦書寫勝利
難測是以大法師諱行信平生之日至心發願
敬寫法花一乘之宗金鼓滅罪之文般若
真空之教瑜伽五分之法合貳仟漆伯卷經
奉翊 聖朝 退報四恩貴族萬品然能體如
如淨雲之命似電光未畢其事今王從化弟子
孝仁等不勝風樹之傷敬奉先願仰願桂畏
聖朝金輪之化与乾坤元動長遠之壽與劫
石弥遠 退願萬家四恩抗但槃之山坐菩提
之樹位成灌頂力奮降魔廣及法界六道
有識離苦得樂奇登覺道
神護景雲元年九月五日敬奉寫竟

行信ハ天平十年七月三日律師ニ任ジ
天平勝寶二年ニ寂スト七大寺年表ニ
見ユ孝仁事跡詳ナラズカヽル漢文ニ
掛マクモ畏コキト云シコト珍ラシ漢
文ナガラサスガニ朝廷ヲ仰ギ尊ミ奉
リシコト嘉尚スベキコトナリ

佛說阿難四事經

維神護景雲二年歲在戊申五月
十三日景申弟子謹奉為
先聖敬寫一切經一部工夫之莊
嚴畢矣法師之轉讀盡焉伏願藐
山之風猶向蓮場而鳴鑾汾水之
龍駱之香無而留影迹於不日之了
義永證弥高之法身遠登存正覺
周動植同被景福共沐禪流蔵乘
因教作頌曰
非有非仁誰明正法惟朕仰止給修
慧業權門剎廣子拔苦知力因妙果
登岸難封不居之歲月式垂同塵
之頌輪

此經ハ孝謙皇帝御父聖武皇帝ノ御爲
ニ寫サセ給ヒシ經ナリ御跋ニ先聖ト
詔ヒシハ即聖武皇帝ノ御事ナリ續日
本紀ニ神護景雲元年八月丙午從五位
下若江王外從五位下秦忌寸智麻呂並
爲寫一切經次官トアルハ此經ヲ寫サ
セ給フニヨリテ其事ヲ檢校スル官人
ヲ任ゼラレシナリ

頂頼王經一卷

贈從一位右大臣兼行皇太子傅中衞大將藤原朝臣

發願延暦十六年六月十一日

コノ經ハ右大臣繼繩公ノ誓願ニテ寫シタル經ナリ（繼繩公ハ續日本紀ナ修シ總裁ナリシ）日本後紀ニ延暦十五年七月乙巳右大臣正二位兼行皇太子傅中衞大將藤原繼繩薨繼繩者右大臣從一位豐成之第二子也ト云ヒ十一月壬辰賜故右大臣贈從一位藤原朝臣繼繩度七人トアレバ十一月ヨリ前ニ贈位アリシナリコノ經ハ此右大臣ノ發願アリテ果サレザリシナ薨ゼラレシ後小祥ノ追福ニ寫シタルモノナルベシ

大般若波羅蜜多經卷第四百卅

無究殃而不消無福樂而不成
者般若之翁言真空之妙典
被稱諸佛之父母聖賢之師
範也所以至誠奉寫大般若
經一部六百卷三世大覺十
方賢聖咸共證明我理當之
勝類必定成就貞觀十三年歳次辛卯
三月三日橿原前上野國權大
目從六位下安倍朝臣小水麻呂

法華經讃卷第二

弾正台少疏從八位上勲十二等佐縣連僧麿以神龜五年歳
次戊辰九月其日己亥永逝春樹偏嗣宗督恭續泉
學拏踊地極天倫情深重報乃為慈父推當寫
藥師彌勒菩薩一鋪 經七 法華經七卷 最勝王經十卷 音訓二卷
般王經一卷 摩訶摩耶經一卷 仏頂經二卷
用盡酬劉之誠焉 奉寫畢
竊以法海頤邃不設船檝奚以度矣彼岸峻險
不攀枝梯豈致登哉是以波瀾史生倉橋部
造麻呂秋豪發願為恩婦寳字并老母齋帳兵
卆三年乙未五月朔代中廿三日庚午位於族宅敬造尊行
仰義因旅小端功德勇從無始積羅明鏡流辯
為實披妙哀懸攝受

稱讃大乘功徳經

皇后藤原氏光明子奉爲
尊考贈正一位太政太臣府君尊妣
贈從一位橘氏太夫人敬寫一切經論
及律莊嚴既了伏願憑斯勝因奉
資冥助永庇菩提之樹長遊般若
之津又願上奉 聖朝恒延福壽
下及寮采共盡忠節又光明子自
發誓言弘濟沉淪勤除煩障妙窮
諸法早契菩提乃至傳燈無窮流
布天下聞名持卷獲福消災一切
迷方會歸覺路

天平十二年五月一日記

元龜內侍所量　出集古圖

宣字樣印量　出集古圖

本朝度量權衡攷 附錄卷下之下

播磨國姫路野里村芥田五郎右衛門所藏古升

播州
芥田五納

元亀元年八月十三日
内横五寸

内立弐寸五分

度量衡說統

最上德內著

度量衡說統序

學問之所以貴者、以其能實用也、古者育才養德、莫不皆由學焉、學者所業、文行忠信、禮樂刑政、皆屬經國事實矣、及澆世、學術輕薄、斥有用之業爲俗務、故才子多從事於詩賦音韻之間、送生涯於無用之浮華、不才者安於簡易、坐談性理、以掩其拙、高說心術、而飾其陋、或自顧其心與行與事、豈得不恥其言乎、最上德內者獨不然、嘗訪余奚疑塾、語次及度量衡、德內慨然曰、是先聖人所以治天下之本、在先正此器矣、是故先儒爲之、考證彼此同異、古今沿革者、不一而足、然能撰全書者、特物氏兄弟度量衡考、山田宗俊權量撥亂也、徠翁考度量、算數至衡不合、是以遺之、不著考焉、其弟觀雖著衡考、續貂不足道焉、若撥亂、博則博矣、精則精矣、猶不能無少差失、君子爲憾焉、某欲爲撰一書以正之、先生其爲何如、余曰、物氏考謬誤固多、著撥亂宗俊者、則吾門人也、作之序者則予也、差失之有無、吾亦不能逭厥功過、然是書之成、距今二十餘年、宗俊既就木、不得起諸九原而正之、嗚呼其已矣乎、吾子能正之今日、以便於後學、則物山兩子之忠臣、而一大有用之業也、豈可不勉焉乎、於是德內研精礪志、著度量衡說統六卷、乃求序於余、余閱之、其考證破微、固亾論也、至其謂周秦之時、升斗未名量也、及銅鐵年

久、而其質短者展而長、重者減而輕、故古銅鐵器、皆輕ニ於其銘斤兩一、長ニ於其識尺度一、古人未ニ嘗言及一卓說也、又若ニ其度量算法與レ衡二相合一、是大多ニ乎從前諸書一處也、德內爲レ人、剛直質實、處レ事精力過ニ絕于人一、其學術實用出レ自レ此焉、是書有益、可ニ以レ此推知一焉、果使ニ一ニ世輕薄無用學者一見ニ是書一、而知ニ學問之貴在ニ乎斯一焉、則有ニ恬然面目一者、豈不ニ亦慚死一乎

文化改元甲子春二月小盡

北山山本信有撰

度量衡說統總目

卷之三

卷之四

卷之五

度量衡說統總目終

度量衡便覽

周尺	今七寸五分許	前漢尺	如上
後漢尺	今七寸七分許	魏尺	今八寸零六釐强
晉前尺	今七寸七分許	晉俗間尺	今八寸零二釐强
晉後尺	今八寸一分七釐强	宋代人間尺	如上
後周玉尺	今八寸九分一釐强	隋市尺	今九寸八分一釐强
唐累黍尺	今八寸一分許	唐常用尺	今九寸七分許
宋布帛尺	今一尺	明量地尺	今九寸九分强
明裁衣尺	今一尺零三分强	明營造尺	今九寸七分許
清量地尺	今一尺零八分許	清裁衣尺	今一尺一寸四分八釐
清小尺	今九寸一分四釐		
周　一鍾	今六斗五升零七勺强半	一鬴	今六升五合零有奇
一區	今一升六合二勺强半	一豆	今四合零有奇

前漢一斛　今一斗零五合四勺有奇	一斗　今一升零五勺弱半	一升　今一合零半强
後漢一斛　今一斗一升四合九勺弱	一斗　今一升一合五勺弱	一升　今一合一勺弱半
魏晉一斛　今一斗一升七合弱	一斗　今一升一合七勺弱	一升　今一合一勺强半
宋齊一斛　今一斗四升一合九勺有奇	一斗　今一升四合二勺弱	一升　今一合四勺有奇
梁陳一斛　今一斗七升三合四勺弱	一斗　今一升七合三勺弱半	一升　今一合七勺弱半
後周一斛　今一斗六升四合四勺弱	一斗　今一升六合四勺弱半	一升　今一合六勺弱半
隋唐一斛　今三斗四升二合二勺有奇	一斗　今三升四合二勺有奇	一升　今三合四勺有奇
宋一斛　今三斗零八合有奇	一斗　今三升零八勺有奇	一升　今三合一勺弱
元明一斛　今四斗四升有奇	一斗　今四升四合有奇	一升　今四合四勺有奇
淸木斗一斛今五斗六升四合許	一斗　今五升六合四勺許	一升　今五合六勺弱半
周　一鋝　今十四錢六分六釐不盡	一舉　今七錢三分三釐不盡	一捷　今三錢六分六釐不盡
前漢一斤　今三十五錢許	一兩　今二錢二分許	一銖　今九釐强
後漢魏晉一斤　今三十八錢許	一兩　今二錢三分强半	一銖　今九釐强
唐大秤一斤　今百三十六錢有奇	一兩　今八錢五分有奇	一銖　今三分五釐許
宋元明一斤　今百五十二錢許	一兩　今九錢五分許	一銖　今三分九釐强半

清部頒一斤　今百六十八錢許

一兩　今十錢零五釐許

一銖　今四分三釐強半

度量衡便覽　終

度量衡說統　卷之一

出羽　最上德內著

辨二周時之尺一

禮記鄭玄註曰、周尺之數、未二詳聞一

晉書、依二周禮一制レ尺、所謂古尺也

鄭玄精二於算數一、而未レ詳二周尺之長短一、可レ見下漢人距レ周不レ遠、而不レ能レ審二其事實一、亦如上レ斯矣、矧魏晉以後、依二周禮一制レ尺、豈無二毫釐之差一乎、雖レ曰三晉時得二周時玉尺一、其實漢代之物也、故荀勗新律反短一黍許也、世說曰、有二一田父一、耕二於野一、得二周時玉尺一、便是天下正尺荀試以校二己所レ治鐘鼓金石絲竹一、皆覺二短一黍一、由レ此觀レ之、唐書曰二古玉尺一、玉海曰二周時銅尺一、皆不レ得レ信矣、又按律事鈔曰、姬周尺十寸爲レ定、亦不レ可レ從矣、鄭玄漢人、而不レ知二周尺之數一、然六朝以降人、而何知三其爲二定乎

辨二前漢之尺一

晉書曰、勗銘二其尺一、曰晉泰始十年、中書考二古器一揆二校今尺一長四分半、所レ按古法有二七品一、一曰、姑洗玉律、二曰、小呂玉律、三曰、西京銅望臬、四曰、金錯望臬、五曰、銅斛、六曰、古錢、七曰、建武

銅尺、姑洗微强、西京望臬微弱、其餘與ニ此尺一同

隋書曰、始平掘レ地、得ニ古銅尺一、歲久欲レ腐、以校ニ荀勗今尺一、短レ校四分

尺之訛長、及レ久、其訛愈長矣、前漢世古尺全存、及ニ後漢始一訛替、然其訛未ニ甚多一、至レ魏始長四分半也、晉荀勗新尺者、與ニ後漢建武銅尺一同、故西京望臬微弱也、可レ見下前漢尺與ニ後漢尺一、稍有中差矣、西京望臬者、實是前漢之舊物、上古遺尺也、其一尺當ニ我邦七寸五分許一、推求之辨、詳ニ于尾卷一、西京望臬外之六品者、蓋後漢之物、故皆同ニ勗尺一也、又晉時掘レ地、得ニ古銅尺一、雖レ未レ能レ辨ニ何代之物一、必漢代前後之尺也、凡金銀銅鐵、皆經レ年漸伸、銅鐵最殊甚、今其欲レ腐者必甚、故長ニ於勗尺一也、非ニ勗尺之所ニ以短一也

辨ニ後漢之尺一

隋書曰、王莽時劉歆斛尺、曰、王莽時銅斛尺、曰、建武銅尺、曰、祖冲之銅尺

後漢光武時、其尺已訛長也、但不レ過ニ一二分一、故於レ律者、其濁不レ觸ニ於耳一、於レ度者、其冕不レ垂ニ於身一、時人油然、不レ知ニ其伸一、以爲猶ニ古法一也、至レ魏長半寸許、吹レ律則人知ニ其濁聲一、制レ冕則人知ニ其幅長一、及ニ晉不レ得レ不レ改、始制ニ新尺一也、果後漢時不レ變、則魏代僅四五十年、何卒然有ニ半寸之長一乎、我邦天明四年、於ニ筑前國一、掘ニ光武世之金印一、方今之七分八釐也、蓋後漢之一寸也、雖レ然、金銀亦不レ可レ不レ伸、故今於ニ前漢尺一加ニ一分一、以ニ七寸七分許一、爲ニ後漢尺一也、金銀經レ年漸伸之辨、出ニ于

尾卷一

辨ニ魏杜夔尺一

晉書曰、至レ魏尺長ニ於古一四分有餘

隋書曰、劉徽注九章云、王莽時劉歆斛、弱ニ於今尺一四分五釐

魏尺者、杜夔以調レ律也、故或曰ニ杜夔尺一也、然長ニ於古一四分半、是後漢時所ニ訛長一也、杜夔不レ知ニ其訛長一以爲ニ古之物一凡漢魏六朝人、皆本ニ於古樂一爲レ務、世世調ニ鍾律一先制レ尺、莫ニ遂得ニ周尺一也、魏一尺、當ニ後漢一尺四分七釐一即前漢一尺七分五釐也、當ニ我邦八寸零六釐有奇一

辨ニ晉之前尺一

晉書曰、武帝泰始九年、中書監荀勗校ニ大樂一八音不レ和、始知ト後漢至レ魏、尺長ニ於古一四分有餘上勗乃部ニ著作郎劉恭一依ニ周禮制尺一所謂古尺也、依ニ古尺一更鑄ニ銅律呂一以調ニ聲韻一以レ尺量ニ古器一與ニ本銘尺寸一無レ差

世降好ニ濁聲一漢末及魏、律呂長濁、而人皆爲レ是、荀勗始知ニ八音不一レ和、制ニ新尺一也、此尺與ニ後漢初建武中之古器一相合、後世名曰ニ晉前尺一梁代爲ニ尺之準一然千古先哲、未レ知レ非ニ周前漢之尺一其論不レ決ニ於今一矣、若周前漢之尺、則應レ中ニ前漢舊物一不レ然而建武銅尺者密合、西京望臬者微弱也、荀勗尺、實是後漢初之尺、雖レ有ニ訛長一未レ多、而律呂無レ徵ニ於一口耳、故汲郡盜賊、發ニ六國魏襄王

冢、得玉律鐘磬、其聲韻應荀勗之律也、當我邦七寸七分許

辨晉之後尺

晉書曰、元帝後江東所用尺、比晉前尺一尺六分二釐、荀勗新尺、惟以調音律、至於人間、未甚流布、故江左及劉曜儀表、並與魏尺略相準

荀勗新尺、惟以調律耳、然未及量衡、故人間不流布也、初荀勗調律時、人稱其精密、唯陳留阮咸、譏其聲高、而後始平掘地、得古銅尺、果長勗尺、時人感阮咸之妙、雷同滅否、或以長爲是、故東晉元帝廢荀勗尺、而撰漢末魏之尺、頒于江東、然復訛其制、長於魏尺、當我邦八寸一分七釐有奇

辨晉俗間尺

晉書曰、漢章帝時、零陵文學史奚景、於泠道縣舜祠下得玉律、度以爲尺、相傳謂之漢官尺、以校荀勗尺、勗尺短四分、又曰、始平掘地、得古銅尺、歲久欲腐、不知所出何代、果長勗尺四分

世說曰、有一田父耕於野、得周時玉尺、便是天下正尺

漢魏未有異尺之論也、晉荀勗始制新尺、因而人間雷同滅否、毎得古器、度以爲尺、其漢官尺、是漢以前之物、雖然、度玉律作尺、必不無差、凡上古玉律、不可知其長短、殊如始平古銅尺欲腐者、豈有定準乎、按後漢章帝時、其尺已訛長、而未知其誤、故後漢人之言、亦不足取

矣、又田父之周時玉尺者、蓋後漢之物也、皆是晉代人間不レ擇二減否一、而所二私用一也、當二我邦八寸零二釐有奇一

辨二六朝諸尺一

隋書曰、錢樂之渾天儀尺、後周鐵尺、開皇初調二鍾律尺一、及二平レ陳後一、調二鍾水尺一、此宋代人間所レ用尺、傳入二齊梁陳一、以制二樂律一、與二晉後尺、乃梁時俗尺、劉曜渾天儀尺一、略相依近、當下由二人間恒用一、增損訛替之所上レ致也

又曰、平レ陳後、廢二周玉尺律一、便用二此鐵尺律一、以二一尺二寸一、卽爲二市尺一

自レ宋至レ隋、尺名殊多矣、鐵尺有レ三、宋氏鐵尺、宋代人間鐵尺、後周鐵尺、是也、梁尺有レ三、法尺、表尺、俗間尺、是也、後魏尺有レ三、前尺、中尺、後尺、是也、隋是開皇始律尺、平陳後律尺、萬寶常之水尺、平齊始宣布尺、平齊後頒二于天下一尺、或蔡邕銅龠尺、或東後魏尺、悉見二于隋志一、皆自二宋代人間一、傳入二齊梁陳一、其本是一晉後尺也、其增損訛替、由二人間恒用一也、唯後周玉尺者、保定中掘レ地、得二古玉斗一、度レ之以作レ尺、不レ俟二前代傳來一、故甚長、比二晉前尺一一尺一寸四分八釐一、是以隋氏廢レ之、而用二宋代人間鐵尺一、此尺本晉氏頒二于江東一、所謂晉後尺也、後周玉尺、當二我邦八寸九分一釐有奇一、隋市尺當二我邦九寸八分一釐有奇一

辨二唐累黍尺一

唐書律曆志曰、嘉量之銘曰、大唐貞観十年、歲次二玄枵一月旅二黃鍾一、依二新令累黍尺一、定レ律校レ龠、成二茲嘉量一、與二古玉斗一、相符同律、度量衡協律郎張文收奉レ勅脩定、張文收所謂古玉斗者、不レ知三所レ出二何代一、雖レ然、後周隋之物、則不レ足二稱曰一レ古也、所レ指必是漢以前也、累黍而制レ尺、自以爲下與二漢以前一相符上矣、物氏以爲レ承二後周玉尺一、甚誤矣、權量撥亂、辨二物氏之誤一、亦詳也、按、魏晉以後之尺、或得二古玉律一、度レ之以作レ尺、或得二古玉尺一、或得二古銅尺一、皆所レ制之尺失二乎長一、況隋唐距レ古愈遠、而惡可レ得二精密之數一乎、既後周得二古玉斗一、度レ之作レ尺、其訛長甚、可レ徵矣、凡唐人以爲得二古法一、實是漢末魏晉之法也、此累黍尺者、漢官尺晋後尺之類也、由レ此試求レ之、兩尺平分、得二昜尺一尺零五釐有奇一、爲二唐尺一、當二我邦八寸零八釐有奇一、其大尺、當二我邦九寸七分有奇一、比二諸隋尺一、其短一分有奇也、又以二開元錢一、校二考其中者一、徑八分一釐許、六因五除、而得二九寸七分有奇一、再稱レ重以推二求尺一、則得二九寸六分五釐有奇一、詳辨二于下一、皆大率相符、故累黍尺、以二我邦八寸一分許一爲レ定也

辨二唐常用尺一

六典曰、凡度以二北方秬黍中者一、一黍之廣爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、一尺二寸爲二大尺一常用尺、乃累黍尺一尺二寸也、當二我邦九寸七分許一也、和州法隆寺所レ藏之聖德太子携來唐大尺者、九寸八分有奇、其一分有奇、所二訛替一也、法隆寺所レ藏者、銅尺、凡銅器經レ年漸伸、詳辨二于尾卷一矣、又先輩皆云、我邦曲尺承二唐制一、余謂レ不レ然矣、推古天皇御宇、聖德太子等屢通二中華一、唐高祖初、

聖德已薨、而後貞觀十年制ニ大尺一、然則我邦所レ玩之尺、蓋隋制也、以レ此觀レ之、法隆寺之尺、亦恐是隋尺矣乎

辨ニ宋布帛尺一

朱文公家禮曰、周尺當ニ三司布帛尺七寸五分弱一、當ニ浙尺八寸四分一、又曰、三司布帛尺、即是省尺、又名ニ京尺一、當ニ周尺一尺三寸四分一、當ニ浙尺一尺一寸三分一

三司布帛尺、比ニ周尺一尺三寸四分一、則其周尺者、當ニ三司布帛尺七寸四分六釐有奇、浙尺八寸四分三釐有奇一也、各分下有ニ尾數一、然不レ言ニ釐毫一、是所ニ以擧ニ大氐一也、又周尺比ニ浙尺八寸四分一、則三司布帛尺、當ニ周尺一尺三寸四分五釐有奇一、惟不レ擧ニ其尾數一、今從ニ于此一焉、按所謂周尺、是與ニ西漢以前之尺一暗合、實因ニ神主式一傳ニ宋代一也、以ニ其一尺三寸四分五釐一、推ニ求宋量法一、亦能相符、再按、周尺比ニ布帛尺七寸五分弱一、又比ニ我邦七寸五分許一、然則宋尺與ニ我邦尺一全同、由レ此査ニ年表一、彼宋代初、即我邦冷泉院御宇也、帝厚信ニ佛法一、廢ニ天皇號一、武將多田氏、亦陷ニ佛家一、或奝然入ニ宋朝一、獻ニ孝經一、或寂照入レ宋、當ニ此時一、我朝廷皆宋學也、以レ此觀レ之、我邦當レ依ニ宋尺一、竊意聖德攜ニ來隋尺一、傳至ニ冷泉院一、後亦用レ之、以按ニ宋朝尺一亦不レ異、故我朝尺不レ改與

辨ニ宋四等尺一

玉海曰、景祐三年七月己亥、命ニ翰學丁度知制誥胥偃司諫高若訥翰琦一、同詳定ニ黍尺鍾律一、十月丁卯、度

等言、奉詔按四等尺、古之制尺非特累黍、必求古雅之器、以參按之、晉泰始十年、荀公曾以古物七品按尺度、隋志載前代尺度、十有五等、然皆以晉之前尺爲本、以其與周尺・劉歆銅斛尺・建武銅尺相合也、臣以爲古物有分寸、明著史籍、唯有錢法、今司天監景表尺、和峴所謂西京銅望臬者、洛陽舊物也、五代不聞測景、此即唐尺、今以貨布・錯刀・貨泉・大泉等按之、則景表尺長六分有奇、略合宋氏周隋之尺、是銅斛與貨布等、尺寸灼然可用矣、今必求尺度之中、當依漢錢分寸、若以爲太祖詔和峴等、用景表尺、修金石稽合唐制、以示貽謀則可、且依景表舊尺俟妙達鍾律者攷正、其王朴律準尺、比漢錢尺長二分有奇、比景表尺短四分、即前代未嘗施用、復經太祖朝更改逸瑗保信、幷照所用大府寺等尺、其制彌長、去古彌遠、又逸進周禮度量法、議欲先鑄嘉量、其說疎舛、謹再定景表尺一、及以漢錢按定尺二

景表尺者、太祖詔和峴等修鍾律、和峴云、此即唐尺也、然以漢錢按之、長六分有奇、所以然者、以漢尺與唐尺不同也、後漢尺、當我邦七寸七分許、唐尺、當我邦八寸一分有奇、宋人未達唐書及六典、皆云、唐大尺當古尺六之五者、不可信用之義、而以唐尺爲古尺、故不合也、又玉海曰、景表尺比晉前尺、長六分三釐、與晉後尺同、此說爲晉前尺與唐尺全同者、是亦唐志以來之誤矣、若晉前尺唐尺全同、則晉前尺是後漢尺、何貨布・錯刀・貨泉・大泉等、後漢舊物、皆不合乎、唯景表尺與晉後尺同、今從之、當我邦八寸一分七釐、又按本論丁度等奏議、以漢錢

尺一爲レ佳、故曰、求レ尺度レ中、當レ依二漢錢分寸一也、此尺當二我邦七寸六分半强一、求二之術一用二晉後尺一、減二六分有奇一也、律準尺長二於漢錢尺一二分有奇、當二我邦七寸八分四釐許一、大府寺尺是布帛尺、以上四等尺、皆係二宋代去就一也、又本論曰、逸瑗保信者、律呂新書亦載二阮逸胡瑗尺鄧保信尺一、攷二之於它書一、其數不二符合一、疑比校之不レ整也、大晟樂尺亦復然、蓋皆不レ與二於世用一、因而略二于此一焉

辨二明量地尺一

朱載堉曰、銅尺即量地尺、比二裁衣尺一短四分、又曰、寶源局所レ鑄量地銅尺、五尺爲レ步、今五尺、乃夏尺之六尺四寸、周之八尺也

曰、量地尺比二裁衣尺一短四分、言量地尺之一尺、即裁衣尺九寸六分也、按、王制及說文所レ載、周以二八尺一爲レ步、朱載堉以爲二今五尺一、即周八尺也、是寶源局尺、所三以協二古田制一故也、又按、明之量地制、亦承二古法一也、圖書編曰、自二漢武一至レ今、以二二百四十步一爲レ畝、又攻二之於墾田一、漢時八百二十七萬餘頃、明朝八百五十萬餘頃、其間增減無二大差一、是量地尺之承二唐大尺一、何疑之有、唯訛替、長二於營造尺一、當二我邦九寸九分强一

辨二明裁衣尺一

丘濬家禮儀節圖曰、周尺比二今鈔尺一、六寸四分弱

算法統宗曰、古弓五尺、今以二鈔尺一校レ之、只有二四尺八寸一

鈔尺、即裁衣尺也、此尺之九寸六分。即量地尺一尺也、古弓五尺、即量地尺五尺、又比ニ此尺一四尺八寸也、丘濬家禮云、周尺者、蓋王制及說文、所謂周制以ニ八寸一爲レ尺之尺也、依ニ算法一攷レ之、置ニ八寸一、乘ニ九寸六分一、以ニ一尺二寸一除レ之、得ニ六寸四分一、故云、周尺比ニ今鈔尺六寸四分一、亦可レ徵矣

辨ニ明營造尺一

朱載堉曰、營造尺之八寸、裁衣尺之七寸五分、又曰、唐人謂ニ之大尺一由レ唐至レ今用レ之、名曰ニ今尺一、又名ニ營造尺一

此尺、比ニ量地尺一、其短二分三釐也、按、營造尺。量地尺、並其原、蓋一唐大尺也耳、但量地尺者、以レ銅鑄レ之、故經レ年則訛替多矣、曲尺者以レ鋼鍛レ之、故訛替自少矣、本是一物、而成ニ二名一者也、再按、銅尺、是天下之政器、而訛多、曲尺、是俗間之玩器、而訛少者何也、凡度ニ天下之地一、自公法、故不レ爭ニ毫釐一、如ニ俗間木匠之業一尤賤、故爭ニ塵埃一也、當ニ我邦九寸七分許一、度量衡考曰、唐大尺。明營造尺。吾邦今尺全同、是亦物氏之泥ニ朱載堉一者也

辨ニ清朝諸尺一

度量衡考曰、近得下海舶所ニ齎來一、今江南官斗上、步弓裁衣尺弓、當ニ吾邦今五尺四寸一

享和改元辛酉正月、江南商船二艘、漂ニ到於日向外浦一、其一、船戶彭際順、其一、船戶陳元順、各船上載ニ度量一、其一尺當ニ我邦曲尺一尺一寸六分五釐一、與ニ物氏之說一不ニ關係一矣、按、江南亦廣、隨レ地異

レ尺歟、余所レ言者、一是江南省太倉州鎮字所、張芳亭也、一是江南省蘇州府通字所、王林柯也、又大坂蒹葭堂所レ藏之淸官尺、其裁衣尺者、當二我邦一尺一寸四分八釐一、其金星尺者、當二我邦一尺一寸四分一、其小尺者、當二我邦九寸一分四釐一、由レ此考レ之、物氏所レ校之步弓、蓋營造尺也、淸朝官斗之制、用二營造尺一、見二于大淸會典一、然則其步弓、亦營造尺也與

度量衡說統卷之一終

度量衡說統卷之二

辨二周量名數一

左傳昭三年曰、齊舊四量、豆區釜鍾、四升爲レ豆、各自二其四一、以登二於釜一、釜十則鍾、陳氏三量、皆登レ一焉、鍾大矣、杜氏曰、四豆爲レ區、區斗六升、四區爲レ釜、釜六斗四升、登成也、又曰、登加也、加レ一、謂レ加二舊量之一一也、以二五升一爲レ豆、五豆爲レ區、五區爲レ釜、則區二斗、釜八斗、鍾八斛

按、區二斗、釜八斗、鍾八斛、蓋誤矣、豆五升、區二斗五升、釜一斛二斗五升、鍾十二斛五斗、是陳量也、本文不レ言乎、三量皆登レ一焉、可二以徵一矣、周制四豆爲レ區、四區爲レ釜、古來無レ異、陳氏登レ一焉、量異、始二于此一

辨三升非二周量一

周禮㮚氏曰、量レ之以爲レ鬴、深尺內方尺、而圜二其外一、其實一鬴、其臋一寸、其實一豆、其耳三寸、其實一升

周之量制、迄二六國一、四焉、豆區釜鍾、是也、然有二升者一、非二量名一也、周禮所謂其實一升者、明二其耳之深一、猶レ云二一掬一也、嘉量、非二量悉備者一、故無二容レ區之處一也、唯於レ臋擧二一豆一、於レ耳擧二一升一、以

審ニ大小之狀一、非下計ニ粟米一之設上也、左傳云、四升爲レ豆、乃以ニ四掬一充レ豆、非ニ周時之量制一者也、按小爾雅曰、掬一升也、掬言以ニ兩掌一承レ之、曲禮曰、受レ珠者、以レ掬ニ疏手中一也、由レ此觀レ之升掬也、是以升之爲レ言、上也、登也、易序卦傳曰、聚而上者、謂ニ之升一、可ニ以徵一矣、考工記曰、觚三升、又禮器制度曰、觚大二升、皆無ニ定準一、唯古法布縷之數、曰升、雜記曰、朝服十五升、是也、漢改レ量、以レ升爲ニ粟米之量數一、廢ニ豆區釜鍾之名一、而特用ニ其升一者、於レ是漢儒誤爲ニ古量名一、以譯ニ周時之量法一也、非下如ニ湯藥類一者上、豆以下之小量、猶下用ニ器物一量上レ之、名曰レ升、此非ニ官用之器一也、其升、大率十二、當ニ一豆一、詳辨ニ于藥升之處一

辨ニ豆區釜鍾一

周禮㮚氏曰、㮚而不レ稅、其銘曰、時文、思索、允臻ニ其極一、嘉量既成、以觀ニ四國一、永啓ニ厥後一、玆器維則

先王之制レ量、固非ニ稅租之設一、以ニ文德一始所ニ思求一、必緣ニ民之利一、致ニ其樞極一、顯ニ永爲ニ法則一也、其所ニ思求一者、即豆區釜鍾也、是民之利也、是民之極也、是民之則也、如レ左

豆者、以ニ中人一頓食一爲レ名也、祭器亦有ニ豆者一、明堂位曰、夏后氏以ニ楬豆一・商玉豆・周獻豆一、是也、其常用之物、以レ木作レ之、肉器也、鄉飲酒義曰、六十者三豆、七十者四豆、八十者五豆、九十者六豆、所ニ以明養一レ老也、可ニ以見一矣、唯有ニ大豆一、有ニ小豆一、均レ之以ニ四掬一充レ之、是中人之一頓食也、

故假以爲二量之首一也、考工記梓人曰、食二一豆肉一、飮二一豆酒一、中人之食、可二以徵一矣
區者、以二一小屋之食一爲レ名也、師古注漢書曰、區者、小屋之名、若二今小菴屋之類一、豆者、以二中人一頓食之數一立レ制、承レ之以二一小屋之食一立レ制、故以レ區爲レ名、爾雅譯器曰、王十謂二之區一、是又別一稱目也
釜者、以二邑長之一食一爲レ名也、釜或作レ鬴、即鍑屬也、人家炊食之器也、鼎鬲類有レ足小器也、釜鍑類無レ足大器也、蓋邑長之所レ用也、區者、小屋一次食、以二二三人一言レ之、釜者、邑長一次食、以二八九人一言レ之、王制曰、上農夫食二九人一、是也
鍾者、以二一邑之一饗一爲レ名也、鍾說文曰、酒器也、蓋一邑之大器、而壺類也、故爲二量之長一、小爾雅曰、二缶謂二之鍾一、以レ此觀レ之、鍾者、似レ缶而大、但缶以レ土作レ之、鍾以レ金作レ之、周禮曰、㮚氏爲レ鍾、是樂器、與レ此異矣、鍾鐘古字通用、故周禮鐘作レ鍾也

辨二周時量法一

周禮㮚氏曰、量レ之以爲レ鬴、深尺、內方尺、而圜二其外一、其實一鬴、鄭玄曰、四升曰レ豆、四豆曰レ區、四區曰レ鬴、鬴六斗四升也、鬴十則鍾
左傳昭三年、杜氏注曰、四豆爲レ區、區斗六升、四區爲レ釜、釜六斗四升
升者、非二周量名一也、先儒以二當時之物一解レ之也、豆即四升、區即一斗六升、釜即六斗四升、皆無二

異論一矣、方一尺、自二乘之一、更乘二深一尺一、得二一千寸一、爲二一龠積一、以レ四除レ之、爲二一區積一、復以レ四除レ之、爲二一豆積一、如レ左

一豆積者六十二寸半　一區積者二百五十寸　一釜積者一千寸　一鍾積者一萬寸

辨二庾秉籔觳一

論語雍也曰、觚不レ觚、觚哉觚哉、馬融曰、觚禮器、一升曰レ爵、二升曰レ觚

左傳昭二十六年曰、粟五千庾、杜氏曰、庾十六斗、凡八千斛

論語雍也曰、子曰、與二之釜一、請レ益、與二之庾一、冉子與二之粟五秉一、包氏曰、十六斗曰レ庾、馬融曰、十六斛曰レ秉、物氏曰レ聘、禮記曰、十斗曰レ斛、十六斗曰レ籔、十籔曰レ秉、鄭註曰、秉十六斛

小爾雅曰、釜二有半。謂二之籔一、籔二有半、謂二之缶一、缶二、謂二之鐘一、注曰、缶四斛也

周禮旊人曰、豆實三而成レ觳、崇尺陶人曰、鬲實五觳、庾實二觳、註曰、觳讀爲レ斛、受二三斗一、梓人曰、爵一升、觚三升、又禮器制度曰、觚大二升、觶大三升

度量衡考曰、論語邢昺疏載二韓詩一、一升曰レ爵、二升曰レ觚、三升曰レ觶、四升曰レ角、五升曰レ散、觥亦五升、角觸也

庾。秉。籔。觳之類、皆非二官量一、唯賜物、稱二此名數一、固無二定準一也、庾者、杜氏包氏、則十六斗也、鄭康成據二旊人一、爲二二斗四升一、然據二陶人註一、則六斗也、庾已不レ定、則秉仍無レ準矣、說苑善說曰、倉庾盈

而不レ虛、史記文帝紀曰、發二倉庾一、倶謂二藏粟之處一、㲉、據二旗人一、則爲二一斗二升一也、據二陶人註一、則爲二三斗一、籔、據二小爾雅一、則爲二十五斗一、據二聘禮記一、則爲二十六斗一、皆亦無二定準一矣、觚、據二梓人一、則爲二三升一、韓詩從レ之也、據二禮器制度一、則爲二二升一、馬融從レ之也、觚本是酒器也、酒無レ量、不二必定法一矣、按、周禮四秉曰レ筥、十筥曰レ稯、十稯曰レ秅、論語註六百四十斛曰レ稯、倶與二十六斛曰レ秉者一同、然秉是禾之稱也、詩曰、禾三百億兮、鄭氏曰、三百億、禾秉之數也、稯禾秉𥝱米之類、必不レ可レ有二定數一矣、再按二論語子路篇一、斗筲人、註曰、筲竹器、容二斗二升一、周禮籩人註、籩竹器如レ豆者、其容實皆四升之類、必不レ與二嘉量制一、若算レ之、則四二分周量一豆積一、此爲二一升積一也

辨二古代里制一

書益稷曰、弼二成五服一、至二于五千一、州十有二師、外薄二四海一、咸建二五長一

又禹貢曰、五百里甸服、百里賦納レ總、二百里納レ銍、三百里納二秸服一、四百里粟、五百里米、五百里侯服、百里采、二百里男邦、三百里諸侯、五百里綏服、三百里揆二文教一、二百里奮二武衛一、五百里要服、三百里夷、二百里蔡、五百里荒服、三百里蠻、二百里流、東漸二于海一、西被二于流沙一

禮記王制曰、西不レ盡二流沙一、南不レ盡二衡山一、東不レ盡二東海一、北不レ盡二恒山一、凡四海之內、斷レ長補レ短、方三千里

史記秦本紀曰、始皇推二終始五德之傳一、以爲三周得二火德一、秦代周德、從レ所レ不レ勝、方今水德之始、改年

朝賀、皆自十月朔、衣服旄旌節旗皆上黑、數以六爲紀符、法冠皆六寸、而輿六尺、六尺爲步、乘六馬、譙周曰、步以人足爲數、非獨秦制然、索隱曰、管子司馬法皆云、六尺爲步、譙周以爲步以人足、非獨秦制

又曰、分天下以爲三十六郡、正義曰、風俗通云、周制天子方千里、分爲百縣、縣有四郡、故左傳云、上大夫受縣、下大夫受郡

禹開九州、爲五千里者、以中國及戎夷五方言之、其納貢之地、東自東海、西至流沙也、所謂中國者、甸服侯服綏服、即三千里、禮記亦云、自東海至流沙三千里、以此觀之、三代里制、不異矣、初疑王制有以周尺八尺爲步、今以周尺六尺四寸爲步之文、史記有秦以六尺爲步之文、似度制世世有變革也、王制之文、先輩既論之、以爲經文錯亂、詳辨于下、按史記、非始皇改以六尺爲步、唯欲以水德帝于天下、故六尺爲步、亦以爲我德之備者也、譙周註、索隱之說、幷是也、若周八尺爲步、秦改爲六尺、則周之三千里者、當四千里也、攻之漢書、未聞其里數異于上古也、且秦以暴虐幷天下、而未遑開道通渠之業、唯注塡閼之水、溉澤鹵之舄田四萬而已、分天下爲三十六郡、亦廢周制改其名耳、未及刊山引水、教農桑之事、然則三代迄漢興、所指中國方三千里、是斷長補短之數、必無變革矣

周髀算經曰、一衡之間、萬九千八百三十三里三分里之一、即爲百步、漢趙君卿注曰、此數夏至冬至、

相去十一萬九千里、以六間除之得矣、法與餘分皆半之、北周甄鸞曰、求一衡之間、一萬九千八百三十三里三分里之一、法置冬至夏至相去十一萬九千里、以六間除之即得法、與餘分半之得也

一里、乃三百步、故曰、三分里之一、即百步也、然趙君卿甄鸞之二說、無異論、以此觀之、秦漢至六朝、里制不異、亦明矣

辨周時農收

禮記王制曰、制農田百畝、百畝之分、上農夫食九人、其次食八人、其次食七人、其次食六人、下農夫食五人、庶人在官者、其祿以是爲差也

史記河渠書曰、鄭國曰、始臣爲間然渠成、亦秦之利也、秦以爲然、卒使就渠、渠就、用注塡閼之水、溉澤鹵之地四萬頃、收皆畝一鍾、於是關中爲沃野、無凶年秦以富强、卒幷諸侯、因命鄭國渠

漢書食貨志曰、歲收晦一石半、爲粟百五十石、除十一之稅十五石餘、百三十五石

鄭國渠之田、毎畝一鍾者、以上農一畝言之、故無凶年、秦以富强也、六國及秦、畝法不異、至漢以二百四十步爲畝、算之、先置一鍾即六斛四斗、更乘二四、得一石五斗三升六合、見大約、故不任量法 爲漢一畝歲收、是與漢書食貨志相符也、其田下下、歲收不登二釜、則廢之、周禮廩

人曰、不能餐、移民就穀、史記所謂田者、不能償種、久之、河東渠田癈、是此類也、王制五等之上中下、合而三十五人、平分之、乃中農當七人、是中國方三千里農收、一畝之率也、按顏淵之田、六十畝也、歲收六十鍾、除十一稅、而五十四鍾、一人月食四鬴、絲麻鹽酪共終歲大率十鍾、然則不出養育五六人之外、何榮勢之有哉、顏淵死、而顏路請孔子之車、豈不悼乎、學者思諸

辨井田圭田

韓詩外傳曰、古者八家、而井田方里爲一井、廣三百步、長三百步爲一里、其田九百畝、廣一步、長百步爲一畝、廣百步、長百步爲百畝、八家爲隣、家得百畝、餘夫各得二十五畝、家爲公田十畝餘、二十畝共爲廬舍、各得二畝半、八家相保

孟子曰、鄉以下必有圭田、圭田五十畝餘、夫二十五畝方里而井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、又曰、百畝之田、匹夫耕之、八口之家、可以無饑矣

漢書食貨志曰、方一里是爲九夫、八家共之、各受私田百畝、公田十畝、是爲八百八十畝

制方田、其餘必旁有圭田、五曹算經曰、今有圭田、從三十步、一頭二十四步、一頭無步、問爲田幾何、答曰、一畝奇一百二十步、周禮載師注曰、仕者亦受田、所謂圭田也、王制曰、夫圭田無用民之力、是圭田、仕者之所受也、圜田鐶田類、亦然矣、又按、漢書食貨志曰、農民戶人已受田、其家衆男爲餘夫、亦以口受田如此、是餘夫者、受田二三十畝、率以五口充農夫一家、皆耕百十畝

而納二十畝一、所謂十一之法也、上農夫食二九人一、當二下士之祿一也、上農毎畝歲收二一鍾一也、一夫是百鍾、乃下士之祿、故初所二舉入一レ官、謂二之鍾一、如曰二未知命所鍾一、曰二未知生所鍾一、亦可二以見一矣

辨二助法貢法一

春秋宣十五年曰、初稅、杜氏曰、公田之法、十取二其一一、今又履二其餘畝一、復十收二其一一

考工記匠人曰。任地國宅無レ征、園廛二十而一、近郊十一、遠郊二十而三、甸稍縣都、皆無レ過二十二一、唯其漆林之征、二十而五

孟子曰、滕文公問二井田一、孟子曰、請野九一而助、國中什一使二自賦一

周禮匠人、鄭玄註曰、周制、畿內用二夏貢法稅夫一、無二公田一、又邦國用二殷助法一、制公田不レ稅、此說蓋倒誤也、考工記曰、園廛二十而一、近郊十一、是助法也、遠郊二十而三、甸稍縣都、皆無レ過二十二一、是貢法也、助法者、耕二公田一猶二徒役一、貢法者、按二數歲之中一以爲レ定也、又按、孟子曰、野九一而助者、言王國百里爲レ郊、二百里爲レ州、三百里爲レ野、四百里爲レ縣、五百里爲レ都、其郊州野三百里之間、制二九夫一、其縣都、制二什一之貢賦一也、孟子既以二近郊一爲二助法一、以二遠郊一爲二貢法一、可レ見鄭玄誤亦明矣、魯國應レ用二助法一、而宣公始稅レ畝、故春秋譏レ之、左傳曰、初稅レ畝非禮也、穀出不レ過レ藉、是藉二助法一也、借二民之力一以治二公田一、故曰レ藉也、唯雖二近郊一、而公家之所レ耕者不レ助、而猶二遠郊之稅一、或賞賜用之田、六畜牧之田類、治レ之之百姓、亦雖二近郊一而出二遠郊之稅一、周禮載師曰、以二官田牛田

賞田牧田一、任二遠郊之地一、是也、所二以然一者、牛田賞田牧田皆耕レ之、是乃徒役也、若從二助法一、則其徒役實復重、是以任二貢法一也、按孟子曰、九一而助、或曰、什一而賦、杜氏曰十取二其一一、韓詩漢志、俱爲二十外稅一一、鄭玄詩箋云、九而稅レ一、諸說紛紛乎不レ一焉、要レ之混二助法與二貢法一爲レ一、故自不レ等焉、助法者、私田百畝、公田十畝、總百十畝也、即十外稅レ一也、貢法者、受レ田、其收百石、則貢二十石一、漢志曰、爲二粟百五十石一、除二十一之稅一十五石、餘百三十五石、是也、十取二其一一也、實唯此二法耳、依二諸家一、其義遂異矣、再按、周禮所謂、國廛二十而一、遠郊二十而三、俱有二而字一、近郊十一、無レ過二十二一、俱無二而字一、以レ此觀レ之、曰十一者、百十畝而公十畝之謂也、曰十二者、蓋百二十鍾、而公十鍾之謂也、是甸地之法也、然而鄭玄註小司徒曰、甸方八里、旁加二一里一、則方十里、爲二一成積一、百井九百夫、其中六十四井、五百七十六夫、出二田稅一、是與二匠人之甸地一、不レ合矣、又周禮所謂稍者、即削地也、其形必不レ直、故不レ當二十一一、王制曰、其有二削地一、歸二之閒田一、是也、若以二十二一爲レ耕、十畝貢二二畝一之謂、則宜公之稅レ畝、亦不レ可レ爲二非禮一也、又林地無レ征也、王制曰、林麓川澤、以レ時入而不レ禁、此之謂也、唯漆林之征爲レ異、即二十而五、按、漆者、其實作レ蠟、其汁爲二國用一、正有二重復之歲收一、是以稅多、而其蠟漆、納二於府庫一也與

辨二論孟徹法一

魯哀公問二於有若一曰、年饑用不レ足、如二之何一、有若對曰、盍レ徹與、曰、二吾猶不レ足、如二之何一其徹也

滕文公問ニ爲レ國於孟子一、孟子曰、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一

按、春秋宣公十五年、始稅レ畝、凡制公田則不レ稅、稅レ畝則無ニ公田一、今宣公制公田、復稅レ畝、是爲ニ二重斂一之始也、故曰始稅レ畝、而譏レ之也、魯國終以爲レ常、至ニ哀公時一、亦然矣、以レ此觀レ之、哀公曰二吾猶不レ足之二、即二重之二也、註家皆以爲ニ十之二一、不レ可レ從矣、百畝外助ニ十畝一、且稅レ畝、豈得レ當ニ十之二一乎、況助法者、不レ問ニ豐凶一、而就ニ一農夫一、爲ニ十畝一也、稅法者、地有ニ上中下一、年有ニ登不登一、平ニ分之一而後定焉、又孟子曰、夏五十、殷七十、蓋孟子之謬言也、文公問ニ爲國一、故欲レ示ニ周是盛一、乃夏殷相徹立レ法、而引ニ出夏殷之不ト盛也、趙岐註云、民耕ニ五十畝一者、貢レ上五畝、耕ニ七十畝一者、以ニ七畝一助ニ公家一、不レ可レ從矣、何者、周時耕ニ百畝一、然中農夫食ニ七人一而已、凡匹夫之有ニ妻子一、古今無レ異、而夏時耕ニ周時之半一、而何能養ニ育妻子一乎、唯欲レ使下文公從ニ周制一、而貶中古代上也、貢法始ニ於禹王一、禹王以ニ大聖一、安有ニ此逼迫之制一乎、果夏五十殷七十、則禹九年之水、湯七年之旱、而天下民、豈得レ活乎、竊按、周制之爲レ法、若ニ貢稅制一、則郊內之民、苦ニ軍旅田役一、若ニ助賦制一、則郊外之民、患ニ徒役道路一、故郊內制ニ助法一、專ニ徒役一、郊外制ニ貢法一、重ニ稅斂一、名曰レ徹、是取ニ諸內外相通之義一也、故考工記曰、近郊十一、遠郊二十而三、可ニ以證一矣

辨ニ孟子謬言一

孟子曰、夏后氏五十而貢、殷人七十而助

漢書食貨志曰、今一夫挾ニ五口一、治ニ田百畮一、歲收ニ畮一石半一、爲ニ粟百五十石一、除ニ十一之稅十五石一、除ニ百三十五石一、食人月一石半、五人終歲爲ニ粟九十石一、餘有ニ四十五石一、石三十爲レ錢、千三百五十、除ニ社閭・嘗新・春秋之祠用錢三百一、餘ニ千五十一、衣人率用ニ錢三百一、五人終歲用ニ千五百一、不足四百五十

漢以ニ二百四十步一爲レ畮、更乘ニ一百一、以ニ五口一除レ之、得ニ四千八百一、此爲ニ古之四十八畝一、以レ此觀レ之、漢時一口四十八畝、而養ニ五人一、既不足錢四百五十文、然則夏時耕ニ五十畝一、而一農家、如何能養ニ父母妻子一乎、如何三年耕、將一年之貯乎、孟子之謬言、不レ待レ辨而明矣

辨ニ郊野莇粟一

周禮載師曰、凡宅不毛者有ニ里布一、凡田不レ耕者出ニ屋粟一、凡民無ニ職事一者、出ニ夫家之征一

又旅師曰、掌ニ聚野之耡粟、屋粟、閒粟一

耡粟、莇粟也、卽十一之征也、屋粟居地之征、卽二十而一也、閒粟、閒田之耡粟、卽十二之征也、鄭玄曰、民有レ田不レ耕、所レ罰三夫之稅粟、此說不レ似ニ周制一、蓋本ニ於三夫爲レ屋也、田字非ニ井田之田一、指ニ居處一而言レ之、凡宅、凡田、凡民、三等皆然矣、若欲レ耕者、受ニ田於天子一、何不レ耕而有レ田乎、周制、非下如ニ漢代一有中賣買之田上也、又曰、閒粟閒民無ニ職事一者、所レ出一夫之征粟、此說亦杜撰矣、無レ職者、出レ布而不レ出レ粟、司役職閭師曰、凡無レ職者、出ニ夫布一、可レ見閒粟之註亦誤矣、宅而不毛者、田家而不レ耕者、居ニ民間一而無レ職者、皆指ニ近郊一而言レ之、是郊野主ニ莇制一、而旅師之所レ聚也、鄭

玄以近郊爲貢法、以遠郊爲莇法、故周禮之注、往往訛謬多矣、按閭師、獨不掌閭、而尙掌國中、又縣師、獨不掌縣、而尙掌都邑、無曰都師者、是周禮不必係官名也

辨縣都賦貢

周禮、縣師掌邦國都鄙稍甸郊里之地域、而辨其夫家人民田萊之數、曰、凡造都邑、量地辨其物、而制其域、以歲時徵野之賦貢

又閭師掌國中及四郊之人民六畜之數、曰、凡任民任農以耕事、貢九穀、任圃以樹事、貢草木、任工以飭材事、貢器物、任商以市事、貢貨賄、任牧以畜事、貢鳥獸、任嬪以女事、貢布帛、任衡以山事、貢其物、任虞以澤事、貢其物、凡無職者出夫布

貢物之草木鳥獸、山澤之產、以遠方言之、是閭師之所定、縣師之所徵、皆縣都之爲貢制、自明矣、又按閭師之所定之貢事、乃國中及四郊也、是四郊內亦有貢制、所謂無職者出夫布之類也

辨采食湯沐

周禮小司徒曰、九夫爲井、四井爲邑、五邑爲丘、四丘爲甸、四甸爲縣、四縣爲都、鄭玄曰、采地食者皆四分之一、其制三等、百里之國凡四都、一都之田稅入於王、五十里之國凡四縣、一縣之田稅入於王、二十五里之國凡四甸、一甸之田稅入於王

漢書食貨志曰、山川園池、市肆租稅之入、自天子以至封君湯沐邑、皆各爲私奉養、不領於天子之

經費一

古者采地食邑、皆以二四分之一一、入二於天子之經費一也、秦孝公壞二井田制一、開二仟佰一、漢興復二采地食邑之制一、雖二大侯一而不レ過二萬家一、至二王莽一、爲二王田私屬制一、而什稅レ五、自レ此以降、民力耕仍無二貯蓄一也

辨二萊地餘夫一

周禮遂人曰、辨二其野之土一、上地中地下地、以頒二田里一、上地夫一廛、田百畮、萊五十畮、餘夫亦如レ之、中地夫一廛、田百畮、萊百畮、餘夫亦如レ之、下地夫一廛、田百畮、萊二百畮、餘夫亦如レ之

鄭玄註周禮載師云、以二田不易一易再易一、上中下相通定、受レ田者三百萬家也、按、上地尙有二萊五十畮一、則當二半易一也、據レ此求レ之、則方千里三分去レ一、而六百萬夫、上中下相通、得二二百七十餘萬家一也、又按、漢書食貨志曰、李悝爲二魏文侯一、作下盡二地力一之敎上、以二地方百里提封九萬頃一、又溝洫志曰、魏氏之行也、以二百畝一、鄴獨二百畝、是田惡也、由レ此觀レ之、文侯亦制二田百畝一、而或下田爲二二百畝一也、魏氏尙承二萊地制一、可レ見矣

辨二田祿月俸一

禮記王制曰、諸侯之下士祿食二九人一、中士食二十八人一、上士食二三十六人一、下大夫食二七十二人一、卿食二二百八十八人一、君食二二千八百八十人一、次國之卿食二二百十六人一、君食二二千一百六十人一、小國之卿食二百四十四

人一、君食二一千四百四十人一

周禮稾人曰、凡萬民之食、食者人四鬴上也、人三鬴中也、人二鬴下也

稾人察二歲之上下一、以計二邦用之足否一、所謂人四鬴、是一月之常食也、不レ當二二鬴一、則邦移レ民、朝殺二邦用一也、下士之祿、卽上農一夫之收也、一夫百畝、歲收二百鍾一、是下士終歲之祿也、以二十二一除レ之、得二八鍾三釜有奇一、是爲二下士月俸一也、九人食、人四釜、總三鍾六釜有奇、餘二四鍾六釜有奇一、以爲二鹽酪絲麻祭器祭服之費一也、曲禮曰、無二田祿一者、不レ設二祭器一、有二田祿一者、先爲二祭服一、可二以見一矣、下大夫、食二七十二人一、四倍得二二百八十八人一、此爲二上大夫一、卽與二下卿一同、左傳曰、上大夫受レ縣、下大夫受レ郡、此之謂也、縣有二四郡一故也、度量衡考曰、周禮稾人職及漢祿、皆以レ月算、是古法也、誤甚矣、果然則公田一夫之歲收、是下士一月祿、凡農夫八家、而有二公田一夫一、其地一井、終歲則十二井、方三里有奇也、然則上大夫之地、當二方十九里有奇一、實小國也、至レ如二中卿上卿之地一、是大國也、又按二史記一、少康奔レ虞、有虞思二夏德一、於レ是妻レ之以二二女一、而邑之於レ綸、有二田一成一、有二衆一旅一、若從二物氏之說一、則有虞之思二夏德一、而邑之一成地者、可レ謂レ不レ如二下士之祿一矣、古者雖レ未レ盛、而有虞氏之待二少康一、不レ如二周之下士一乎、物氏據二周禮稾人職一爲二考徵一、殊不レ知稾人者、掌二委積之數一、治二會同師役之食糧一、故以レ月算レ之也

辨二孔晏祿秩一

衞靈公問二孔子一、居レ魯得レ祿幾、對曰、奉粟六萬

韓詩外傳曰、晏子之妻使人布衣紵表田、無宇譏レ之曰、出二於室一何爲者也、晏子曰、家臣也、田無レ宇曰レ位、爲二中卿食田七十萬一、何用レ是爲レ畜レ之

祿秩、皆以レ鍾稱レ之也、百鍾者、公田一夫之歳收、其地方一里也、祿六萬鍾之地方二十四里有奇也、依二物氏之說一、以二六萬鍾一爲二月俸一、則方八十四里有奇也、孔子相レ魯、費二八十里一、則魯君何以爲二食邑一乎、按、晏子之食田七十萬、歳貢七萬鍾也、與二孔子一相依近矣、晏子聘レ魯、於レ是孔子曰、待其見レ我、晏子俄至二孔子宅一、而孔子不二敢迎一、晏子亦不二敢辭一、以レ此觀レ之、孔晏之位階秩祿、不二大異一矣、所謂六萬者、爲二六萬鍾一、亦明矣、古者祿秩、皆以レ鍾給レ之、說苑曰、季成子食二采千鍾一、又曰、子路親沒之後、南遊二於楚一、從車百乘、積粟千鍾、可レ見矣、索隱曰、若六萬石、似二太多一、當二是六萬斗一、正義曰、六萬小斗、計當二今二千石一也。余謂、孔子時無二斗石之量名一、唯豆區釜鍾耳、此四量外、有二庾秉之目一、固非二官量一也、孔子者、時執レ權、其祿秩、必以二國家之量一給レ之、非二庾秉之稱一、亦明矣、鍾者、一月食也、已辨二于上一、是以雖二庶人一、而亦國家之給用レ鍾、莊子曰、與二病者粟一、則受二三鍾與一十束薪一、左傳襄二十九年、餼二國人粟一、戶一鍾、是也、凡係二賓禮一、皆以二庾秉一稱レ之也

辨二顏氏耕田一

莊子曰、回有二郭外之田五十畝一、足二以給二飦粥一、郭內之田十畝、足二以爲二絲麻一

下士之祿、卽上農一夫之收也、顏氏之田、六十畝、除ニ什一之税一、止餘、歳收ニ粟五十餘鍾一、當ニ下士半祿一也、可レ見好學是不レ由レ貧矣、德行亦不レ係レ賤矣

辨ニ曾子之祿一

韓詩外傳曰、曾子仕ニ於莒一、得ニ粟三秉一、方ニ是之時一、曾子重ニ其祿一、而輕ニ其身一、親沒之後、齊迎以レ相、楚迎以ニ令尹一、晉迎以ニ上卿一

莊子寓言篇曰、吾及ニ親仕三釜一而心樂、後仕三千鍾不レ洎ニ心悲一

曾子初仕之祿、據ニ韓詩一、則三秉、據ニ莊子一、則三釜、其實大異矣、按、一月一鍾、乃一人之衣食也、三千鍾者、以ニ諸侯之卿月俸一言レ之、然則三釜、亦以ニ月俸一言レ之、三釜、是一人一月食之中者也、周禮廩人職可レ徵矣、今以レ不レ足レ養レ親爲レ辭、實初仕月一鍾、是通法也、又三秉、據ニ馬氏鄭氏一、則四十八斛、乃七鍾半也、當ニ諸侯之下大夫祿一也、與下重ニ其祿一輕ニ其身一之文上不レ合矣、曾子雖レ賢、初仕若受ニ大夫祿一、何得レ謂ニ輕身一乎、竊謂三秉是三鍾之誤與矣、莊子云、三釜、依ニ文綵一而言レ之、韓詩外傳、若非ニ流俗之訛一、則馬氏鄭氏之解レ秉之誤、可ニ以攷一矣

辨ニ禮記東田一

禮記王制曰、古者以ニ周尺八尺一爲レ步、今以ニ周尺六尺四寸一爲レ步、古者百畝、當ニ東田百四十六畝三十步一、古者百里、當ニ百二十一里六十步四尺二寸二分一、圖南氏曰、古者以ニ夏殷以上一言レ之、今者以ニ六國時

東方邊鄙之制一言レ之、非二天下通制一也、下文東田二字、可二以証一矣

按、六尺四寸者、六尺六寸之訛也、三十步者、九十步之訛也、六十步者、六十三步之訛也、二分者、衍文也、古者、堯舜之時也、夏殷周、皆步法不レ異、唯堯舜之時、畝制必簡、故步法亦大矣、周尺猶レ云二雍州之官尺一也、今者、指二東方魯齊之當時一而言レ之也、言二堯舜之一步一者、當二文武周公之八尺一、文武周公之一步者、乃六尺、東田之一步者、文武周公之六尺六寸也、按、周制六尺爲レ步者、必有二萊地之制一也、東田、六尺六寸爲レ步者、蓋無二萊地之制一歟、東田制之下、載二其餘一以爲二附庸閒田一、共下又載二天子縣內之制一、而多二於縣外一、且無二附庸一、以レ此觀レ之、東田六尺六寸之制、異二于天子縣內一也、東田之算法、六尺六寸自二乘之一爲レ法、八尺自二乘之一爲レ實、如レ法而一、得二一四六九有奇一、是堯舜之百畝、當二東田百四十六畝九十步有奇一也、又六尺六寸乘二三百一、得二一萬九千八百寸一、爲二今一里一、更乘二一百一、得二百九十八萬寸一、此爲レ法、置二八尺一乘二三百一、得二二萬四千寸一、爲二古一里一、更乘二一百一、得二二百四十萬寸一爲レ實、如レ法而一、得二一百二十一里六十三步四尺二寸一、實如レ法而得二百二十一里一、其餘二百九十八萬分寸之四千二百寸一也、法之百九十八萬寸、以二三百一約レ之、得二六十六寸一以除二四千二百寸一、則得二六十六步有奇四尺二寸一也可レ見爲二經文錯亂一、亦自明矣、七十二弟子之時、東田之制如レ此、故載二之於王制篇一、鄭玄註曰、蓋六國時、多變二亂法度一、但六尺六寸、作二六尺四寸一、又九十步、作二三十步一、又六十三步、作二六十步一、皆傳寫之誤也、孔穎達疏云、經文錯亂、此之謂也、北周甄鸞、著二五經算術一、擧二其算法一而云、不二自合一、唐李淳風從而註レ之、然未レ知二孰處有二錯亂一、自レ此以降、未二嘗有一

一容レ疑者一也、至二明朱載堉一、譌二作夏尺商尺周尺不同之說一、要レ之、始出二於後漢鄭玄一、註二禮記一曰、或言二周尺八寸一、則步更爲二八八六十四寸一、以レ此計レ之、古者百步、當二今百五十六畝二十五步一、古者百里、當二今百二十五里一也、今閱レ之、鄭玄固暗二算法一矣、古步今步、各自二乘之一、俱得レ數、遍約レ之以爲レ率、則相應也、不レ然、而八尺與二六尺四寸一、各以二一尺六寸一約レ之、以二八尺一爲レ五、以二六尺四寸一爲レ四、是爲レ率、故不レ中也、鄭玄算法者、今步率四、自二乘之一得二十六一爲レ法古步率五、自二乘之一得二二十五一、更乘二一百一爲二一畝之積一、復乘二一百一爲二百畝之積一、此爲レ實、如レ法而一得二百五十六畝二十五步一、又今步率四二乘三百一、得二今一里積千二百一爲レ法、古步率五乘二三百一、得二古一里積千五百一、更乘二一百一、得二古百里積十五萬一爲レ實、如レ法而一得二百二十五里一也 鄭玄註禮記曰、周尺之數、未二詳聞一、此之謂也

辨二三焉十等一

尙書五子之歌、曰二兆民一、孔傳曰、十萬曰レ億、十億曰レ兆、五經算術、尙書考經、兆民之註越次法曰、按云二億萬一曰レ兆者、理或未レ盡

詩魏風曰、胡取二禾三百億一兮、註曰、萬萬曰レ億、五經算術曰、箋云二十萬一曰レ億、甄鸞曰、鄭用二下數一、毛用二中數一

五經算術曰、詩曰二萬億及秭一、註云、數レ萬至レ萬曰レ億、數レ億至レ億曰レ秭、甄鸞曰、數レ億至レ億曰レ秭者、有レ所レ未レ詳

禮記王制曰

方一里者、爲二田九百畝一

方十里者、爲二方一里一者百、爲二田九萬畝一

方百里者、爲二方十里一者百、爲二田九十億畝一

方千里者、爲二方百里一者百、爲二田九萬億畝一

又曰

方三千里、爲二田八十一、[萬億]一萬億畝（萬億二字蓋衍文也）

方百里者、爲二田九十億畝一

度量衡考曰、其積千寸、約以二絲法一爲二一千萬萬萬一

三焉十等之例、始詳二于五經算術一、今圖以備二考按一也、數者、億以上有二十等一、呼レ之有二大中小之三焉一也、若不レ屬二三焉一、則其數必不レ當也、尚書孔氏傳、以二小數一言レ之、五經算術 兆民之註越次者、不レ知二三焉十等之失一也、詩之註、鄭氏用二下數一、毛氏用二中數一、各不レ同、或數レ萬至レ萬、數レ億至レ億、是大數也、然數レ億至レ億爲レ秭者、迭三焉、甄鸞之所レ說、是矣、王制方百步乃百畝、方三百步、是一里也、乃九百畝、十倍之九千畝、復十倍之九萬畝、是方十里也、然則方百里者、以二小數一言レ之、則九兆畝、以二

三焉

小數中數大數	一	十	百	千	萬	億
小數	一	十	百	千	萬	億
中數	一	十	百	千	萬	十萬
大數	一	十	百	千	萬	十萬

十

中數㆒言㆑之、則九百萬畝也、王制以爲㆓九十億畝㆒、是自不㆑合、又方千里者、以㆓小數㆒言㆑之、則九陔畝、以㆓中數㆒言㆑之、則九億畝也、王制以爲㆓九萬億畝㆒、是自不㆑合、按七十二弟子、無㆔一及㆓旋璣玉衡㆒以齊㆓七政之話頭㆒者、以㆑此觀㆑之、孔門之徒、昧數致㆓此誤㆒矣、昔者周公問㆓周天曆度於商高㆒、是周髀算經也、又孔氏尚書傳、用㆓小數㆒云、天子國方千里、自㆓乘之㆒得㆓一兆㆒、卽一兆井也、然及㆓鄭氏毛氏之註㆒詩、反混淆迷㆑人者也、又物茂卿云、一千萬萬者、六經史記漢書以降、未㆑聞㆑有㆓此名㆒、蓋茂卿之一家言也、雖㆓豪傑㆒猶添㆓蛇足㆒、誰此爲㆑是乎、其數以㆓中數㆒言㆑之、則一千兆也、然用㆓絲法㆒崇㆓其數㆒、是何爲耶、未㆑知㆓其詳㆒矣、按、物氏昧㆓數學㆒、而依㆓迂遠之術㆒也、若不㆑爾、則勉求㆓人之所㆑不㆑能、而崇㆓其數位㆒者也、度量衡考擧㆓古人身長數條㆒爲㆓考徵㆒、而未㆑知㆔王制之有㆓錯亂㆒、是徒作費解、不㆑欲㆔苟驗㆓之於古㆒、嘵夫何豪傑之云哉、又按、韋昭註㆓楚語㆒云

等

兆	百萬	百萬
京	千萬	千萬
陔	億	億
秭	十億	十億
壤	百億	百億
溝	千億	千億
澗	兆	萬億
正	十兆	兆
載	百兆	十兆
	千兆	百兆
	京	千兆
	十京	萬兆
	百京	億兆
	千京	京

十萬曰㆑億、古數也、秦改以㆓萬萬㆒爲㆑億、此說是小數、而實古義也、孔氏鄭氏、幷同㆓于此㆒焉

辨㆓周時身長㆒

史記世家曰、孔子長九尺有六寸、皆謂㆓之長人㆒而異㆑之

又晏平仲傳曰、其妻請レ去、夫問ニ其故一、妻曰、晏子長不レ滿ニ六尺一、身相ニ齊國一、名顯ニ諸侯一、今者妾觀ニ其出一、志念深矣、常有ニ以自下者一、今子長八尺、乃爲ニ人僕御一、然子之意、自以爲レ足、妾是以求レ去也

周禮司徒職鄕大夫曰、國中自ニ七尺一以及ニ六十一、野自ニ六尺一以及ニ六十五一

孔子晏子、同時人也、晏子六尺、是短人、孔子九尺六寸、是長人之又長、故異レ之、晏子之僕御、是中人之勝者、故其妻不ニ以爲一レ劣也、大約言レ之、則六尺是短人、七尺五寸是中人、九尺是長人、越ニ於此一、而失ニ於長短一者爲レ異、是周人之身長也、周禮、指ニ年二十一而云ニ七尺一、指ニ十五一而云ニ六尺一、亦可レ管矣

辨ニ雉數不整一

左傳隱元年曰、都城過ニ百雉一、國之害也、先王之制、大都不レ過ニ參レ國之一一、中五之一、小九之一、今京不レ度、非レ制也

周禮考工記曰、王宮門阿之制五雉、宮隅之制七雉、城隅之制九雉

左傳杜氏註曰、一雉之牆、長三丈高一丈、侯伯之城、方五里、徑三百雉、故其大都、不レ得レ過ニ百雉一、世後皆從ニ于此一焉、按、公侯方百里、伯七十里、子男五十里者、是先王之制也、從ニ左傳一而取ニ其三分之一一、則公侯三十三里有奇、伯二十三里有奇、此爲ニ侯伯之大都一也、若以ニ三丈一爲レ雉、則公侯之都、二千雉也、伯千四百雉也、與ニ杜氏之說一不レ合、由レ此攷ニ本文一、曰都城過ニ百雉一、卽以ニ國地一言

之、及莊公卽位、其母武姜、爲弟共叔段請城制、因使居京縣也、杜氏註曰、侯伯之城、方五里、以城郭言之、故齟齬矣、侯伯之城郭、那有百雉乎、雖爲王、其城隅之制、九雉也、周禮之文、可以照管矣、再按周禮曰、門阿之制、或曰四阿重屋、阿字指地之幅而言之、爾雅曰、大陵曰阿、詩鄘風曰、陟彼阿丘、皆義同、以此觀之、都城過百雉、亦以其地幅言之、必不要其高也、姑從先輩之說、則宮隅七雉、而宮門五雉者、門甚廣、而不應其宮、乃當宮二十一丈、而其門十五丈、若建高一丈長十五丈之門、恰如橋以何樹爲梁耶、雉之說不合、愈明矣、唯雉之傳亡、而未得其審而已、尙書大傳曰、天子之堂、廣九雉、三分其廣、以二爲內、五分內、以一爲高、鄭玄曰、雉長三丈、此說與周禮城隅相混、不知孰是矣、家語曰、三井而埒、埒三而雉、又一說矣

度量衡說統卷之二終

度量衡說統卷之三

辨漢量斛法

周禮㮚氏鄭玄註曰、鬴十則鍾、方尺積千寸、於今粟米法、少二升八十一分之二十二、其數必容鬴、此言內方耳

孫子算經曰、以斛法一尺六寸二分除之

五曹算經曰、方窖縱一丈三尺、廣六尺、深一丈、問受粟幾何、答曰、四百八十一斛四斗奇七寸八分、四斗蓋衍文也

漢斛法一尺六寸二分、先輩所說、皆無異論矣、漢嘉量、承周量而鑄之、唯去方爲圓而已、然周時未有龠、及鑄漢量、始制龠、以二龠爲合、然則非龠積八十一分、相合爲一尺六寸二分者、詳辨于下矣、漢儒未知一尺六寸二分之出處、而提出黃鐘管爲說、是流俗謬也、果然則周時何無龠合之量乎、按、周量、方尺受一鬴、乃米法、而其容六斗四升也、若容漢量之六斗四升、則多二升八十一分之二十二也、去內方而圓其外者、粟法而漢斛法也、物氏曰、斛釜之際、以銅板隔之、其形如方箱無底、是也

周禮鄭玄算法、置二漢斛法一尺六寸二分一、更乘二六斗四升一、得二一鬴積一千零三十六寸八分一、內減二一鬴積一千寸一、餘二三十六寸八分一爲レ實、以二漢斛法一尺六寸二分一除レ之、得二二升一尺六寸二分升之四十四分母一、子各以レ二約レ之、爲二八十一分升之二十二一

五曹之算法、置二縱一丈三尺一、乘二廣六尺一、得二七十八尺一、更乘二深一丈一、得二七百八十尺一爲レ實、以二漢斛法一尺六寸二分一除レ之、得二四百八十一斛奇七寸八分一也、四斗字衍文明矣

辨二漢斛起源一

漢書律曆志曰、量者龠合升斗斛也、其法用二銅方尺一、而圜二其外一、旁有レ庣焉、鄭氏曰、庣過也、算方一尺所レ受一斛、過二九釐五毫一、然而成レ斛

晉書律曆志、載二魏劉徽注九章一、商功曰、王莽銅斛、於二今尺一、爲二深九寸五分五釐、徑一尺三寸六分八釐七毫一

劉徽以二算法一言レ之、魏尺比レ古、則長四分五釐、故古深一尺者、魏尺之九寸五分五釐也、古斛內方一尺、自レ隅至レ隅、斜徑一尺四寸一分四釐二毫、銅厚九釐五毫、兩隅俱一分九釐、與二斜徑一相併、得二一尺四寸三分三釐二毫一、是圜二其外一之圓徑也、鄭氏曰、過二九釐五毫一、然後成レ斛、此之謂也、此徑以二魏尺一言レ之、則更乘二魏尺之九寸五分五釐一、乃得二一尺三寸六分八釐七毫一、是與二晉書劉徽說一全同、然則古銅斛、圓徑一尺四寸三分三釐二毫者、亦明矣、其積乃一尺六寸二分也、是粟六斗四升也、漢

以二周粟法一爲二米法一、故新立二粟法一、是周漢斛法之所レ分也、漢儒未レ知二此義一、而主下張漢時承二天極一之說上、而捨二古義一好二敷演一耳、爾曰、其上爲レ斛、其下爲レ斗、左耳爲レ升、右耳爲二合龠一、上三下二、參天兩地、圜而函方、左一右二、陰陽象也、果然則周制、以爲レ不レ合二天極一者歟、漢儒動輙引二出黃鐘一而論二辨律度量衡一可レ謂二理學之陋一矣、詳辨二于下一矣、粟米之算法、先宜レ用二陸績率一也、周率一四二、徑率四五、是也、一尺四寸三分三釐二毫自二乘之一、復乘二深一尺一、得二二尺零五分四釐零有奇一、更乘二周率百四十二一、以二徑率四十五一除レ之、得數四二分之一爲レ積、乃一尺六寸二分零有奇也、是漢之斛法所レ起也、當二我邦一斗零五分四勺有奇一

辨二律無二定準一

書經舜典曰、協時月正日、同律度量衡傳曰、律法制、及尺丈斛斗斤兩、皆均同

史記律書曰、九九八十一以爲レ宮、又曰、黃鐘長八寸七分一宮、索隱曰、案二上文一云、律九九八十一、故曰二長八寸十分一一、而漢書曰二黃鐘長九寸一者、九分之寸也劉歆鄭玄等皆以長九寸、即十分之寸、不レ依二此法一也、又註曰、按二考要一云、管子曰、□戲作二九九之數一、以合二天道一、黃鐘九九、亦天地自然之數也、蓋黃鐘之管九寸、寸每九分、故曰、九九八十一以爲レ宮

又增注曰、鐘者種也、十一月陽氣施二種於黃泉一、物始萌生、應而導レ之、以爲二六氣元一也、明二此二義一、然後黃鐘可二得而正一也、呂氏春秋、載下黃帝命二伶倫一、取二嶰谷之竹一、制二斷兩節一、間二三寸九分一而吹レ之、

爲中黄鐘之宮上、曰、含少劉恕外記、無忌隋志、亦與二呂氏一無レ異焉、自二太史公一志律以二黄鐘一爲二九寸一、蔡通新書因レ之、後之言レ樂者、遂祖二子長一、而於二諸書一漫不レ加レ繹、於レ是黄鐘之度、茫然無二據而旋一

漢書律暦志曰、以二子穀秬黍中者一黍之廣一度レ之、九二十分黄鐘之長一、一黍爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺、十尺爲レ丈、十丈爲レ引

禮記禮運注曰、始二于黄鐘九寸一

五經算術論、禮記月令、黄鐘律曰二長九寸一

權量撥亂、載二後漢蔡邕獨斷一曰、以二十一月一爲レ正、八寸爲レ尺、律中二黄鐘一

律者、始出二於舜典一、然史記漢書以下、其說紛紛而皆無二定準一也、蓋上古、制律之法、天子諸侯、或用レ玉或用レ銅、及頒二四方一者、皆用レ竹也、黄鐘大率九寸、唯竹之竅不レ能レ無二毫釐之差一、淸濁自不レ等、然同レ之以レ耳聽レ之、不三必拘二長短一、或九寸强、或九寸弱、非レ如三後世算家之爭二秒微一也、周時已降、爲下度量衡悉出二於レ律者上、高二其論一而遂殽亂、或云九寸、或云八寸七分、或云八寸一分、或云三寸九分、無二一可レ從者一、果依二黄鐘一管長而正樂、則古人安用二盲人一以爲二樂師一乎、按、黄鐘者、因二鐘響一稱レ之矣、鐘大壺、即缶屬也、用二黄銅一鑄レ之、其響殊美、因稱爲二黄鐘一、古者缶鐘屬、皆鼓而歌、易離卦曰、不レ鼓レ缶而歌、可二以見一矣、律長九寸者、其音中鐘響、是以命レ律云二黄鐘一、又竹名有二龍鐘者一、取二諸作律一則猶二龍吟一也、種二於黄泉一之說、不二雅馴一矣、又無射亦鐘屬也、左傳昭公二

十一年曰、將レ鑄二無射一、杜氏曰、無射、鐘名、律中二無射一、亦可レ見矣、古之律者、存二於樂正之耳竅一、而不レ存二於器之長短一、物氏曰、舜典曰、歌永レ言、聲依レ永、律和レ聲、則律亦由二人聲一生焉、聖人以二人聲一定レ律、既定之後、假度以傳二其聲一、度豈生二於律一哉

辨二漢制量名一

漢書律厤志曰、量者、龠合升斗斛也

周嘉量者、豆區釜鍾之四量也、漢興以二粟法一爲二米法一、作二嘉量一增レ龠爲二五量一也、周之嘉量有二兩耳一、漢之嘉量、左一右二、有二三耳一、然徑及深、皆與二周量一同也、周量之目、皆取二之於器物之名一、漢亦承レ之、而五量皆以二器物之名一爲レ目、如左

龠

詩邶風曰、左手執レ龠

龠、本笛之名、或三孔、或七孔、其說未レ詳、蓋律之屬也、漢時假以爲二量名一注家云、龠容二千二百黍一、或黃鐘管容二千二百黍一、遂使二龠與レ律混同一、是反亡二古義一者也

合

列仙傳曰、捧二玉合一至二天尊所一、炷以二異香一

五雜俎曰、范蜀公與二溫公一遊二嵩山一、以二黑木合一盛レ茶

正韻合字註曰、合子、盛レ物器
合者、與レ盒通、上古器物之名、箱屬也、今香匣、猶レ云二香合一、是古義也、漢興假以爲二量名一、凡龠升斗斛、皆原二於器物一、而合獨取二諸相併之義一乎、升亦相二併成斗一、斗亦相併成レ斛、此非二相併之義一、亦明矣

升

前漢書、古升上徑一寸、下徑六分、其深八分
周量名無レ升、然周禮所謂四升爲レ豆者、四掬之謂、而固非二量名一、已辨二于周量篇一、此古升者、其積十二、則當二周之一豆强一、六國秦漢、計二湯藥一仍用レ之、醫家傳以至二後漢一、張仲景亦用レ之、梁陶弘景謂二之藥升一也、此升、於レ古爲二何用一未レ詳、竊疑漏刻之器者也歟、及三漢改二量制一、假以爲二量名一也、獨此器之傳來者、緣二藥方之秘授一而已焉

斗

詩大雅、酌以二大斗一、注曰、大斗長三尺、謂二其柄一也、蓋大器挹二之於樽一、用二此勺一耳
史記天官曰、北斗七星、所謂旋璣玉衡、以齊二七政一
攜龍角注曰、玉衡屬レ杓、又曰、杓北斗柄也
度量衡考曰、斗本酒器用、以酌レ酒、八合爲レ允、史記、張良獻二項王玉斗一、又按、斗古不三以爲二量名一、但見二注家言一、乃移二秦漢制一釋二古量一耳

斗、本栝柄之器、孔子曰、噫、斗筲之人、何足レ算也、此謂下酌二酒漿一之器上、故凡如二杓形一、而有柄之物、以レ斗名レ之也、蝦蟆子、未レ生二手足一而有レ尾、名曰二科斗一、（日本俗云二御玉酌子一、亦古義也）上古之文字曰二科斗一、亦原二于此一焉、斗七星、其形譬二諸栝杓一、故名レ斗、詩曰、維北有レ斗、不レ可三以挹二酒漿一、可二以見一矣、昔者、豆斗以レ玉作レ之、尤爲二重器一、禮記明堂位曰、玉豆、此之謂也、及三漢改二量法一、假以爲二量名一也、後世以二古玉斗一、爲二周時之量一、是誤矣、宇文周時、雖下得二古玉斗一、以爲中正器上、據レ之作二度量一、其度量尙淆亂焉、後世皆以二玉斗一爲二古周之量一、而無レ奈二數之不一レ合何一也、史記項羽本紀曰、我持二白璧一一雙一、欲レ獻二項王一、玉斗一雙、欲レ與二亞父一、是皆斗者、挹レ酒之重器也

斛

度量衡考曰、十斗爲二一斛一、出二聘禮記一、然古不下以レ斛爲上レ量、但見二注家言一、蓋以二秦漢制一釋二古量一耳

斛觳古字通、盞卮屬也、斗亦酒器也、聘禮之十斗、猶レ云二十杓一、其一斛、猶レ云二一杯一也、此酒器之最大者、故假以爲二最大之量名一也、於レ周則酒器之名、於レ漢則五量之名、不レ可レ不レ察矣、漢書律曆志曰、量者躍二於龠一、合二於合一、登二於升一、聚二於斗一、角二於斛一、是亦原二于字義一而注レ之者、非二古訓一也

辨二龠合異說一

孫子算經曰、量之所レ起起二於粟一、六粟爲二一圭一、十圭爲二一撮一、十撮爲二一抄一、十抄爲二一勺一、十勺爲二一合一、十合爲二一升一、十升爲二一斗一、十斗爲二一斛一、得二六千萬粟一

夏侯陽算經曰、以子穀秬黍中者千二百實其龠、十龠爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛

物茂卿度量衡考、載隋書律曆志曰、從上相承有銅龠、一以銀錯、題其銘曰龠、黃鐘之宮長九寸、空圍九分、容秬黍一千二百粒、秤重十二銖、兩之爲一合

圖南氏權量撥亂曰、考漢書律曆志、黃鐘之管長九寸、其積八百一十分、是爲一龠、二龠爲合

淺野大藏秤量考曰、漢書律曆志曰、量者龠合升斗斛也、所以量多少也、十龠爲合、十合爲升、十升爲斗、十斗爲斛

正木政軒分量考曰、以秬黍中者實黃鐘、龠其秬黍、以爲一龠之積、信之爲合、十合爲升、四升爲斗、四斗爲區、四區爲釜也（信字疑是倍字）

量之起於秬黍、是漢儒之陋、且二龠爲一合、或十龠爲一合、或不數龠、而十勺爲一合、註家亦從己之所好、不辨是非矣、或其說混、而以四升爲斗、是亦秦漢六朝諸書所未聞也、竊意經史之所載亦漫然而已矣、悉信之則不如無書、此之謂也

辨漢時農收

漢書食貨志曰、歲收畮一石半、爲粟百五十石、除十一之稅十五石、餘百三十五石、食人月一石半、五人終歲爲粟九十石、餘有四十五石、石三十爲錢千三百五十、除社閭嘗新春秋之祠用錢三百、餘千五十、衣人率用錢三百、五人終歲用千五百、不足四百五十

秦孝公始制田、以二百四十步爲畮、漢興亦沿用之、漢志所謂歲收畮一石半、以稅斂言之、每百步當六斗二升五合、算法曰、置一石五斗、以二百四十步除之、即每百步、得六斗二升五合也、稅斂畮出一石半、其歲收、即粟十五石也、與六國所謂畝一鍾相符矣置十五石、乘斛法一六二六、得數、更以二百四十步除之、得二一帯二五也、即一鍾二豆也 二百四十步、而歲收一石半者、史記通河渠新作田者、云畝十石、或云萬餘而百餘萬、皆每畝十石、雖新開之地而如此、況於通計之算乎、漢書食貨志曰、百畝之收、不過百石、是亦以稅斂言之、唯周制者、一萬步而一農家、謂之一夫、秦漢制者、二千四百步、而一農家率十二夫而五頃、頃率十家、家二千四百步、迺漢之十畮、畮歲收十五石、一農家歲收百五十石也、方養百五人、不足錢四百五十也、周制是一農家、耕一萬步、是以食九人、尚有餘也、果以一石半、爲一畮歲收、則其百九十石之地、即二萬五千步、是當周之二夫半、宜食二十二人也、一石半、非畮歲收、亦明矣、又粟百五十石、以粟法言之也、食人月一石半、可以見矣、若米法言之、則粟一石半者、成米九斗也、是月不滿一帶半、周禮以月三帶爲中者、可見矣

辨一步歲收

五曹算經曰、今有官田九百畝、凡一步收粟三升二合、問計幾何、答曰、六千九百一十二斛

按以二百四十步爲畝也、粟三升二合者、共一畝當七石六斗八升、比漢志十五石、則甚不登、可見以下田設問者也、漢以後三升二合者、率我邦三合半許也、五步則率我邦之三步許也、由此

置ニ三合半一、五因三除、而得ニ五合强半一、爲ニ我邦一步之歲收一也、我邦歲收、凡步五六合者下也、步八九合者中也、步一升二三合者上也、漢志百五十石、禮記上農夫、皆相符、始知ニ寒暖異レ域、古今異一レ時、然造化之不ニ大異一、亦可レ知矣

辨ニ周漢頃異一

漢書食貨志曰、率十二夫、爲ニ田一井一屋一、故畮五頃、鄧展注曰、九夫爲レ井、三夫爲レ屋、夫百畮於レ古十二頃、古百步爲レ畮、漢時二百四十步爲レ畮、古千二百畮、則得ニ今五頃一

本文故字猶レ云レ舊也、指ニ周時一言レ之、凡漢之五頃者、古之十二夫也、古者五畝爲レ頃、故曰ニ舊畝五頃一也、注文十二頃、蓋二十頃倒誤也、言古者五畝爲ニ一頃一、百畝卽二十頃也、物氏曰、六國時、百步爲レ畝、百畝爲レ頃、是本十二夫、與ニ注文十二頃一、混而爲レ說者也。果然則本文畮五頃三字、何謂也、蓋未レ知ニ畮爲ニ五頃一、而徒作レ解者矣

辨ニ漢以後頃一

漢書食貨志曰、李悝爲ニ魏文侯一、作ニ盡ニ地力一之敎一、以ニ地方百里一、提ニ封九萬頃一

孫子算經曰、今有ニ邱田周六百三十九步、徑三百八十步一、問爲レ田幾何、答曰、二頃、五十二畝、二百一十五步、術曰、半周得ニ三百一十九步五分一、半徑得ニ一百九十步一、二位相乘六萬七百五步、以ニ畝法一除レ之卽得

以二百四十步爲畝、畝百爲頃、後皆受之爲法也、古者井田、而至如附庸閒田、是有圭田也、秦漢以降不必方制、算其積、以二百四十步爲畝、是以有直田・圓田・弧田・箕田種種之目、可以見矣、唐六典云、五尺爲步、二百有四十步爲畝、百步爲頃、按、唐以一尺二寸爲大尺、所謂五尺者、卽古之六尺也、以此觀之、自漢魏迄隋唐、田畝制相受用之、亦明矣

辨口別田畝

漢書地理志曰、定墾田八百二十七萬五百三十六頃、民戶千二百二十三萬三千六十二口、五千九百五十九萬四千九百七十八、漢極盛矣

置墾田、以戶數除之、得六十七畝有奇、是一戶之所耕也、而與食貨志所載不合、蓋豪民兼幷者多、而齊民所得不過十畝、食貨志則就齊民而言、故歲不足四百五十錢、不然一戶六十七畝有奇、何有不足、又一頃歲貢、卽十畝之收百五十石也、更乘墾田數、得十二億四千五十八萬四百石、是漢代天下一歲之稅貢也、若依孝文三十而稅一之法、則當四億一千三百五十二萬六千八百石也

辨秩祿月俸

漢書功臣表曰、大侯不過萬家、小者五六百戶

又功臣表注云、中二千石月俸百八十斛、比二千石月俸百斛

一戸五人、耕十畝、歳收百五十石、由此算之、則一戸歳貢十五石也、六百戸者九千石也、其民三千人、其田六千畝也、置六千畝、乘二百四十步、得百四十四萬步、以方一里積九萬步除之、得十六、此爲方一里者十六、卽方四里之地也、按、秦自以爲周制者、爲諸侯所喪、是以不立尺土之封、漢興改前代之非、而復立諸侯王國、雖然大侯不過萬家、其群臣之祿、終歲以二千石爲極、皆以月俸給之、但中者當二千二百二十六斛有奇、比者當千二百三十六斛有奇、（中者置二百八十斛、乘二十六七閒之二百三十五箇月、以十九除之卽得、比亦同）又曰、日食一斗三升、是當月三斛九斗、蓋下士之祿也、周制下士之祿、月當漢五斛一斗四升有奇也

辨斛石相通

禮記喪大記曰、朝一溢米、莫一溢米、鄭玄曰二十兩、曰、溢於粟米之法、一溢爲米一升二十四分之一

五經算術曰、所以名斛爲石者、以其一斛米重一百二十斤故也

古者有衡石之制、禮記月令曰、仲春鈞衡石、是也、漢時尚有此制、隋書曰、律權石重四鈞、是也、四鈞卽百二十斤、此器物甚重、不可持於手、是與何物爲衡耶、固非計銖兩之物也、竊按權石蓋一斛米之權、所以同量衡也、三十斤爲鈞、四鈞爲石、卽一斛米之重也、是以斛石通用之矣、漢代算法、一斛米重爲百二十斤、亦審矣、百二十斤、卽千九百二十兩也、求一溢米之法、置二

十兩、以千九百二十兩除之、得一升百九十二分之八、而分母子、各以八約之、爲二十四分之一、鄭玄以漢量說之、若依周量則一升二十五分之二也、由此觀之、律權石重四鈞者、漢代之制也、周量其法異矣、權石亦應異也、一鍾則當七十四斤二十七分之二也

辨後漢量異

夏侯陽算經曰、倉曹云、古者鑿地方一尺、深一尺六寸二分、受粟（粟當作米、下文可徵也、粟則深二尺七寸也）一斛、至漢王莽、改鑄銅斛、用深一尺九寸二分、至宋元嘉二年、徐受重鑄、用二尺三寸九分、至梁大同元年、甄鸞校之、用二尺九寸二分、然時異事變、斗尺不同、以古就今、臨時校定、始可行用、若欲審之、以掘地作穴、方廣三尺已下、以今時用斗、量米一斛、置諸穴中、槩令平滿、如有少賸、臨時增減、取米適平、然後出之、徑量以知深淺、乃可以爲斛法定數

先輩論度量、然未嘗及王莽時已訛長之事也、五曹算經、夏侯陽算經、幷載其訛長、然此書久佚於永樂大典內、不傳于世、近乾隆四十一年、儒臣校正而上之、故唐宋以後諸儒、不知度量之訛長、始王莽時、至如我邦物氏之說、猶如闇夜礫欲中也、按、後漢尺當今七寸七分許也、後漢一斗、當前漢一斗零八合二勺、卽當我邦一升一合四勺有奇也、王莽銅斛、就夏侯氏之說攷之、曰深一尺九寸二分者、似誤長、惟以掘地作穴容米、爲校考之踈故也

辨魏量算法

晉書律暦志曰、魏陳留王景元四年、劉徽注九章、商功曰、當今大司農斛、圓徑一尺三寸五分五釐、深一尺、積一千四百四十一寸十分寸之三、王莽銅斛、於今尺、爲深九寸五分五釐、徑一尺三寸六分八釐七毫、圖南氏曰、大司農斛、乃魏世官斛、大司農掌之故云爾、非謂漢斛也、故其徑深與積、皆與下文王莽斛異也、此蓋魏初杜夔所造、而劉徽亦魏人、故以當今稱之、其所謂今尺、亦謂魏尺也、物氏度量考、謂爲漢斛之遺存于魏者、大謬矣

劉徽之法、徑率五十寸、周率百五十七寸也、魏量圓徑一尺三寸五分五釐、自乘之、得百八十三寸有奇六零二五、更乘周率、得二萬八千八百二十五寸有奇五九二五、收尾數爲二萬八千八百二十六寸、乘深一尺爲實、徑率四之、得二百寸爲法、實如法而一、得千四百四十一寸二百分寸之六十寸、而分母子、各以二十約之、爲十分寸之三、是魏量一斛之積也、當我邦一斗一升七合弱

辨漢魏斛較

晉書律暦志曰、以徽術計之於今斛、爲容九斗七升四合有奇、魏斛大而尺長、王莽斛小而尺短也

先以魏尺求漢斛積也、徑一尺三寸六分八釐七毫、自乘之、更乘深九寸五分五釐、得千七百八十九寸零三九四零二九五、復乘周率百五十七寸得數、以四倍徑率二百寸除之、得千四百零四寸三九五九有奇爲實、以魏斛積千四百四十一寸十分寸之三除之、卽得九斗七升四合有奇、是後漢一斛、當魏九斗七升四合有奇、所謂王莽斛小而尺短、此之謂也、魏一斛當後漢一斛二升六合有奇

也

辨二魏量誤制一

通典曰、魏初杜夔造レ斛、卽周禮所謂嘉量也、深尺方尺實一斛

魏斛圓徑一尺三寸五分五釐也、蓋杜夔以二漢志注所謂過二九釐五毫一誤爲二減數一也、又依下圓二其外一之文上、而誤以二圓外一爲レ徑也、何者方一尺、此斜徑一尺四寸一分四釐、是爲下過二九釐五毫一者上、故左右各減二九釐五毫一、得二一尺三寸九分五釐一、而爲二魏量圓徑一也、減二銅厚二分一、則得二一尺三寸五分五釐一也、劉徽之所レ說便是也、漢嘉量不レ拘二銅厚一、以二內徑一言レ之、然杜夔何獨爲二外徑一耶、蓋杜夔未レ知二魏尺之訛長一、而方欲レ用二前代之制一、而有レ所レ不レ合、故其深用二一尺一、其徑減二各九釐五毫一、漢志曰、旁有二庣焉、鄭玄曰、庣過也、師古曰、庣不滿之處、是皆謂下方斜徑之不上レ滿レ於レ量也、杜夔獨以爲下量之不上レ滿二於斜徑一者也、鄭玄曰、過二九釐五毫一、指レ量而言レ之、杜夔指二斜徑一而充レ之、是以不レ合、故使二量外徑斟酌而合一也、是魏尺訛長之失、而非二杜夔之辜一矣

辨二晉用二魏量一

度量衡考曰、晉書裴頠傳曰、荀勗之改修レ律也、頠上言、宜レ改二諸度量一、不レ見レ省、按、此文晉雖二改修一レ律而度量乃沿二魏制一也

權量撥亂曰、裴頠傳曰、荀勗之改修レ律也、頠上言、宜レ改二諸量一、卒不レ能レ用、由レ此考レ之、晉雖二改

修樂律、然而度量、則承用魏制明矣

按、晉書曰、勗乃部著作郎劉恭、依周禮制尺、又曰、荀勗新尺、惟以調音律、至於人間、未甚流布、以此觀之、荀勗之制、復古瞭瞭焉、雖然、流俗皆以爲是、既有年于此、今改則棄國是、且阮咸亦譏其音高、是以其量、承魏斛而行之、非裴頠上言之非也

辨宋陳間量

通典曰、歷宋齊梁陳、皆因而不改其度量、三升當今一升秤、則三兩當今一兩尺、則一尺二寸當今一尺、

隋書曰、錢樂之渾天儀尺、後周鐵尺、開皇初、調鐘律尺、及平陳後、調鐘水尺、此宋代人間所用尺、傳入齊梁陳、以制樂律

又曰、周建德六年、平齊後、即以此同律度量、頒于天下

宋齊梁陳、承魏晉之舊制而不改、然其量益大焉、宋元嘉二年之一斗、當後漢一斗二升四合五勺弱、置二尺三寸九分、以一尺九寸二分除之、即得 梁大同元年之一斗、當後漢一斗五升二合一勺、置二尺九寸二分、以一尺九寸二分除之、即得 其說始出於夏侯陽算經、而不見史籍、雖然唐書藝文志、載夏侯陽算經、則其書於隋唐時行于世、亦明矣、夏侯氏隋初人、而載梁甄鸞之說、且以數學鳴于世、著算經、豈可擧妄言乎、以此觀之、隋唐史籍疎漏、可見已矣、開皇初調鐘律尺、從宋代人間、傳以入隋、而後建德中平齊後、同律度量、頒于天下、是亦從人間傳入朝廷、亦明矣、因而依尺推量、必非古三而今一、又非古二而今一也、

可レ見、通典曰、三升當二今一升一、孔穎達左傳正義曰、魏齊斗稱、於レ古二而爲レ一、周隋斗稱、於レ古二而爲レ一、皆妄解也、魏量之法、詳見二于晉書一、然非二於レ古二而爲一レ一者、是正義之妄、不レ待レ辨而明矣、物氏謂爲二尺漸訛長一、量亦當レ隨二大者一、依二隋志世世之尺一、推二世世之量一者、嘘鑿レ之甚也夫

辨二東漢後祿一

後漢書曰、延平中、定二半取二米錢一

又曰、中二千石月俸錢九千、米七十二斛、又曰、百石月俸錢八百、米四斛八斗

魏晉宋齊梁陳、承二此制一而不レ改也、西京之中二千石者、月俸百八十斛也、是五分之二給米、五分之三給錢也、任祿皆殊矣、千石者、八分之三給米、六百石者、七分之三給米、四百石、三百石、二百石、百石、皆十分之三給米、但千石以上、俸錢、大率斛八十六、百石以下俸錢、大率斛七十也、漢百石祿者、當二周制上士之祿一也

辨二漢後食邑一

魏志曰、預有二大功名於晉室一、位至二征南大將軍開府封當陽侯荊州刺史一、食邑八千戶、時人號爲二武庫一、不レ言レ名

杜預封二當陽侯一、食邑八千戶、一戶歲收百五十石、而什一歲貢、十五石也、八千戶總計十二萬石也、西京之食邑、不レ過二萬家一、至レ晉、是大功臣八千戶也、凡賞レ人也、漸差二移世代一、而降殺儉薄、特非二

魏晉耳㆒

辨㆓六朝墾田㆒

漢書地理志曰、推㆓表山川㆒以綴㆓禹貢周官㆒春秋下及㆓戰國秦漢㆒焉、京兆尹元始二年、戶十九萬五千七百二、口六十八萬二千四百六十八

又曰、立㆓諸侯王國㆒武帝開㆓廣三邊㆒故自㆓高祖增二十六文景各六武帝二十八昭帝一㆒訖㆓於孝平凡郡國一百三縣邑千三百一十四道三十二侯國二百四十一㆒又曰、定墾田八百二十七萬五百三十六頃、民戶千二百二十三萬三千六十二、口五千九百五十九萬四千九百七十八、漢極盛矣

通典曰、孝平元始二年、定墾田八百二十七萬五百三十頃、蓋紀㆓漢盛時之數㆒

漢志云、元始二年、其戶數十九萬云云、又墾田八百二十七萬五百三十六頃、其戶數千二百二十三萬云云、比㆓之元始中㆒則戶數六十四倍、口數八十七倍、大差矣、是元始二年之數、以㆓未盛㆒言㆑之、通典混爲㆓一件㆒甚非矣、然通典載㆓漢盛時之數㆒者、自㆓六朝㆒至㆓唐初㆒稍衰、故擧㆓漢盛㆒說㆑之、以㆑此觀㆑之、六朝間、墾田不㆑及㆓漢盛㆒也

辨㆓宇文氏量㆒

隋書律曆志曰、後周武帝保定中、詔遣㆓太宗伯盧景㆒宣㆓上黨公長孫紹遠、岐國公斛斯徵等㆒累㆑黍造㆑尺、縱橫不㆑定、後因㆓修㆑倉掘㆒地、得㆓古玉斗㆒以爲㆓正器㆒據㆑斗造㆓律度量衡㆒

宇文氏承二古周建法令一、以レ周爲二國號一、時得二玉斗一、以爲二古周之正器一、遂據二此玉斗一、而造二度量一、是宇文氏之誤也、古周無二斛斗升之量名一、然所謂玉斗者、酒器也、故其尺失二乎長一矣、實比二晉前尺一一尺一寸五分八釐一、蓋用二此尺一、依二周禮嘉量之制一、而作レ量也、一尺一寸五分八釐、再自二乘之一、得二千四百九十四寸九三六三一二一、爲二六斗四升之積一、其一斗積者、二百三十三寸有奇也、當二周三豆三升强一、又當二後漢一斗四升四合有奇一也、當二我邦一升六合四勺有奇一

辨二宇文氏祿一

隋書曰、下士一百二十五石、中士二百五十石、上士五百石

又曰、九秩百二十石、八秩七秩百石、六秩五秩八十四石、四秩三秩七十石、二秩一秩四十石

漢興以來、百石之下有二二級一、乃斗食月俸十斛、佐史月俸八斛、是也、要レ之、大率下士月俸十斛也、十九年七閏、而終歳當二百二十三石有奇一、是以宇文氏欲レ依二不儉薄之法一、而以二百二十五石一、爲二下士終歳之祿一、廢二月俸一也、古周制、下士食二九人一、卽上農一夫之收也、宇文氏之量法大、而一夫之歳收大率四十二斛許、是應二古周士之祿一也、然而宇文氏之下士者、一百二十五石、不計而三二倍于古周一、且與二王制一不レ合矣、是其名者下士、而實上士之祿也、故新立二九級秩一、以二二秩一秩一、爲二四十石一、是比二之於古周下士之祿一、則稍輕者也、宇文氏之公萬石者、比二之於漢功臣萬家一、則亦殊輕矣

辨二隋唐量制一

通典曰、隋制前代、三升當今一升、三兩當今一兩、一尺二寸當今一尺

權量撥亂曰、唐之量衡、皆三倍于古、而尺當古之一尺二寸者、蓋承用隋制也、嘗閱唐僧道宣四分律行事鈔云、隋煬帝立尺斗秤、準古立樣、余親見之、唐朝御宇、任世兩用、不違古典、故唐令云尺者、以尺二寸爲尺、斗稱二種、例準增加、可見唐之度量衡、果承用隋制矣

前代、指漢言之、漢代三升、卽隋一升也、何者、唐量乃受隋制也、所以然者、隋官建正一品、其祿九百石、唐亦承隋禪、故置正一品、爲錢八千八百、米七百石、唯半取米錢、是承漢制、而與隋制自異矣、然而唐量制、本於累黍、累黍之成度量衡、是漢代之制、而周時所未之有也、又隋志論王莽所制之權石曰、大樂令公孫崇依漢志、先修稱尺、及見此權、以新稱稱之、以此觀之、隋度量衡、一承漢制、彰彰乎明矣、物茂卿以爲唐量、卽三倍後周玉尺量者、其說云、玉尺乃宇文周僞物、然當時國是所在、是以魏徵韙心識其非、口不能言、乃於隋書、具載原由、余謂不然矣、太史公、書史記而見辜、然太史公非未嘗知擧國之是非、則必見辜、雖然書史者、已擧其是、不得不擧其非矣、是以世人以史記爲貴也、若魏徵之心識其非、口不能言、則隋書數十卷者、不足取信矣、魏徵何窮如此乎、可謂物氏佞說誣古人矣、且隋志非魏徵獨爲之也、宗俊曰、長孫無忌唐律、旣以大尺六之五爲古尺、而及其著隋律曆志、以荀勗晋前尺、以爲古尺、則其晋前尺、亦以大尺六之五言之、明矣、物氏度量考妄據宋儒蔡元定律呂新書之文、以隋

志以爲魏徵所著、可謂疎漏矣、此說實得之矣、從物氏之說、則仲景之方藥多水少、不能得而煎、世人皆能說之、又左傳正義曰、魏齊斗稱、於古二而爲一、周隋斗稱、於古三而爲一、是孔穎達周隋斗稱混爲一、則非也、後周量者、已詳于上矣、魏量亦非於古二而爲一者、已詳于宋陳間量矣

辨玉斗原由

唐書禮樂志曰、斛左右耳、與臀皆方、積十而至於斛、與古玉尺玉斗同、皆藏於太樂署

通典曰、大唐貞觀中、張文收鑄銅斛秤尺升合、咸得其數、詔以副藏於樂署、至武延秀爲太常卿、以爲奇玩、以律與古玉尺玉斗升合獻焉

張文收之尺者、累黍而作之、故名曰新令累黍尺也、此尺暗與古昔之尺相符、何以知其相符也、適得古代之玉尺玉斗升合而校之、咸得其數矣、所獻於太常卿之玉尺玉斗升合、是也、物氏曰、後周玉尺、至于隋末平陳之前用之、唐又以此爲法尺、此說甚妄矣、後周玉尺者、掘地得古玉斗、據斗而作尺、固非得古玉尺者也、張文收所校之古玉尺者、蓋古代舊物也、故太常卿以爲奇玩、若後周據斗所造之物、則未嘗足爲奇玩矣、又按、銅斛者、其耳乃斗升合也、一器而斛斗升合備焉、以玉所作之物、斗升合各一器、以玉之難工也、又有玉斗玉升、而獨無玉斛者、以大玉之難得也、又按、周迄戰國、無斛斗升之目、唐人所謂玉斗升合者、是爲漢以後之物、

亦明矣

辨二唐常用量一

通典曰、秤盤銘云、大唐貞觀秤同二律度量衡一、匣上有三朱漆題二秤尺二字一、尺亡其跡猶存、以二今常用度量一按レ之、尺當二六之五一、衡皆三之一

唐書禮樂志曰、及レ將レ考二中宗廟樂一、有司請レ出レ之、而秤尺已亡、其跡猶存、以二常用度量一按レ之、尺當二六之五一量衡皆三之一

自二貞觀一至二開元十七年一、將レ考二宗廟樂一、而法尺不レ審、因而有司請レ出レ之、遂亡二其尺一、然唯以三匣中有二尺之跡一、僅知二法尺一、由レ此觀レ之、唐代不レ用二小尺一已久矣、量亦然、官私常用二大者一、名曰二大斗一、乃常用量也、按、祿秩受二隋制一、以二大斗一給レ之、但半取二米錢一爲レ異也、祿秩已用二大斗一、則其它可レ推矣、然則何有二小斗之設一乎、夫唐官祿受二隋制一、自二正一品一至二從九品一、其祿半取二米錢一、是承二漢制一者也、官市皆用二隋尺隋斗一、唯晷景冠冕湯藥漏刻、用二漢尺漢斗一、猶如三周兼二行夏貢法殷助法一也

辨二常用量形一

左傳正義曰、周隋斗稱於レ古三而爲レ一

通典曰、今正聲有二銅律三百五十六・銅斛二・銅秤二・銅瓶十四一、斛左右耳與レ臀皆正方、又曰、一斛一秤、是文收總章所レ造斛、正圓而小

孔穎達周隋相包言レ之、是誤矣、後周量自後周制、絕與二隋量一不レ同也、隋制斗稱、三二倍於古一、通典曰、隋制前代三升、當レ今一升一、此之謂也、及二唐量一、其制有レ二焉、其一正圓也、其一正方也、圓者承二漢制一、方者承二隋制一也、隋氏平陳後、以二江東樂一爲二華夏舊聲一、因而廢二後周玉尺一、用二江東人間所レ傳之尺一爲レ律、雖レ然、以二此尺一制レ量、則藏貢祿秩、皆不レ中也、於レ是加二二寸一爲二市尺一也、按、周量者、正方一尺也、其制如レ此、漢量者、正圓徑一尺四寸三分有奇、圜周量外也如レ此、隋量者、正方一尺四寸一分四釐、方漢量外也如レ此、然而用二律尺一造レ之、則藏貢祿秩、皆不レ中、由レ此用二市尺一造レ之、故隋一斗即古三斗也、市尺之一尺四寸一分四釐、即律尺一尺六寸九分六釐八毫也、再自二乘之一、得二四尺八寸八分五釐三毫有奇一、爲二隋一斗積一、更以二漢斛法一尺六寸二分一除レ之、得二三斗零一合有奇一、是緣二算法之毫釐一、有二一合餘之較一也、正盛レ米按レ之、則實三斗也、唐制亦受レ之、故三二倍於下古也、總章所レ造者正圓、而用二小尺一制レ之、常用者正方、而用二大尺一造レ之、不二亦審一乎

所レ論之古尺即晉前尺、與二王莽時銅斛尺一同、又所レ指之古亦王莽時也　隋唐一斗、當二我邦三升四合二勺有奇一

辨二漢後俗量一

晉書律曆志曰、粟一斛積二千七百寸、米一斛積一千六百二十七寸、菽荅麻麥一斛積二千四百三十寸、

此據二精粗一爲レ率、使二價齊不等一、其器之積寸也

本艸綱目曰、五斗爲レ斛、十斗爲レ石

度量衡考曰、唐六典明言十斗爲一斛、世謂唐以來以五斗爲斛者誤矣

權量撥亂曰、元朱世傑算學啓蒙、亦以二千五百以爲唐時斛法、大非也

晉書云、二十七寸、蓋七字衍文也、按粟米法者、周嘉量具焉、漢興以粟法爲米法、故別有粟法也、孫子五曹等算書、皆五之三也、漢斛法千六百二十寸、五因三除、而得二千七百寸、是爲粟法也、菽荅麻麥以三之二貿易、卽二千四百三十寸也、諸穀依精粗爲率、皆人間私制也、隋唐以後之粟法、當五斗、所以然者、常用量之一斗、卽古三斗也、其粟是五斗也、唐以來五斗爲斛者、蓋粟法誤以爲量制也、又算家所謂二千五百之斛法、蓋坊間貿易量、猶如晉書云二千四百三十寸之量也

辨小斗不用

管子房玄齡註曰、古之石、准今之三斗三升三合

六典曰、二龠爲合、十合爲升、十升爲斗、三斗爲大斗、十斗爲斛

官市悉用大斗、名曰常用量也、其一斗、乃常用之一斗也、一升乃常用之一升也、一合、乃常用之一合也、故房玄齡曰、准今之三斗三升三合也、若小斗量存于世、則當謂古之一石、准小斗一石也、不云爾、而以大斗解之、以此觀之、名曰大斗、而實有大斗大升大合也、依六典之文、則似有小升小合者雖然、於小斗未聞有升合二器矣

辨㆓醫用古量㆒

證類本艸序例曰、古方唯有㆓仲景㆒而已、涉㆓今秤㆒若用㆓古秤㆒作㆑湯、則水爲㆓殊少㆒、故知㆘非㆓複秤㆒悉用㆗今者㆖耳

六典曰、凡積㆓秬黍㆒爲㆓度量權衡㆒者、調㆓鐘律㆒測㆓晷景㆒合㆓湯藥㆒及冠冕之制則用㆑之、內外官司悉用㆓大者㆒

醫方之銖兩、以㆔漢秤傳㆓於世㆒也、醫家常用㆑之、故曰㆓今秤㆒也、所謂古秤者、乃南秤、又稱云㆓複秤㆒、蓋六朝制以㆓二兩㆒爲㆓一兩㆒者、是也、唐代湯藥用㆓古量㆒、亦自㆓仲景之方法㆒傳以至㆑唐、故用㆓南秤㆒則水殊少也、由㆑此仲景之秤量非㆓複秤㆒、亦明矣、又儒家雅言者、不㆑依㆓常用量㆒、仍以㆓古量㆒言㆑之、如㆓李白一斗詩百篇、焦遂五斗方卓然㆒、是也、若從㆓常用量㆒、則其五斗、當㆓今一斗七升許㆒、非㆘人類而可㆓能飮㆒之數㆖也、如太白陰經曰、人日支㆓二升㆒、是以㆓常用量㆒言㆑之、若從㆓古量㆒、則不㆑滿㆓今三合㆒、可㆑見㆑不㆑足㆓人日食㆒矣

辨㆓墾田戶數㆒

漢書地理志曰、其三千二百二十九萬九百四十七頃可墾、定墾田八百二十七萬五百三十六頃、民戶千二百二十三萬三千六十二

通典曰、大業中天下墾田五千五百八十五萬四千四十頃、按、其時有㆓戶八百九十萬七千五百三十六㆒、則

每戶合得墾田五頃餘、恐本史之非實

漢盛而戶數千二百二十三萬、至大業中八百九十萬而大減、可見唐代不及於漢盛矣、人家衰則墾田亦可隨而減也、然今云五千餘萬、是七倍於漢、以此觀之、蓋本史之錯亂也、通典之說、是矣、戶數者、農工商總言之、故頃數少於戶數、漢志可以見矣、通典云、每戶墾田五頃餘、是一戶民、何可得耕五頃田乎

通典曰、天寶中應受田一千四百三十萬三千八百六十二頃十三畝

當此時多於漢代、既六百萬餘頃也、就應受二字考之、非謂定墾數、亦明矣

辨宋朝量制

宋史律曆志曰、太祖受禪、詔有司精考古式、作爲嘉量、以頒天下

玉海曰、經太祖朝、更改逸瑗保信、拜照所用大府寺等尺、其制彌長

宋太祖精考古式造量、是改唐量亦可知矣、所謂古式、指唐以前言之、蓋依漢量造之也、

按、大府寺等尺之比校、未見其審也、所施用之三司布帛尺、卽當古一尺三寸四分五釐、今據其制彌長之文、試加三分半、以一尺三寸八分爲大府寺等尺、依漢量制、推求斛積、其圓徑一尺四寸三分三釐二毫者、是古尺一尺九寸七分七八一六也、自乘之、更因圓積率、得三尺零七二二有奇爲圓積、復乘深一尺三寸八分、得四尺二寸三九有奇爲實、以漢斛法一尺六寸二分除之、得二

斗六升有奇、此爲宋量積、以此觀之、宋一斗、當漢二斗六七升、亦審矣

辨宋量積率

宛委餘編曰、王楙考周禮、廩人月三鬴計、食米日六升四合也、魏李悝曰、人食米月一石半、是食米日五升也、漢趙充國、曰以一馬自佗負三十日食、爲米二斛四斗麥八斛、是人日米八升、馬日麥二斗七升、匈奴傳、一人三百日、食糒十八斛、是人日糒六升也、古斛小、漢二斗七升、當今五升四合、所謂人食米八升、當今二升一合六分、食米六升、當今一升六合、觀一馬能負米麥至此、可以徵其升斗之小、而倉公傳所載、人大小腸受水米之數、不至可駭矣、第泥存仲所言六斗、爲一斗七升九合、而楙則六斗、當爲一斗六升、更少一升九合、似當以存中爲據

古斛小漢二斗七升、當今五升四合一節、蓋有錯亂、疑五升四合、當是一斗之誤歟、不然則下文算法不合矣、所謂人食以下、王弇州之意也、食米八升、當今二升一合六分（マヽ）一勺、是趙充國食米之斛也、食米六升、當今一升六合一勺、是匈奴傳食米之斛也、但應云一升六合二勺、而云一升六合、蓋省文、右二節俱十分之二十七也、乃宋一斗、當漢二斗七升也、漢六斗、則爲一斗六升二合、然沈存中以爲一斗七升九合、王楙以爲一斗六升也、王楙以一斗六升二合、爲一斗六升、其說簡而尤近矣、存中精密、其似則似、而至一馬自佗負爲多、故曰、似當以存中爲據也、又按、太祖量制、當漢二斗六七升、已辨于上、然則存中之爲越、亦明矣、物氏曰、存中它考覈精當、故弇州取之、此恐

物氏讀レ書不レ審也

辨ニ宋制所由一

玉海曰、有司請下造ニ新量衡一、以頒中天下上、詔精ニ考古制一、按ニ前代舊式一作レ之、禁ニ私造者一

按、精ニ考古制一、即指ニ周漢量制一言レ之、又前代舊式、即承ニ漢制一言レ之、漢田制、一戸耕ニ十畝一、歳貢ニ十五石一、宋田制、每畝一斗五升、此謂ニ之前代舊式一也、宋志曰、三等定レ租、上田畝輸ニ米一斗五升一、中田一斗、下田七升、物氏曰、欲レ知ニ宋量一者、當下以ニ隋量一求上レ之、然觀下其求ニ宋量一之算法上、無レ故重乘除而得レ之、晴近ニ隋量一、是以爲下承ニ隋制一者上、亦可レ謂ニ杜撰一矣

辨ニ宋朝墾田一

宋史食貨志曰、天下墾田無慮三千餘萬頃

權量撥亂曰、元朱世傑算學啓蒙曰、按、畝法闊一步、長二百四十步、當下自方五尺爲上レ步也、宋謝察微算經、亦以ニ自方五尺一爲レ步、由レ此考レ之、宋元田畝之制、亦承ニ唐制一、無ニ異者一可レ知矣

按、漢書地理志、天下可墾田、三千二百二十九萬餘頃、定墾田八百餘萬頃也、唐定墾田千四百餘萬頃也、由レ此觀レ之、宋志三千餘萬頃者、天下可墾之地也、墾之所レ定、蓋千餘萬頃也、至ニ明朝一、以ニ量地尺一、有ニ八百餘萬頃一、可ニ以見一矣、自レ唐至ニ宋元一、田制無レ異、但因ニ盛不盛一、有ニ增減一也

辨ニ元量積率一

元史食貨志曰、宋一石當二今七斗一

宋一石、乃漢二石七斗也、以二七斗一除レ之、即得二三斗八升五合有奇一、此爲二元一斗一也、竊按宋太祖、以二大府寺等尺一造レ量、其尺之長短、相二類三司布帛尺一、三司布帛尺、是宋官尺、比二古尺一尺三寸四分五釐一也、丁度高若訥等、及三奉レ詔按二四等尺一、皆亦爲レ長、由レ此觀レ之、元尺蓋短二於三司布帛尺一也、今試以二古尺一尺三寸一爲二元尺一、依二唐制一推二求其積一、方一尺四寸一分四釐者、古尺一尺八寸三分八釐也、再自二乘之一、得二六尺二寸零九釐有奇一、以二漢斛法一尺六寸二分一除レ之、得二三斗八升三合有奇一、是與二元尺一闇符、可レ知元尺當二古尺一尺三寸許一也、又所三以依二唐制一者、周是方制、漢是圓制、隋唐是方制、宋是圓制、然則元應二方制一也、隋唐改二漢制一、原レ周也、宋改二唐制一、原レ漢也、元應下改二宋制一、原上レ唐也、是發二國號一、建二封禪之所一レ由也、元一斗、當二我邦四升四合有奇一

辨二田制不改一

算學啓蒙曰、按、畝法闊一步、長二百四十步、當二自方五尺爲一レ步也

自方、猶レ云三方自二乘之一也、或徑自二乘之一、謂二之自徑一、是算家之辭也、言五尺自レ之、得二五五二十五一、而爲レ步者、亦與二漢六尺爲一レ步、相當也、按、唐制以二一尺二寸一爲二一尺一、故漢六尺者、唐五尺也、元以二一尺三寸許一爲二一尺一、其唐五尺、當二四尺六寸有奇一、其差三寸有奇也、田制之度、固粗也、野外非レ爭二三寸之地一、故以爲二相符一、實不レ符矣、又按、量制是承二唐代一、然則其新尺以爲レ得二唐大尺一、故田畝

亦不二敢改一也、權量撥亂載二圖書編井牧之論一曰、以二元之六十七畝一爲二古之百四十畝一、豈足レ信乎

辨二人日食米一

泉河史新聞、至正改元二月己丑、訖二五月辛酉一、載二功計一曰、工匠繇卒千八十有五人、用レ糧千七百五十斛

二月己丑訖二五月辛酉一、凡九十三日也、置二千七百五十斛一、以二九十三一除レ之、得二十八石一斗七升一爲二一日食米一、復以二千八十五人一除レ之、得二一升七合三勺四抄一、此爲二人日食一、當二漢六升六合八勺八抄一、比二諸周禮廩人其月三鬴者一、日食六升四合也、與二所求一相近矣、從二度量衡考一、則元一升七合三勺四抄者、當二漢八升零三勺八抄一也

辨二明朝量制一

朱載堉律學新說曰、得二二千九百四十寸一、是兩鐵斛、卽十斗實積

權量撥亂載二類經一曰、我朝斛法、成化十五年、奏准二鑄成斛法一、依二寶源局量地尺一

寶源局尺者、卽承二唐大尺一也、當二我邦九寸九分許一也、再自二乘之一、得二九寸七分零二九九一、更乘二明斛法二千九百四十寸一爲レ實、以二我邦斛法六四八二七一除レ之、得二四斗四升零零有奇一、爲二明一斛一、卽與二元量一同、當二漢三斗八升五合六勺有奇一

辨二明朝祿秩一

會典曰、百官俸給不ㇾ拘二貴賤一皆月米一石、又曰、監生有家、小者月四斗、無者三斗、曆事監生有家、小者月八斗、無者六斗

一鐵斛乃五斗、而人月食米也、是明制之所ㇾ由矣、功計軍行、皆亦由ㇾ之、尙詳二于下一、按曰二月米一石一者、蓋包二絲麻鹽酪之費一也、又按、有家小者四斗、無者三斗、是初在官者、未ㇾ足ㇾ養二父母一、可ㇾ見二距ㇾ古愈遠一、士祿愈儉矣、明一石、當二漢三石八斗五升有奇一、卽周六鬴有奇也、周制下士終歲之祿乃百鍾、凡一人月九鬴許也、率四鬴爲二月食一、其餘五鬴、以爲二絲麻鹽酪祭器祭服之費一、又且周官下士食二九人一、足二以盡一ㇾ力焉

泉河史載二永通閘洪武三年之功計一曰、石工二十九人、木工四人、金工二人、徒四百五十人、食粟八石零七升

會典曰、軍行糧月五斗

永通閘之功計、總四百八十五人、其食二八石零七升一者、當二人日食一升六合六勺有奇一、通ㇾ月卽五斗也、與二會典所一ㇾ載月五斗一相符、又明日食一升六合六勺有奇者、當二漢六升四合有奇一也、元日食是一升七合有奇、卽漢六升六合八勺有奇也、明與ㇾ元相近、亦可ㇾ見矣

辨二清部頒量一

大淸會典曰、升方三十寸六百分、斗方三百一十六寸、斛方一千五百八十寸、兩斛爲ㇾ石、方三千一百六

十寸如レ爲レ升、而底方三寸、深三寸五分一釐爲レ斗、而底方一尺、深一尺五寸八分爲二十斗斛一、而底方一尺四寸、深一尺六寸一分二釐、皆與二右寸數一相符、得二部頒鐵升斗斛容量之準一

五斗爲レ斛、十斗爲レ石、見二于本艸綱目一焉、宋明以來、鐵斛容二五斗一、稱云二一斛一、故淸朝亦兩斛爲レ石、而有二十斗斛之名一也、此斛以二何尺一制レ之未レ詳、今用二乾隆中齎來者一求レ之、依二裁衣尺一、則其一斗、當二我邦七升六合有奇一、依二小尺一、則其一斗當二我邦三升七合有奇一、俱不レ合也、因而再二考之一、蓋是營造尺之制也、物氏所レ校之江南步弓五尺四寸者、疑是營造尺也、由二于此一、則其一斗當二我邦六升一合四勺有奇一也

辨二永豐倉斗一

大淸會典曰、四十五年、覆二准陝省額一徵二糧石一、支二放兵餉一、但用二永豐倉斗一較レ之、部頒二新斗一、每石短少三斗、嗣後照依二舊斗之數一、以二新斗一交收支給、停レ用二舊斗一、併將二舊時多收耗糧一、永行二禁革一

部頒量之七斗、卽永豐倉斗一斛也、從二前說一、則當二我邦四斗三升弱一、又盛京金石金斗關東斗、皆未レ見二其考證一、故略二于此一

辨二鐵斗木斗一

大淸會典曰、升斗面寬底窄、若二稍尖量一、卽致二浮多一、若稍平量、卽致二虧額一、弊端易レ生、職此之故、於二民間一甚爲レ未レ便、嗣後直省斗斛、大小作二何畫一一、其升斗樣式可否、底面一律平準、以杜二弊端一、至二盛

京一、金石金斗關東斗、亦應二一併畫一一、著九卿詹事掌印不掌印科道、詳議具奏、遵レ旨議定、直隷各省、府州縣、市廛、鎭店、馬頭、鄕村、民人所レ用斛面、俱令下照二戶部原頒鐵斛之式一、其升斗亦照二戶部倉斗式樣一、底面一律平準上

享和改元正月、江南蘇州商船陳元順、漂二到于日州外浦一、余往問二吃米水榮一、王林柯曰、蘇州十人、共吃米十二升、乃見下其所二齎來一之木升上、其唇闕失レ準、以二曲尺一校レ之、面方四寸六分有奇、底方二寸二分、深三寸有奇、容二我邦五合五勺一也、又嘗見二大坂人蒹葭堂所レ藏之淸官斗者一、面方四寸八分三釐、底方二寸三分八釐、深二寸九分八釐、當二我邦五合六勺弱半一也、竊悔未レ見二官鐵斗者一、不レ得二其詳一矣

度量衡說統卷之三　終

度量衡說統卷之四

辨二權衡稱銓一

書經舜典曰、同二律度量衡一、又呂刑曰、輕重諸罰有レ權

周禮考工記曰、以爲稱錘以起レ量

禮記月令曰、同二度量鈞衡一、石角斗甬正二權概一

漢書王莽傳曰、考量以レ銓、注曰二權衡一也

說文稱字注曰、銓也

權衡稱銓皆一物、而所レ呼亦異矣、後世概謂二之秤一、竊按、稱字多義紜紛、是故漢以後用二秤字一也、諸葛亮曰、我心如レ秤、是也、凡權指二法馬一而呼レ之、衡指二横梁一而呼レ之、稱指二所レ命若干重一而呼レ之、銓指二法馬横梁具之物一而呼レ之、要レ之只一秤而已、非二制作之異者一也、後世有二天平等子二品一也、古文銓或用二鐉字一、尙書大傳曰、禹之君レ民也、罰不レ及レ强、而天下治、一鐉六兩、鄭玄曰、所レ出金鐵也、死辠出二三百七十五斤一、用レ財少、余按大傳欲二千字一、葢一銓即六千兩

辨三古無二斤兩一

隋書律曆志曰、古有二黍絫錘錙鐶鈞鋝之目一、歷代差變、其詳未レ聞

博古圖曰、漢江燭錠高五寸五分、深四寸五分、口徑三寸、容四升八合、銘云、王氏銅江燭錠兩廦、幷重二十二斤、四兩第一、共十八字、自三代至秦、無斤兩之識、此器顯其斤重字畫、與漢五鳳鐙款識相類、實漢物也

鈞斤兩銖者、漢代之制也、六國迄秦、其名所未聞矣、長孫無忌以爲曆代變差、其詳未聞者、可謂得之矣、博古圖以錠銘有斤兩爲漢物、亦是矣、漢儒之所註、皆漢稱名也、於古必無斤兩之目、小爾雅曰、二鍰四兩爲斤、亦不可從矣、其數自不合也、上古所謂兩者、布帛之數、或車之數也、雖然、今尙用斤兩、以擧考校、惟借漢稱名、作註解者也

辨周禮鍰制

周禮考工記冶氏曰、戈重三鋝、戟重三鋝、注曰、今東萊或以太半兩爲鈞、十鈞爲鋝、鋝重六兩太半兩

又桃氏曰、爲鍰身長五、其莖長重九鋝、謂之上制、注曰、上制長三尺、重三斤十二兩

太半兩者、三分兩之二也、即六六六不盡也、十之得六兩六六六不盡、此爲鋝、其三鋝、當二十兩、即一斤四兩也、是戈戟之重也、其九鋝、當三斤十二兩、是鍰之重也、說文曰、鋝十一銖二十五分銖之十三、或曰、二十兩爲鋝、皆非也、蓋說文以呂刑曰百鋝、爲三斤也、三斤、卽千百五十二銖、更以百除之、得十一銖二十五分銖之十三也、若從十一銖有奇、則戈戟三鋝者、不滿二兩、是甚輕、實不如鏃矣、又從二十兩、則鍰九鋝、卽十一斤餘也、以十一斤鐵、作三尺鍰、則大率幅三

寸、厚一寸、是不レ鈒、眞鐵柱也、小爾雅以二一兩半一爲レ捷、倍レ捷爲レ舉、倍レ舉爲レ鍰、故其鍰六兩也、一兩半、宜レ作二一兩太半一也、置二一六六六不盡一倍レ之、得二三三三不盡一爲レ舉、又倍レ之得二六六六六不盡一、爲レ鍰、即六兩有太半、是與二周禮注一相合也、鈒制是莖五寸也、上制五二其莖一、故三尺也、中制四二其莖一、故二尺五寸也、今試、上制莖身厚薄均二分之一、幅爲二寸半一、厚爲二二分一、而幅厚相乘、更乘二長三尺一、得二積九寸一、依二孫子算經一、用二鐵方寸重六兩一、則得二五十四兩一、即三斤六兩也、攻二諸周禮一朒二六兩一也、恐是鈒積九寸、未レ得二其精數一故也、以レ此觀レ之、鍰是六兩太半者、可レ謂二定說一矣、尙書大傳爲二六兩一也

辨二鉤鍰古稱一

尙書呂刑曰、其罰百鍰、又曰、其罰六百鍰、又曰、其罰千鍰、又曰、輕重諸罰有レ權

周禮冶氏曰、三鋝注曰、太半兩爲レ鈞、十鈞爲レ鋝

隋書律曆志曰、古有二忝桑錘錙鐶鉤鋝鎰之目一

周禮註鉤字、疑是鈞字之誤也、若鈞字、則漢之三十斤也、漢改二稱制一、何變二小數名目一、爲二大數名目一、其義不レ審也、詳二辨于漢制稱名之處一矣、又隋志擧二鉤字一、而無二鈞字一、可二以徵一矣、按鉤小環也、鍰（鍰鋝相通）大環也、戰國策曰、無二鉤竿鐔蒙須之便一、注曰、鉤鈒頭環、漢書五行志曰、銅鍰、注曰與レ環同、以レ此觀レ之、昔者以二小環大環一爲二法馬一、其太半兩者、狀如二鈒頭環一、故曰レ鉤、其六兩太半者、狀如二

貫繫鐶、故名曰鍰、或鐶或錘、皆鉤鍰之一轉者、而非別有鐶錘之數也、再按、經傳未聞其鍰上有稱名、然而及其重、即云百鍰千鍰、竊思所謂衡石、亦呼曰若干鍰與

辨錙錘非稱

禮記儒行曰、砥厲廉隅、雖分國如錙

淮南子詮言訓曰、錙錘注曰、六兩曰錙、倍錙曰錘

蓋錙錘並鎚類、鍛器也、莊子太宗師曰、在爐錘之間耳、此譬座塗炭也、又論輕重、則提出此錙錘、何者蓋其重權者、用石制之、其輕權者、用鐵鎚命之、故蹤境有其名異也、楊子方言曰、東齊之間曰鐉、宋魯曰錘、此之謂也、漢儒以錙錘爲稱名、是故其說自不合矣、說文曰、本作錙六銖、又曰、錘八銖也、荀子富國篇注曰、八兩曰錙、淮南子注曰、六兩曰錙、倍錙曰錘、諸說紛然、孰之據耶、或六兩、或八兩、或六銖、或八銖、皆無所適等也

辨鎰斤金數

孟子曰、今有璞玉於此、雖萬鎰、必使玉人彫琢之、朱氏曰、鎰二十兩也

禮記喪大記曰、朝一溢米、夕一溢米、食之無算、鄭氏曰、二十兩曰溢、方氏曰、溢與鎰同

鎰斤並黃金之數、而非權衡之通稱也、漢書食貨志注曰、漢以前、以鎰名金、漢以後、以斤名金、是也、倘辨于古器揆按之處、鎰之爲二十兩、鄭氏一溢米算法、可徵矣、按、米者、莫以鎰算

矣、唯喪三日不レ食、當二此時一歠レ粥而無レ算、故不レ言二豆區一而言レ鎰、又以甚少、辟二諸一黃金之重一
也、是亦第二義矣

辨二石不一レ可レ知

史記始皇本紀曰、收二天下兵一聚二之咸陽一、銷以爲二鐘鐻金人十二一、重各千石
漢書司馬相如傳曰、立二萬石之虡一
尙書五子之歌曰、關石和鈞注曰、三十斤爲レ鈞、四鈞爲レ石
說苑曰、宮殿五里、建二千石之鐘萬石之虡一
石亦古之稱名也、（家語曰一鼓鐘、王肅曰、石四謂二之鼓一、雖レ然禮記曰、獻レ米者操二量鼓一、荀子曰、瓜桃棗李、一本數以盆鼓皆鼓者器之名也、故不レ載）然其重不レ可二得而考一矣、百二十斤爲レ石者、漢以後之制、而於レ古所レ未レ有也、隋志、論二王莽時權石一曰、重四鈞、是卽一斛米之重也、故斛石通用也、昔者權石、因二一斛米之重一而制レ之、自二六國一至レ秦、斛法稍少、其一斛米之重亦隨少、而不レ滿二漢四鈞一、然則上古所謂石者、非二百二十斤一也、且漢以前、無二斛斗升合之目一也、若因二一鬴一而制レ之、則其一石、當二漢七十餘斤一、若因二一鍾一而制レ之、則其一石、當二漢七百餘斤一、以レ此觀レ之、古之衡石、非下當二漢百二十斤一者上也、再按百二十斤、卽九十六鍰也、周制豆區鬴、皆積レ四而登也、鍾是積レ十而登也、然其稱制、獨積二九十六一而登、是亦於レ理無レ所二主當一焉

辨二鈞石顚倒一

左傳定八年曰、顏高之弓六鈞、皆取而傳觀之、杜氏曰、古稱重、故以爲異强
呂氏春秋曰、齊宣王所用弓、不過三石、而左右皆曰、此不下九石
尙書五子之歌曰、關石和鈞、王府則有
漢之稱制、是積鈞成石也、上古之制不然、蓋積石成鈞也、何者、宣王之弓三石者、以軟弓言之、若積鈞成石、則顏高之弓、猶尙軟弓也、然攻之於左傳、以爲强弓、故杜氏亦以爲古稱重也、又尙書曰、關石和鈞、亦積石成鈞也、何者、關、關係關涉之關也、猶由也、和、調和應和之和也、猶中也、蓋謂禹斟酌古今以作法則、而輕重各得其當也、凡古人作文之次、雖不必拘、而數量之目、大抵先輕而後重、若果如漢之稱制、則當先曰鈞、而後曰石也、然今曰關石和鈞、則是積石成鈞也、明矣、唯其數者、傳亡而不可知矣、如孟子曰擧百鈞則爲有力人、說苑曰、一圍之木持千鈞之屋、皆是辟論之辭、固不足爲考徵矣、孔穎達左傳正義排杜注、而顏高之弓爲不强、亦鑿也

辨秦稱始異

說苑曰、張良東見滄海君、得力士、爲鐵椎重百二十斤、秦皇帝東遊、良與客狙擊秦皇帝於博浪沙、誤中副車
六國時、彎三石弓、不爲有力者、秦時投擲一石鐵椎、爲有力、以此觀之、秦稱制自異矣、蓋秦焚

レ書坑レ儒時、必稱制亦改レ之、然而人間不三敢爲二苛政一、是以漢興亦隨二其數一制レ之也、以二斤字一可レ考矣

辨二漢制稱名一

漢書律暦志曰、權者銖兩斤鈞石也、所三以稱レ物平レ施知二輕重一也、重十二銖、兩レ之爲レ兩、二十四銖爲レ兩、十六兩爲レ斤、三十斤爲レ鈞、四鈞爲レ石

銖兩斤鈞石、蓋是銖鋃釿鈞石也、凡名數之所レ由必觸レ類而長焉、既周制有二錘錙鍰鉤鋝之目一、可二以見一矣、算車曰レ兩者、以レ有二兩輪一故也、算布曰レ兩者、有二兩端一故也、今平レ衡知二物之輕重一、曾無三爲レ兩之理一矣、恐漢俗鋃兩、相通用、然後及三儒家錄二史傳一、泥二兩字一提二出一龠黍重兩レ之之辨一者也、銖殊也、鋃銷也、釿切也、蓋銖鋃並鑠鐵之轉成レ塊、可二以能爲一レ權者也、小塊而殊殊等者、名曰レ銖、中塊而銷可二能鍛一者、名曰レ鋃、大塊而切之可二能鍛一者、名曰レ釿、甚大而可三能作二大鈞一者、名曰レ鈞、漢書賈誼傳曰二大鈞一、如淳曰陶者作二器于鈞上一、可レ見二鈞亦是鐵器一也、若不レ爾則銖兩斤鈞、依二何物一稱二此名一乎、其本來不レ可レ曉矣、又漢半兩錢之兩字、雖レ曰二古義存一、而必亦通音借字也、故、其錢重四銖、而尙曰二半兩一、若取二諸十二銖兩之義一、則其重四銖、安得レ曰二半兩一乎、鋃銷也、其義不レ雅、是以錢面借音用二兩字一、猶三大錢書二大泉一也、錢賤殘、皆从レ戔、有二淺小之象一、故用二泉字一、所三以爲二國寶一也、漢代學問總二原理一、故遺二失兩之爲レ鋃、而皆以レ兩爲二古名一矣、漢志、一龠黍之重兩レ之

爲レ兩、然及二斤鈞之義一、亦不レ審也、或云、一斤是三百八十四銖、取二之易爻數一、亦不レ可レ從矣、度之分寸尺、皆積レ十而登二量之合升斗斛一、亦皆積レ十而登、然唯此稱、何奈引二出易爻數一而由焉乎、斤是本黃金之數也、釿之以二十六兩一爲二一枚一、謂二之斤一也、說文釿字註曰、劑斷也、此之謂也、金銀融二通于世一、必有レ劑、猶如二質劑一、惟與二度量目一異、故不レ能二積レ十而登一也、石者衡石之石也、大重之權、以レ石作レ之、故名曰レ石也

辨二漢稱考徵一

周禮考工記曰、鍾以起レ量

漢書王莽傳曰、考量以レ銓

考量以レ衡、考衡以レ量、是亦古法也、於レ是就二周漢諸儒之言一、探二索古尺一、且併考二漢時金印及方寸七等一、以求二漢斛積一、更從二古訓一、而得二其數一也、漢一兩、當二我邦二錢二分弱一、算計詳載二于尾卷一也、依二仲景之藥方一、考二按之一、猶二符契一、又施二之於今日一、實有レ徵、可レ謂レ得二古方法一矣、但後漢一兩當二我邦二錢三分强半一、然仲景亦後漢人、而依二前漢法一、以二古方一故也

辨二銖以下數一

漢書律曆志曰、權二輕重一者、下レ失二黍絫一、應劭曰、十黍爲レ絫、十絫爲レ銖

漢志所謂黍絫、猶レ云二毫釐一也、謂二至少一之辭也、雖レ然算家一個以下之數曰、不レ得レ不レ號、而或

云二勺抄撮圭粟一、或云二分釐毫絲忽一、但積レ十而登也、權衡者非二積レ十而登之物一、然銖以下絫黍、亦積レ十而登也、皆存レ名而無レ器、蓋不レ與二官制一矣、何以知レ之、則後世稱、有二天平等子之二制一、其天平制者、權有二數枚一、應レ物用レ權、若無二輕權一、則不レ能レ計二輕物一也、等子制者、以二一權一充二數枚一、應レ物使二其權去就一、故自得二絫黍一也、按漢代之稱、是天平制也、一銖者、不レ足二我邦一分一、自レ此以下、豈有レ權乎

辨二稱制定則一

小爾雅曰、斤十謂二之衡一、衡有半謂二之秤一、秤二謂二之鈞一、玉海曰、凡一錢爲二十萬忽一、以二二千四百一得二十有五斤一、爲二一秤之則一

衡秤、倶器名也、但其制有二大小一、蓋流俗呼二小者一爲レ衡、呼二大者一爲レ秤也、其實是一稱而已、然云レ衡者、掛二十斤一、云レ秤者、掛二十五斤一、以レ秤再掛レ之、是一鈞、即三十斤也、至二唐宋一、亦一秤以掛二十五斤一、爲二秤之定則一、乃古法也

辨二複秤始一レ晉

證類本艸序例論二古秤一曰、古秤皆複、今南秤是也、晉秤始二後漢末一已來、分二一斤一爲二二斤一

左傳正義曰、魏齊斗稱、於レ古二而爲レ一、周隋斗稱、於レ古三而爲レ一

千金方曰、呉人以二二兩一爲二一兩一、隋人以二三兩一爲二一兩一

後世有ニ單秤複秤之二張一也、單秤者、其一斤、即古一斤也、複秤者、其一斤、卽古二斤也、魏晉間、卒然複秤制出、而後皆由ニ于此一焉、晉荀勗造ニ律尺一、未レ能レ改ニ量衡一、蓋自ニ後漢末一、賦斂漸重、而租調綿絲、亦以ニ複秤一收レ之、是以雖三複秤非ニ古義一、而廉直之言難レ立、聚斂之議被レ用、遂不レ得レ改ニ修量衡一也、自レ此以降及ニ隋唐一、則大秤大斗之制愈甚、既三ニ倍於古一也、其間歷代之變、亦可レ知矣、

辨ニ六朝失準一

隋書律曆志曰、梁陳依ニ古稱一、齊以ニ古稱一斤八兩一爲ニ一斤一、周玉秤四兩、當ニ古稱四兩半一、開皇以ニ古稱三斤一爲ニ一斤一、大業中依レ復ニ古稱一

又論ニ王莽時權石一曰、大樂令公孫崇、依ニ漢志一先修ニ稱尺一、及レ見ニ此權一、以ニ新稱一稱レ之、重一百二十斤、新稱與レ權合若ニ符契一

公孫崇修ニ稱尺一時、未四嘗知三周之玉稱當ニ古稱若干一、開皇之稱、當ニ古稱若干一也、故依ニ漢志一、而造ニ新稱一、此稱與ニ王莽時權石一、暗相符也、若開皇以ニ古稱三斤一爲ニ一斤一分明則不レ俟ニ漢志一、亦可レ得矣、以レ此觀レ之、或齊以ニ一斤八兩一爲一斤一、或玉稱以ニ四兩半一爲ニ四兩一、或開皇以ニ三斤一爲ニ一斤一、皆後人據ニ歷史一、考ニ古器一而所レ說也、唯六朝間失レ準、其審不レ可ニ得而考一矣、齊一斤者、長孫無忌以爲ニ一斤半一、孔穎達以爲ニ二斤一、未レ知ニ孰是一也

辨ニ唐大小秤一

通典曰、秤盤銘云、大唐貞觀秤、同律度量衡、匣上有朱漆題秤尺二字尺亡、其跡猶存、以今常用度量校之、尺當六之五、衡皆三之一

權量撥亂曰、宋江僦復隣幾雜志曰、藥方一大兩、即今之一兩、隋合三兩爲一兩、可見唐之大秤實承隋制也

周隋間、大斗大秤之制出、而天下皆由之亦久矣、唐受隋禪、復亦以大秤爲常用、雖然隋公孫崇所造之新稱、與王莽時權石合若符契、且大業中、依古稱、是以其古稱亦不得不用也、凡宜者、悉撰而依之、或官級自正一品至從九品、皆承隋制、其半取米錢、是依漢制也、度量衡之制亦然、於是用大秤小秤、所以相兼漢制隋制也、猶如周徹法相兼夏貢法殷莇法也、小秤一兩當我邦二錢八分有奇、大秤一兩當我邦八錢五分有奇也、求之法、先欲依隋秤、然六朝失準、不足爲徵、因而考察唐制、適累黍爲原、故今就律而攻之、漢尺即我邦七寸五分、得黃鍾律積四十一分零零有奇、（史記律書曰、黃鍾長八寸十分一宮、今從之用圓積九分）唐尺、即我邦八寸零八釐、得黃鍾律積五十二分八八有奇、（漢志曰、爲八百一十分應曆一統千五百三十九歲之章數黃鍾之實也、今從之用圓積九分）置漢一兩二錢二分、以漢律積四十一分有奇除之、得數、更乘唐律積五十二分有奇、得三錢八分有奇、此爲唐小秤一兩、更三之、得八錢五分有奇、爲唐大秤一兩、是開元錢十枚之重也、嘗試開元錢大中小平分之、得八錢一分有奇、按考出于下、今其稍輕、以千歲已去、輪郭銷毀故也、於是所探索之數、以爲適中也

辨二宋元明稱一

唐書食貨志曰、武德四年、鑄二開元通寶一、徑八分、重二銖四絫、積十錢、重一兩

六典曰、舊法毎二一千一、重六斤四兩、近所レ鑄者、多重七斤

玉海曰、景德中以二御書眞草行三體淳化錢一、較二定實重二一銖四絫爲二一錢一者、凡一錢爲二十萬忽一、以二二千四百一得二十有五斤一、爲一秤レ之則劑、令下與二開通元寶錢一輕重等上、付二有司一

宋稱、即承二唐制一用レ之也、淳化錢重二銖四絫、與二開元錢一輕重等、則錢制稱制、倶全與レ唐同、凡唐以降、錢法積十枚重一兩、爲二定準一、元明亦隨承レ之、唯後世不レ能レ無二黍絫之訛一矣、開元錢武德中所レ鑄者、毎二一千一重六斤四兩、後所レ鑄者及二七斤一、蓋宋朝錢法、誤以二開元錢之重一爲レ準、何則開元錢初鑄者、比二淳化錢一稍輕、由レ此觀レ之、宋元明之一兩、蓋唐之一兩二三銖也、置二唐一兩一、（乃八錢五分）以二二十四銖一除レ之、得數、更乘二二十七銖一、得二九錢五分有奇一、爲二宋一兩一也、岡南氏曰、友人田村元雄家、嘗藏二宋明二秤一、試以二本邦今秤一按レ之、宋一兩當二今九錢六分一、明一兩當二今九錢八分一、比二諸余所二探案一稍多、疑其法馬經レ年失二乎輕一、故可レ得二九錢五分餘一、而得二九錢六分一、其實密符也、又明一兩當二九錢七分有奇一、亦可レ知矣

辨二清朝制稱一

大淸會典曰、赤金十六兩八錢、白銀九兩、紅銅七兩五錢、黑鉛九兩九錢三分、各鑄爲二寸方一、高廣六面

均、皆可㆑得㆓部頒營造尺一寸㆒

厯算全書度算輕重比例曰、水與㆑金若㆓一與㆓十九㆒、又與㆑銀若㆓三與㆓三十一㆒、又與㆑銅若㆓一與㆒九、又與㆑鉛若㆓二與㆓廿三㆒

我邦五金之輕重、未㆑聞㆓其詳㆒矣、金方寸立積之重者、塵劫記所㆑載、與㆓度量衡考所㆑載大異、恐是金之性質、必有㆓古今㆒乎、古代金、其色赤而黃、近代金、其色黃而白、是所㆓以金中含㆑銀也、金銀各重不㆑同、其含㆑銀者自輕、然則淸人所㆑說之金、亦其性質不㆑可㆓得而知㆒也、唯水是似㆑無㆓淸朝我邦之異㆒、且雖㆑有㆓輕重㆒、其差不㆑多、故以㆑水爲㆓比例原數㆒也、我邦水一升重、大率四百八十錢、卽方寸立積、而七錢四分也、依㆓厯算全書比例㆒、乘㆓十九㆒、得㆓百四十錢零有奇㆒、此爲㆓淸朝金之重㆒、按淸營造尺、當㆓我邦一尺零八分㆒、（乃用㆓物氏所㆑校之物㆒）再自㆓乘之㆒得㆓一二五九七有奇㆒、更乘㆓百四十錢有奇㆒、得㆓百七十七錢一分有奇㆒、此爲㆓淸朝之十六兩八錢㆒也、其一兩、當㆓我邦十錢零五釐㆒也、享和改元辛酉正月、余到㆓於日向外浦港㆒、而遇㆓淸船漂到客㆒、因問㆓稱制㆒、江南蘇州王林柯對曰、蘇州米一升卽一斤、靑口米一百五十四升、卽百斤、此說幾不㆑通、蓋是一種之制也、曾聞淸亦州郡廣、恐隨㆑境有㆓別制㆒歟

度量衡說統卷之四終

度量衡說統 卷之五

辨開元錢徑

余一夕訪北山先生、語次及度量衡、凡先輩之說雖多、而說之紛紛、無可適從者、因約先攷唐尺、而携余嘗所集之開元錢數枚、而至于奚疑塾、先生自執曲尺、余自把時秤、撰尤精好者爲據、其中者布十枚度之、總計八寸一分、更秤之、其衡水平而得八錢、又大者十枚、總計徑八寸二分二釐、重八錢七分、又小者十枚、總計徑七寸九分六釐、重七錢七分、皆與先輩之說不合矣、物氏曰、雖有大小厚薄之不齊、要之皆不遠於八分、圖南氏亦原於此、其撰疎矣、余嘗考諸唐食貨志、曰、徑八分、重二銖四絫、積十錢重一兩、得輕重大小之中、由此觀之、唐時已有輕重大小、其文字有八分篆隷三體者、武德四年所鑄也、至其背有昌京・洛楊・益藍・襄荆・越宣・洪兗・潤鄂・平興・梁廣・梓福・丹桂・并幽等郡名者、則不足爲準、皆後年所鑄、而失舊法也、唐薛璫唐聖運圖、幷鄭處會粹、皆云、錢上有指文、雖然其文或仰或伏不同、又泉志曰、有甲文者、制作精好、是亦不言其文之仰伏、且亦在右在左不一、孰爲是乎、或又元字第二畫、有左挑、有右挑、有兩挑、或又有通字下、若元字下、若寶字下有星者、此等皆雖精好、而不足爲考徵矣、竊按輕重大

小、蓋係於型鎔之初鑄後鑄、故欲驗秤尺、則宜先撰初鑄者、初鑄必小而輕、唐六典曰、舊法每一千、重六斤四兩、近所鑄者多七斤、可以見矣、先輩不達此義、而撰不銷毀尤精好者、故皆失乎長重也、按舊唐書新唐書、皆云、積十錢重一兩、此語非盡具之謂、唯示得輕重大小之中也、此錢未鑄時、以蠟樣作之、見于唐聖運圖也、夫蠟樣何先計成錢之輕重乎、後世有開元錢尺者、然其尺尚訛、亦是故也、余嚮疑其故亦已久矣、若斯則開元錢徑八分、以何尺言之耶、然先輩云、唐大尺之八分也、余未知所以然、一日推常用量之算法、歷歷似大尺之制、於是慨然始覺開元錢徑八分、亦用大尺矣、又先輩皆云、日本曲尺、乃唐大尺也、然未聞其明證、唯荷田在滿著度制略考、而引後成恩寺關白令抄所載之語、以爲承唐制之證、而斥貝原篤信。中村迪齋。中根元珪。荻生茂卿。伊藤源藏等之疎漏、其說可謂得之矣、但至如和州法隆寺所藏之銅尺不合之說、則未知銅鐵經年漸伸彌輕之理也、晉始平銅尺、是漢代之舊物也、雖然埋於地數百年、已伸四分、可以見矣、三代有玉尺、而尺無異同、及漢代鑄銅尺、而後長短紛然、尺論起焉、至今未辨銅鐵經年漸伸、而空累黍剪管矣、余嚮遭西域客、聞古銅器之經年久、則識長之理、而始悟古尺不合之論也、若夫依錢重、以推求尺、則其徑失乎短、又依錢徑、以推求秤、則反失乎重、是斯非徑伸反輕乎

依秤推尺

秤二錢重一以推二求レ尺之法一、大中小三等之重相併、以二總枚數一除レ之、得二八一三三有奇一、乃十錢重八錢一分三釐三毫、是唐一兩、卽周・漢三兩也、由レ此更三除、得二二錢七分一釐一毫一、此爲二周漢一兩一、其一石乃五千二百零五錢有奇、是卽漢量一斛米之重也、以二我邦一斗米重四千錢一除レ之、得二一斗三升零一二八一、此爲二漢量一斛積一、更乘二我邦斛法六四八二七得數一、以二漢斛法一六二一除レ之、得二五二零七二八有奇一、爲二漢尺立方積一、更開二立方一、得二八寸零四六有奇一、是卽周漢一尺也、姑從二唐書一、而六因五除、得二九寸六分五釐一、此爲二唐常用尺一也、所レ謂徑八分當二七分七釐有奇一、短二於所レ按也

依レ尺推レ秤

度二錢徑一以推二求レ秤之法一、大中小三等之徑相併、以二總枚數一除レ之、得二八寸零九釐三毫有奇一、姑從二唐書一、以二徑八分一除二之得數一、更五因六除、得二八寸四分三釐有奇一、此爲二周漢古尺一、再自乘之、得二五九九一八有奇一、爲二古尺立積一、更乘二漢斛法一六二一得數、以二我邦斛法六四八二七一除レ之、得二一斗四升九合七三有奇一、是漢一斛積也、復乘二我邦一斗米重四千錢一得數、以二千九百二十兩一除レ之、得二三錢一分一九有奇一、此爲二漢一兩一也、唐一兩、當二九錢三分五七九有奇一、卽十錢重也、是重二於所レ按也

辨二唐量僞作一

唐書律曆志曰、嘉量之銘曰、大唐貞觀十年、歲次二玄枵一月旅二黃鐘一、依二新令累黍尺一、定レ律按レ侖、成二玆嘉量一與二古玉斗一相符、同二律度量衡協律一、卽張文收奉レ勅脩定

按隋時累黍之揆挍甚精焉、取上黨羊頭山之黍、依漢書律暦志挍之、其大者、稠累依數滿尺、實於黃鐘之律、須撼乃容、其中者累尺、雖復小稀、實於黃鐘之律、不動而滿、如此其挍考盡焉、然逵奚震及牛弘辛彥之鄭譯何妥等、久議不決、自此降唐代十百年去古愈遠、而張文收雖學、而累黍作尺暗合于古、無毫釐差、亦不可信矣、故新令累黍尺五字、亦不足采用矣、又按、古玉斗者、本酒器之名、非量財、如已辨古量名也、後周時、掘地得古玉斗、以爲正器、據其玉斗、造律度量衡、其尺益長、可以見矣、今張文收之度量、與古玉斗相符、則必非古法也、要之度量者、天下之大範、故謂爲承古法者、率奉勅作之、是以天下無容片言之疑者、其實不合也、凡度者、非起於律、律者、非起於黍、尚詳于漢志句讀之辨、且其古玉斗、不審出於何世、所謂古者、是周漢、而周漢量制自殊、是亦愈疑之不解矣

辨唐史文疑

通典曰、匣上有朱漆、題秤尺二字、尺亡其跡猶存、以今常用度量挍之、尺當六之五、量衡皆三之一

按唐書六典、皆六之五三之一、無異論也、是不亦疑乎、何者、唐之律度量衡、皆貞觀十年、詔張文收所脩定也、藏之於樂署、然至開元十七年、將考宗廟樂、有司請出之、既亡其尺、以此觀之、自貞觀迄開元、凡九十三年也 其律制不傳、而出所藏之律而考之、若斯久逸、而時移物易、其常用尺、亦應失本形、必有訛替、況以跡存挍之乎、凡銅器納於匣、不銷腐則無跡、若有跡、

必銷磨、銷磨則必伸、今以二跡存一按レ之、所謂六之五、亦不レ可二信用一矣、尺既亡、其跡守二舊法一猶存、其常用尺、亦不二訛替而密符一、俱是撰者之僞文、豈不レ容レ疑乎

辨二唐史不合一

考古圖載二盧江李氏好時共厨鼎一、曰、高五寸、深三寸、徑五寸有半、容三升一合、重三斤六兩、有二十五字一在レ腹、二十一字在レ蓋、今六兩當二漢一斤一、與二車宮槃之法一同、其銘曰、好時供厨銅鼎、容二九升一、重九斤一兩山

據二三之一一、則漢九升、當二三升一、其九斤一兩、當二三斤八銖一、然容二三升一合一、重三斤六兩、量衡俱不レ中二三之一一、以レ此觀レ之、唐書通典六典、皆不レ足レ爲レ徵矣、或人曰、考古圖者、蓋量衡已訛替、而後所レ按也、余謂權衡經レ年失二乎輕一、然則其三斤八銖者、當レ有二三斤四五銖一、而正有二三斤六兩一、又度量者、魏晉以降、皆失二乎大一、其三升者、應レ有二二升八九合一也、然今有二三升一合一、此非二度量衡訛替一、其三之一、所三以非二整數一也

辨二累黍按考一

漢書律曆志曰、以二子穀秬黍中者一黍之廣一度レ之、九二十分黃鐘之長一、一爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺

又曰、一龠容二千二百黍一、重十二銖、兩レ之爲レ兩

吉益氏醫方古言曰、一千二百黍、以二日本黍一秤レ之、有二八分五釐一

按漢書曰、千二百黍重十二銖、卽半兩也、吉益氏千二百黍、秤之八分五釐、與半兩錢重相近、以爲得之、余嘗以黍驗之、我邦俗名云高黍者、千二百秤之、中者、七分六釐、方寸、容八百九十七、縱累十度之、一寸一分、横累十度之、九分、卽漢一兩、當我邦一錢五分有奇、漢一尺、當我邦一尺許也、是權衡少稀、而其度甚長矣、又我邦俗名云餅黍者、千二百黍秤之、三分四釐、方寸、容二千二百十四、累十度之、七分半、卽漢一兩、當我邦六分八釐、漢一尺、當我邦七寸五分也、是度者相依、而其權衡甚遠矣、再按吉益氏、以世所傳之半兩錢、爲秦代之物也、攷諸漢書、漢興以爲秦錢重難用、更令民鑄莢錢、至孝文帝、更鑄四銖、其文爲半兩、或高后時八銖錢、亦其文半兩也、以此觀之、世所傳之半兩錢、雖非贋物、未知孰半兩錢、且後世有眞僞、不可得而考矣、又按說苑辨物篇曰、十六黍爲一豆、六豆爲一銖、從此說、則千二百黍、當十二銖五絫、又孟康漢志注曰、六十四黍爲一圭、從此說、則千二百黍不滿半合也、一龠容千二百黍、兩之爲一兩、合之爲一合、倶不可信矣

辨累粟挍考

孫子算經曰、六粟爲一圭、十圭爲一撮、十撮操一抄、十抄爲一勺、十勺爲一合、十合爲一升

隋書律曆志曰、依淮南累粟、十二成寸

米之有甲者、謂之粟也、姑由此驗之、其一圭則六粟、一升則六十萬粟也、以今物充之、率一

斗許也、累十二度之、竪累一寸、橫累一寸三分、縱累二寸五分、乃漢一升、當我邦一斗許、漢一尺當我邦一尺一二寸、是度量俱不合也、因而按韻會粟字注、曰、粟爲陸種之首、由此觀之、蓋古者、稷一曰粟也、今試按之、千二百稷、秤之、得五分九釐、十二稷、度之、得六分三釐、方寸容八千八百五十九、以六稷爲一圭、則漢一升、當我邦九合五勺有奇也、度量衡三件數尤近、雖未密合、而可知以粟之爲稷矣

辨古依累粟

說文稱字注曰、以十二粟爲一分、十二分爲銖

度量衡考跋曰、說苑云、度量權衡以粟生

權衡以粟生、亦古法也、但粟以稷言之、非米之有甲者也、姑從米之有甲者試之、所謂十二分、卽百四十四粟也、秤之得一錢有奇、此爲漢一銖、其一兩、當二十五錢有奇、是其多既十倍、可見非米之有甲者、亦明矣、今試以稷按之、百四十四稷、秤之得七釐一毫有奇、此爲漢一銖、其一兩、當一錢七分、是雖不中而不遠、恐撰稷未精故也、（寛政庚申冬、於日向山中校之、稷質尤細也）曾閲度量衡之說、生於黍之論、以漢志爲原、唯說苑稍異而已、生於粟之說者、淮南子、說文、說苑、孫子算經、自漢儒其說未絕、以此觀之、累黍之法者、漢以後理學者之言、累粟之法者、漢以前流俗之習、漢祖之所采用也矣

辨二積レ小成一レ大

淮南子曰、夫寸生二於𥝖一、注曰、𥝖禾穗𥝖孚榆頭芒也、十𥝖爲レ分

易緯曰、十馬尾爲レ分

說文曰、律數十二抄當二一分一、十分爲レ寸

此三說、積至二小者成一レ大、故至レ尺則必違矣、今試挍レ之、各得二七八釐一也、實足レ考二古法一、然不レ能レ求二其整數一、且禾芒馬尾、皆亦有二縱橫一、其累レ之難レ施、若由レ此則極有二訛謬一也

辨二漢志句讀一

以二子穀秬黍中者一黍之廣一度レ之、九二十分黃鐘之長一、一爲レ分、十分爲レ寸

按以字、係二廣子一句一、（下條亦同二文法一）度之二字一句、此爲二一節一、九十分連讀、係二長字一句一、此爲二一節一、一爲レ分三字一句、承二上二節一結レ之、十分以下一節也、言秬黍去二麁皮一者一粒之廣、當二黃鐘九十分之一一也、一爲レ分之一字、指レ黍言レ之、以レ此觀レ之、黃鐘在而後充二秬黍一、非三黃鐘起二於秬黍一也、後世以レ黍求レ律、是誤也、可レ謂下酌二流末一知上源矣、宜下審二句讀一而攻上之

用二度數一審二其容一、以二子穀秬黍中者千有二百一實二其龠一

上六字爲二一節一、以字係二下十字一、與二上條一同文法也、言二黃鐘九十分之一一者、當二黍一粒一、以算二黃鐘管積一、當二千二百黍一也、皆以二算法一言レ之、非下取レ黍納二于龠一之謂上、故曰、用二度數一審二其容一也、所レ謂

度數、卽九十分之一、當一黍之度數也、若取黍納于龠則或千二百有幾個、或千百九十有幾個、必有小餘、今曰千有二百、就算法而言之、亦明矣、本文審其容三字、宜活看

辨鑄金技考

漢書食貨志曰、黄金方寸、而重一斤

度量衡考曰、享保十四年十一月、該部使局鑄金、今尺方寸、得重時秤十三兩、量衡相包者、在于米也、度衡相包者、在于金也、故隋時達奚震・牛弘等、亦鑄金而議度制矣、近康熙帝以來、撰金銀方寸之比例、儀象志・數理精蘊・大淸會典・曆算全書類、皆精密盡焉、然必異于古也、從銀求古金重、則當二十六兩强、又從金求古銀重、則當八兩半强、俱不合也、算法見于下、疑是古之數必疎矣、若不疎、則金銀性質極異也、故鑄金爲考徵、不亦愚昧乎、又我邦金銀、必有古今之差、吉田光由塵劫記、蓋以古金言之也、物觀衡考所校者、後世也、近歲淸人齎來、八呈金・九呈金・安南金・西藏金類、其光色異于我邦之金也、光色異則性質極異矣

求古金銀算法

孫子算經、黄金方寸重一斤、白金方寸重十四兩、大淸會典、赤金十六兩八錢、白銀九兩置十六兩八錢、乘十四兩得數、以九兩除之、得二十六兩强、爲古金重、又置九兩、乘十六兩得數、以十六兩八錢除之、得八兩半强、爲古銀重也

辨黃金一斤

漢書食貨志第一節曰、太公爲周立九府圜法、黃金方寸而重一斤、錢圜函第二節曰、太公退、又行之於齊、至管仲相桓公、通輕重之權、第三節曰、其後百餘年周景王時、患錢輕、將更鑄大錢、第四節曰、秦幷天下幣爲二等、黃金以溢爲名、上幣銅錢質如周錢、第五節曰、漢興以爲、秦錢重難用、更令民鑄莢錢、黃金一斤

隋達奚震等、及我邦物氏等、專鑄金爲據、未可謂得事証矣、按漢志、周錢乃輕、景王時始重之、至秦尙重、漢興從周制、乃輕也、周金以斤爲名、至秦以溢爲名、漢興從周、以斤爲名、是立國改名之傳統詳載焉、如此載世之變革、亦志之常也、秦非受禪之君、而改法、金之名數亦然、師古曰、改周一斤之制、更以溢爲金之名數也、高祖初賜張良金百溢、此尙秦制也、及漢一天下、復亦改法復周也、師古曰、復周之制、更以斤名金、是也、可見漢志欲擧漢之金一斤、是本於周制而引出太公九府圜法、示一斤之本來也、其黃金方寸、而重一斤者、三禮中未見、史記亦不載、突然載于漢志、是雖不雅馴、所以審漢一斤爲周制也、然則於方寸無深義矣、只是算法家之流言耳

辨一斤不合

五經算術曰、所以名斛爲石者、以其一斛米重一百二十斤故也

權量撥亂曰、以㆓時制量衡㆒驗㆑之、米一合重四十錢
秤量考曰、一升者一合强、粳米一升四十錢

我邦米一合重四十錢者、方寸當㆓六錢一分七釐㆒也、二㆓十一倍之㆒、則與㆓金方寸之重㆒相等也、漢一斛米重、卽千九百二十兩也、以㆓一斛積千六百二十寸㆒除㆑之、得㆓一一二三有奇㆒、乃漢米方寸之重、當㆓一兩一二三有奇㆒也、依㆓我邦米金之比例㆒、而二十一倍、得㆓二十三兩半强㆒、是乃漢黃金方寸之重也、然則史籍所㆑載輕七兩半之差也、黃金是山海造物之長、不㆑可㆑有㆓古今之差別㆒矣、但就㆓上等下等㆒、其重稍有㆑差也、近歲淸人所㆓齎來㆒之金銀亦多種、皆勝㆓於我邦產㆒、然則方寸重一斤者、可㆑重而反輕也、故不㆑足㆓采用㆒矣、或人曰、所㆓以不㆑合者、以㆓我邦米重異㆒故也歟、余曰、不㆑然矣、古代米重之說亦多矣、禮記一溢米注、鄭玄之語爲㆓正傳㆒、凡米之爲㆑物、百穀之長以養㆑人、人亦天地造化之長、而米以備㆓其食㆒焉、故人之爲㆑人、則米亦爲㆑米、古今隨㆑天而生、但域異歲殊、而稍有㆓輕重㆒矣、余嘗巡㆓蝦夷西北第一嶋㆒、會㆓滿州客㆒、蒸㆓赤小豆飯㆒以饗㆑之、客皆以㆓其色赤㆒美㆑之、因視㆘渠等所㆓齎來之米麥大豆赤小豆煙草類㆖、皆與㆓我邦產㆒無㆑異、唯赤小豆者嬌紅色、煙草者老虎黃色、氣味甚深、米麥二種稍小粒、試秤㆑之、與㆓我邦產㆒不㆑異、於㆑是始知㆓天之所㆑生、萬國亦同㆒矣

辨㆓布帛失準㆒

度量衡考曰、武州幡羅女沼村有㆓古祠㆒、其帷開具深靑閃㆓大紅㆒、鸂鶒連㆑雲、嵌㆓八寶紵絲㆒、壹匹長肆丈、濶

貳尺、重伍拾兩、價銀柒兩貳錢、經該提調官布政使司左布政使姜恩右布政使楊應奇辯驗官布政司分守道右參議吳天壽按察司帶管分巡道僉事徐先啓督造管解官邵武府通判錢一溝機戶袁宗太巡按福建監察御史胡志夔、按嘉靖古物也、計濶貳尺、當ニ吾邦今貳尺貳寸伍分一、以驗ニ今裁衣尺一相符

滿洲人所ニ齎來一之緞匹、其端糊ニ印板書一以封レ之、其書如レ左

欽命管理江寧織造兼管龍江西新關稅務臣　寅著

織　造

官用石青新樣圓金身扁金圈五

彩蟒緞壹匹、長陸度、料工銀捌兩

肆錢伍分伍厘貳毫伍絲

乾隆參拾伍年捌月　　　　曰解

按綱羅以尺度之、其寸分境難決也、布帛亦復然、必不能無伸縮而失準也、茂卿計古祠之帷、據嘉靖舊物照管淸朝之度量、余據乾隆新物照管明朝之度量、互不相合、可見織造之爲物、固不足爲定準也、我邦當時之織造、其精好者、經風雨必縮、其麁織者、經風雨必伸、何夫爭寸分之差、推百年前之法、豈據于此乎、今皆不采用矣

辨古秤按考

律原發揮曰、明法馬、每兩九錢九分半强

權量撥亂曰、友人田村元雄家、嘗藏宋明二秤、試以本邦今秤按之、宋一兩當今九錢六分、明一兩當今九錢八分

後世權衡制、有二樣、天平等子是也、天平制者、橫梁眞中有乖準、以針頭相親、爲水平也、等子制者、其提繫在偏進退、一小權而計之、毫釐之數、不設法馬而可得也、但水平以目力究

レ之、故所レ計亦人人自異矣、我邦俗以二此制一爲二最便一、中根氏云明法、圖南氏云明秤、非二它物一、而所二計得一自異、是水平以二目力一究之失也、不レ然則同時官制、何不レ合乎

辨二古尺傳來一

長崎譯官村松氏之異國天度記曰、圖書集成樂律典載二開元錢尺、及明營造尺者一、以二吾邦曲尺一比レ之、當二六寸三分一、又鄉校所レ藏魯般者、當二吾邦曲尺九寸一分餘一、不下與二度量衡考説一同上、因記二數説一、備二考證一云

律原發揮圖二法隆寺之尺一曰、此尺自二魯般家一傳、以至二於唐一、後自二聖德太子一傳二之本邦一、至レ今在二和州法隆寺一、又曰、以二今曲尺一按レ之、當二九寸八分弱半分一

中根元珪至二晩年一語二荷田在滿一曰、往年著二律原發揮一、至レ今大悔、何者、權衡度量、皆非下生二於律一者上、是悔一矣、法隆寺之尺固非レ度、葢壓鎭類耳、是悔一矣、見二于度制略考一也、余謂不レ然矣、夫唐代壓鎭、何刻二僞尺一乎、今世亦有二壓鎭類刻レ尺者一、然與二通用之物一不レ異也、若刻二僞尺一、則誰買レ之乎、雖レ爲二壓鎭一而必是唐尺也、聖德太子以二英才一、入二唐朝一學二佛説一而還、豈携二僞尺一來乎、又按年表、聖德太子時、當二隋末一、法隆寺之尺、與二隋尺一相符、疑是隋制耶、又長崎鄉校所レ藏之魯般者、眞僞不レ審、雖レ然、長崎是倭夏貿易之津港、夏客常不レ絶、且里人或通二中夏之韻一、或審二中夏之事實一、然鄉校藏二僞物一、秘二尙之一乎、是亦雖レ爲二僞物一、而必有レ所レ據也、其長短、則與二宋律準尺一相近、疑宋代之物、其傳來誤耳、先輩皆云、我邦曲尺、承二唐大尺一也、余謂是亦傳來誤矣、我邦上古、葢用二周漢

尺一也、故景行天皇身長、及日本武身長等、與二文王孔子等之長一不レ異矣、按日本人入二於周朝一之始者、漢書匈奴傳曰、孔子悼二道不一レ行、設浮二於海一、欲レ居二九夷一、有レ以也、夫樂浪海中有二倭人一、分爲二百餘國一、以二歳時一來獻、論衡曰、周時天下太平、越裳獻二白雉一、倭人貢二鬯艸一、又周人來二於日本一之始者、晉書倭人傳曰、悉黥レ面文レ身、自謂二太伯之後一、梁書諸夷傳曰、倭自云、太伯之後、俗皆文身、如レ此周朝與二日本一不二甚遠一、奚無二周尺一乎、八咫鏡之類、實是周尺之制也、度制略考附錄曰、名云二八咫鏡一、以レ有二八寸一故也、詳見二于日本紀纂疏一焉、八咫鏡始出二于神代一、無レ論所二以名一之最後世一也、其器猶出二於上世一矣、何則既古事記云二八咫鏡一、而此書和銅五年所レ撰也、然則雖レ出二于後世一、必和銅五年之前也、用二和銅六年捋前之尺一、以度レ之、亦有二八寸一、是以名レ之云云、余謂日本始出レ銅、故改二元和銅一、和銅以前無レ銅、其古鏡、蓋周漢之物也、可レ見三古者用二周尺一也、若二日本尺一、自日本尺、則必依二人之手指一而制レ之、是亦莫レ異二周漢尺一矣、周尺是由二手指一生、詳辨二于下一、後世倭夏俱隨二當時之宜一引二長之一、宜レ參二考荷田氏之說一、如レ左

譯度制略考第二說

本朝古大尺、雖レ云レ承二唐制一、而未レ聞二其明證一、然法令萬緒、十之八九、似レ承二唐制一、就二律令一可二以見一矣、後成恩寺及篤信•迪齋•元珪•徂來•源藏等、一公五儒、亦皆云承二唐制一也、徂來之說曰、吾稟二唐制一、國史可レ証也、淡海公著レ令明曰、五尺爲レ步、三百步爲レ里、此其承二唐制一者也、是以爲下承二唐制一

之徵證也、按唐制有大尺小尺、以小尺一尺二寸爲大尺、大尺是常用尺也、其小尺者、調鐘律、測晷景、合湯藥、及冠冕之制用之、見于唐書及六典也、本朝亦其令有大尺小尺、然以小尺一尺二寸爲大尺、却以小尺爲常用尺、唯其大尺者、特於度地用之、詳見于雜令也、然則令之與唐、所用之制、自有別矣、若以令大尺爲唐大尺、以令小尺爲唐小尺、則其唐一尺、當令一尺二寸、其令一尺、當唐八寸三分三釐三毫强、何以謂承唐制乎、唐以大尺爲常用也、令以小尺爲常用也、五儒皆不辨別此兩端、而謾然謂承唐制、不亦疎漏乎、按田令集解曰、古記云云、雜令云、度地以五尺爲步、又和銅六年二月十九日格、其度地以六尺爲步者、未知令格及畝積若干矣、荅幡云、令以五尺爲步者、是高麗田法也、高麗之五尺、准今大尺六尺、故格云以六尺爲步者、其積與令五尺積同、唯改名耳矣、其地無所損益也、以此觀之、雖云高麗制亦承唐制、以五尺爲步、而安得謂本朝度制承唐制乎、況於本朝特爲度地有大尺之設乎、此義於唐代未之有也、按自孝德帝時、屢摸唐制、孝德以前、必不然矣、神功皇后服三韓、而後數世之間、頻三韓貢調、蓋孝德以前、承高麗制、而造度地之尺、至和銅六年、此爲令大尺也、孝德以前所用之常用尺、不可得而知矣、古事記・日本紀、並擧景行・仲哀・反正等天皇身長、其高非人類也、當此時、其度制蓋短於後世令尺也、日本紀載日本武尊容貌魁偉、身長一丈、然变隱於童女戲中、而欺殺川梟帥之事也、可見古尺之短矣、古今相距甚遠、其詳不可得而考矣、

孝德以後所レ用之常用尺者、依ニ唐常用尺一也、於レ唐是大尺也、於レ令是小尺也、又和銅六年、以ニ六尺一爲レ步者、若據ニ令抄所レ載之物記之說一則改ニ其步法一而其尺如レ故也、若據ニ田令集解所レ載之古記之說一則改ニ其尺一而其步如レ故也、此二說欲レ審、而攻ニ諸類聚三代格六卷中一不レ見、但日本紀曰、和銅六年二月甲午朔壬子、始制ニ度量調庸義倉等類五條事一語具ニ別格一又曰、四月戊申、頒ニ下新格並權衡度量於天下諸國一由レ此考レ之、若改ニ步法一不レ改レ尺、則不レ得レ曰レ制ニ度量一矣、況復四月頒ニ度量於天下一乎、可レ見レ所ニ以改一レ尺也、今察ニ其所レ改之尺一蓋廢下先ニ是時一所レ行之高麗法上、而以ニ小尺一更爲ニ大尺一其大尺之六分之五爲ニ小尺一然而大尺者、作ニ常用一以度レ地、其小尺者、唯測ニ晷景一合ニ湯藥一及冠冕之制用レ之、猶如ニ延喜雜式所レ載之說一亦可レ見矣、是以或曰ニ令五尺爲一レ步、或曰ニ格六尺爲一レ步、其文自異、而其積全同矣、至レ如ニ一步一段一町一則其地無レ所ニ損益一也、如ニ古記之說一是也、然則至ニ和銅六年一則其大尺之與ニ唐大尺一同、其小尺之與ニ唐小尺一亦同、於レ是大小尺之要、不レ異ニ唐制一而後承用ニ此制一至ニ延喜中一也、故式之大小尺、卽唐大小尺也、始可レ謂レ承ニ唐制一矣、不レ爾、則令大尺、是高麗制、獨於ニ度地一用レ之、安謂ニ之唐制一乎、和銅以後、以ニ大尺一爲ニ常用一而度レ地亦用レ之、世世傳レ之、以至ニ今曲尺一也、和銅六年後之小尺者、是卽唐小尺也、遂亡不レ傳、惜哉

度量衡說統卷之五 終

度量衡說統卷之六

辨ニ銅鐵漸伸一

晉書律曆志曰、荀勗造ニ新鐘一、與ニ古器一諧韻、時人稱ニ其精密一、唯散騎侍郎陳留阮咸譏ニ其聲高一、聲高則悲、非ニ興國之音一

隋書律曆志曰、荀勗造ニ鐘律一、時人並稱ニ其精密一、唯陳留阮咸譏ニ其聲高一、後始平掘レ地得ニ古銅尺一、歲久欲レ腐、以校ニ荀勗今尺一、短レ校四分

按世說亦擧ニ阮咸穎悟妙一、余謂ニ阮咸之耳未レ妙也、荀勗之尺、在ニ於千歲之外一、推ニ百代之法一、天下無ニ不レ稱者一、凡銅鐵欲レ腐則皆伸、其始平尺者、亦歲久而欲レ腐、故其伸四分許也、然謂ニ勗律非ニ興國之音一、其說一起、世人雷同滅否、以迄ニ宋齊梁陳一、其勗尺不レ能レ須ニ用於天下一、而累代鐘律之論不レ絕、幾迷レ衆、皆是出ニ於阮咸之耳一也、五金木石、悉煖蒸則伸而輕、寒燥則縮而重、其考徵如レ左

水銀納ニ於硝子壺中一、而從レ外視レ之、夏月水銀伸、而浮ニ于壺口一、冬月水銀縮、而沈ニ于壺底一、常有ニ浮沈一、以候ニ朝夕寒煖之差一、名曰ニ寒煖水一、此器本紅毛人所ニ齎來一也、近歲世俗能造レ之、以爲ニ重器一也、余亦屢造レ之爲レ玩矣、其制以ニ水銀一代レ油、則浮沈尙大也、又一代ニ燒酒一、則其浮沈殊速也、嘗聞ニ之於

異邦客曰五金本石、悉煖則伸、寒則縮、由此有器制也
又覩古銀、悉輕、而未嘗聞古銀之重者、又新鑄刀必無輕者、或疑不屢經礪砥、其身必厚故也歟、因而以短薄之新刀驗之、亦復重、以此觀之、不必拘厚薄長短也、又古制短刀有其銘云九寸五分者、今按之、或一尺、或一尺有餘、可見經年愈伸愈輕矣

辨古尺原由

家語曰、孔子曰、布指知寸、布手知尺、舒肘知尋
史記秦本紀曰、六尺爲步、譙周曰、步以人足爲數
禮記祭義曰、君子頃步而弗敢忘孝也、注曰、頃當爲跬、一擧足爲跬、再擧足爲步
皇侃論語義疏曰、凡人一擧足曰跬、跬三尺也、兩擧足曰步、步六尺也
凡度者、因人體而生、以寸爲始也、所謂布指知寸者、數四指爲四寸、（不入大指）乃一指一寸也、所謂布手知尺者、自中指頭至掌端、爲一尺、乃十寸也、所謂舒肘知尋者、左右伸臂、自左指頭至右指頭、爲一尋、乃八尺也、今試布指度之、四指總計二寸五分、其一指、當六分有奇、布手度之、六寸四分、（自中指頭至掌）與十指數相符、舒肘度之、與八手數相當也、於是始覺孔子之言、足以攷古度矣、又兩脚各一進、其間布手度之、六次而適等、信哉聖人之言、可以徵矣、唯余天質短迫、身長五尺二寸、不足爲據也、按周人壽考之身、必不如今人短命之長、且千

歳殊世、萬里異域、恐不可槩矣、宗俊曰、明郎瑛七修續稿、有古今人形不同說、可併考、此之謂也、雖然、身體禀於天、必無古今東西之別、今人之手足、猶如古人之手足、淸人之脈絡、猶如倭人之榮衞、但有大小之差耳矣、然則以今短人之手寸指寸足跨測之、以推廣之於古長人之身、則莫不諧矣、於其推廣、便用算法也、假令周人長充今六尺、則置余手之六寸四分、以余長五尺二寸除之、更乘周人六尺、得七寸三分强半、而此爲周一尺、若周人充今五尺九寸、則得七寸二分半、而此爲周一尺、若周人長、充今五尺八寸、則得七寸一分弱半、而此爲周一尺也、所謂身爲度、（家語大戴五帝德篇）此之謂與

辨古尺節度

周禮考工記曰、人長八尺、崇於戈四尺、鄭玄曰、八尺曰尋

又曰、軹崇三尺有三寸、加軫與轐焉、四尺也、人長八尺、登下爲節

淮南子氾論曰、尋常注曰、八尺曰尋、倍尋曰常

說文曰、周制寸尺咫尋、皆以人之體爲法

周末流俗、皆人長以七尺五寸爲中也、已辨于上、雖然、文武之時、凡制物、必就中之上而爲度、故依人長八尺制之、又其長八尺者、其一尋、必有八尺、故八尺曰尋也、余長五尺二寸、其一尋、即五尺二寸也、於是始知聖人之制作、莫不依人身焉、或因人情而制禮樂、或因人食

而制ニ嘉量一、由レ此考レ之、度亦必起ニ於人長一、亦明矣、人長八分之一、即周一尺也、若ニ周人長一充ニ今六尺一、則周一尺、即今七寸五分也、若ニ周人長一充ニ今五尺九寸一、則周一尺、卽今七寸三分强半也、若ニ周人長一充ニ今五尺八寸一、則周一尺、卽今七寸二分半也、當レ須レ審ニ周時身長一矣

辨ニ古尺考徵一

權量撥亂曰、余嘗親見ニ朝鮮荷蘭之客一、其人皆魁梧、不下與ニ本邦人一相類上、因顧後漢書、稱ニ我邦一爲ニ倭奴一、倭人本取ニ諸短矮之義一矣、其以ニ侏儒國一、附ニ之倭國下一、亦爲レ是故也、倭字本音猥、與ニ矮字一並係ニ喉音一、淸行蓋古字通用也已、否則倭奴倭人之名、遂不レ可ニ得而曉一也、後世字書、皆讀レ倭爲ニ烏不切一、以爲ニ日本舊名一、大非ニ古人命名之意一、舊唐書日本傳曰、倭國自惡ニ其名不一レ雅、改爲ニ日本、新唐書日本傳亦曰、咸享元年、遣ニ使賀ニ平高麗一、後稍習ニ夏音一惡ニ倭名一、更號ニ日本一、可レ見ニ倭奴倭人果爲ニ矮奴矮人一、若讀レ倭如レ字、即順レ貌焉、有ニ可レ惡之義一哉、亦何不レ雅之有、由レ此觀レ之、華夏古人與ニ本邦今人一、其長短不レ同者諦矣

我邦今中人之長、五尺四寸也、今試用ニ五尺七八寸一、以爲ニ周人之中之上一、而所レ求之周一尺、大率七寸二分、是與ニ度量衡考之說一相符、物氏之說七寸二分弱也以推ニ戰國秦漢事跡一、亦能相合矣、其一兩、當ニ今一錢九分四釐三毫有奇一、七寸二分再自ニ乘之一、得ニ三百七十三寸四分八釐一乘ニ漢斛法一六二ニ爲レ實、以ニ今升法六四八二七一除レ之、更乘ニ一升米重四百錢一、得ニ二三七三零九一有奇一、此爲ニ一石一、以ニ千九百二十兩一除レ之、卽得以推ニ考古圖、博古圖、及古錢一、則齟齬、無レ所ニ主當一也、度量衡考不レ舉ニ考古圖博古圖古錢一由レ此物茂卿以ニ唐玉尺一、强爲ニ後周玉尺一、

其說似則相似焉、至其權衡則甚窮矣、唐一兩、當今五錢二分餘、度量衡考曰、古稱二十七兩、齊十八兩、開皇九兩、皆當唐八兩也、置二錢九分有奇、乘二十七、以八除之、卽得 是與開元錢十枚重不合也、於是茂卿亦不能奈何、唐一兩、從開元錢、則今十錢也、從周尺、則今五錢二分餘也、又從唐一兩、而求漢一兩、則今三錢弱也、與古錢不合、是茂卿之所窮也 故著度量考、而不及衡考、然後物觀著衡考、合而名云度量衡考、是可謂物氏第一失矣、周人長、充今五尺八九寸、則古器考挍自不中、又充六尺一二寸、則爵方人長俱不中、故今隨中間、以六尺爲定也、我邦短折之軀、而皆疑千古聖王之身崇、宜照管圖南之說矣、據六尺而所求之周一尺、卽今七寸五分也、周一斛、卽今一斗一合七勺弱也、漢一兩、卽今二錢二分弱也、漢一斛、卽今一斗五合弱半也、七寸五分再自乘之、爲一鬴積、以今升法六四八二七除之、更乘漢斛法一六二、得一零五四有奇、爲漢一斛、復乘一升米重四十錢、以千九百二十兩除之、得二一九有奇、爲漢一兩 天明中、於筑前那珂縣、掘後漢光武時之金印、其方七分八釐、卽委奴國王之印也、詳見于皆川氏之記矣、後漢尺有訛長、前漢之七分五釐、大約後漢之七分六七釐、又黃金雖寶、而經年久、則不可不仲矣、五金皆爲然也、是以後漢金印一寸者、當今七分八釐、可見物氏之七寸二分、圖南氏之八寸三分、皆爲費解矣

辨湯藥煑法

證類本艸序例、擧唐蘇恭本艸之說曰、古秤皆複、今南秤是也、晋秤始後漢末、已來分一斤爲二斤、分一兩爲二兩耳、金銀絲綿、並與藥同無輕重矣、古方唯有仲景而已、涉今秤、若用古秤作湯、則水爲殊少、故知非複秤悉用今者耳

唐人指南朝之秤云古秤也、複、重也、猶云倍也、南朝以二兩爲一兩、故一曰複秤、卽晋秤也、此秤始出于後漢末、已辨于權衡篇矣、晉已來用當時秤秤之、則分一斤爲漢二斤、其一兩爲二兩耳、但絲綿與藥、倶用漢秤也、宋雷斅炮炙論曰、凡云一兩一分一銖者、正用今絲綿秤、此之謂也、及唐代、絲綿藥方皆變差、無可憑、唯有仲景之方而已、渉唐小秤、蘇恭亦據于此焉、若庸醫、以複秤之始後漢末、於仲景之方、誤用南朝之古秤、則殊其水少也、仲景是後漢人、而不用後漢之複秤也、蘇恭之所辨、亦審此義矣、所謂今秤者、唐小秤、卽單秤也、又按唐人以其小秤爲漢古秤、亦是唐人之誤也、唐小秤一兩者、大約漢一兩三四銖也、故以唐小秤作古方、則其水少也、何以知其水少、則蘇敬以小秤作仲景之方、蓋其水少也、若夫用複秤、則尙少、故曰殊少、可以見矣、果用小秤作湯、其水多則非複秤、亦不可得而曉矣、嘗用小秤、其水已少、今更用複秤、則愈少、是以非複秤、亦瞭然焉、又據開元錢所求之漢一兩者、今二錢七八分也、據貨布半兩大泉八銖錢等所求之漢一兩者、今一錢半以上、二錢以下也、吉益氏之分量、淺野氏之秤量考、正木氏之分量考、郁井氏之藥量考、皆亦然、是漢古秤、與唐小秤不同、亦明矣、試作仲景之方煮之、桂枝加大黃湯、小靑龍湯二方、尤大劑而其水爲不應、若於此二方可能煮、則其佗十百方、亦可能矣

桂枝加大黃湯方、桂枝三兩、芍藥六兩、生薑三兩、甘草二兩、大棗十二枚、大黃二兩

右六味以水七升、煮取三升、去滓溫服一升、日三服

六味總計、一斤三兩也、當今四十一錢、其水七升、當今七合四勺弱、其三升當今三合一勺弱半

如從度量衡考、則六味總計、今五十三錢餘、其水七升、即今六合五勺、其三升、即今二合八勺也、以水六合半、煮藥五十三錢、則藥氣未出、而先膠也、又水之多少、姑置而不論、先試看藥五十三錢、煮取二合八勺、其湯如膏、豈可得而飲乎

若從權量撥亂、則藥今五十一錢、水今一升一勺也、比諸度量衡考、則其水稍多、而可能煮也、比諸余所得、則煮之須臾有時也、湯成而其色濃味苦也、余所得者煮之、湯成其間稍急、其色稍薄、香氣深、庶後君子撰而取諸

小青龍湯方、麻黃・芍藥・細辛・乾薑・甘草・桂枝各三兩、五味子半升、半夏半升

右八味以水一斗、先煮麻黃減二升、去上沫內諸藥、煮取三升、去滓、溫服一升

八味總計、一斤六兩半也、當今四十九錢有奇、其水一斗、當今一升零五勺

若從度量衡考、則八味總計、今六十五錢、其水一斗、即今九合三勺、果如此、則其藥當今三十貼許也、凡古人雖魁梧、而與之豈以今三十貼乎、若斯則漢時醫家、一日所施之藥品、可能載于車矣

若從權量撥亂、則八味總計、今六十三錢餘、其水今一升四合四勺也

辨方寸匕形

五苓散方、猪苓十八銖、澤瀉一兩六銖、白朮十八銖、茯苓十八銖、桂枝半兩

右五味擣爲散、以白飮和、服方寸匕日三服、多飮水汗出愈

五味總計、四兩也、當今八錢八分、是終日三服而盡也、擣抹而篩之去粕、其散大率八錢許也、方寸匕形、上徑一寸、下徑六分、深八分也、此器前漢稱曰古升、梁陶弘景稱曰藥升、實非升、卽合也、不知何故張仲景於藥品云合、云方寸匕、其實一也、以此器服五苓散、日三而盡焉、試施之於今日、亦不多不少、其度爲妙矣、誤以方寸匕、爲徑一寸之匕、則今七分五釐四面也、載散不過一錢、服之日三而未盡、比諸小靑龍一劑四十九錢、則甚小劑、不似古方、試施之於今日、其藥力油然失驗也、五苓散、是發表劑、未免不攻擊、而其制不滿小靑龍湯四十分之一、何有如此小劑乎、以湯藥修生理之鑵、殊審諸、又按世有藏古方寸匕者、其形刀貨屬也、其銘曰方寸匕貨布五百、由此觀之、王莽以後之制、卽錢也、承方寸匕形而制之、故其銘題方寸匕三字、固非計藥之設、唯隨其便而用之、藥方是王莽以前之制也、仲景氏曰、勒求古訓、博采衆方、可以見矣、貨布類、皆王莽以後之物也、其方寸匕徑、與光武金印徑相符、亦可徵矣

辨藥量自異

枳實梔子湯方、枳實三枚、梔子十四箇、香豉一升

右三味以清醬水七升、空煎減四升、內枳實梔子、煮取二升、內豉更煮五六沸、去滓分溫再服

大陷胸湯方、大黃六兩、芒消一升、甘遂一錢匕

右三味以水六升、先煮大黃取二升、去滓內芒消煮、一兩沸、內甘遂末、溫服一升

香豉者本煮豆而製之、故令兩三沸、則含水而熟、凡豉子湯輩、皆煮諸藥取汁、內豉、再煮者爲之耳、今此湯煮諸藥、取二升、內香豉一升、再煮之、則鼓熟含汁、其湯甚少也、故知香豉一升、是以藥升言之、非官制之物、亦明矣、又大陷胸湯、煮大黃取二升、內芒消一升、則其湯半是芒消、可見水與藥其量自異也、一錢匕者、以貨布五百錢揚之也、是就散藥云爾、蓋仲景作爲之分量也

辨藥升容受

證類本艸曰、半夏一升、秤五兩爲正

權量撥亂曰、分藥必別有藥升也、因考柴胡加芒消湯方、乃三分小柴胡湯、更加芒消二兩者、而半夏一味於小柴胡湯、則曰半升、於柴胡加芒消湯、則曰二十銖、此知半夏以二兩半准半升、以五兩准一升矣

藥量（前漢所謂古升）是藥合也、所謂方寸匕、卽是也、積十則謂之一升、圖南氏曰、此量雖名升、其實則一合、此之謂也、其三升三合有奇、當嘉量一升也、其制、口廣底狹、計散藥尤便也、以算法

求レ之、其升者、上徑今一寸五分半、下徑今九分三釐弱、深今一寸二釐弱、其容當今三勺零零有奇、試計ニ半夏ヲ秤レ之、得ニ十一錢弱一、但不レ要レ槃、若槃則不レ滿ニ十錢一也、又半夏之製、浸レ水候レ腐而乾者、亦不レ滿ニ十錢一也、半夏一升准ニ五兩一、仲景氏時之法也、證類本艸從レ之、圖南氏詳辨レ之、或小青龍湯半夏半升、萬氏家抄作ニ二兩半一、皆亦然、與ニ今所レ試暗合密符、可レ見積ニ十則一升、亦審矣

辨ニ藥升不一レ與

桃花湯方、赤石脂一斤、一半全用、一半篩末、乾薑一兩、粳米一升

右三味以ニ水七升一煮、米熟湯成、去レ滓溫服七合、內ニ赤石脂末一方寸匕日三服

赤石脂一半、卽今十七錢有奇、乾薑一兩、卽今二錢二分、粳米一升、以ニ官量一言レ之、今一合有奇、水七升、卽今七合有奇、煮ニ諸藥一、米熟取レ湯、得ニ二合許一、三ニ分之一、其一服、得ニ八勺許一、方寸匕卽今三撮、當ニ六錢許一、和レ湯攪レ之、其湯本如ニ薄粘一、而藥末不レ沈、其度實妙也、若粳米以ニ藥升一配レ之、則米熟而其湯四合許、每服七八勺、既三服而未レ盡、是與ニ其方法一自不レ合、凡白虎湯、桃花湯輩、皆用ニ粳米一、固非下利ニ於病一之設上、取ニ諸石膏赤石脂等藥末一不レ沈也、粳米用ニ藥升一、則其度不レ協也

蜜煎方、食蜜七合

右一味內ニ銅器中一微火煎レ之、稍凝如ニ飴狀一、攪レ之勿レ令ニ焦著一、候レ可レ丸、併レ手捻作レ挺、令ニ頭銳大如一

レ指、長二寸許、當二熱時一急作レ冷、則輭以內二穀道中一

七合、以二官量一言レ之、卽今七勺强半、微火煎レ之、大率至二三四勺一、丸レ之作二一挺一、尙有レ餘也、若用二藥升一、則今二勺許也、煎レ之候レ凝、不レ足二以作一一挺一也

辨二藥品計則一

半夏一升　今十錢半

秤量考曰、准一斤非也、藥量考曰、二兩半亦非也

芒消一升　今十二錢

秤量考、四十錢非也、藥量考、十一兩餘亦非也

五味子一升　今六錢半　吳茱萸一升　今五錢半

赤小豆一升　今十三錢　麻仁一升　今六錢半

食蜜、膠飴、粳米、皆用二官量一、其一升、當二今一合有奇一、羊肉、爪子、酸棗仁、葶藶子、幷未レ試

附子一枚　今二錢

炮炙論、以二一枚一爲二一兩一、名醫別錄云、烏頭附子、去レ皮畢、以二半兩一唯二一枚一、此說以二小者一解レ之、故烏頭附子併而言レ之也、附子大而烏頭小也、視二今物一可レ見矣

烏頭一枚　今一錢　杏仁百枚　今八錢半

桃仁百枚　今八錢半　大棗百枚　今四十五錢

枳實百枚　今百錢

權量撥亂、四十錢也、葢以破爲二三斤一者、爲二一枚一也、秤量考二百錢也、葢倭物也

水蛭百箇　今七錢　䗪蟲百箇　今五錢

梔子百枚　今五十錢

度量衡說統卷之六　大尾

文化改元甲子孟春

東都書屋　須原屋新兵衛發
同　善五郎発

金銀通用記評判

金銀通用記評判　上

金銀通用記ト云書ヲ、或人ノ方ニテ見セラレケルニ、偖モ往昔ノ事ヲ能尋テ記シ置ル、事哉ト、クリ返シ熟讀スルニ其野卑ノ說、愚ナル所ヲモ書記シケル事多シ、或ハ俗說誤リタル事ヲモ、本說ノ樣ニ記シテ有、奥書ヲ見ルニ、子孫ノ輩ニ知センタメトアリ、然レバ古人ノ云誤ヲ其儘書シ置時ハ是也、一犬誤テ吼ル時ハ、百犬誤ルトカヤ、古老ノ物語リヲ實正ト思ヒ記シ置玉フ時ハ、末々是ヲ實正トシテ、見ル者是ニ思ヒ究ル時ハ、永々末代マデ其誤リヲ傳ヘン、作者ノ本心ニ、子孫ヲ思テ記シ置ク事モ、却テアダトナルベキ事ヲ思ヘバ、其儘見捨ル事ヲ不レ忍、予ガ愚心ニ聞傳タル品々ト不レ合之所ヲ改メ、評判ヲ加ヘ候ハヾ、後人見テ兩說ヲ味ヒ、其能キ方ヘ可レ付時ハ一扁ニ實ト思ヒ究メ、誤共不レ知、クラキヨリクラキニ落入ル道シルベトモ成ベキカト、如レ此記シ置者也

○外題ニ金銀通用記ト有

評曰、總ジテ一切ノ書物、外題ハ内ノ文句、明ニ其品ヲ初ヨリ終マデ書盡シタル事ヲ、外題ニ顯ス物ナリ、此書ヲ見ルニ、金銀通用ノ事共アラマシヲ書チラシテ、其眞味安定ナラズ、雜說多シ、金銀通用記ト云義理ウスシ、然レバ此題號ヲ古老物語、或ハ古事聞書トモイタシテ可レ然ナリ、不詮議

ナル題號ニテ、作者ノ心知レタリ、聖賢ノ書籍ノ題號ヲ能考テ可レ知、內外不合ノ題號ニテ、外題ノ心ヲ失フ者也

○上古金銀ヲ以不レ爲レ寶、以レ貝爲レ寶ケリ、故ニ貨・財・寶ノ字皆從レ貝

評曰、往古ヨリ近代マデヲ上古・中古・近古ト分テ云時ハ、日本ニテハ上古ト云フ、天神七代地神五代ヲ、上古或ハ上代トモ可レ云カ、亦人王ヨリ云ハ、神武ヨリ奈良ノ都マデヲ上古トサシ、平安城ヨリ鎌倉ノ世マデヲ中古ト指シ、元弘建武太平記ノ亂ヨリ信長ノ時分マデヲ近代ト云ンカ、大阪ヨリ今マデヲ御當代ト云ンカ、理安私ニ曰、勢語聽談ニ、昔トハ太古近古ナイハズ、過ニシ方ナイフ也ト云々尤昔ニ遠近ナシ、昨日ハ今日ノムカシ、今日ハ又明日ノ昔也、然レドモ上中近ノ三ツニ分テサス事ナラバ、二千四百年ヲ世ノ替リ目トワケ、其大概ヲ云ンカ、異國ハ伏義ヨリ三皇五帝夏殷周マデヲ上古トサシ、秦漢魏晉宋齊梁陳隋唐マデヲ中古トサシ、宋元明ヲ近代トシ、大淸ヲ當代ト可レ云カ、上古上代ト云ヨリ已前ハ盤古ト云ナリ、○金銀ヲ以不レ爲レ寶、以レ貝爲レ寶ケリ、故ニ貨財寶ノ字皆從レ貝ト有事、評曰、是ハ日本ノ昔ノ事ニハアラズ、漢土天竺ノ盤古、左樣ノ事有リシヤ不レ審、子細ハ傳ヘ聞、釋迦如來ハ周ノ四世、昭王ノ二十六年甲寅四月八日ニ生レ玉フト云ヘドモ、八千度生死ヲ往來有、故ニ盤古マデ見テ知玉フトカヤ、故ニ經ニ、五百刧九百刧ノ間、成佛不レ成抔ト有、其一刧ト云フ事ハ、四十里四方ノ岩ヲ、三百年ニ一度宛天人下リ、天ノ羽衣ニテナデ盡シタル間ヲ云トカヤ、予是ヲ積リ見ルニ、一度ニ一町宛ナデ取

テ、七萬二千年ノ間也、是ヲ九百劫積テ六億四百八千萬歲ナリ、天神七代地神五代ノ間モ、八百億二百三十五萬六千九百七十四年ヲ童子ノ物言ノ如クニ書記スハ、アマリ愚ナル事ドモ也、但シ何レノ書ニ通用ノ證據アルヤ、如レ此貝篇ニ惡キ字モ有ゾ、何ゾ篇ニ依テカタキリ云ンヤ、可レ笑事ナリ

○堯王ノ時天下洪水、五穀不定成故ニ、金銀ヲ以テ錢ニ鑄テ、交易ノ資トナセリ、日本ニ金銀ヲ出セシ事ハ、人王四十代ノ後ヨリ出、天武天皇白鳳ノ比、對馬國始テ白銀ヲ出シ、聖武天皇天平感寶ニ奧州ヨリ始テ金ヲ出ス、此時中納言家持歌ニ

　皇ノ御代榮エント東ナル、陸奧山ニ金花咲

評曰、錢始ル事ハ事物紀原十卷目、湯七年旱、禹五年水アリ、「湯以二莊山一、禹以二歷山之金一、並鑄レ幣以救レ人、因至二周太公一、立二九府圜法一、始名以レ錢一ト有リ、同卷曰「玉起二禹代一、金起二江漢一、珠起二赤野一」ト云々○日本ニテ始テ銀ノ出ルハ、人王四十代天武天皇白鳳三甲戌年ナリ、黃金奧州ヨリ出ル事ハ、人王四十六代孝謙天皇天平勝寶元己丑年也、本書ニ聖武天皇トアルハ誤ナリ

○賴朝公ノ時大判ヲ製シ、公ノ賜物ト爲ストイヘドモ、上ツ方ニ有テ、下ツ方ニハナク、只銀ト銅錢ヲ以テ世ノ通用トナシケリ、文祿慶長ノ比ヨリ、日本ノ山々ニ金銀ヲ出ス事盛ニシテ、太閤秀吉ノ時、後藤光次ニ命ジテ、大判ノ外ニ今ノ一兩形一分形ヲ製シテ、下民ノ通用ヲナシケリ

評曰、賴朝ノ時大判製シ玉フト云事、何刄ニテ通行、何程ニ貴ク有シヤ、其通用ヲ承度候、サダカ

ナラヌニ、外題ニハ通用記ト見エタリ、爰ヲ以評スル事ナリ、予聞シハ、往古ニハ沙金ト申シテ、沙金ニテ目ニカケ通用シタリ、或ハスナ金、亦ハ米大豆ノ形程モ有由、是ヲ十兩宛ニカタメ、大判ト申スヨシ、沙金ヲ鑄カタメタル故ニ、彼大判ヲモ沙金ト申シテ、公ヨリ賜物ニ、沙金十兩下サルト有ハ、彼大判十枚ノ事ナリ、賴朝公ノ時、大判制シ玉フト有ルハイブカシ、賴朝ヨリ先ニ製シ有ト見エタリ、何レノ書ニ賴朝公ノ製シ玉フトハ有レ之哉、賴朝公イマダ關東計リ御手ニ入シ時、壽永二年ノ冬、京都ヨリ皷判官知康鎌倉へ走下リ、木曾義仲ガ惡逆ヲ申シ上ル時、賴朝兎角ノ御挨拶ハナク、若君十萬殿ト申ス御方、簾中ヨリ沙金十二兩ヲ持出玉ヒ、一二ヲ望玉フ、皷判官是ニテハ取惡、庭ニオリテ操石ノ手心能キヲ四ツ拾集メ、一二ヲ取感ニ堪タリ、後ニ彼ノ黃金ヲ持參シ去ルト、盛衰記ニ見エタリ、然レバ賴朝天下ノ支配ヨリ先キニ、大判アリシ事明也、此時ノ大判ト云ハ、十兩吹ト申シテ、兩目ハ一枚ニ付三十七八匁、或ハ三十九匁マデ有レ之トナリ、樣子有テ當代金後藤方ニテ、吹替ノ引替ヲ見聞者云、四匁ヲ一兩トシテ、四十匁可レ有ニ、數年ヲ經テ目モ貶タルニヤ、シカト兩目モ不レ定、不同有申ト云云、是ヲ吹替當代ノ黃金判金ト云カ、當代ノ金子ノ兩目ニテ、一枚ヲ今ノ一兩金七兩半ニ通用有也、是ヲ判金ト云ハ、後藤光次ガ墨ニテカキ判有ニ依テ、判金ト云云、是公ヨリノ賜物、或ハ祝儀ニ遣物有、江戶ニテ拂方ニハ七兩二分ニ成、通用ニハ二分程引ル、亦尋求ニハ、商人方ニ有ヲ所望ニハ、增金ノ步ヲ出ス事有也〇文祿慶長ノ比ヨリ、日本ノ山々ニ金銀ヲ出

ス事盛ニシテ、太閤秀吉ノ時後藤光次ニ命ジテ、大判ノ外ニ今ノ一兩形一歩形ヲ製シテ、下民ノ通用トナシケリト有ル事、評曰、太閤ハ慶長三年ニ薨ジ玉フ、間ノナキ事ナリ、東照君ヨリ光次ニ命ジ玉ヒ、金銀ノ形定ルト云云、慶長年中ニ出來スルトナリ、依テ今以慶長金ト云ナリ

○昔時銀ト錢ヲ以通用セシ故ニ、於二于今一銀通用ノ國多シ、關東ハ錢專通用セシ故、今モ銀之通用稀ナリ、中古百姓年貢ヲ錢納ニ定、上錢ヲ撰ミ年貢ニ納タリ、大明之永樂年中ニ、異國之錢渡船シテ上錢ナレバ年貢ニ納タリ

評曰、中古ノ事ニアラズ、應仁ヨリ天正文祿ノ頃マデ、天下亂レシニヨリテ、年貢ヲ定納ニ究ケルトカヤ、錢納トバカリ思フハ愚ナリ、殊ニ上錢ヲ撰ト云事邪說ナリ、永樂錢ハ大明ノ二代目、太宗帝ノ永樂九年辛卯ニ鑄ル、本朝百一代後小松院應永十八年ニ當ル、足利四代義持ノ時ナリ○北條五代記ニ曰、應永ノ頃唐船吾朝へ來ル、本朝ヨリ唐へ貢ヲ納、此舟ニ永樂錢ヲ積來ル、慶長十一丙午年マデ二百九年ニナル、初ハ鐚永樂同位ニ通用ス、天文十九戌年小田原ノ北條氏康高札ヲ立テ、關東ニテ永樂一錢ヲ通用スベシト有リ、仍テ關八州ノ市町ニテ永樂ヲ用、此事他國へ聞エ、鐚ノ內ヨリ永樂ヲ撰ミ出シ用ル故、鐚ハイツトナク上方へ上リ、永樂ハ關東ニ止テ用ル、然ルニ今天下一統ノ世トナリ、東西南北ニテ此二錢ヲツカフ、サレドモ永樂一錢ノ代リニ、鐚四錢五錢ツカフ、是ニヨリテ善惡ヲ撰ビ、萬民不レ安、此由ヲ上ニ聞召、鐚一錢ヲ用ベシ、永樂禁制スト、慶長十一丙午年

十二月八日、武州江戶日本橋ニ高札ヲ立玉フ、是ヨリ永樂スタル、天文十九戌ヨリ慶長十一丙午マデ五十六年、盛ニ通用スル也

○茲ニ依テ日本ノ永樂錢悉ク關東ニ集テ、西國方ハ銀ヲ以年貢ニ納タリ

評曰、邪說ナリ、右北條五代記ノ說ヲ以正說トスベシ、西國方銀バカリ年貢ニ納ムト云ハ、偏屈ナル書面也、カヤウニ愚癡ニテ、物ヲ一偏ニ心得ル者ヲ禪宗ニテ擔板漢ト云ゾ、言心ハ板ヲ擔者ノ座スルコト不レ能ガゴトシ、理安私ニ曰、擔板漢ノ事、莊子俚諺ニモ見エタリ、大ナル板ヲ擔タルモノハ、板ニサヘラル方ヲ見ルコトヲ得ズ、廣大ノ見知不レ開者ニタトヘテ云ナリ、漢ハ人ヲ辱ハヅカシメル辭ニ用、北周ヨリ中國ヲイヤシメテ云ニ起レリト云々

○此時永樂一錢ノ價、通用鐚錢四錢宛ニ替タリ、茲ヲ以四割鐚之法ヲ定テ、壹貫文ノ年貢錢ハ四貫文宛納、于レ今定法ト成テ、錢納村高ハ永樂何貫文ト云高辻ニナレリ、永樂ヲ以石割地知行高ニナス時ハ永樂二百文ヲ以高石地トナス也

評曰、不吟味ナル記シ樣ナリ、ケ樣ニ事ヲ一偏ニ心得テハ、末々猶以誤ル事多カラン、如レ此不案內ノ事ヲ書記シ、子孫ニ見センヨリハ、此記ナカラマシカバ、却テマサリナランカ、予若キ時老人ニ永樂錢通用ノ事ヲ問ニ、時ノ相場有テ、永樂一錢ニ鐚六錢七錢八錢マデノ取替有、五錢替ノ年モ有テ不レ定、其後慶長十一年ヨリ御法度ニテ止、寛永通寶ノ錢出來テ止ニハアラズ、永樂錢モ鐚ニ成リ皆々一錢ハ一錢ノ通用ト成ル、昔ハ一時ノ市人モ、賣買物ニ錢ノ撰ビイトマナク、是ニ倦、道行

旅人モ滞リ、難儀ニ及ブ事ヲ不便ニ思召、永樂モ鐚ニ被ニ仰付一、上ヨリ御慈悲成ル御事ト、天下萬民悦事カギリナシト、其比申セシナリト云々、扨知行高モ先年總檢地ニテ、永樂何貫文ノ村高モ潰タリ、山方ノ定納村古證文有テ、檢地不レ入村方、時ノ相場ヲ以直シ玉ヒ、永樂モ鐚ニツブレ下直ニ成シ時ノ相場ノ節ヲ以、四貫文替ニ直リタリ、又關東筋ニハ五貫相場ノ節直リタル村々ハ、五貫直シノ勘定モ今ニ有ト也、又永樂知行直シノ事ニ、百文ニテ高壹石ニ成ルト云事、其節永樂錢ノ貴キ事今ノ十倍ト可レ知、昔ハ年ニヨリ金十兩ニ米八拾俵替、大阪御陣ノ冬陣ニ、拾兩ニ付百六拾俵替シタル事、予祖父親ナド存タル事ナリ、又亂國ノ節トハ云ナガラ、信玄ノ時代ニ五貫武者ト申テ、永樂五貫ノ知行ニテ、武者一騎出ルナリ、是今ノ知行二拾五石ニテ不レ成事ナリ、然レバ永樂知行ハ今ノ勘定ニテハ、十倍モ貴キ風俗ナリ、可レ考

○常憲院殿綱吉公御代、元祿九子歳、有來ル慶長金ヲ碎キ、白銀ヲ加テ鎔鑄シ、元ノ字金ト名付、金ノ位漸ク卑、諸物ノ價貴ク

評曰、恐多キ御事ナリ、御實名ヲ書顯ス事、法ヲ不レ知事ナリ、作者愚蒙ナルト聞エタリ、此外ニモ此類アリ、可ニ心得一事也、文體無調法ナリ、年號年月サヘ書テ有時ハ知ル也、聞クニ耳ザハリ、安ラカニコソ有度事ナレ

○就レ中異國渡船ニ積來ル藥種人參等甚高直ニシテ、下民ノ歎キナレリ、惜哉慶長之舊金今ノ世ニ稀

也、近文照院殿家宣公正德二辰年ノ年ヨリ、元祿金ニ交ル白銀ヲ吹出去テ、正金ニカヘント小形ニ製シ、其重サ二錢五分ノ秤目ヲ以壹兩トナル、故ニ舊金ニ二錢三分ヲ減ジ、諸物之價倍々貴ク、諸人嘆息ヲナセシニ

評曰、孟子曰、富歳ニハ子弟多賴、凶歳ニハ子弟多暴ト云々、年豐年ニテ衣食饒ニ足バ、下民ノ歎ク事ナシ、蓋藥種人參等ノ高直ナルヲ、民ノ歎ク事アランヤ、慶長金モ世間ニ澤山ニ有ナリ、カヽル愚蒙ナル事ヲ書テ、子孫ヘ知ラセントハ片腹痛シ、可レ笑事ナリ

○當聖代享保二酉歳ヨリ、慶長金ノ舊ニカヘシ、大形製シ、四文目七分九厘爲二一兩一、錢ハ寛文年中ニ鑄シ、文之字錢上錢ナレドモ、金之位貴ク、故ニ慶長金一兩ニ五貫文ヨリ五貫二百文ニ替テ通用セシニ、新錢年々鑄出セドモ、元ノ字金ノ位卑ニ仍テ、四貫文四貫百文ニ替タリ、正德金ニ至リ正金ニ替テ秤目ヲ減ジ、壹兩之小形ナル故ニ、貳貫五百文四百文ニ替タリ

評曰、緯ヲ不レ知シテ、當前有ニマカセテ、子孫ニ知ラセンタメトハ何事ゾヤ、總ジテ邪說ヲモ吟味ナクシテ記ス事誤也、夫金一兩ヲ四匁八分、壹分形ヲ一匁二分ト成ス事ハ、天地トトモニ通用スル故ナリ、子細ハ一日一夜ノ刻漏水百刻トシテ、九十六刻也、是錢九十六文ニテ百文トスルハ此理ナリ、其半分晝四十八刻、夜四十八刻ノ數ヲ以、四匁八分ヲ一兩ノ目ト定ル、金壹分ヲ壹匁二分トスルハ、十二月ニカタドル事ナリ、是天地トトモニ幾不レ盡、天長地久ト忝モ東照公御定マシマス事

ヲ、上ノ御德用ニ可レ成トテカ、金銀ヲ改カヘ玉ヘドモ、天地ニタガフ理ニヨルヤラン、通用何レモ久シカラズ、可レ了々々、天ニ四分度ノ數有リ、百文ノ内四文不足ニテ、百文ト成ルハ右ノ理ナリ、然ドモ作者今四匁七分九厘ト書シハ、カロキニ仍テ書タルカ、是ハ後藤ノ心得有事ナラン、昔ハ唐目四匁ヲ一兩トスル由、慶長金ヨリ四匁八分ト成ハ右ノ心ゾ、外ノ物ハ唐目ト云テ、四匁ヲ一兩、百六十匁ヲ一斤ト通用スルナリ

○是ヲ以テ考ルニ、諸物ノ價貴キニアラズ、金銀ノ位漸ク卑也

評曰、愚ナリ、孟子曰、「夫物之不レ齊、物之情也、或相倍蓰、或相什伯、或相千萬」ト云々、古ト今ト價ノ不同ヲナゲクハ誠愚癡也、縱バ同ジ慶長金ナレドモ、慶長十九年寅ニ、拾兩ニ米百六十俵替、是ヨリ十六年過テ、寛永六己巳年ニ、拾兩ニ付五拾四俵替ナリ、同新金ニ去寅ノ年ハ、拾兩ニ十八俵替、當卯ノ歳ハ四拾俵替ナリ、是金銀ノ位卑ニヨラヌ證據ナリ、作者孟子ノ語ヲ不レ知ハ無智ナリ、必聖賢ノ言葉ハ、萬代ニ及トモ違事ナキ物ゾ、可レ考、本書ニアル考ハ、愚癡ノ考ト可レ知

○上古ハ諸物ヲ買ニ、金銀ヲ以セズシテ粟ニ替タリ、粟ハ穀粟ノ名ニテ、籾ノ事ナリ、古ハ祿米ヲ粟納メ置キ、諸物ニ替タリ、今ハ米ニナシテ納サセ、金錢ニ賣リ、諸物ヲ金銀ニテ買世トナリ、故ニ下ニ金銀多キ故ニ、自然ト世ノ驕トナリケリ、銀ノ位モ元之字銀・中銀・三ツ寶・四ツ寶ノ差別有ケリ、附リ甲州金・竹流金ト云アリ、甲金ハ武田氏新羅三郎以來甲斐國ヲ領知シ、彼國ノ山ヨリ出ル沙金ヲ、秤

目ニテ通用セシニ、信虎晴信代壹分形・二朱形・朱半形ニ製シ、碁石金ト名付、軍用ノ資トナセリ
評曰、上古ハ金銀モ錢モナシ、粟ニテ物ヲ買理尤也、今以片田舍百姓ノ妻ナド金銀錢ナキ者ハ、籾米麥稗大豆小豆ニテ諸物ヲ買ナリ、不レ珍事ナリ、祿米ヲ籾ニテ納置コトハ、今モ北國筋ハ皆籾ニテ年貢ヲ納、夏ニ至テスラセツカフナリ、亦年貢籾ノ賣買今以テアリ、一筋ニ天下皆昔ハ籾年貢ト心得タルハ愚ナリ、ケ樣ノ事ヲ子孫ニ傳ヘ記置バ、子孫マテ愚癡ニ可二心得一事ナリ、物ヲ一偏ニ心得ル事ヲ愚ト云也、昔ヨリ其國々ノ溫寒ニヨリテ違有、日本六十六ケ國ヲバ、六十六ニ替ルト見テ子孫ニ敎玉ヘ、曆ニ六月麥刈初有事ヲ當國マデ笑者アレドモ、信州越州ニテ是ヲ用ル事ナリ、ケ樣ノ事多シ、亦粟ハ籾ノ事ト心得タルハ、餘リリチギト云ンカ、粟ト云ハ五穀ノ總名、別テ米ノ事ト先大ニ知ルガヨキナリ、論語ニ、齊ノ景公ノ曰、「雖レ有レ粟、吾得而食諸一ト有、是米ノ事ナリト可レ知、其外「冉子爲二其母一請レ粟、」孟子ニ、「農有二餘粟一」ト云々、近比大阪ニ今居玉フ天慶和尚、阿波國ヨリ歸リ玉フ時、離別ノ詩ニ、阿州ノ粟ヲ喰テ、阿州ニ糞ト有リ、何ゾ天慶和尚阿州ニテ籾ヲ喰ンヤ、是米ノ事ナリ

○又上古ハ公ヨリ知行ニ稻五百把、或ハ三百把ヲ被レ下、古記ニ有リ、是ニ其法有ナリト不レ知ヤ、セメテ如レ此ノ故實ナドヲ聞テ、記シ置バ可ナリ、又鎌倉ノ時何町被レ下ト有ニ、自然ト世ノ驕トナリケリト云事、評曰、偏屈ナル申樣ナリ、愚ト可レ謂也、昔金銀世ニ多ク無キ時モ、驕者幾人モ有コ

ト古記ニ見エタリ、知ラズヤ聖人ノ語ニ、金銀水火ノ如ク天下ニ多有バ、盗人モ有マジトノ玉フナリ、ケ様ノ心持ヲ料簡シテ、大度ニオシワタリ、古往今來ニ眼ヲ付テ記シ置バ、子孫ノ鑒トモ可レ成カ、惜哉子孫ヲ思フ志ハ尤ナレドモ、己ガ管見バカリヲ書置テ、彌以子孫ヲモ管見ニ入レン事ヨト、カナシムバカリ也、仍テ如レ此筆ヲ労シテ評判スル者ナリ

○亦曰、今昔ト比テハ、日本ニ金銀多ク成、下賤ノ輩モ金銀ヲ多ク持事ハ、世ノ風儀ト云物ゾ、天下泰平成故ニ、亂國ノ時分トハ、人ノ志モ無事ニ成、武家ヲ始四民四道ノ者、吾不レ知氣モ寛悠ニ成、隙有儘ニ遊山翫水ニ心ヲ動ス、是ヲ奢トハ云ガタシ、時ノ風儀ト成行マデ也、驕ト云ハ人ヲ苦メ、吾心ヲ恣ニシテ人ヲ侮、上ヲ蔑ニシテ己々ガ踰レ矩ヲ奢ト云ナリ、何ゾ天正文祿慶長ノ時代ト、今ノ時ヲ見合テ違ヒ有ヲ以、世ノ奢ト云ベケンヤ、亂國ノ時ハ、國ニヨリ妻子ヲ片付置所ナク、百姓モ農ヲ忘レ、婦モ促レ織コトヲ忘レ、商人モ野武士强盗ノタメニ商賣不レ成、武家モ野ニ伏山ニ伏、山野ノ露ニ身ヲタメシ、勇ヲ面ニシテ身ノ形ニモ不レ構、辛キ世ヲ渡リ、慈愛ノ氣モウスク、情憐モナク、無道ノ事多ク、切取リ强盗、押取辻切シテ、其日ノ飢ヲ凌手立バカリ、家居モ不レ入、衣類諸器モ不自由ニシテ腕骨次第、人ノ心モアラ／＼シキバカリニ過行所ニ、今天下泰平ノ世ト成リ、人ノ心モ段々柔和ニナリ、百姓モ畔ヲ讓リ、商人モ現金懸直ナシ、道ニ落タル物モ拾者ナク、上ノ聖徳ヲ拜シ、質朴ノ世ト成、昔ニ合セテハ腹鼓ノコトヲ聞テ、下々ニ金銀多ク有故ニ奢ト見ルカ、作者

察了シ玉ヘ、偏屈ニシテ愚ナル故ニ如レ此云フゾ

○竹流金ト云ハ、慶長年中、豐臣秀頼於ニ大阪城中一、爲ニ軍用一千枚分銅ヲ鑠シ、割竹ノ中ニ流シ、是ヲ竹流金銀ト名付、諸浪人ノ戰功ニ施シ、今竹流ト云菓子有、此金ノ形ヲ眞似タリ

評曰、是ヲ以今ノ慶長金ハ其比大阪ニ寡ヲ知リ玉ヘ、慶長金ハ東照宮ノ被ニ仰付一タル事無ナリ

○日本ニテ錢ノ鑄始ハ、元明天皇ノ時、和同開珍ノ銀錢銅錢ヲ鑄ル、異國ノ銅錢代々渡船シテ、和國通用之資ト成ケリ

評曰、錢鑄始ハ元明天皇ノ時ト云ハ誤ナリ、元明帝ヨリ四代以前、人王四十代天武天皇ノ白鳳十二癸未年、用ニ銅錢一廢ニ銀錢一ト古記ニ有リ、又四十一代持統天皇ノ八年甲午、置ニ鑄錢司一、四十二代文武天皇三年己亥、置ニ鑄錢司一ト有、又四十三代元明天皇ノ和銅元年戊申、從ニ武藏一獻ニ和銅錢一、同四年辛亥、錢人等始テ叙レ位ト古記ニ見エタリ、是ヲ見テ元明帝以前ヨリ鑄レ錢事ヲ可レ知、古書ヲモ不レ見シテ、和銅錢ヲ始ト思フ事愚蒙ナリ

○中古以來、其好惡ヲ撰、民家喧シカリケレバ、大猷院殿家光公、寛永十六年己卯年ヨリ錢座ヲ置キ、寛永通寶錢ヲ鑄テ、和國一統ノ通用トシテ、錢ヲ撰ブノ勞ナキ世トナレリ

評曰、前ニ云フゴトク、御實名ヲ顯ス事法ヲ不レ知愚朦ナリ、永樂錢鐚錢ヲ撰ブ事ハ、慶長十一丙午、御制禁ニ被ニ仰付一永樂錢ハ潰テ鐚ニナルト云々、寛永十六年、寛永錢ヲ鑄ルト云事、大ニ誤ナ

リ、寛永十三年丙子ニ、初テ寛永ノ新錢ヲ鑄ルト玉露叢ニ見エタリ、記錄モ不レ考シテ、虛說バカリ書記ス事、子孫ノタメノ罪人ナルベシ

○錢文ニ年號ヲ付シ事ハ、魏ノ文帝大和五銖ヲ始トス、通寶ノ字ハ、唐ノ開元通寶ヨリ始ル

評曰、誤ナリ、事物紀原曰、周自三大公立二九府圜法一、其文無レ見、後魏孝文大和十九年、公鑄粗備、文曰二大和五銖一云々、又曰、錢文以レ年、自二後魏孝文大和一始也、以レ寶者、自二周景王大錢一始也、以レ通者、自二唐ノ高祖武德一始也云々、魏ノ文帝ハ曹操ガ子、漢建安二十五年庚子、漢ノ禪ヲ受帝位ニツキ、國ヲ魏ト改ム、日本人王十五代神功皇后ノ二十年ニ當ル、後魏ノ孝文帝ハ北朝ナリ、大和十九年乙亥ハ、日本人王二十五代仁賢天皇ノ八年ニ當ル、魏ノ文帝ノ黃初元年庚子ヨリ、後魏ノ孝文帝ノ大和十九年乙亥マデ、二百七十六年ニナル、如レ此年數ノ違事ヲ不レ知、物知リダテニ書記ス事、愚痴トヤ云ン、小智トヤ云ン、腹筋痛シ

○中古武士ノ知行、五十貫・百貫ト錢ヲ以分限ヲ定シ事ハ、後白河院文治二年午三月、平氏追討之賞トシテ、賴朝公六十餘州總追捕使ヲ申賜、武家棟梁ト成テ、日本國中ニ總檢地ヲ入レ、町反ヲ改、大田文ニ記シ、權門勢家ヲ不レ論段別ニ五升ノ兵糧米ヲ宛テ課シ、爲二軍用資一、是後漢ノ時謀叛人等ノ俄ニ出來レバ、則爲二討伐一急卒ニ軍兵ヲ集ル、其糧料土民ヨリ出スヲ地頭錢ト云シニ準ゼシナリ、其後賴朝公以二家人一、諸國之守護地頭ニ恩補シ、領家ヨリ反別米ニ五升ヲ收納シ、後ニハ錢納、是ヲ地頭錢ト名

付、軍役ノ高ト成タリ、戰國年久、武威年々盛ニ成リ、土民百姓本領家之下知ヲ不レ用、武家ニ隨ヒ、イツトナク武家ノ知行處ト成レリ

評曰、東鑑ヲ不レ見シテ、自分ノ推量憶察ニテ書置事、是ヲ實トシテ子孫ヲ誤ラセン事不便ナリ、鎌倉ノ代ハ皆町ヲカゾヘ、何百町ヲ被レ下ト有、其後太平記ノ亂ニ成テ、尊氏ノ代トナリ、天下大ニ亂レ鬧シキニ仍テ定納トナリ、又後ニ永樂錢ト成ナリ、記錄ニ見ユル所ナリ

○文治二年午三月、平氏追討之賞トシテ、賴朝公六十餘州總追補使ヲ申賜ト云事非ナリ、東鑑ニ曰、文治元年乙巳十二月二十一日、諸國ノ地頭職ヲ拜領ノ事、北條時政上洛シテ奏達スルニ仍テ也ト云云○段別五升ノ兵粮米ノ事ハ、文治元年乙巳十一月二十八日、補任ノ諸國平均守護地頭、不レ論ニ權門勢家庄公ニ、可レ宛ニ課兵粮米ニ段別五升之由、此夜北條殿謁ニ申藤經房卿中納言ニ云々、同二十九日、任ニ申請ニ可レ有ニ御沙汰ニ之由被ニ仰付ニ云々、文治二年丙午三月二十一日、諸國兵粮米催事、於レ今者可ニ停止ニ之由被ニ宣下ニ云々、是ヲ以見レバ、賴朝地頭職拜領ヨリ一ケ月前ニ、北條時政ヲ以テ兵粮米ノ事ヲ申請、五ケ月目文治二年三月ニ、又賴朝ヨリ奏達セラレテ、兵粮米免サルト見エタリ、是ヲ聞取リ法文ニ書記スハ、可レ笑事ナリ

○地頭錢出シ出ル引付ヲ以、其鄉村ノ高辻何百何貫ト云定法トナル、古軍書ニ、課役ヲ譴責ストアルハ、地頭錢ノ事也、百貫ノ知行ハ今五百石ニ當ルトゾ、又諸國ノ守護人・地頭ヨリ五十分一ノ課役ヲ出セシ

事ハ、五百貫ノ高ニハ十貫文出シ、壹萬貫ニ二百貫宛將軍家へ納テ、五十分一課役ト云ルトゾ

評曰、古軍書ニハ書ハ、太平記ノ事ナルベシ、誤ナリ、課役ヲ譴責スト有ハ、地頭錢ノ事ナリト云モ非ナリ、地頭錢ノ事ハ日本ノ古記ニ不レ見、後漢ノ時ノ地頭錢ト取違タルニヤ、太平記ニ有ハ、無理ニ德役ノ事ナリ、太平記ニ曰、近國ノ庄園ニ臨時ノ天役ヲ被レ懸ケル、中ニモ新田ノ庄世良田ハ有德ノ者多シトテ、出雲介親連黒沼彥四郞入道ヲ使ニシテ、六萬貫ヲ五日ガ中ニ可ニ沙汰一ト堅ク下知セラレケレバ、使先ヅ彼所ニ莅テ、大勢ヲ庄家ニ放チ入レテ、譴責スル事法ニ過タリト云々、古例ナキ新法ヲ出ス故ニ、國ノ亂ト成事スミヤカナリ、又地頭錢出シ來ル引付ヲ以、鄕村ノ高辻ト成ル事、賴朝公ノ時ノ樣ニ記ス事誤ナリ、後醍醐天皇大内裏造營ノ時日本國ノ地頭御家人ノ所領ノ得分二十分一ヲ被ニ懸召一、其後尊氏ノ代ト成テ、五十分一ノ沙汰始テ有ルナリ

○往古源平藤橘ノ四姓ヲ分テ百姓トナシ、二十氏ハ公家トナシ、八十氏ハ武家トナシ、國々ニ分補セシヲ領家ト云、其子孫國ニ有テ田畑ヲ開發シテ、村々ニ住居セシヲ地人ト云、農兵ヲ務タリ、總領家ヲ本所ト名付、地下人ヲ下知セリ、且ッ三ケ年ニ一度ノ大番役ニ在京シテ、禁裏之御番ヲ勤、當代諸侯參勤交代準レ之、國司職有テ、其國事ヲ司リ、租稅官物ヲ收納シ、五ケ年目得替セリ、是ヲ受納ト云

評曰、ケ樣ノ惡說虛談ヲ實ト思ヒ、子孫ニ知セントト書記ス事、イタヅラカハシキ事ドモナリ、是程愚癡ナル作者トハ、此段ニテ知ラレタリ、書籍ヲモ不レ見者、無覺ノ事ニテ腹筋痛シ、縱何レノ書ニ有ト

モ、實トセラレズ、是コソ一犬謬テ百犬謬ルト云事ナリ、又是ヲ子孫マデニ謬ラセント書記ス事ノウタテサヨ、餘リ不便サニ爰ニ評ス、先ヅ源平藤橘ノ四姓ノ始ハ、如何心得アルヤ、此四氏モ天子ノ御連枝ニ氏ヲ下サレ、其外餘氏モ有、多クハ公ヨリ出タリ、人王二十代允恭天皇四年乙卯、詔シテ始テ定二姓氏一ト有、又人王四十代天武帝白鳳三年甲戌人ノ姓氏ヲ定ムト古記ニ見ヘタリ、先橘氏ハ人皇三十一代敏達天皇ノ後諸兄ヨリ始ル、平氏ハ人王五十代桓武天皇ノ後高望王ヨリ始ル、藤原氏ハ天兒屋根命ノ裔大織冠鎌足ニ、人王三十九代天智天皇八年己巳十月十三日、改二中臣一賜二藤原姓一、源氏ハ人王五十六代清和天皇三代經基王ニ人王六十代醍醐天皇ノ延喜七年丁卯十月五日、賜二源氏一ト見タヘリ、此外源氏ニモ村上天皇ヨリ出タルヲ、村上源氏ト云、宇多天皇ヨリ出タルヲ宇多天皇ト云テ、佐々木統ナリ、源平藤橘ノ姓ヲ賜リシ年數、大ニ間有事ナリ、是ヲ何レノ時四氏ヲ揃テ、本書ノ如ク百姓トシテ分ケ、公家・武家トナスヤ、夫ヨリ先ハ公家武家百姓モナキヤ、可レ笑事ドモナリ、天神七代・地神五代ノ神此モ日本ニ有テ、末々ニ至テ庶人ト成モ有、豐氏ハ天神七代ノ内、三代目ヨリ人ノ氏ニ出ルトナリ、亦代々天子ヨリ親王家ヘ氏ヲ下サレ、末々庶人ト成モ有リ、姓氏ノ事ハ悉ク記ニ不レ遑、其大略ヲ云ンカ、先菅原氏ハ天穗日命ノ後ナリ、大伴氏ハ天押日命ノ後、物部氏ハ宇摩志麻治ノ後、柿本氏ハ天足彦國押人命ノ後、安倍氏ハ神武帝ノ時謀反セシ安日ガ後、阿部氏ハ孝元天皇ノ太子太彦命ノ後、松浦氏ハ嵯峨氏三田源次綱ガ後、此外乙氏在氏壬生氏小野氏大江氏紀氏清

原氏アゲテカゾヘガタシ、又異國ヨリ渡リタル氏日本ニアリ、河野氏秦氏、又坂上氏ハ後漢ノ靈帝ノ後ナリ、此外ニ異國ヨリ渡リシ氏モ多ク有ゾ、本書ノ理ニテ云バ、源平藤橘ノ四姓バカリノ樣ニ聞エタリ、百姓ト云、元トハ何氏ニテモ、下賤ニ落入テハ皆下テ土民ト成、縦バ大海ヘ世界ノ不淨チリアクタ落入レドモ、大海ハケガレズト云心也、百ノ氏落入寄合故ニ、土民ヲ百姓トハ云ゾ、去ルニヨツテ百姓ヨリ侍ニ成ル ニ疵ニナラズ、昔ノ大舜モ下賤ヨリ帝王ニ成玉フ、漢ノ高祖モ然カリ、百ト云ハ諸ノ氏數多キヲ云ンタメナリ、譬バ古今集ニ、三鳥ノ大事傳授事ニ、百千鳥ト云類ナリ、本書ニハ四氏ヲ分テ百トシテ、百姓ト云ト見エタリ、愚成片山里ノ嫗ガ咄シヲ聞テ書タルト覺テ、ムゲニ淺間敷聞エ、源平藤橘ハ人王六十代醍醐天皇マデニ揃ヒタリ、其後ニ百姓ノ名有レ之ト思フカ、夫レヨリ前ニハ、公家・武家・百姓ト云者ハ無レ之カ、如何〳〵○又曰、源平藤橘ノ四氏ヨリ、二十氏ワケテ公家ト成、八十氏ヲ武家トシテ、國々ニ分補セシヲ領家ト云ト書シ事、四氏揃ハヌ先ヲバ何ト思フゾ、公家・武家ノワケナシト思ヒタルカ、日本紀ニ、百姓ノ二字ヲオホヽンタカラ ト讀セタリ、日本紀ハ人王四十四代元正天皇ノ養老四年庚申ニ、舍人親王ノ撰ビ玉フ書ナリ、四姓ハ天智天皇・聖武天皇・宇多天皇・醍醐天皇マデニ揃ヒタリ、四姓揃ヒシ延喜七年ヨリ百八十八年以前ニ、日本紀ハ撰ビ玉フナリ、是程ノ事ハ作者モ料簡ニテモ可レ知事ナリ、カヽル愚癡ナル事ヲ書テ、子孫ノタメニセントハ、腹筋痛キ事ト云ヘバ、或人ノ曰、愚蒙故ニ能事ト思ヒ書タルナラン、學問少モ有ル人ハ、

他見ヲ耻テ書マジ、日盲蛇ニオヂズト云心ナルベシト一笑ス○亦曰、此作者ヲ無智ノ者ト思フハ此段ニテ知タリ、漢土ニハ源平藤橘ノ四氏モ有マジキニ、上代ヨリ民ヲ百姓ト云フ、論語ニ、有若曰、百姓足、君孰與不足、百姓不足、君孰與足、子曰、修己以安百姓、堯舜其猶病諸、孟子ニ、周公兼夷狄驅猛獸、而百姓寧ト云々、書經舜典ニ、百姓如喪考妣、帝曰、契、百姓不親、五品不遜ト云々、大禹謨ニ、益曰、干百姓之譽ト云々、如此上古ヨリ唐ニモ百姓ノ名アリ、是ハ如何ナル源平藤橘ノ四氏ヨリ百姓トナルヤ、猿利口計リニシテ紛ラカシテモ、漢ノ書ヲ一卷モ不見ヲ、無學無智ノ者ト云ゾヤ、或人曰、シカレドモ此作者ノ愚意ニテモ書マジ、何レノ書ニ四氏ヲ分テ百姓トスルコトアルヤ、予曰、正史實錄ニハ、カヽル愚ナル事ハナシ、武用辨略ノ二卷目ニ、本書ノ如ノ邪說アレドモ、是ハ無學ノ者ノ制タル書ナレバ、見ルニ不足、定テ武用辨略ヲ見テ書ト覺エタリ、彌愚蒙ニ見ユル也、異國ノ百姓モ、日本ヨリ源平藤橘ガ行タルト思フカヤ、所々ニテシカルハ、カヤウニ跡先間ノアハヌ出傍題ト、又下賤ノ云如ク、文盲ナル事ヲ物知リ顏ニ書記スヲ哂ゾヤ、チトタシナミ玉ヘト云テ、大ニ笑ヒタリ○總領家ヲ本所ト名付、地下人ヲ下知セリト有事、評曰、總領家ト云ハ、譬バ其國一國ヲ知行スル、其内ニ寺社領亦公家領有トモ、總國主ヲ總領家ト云ナリ、地下人ノ輩ヲ下知スル役人ノ樣ニ記シ置ク事相違也、上代ノ國司ト云同前也、賴朝ノ代ヨリ國司ハナシ、總領家ト云ハ、其國ノ知行頭ノ心ナリ

○後白河院文治二年午三月、源二位賴朝公上洛シテ、日本總追捕使ヲ申賜リ、武家ノ棟梁ト成リ、國司ノ外國衙ニ守護人ヲ置キ、庄園ニ地頭ヲ居エ、日本國中總檢地ヲ入レ町段ヲ改、田文ヲ以反別ニ米五升ヲ取、守護地頭ノ德分トナシ軍用ヲ務タリ、領家方ニハ名主庄官有リテ、諸國之百姓租稅官物反別米出レ之ヲ、シバラクハ公家武家午角也トイヘドモ、守護地頭之威ハ年々重ク、國司領家ハ衰ヘ、明ケ方之ノ星ノ光ノ如シ

評曰、誤ナリ、後白河ハ人王七十七代ノ帝、保元時代ノ天子ナリ、賴朝ノ時ハ人王八十二代後鳥羽院ナリ、後白河院御卽位ヨリ、後鳥羽院御卽位マデ二十九年ニナル、年代モ不レ考、同ジ時ノ樣ニ書記スハ愚蒙ナリ、文治二年三月、賴朝上洛ト書ハ大ナル誤ナリ、東鑑ヲ視ニ賴朝上洛ハ建久元年庚戌十一月、建久六乙卯三月兩度上洛有シナリ、此外ニ上洛ハナシ、前ニ云ゴトク、地頭職ハ文治元年乙巳十二月二十一日拜領ナリ、將軍宣下ハ建久三年壬子七月二十五日、征夷大將軍ノ敍書ヲ、勅使鎌倉ニ持參ト見エタリ

○就レ中元弘建武ノ後、足利家天下ノ權柄ヲ執、征夷將軍ニ任ジ、子孫公方ト成テ、日本國中自然ト將軍家ノ成敗トナレリ、譬バ王位ハ寺之如ニ本尊ニ、將軍ハ似ニ住持ニ、本尊料ヲ以住持之自由ニシ、末寺末山ノ僧侶其下知ヲ請ル如シ

評曰、武家天下ノ權柄ヲ執ルハ賴朝ヨリ始マレリ、承久三年、鎌倉ノ北條義時京軍ニ勝テ、天子順

德院ヲ佐渡ノ國ニ流シテ後、天下ノ權柄北條家ノ掌ニ入テ、數代威ヲ振フ、高時滅亡ノ後、間モナク、又尊氏天下ノ權ヲ執ル、尊氏三代義滿ノ時自然ト威光付テ、此時參內ノ儀式、昔賴朝ノ參內トハ各別也、義滿參內ニハ、大臣家庭上ニ下テ迎ヘ玉ヒ、關白殿バカリ床ノ上ニテムカヘ玉フトナリ、北山金閣寺ヘ行幸ノ時、義滿ノ若君十六歲ニテ、關白殿ヨリ上座ニ居ラレタル事、人王始ツテヨリノ珍事ト云ナリ、此時ニ世以ニ將軍家ヲ公方樣ト云、奬學淳和兩院別當氏ノ長者ノ職モ、勸修寺家ノ職ナリシヲ、將軍家ヘ取ラルルト云云、此義滿ノ時禁裏ノ御威光ヲ、將軍家ヘ奪ルト古記ニ見エタリ、本書ニ尊氏ノ子孫ニ至テ、將軍ノ成敗ニナルト書ハ誤ナリ、賴朝地頭職拜領ヨリ、將軍家ノ自由ニナルト可レ知

○然ルニ尊氏八世之孫、東山殿慈照院左大臣義政公、茶湯ノ風流ヲ好ミ、愛ニ奇物ヲ文質彬々然トシテ、其流弊文漸勝ニ其質ヲ、而翫好之心甚キ故ニ失志ヲセリ、失且ツ亦牝鷄鳴レ晨、而不レ正政道也、依レ茲應仁ノ亂起リ、武士在國シ、國人ヲ伐シタガヘ、己レガ家人トナシ、隣國ト爭ヒ、孤立シテ將軍之下知ヲ不レ用、公家ハ倍衰ヘテ、此時後柏原帝御即位ノ料ナク、三條逍遙院入道ノ謀ニテ本願寺調進シ、因ニ其賞ヲ代々准ニ門跡ニ、正親町帝其御即位料ナク、毛利元就調進シテ任ニ大膳大夫ニ、菊桐ノ御紋ヲ賜ル

評曰、誤ナリ、先文質トハ何ノ事ト心得玉フヤ、風流ヲ好奇物ヲ愛スルヲ文質彬々トハ、可レ笑事也、風流奇物ヲ好ヲバ奢者ト云ナリ、書面ハコトヾヽシク書記セドモ、聞取法問ノ無智ナルガ故ニ、

其理ヲ不レ知、評スルニ不レ足愚蒙ノ書ナレドモ、子孫ノタメニ書置トアレバ、其志ノ不便サニ評ヲ加、論語ニ、「子曰、質勝レ文則野、文勝レ質則史、文質彬々、然後君子」ト云云、是成德ノ君子ノ事ニシテ、常ノ人ノ及所ニアラズ、質トハ禮ノ實ヲ云ゾ、文トハ禮ノ飾ヲ云、禮者天理之節、文者人事之儀則ナリ、翫好ニ志ヲ失スル義政ヲ、文質彬々ト思フハ腸筋痳シ、抑足利八代義政ハ東山ニ銀閣寺ヲ建、茶ノ湯ノ會ニ日ヲ暮ス、仍テ東山殿ト云ナリ、此時小笠原吉良山名斯波此四家ニ命ジテ、武家ノ儀式作方ヲ究メラル、是ヲ小笠原ノ諸禮ト云、吉良ノ流モ今ニアリ、應仁亂ハ義政ノ養君ノ事ニ付テ、山名ト細川威ヲ爭ヒ興ルナリ、此義政ノ時用タル器物ヲ今ニ時代物ト云ゾ

〇古ハ城ト云モナク、屋敷構ヘナリケレバ、其國之屋形ト呼ケリ、戰國年久ク、處々ニ城廓ヲ構ヘテ爭戰セリ

評曰、愚蒙成事ヲ記ケル事哉、古ハ城ト云モナキトハ、イツヲ古ト云ヤ、物シラヌ申方ナリ、神代ノ時天照太神日向ノ國ニマシマス時、今ノ大和國ニ惡神有テ、千ノ劍ヲ振立シタガハズ、城廓ニ栖籠ル故、天照太神諸神ヲ引率シ彼城ヲ責玉ヒ、千ノ劍ヲ蹈潰、惡神ヲ滅シ、夫レヨリ日本不レ殘御手ニ入シタガフナリ、盤古ヨリ此國ヲ山迹ノ國ト云、山ニ住ミ穴ニ居ル、故ニ云トカヤ、依レ之今ニ日本ノ總名ヲヤマトノ國ト云ナリ、彼惡神ヲ退治マシマス所ヲ大ニ和クト甚テ、大和ノ國ト云、其後日本ヲ八島ト云、又十六ケ國ニナリ、三十六ケ國ニナリ聖武帝ノ時六十六ケ國ニ成ケレドモ、右ノ

初テ御手ニ入シ所ヲ、今以大和國ト云ナリ、上古ヨリ日本ノ名多シ、一曰ニ浦安國ト、一曰ニ細戈千足ノ國ト、一曰ニ磯輪上秀眞ノ國ト、一曰ニ豐葦原中國ト、一曰ニ千五百秋瑞穗國ト、一曰ニ秋津洲ト、如レ此名多シトイヘドモ、大倭ノ國ハ上古日神ノ降臨ノ地ナリ、故ニ大日本豐秋津洲ト云ナリ

理交私ニ曰、徂來先生曰、日本ヲ和國ト云コトハ、元來磤馭盧島トイヘルハ日本ノ本名ナリ、オノコハ丈夫ナリ、ロハ助語ナリ、山鳥ノヲロノ鏡、神ロギ、神漏美ノロノ如シ、武勇ヲ尙ブ國ナルユヱ、自ラ丈夫島ト號ス、中華ノ人文字ヲ作リテ倭奴國トイヘリ、唐音ニテオノコ也、ソレヲ略シテ倭ト云ヘリ、ソノ後日本ニテ美名ニ改メテ和ト云フ、倭和音同ジケレバナリ、大和ト云ハ大宋大唐ノ大ノ如シ、尊稱ナリ、元日本ノ總名ナリ、山迹ノ國ソノ時分帝都ナルニヨリテ、大和トカキタルハ苦シカラヌニ似タリ、ソノ後帝都平安城ニ移リテモ、尙大和トイヘルコト不學ノ過ナリ、故ニヤマトノ國トイフ詞ハ、山迹ヨリ出テ、大和ト云字ハ、磤馭盧島ヨリ出ヅ、各別ノコトナリト、親家コレヲ知ラズ、磤馭盧島ヲ淡路島ナリトイヘルナリ、又皇宋皇元皇明ノ例ニ任セテ、吾國家ヲ皇和トイフベキコトナルニ、古ヨリコノ稱ヲ聞カズ、近年茂卿ガ文ニ始メテ書タルナリト云云

神歌ニ、チハヤブルト云事モ、右ノ吉例トカヤ、宗時ノ歌ニ、「チハヤブル神ノ泉ノソノカミヤ、花ヲミユキノ始ナリケン」、寂蓮ノ歌ニ、「チハヤブルカモノミアレノ葵草、引ツヾキテモ渡ルケフ哉」、又神代ニモ籠城ノ事アリ、往古ヨリ傾城傾國ノ古事有事ヲバ不レ聞ヤ、近比ヨリ此コトバ有ト思フカ、是

古ヨリノコトバナリ、總ジテ此作者愚癡ニシテ古記ヲモ不レ知、己レガ猿利根ニテ記ス故、評スルニ不レ足、異國ニモ七書・史記・戰國策ナドニ、別シテ城ノ事アリ、日本ニテモ上代ノ古記ヲ見セタシ、古ハ城ト云モナクトハ、晝間敷事ドモナレドモ、目盲蛇ニオヂズトヤラン、愚蒙ノ作者ナレバ是非モナシ、世間ニテ女子童子奴婢ノ蜚ノ咄シニ、天守ナキヲバ城トハ云ハヌ物ナリト云ヤカラ有、是ヲ實ト心得テ、古ハ城ナキト思フカ、城ト云ハ二千人ヨリ上ノ人數籠ルヲ城ト云、當播上城ヲ砦ト云、千人ヨリ少數籠ルヲ砦或ハ柵ト云、又ハ小屋トモ云ナリ、今モ關東筋出羽奥州ニテ、下々ハ何方ノ柵ト云、天守ハ信長安土山ノ城ニ始メテ作リ玉フ、其後大坂ニ太閤秀吉ノ築玉ヒ、夫レヨリ日本ニ多出來スルト古記ニ見エタリ、上古中古マデハ城ニテンシユハナキゾ、天守ナケレドモ城トハ云ゾ、古ノ記錄ニ、城有事明ナリ、ナンゾ古ハ城ト云モノナキトハ云ゾ、險心ナリ、城ナケレドモ平安城ト云ニテ可レ知ナリ、籠城ノ時ノ總ガマヘト云ハ、城下ノ町ヲ內ニシテカマヘケル事、小田原ノ籠城ヨリ始ルト古記ニ有リ、城ノ事古ノ軍記ニ多ク有リ、亂國ノ時ハ多ク、泰平ノ時ハ少キバカリ也、古ノ記錄ヲ見テ可レ考○漢ニテ上古城ノ始ハ事物紀原ニ、「黃帝殺二蚩尤一、因レ之築二城闕一」一史記ニ、「黃帝爲二五城一、城蓋始二於黃帝一」ト云云、漢書ニ、「城池之設、自二神農一始矣」云云、日本ニテハ神代ヨリ城アリ、亦人王十一代垂仁天皇五年丙申、皇后ノ兄狹穗彥謀反シテ、城中ニ死スト古記ニ見エタリ、神代ヨリ城有事明ナリ、何ゾ古ハナキトカタギッテ云ヤ、是作者古記ヲモ不レ知、奴婢ノ咄

ヲ聞テ書ト見エタリ、可レ笑事ドモナリ〇屋敷構ヘナリケレバ、其國ノ屋形ト呼ケリト云事、扨々愚昧ナル申方ナリ、屋形ト云ハ國主ヲ尊ンデ云事ナリ、越後ニテ謙信ノ在城ヲ屋形ト云ヒ、古鎌倉ノ時代、賴朝ノ御在城ヲ御所ト稱シ、足利義滿ノ御在城ヲ室町ノ花亭ト稱スル類ナリ、或書ニ殿ト云ハ將軍家ヲ指テ云、屋形ハ尋常ノ武家ヲ云、故ニ殿中ト指スハ將軍ニ限ルナリ。尊者ヲ直グニ指テ云コト恐アレバナリ、天子ヲ陛下ト稱シ、東宮執政ヲ殿下ト云ヒ、大臣ヲ閣下ト云ガ如シ、凡テ武家ニハ主君ヲ指テ屋形ト呼ブ例アリト見エタリ、カヽル古例アルヲ不レ知、閭巷ノ說ヲ書置クコト可レ笑、古書ヲ見テ可ニ考知一

〇百姓ト呼レシ領家地下人之子孫ハ、イツシカ陣夫ニ被レ役之士民ト成、米アレドモ農人ハ腹ニ滿ル程不レ食、絲綿ニ勞ヲナシテモ、機婦ノ溫ニ着ル事モナラズ、年貢諸等ノ償トナシケリ

評曰、文盲ナル云方腹筋痛シ、前ニ詳ニ評判スルゴトク、百姓ハ士民ノ總名、地下人鄉民農夫田夫野人マデ、皆是百姓ノ內ナリ、百姓ガ士民ト成ルト珍シソフニ書記スハ何事ゾヤ、ケ樣ニ埒モナキ事ヲ云フヲ、世間ニテ口タハコト、云ナリ、亦領家ト云ハ、古公家領ノ時、其所近邊ノ村々ヲ治ル支配人也、鎌倉ノ代ニナリテ、公家ノ知行ヲ領家ト云、式目ニ、一國司領家ノ成敗、不レ及ニ關東御口入一事」トアリ、領家ノ役人後ニ役ヲヤメテ、士民トナル事不レ珍、今天下泰平ニテモ、武士ガ浪人シテモ百姓トナリ、士民ト云ルヽコト有ゾ、公家ノ子孫ニテモ、民間ニ下テ百姓トナルコト古ヨリ數多

シ、公ノ末ニモ數代ヲ經テ民トナリシ人有事ナリ、去ルニヨッテ百姓ト云也、百姓ヲサホド鄙ベキ
ニアラズ、日本紀ニハオホンタカラト讀セ、六韜ニハ「大農大工大商、謂二之三寶一」又天子ハ民ノ父母
ナリトモ古記ニ見エタリ○農人ハ腹ニ滿ル程不レ食、機婦ノ温ニ着ル事モナラズト有、評曰、亂國ノ
時分ハ農人ニヨラズ、公家武家商人職人ノ類マデ、飢寒ノ憂アル事不レ珍事ナリ、農人バカリ飢寒ト思
フ事愚蒙ナリ、北國下向ノ勢凍死シ、金ガ崎ノ城ニテ飢タリシ事太平記ニモ見エタリ、其外和漢ニ
飢寒ノ憂アリシ事多シ、是以今泰平ノ御代ノ難レ有目出度事ヲ考テ、世下リ人諂ト思ヒ玉フナ

○米俵ハ三斗五升ヲ壹俵トナシテ、馬一疋ニ貳俵宛付テ、五里ノ道法ヲ運、馬大豆壹升、扶持米五合取
作法ナリシニ、御當家天下一統ニ成テ、太平ノ御治世、國々ニ御代官ヲ被二居置一、百姓ノ年貢米御藏ニ
請置ク故ニ、春夏ニ土用之減米トテ貳升宛指加、三斗七升入壹俵ト定、公務之法也、私領ハ是ニ貳升
ヲ増、三斗九升入壹俵トナス定法ナリシニ、年移リ人變リテ、公私トモニ不案内歟、升入ノ不同有レ之
而已

評曰、扨モ物知リ顔ニテ愚蒙ノ誤ヲ子孫ニ知セントテ書置ク事ノ不便サヨ、證據モナク、自分ノ推
量ニテ書クト見エタリ、先三斗五升ヲ壹俵ト成ス事、慶長年中江戸御知行所ヘ、御掟ノ御書ヲ下サ
レケルトカヤ、然レドモ日本國中ヲ一偏ニ覺エケル事愚ナリ、先尾州ハ五斗入、或ハ五斗五升入モ有
リ、甲州ハ三斗七升入、中國西國九州ニハ三ツ俵ト云テ、三斗三升三合入モ有ナリ、其外三斗九升

入、四斗入モ有リ、國ニヨリ地頭ニヨリ、古ヨリ區々ノ方アリ、御料所モ國ニヨリ三ツ俵モアリ、二十年程以前ニ平石ニナリ、四斗入ニナリシ國モアリ、晋俵ハ何程入テモ、淺草御藏前ニテ御拂米ノ勘定ハ、三斗五升ノ法ナリ、私領方モ本石ト云テ、俵ハ四斗一升、或ハ四斗二升入テモ、一俵ヲ三斗五升ノ算用ニスルナリ、其上ノ有米ハ皆百姓ノ損ナリ、是ハ領主ノ無理ナレドモ、百姓ハ赤子ノ如シ、歎トイヘドモ地頭ヘ向テ云コトモナラズ、上ツ方ニ聖賢ノ心有テ、赤子ヲ保君イマシ、其下ニ慈愛質朴ナル臣下ノ出ル時ヲ待玉ヘ、麒麟モ日本ニ出シタメシモ有ルゾカシ○馬一疋ニ二俵宛付テ五里ノ道法ヲ運、馬大豆壹升、扶持米五合取作法ナリシニ、御當家天下一統ニ成テト有事、評曰、誤リ也、天正十七年己丑ニ東照君ヨリ仰付ラレ、酒井與九郎重勝遠州ノ檢地ヲセラレ、則御定七ケ條ノ御證文御朱印ヲ村々ヘ下サル、御文言ノ内ニ五里中年貢可二相屆一、并荷積者下方升可レ爲二五斗目一、扶持米六合、馬大豆一升、地頭可レ出レ之ト云云、右ノ御證文村々ニ有リ、如レ此慥ナル證據アルヲモ不レ知、足利家ノ戰國ノ時ノ定ナド思フハ愚蒙ナリ、特ニ扶持米六合ヲ五合ト書ハ、可レ笑事ナリ○年移リ人變リテ、公私トモニ不案内申ト書事、評曰、己レガ蒙昧不智ナルヲ不レ考シテ、上ヲ訕ハ猿利根ナリ

○慶長五子ノ歲、濃州關ケ原御陣、御當家依二御利運一、家康公征夷大將軍ニ御任官、關國ヲ以諸侯之戰功ニ賜リ、各所替有テ

評曰、依ニ御利運一ト書事非ナリ、御利勝ト可レ書事也、家康公ト御實名ヲ書事恐多シ、前ニ評スルゴトク愚蒙ナリ、御利運ニ依テ征夷大將軍ニ御任官、闕國ヲ以諸侯ノ戰功ニ賜ルト書事、實錄ヲモ不レ知、愚察ニテ書クト見エテ、大ナル誤ナリ、先ヅ關ケ原御陣ハ、慶長五庚子年九月十五日ナリ、同年十月五日ヨリ忠功ノ御大名衆ヘ恩賞ヲ下サレ、同六年辛丑二月ニ御譜代ノ大名衆ヘ勳功ノ地ヲ下シ賜ルト云云、同八年癸卯二月、東照君ヲ征夷大將軍ニ任ジ玉ヒ、右大臣ニ被レ叙玉フト玉露叢ニ見エタリ、將軍ニ御任官ノ事ハ、諸大名ヘ恩賞ヲ賜テ後四年目ナリト可レ知、カヽル正說ヲ不レ知、何モカモ同時ノ事ト思フハ、子孫ヲ誑罪人ナルベシ

○御領地方者、大久保重兵衞・彥坂小刑部・伊奈備前守三判之證文ヲ以究レ之、就レ中慶長九年辰年、遠州總檢地入。城附ハ城主檢地差出之高、御領所者、伊奈備前守家次總奉行ニテ町反ヲ改、上中下ニ盛ト云事ヲ定、石代ト名付、一村切之高辻ヲ究メ、タトヘバ上田壹反步十二、中田十一、下田十ト云ガ如シ

評曰、誤ナリ、檢地ノ事ハ太閤ノ天下ニ成テ、國々檢地シテ分米ト云事ヲ出シ、石高知行何程ト定ルナリ、慶長五年以後ノ事ニアラズ、太閤ノ命ニテ天正年中ニ、伊勢尾張美濃ヨリ檢地始リ、夫ヨリ上方ノ國々ヲ改ム、石代ヲ太閤秀吉ノ始玉フ證據ハ、天正十一癸未年、太閤ト柴田修理亮ト柳ケ瀨合戰ノ時、櫻井佐吉ト云者一番鑓ヲ合ス、此褒美トシテ丹波ノ內ニテ三千石宛行トアル、太閤ノ

御感狀ノアルヲ予見タリ、然レバ石盛ハ天正十一年ヨリ前ニ、太閤ノ始玉フ事無レ紛、扨天正十八年庚寅、小田原陣ノ後、奥州出羽ヲ檢地シ玉フ、關八州ハ東照君ヨリ檢地仰付サセラルト云云、遠州ハ天正十七己丑年、酒井與九郎重勝檢地シテ石高ヲ改、同十八年庚寅、小田原滅亡ノ後、東照宮御國替ニテ關八州ヲ御知行シ玉ヒ、江戶ヘ御移リ、三河遠江駿河甲斐信濃五ヶ國ハ太閤ヘ渡リ、大坂方ノ大名ノ知行トナル、城東郡ヲ大坂方有馬玄蕃頭慶長二年ニ檢地シテ、三萬石ヲ五萬八千五百石餘ニ打出ス、慶長五年、關ヶ原御合戰ノ後、同六年辛丑、大須賀出羽守忠政橫砂ノ城主ニ仰付ラレ、城東郡ヲ知行アリ、村々ヲ改見テ、有馬玄蕃頭ノ檢地ノ通リニシテ置レタリ、外ノ郡モ區々ナリケレバ、慶長九年甲辰、同十年乙巳ニ、御當家ヨリ檢地ヲ仰付ラレ、伊奈備前守忠次奉行ニテ改ラル、是ヲ以本書ノ誤ヲ可レ知、石代分米ト云事ハ太閤ノ始メ玉フ、是ヨリ日本ノ百姓困窮スルナリ、是太閤ノ大惡事ノ一ツト古記ニ見エタリ、昔ノ記錄ヲモ見ズシテ、下賤ノ茶呑雜談ヲ、物々敷大ナル誤ヲカキシルス事文盲ナリ、十目ノ見ル所、十指ノ指トコロヲ愧玉ヘ、理変私曰、大學ニ、十目所レ視、十手所レ指トアリ、十指ノ指ス所トハナシ、書寫ノ誤リカ、評者ノ記憶ノマヽニ書シ物カ、後生可レ畏々々○又曰、伊奈備前守家次ト書コト非ナリ、伊奈備前守忠次ナリ、古證文ヲ見テ知リ玉ヘ

○又其鄕村免除地等ハ、家次墨印ヲ出セシナリ、慶安元・同二、大猷院殿家光公御治世免除地等、備前守墨印皆以ニ御朱印ニトナル、依レ之慶安以後新御朱印甚多シ

評曰、前ニモ言フゴトク、御諱ヲ書コト憚多シ、可レ憚事ナリ、慶安ノ御朱印ノ委細モ不レ知、邪說ヲ書記ス、先慶安元戊子年、墨印五石以上御朱印ヲ下シ置ル、同二己丑年、五石以下ノ寺社領モ、御朱印拜納仕度ト江戶へ下リ、御訴訟申上シニ仍テ則下シ置ル、然レドモ其時願ヒヲ不レ上、寺社領ハ御朱印ニ不レ成、今ニ墨印地モ多ク有ゾ、皆以ニ御朱印一ニ成ルトハ、如何心得テ書シヤ、可レ笑事也、慶安二年ノ御朱印ハ、皆々五石以下ト可レ知、特ニ伊奈備前守ノ墨印ニ不レ限、今川家ノ諸文ヲ以御朱印ニナリシモ有ト知玉へ

○古ハ千戶ヲ以爲ニ一郡一、郡ヲ分テ庄トナシ、鄕トナス、庄鄕ハ村ノ總名ナリ、故ニ一國ノ郡ニ增減有シ、今ハ無ニ其差別一稱シ來ル、郡名ヲ用テ一村切ニ事濟御成敗ナリ

評曰、誤ナリ、古トハイツノ時ヲサスヤ、千戶ヲ以爲ニ一郡一トハ、漢ノ制ナルヤ、日本ノ制ナルヤウタガハシ、先漢ノ制ヲ考ルニ、事物紀原ニ、郡ハ秦ノ始皇二十六年、初幷ニテ天下一罷レ侯置レ守、始分ニ三十六郡一也、天子ノ地ハ方千里、分爲ニ百縣一縣四郡、又曰、漢以ニ州部郡一、唐武德元年、罷レ郡置レ州也云云、又曰、鄕、周禮六鄕以軍政爲（私ニ曰、恐ラクハ爲ノ字、上ニアルベシ）謂ニ比閭族黨州鄕一也云云、論語註、萬二千五百家爲レ鄕云云、理交私ニ曰、小學註ニ曰、萬二千五百家爲レ鄕、五百家爲レ黨、二千五百家爲レ州、二十五家爲レ閭云云、是ヲ以漢ノ制ニ不レ有ヲ可レ知、日本人王十三代成務天皇五年乙亥二月ニ、始テ分ニ諸國郡境一ト云云、人王四十三代元明天皇和銅六年、定ニ諸國郡鄕名一、同四十四代元正天皇靈龜

二年丙辰、安麻呂日本ノ土地ヲ撰、同四十五代聖武天皇天平七年、勅ヲ奉テ吉備公泰澄行基三人日本ノ國土ヲ正シ、人民ノ衣服ヲ定メ、食ノ分量ヲ置、其品ヲ分ツ也、安麻呂ガ舊制ヲ改テ風俗ヲカヘタリ、天平七年ヨリ同十七年マデ、十一年ノ間ニ是ヲナス、國毎ニ國分寺ヲ立、又國分尼寺ヲ立テ、其國々ノ邪曲ヲ誡メ國ノ闕ト等ク置テ、其國ノ是非ヲ記サシム、彼三人ノ徒諸國ヲ流行セリ、東國ハ泰澄請取是ヲナシ、駿河ヨリ中國ニ至ルマデハ行基ノ制也、中國ヨリ西國マデハ吉備公ノ制ナリト古記ニ見エタリ、郡ヲ分テ庄トナシ、鄕トナスト、珍シキ事ノヤウニカキケレドモ、皆一郡ノ內ナリ、今ニ庄モ鄕モ有事ゾ、廣ク世間ヲ聞テ可レ知○庄鄕ハ村ヲフサネシ總名ナリ、故ニ一國ノ郡ニ增減有シト云事、評曰、其理不レ聞、如何心得テ書シヤ、郡ヲ分テ庄トシ鄕トスレバ、郡ヲバ不レ呼、別ニナルニヨツテ郡狹ナルト思フカ、可レ笑事也、庄鄕村皆郡ノ內ナリ、郡ノ外ニ庄鄕有ルニアラズ、仍テ郡ハ庄鄕村ノ總名ナリト可レ思、國郡ヲ分ツ事ハ、人王ノ始神武天皇ノ御時、中州七道ト封域ヲ定メ、日本ヲ八ツニ分ツ、第十代崇神天皇ノ御宇ニ八境ヲ分テ十六國ニ極ム、第十三代成務天皇ノ御宇、國ノ數ヲ三十二國ニ分ツ、第十四代仲哀天皇ノ御世、國郡ヲ定、調貢ノ事ヲ勅、第十五代神功皇后ノ御時、五畿七道ヲ分テ、彌國郡ノ名ヲ定ム、第四十三代元明天皇和銅六癸丑年、割二備前六郡一爲二美作一、割二丹波五郡一爲二丹後一、定二諸國郡鄕名一、第四十四代元正天皇靈龜二年丙辰、安麻呂依レ勅、日本國ノ土地ヲ撰、公務私用、貢物官物ノ分量ヲ定、第四十五代聖武天皇天平七己亥

年勅ヲ奉テ吉備公行基泰澄三人、諸國ノ郡郷邑里村巷ヲ定、此時ノ三使境ノ地ニ炭ヲ埋ム、炭ハ在ニ土中ニ不レ朽ガ故ナリ、先五畿内ヲ五ヶ國ニシテ五十四郡、東海道十五ヶ國百三十二郡、東山道八ヶ國百三十四郡、北陸道七ヶ國三十七郡、山陰道八ヶ國五十二郡、山陽道八ヶ國七十五郡、南海道六ヶ國五十郡、西海道九ヶ國二嶋トモニ九十七郡、是六十八ヶ國也、郡數凡六百三十一郡ニ定、天平七年ヨリ同十七年マデ、十一年ノ間ニ、日本ノ國郡悉ク定ルト舊記ニ見エタリ、如レ此ノ證據正シキヲ不レ知、聞取法問ニテ一國ノ郡ニ增減有シト書置クハ、子孫ヲ愚癡ニセンタメカ、作者ノ鹵莽（私ニ曰、ウハノソラト云詞ニアタル也、心ヲ用ズウカ〳〵スルナリ、莊子則陽篇ニ出タリ）ナル事可レ笑

○庄屋ト云名ハ、往古井田ノ法有シ時、田中ノ廬舍ヲ庄ト云、庄ハ俗字ナリ、井田ノ法ト云ハ、譬バ方九百畝ノ田ニ井ノ字ヲカケバ九區ト成、每區百畝ニシテ九百畝ナリ、中ノ百畝ヲ公田トナシ、外八百畝ヲ私田トナシテ八家ニ分チ耕ス、公田百畝ハ八家ヨリ耕シテ租税ニ納、故公田百畝之內、二十畝ヲ除キ爲ニ廬舍、是則庄屋ナリ、八家則名主也、東西南北ノ路ヲ阡陌ト云、路多シテ田狹ガ故ニ、今ハ井田ノ法ヲ不レ用、田ヲ廣シテ耕セリ、八家名田ヲ下作人ニ分テ耕セシハ土民也

評曰、大ナル誤ナリ、井田ノワケモ不レ知、物知ダテヲシテカヽル邪說ヲ書記シテ、子孫マデヲ迷ヒ者ニセンウタテサヨ、此作者コソ後漢ノ馬援ガ、蜀ノ公孫述ヲ井底ノ蛙ト云フ類ナリ、評判スルニタラザル愚蒙ノ事ドモナレドモ、子孫ニ知セント思フ志ノヤサシケレバ、筆ヲ勞シテ井田ノ事ヲ知

ラスルゾ、事物紀原ニ、「黄帝始經レ土設レ井、以塞ニ諍端一、立レ歩制レ畝、以防ニ不足一、使ニ八家爲レ井、井間四道、此井田原也」云云、孟子滕文公ノ上篇ニ曰、「夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、」註ニ、「夏時一夫受ニ田五十畝一、而毎夫計ニ其五畝之入一以爲レ貢、商人始爲ニ井田之制一、以ニ六百三十畝之地一、畫爲ニ九區一、區七十畝、中爲ニ公田一、周時一夫受ニ田百畝一」云云私ニ曰、孟子巻之五滕文公篇四十七丁又曰、「方里而井、井九百畝、其中爲ニ公田一、八家皆私ニ百畝一、同養ニ公田一」私ニ曰、滕文公篇五十一丁ニアリ註ニ、「公田百畝中、以ニ二十畝一爲ニ廬舍一」云云私ニ曰、此註ハ夏后氏ハ五十而貢スト云所ノ註ニアリ貢法ト云ハ、五十畝ノ内ニテ五畝ヲ年貢ニ上ル、十分一也、助法ト云ハ、六百三十畝ノ内ニテ、七十畝ヅヽ八人ヘ渡シ、七八五百六十畝ナリ、中七十畝ノ公田ノ中ニテ、十四畝ヲ除テ廬舍トスレバ、殘五十六畝ヲ年貢ニ上ル、是ハ十一分ニテ一ツ分取ルヽ也、徹法ト云ハ、九百畝ノ中ニテ、百畝ヅヽ八人ヘ渡シ、八百畝ナリ、中百畝ノ内ニテ、二十畝ヲ除キテ廬舍トスレバ、殘八十畝ヲ年貢ニ上ル、是十一分ニテ一ツ分取ルヽナリ、廬舍トハ、字彙ヲ見ルニ、田中ノ屋也ト有リ、殷ノ代ニハ十四畝、周ノ代ニハ二十畝、百姓ノ屋敷ヲ君ヨリ下サルヽナリ、夏ノ代ノ耕田ヲ貢ト云、殷ノ代ノ耕田ヲ助ト云、周ノ代ノ耕田ヲ徹ト云、右ノ如ク三代ノ耕田差ナリトイヘドモ、大ムネ皆十ガ一ノ制ナリ、然ルニ周ノ末ニ井田ノ法衰テ不レ用、二十代頃王ノ時、魯ノ宣公ノ時ヨリ、魯國ニテモ十ガ二ノ年貢ヲ取ルト論語ニ見エタリ、十ガ二ト云ハ、公田八十畝ノ外ニ、又八家ヨリ十畝ヅヽ、八十畝取レバ、民ハ七百二十畝ナリ、公田ハ百六

十畝ナリ、是八家ノ八百畝ヨリ算ヘテ見レバ、二八百六十畝ナリ、是ヲ什ガ二ノ税法ト云ヨシ、四書ノ蒙引ニアリ、此外數多ノ說アレドモ、先大略井田ノ法右ノ如シ、此外周ノ末ニ、國々ノ諸侯貢法ト云フヲ立テ年貢ヲ取ル、是ハ夏ノ代ノ貢法トハ差ナリ、周ノ末ノ貢法ト云ハ、年貢ヲ定テ年ノ豐年凶年ニカマハズ取法ナリ、此時井田ノ法ヲ不レ用、ヨツテ孟子ニモ、「龍子曰、治レ地莫レ善レ於レ助、莫レ不レ善ニ於テ貢」ト云云、孟子ノ滕ノ文公ノ篇ヲヨク〳〵考見テ、井田ノ制法ヲ知リ玉ヘ、亦評ニ曰、此作者愚蒙ニシテ、井田ノ法ノ事ヲ聞取法問ニ書記ス事、腹筋ノ痛キコトナリ、書ザルヨリハルカニオトレリ、子細ハ井田ノ法ト云事ハ、古ヨリ日本ニテ用タルコトナシ、異國ニテ聖人ノ御代ニ井田ノ方ヲ定、其根元ノ道理ヲ敎玉ヒ、法ヲ立テ公ヘ上ル所ト、八家ニ賜ル所ヲ極メ玉フ、漢土ニテサヘ夏殷周三代ノ盛シ古ノ事ニテ、周ノ代ノ末ニハ井田ノ法ヲ不レ用、税法貢法ヲ用、井田ノ根元ヲサヘ知人稀ナリケレバ、孟子是ヲ憂テ、詳ニ其理ヲ說キ敎ヘ玉フナリ、然ルニ日本ニテモ古ハ井田ノ法ヲ用タルト思フハ、愚癡鹵莽ノ甚シキ事、掌ヲ拍テ笑フベシ、能々本書ノ文言ヲ考見レバ、此作者算用モ不レ知、開平開立ハ思ヒモヨラズ、八算見一ノ割モ不レ明人ト見エタリ、人ノ咄ヲ聞キテ利口ダテヲシテ書シモノナルベシ、仍テ異說ハ多ケレドモ、予ガ聞シ井田ノ法ヲ、今ノ日本ノ畝歩ニ積リ、委ク勘定シテ評ヲ加ルナリ、先ヅ井田一圍ノ内ニ、歩數十二萬九千六百歩アリ、是ヲ九百畝トス、理交私ニ曰、孟子梁惠王篇註ニ曰、「方一里爲二一井一、其田九百畝、中畫二井字界一爲二九區一、

一區之中爲ニ田百畝一、中百畝爲ニ公田一、外八百畝爲ニ私田一、八家各受ニ私田百畝一、而同養ニ公田一」云云、方一里ハ六町四方ナリ、六六三百六十間ヲ自乘スレバ、十二萬九千六百歩トナル、是一井九百畝ノ坪ナリ、是ヲ開平ニ除テ、方面三百六十間ヲ得ル〇一日俳友朝三ト云者、予ガ机ノ側ニ居テ此書ヲ見テ曰、井田ノ事ハ評判ニ詳ナリ、今一井ノ積十二萬九千六百歩ヲ開平ニ除テ、方面ヲ得ル術ヲ知ラズ、願ハクハ教ヲウケン、僕曰、予固算術ニ疎シ、然レドモ櫻井侚友軒ニ開平開立、及ビ平卯立卯圓法等一通リノ術ハ聞シ事アリ、足下トハ刎頸ノ交リ莫逆ノ親ミアレバ、固陋ヲワスレテ其術ヲ語ン〇一井九百畝ノ積十二萬九千六百坪有リ、術ニ曰、位ヲ見ルニ百位ナリ、三百間四方ト考、三三九萬坪實ヲ減ジ、商三百間ト立、殘實三萬九千六百坪アリ、扨商三百間ヲ倍シテ、六百間ヲ法トシテ一桁除ク、六三天作五、六進ガ一、次商六十間トナル、此ノ小隅六六三千六百坪引拂、倍シタル六百間ヘ五因シ、方面三百六十間ヲ得ル〇又井田ノ百畝ハ一萬四千四百坪ナリ、開平ニ除ク術ニ曰、位ヲ百位ト考、一一一萬坪實ヲ減ジ、商百間ト立、殘實四千四百坪アリ、商百間ヲ倍シ、二百間ヲ法トシテ除ケバ、次商二十間トナル、此小隅二二四百坪引拂、倍シタル二百間ヘ五ヲカケテ、方面百二十間ヲ得ル〇朝三又曰、今田壹反歩アリ、是ヲ開平ニ除テ方面ヲ問、答曰、方面十七間三分二厘零不盡一絲七忽六徵、術曰、三百坪ト置、位ヲ十位ト考、一一一百坪實ヲ減ジ、商十間ト立、倍シテ二十間ニテ除ク、作九ガ二倍、二倍ニフタツ戻ス、小隅七七四十九坪引、次商七間ヲ倍シテ、三十四間ヲ法トシテ除ク、

三一三十一、三四十二引、小隅三三九厘引、三ノ商三分ヲ倍シテ、三十四間六分ヲ法トシテ除ク、六ガ二二四八厘引、二六一厘二毛引、小隅二一四糸引、扨倍シタル三ノ商ヨリ五因シ、見商十七間三分二厘零一七六ヲ得ル、扨十七間三分二厘ヲ自乗シ。二百九十九坪九分八厘二毛四糸トナル、是ヘ不盡一七六ヲ加ヘテ三百坪トナル也、此九百畝ヲ九ツニ割レバ百畝トナル、其百畝ト云ハ、今日本ノ勘定ニシテ一萬四千四百歩ナリ、田ノ法三ニテ除レ之、今ノ四町八反也、一畝ト云ハ百四十四歩、私ニ曰、二間四方十則四畝二十四歩ナリ、公田八十畝ハ一萬千五百二十歩、則三町八反四畝歩ナリ、廬舍二十畝ハ二千八百八十歩、則九反六畝歩ナリ、莊子ニ、顏回孔子ニ答テ云シ郭外ニ五畝ノ田有リ、郭內ニ五畝ノ田有リト記ス、五畝ハ日本ノ二反四畝歩ナリ、井田ノ法ト云ハ、田毎ヲ割合八家ニテ作ニハアラズ、什ガ一ノ法ヲ以、勘定ニテ年貢ヲ上ルナリ、其根元ヲ圖ニシテ知スルナリ、國ガマヘノ內ニ井ノ字ヲ畫バ九ツニナル、是ヲ一ツヲ百畝ト名付ルナリ、其圖ハ セイデン 如レ此ナリ、漢ニモ土地ノ廣キ所モアリ、狹キ所モアリ、川通リノ長キ所モアリ、山方ノ山田高下、長短入組不形ナル所數々ニテ、日本ニ替ル事ナシ、必田毎ヲ圖ノ如クスル事ハ成リガタシト可レ知、仍テ井田ノ法ニテ年貢ヲ取勘定ヲ日本ノ法ニ積リテ、譬ヲ書テコヽニ著ス、先八十一歩ノ井田ヲ九ニ割レバ九歩ナリ、中ノ九歩ヲ公田トシ、此內ニテ一歩八分廬舍ヲ除ケバ、殘リ七歩二分ノ公田ナリ、是ヲ一升毛ニ積リ、五合摺ノ勘定ニシテ、有米三升六合ナリ、八家七十二歩ノ有米三斗六升ナリ、扨八十一歩ヲ十二ノ石盛ニ

シテ、高三斗二升四合ナリ、此年貢右七歩二分ノ有米三升六合ヲ出ス、是ヲ兌定ニシテ一ツ一分一厘、三六ノ兌定ナリ、先ヅ大略日本ノ法ニ積リテ井田ノ法ヲ用ル時ハ、右ノゴトシト可レ知、是ヲ以漢ニテモ井田ノ法ノ勘定ニテ、古ハ民ヨリ年貢ヲ納ムト知ベシ庄屋ト云名ハ、往古井田ノ法有シ時、田中ノ廬舍ヲ莊ト云ト有事、評曰、大ナル誤ナリ、田中ノ廬舍ハ、田中ノ百姓ノ屋ヲ云ゾ、然バ殷ノ代ノ十四畝、周ノ代ノ二十畝ハ、百姓ノ屋敷分ヲ上ヨリ下サル丶ナリ、周ノ代ノ二十畝ヲ八家ニ分ツトキハ、一人二畝半ヅ丶ナリ、今日本ノ一反二畝歩ナリ、廬舍ヲ莊ト云トハ、何ヲ見テ書シヤ、莊ハ字彙ヲ考ルニ、嚴ナリ、端ナリ、恭也、敬也、齊肅也、盛飾也、田舍也ト有、此外數多ノ訓アレドモ、廬舍ヲ莊ト云事ヲ不レ見、論語ノ衞ノ靈公ノ篇ニ、「不三莊以涖二之、則民不レ敬」ト云云、今思フニ田舍也ト云訓アルヲ以、廬舍ノ事ト思ヒ、取チガヘタリト見エタリ、其文盲ナルコト可レ笑云云○又曰、廬舍ヲ庄屋トシ、八家ヲ名主ナリト書事、大ナル誤リナリ、先井田ノ法ハ上古漢ニテ始ル、庄屋名主ト云名ハ日本ニテノ名ナリ、庄屋名主ト云名、異國ニモアリト思フカ、漢日本ヲ一ツニ心得テ書コト、度方ナシノ出傍題ナリ○東西南北ノ路ヲ阡陌ト云事譯アリ、事物紀原七ニ曰、「秦孝公十二年、開二阡陌一、東地渡レ洛、」又商君傳曰、「商鞅相レ秦、孝公壞二井田一開二阡陌一」ト云云、四書蒙引十一曰、「阡陌、是田間路、古人車制、一車闊六尺有餘、兩傍又翼レ之以レ人」ト云云、又論語泰伯篇、「盡二力乎溝洫一、」朱子曰、「溝洫、田間水道、以正二疆界一、備二旱潦一者也」云云、又蒙引十一曰、「廣四尺深

四尺、謂二之溝一、廣八尺深八尺、謂二之洫一ト云云、是ヲ以考レバ、田ノ間ニ溝有テ境ヲ正シ、又旱ノ時ハ溝ヨリ水ヲ入レ、洪水ノ時ハ田ノ水ヲ溝ヘ流シ入ル、ヤウニシタルモノト見エタリ〇路多シテ田狹キ故ニ、今ハ井田ノ法ヲ不レ用、田ヲ廣クシテ耕セリ、八家名田ヲ下作人ニ分テ耕セシハ、士民ナリト書事、評曰、前ニ云ゴトク、井田ノ法ハ日本ニテ用タルコトナシ、大ナル誤ナリ、又八家ノ名田ヲ下作人ニ分テ耕セシハ士民ナリトハ、如何心得タルニヤ、周ノ井田ノ八家トアルハ、皆士民ノ事ヲ云ゾ、百姓ト云モ、農夫ト云フモ、士民ト云モ同ジ事ナリ、日本ニテ井田ヲ用タルトハ誰ガ咄ヲ聞シゾ、片山里ノウバガ茶呑雜談カ、日本耕田ノ法ハ、人皇四十四代元正天皇靈龜二年丙辰、安麻呂勅ニヨツテ日本國中ノ土地ヲ撰ビ、井田ニ准ジ、公務私用貢物官物ノ分量ヲ定、其地ヲ定ル事ハ周ノ時ノ制ヲ學ブ、周ノ尺ハ今ノ一尺二寸ナリ、此尺ニテ五尺ヲ歩トス、今ノ六尺四方ナリ、歩百ヲ爲レ畝、畝百ヲ爲レ頃、今ノ三町三反三畝拾歩ナリ、頃九ツヲ爲レ井、（私ニ曰、九万坪也）井方一里、井十ヲ爲レ通、通十ヲ爲レ成、成方十里、成十ヲ爲レ終、終十爲レ同、同方百里、一同之地、提封萬井ヲ實ニ爲、九萬頃三分ニシテ二ツヲ去テ、城郭トスルナリ、可耕定テ民ノ住居トスルハ三千四百井、實三萬六百頃トス、一頃ノ田ハ二夫耕レ之、田五十畝、餘夫モ亦如レ此、二夫ノ田ヲ總則爲二百畝一、畝々收、平歲爲二米五十石一、上熟歲爲二米百石一、二夫以レ之數口ノ家ヲ養トイヘリ、總ジテ八頃ノ貢税米十六石、錢三貫貳百文ナリ、同人王四十五代聖武天皇天平七年ニ、勅ヲウケテ吉備公泰澄行基三人、日本國

ノ郡郷邑村ヲ定ム、安麻呂ガ舊制ヲ改テ風俗ヲカヘタリ、田畠ノ事一夫ノ耕所田三反、畠三反ナリ、二夫ノ職一町二反ヲ以テ、民七口ノ家ヲ保、七口ノ民ノ七人ヲ以傭夫一人ヲ出ス、是禁庭ノ夫ナリ、一反生ズル所ノ粟十合ノ升ヲ以一石六斗、一町ハ十六石、一町二反ハ十九石二斗也、其婦ハ桑ヲ植麻ヲ扣テ、蠶織紡績ヲ業トス、其食ハ一夫一日ニ業アル時ハ、三食ニ雜穀九合、一民ハ七合半米、衣ハ葛布ノ單、冬ハ布ヲ裏トシテ麻絮ヲ用、如レ此制ヲ下ス、天平七年ヨリ同十七年マデ、十一年ノ間ニコレヲナス、其後人王五十二代嵯峨天皇弘仁二年辛卯ニ、菅清公內麻呂峑海三人ニ命ジテ又制法ヲ下ス、稅賦徭役等ノ事ナリ、古ハ田畠何レモ秋ノ實ノルヲ以調ヲ貢スル也、然ルニ貢物此時ヨリ、夏ノ麥ヲ取テ正稅ノ如クス、民ノ衰弊ヲ起ス、下民ノ食ヲ定ルニハ、菜ヲ雜穀ニ和シテ鹽ヲ加ヘテ糝ニシ、業アル日ハ晝食ヲ飯ニス、業ナキ日ハ糝一食ニ二椀、朝暮四椀ニ不レ過、是ヲ一夫ノ餞トス、一夫ノ以上ヲ一民トス、一民ノ食一日ニ五合ヲ以ス、其內雜穀二合五勺、民家ノ婦女孩兒等ハ、一夫ノ食ニナゾラヘテ雜穀ヲ與フ、村里ニ祭祠ヲ始テ四季ニ行ハシム、村里ノ社大唐ノ例ニヨルト舊記ニ見エタリ、其後五十六代淸和天皇、六十代醍醐天皇、六十二代村上天皇御代々、段々民間ノ風俗、耕田調貢ノ法品々ノ譯アリ、事長キ故略シテコヽニ不レ記、當御世ハ東照君ノ御定、四分公田、六分百姓ト極リシ、是誠ニ今ノ井田ノ法ト謂ツベシ、是サヘ世ノ末カ、地頭ニ無理多ク、四分六分ノ方ニ不レ叶事有ト、世人是ヲ歎クヨシ○又曰、庄屋ノ庄ハ、莊ノ字ノ書カヘ、大ノ字ノ心ナリ、字彙ヲ考

ルニ、莊ハ壯立ノ貌、音藏ト見エタリ、其所ノツカサノ屋ト云心トカヤ、又調貢ノ官物ヲ取藏ノ心モアリ、名主トハ其所ノ名ノ主ト云心ナリ、西國筋ハ古ヨリ庄屋ヲ長ト云、關東東國邊ニテ名主ト云、東海道筋ニテ庄屋ト云來ルナリ、日本ニテ三ツノ名ヲ呼ドモ同ジ心ナリ、然レドモ古鎌倉ノ時代、所領內ノ名主職ト式目ニアルハ少差アリ、古ノ名主ハ上ヨリ祿ヲ賜リ、知行アリ、今ハ名主モ庄屋モ同ジ事ナリ、又天正慶長ノ比ハ、遠州ニテ庄屋ヲ政所ト云フヨシ、伊奈忠次慶長九年ノ免定ニハ、何村ノ政所ノ書アルヲ見タリ、今ニ下賤ノ詞ニ、庄屋政所ト云フハ、昔ノ餘風ナルベシ

○年移リ世變リテ、今ハ民家五人組ト云事ヲ定、隣家ノヨシミヲナス、又組頭ト云ヲ立テ總代トナシ、庄屋ト云、村長ニ相侶、公ヲ務ルナリ、古ハ庄官名主有テ、地下ノ取捌キセシ、古ノ名主ハ今ノ小庄屋、庄官ハ今ノ大庄屋也

評曰、謬ナリ、五人組ト云事、近代出來スルト思フカヤ、此段ハ作者如何心得タルニヤ、次ニ字書ヲ引テ五家ヲ爲レ隣ト記セリ、自書テ自矛盾（私ニ曰、ウラハラナド云詞ニアタル、孟子ニ出タル故事ナリ）ノ差ニナルハ、愚癡ノコウジタルモノナルベシ、五ノ數ハ天ノ中數、仍テ河圖洛書ノ中ニ位ス、五運五行五臟五色五味五音五常、此外五ノ數ヲ用ル事勝テカゾヘガタシ

理交私ニ曰、一書孔安國（孔子十二世ノ孫、漢武帝ノ時、諫議大夫トナル）曰、河圖伏羲氏（史記三皇本紀、大昊、庖犧氏、風姓王ニ天下一）龍馬出レ河（河ハ黄河ト云河ナリ）遂則ニ其文一、以畫ニ八卦一、註、龍馬、周禮夏官曰、馬八尺以上爲レ龍○吳氏曰、河圖自レ一至ニ十

五ハ、十五點之在ニ馬背ニ者、其旋毛之圈、有レ如ニ星象ニ、故謂ニ之圖ニ○櫻井尙友軒曰、伏羲氏龍馬ノ旋毛ヲ見テ、老少陰陽ノ數、五行相生ノ道アル事ヲ察シ玉ヒ、其旋毛ノ文ニ則テ八卦ヲ畫シ玉フ、所レ謂乾一・兌二・離三・震四・巽五・坎六・艮七・坤八是ナリ○陽數ヲ奇ト云、陰數ヲ偶ト云、天一水ヲ生ジ、地六成之水トス、北ニ位ス、地二火ヲ生ジ、天七成之火トス、南ニ位ス、天三木ヲ生ジ、地八成之木トス、東ニ位ス、地四金ヲ生ジ、天九成之金トス、西ニ位ス、天五土ヲ生ジ、地十成之土トス、中央ニ位ス、天一ヨリ天五ニ至テ、十五數ヲ生數トス、六ヨリ十ニ至テハ、土ノ五ヲ得テ成ル、仍テ是ヲ成數トス、右河圖五十五數、奇偶ヲ以成、一三五七九ノ二十五數ハ、陽ニシテ奇也、二四六八十ノ三十數ハ、陰ニシテ偶也、北方ノ水東方ノ木ヲ生ジ、東方ノ木南方ノ火ヲ生ジ、南方ノ火中央ノ土ヲ生ジ、中央ノ土西方ノ金ヲ生ジ、西方ノ金北方ノ水ヲ生ズ、是ヲ五行ノ相生ト云也（私ニ曰、圖アリ、略レ之）

○洛書ノ事、一書ニ「孔安國曰、洛書者、禹治水時、（洛者水名、自ニ洛水ニ出、史記夏本紀、夏禹名ニ文命ニ）神龜負レ文、而列ニ於背ニ、有レ數至レ九、禹遂因而第レ之、以成ニ九類ニ、註、九類者、洪範九疇也、禹觀ニ洛書之數ニ自レ一至レ九、故序ニ其數ニ、而自ニ第一ニ滿ニ數曰ニ、而至レ九也（洪範ハ、書經ニアリ）○櫻井尙友軒曰、洛書ハ五行相尅ノ數ナリ、北方ノ水西方ノ火ヲ尅シ、西方ノ火南方ノ金ヲ尅シ、南方ノ金東方ノ木ヲ尅シ、東方ノ木中央ノ土ヲ尅シ、中央ノ土北方ノ水ヲ尅ス、洛書ハ河圖ノ地十ノ數ヲ滅ジ、全數四十五數也○關子明（魏ノ人、名ハ關朗、字ハ子明ト云）曰、河圖文、七前六後、八左九右、洛書文、九前一後、三左七右、四前左、二前右、八後左、

六後右〇尙友軒又曰、洛書ハ奇數ヲ主トシテ偶數ヲ統テ、五行ノ數十五數ヲ含ム、タテヨコヨリカゾヘテモ、スミヨリスミヘカゾヘテモ、十五アリ、私ニ曰、圖アリ、略レ之
天地運氣ノ始モ五ヨリ出ル、又五家ヲ爲レ隣爲レ里トモアレバ、五人組ハ和漢ニ上代ヨリアル事ト可レ知、周ノ始大公望ノ軍ニタイ伍ト云テ、五人宛ニ組テ段々カゾヘル、五人十合五十人、是ヲ十合五百人、又五百ヲ十合五千人、是ヲ十合五萬人ト勢ヲ立ル法アリ、之ヲ以備ヲ立ル、其内ニ小頭アリ、組頭アリ、侍大將有テ、又總大將アリ、是往古ヨリ五人組ニシテ、萬々ニ及マデ次第ヲ立ル、古法軍記ニアリ、尉繚子ノ伍制令ニ曰「軍中之制、五人爲レ伍、伍相保也、十人爲レ什、什相保也、五十人爲レ屬、屬、相保也」云云
理変私ニ曰、論語註ニ「萬二千五百人ヲ爲レ軍、大國三軍」云云
是ニ準ジテ下々ニモ五人組可レ有事ナリ、今何ゾ珍敷事ノヤウニ、年移リ世變テ、今ハ民家五人組ト云事ヲ定ムトハ書記スヤ、又組頭ト云ヲ立、庄屋ト相侶、公ヲ務ルト、是又何ゾ珍シソウニ書クヤ、古ヨリノ方有バ、下々マデ不レ珍、但シ作者ハ今マデウツソリトシテ、組頭五人組ト云事ノアルヲ不レ知、近比是ヲ聞テ初ッ物ト思ヒ、七十五日ノ支度ニセンタメニ書著スヤ、如何ニ々々〇又曰、古ノ名主ハ今ノ小庄屋、庄官ハ今ノ大庄屋ナリト記ス事、評曰、前ニ云ゴトク、古鎌倉ノ時代ニ別納ノ御下シ文ヲ名主ニ可レ給ト式目ノ三十八ヶ條目ニアル、名主ハ祿ヲ賜リ所領アリ、然レバ今ノ小庄屋

ヨリ重キト見エタリ、今ハ庄屋モ名主モ同ジ事ナリ、庄官ト昔云シモ、今ノ庄屋ノ事ナリ、大庄屋ノ事ニハアラズ、或ハ太平記ニ庄家トモ有リ、是モ庄屋ノ事ナリ、慶長ノ比政所ト云モ、庄屋ノ事ナリト可レ知、今ノ大庄屋ヲ昔ハ公文ト云、今モ山方ノ公文庄屋ト云アリ、是大庄屋ノ格ナリ、近代ハ大庄屋ヲ割元トモ云ゾ○又曰、五人組ノ事、古歌ニ「此里ニイヽスル人ノナキヤラン、フシタツマデニサナヘトラヌハ」ト見エタリ、是士民隣家ヲ組合相友ニ相助ル心ノ御制也、天子ノ御身ニテモ、下々組合事ヲ御存知マシマス事ナリ、又古歌ニ「隣ヨリアシ火ノ煙リモレキツヽ、タカヌ里ニモ煤タテヌベシ」、「モロトモニマ近キホドニ住居シテ、イサ垣ゴシニ物語セン」、カクヤンゴトナキ雲ノ上人モ、隣家ノヨシミヲナス事ヲ知リ玉ヒ、上代ノ詠歌アル事ヲ、今珍シキ事ノヤウニ言事、井底ノ蛙ト云ベシ

○字書ニ、五家爲レ隣、五隣爲レ保、又曰、五家爲レ伍、使ニ之相親相愛一、鄉曰ニ同井一、使ニ之相友相助一、伍謂ニ相參比一也、保謂ニ相保任一、又曰、五鄰爲レ里

評曰、字書トハ何レノ字書ナルヤ、玉篇ニ、「保安也、養也」トアリ、字彙ニ、「保任也、依也、守也、抱也、「又娃トアリ、尉繚子ニ、「五人爲レ伍、伍相保也」トアリ、論語ノ註ニ、「五家爲レ鄰、二十五家爲レ里、五百家爲レ黨、二千五百家爲レ州、萬二千五百家爲レ鄉」トアリ、風俗通ニ、「五家爲レ軌、十軌爲レ里、又以ニ三百六十步一爲ニ一里一」トアリ、「五家爲レ伍、五隣爲レ保」ト云事不レ見、本書ハ作者ノ取リ

チガヘナルベシ、○又曰、「是五家爲レ隣」トアルニテ、五人組ヲ可レ知、近年ノ仕出シニテハナキゾ、ケ様ニアトサキソロハヌ事ヲ書置ハ愚ナリ、如レ此愚ナルモノヲ、近年世上ニテ八九三者ト云フハヤリ詞アリ、其類ナルベシ

○四井爲レ邑、五百家爲レ黨、五黨爲レ郷、千戸爲二一郡一、見二延喜式一

評曰、非ナリ、四書蒙引十一曰、「四井爲レ邑、四邑爲レ丘」、字彙ニ、「四丘爲レ甸、」蒙引ニ「四甸爲レ縣、四縣爲レ都」トアリ、論語ニ、「五百家爲レ黨、萬二千五百家爲レ郷」トアリ、字彙ニ、郡羣也、人所二羣聚一也、天子地方千里、分爲二四縣一、縣有二四郡一」ト云云、戸ハ字彙ニ、「一扇門爲レ戸、又内曰レ戸、外曰レ門」トアリ、又「民居曰レ戸」トモアリ○見二延喜式一ト有事、評曰 誤ナリ、延喜式五十卷ハ、人王六十代醍醐天皇延長五年丁亥十二月忠平・清貫・安則・久永・忠行五人ノ撰スル書ニテ、神祇祭祠踐祚ノ儀式ヲ詳ニ述ナリ、四井ヲ邑トシ、五百家ヲ黨トスル等ノ事ハ、唐ノ制ナリ、予延喜式ヲ見ルニ、本書ノ文不レ見、延喜式ノ四ニ、太神宮封戸ノ所ニ、「大和國十五戸、伊賀國二十戸、志摩國六十六戸、尾張國四十戸、參河國二十戸、遠江國四十戸」トアリ、「千戸爲二一郡一」ト云事ナシ、作者延喜式ヲ見テ書シカ、但シ人ノ咄ヲ聞テ書シヤ、能ク能ク延喜式ヲ見テ、有無ヲ決シ玉ヘ、虚説ヲ書テハ中々人ガ合點セヌ事ゾ、然ルニ仍テ大聖ノ孔夫子モ、「後生可レ畏、焉知二來者之不一レ如レ今也」ト宣タマヘリ○或人問テ曰、此本書此次ニ追加ト號シテ、陋巷ノ非説ヲ書記ス、是ニモ評ヲ加ヘンヤ、予曰、文盲ナル邪説

ヲ書事、評判スルニ不レ足事ナレドモ、愚蒙ノ輩見ヲ信トセン事ヲ畏レ、予ガ鹵莽ヲ不レ愧シテ評ヲ記ス事、長キ故ニ下卷トシ、見ル人永キニ倦ノ勞ヲ鮮セント欲スルト云フ

金銀通用記評判 上終

金銀通用記評判　下

○追　加

評曰、本文書終リ、追テ加ルト云心ニテ、追加ト記スト見エタリ、書狀ナドニ追啓ト書如クニ心得タルニヤ、古人ノ書ヲ見ルニ、本文成就シテ跡ヨリ書ント思フハ、或ハ補遺ト書、或ハ後編ト書、或附錄ト書、或ハ續集ト書、又古人ノ書ヲ後人補フヲバ新增トモアリ、能々古ノ書籍ヲ見テ可レ考知一

○日本ノ武士刀脇指二本指ス事、古ハナキ事ニテ、中古以來ノ事ナリ、古ハ烏帽子直垂ニ、サヤ巻トテ小刀ヲ指シ出仕セシ也、軍陣ノ時、打刀トテ太刀ヲ帶タリ、武家昌ニ成テ、直垂ノ袖ヲシボリ肩衣トナシ、素袍ノ裳ヲ裁テ半袴ニナシ、サヤ巻ヲ脇指ニナシ、上下脇指ニテ出仕スル禮法ト成リ、武士ハ戰場ナラネドモ、打太刀ヲ指添テ、イツトナク常ニ二本指ス事ニナレリ、是公家衰ヘテ武家繁昌ノ風俗也

評曰、武士脇指刀二本指ス事、古ハナキ事ト書ハ愚蒙ナリ、往古ヨリ武士ノ六具ト云ハ、鎧兜着テ九寸五分ヲ指、一尺八寸ノ打刀弓手ノ脇ニ指、三尺五寸ノ太刀ヲ帶、重籐ノ弓ヲ手ニ持、矢オヒ馬ニ

乘リ旗ヲ指、是ヲ六具ト云フ、弓取ト是ヲ云ナリ、太刀ニハ長短定ナシト、古記ノ軍書ニアレドモ、作者ハ夢ニモ見ル事ナシト知レタリ、セメテ淨瑠璃ノ本ニテモ考アルベキ事ナリ、今ハ弓ヲ手ニ不レ持シテ鑓ヲモタセ、軍場ニテハ自身持ナリ、鑓取ト云ヌバカリ、武士タル者ハ鑓ヲ持スルヲ規模トス、鎧ノ六具ト云ハ、甲。冑。頰當。鉾。佩楯。脚當ヲ云、大將ノ六具ト云ハ、鎧•太刀•采幣•鞭•團扇•扇ヲ云、備ノ六具ト云ハ、幕•旗•牀几。楯。貝•太鼓ヲ云フナリ、古ニ腰サヽヌト云フハ、內裏天下ノ時、公家ノ出立ヲ圖繪ニテ見テ如レ此書ト見エタリ、直垂ノ事ハ、應仁ヨリ天正文祿ノ比マデ天下大ニ亂レ、國々我々持ニ成、戰國トナル事、日本開闢以來ノ珍事也、此時ヨリ肩衣ト成、カミシモト云云、是時ノ風儀ト云フ物ナリ、往古ヨリ武家一腰指タルト云ニハアラズ、尤束帶ニテ禮儀ヲ用ル時ハ、昔ハ直垂ノ上ニチヒサ刀ヲ用ヒタリ、今モ正月ノ禮儀ニハ、江戶ニテ古風ノ通ナリ、常ニハ肩衣袴ニテ勤ルナリ、今ノ刀ハ古往ノ太刀ナリ、然レバ殿中ヘハ大名小名トモニ刀ハ不レ用、遠侍ノ外ニ持セ置、脇指バカリニテ殿ニ入ナリ、亦玄關ヘ提テ上ル、又內玄關ニ置ク事モアリ、皆先ノ格ニヨリ、禮式作方有事也、昔軍場ヘ太刀ヲハク、今泰平ノ世ニモ、外ヲ軍場トシテ、內ヲ泰平トスル道理ナリ、今刀ヲ指ストテモ、座敷ノ內ニテ刀ヲ指物ニアラズ、本書ノ通ニテハ、今ノ侍ハ座敷ノ內ニテモ、二腰ヲ用ユルヤウニ聞エタリ、必外ニテバカリ刀ヲ用ル物ゾ、然レバ昔ノ小刀ヲ用ルモ、今上下脇指計リヲ指スモ同然ナリ、替ル事ナシ、外ヲ軍場トシテ太刀ヲ用シ事ハ、前ニ云如ク、應仁ヨリ

文祿マデ大ニ天下亂レ、互ニ用心無ニ油斷一覺悟スル故ニ、自然ト其風ニ成也、亦泰平ヲ大亂ト見、大亂ヲ太平ト見ル事、武門ノタシナミナリ、元弘建武ノ亂ヲ記ス大亂記ヲ、太平記ト外題ニスルニテ了シ玉ヘ、外軍場内泰平ト心得ル故ニ、侍ハ刀ヲ常ニ外ニテ用ルナリ、内ニテハ肩衣袴ノ上ニ、脇指ヲ指禮ヲ勤ルナリ、誠ニ武門ノ志ハ古今差ナキ事ゾ、公家衰ヘテ武家繁昌ノ風俗トハ、何ゾケイハクヲ書記スヤ、愚蒙ノ甚シキ事笑フベシ

理交私ニ曰、一日朝三問テ曰ク、此書ノ評判ニ、所謂元弘建武ノ大亂ヲ記ス書ヲ、太平記ト外題スル事不審ナリト、予曰、太平記評判理盡抄ニ、名義來由詳ナリ、曰、凡此書名ヲ改ル事四度ビ、初ニ曰ニ安危來由記一ト云、心ハ序語ニ約シテ也、一部ノ都合皆安危來由ヲ記シテ、後昆ノイマシメトス、此故ニイフ也、二ツニハ國家治亂記ト號ス、此書ヲサトストキハ、大イナルハ國ノ治亂ヲ思量シ、小シキナルハ家ノ治亂ヲ思量セン、コノ故ニイフナリ、三ツニハ國家太平記ト號ス、心ハ前ニ同ジ、太平ト云事ハ當時ノ祀ナリ、南朝ノ正平ノ作者カクノゴトク稱ス、又太平ノ號ハ延文ノ比改テ號ストモイヘリ、四ツニハ天下太平記ト號ス、應安戊申細川武藏入道常久申ス、此書ノ號南朝ノ治亂等ノ號ヲステ、當代ヲ賀シ奉ランニオイテハ、何ゾ國家トイハンヤ、同ジクハ天下太平トコソアラマホシケレト申サレシヨリ、時ノ學才ノ人等、天下太平記ト號スル也、其比京童ノ曰、天下太平記ト改メシヨリ南朝ノ威ヲ失ヒ、天下ノ朝敵オノヅカラ亡ビテ誠ニ天下太平ニ成シト云フ、播キ

哉天下ノ治亂、何ゾ此書ノ名ノ善惡ニヨランヤ、眞實ハ武藏入道聖賢ノ道ヲ修シ、無欲ニ天下ノ政道ヲ相ハカリ、自ヲ思フ心ナキ故ニ、四海日ニ隨ツテ豐カニナリシ也○又曰、此書ハ去ル建武ノ比主上二條ノ馬場殿ニテ御遊アリ、諸卿武臣堂上堂下ニ有リ、新田義貞ヲメシテ勅諚有テノタマハク、文治ヨリ以來數百餘年、東夷威ヲ重クシテ天下ニ普シ、朝家ノ敗頽日ニ益タリ、故ニ代々ノ天子モカレヲ亡シ、帝德ヲ四海ニ照サント叡慮ヲメグラサレシカ共、事ナラズシテ却テ皇居ヲ遠島ニ遷サレ玉ヒ、又ハ勢微ニシテ默止玉ヒケルニ、朕ガ代ニ至テ逆臣忽ニ滅シテ、王法モトノ如シ、且ハ後代ノタメ、且ハ當時ノ翫ビ種トモ成ベシ、然ラバ義貞ガ鎌倉ヲ攻メシテイタラク、高氏ガ六波羅ヲ滅セシアリサマ記シ置セバヤト仰ラル、時ニ義貞天子ノ御德、普天ノ下ニ照サヾランニオイテハ、臣等何ゾ尺寸ノ謀ヲ以大敵ノ勇ヲクダキ侍ランヤト勅答申サル、日數ヘテ後萬里小路藤房卿、勅ヲ承ツテ北畠ノ玄惠ニ仰ス、玄惠義貞ニ會シテ鎌倉ノ滅亡ヲ記ス、次ニ高氏直義ニ會シテ、彼隱謀幷ニ六波羅ノ滅亡ヲ記ス、今ノ九十ノ兩卷是也、主上叡感有テ、玄惠ヲ三品ノ僧都ニナサル、時ニ天下ノ武臣是ヲ傳ヘ聞テ、元弘ニ有功ノ者ハ我功ノカクレテ此書ニ顯ハレザル事ヲ恨ミ、無功ノ者ハ是ヲウラヤマシトス、コレニヨツテ重ネテ玄惠ニ命ヲ下シテ、先ヅ正成ガ武功ヲ記セシメ玉フ、又玄惠藤房卿ニ會シテ、笠置ノ戰ヒ上ミ御一人ヨリ、竹苑攝籙臣下六位ニ至ルマデ、東夷ノ爲メニ苦シミ玉ヒシ事ヲ記ス、三四五六ノ卷是ナリ、爰ニ大塔ノ尊雲法親王、妙法院法親王等苦シミ玉ヒシ御事、

中ニモ大塔ノ宮南都吉野十津川ニテ、虎口ノ難ヲ御遁レ有シテイタヽク、玄惠ニ命ジテ是ヲ記セシメ玉フ、又赤松ガ戰功同ジキ御作者ナリ、但シ律師則祐會談ス、今ノ七八ノ兩卷ナリ、初二卷ハ山門ノ東賢法印玄惠ニ會談シテ是ヲ記ス、都合十卷、或ハ義貞鎌倉ノ物語ト云ヒ、或ハ高氏六波羅物語トイヒ、或ハ赤松合戰記トイフ、正成一人其號ヲイハズ、題號不定ナレバトテ、玄惠智教教圓等ニ命ジ玉フ、時ニ三僧武士等ニ會シテ、物語ノ前後、幷ニ虛實ヲ相尋テ是ヲ再記ス、元亨釋書ノ師ニ命ジテ序ヲ書セシム、題號前ニ記スルガ如シ、又建武ノ頃、主上山門ニ在セシ時、大友小貳ガ振舞、五大院ノ右衞門ガテイタラク、後代ノアザケリニモトテ、山門ノ護正院ニ命ジテ是ヲ記セラル、正成ガ死セシテイタラク、智仁勇ノ三德ヲ備ヘリト叡感ノ餘リ、善智坊法印ニ仰セテ是ヲ記セラル、十一十六ノ卷ナリ、南岸坊ノ僧正顯信義貞ノ奏狀、尊氏隱謀、直義惡逆ヲ記ス、十三十四ノ卷也、時ニ義貞鷺坂箱根ノ合戰ヲ自記ス、共ニ十四ノ卷也、數年ヲヘテ南帝ノ正平ノ頃、備後三郎高德入道ガ吉野ニ在シニ、新帝ノ勅ニ依テ、京中ノ合戰、高氏ノ敗北ヲ記ス、十五ノ卷ナリ、內多々良濱ノ合戰壽榮是ヲ記ス、又十二ノ卷、直義玄惠ニ命ジテ是ヲ記ス、時ニ直義玄惠ニ語ッテ曰、此書十卷以後ハ悉ク燒失スベキヤト云云、玄惠ノ曰、斷ベカラズ、後代ノ人又燒失ノ咎ヲ記セン、只願ハクハ公ノ政道ノ正シカラン事ヲトイハレシ、直義書ヲ燒ズト云云、而シテ元弘ノ政ノタヾシカラザル事ヲ記ス、十二十七十八廿三ノ卷等是ナリ、時ニ高德入道義清越前ノ合戰義助ノ敗北、幷ニ尊氏

直義ガ一代ノ惡逆ヲ記ス、廿二ノ卷ナリ、然ルヲ後ニ武州入道無念ノ事ニ思ヒテ、一天下ノ內ヲ尋求メテ是ヲ燒失ス、今廿二ノ卷アラハニ讀ズト云云、當代ニ有所ノ廿二ノ卷ハ、廿三ヨリ集メ出シテ廿二ト號スト也、又和州多武峯ニシテ此書ヲ記スル事十二卷也、作者六人、敎圓上人南都ノ人ナリ、義淸法師、高德入道事也、壽榮法師、玄惠ガ弟子ナリ、相州十市ノ人ナリ、北畠顯成、顯家ノ男也、二十六ニシテ出家、法號行意ト號ス、哥道ノ達者也、證意法眼、與福寺ノ住僧也、日野入道蓮秀等也、而シテ十一ノ卷ヨリ以後、虛實ヲ正シ次第ヲツラネテ、虛ヲ除キ實ヲ加フト也、又永德壬戌山名氏淸南方ニ發向シテ歸京ノ時、義用義可等ニ仰セテ此書ヲ記スル事五卷、都合三十九卷ナリ、此後此書ヲ記スル者ナシ、年久クヘテ橫川ノ僧天界坊能鱗是ヲ改テ四十卷トス、又應永ノ比、唐ノ㫖来朝ス、唐ノ官人明尹此書ヲ所望ス、將軍義持諸山ノ僧ニ仰セテ、是ヲ淸書シテ官人ニ渡スト云云

○扇者晚夏ヨリ初リ、秋ノ部ニ入テ禮法ニ用ル事ハナキヲ、今四時用ル禮法トナレリ、ワケテ年始ニハ相互ニ扇子箱ヲ捧テ祝儀トナス、禮ニ扇挾マヌハ無禮也ト謂ルハ、刑罰之場ヘ扇子ハサマス古實ヨリ忌ト成ルベシ、公家ハ笏ヲ用ル、笏ハ忽也ト訓シテ、一事々易レ忘、記レ笏以備ニ忽忘之病一也

評曰、是皆賤キ邪說ヲ信トシテ、根元ノ理ヲ不レ知事、愚癡ノ甚シキ作者、評ニ不レ足事共ナリ、カカル惡說ヲ書置クハ、子孫ヲ迷者ニセンタメカ、人ヲ誑ラカス方便カ末世マデノ罪人ナリ、先公家ノ裝束ト云ハ、夫々ノイマシメノ道理アル事トカヤ、烏帽子ハ頭ヲ氣マヽニ持セマジキトノ掟、直

垂ハ袖長シテ折込、肘ニテ折目ヲハサミ、若シ忘レテ手ヲユルメル時ハ、手ヨリ長ク延ビ、我ト折込ガタキ物ゾ、座頭萬歳ナドノ着スルヒタヽレトハ大ニ違アル事ニテ、段々位ノ高下ニヨル事ナリ、大口ハ足ヲシバル心、扨腰ヨリ跡ヘ引物アリ、下襲トモ裾トモ云、位ニヨリ長短有、高位ニテ君ノ近所ヘヨル人ハ、裾ヲ長クスル一カヤ、扨笏ヲ手ニ持ハ手ヲシバル心、手ニテムダコトヲサセマジキイマシメナリ、兩手ニテ胸ニアテ持トナリ、然ルニ覺書ナドシテ笏ノ用ヲタシ、忽忘ノ病ニ備ルタメナリト賤キ邪説ヲ書記スハ、愚蒙ナリ、公家皆忽忘ノ煩有ニモアラズ、ワケモナキ下賤ノ邪説ナリ、下々ノツキアヒノヤウニ、公ノ御前ニテ可レ成事ト思フカヤ、下々ノ輩腰ニヤタテヲ指シ、鼻紙ナドニ覺書シテ、用ヲタス如クニ思フカ、貴人ノ前ニテハ左様ニハナラヌ物ナリト知ルベシ、上下ノワケモ不レ知、餘リ愚成ル事ドモナリ、小學ニ嫁ナドノ腰ニ笏ヲ付テ、舅姑ノ衣類ニホコロビニテモ有時ハ、針糸ヲ取出シ急ニヌヒテ、舅姑ノ急用ヲ調ル教アリ、如レ此ニ心得テ書シカ、公卿ノ笏ト云ハ、左様ノ事トハ大ニ違フナリ、上々尊貴ノ御事ヲ、賤キ下ノ料簡ニテ物知リダテニ記シ書ハ、可レ笑事ナリ、扨又扇ハ公家ニテシヤクヲ用ヒ、武家ニテハ笏ヲ表シ、扇ヲ用フル事ナリ、扇ニハ五常ノ德ヲ兼ヌル道理ニテ、譯段々有ル事ナリ、然レバ君ヘ目見エノ時腰ニサシ出テ、次ノ間ニ拔テ置、君ヘ目見エヲトゲ、退テ扇ヲ取退出スルナリ、或人此事ヲ問テ曰、如レ此君ノ前ヘ持出ル事恐レナラバ、元ヨリ持ベキ事ナクテモ可也、不レ持トモ苦シカルマジキヤ、答テ曰、扇ハ五常ヲ兼タル器

ナリ、五常ノ表事ナリ、君ニハ五常ヲ專ラ保玉フ、其五常ヲ受守ル、御下ノ五常ヲ保ト云心ニテ、御次ノ間マデ持參シテ置キ、君ノ五常ヲ受ルト禮スル處也、依レ之持參モ禮、又拔テ出ルモ禮ナリト、吉良流ノ諸禮者ニ學ブナリト云云

理交私ニ曰、日本ニテ公卿ノ所持是ヲ笏ト訓ズ、牙ノ笏ハ禮服ノ時用レ之、慶賀ノ笏ハ奏慶之時用レ之ト、禁中方名目鈔ニ見エタリ

扇ニサヘムザト物ヲ書ヌ物ゾ、マシテ笏ニ急用ノ覺書ヲ記ストハ餘リ愚癡ニテ、作者自身ノ耻ヲ記シ置事腹筋痛シ、笑フベシ

○扇ハ晩夏ヨリ初リ、秋ノ部ニ入テ禮法ニ用ル事ハナキヲ、今四時用ル禮法トナレリト有事、評ニ曰、邪說ナリ、扇ノ始リハ事物紀原八曰、「舜廣開ニ視聽一、求ニ賢人一以自輔、作ニ五明扇一、而黃帝內傳、亦有ニ五明扇之起一、以ニ五明一而制也、陸機扇賦曰、昔武王玄覽、造ニ扇於前一、然則今以招レ凉者、周武王所レ作」一ト云ト云云、書言故事扇曰ニ仁風一、又曰、便面云云、又神道ニモ用ル事ナリ、安藝國嚴島明神ノ寶扇ヲ、平ノ宗盛申シ受ル事古記ニ見エタリ、然ルニ本書ニマサ〳〵シク書記ス事、愚者ノ說不レ可レ用、可レ笑事ナッ、前ニモ評スル如ク、公家ノ笏ヲ略シテ、武家ニ扇ヲ用ル事ナリ、己ガ不レ知事ヲムザト書記ス事、世ノ憚リヲモカヘリミズ、誠ニ愚癡ナル作者也、東山殿四家ニ命ジテ、古今武家ノ禮區々ナリ、是ヨリ儀式ヲ改定ムベシト有テ、諸禮ノ式定マル、今小笠原ト世ニ稱スハ、小笠

原吉良山名斯波此四家ヘ命ゼラルヽニヨツテ也、吉良流モ今ニアリ、扇ノ事諸禮ニアリ、夏暑キ時アフグタメト計リ作者ハ思フカ、必貴人ノ御前ニテハ扇ヲ開キツカハヌ物ゾ○又年始ノ祝儀ニ扇ヲ用ル事ハ、扇ニ五常ヲ兼ル徳多クコモリタル故ナリ、第一ハ末廣ト云儀ヲ以用ルト知ベシ、君ノ五常ノ下ニ居テ、君徳ヲアフグト云儀也、總ジテ扇ニハ徳ヲ兼メル詞有リ、笏扇ト云ハ表事物ナリ、是ヲ不レ知シテ己ガ不レ及ニ愚察一、或ハ人ノ邪説ヲ實ト思ヒ記シ置キ、事知リノヤウニ人ニ思ハセント思フハ、慮外者ナリ、能々感味スベシ○禮ニ扇挾ヌハ無禮也ト云ハ、刑罰ノ場ヘ扇子挾ヌ古實ヨリ忌ムト成ベシトアル事、評曰、是亦邪説ナリ、刑罰ノ場ニハ諸禮ハ不レ用、故ニ不レ持トモ不レ苦、然レドモ夏日入用ノ事有レバ、持トモ苦シカラズ、是ヲ以祝儀ニ扇不レ持ヲ忌トハ、片腹痛キ悪説ナリ、近比江戸ニテ刑罰ノ場ヘ扇ヲ持出ル者、幾人モ有シヲ見タリ○公家ハ笏ヲ用ル笏ハ忽也ト訓シテ、事々易レ忘、記レ笏以備ニ忽忘之病一也ト有ル事、評ニ曰、前ニ詳ニ評スル如ク、賤シキ奴婢ノ邪説也、カヽル悪説ヲ書記ス事、腹筋痛シ、或人ノ曰、此説ハ作者ノ愚意ニテモ書クマジ、古記ニ有ル事ナルヤ、予曰、正シキ書籍ニカヤウノ悪説ハナシ、今思フニ下學集ノ下巻ニ、笏ハ手板也、一笏ハ忽也、言事々易レ忘、記レ笏以備ニ忽忘之病一也、日本曰レ尺也トアリ、此説ヲ見テ作者書記ヤ、下學集ハ童蒙ノタハケニセシ書ナレバ、虚誕邪説多シ、總ジテ愚者ハ書籍ヲ見テモ、邪正眞僞ヲ自分ニテ決斷スル事ナラズ、見ル事ゴトヲ信ト思ヒ迷フ者ナリ、此作者モ無智無學ナル故ニ、下學集ヲ見テ信

ト思ヒ書記スト見エタリ、聲外ノ書ニアリトモ、正シキ書ニアラズ、用ルニタラズ、是ヲ以テ孟子モ「盡信レ書、則不レ如レ無レ書」ト教ヘ玉フナリ、又曰、笏ノ事ハ禁中名目鈔ニ出タリ○又曰、扇ノ事近頃從容錄ヲ見ルニ、「鹽官一日喚ニ侍者一、與ニ我過犀牛扇子一來師云、畫方謂ニ扇畫犀牛玩マ月、或云、犀角爲レ扇、或云、以レ犀爲レ柄、皆得レ名爲ニ犀牛扇一也云云、又曰、羽蒲紙竹、綾絹樓犀扇」トアリ、漢ニテ色々ノ物ニテ扇ヲ製スルヲ可レ知、扇ハ竹ニテ製、紙ヲ用ルトバカリ一偏ニ思フベカラズ

理交私ニ曰、金壁故事ヲ見ルニ、蒲扇ノ事アリ、宋ノ徐仲車（名ハ節、號ニ節孝先生一）詩ニ曰、「妾有ニ一疋絹一（此詩爲ニ嬾人作一）以爲ニ身上衣一、自織ニ青溪蒲一、團々手中持（言、織レ絹爲レ衣、織レ蒲爲レ扇、而有ニ自得之意一）朝攜麥隴去、（朝則攜レ扇、泛ニ麥隴一去）暮汲ニ非泉一歸、（暮則、攜レ扇汲ニ取水一歸）無ニ人不レ看レ妾、（嬾女自言、人皆看レ我）不レ使レ見ニ娥眉一、（娥眉也、言常攜レ扇、不レ使ニ人見ニ其眉一也）又扇ヲカハボリトモ云、源氏物語河海ニ云ク、蝙蝠ヲ見テ扇ヲ作リ初ケルナリ、仍テ□ノ扇ノ總名也トアリ、又淸少納言枕草子ノ註ニ、檜扇ハ二十五枚、若年ノ時ハ白糸ニテトヂテ、糸ノアマリヲ藤ノ花ヲオキ物ニシテ、要ノ上ヨリ二三寸持所ヲノコスベシ、束帶ノ時ハ夏モ檜扇ヲ持ナリ、女房ノ檜扇色々アリ、トヂモサマザマナリ、糸ノアマリヲアハビ結ビニシテ、花ヲムスビツケテモ用ユ、カナメハ蝶鳥ナド金ニテウチテ用ユ云云

○羽織者道家之服、仙人羽衣ノ體ヲ眞似シ物也、故ニ其名ヲ道服ト呼ブ、古ハ公儀ヘ着服ノ例ナシ、何ノ時代ヨリカ直垂ノ代ニナリテ、袴羽織着テ出仕スル禮法ト成ル、是又武家繁昌ノ風俗也

評曰、羽織ヲ道家ノ服、仙人ノ羽衣ノ體ヲマネシ物ト一偏ニ書記ス事イブカシ、道服ト呼ト云事猶以邪說ナリ、イヅレノ仙人羽衣ヲ着シタルヤ聞タシ、本名ハ胴服ナリ、子細ハ鎧ノ下ニ、冬ハ綿入ノ小袖ヲ胴バカリニ掛ルヤウニシテ着シ、其上ニ鎧ヲ着ル、是ヲ胴服ト云フゾ、夏ハ膚カタビラト云テ一重衣ナリ、然ル故寒氣ノ節ハ凍死有事多シ、太平記ニモ、北國下向ノ勢凍死ノ事見エタリ、鎧下ニ多クキラレヌ故ナリ　仍テ亦鎧ノ上ニ胴服ヲ用ル、是ヲ陣羽織トモ云、亦ハ具足羽織トモ、胴服トモ云ゾ、羽織ト云ハ、元ト一重ニテ用ルヲ云フ、昔ハ綿ノ入タルヲバ胴服トモ云ゾ　綿ナキハ羽織ト云、今モ公方樣ヨリ御家人ヘ行列羽織ヲ下サルハ、皆單羽織ナリ、綿ヲ入レ用ヒ、都テ羽織ト云名ハ私ノ名ニテ、百年以來云フトカヤ、往昔ノ古記ニハ、胴服ト有ナリ、羽織ト云ハ羽ヲ以織出シ、單ニシテ軍場ニテ合羽ノ如クニ用ヒタルヨリ羽織ト云、紙ニテ制タルハ合羽ト云、織ル故ニ羽オリト云トナリ、鳥ノ羽骸ニ似タル故、羽織ト云トモアリ、然ルニヨッテ單ニシタルヲ羽オリト云ゾ、袷ニイタシ綿入ニシタルハ私ノ事ナリ、扨又羽織ヲ禮ニ用ルト云事ハ、應仁ヨリ文祿ノ頃マデ、天下大ニ亂レ戰國ト成リ、弓ヲ休メ鎧ヲ脫隙ナク、鎧ノ上ニ具足羽織ヲ着シタル儘禮儀ヲ勤ム、或ハ胴ニ腹卷計リ着シ、其上ニ具足羽織ヲ着シ袴ヲ着テ、禮ヲ陣場ニテ勤シナリ、二百年餘天下安キ心モナク、大ニ亂レタル間ニ、イツトナク彼例ニ成リ、羽織袴用ヒ來ルト也、古ハ鎧ノ上ニ直垂ヲ用ヒタリシガ、直垂ヤミテ胴服ト成事ナレバ、今羽オリヲ禮ニ用ル事モ苦シカルマジキトナリ○是

又武家繁昌ノ風俗ナリト云事、評曰、輕薄ニ云フヤ、其理不レ聞、羽織袴ニテ禮ヲ勤ルハ略禮ナリ、或ハ上下ヲ着シ、或ハ烏帽子直垂ヲ着ス事、各其時ニヨリテ格式アル事記錄ニ見エタリ、袴羽織ヲ着スルヲ武家繁昌ノ風俗ト思フハ、可レ笑事ナリ○或人曰ク、仙人ノ羽衣トハ、如何心得タルニヤ、羽衣ハ天人ノ着ル物ト古ヘヨリ言ヒ傳ヘタリ、然レドモ仙人モ羽衣ヲ着ル事モアルニヤ、仙人ト天人ハ圖繪ヲ見ルニ大ニ違ヒナリ、此作者ハ仙人ト知ル人ニテ、折々參會セルト見エタリ、シカラズハ何トシテ仙人羽衣ヲ着シ、其名ヲ道服ト呼ト云事ヲ知ランヤト云フテ、大ニ笑タリ

○月代者古人額髮ヲ剃テ、半月ノ形タルヲ月代ト名付、初冠ノ事ナリ、小兒ハ髮置之時、頭熱蒸牛風ノタメ中剃シテ、三ケ月之形ヲ眞似シ、武家繁昌シテ公家ニ紛ル、事ヲ嫌ヒ、滿月ニ剃落セシヲ、公家又武家風ヲマネテ剃落セシ故ニ、猶更武家人嫌ヒ糸鬢ニ剃落シ、額ヲ角ニナシ、公家ニ背ケルヲ表トナシ、是皆武家繁昌ノ世ノ風俗也、女ノ眉毛ハ容色ノ第一ナレドモ、戰國ノ時女モ武ヲ專ニ立、大切ノ眉毛ヲ取リテ、顏色アラ〳〵シク見ユル嗜ナリケルヲ、今ハ女ノ風俗トナリテ、古代ノ餘風ナシ

評曰、カヤウニ腹筋ノ痛キ邪說ヲ、實ノ如クニ書記シ、子孫ノタメト思フコト、愚蒙ノ甚ダシキ處、評判スルニタラズ、作者故實モ不レ知、猿利根ニテ當テドナシニ書事、狂人ノ物云フガ如シ、然レドモ子孫ノタメニ書置クトアルハ志ノ不便サニ評ヲ加ルナリ、先ヅ公家衆ヲ道中筋ニ居テハ見ル事モアラン、サカヤケヲ剃ルモノト思フカ、武家ニ紛レント思フカ、武家ト付キ合ノナキ物ナレバ

武家ヨリ嫌フ事モ有マジ、公家ノ月代ヲ剃ル事何レノ書ニ見エタルヤ、イツノコロ武家ヨリ嫌フテ月代ビンツキヲ改替ルト、何者カ作者ニ言ヒ聞セタルヤ、是皆作者ノ愚意ニテ書クト見エタリ、可レ笑事ナリ○小兒者髮置ノ時頭熱瘡半風ノタメ、中剃シテ三日月ノ形ヲ眞似シト有ル事、評曰、誤ナリ　醫道ノ事往古神代ヨリ日本ニモ有ア、大己貴ノ命少彦名命醫道ヲ始玉フトイヘドモ、其傳後代ニ不レ傳、其後異國ヨリ醫書多ク日本ニ渡リテ、日本人是ヲ學ビ用ルナリ、然レバ漢土ノ者モヌカリハ有マジキニ、小兒熱シテ瘡虱有、故ニ髮剃テ能事ヲ不レ知、日本人計リカシコクテ、剃ル事ヲ知リタルヤ、是作者ノ猿利根ニテ書記スト見エテ、愚蒙ナル申シ方ナリ、抑日本人髮ヲ剃ル事ハ、人王ヨリ千二百五十年ノ後ノ事ニテ、聖德太子佛道ヲ日本ニ廣メ玉フ時、俗男ノ頭半分剃テ、半俗半出家トナシ玉フ、小兒ハ半月ニ中剃シ、大人ハ滿月ニ表シ丸ク剃、女ハ眉ヲ剃リ、形ヲ定玉フ事古記ニ見エタリ、仍テ月代ト云也、何ゾ風瘡ノタメニ小兒ノ頭ヲ剃ランヤ、然バ又大人ハ大ニ月代ヲ剃ハ何ノタメヤ有ル、年寄ルホド頭冷テ惡シ、亦唐土ニテハ不調法ニテ髮ヲ皆置クカ、又今ノ異國人ハ大淸人ナリ、是ハ皆髮ヲ剃ルナリ、大淸人ノ髮ヲ剃ルハ、何ノ養生ニテ有ヤ聞タシ、是ハ韃靼ノ國風ナリ、是皆國ノ風俗ト云フ物ゾ、自然ト小兒ノ中剃リハ、養生ニ叶ヒタル事ヲ物知リ顏ニ利口ソツニ書テモ、外ノ理ニ比テトリアハヌ事多シ、是ヲ猿利根ト云フゾ、年老テハ頭冷エ、髮ヲハヤシ度ト願者多ケレドモ、自由ニ不レ成ハ國法也、カヤウニ後先ノ揃ハヌ下賤ノ茶呑雜談ヲ書記ス事、手

ヲタヽイテ笑フベシ○又曰、武家繁昌シテ公家ニ紛ルヽ事ヲ嫌ヒ、滿月ニ剃落セシヲ、公家又武家風ヲマネテ剃リ落セシ故ニ、猶更武家人嫌ヒ糸ビンニソリ落シ、額ヲ角ニナシ、公家ニ背キケルヲ表トシ、是皆武家繁昌ノ世ノ風俗也ト書事、評曰、腹筋ノ痛キ事ドモ、作者己ガ耻ヲ顯スナリ、先武家ノ繁昌ト云フハ、賴朝ヨリ武家ノ繁昌ト成ル、然バ賴朝ヨリ先ハ武家月代ハ不レ剃居ルト思フカヤ、但又足利三代義滿ヨリ將軍家ノ威光盛ンニ成ル事ナレバ、義滿ノ時代ヨリ月代剃ルト思ンニヤ、後先ノ理不レ聞、餘リ武家繁昌ノケイハクヲタル（マヽ）ガ過テ聞惡シ、是程マデ作者愚成事ニハ有マジキ事ナリ、如何トナレバ、前ニイフ如ク、公家衆モ髮ヲ剃ル物ト思フカ、百姓モ內裏ノ百姓ハ髮モ額モ生ナガラ有ゾ、予京都ニテ內裏ノ百姓ノ家へ行見ルニ、髮モ額モ生付ノマヽアリシ也、況ヤ公家方ニハ髮ソリ玉フ事ナシ、何ニウロタヘテケ樣ノ僞リヲ書テ、子孫ニ見セントハ思フゾ、繁昌ノ武家ニテ公家ニ紛ルヽ事ヲ嫌フトハ、イヅレノ武士ガ公家ヲ侮嫌フトハ、作者ニ申シ聞セシカ、但作者ノ愚察猿利根ニテ云フカ、武家繁昌ノ事ヲ珍シキ事ニ思ヒケルカ、前ニ屢々書アラハス如ク、武家ノ繁昌ト云ハ、賴朝へ日本總追捕使ヲ賜テヨリ以來也、近年ノ事ニアラズ、將軍家ノ御威光ハ、義滿ヨリ盛ンニナルゾ、珍シキ事ニテナシ○滿月ニソリ落セシヲ、公家又武家風ヲマネテ剃落セシ故ニト云事、餘リ武家繁昌ノヲタルガ申度ト思フテ書シヤ、又公家モ月代ヲ剃ル物ト思フテ、推量ニテ書カモツタイナシ、此作者ハ武家へ申掛ケヲイタス者ト見エタリ、誰カ武家ヨリ公家ヲウトンジ嫌フ者ア

ランヤ、餘リナル愚癡ノ事ドモナリ、作者道中筋ニ居ヨシ、然バ御公家衆ノ御通リヲ拜シタル事モ有ベシ、月代ハ剃タモノゾ、額モ生ノマヽアルゾ、若シイマダ不レ拜バ、重テ氣ヲ付テ可レ拜〇又曰、夫レ人情ハ吾ヨリ上ヲマネタガルナラヒ也、コヽヲ以世々ノ聖賢是ヲイマシメ玉ヘドモ、下ヲマナブ者ハ稀ニシテ、只々上ヲマナブモノ也、武家モ上々程公家ヲ學ビ、昔モ武門ヨリ殿上人ヲ望ミ、公家ト成リ玉フ方近頃マデアリシ事ゾ、武家繁昌ノ風トテ、何シニ公家ヲ嫌ヒウトマンヤ、天文年中ニ京都ノ亂ヲ避ケテ、公卿雲閣周防國山口ノ城主大內義隆ヲ賴ミテ居ラレシニ、義隆幷ニ一家中ノ武士公家風ヲマネテ、義隆ガ武道怠シニヨツテ、家老陶尾張守晴賢謀叛シテ、天文二十年辛亥八月二十九日義隆ヲ責、義隆敗軍シテ長門ニイタリ、九月二日義隆自害ス、此亂ニアフテ公家ノ內、前ノ關白藤原尹房前左大臣藤原公賴被レ害、中納言藤原基賴從二位藤原親世等剃髮シテ逃走ルト、將軍家譜幷ニ後太平記ニ見ニタリ、是山口ニ公家多ク居ラレシニヨツテ、武家公家風ヲマナビ、義隆ノ武道衰ヘシ折カラ、陶全薑謀反シテ國ヲ奪シナリ、カヤウニ武士ト公家モ度々會合スレバ、イツトナク公家風ニナリ、武道ノタルミニナル事、古今ニタメシ多シ、然ルニ作者古記ヲモ不レ見、自分ノ愚意ニテ武士ガ公家ヲ嫌ヒ、公家ガ武士ヲマネルト書事、狂人ノ物言フゴトク片腹痛シ、笑ベキ事ナリ、〇額ヲ角ニナシ、公家ニ背キケルヲ表トナシ、是皆武家繁昌ノ世ノ風俗ナリト書事、評ニ曰、額ヲ角ニスル事、百年以來ノハヤリ物ナリ、此オコリハ黑鬢僮僕ドモヨリ、自然ト拵出シタル

風俗也、上ッ方ノ武士ヨリ仕出シタルニアラズ、特ニ大名方ニナサレタル事ニテモナシ、其頃ハ百姓町人モ額ノ角ヲ大ニ嫌シ事ゾ、予ガ親ハ元和二年辰ニ生レタリ、若キ時ハヤリ出タレドモ、一生額ニ角不レ入、生ナガラニ暮シケルト語ル、何トシテ僮僕ノタグヒヨリ、公家ヲ嫌テ仕出ス事アランヤ、餘リ不穿鑿ナル事ヲ、猿利根ニテ愚癡ノ理ヲ付テ公家ヲ嫌ヒ、武家繁昌ノ風俗ト追從輕薄ヲ書テ、子孫ノタメニセンド自慢スルハ、聞モ中々ケガレナリ、但シ武家ヨリ公家ヲウトミテ形ヲ替ルト、作者ニ云聞セタルカ、左ニモアルマジ、作者ノタワケコト丶聞ユルゾヤ、總ジテ國ノ風俗時ノハヤリ風ト云ハ、イツニテモ有ル物ゾ、夫レニ入リホガニ愚ナル理ヲ付ルハ惡シ、身ノ害ト成事アル物ナリ、耻ヲ知ル者ノセヌ事ゾ、チトタシナミ玉ヘ○女ノ眉毛ハ容色ノ第一ナレドモ、戰國ノ時女モ武ヲ專ニ立、大切ノ眉毛ヲ取リテ、顏色アラ〱シク見ユル嗜ナリケルヲ、今ハ女ノ風俗トナリテ、古代ノ餘風ナシト記ス事、評ニ曰、自己ノ愚ヲ以記ス事ナレバ、總ジテ評スルニ不レ足トイヘドモ、是ヲ見ル人ノ迷ヒ玉ハンカト評ヲ加ルナリ、前ニモ云如ク聖德太子佛法ヲ廣メ玉ットキ、俗男ノ頭ヲ半分剃リテ、半俗半出家ト成シ玉フ、其時女ハ眉毛ヲ取ヲ男ノ元服ニ准ズルトカヤ、然ルニ戰國ノ時女モ武ヲ專ニ立、大切ノ眉毛ヲ取テ顏色ヲアラ〱シク見ユル嗜ナリケルヲ、今ハ女ノ風俗トナリテ、古代ノ餘風ナシトハ、何ヲ以書記シケルゾヤ、古代ノ餘風ヲ能見覺テ云カ、古記ハ何ヲ見テ云フヤ、日本ニテ亂國ノ時ト云ハ、太平記ノ亂、其後應仁ヨリ文祿マデヲ戰國ト云ン、然

バ夫ヨリ以前ハ女ノ眉毛、年寄ルマデ其儘有シヲ見タルカ、又戰國ノ內ニ女ノ合戰ニ出ルニ、必眉毛ヲ取デナラヌニ定リタルカ、古記ニハ今ノ姿ニ不レ替、特ニ圖繪ニモ古風ト違タル事モナシ、併時ノハヤリ風ト云事ハ有モノナリ○又曰、今又尼ノ眉毛不レ取モ有、又後家ナドモ眉毛ヲ不レ取其儘置ハ、ヨソホヒノタメカヤ、アラ〳〵シク見ユルモノナラバ、是等ハ皆可レ取事ナルニ、却テ尼後家ナドノ眉毛ヲ置クハ如何々々○又曰、戰國ノ時眉毛アラバ、男ノ形ニ見エテ、アラ〳〵シク可レ有事ナレバ、ワザトモ眉毛ヲ置テ、男ニ紛レ、アラ〳〵シク見セ度事ナリ、女ノ眉毛ヲ取レバ、アラ〳〵シク見ユルトハ其理不レ聞、異國ノ女モ戰國ニハ眉毛ヲ取ト思フカヤ、可レ笑事ナリ、扨又戰國ヨリ眉毛ヲ取ルトハ、イツノ頃ヨリ眉毛ヲ取ヤ、イツノ頃マデハ眉毛有シヲ見タルヤ、何レノ記錄ニ戰國ノ女眉毛ヲ取ルト云事アルヤ、慥ナル證據ヲ聞タシ、故實ヲ知タルヤウニ書テモ、證據ナクテハ用ガタシ、猿ト云モノハ頭ヲカクストイヘドモ、尻ノ顯ル丶ヲ知ラズ、初ニハ利口ヲ言フテモ、尻ノ間ノアハヌ事ヲイフヲ猿利根ト云ゾ○或人ノ曰、此作者カ丶ル惡說虛誕バカリヲ書記シテ、子孫ノタメニセントハ、如何心得タルニヤ、予曰、人ニハ夫レ〳〵ノ癖アリ、書言故事ヲ見ルニ、晋ノ王濟有二馬癖一、和嶠有二錢癖一、杜預有二左傳癖一、蓋偏レ有レ所レ好、如人病癖不レ痊」ト云云、是ヲ以見レバ、王濟ハ好レ馬、和嶠ハ好レ錢、杜預ハ好二左傳一、是皆癖ナリ、此作者ハ聖賢ノ學ヲスルハ嫌ヒニテ、賤キ奴婢ノ輩片山里ノ嫗ガ茶呑雜談ヲ好テ、如レ此書ト見エタリ、是ガ作者ノ癖也ト云テ大ニ笑タリ

○人ノ名ノ下ニ樣字書事ハ古禮書式ナキ事ニテ、中古ヨリ初ル、東山殿義政將軍ヲ公方樣ト云ヘリ、公方トハ天子ノ稱號、樣ハ式樣ナリ、大體天子ニ等シキト言ルヲ公方樣ト云シ也、然則樣字ハ公方樣ニノミカギルベキコトヲ、世下リ人諂フテ樣ノ字ヲ以尊稱トナシテ、名下ニ書來ル事ニナレリ

評曰、樣ノ字ノ事、古禮書式ナキコトニテ、中古ヨリ始ルト云事愚ナリ、忝モ日本ハ神國ト云事ヲ不ㇾ知ヤ、世上ニテ少シ文字學問シテ、書物ノ端々彼方此方讀習ヒ、モハヤ天地ノ間ハスミタルヤウニ思ヒ、己レガ管ニテ窺レ天、物知リノ如クニ人ニ衒者ヲ青表紙ト云フナリ、彼青表紙ニカラゲラル丶ト云ナリ、抑日本神代ニ文字ナシ、日本紀纂疏曰、「上古無ニ文字一、結ㇾ繩刻ㇾ木且爲ニ之約一」漢字ハ我應神ノ時東漸ト云々、應神天皇十六年ニ、論語千字文始テ日本ニ渡ル、或記ニ、人王七代孝靈天皇十三年ニ、天竺ヨリ文字渡ルト云々是ヨリ段々文字日本ニ渡リ、其後世々ニ異國ヘ渡リ、學問スル人多ク、日本ニ文字廣マル、故ニ天武帝十一年ニ造ル處ノ新字一部四十四卷ハ世ニ不ㇾ行トカヤ、日本ニテ神代ヨリ通ジ來ル詞アリ、是ニ漢字ヲ合セテ通用スル樣ニ致シタル事ナリ、仍テ日本ノ詞文字ニ不ㇾ合モアレドモ、義理ヨミニテ合セタリ、倭學モ知ラデ、世上ニテ云ヒナラハス樣ト云字ノ事ヲスマシダテニ云事、日盲蛇ニオヂズト云譬ノ如シ、カヤウノ事ヲスマシ度バ和學ヲ學べ、漢字ノ事ハ萬ガ一モ知ル事アリトモ、日本ノ事ニ不ㇾ知事多ク可ㇾ有ゾ、然バ樣ト云字ノ事ハスムマジキゾ、此外日本ノ詞ニ不ㇾ知事多カルベシ、○亦曰、漢字ヲ以和國ノ詞ニ合セ通用シタル譯モ不ㇾ知シテ、文字ヲ以日本ノ詞ヲ難ズルハ、腹筋ノ痛

キ事ドモナリ

理交私ニ曰、東花坊ガ新撰大和詞ニ、頃日世ニ傳フ允武ガ助語辭ニ、洛ノ桃溪ノ和訓ナルヨシ、助語ノ大ムネヲ釋スルトテ、元來文字ハ人ノ語意ヲ以テ設タル者ニテ、文字ニ據テ物言フニ非ズ、世人多クハ此言ハ其字ニ據ルト云フ、大ナル謬ナリト云云、文字ニハ合トモ、又不レ合トモ、吾本朝天神七代地神五代、人王ノ始ヨリ日本ニテツカヒ來ルコトバコソ尊ムベケレ、サマトドノト云事、異國ニハナキ事ナレドモ、日本ニテ神代ヨリ上ヲサマト云、中ヲドノト云來ル事久シ、此外ニモ此類多シ、ハルカ過テ漢字日本ニ渡リ、又日本人異國ヘ渡リ、年久ク學問シテ歸國ノ後、唐土ト日本トノ詞ヲ文字ニ合セ書簡ヲ通ズ、然バ中ヨリ上ノ人マデノ詞ハ、大方文字ニ合セ詞ヲ改テヨキナリ、下賤奴婢ノ詞、コトサラ片田舍山方ノ國々ノ下々ノ詞ハ、文字ニ合セザル事今ニ多有ゾ、イヤシムベキニアラズ、神代ヨリ通ジ來ル詞ニ、古風ノ殘リタルヲ尋、又神道ノ祠祭ニ殘ル古事ヲ尋學ブ人アリ、文字不レ合トテ笑フコトナカレ、却テ笑フ者コソ物不レ知ノ愚人ナリ、子細ハ神代ヨリ通ジ來ル詞ヲ笑フハ、神國ヲ笑フニアラズヤ、漢字ヲ少知タリトテ、日本神國ノ詞ヲ嘲ハ、天照太神ヲ笑フニ同ジ、天ニ向テ唾ヲ吐ニアラズヤ、カヽル故實ヲモ不レ知、サマト云字ヲ批判スル事ハ、作者慮外者也、上代ヨリツカヒ來ル通ズル詞ヲ、アラ〳〵是ニ記ス、文字ニ不レ合トテ笑事ナカレ、先神ノタヽリヲシヲリト云、無病ナルヲマメナド云、ナヤムヲジユツナイト云、別離ヲサラバト云、喜ヲウレシイト

云、吝嗇ナルヲシワイト云、酒ヲサヽト云、犬ノ子ヲヱンノコロト云、鷄ノ子ヲヒヨツコト云、穢ヲウルサイト云、又キタナイト云、病惱ヲクサト云、キル物ヲワンボウト云、小兒ヲワランベト云、大人ヲヲトナト云、アテドノナイヲノフウズト云、飯ヲメシト云、貧シキヲフベント云、富ヲブゲント云、詐ヲウソト云、正直過タルヲリチギト云、愚ナルヲマツパウト云、如レ此我國ノ詞數多ケレバ、筆ニ盡シガタシ、文字ニ不レ合トテモ、古ヨリ通ジ來ル詞ナルゾ、作者能々可二考知一

理交私ニ曰、倭語トハ日本ノ人ノ言語ナリ、倭語ニ五種アリ、一ツニハ天地自然ノ倭語、生民以來應神天皇ノ世マデ、文字ナカリシ時ノ吾國ノ人ノ言語ナリ、是眞ノ倭語ナリ、今何レノ言カ其遺ゾトイフコトヲ知ラズ、二ツニハ異國ト往來ヲ通ジテヨリ後ノ倭語、吾國ニアラユル事物、多クハ異國ヨリ傳ヘ來レル者ナレバ、是事是物アリテ、後ニ各其名ヲツケタルナリ、三ツニハ文字アリテヨリ後ノ倭語、中國ノ文字行ハルヽニ及デ、文字ヲ讀ムニツキテ、此方ニ無キ事物ナレドモ、他ノ事物ニ準ジテ倭訓ヲ施セルナリ、羊ヲヒツジト訓ジ、豹ヲナカツカミト訓ジ、象ヲキサト訓ジ、棠棣ヲカラナシト訓ズル類ナリ、四ツニハ華音ヨリ來レル倭語、中華ノ人ノ言語ヲソノマヽニ受ケタル也、火ヲホト訓シ、馬ヲムマト訓ジ、君ヲキミト訓ジ、蟬ヲセミト訓ジ、梅ヲウメト訓ズル類、本ト皆華音ナリ、火ヲヒトイフハ、ホヨリ轉ジタルナリ、五ツニハ三韓ノ語ヨリ來レル倭語、上世ハ三韓ト頻々ニ往來ヲ通ゼシ故ニ、三韓ノ人ノ言語ヲ、ソノマヽニ倭語トナシタルナリ、虎ヲトラト訓ズ

ルハ、高麗ノ語ナリト或人イヘリ、此類猶多カルベシ、以下略ス 又曰、一說ニ倭語ハ王仁ヨリ始マレリト
イフ、尤信ジガタシ、王仁初テ吾國ニ來テ、中華ノ書ヲ授シ時、早ク倭語ニ通ジテ、中華ノ文字ヲ
一々ニ飜譯シテ、倭語トナサンコト容易ナルベカラズ、然レドモ難波津ノ歌ヲ觀レバ、此方ニ久ク
住テ、後ニハ倭語ニ能ク通ゼリト見ユ、然レバ王仁ガ書ヲ授シハ、只彼國ノ讀法ヲ授タルノミニテ、
今ノ如クノ倭語ノ讀ハ、後人ノシワザナルベシト和讀要領上卷ニ見エタリ

中古ヨリ東山殿義政將軍ヲ公方樣ト云リト有事、評ニ曰、義政ノ時代ヲ中古ト云ハ誤ナリ、先人王ヨ
リ當享保八癸卯年マデ凡二千三百八十三年ナリ、人王ヨリ奈良ノ都マデヲ上古トモ、上代トモ可レ云
カ、（私ニ人王四十三代元明天皇ヨリ元正聖武孝謙廢帝稱德光仁マデヲ奈良七代ト云ナリ）迄ヲ中古ト云ベシ、此間五百年餘ナリ、尊氏ヨリ信長大阪ノ
代迄ヲ近代ト可レ云、此間二百六十年餘ナリ、大阪以後ヲ御當代ト云テ可レ然ナリ、上古中古ト云時ハ、
年數代ノ替リ目ヲ三ツニ割テ可レ云事ナリ、昔ト云フ時ハ昔ニ遠近ナシ、昨日ハ今日ノ昔、今日ハ又明
日ノ昔ナレバ。年代ヲ不レ分トモ苦シカラズ、上古中古ト云フ時ハ、年代ヲ積リテ云フベシ、アテド
ナシニ云フヲバ出傍題ト云フゾ、東山殿ヲ公方樣ト云フト有ハ誤ナリ、尊氏ヨリ三代目鹿苑院義滿
ヲ北山殿ト云、此北山殿ノ時ニ御威光强ク、世擧テ公方樣ト云ヒ始ルト、古記ニ有ヲ不レ知シテ、東
山殿ト書クハ大ナル誤ナリ○樣ハ式樣ナリ、大體天子ニ等シキト云ヘルヲ、公方樣ト云シ也、然則
樣字ハ公方樣ニノミ限ルベキト有事、評ニ曰、愚蒙ノ甚シキ事、笑草ノ種ヲ蒔ト云フモノナルゾ、

本書ノ理ニテ云フ時ハ、異國ニテモ天子ニ樣ノ字ヲ可レ書事ナリ、文字ハ漢土ヨリ渡リタレバ、漢土ニテモ樣ノ字ヲ可レ用事ナルニ、樣ノ字ヲ不レ用ニテ悟リ見ヨ、但シ異國ニテモ樣ノ字ヲ書クト思フカ、日本ニハ文字ノ不レ渡先ヨリ詞アツテ、サマト云傳ヘ通シ來ル詞ナリト可レ知、後ニ日本ノ詞ニ漢字ヲ合スルトキ、サマト云所ヘハ此字宜シカルベシトテ、樣ノ字ヲ合セタリ、ドノト云所ヘハ殿ノ字ヨシトテ合セタリ、文字ヨリ詞ヲ改ルハ誤ナリ、詞有テ後ニ文字ヲ合スト知ベシ、書バサマヨフト云詞ヘ、行吟ノ二字ヲ合セ、マスラヲト云詞ヘ、武夫ノ二字ヲ合セ、イネカヘルト云詞ヘ、反側ノ二字ヲ合スルガ如シ、和學ヲ少シ聞給ヘ、左ナクテ猿利根バカリニテハ、ムザトスムマジキ事ナルゾ、甲斐ノ信玄織田信長ノ書簡皆殿書ナリ、當御代御大名衆ノ書簡皆樣書ナリ、小笠原諸禮ノ口傳ニ云ク、百有餘年以來天下泰平ニ成、故ニ慇懃ニ成リタリ、世ノ風俗也トトモニ、書簡ヲ慇懃ニシタヽムベシ、是世上ノ禮也ト云々、人ノ愼ミ守ルベキハ禮也、學問モナキ眼ヨリ是ヲ諂ト見テ書記スハ、大ナル誤笑フベシ○世下リ人諂テ、樣ノ字ヲ以テ尊稱トナシテ、名ノ下ニ書來ル事ニナレリト云事、評曰、扨モ／＼愚蒙ナル書ナリ、己ガ愚ニシテ不レ知事ハ、人ニ尋問テナリトモ可レ知事ナリ、然ルニ物知リ顏ヲシテ、世下リ人諂テ、樣ノ字ヲ以テ尊稱トナシテ、名ノ下ニ書來ルト訕事、アテドナシト云物ゾ、作者ノ眼ヨリハ何レノ世ニ比テ何尺何寸何分下ルト見究メタルヤ、其證據ヲ聞タシ、予古記ヲ見ルニ、人王ヨリ以來代々ノ聖代アリトイヘドモ、今ノ御代ホド天下能和シ治リ、

武家ハ鎧ヲ蟲ニ喰セ、一生著シタル事モナク、弓ハ袋ニ納テ、ホコリヲ拂フバカリニテ弦ヲ忘レ、太刀刀ハ切レルヤラン、不レ切ヤラン、タメシテモ不レ見、商人ハ京江戸大阪ノ替セ金晝夜ヲ限ラズ、金銀ヲ三度飛脚ニ送リ、百姓ハ亂國ナレバ耕作モ不レ成、濫妨ノタメニ妻子ヲ失ヒ野ニ伏ス事、百年以前マデハ有シニ、今ハ腹鼓ヲ拍テ饒ニ臥シ、野ニモ山ニモ歌舞ノ聲囂ク、奴婢僮僕ハ牛馬ノ鞍ツボヲ叩、漁人ハ舟端ヲ叩テ謠、是ゾ野老ノ家風、撃壤ノ謳歌、舜德堯仁淳風自化ス、村歌社飲得ニ其所一哉ト云シニ異ナラズ、百年餘干戈ヲ忘シ世ト云フハタメシ希ナリ、誠ニ刑鞭朽テ螢去ルトモ云フベキ世ナルゾ、人ノ心モ昔ト違ヒ柔和ニナリ、慈愛有テ禮ヲ專ト守ル世ト成リ、互ニ慇懃ニナルハ目出度事ニテ有ニ、却テ世下リ人諂ト見ルハ、何レノ世ニ比テ下ルトハイフゾ、蒙昧愚癡ニシテ當所ナシノ事ドモナリ、今ヨリ上ナル世ガ聞タイゾ○又曰、予左氏傳ヲ見ルニ、成公十八年ノ傳ニ曰「周子有レ兄、而無惠不レ能レ辨ニ菽麥一」ト云云、是ヲ見レバ此作者モ周子ニ同ジカラン、菽ト麥トヲ不レ辨ホドノ愚者ナリト見エタリ

理交私ニ曰、左傳成公十八年ノ傳ニ、「周子有レ兄、而無惠不レ能レ辨ニ菽麥一、故不レ可レ立、」註ニ曰、菽ハ大豆也、豆麥殊レ形易レ別、故以爲ニ癡者之候不惠蓋世所レ謂白癡」ゾト云々

○女ノ額ニ櫛ヲ指ス事ハ、稻田姫湯津ノ爪櫛ニ初リ、蛇鬼ノ恐ルヽタメニ用シ事ナルニ、今者鼈甲玳瑁等ノ櫛ニ蒔繪シテ指ス、風流ノ飾ニ用ル物其初ヲ失フ事此類多キ而已

評曰、女ノ額ニ櫛ヲ指事ハ、稲田姫湯津ノ瓜櫛ニ始ルトハ、扨モ〳〵愚蒙ナリ、何モ不レ知シテ實説ノ如クニ記シ、子孫迄ニ恥ヲ與ヘン事、片腹痛シ、抑神道ノ道理モ不レ知シテ、湯津ノ爪櫛ヲ女ノ指櫛ト思ヒ、稲田姫ノ事ヲ出スハ可レ笑事ナリ、神道ノ傳授ノ事ニ、三種ノ神器、御賀玉ノ木、湯津ノ爪櫛、菊理姫此外多ク神秘有、皆々大切ノ傳授ノ事ナリ、必湯津ノ爪櫛ヲ櫛ノ事ト思フベカラズ、湯津ノ爪櫛ヲ女ノサシグシノ初トハ、餘リ大キナル誤、評スルニタラズ、予昔異人ニ逢テ神秘ヲ聞事有シニ、湯津ノ爪櫛ト云ハ、全ク櫛ノ事ニアラズ、神秘ノ大事ナリト云々、疑アラバ神道ノ秘事ヲ傳授可レ有、女ノ指櫛ノ事ハ、異國ニモ昔ヨリ用タル事ナリ、左傳僖公二十二年ノ傳ニ、秦ノ懐嬴曰、寡君之使三婢子侍執二巾櫛一云々

理交私ニ曰、僖公二十二年ノ傳ノ註ニ、婢子婦人之卑稱、又註ニ、「嬴氏秦所レ妻子圉懐嬴也」トアリ又小學ニモ、唐ノ文宗ノ臣王涯ガ娘、七十萬錢ノ釵ヲ買コトヲ父ニ望シカドモ、王涯不レ肯シテ七十萬錢ハ吾一月ノ俸金ナリ、何ゾ錢ヲ惜マン、一ツノ釵七十萬ナルハ此レ妖物ナリ、必禍アラント云シガ、果シテ馮球ト云者此釵ヲ買テ、己ガ女房ニサセケルガ、程ナク難ニ遭テ死セリト見エタリ、又事物紀原ニ曰、「燧人始爲レ髻女媧之女、以二荊梭及竹一爲レ笄以貫レ髪、至レ堯以レ銅爲レ之、且横貫焉、舜雜以二象牙玳瑁一、此釵之始也、又赫胥氏造レ梳、以レ木爲レ之、二十四齒、取二疏通之義一、説文、櫛梳枇總名也、釋名ニ曰、梳言二其齒疏一也、枇言二其細相比一也、禮ニ男女不レ同二巾櫛一、是批因レ梳制也、

今ハ作レ笓ト云々、總ジテ古ヨリ女ノ具ニ翡翠ノ釵ト云事、古記ニ多ク見エタリ、能々可ニ考知一〇今者鼈甲玳瑁等ノ櫛ニ蒔繪シテ指シ、風流之飾ニ用ル物、其初ヲ失事此類多キ而已ト書事、評ニ曰、世ヲ謗ヨリ作者自己ヲ愼ムベシ、己レハ其始モ不レ知シテ、珍シサウニ書記シ、神秘モ不レ知、湯津ノ爪櫛ヲ女ノ指櫛ノ始ト思フ事、菽麥ヲ不レ辨愚人ナリ、前ニモ評スル如ク、櫛ハ赫胥ニ始ル、赫胥氏ハ伏羲帝ヨリ九代目ナリ、象牙玳瑁ヲ用ル事ハ舜帝ヨリ始ル、如レ此上古ヨリ異國ニテモ象牙玳瑁ヲ用來ルゾ、又唐ノ楊貴妃黃金ノ釵ヲ方士ニ渡サレシ事、白樂天ノ長恨歌ニ見エタルゾ、近頃ヨリ始ルト思フベカラズ、從容錄ヲ見ルニ、一白玉碾做ニ象牙梳一、黃金打作ニ鏤石筋一ト云事見エタリ、作者不レ知事ヲ物知リ顏ニ書ンヨリ、小學事物紀原長恨歌ナドヲヨク〳〵習ヒ見、己レガ誤リヲ知リ玉ヘ

〇日本之女カウガイカラワニ髮結事、古ヘ無キ事ニテ、皆以下ゲ髮結ナリシニ、寬永癸未歲、朝鮮人來聘之時、供奉ノ官人小童カウガイカラワニ髮結シヨリ以來、女ノ髮ニ色々ノ結樣初マレリ

評曰、寬永癸未ハ寬永二十年也、此歲六月朝鮮人來朝ノ事玉露叢ニ見エタリ、寬永二十年マデ人王ヨリ二千三百三年ニナル、本書ノ理ニテ云トキハ、扨モ日本人ハ無調法ノ事ドモ哉、人王ヨリ二千三百三年ノ間、女ノ髮結ヤウヲ知ラズシテ暮シケル事、愚成ル事ナリ、作者モ考テ見ラレヨ、下ゲ髮結ニテハ、下女輩農業ノ障リニ成リ、米麥ナドヲツキ申スニモ、サゾ邪魔ニ可レ成事ナレバ、此段ハ作者料簡シテ子孫ヘ申聞セ然ルベシ、傴カ、アノ雜談ヲ其儘ニ書記シ、子孫ニ見セントハ、餘リ

ニ愚昧ニテ評判ニタラズ、然レドモ是ヲ能故實ト思ヒ、自慢スルガ顏惡ケレバ、評判シテ聞セ申ベシ、抑日本ノ女カウガイカラワニ髮結事、古ヘナキ事ニテ、皆以下ゲ髮結ナリト書ハ何事ゾヤ、餘リ愚癡ナル事ナリ、女ノ下ゲ髮ニ結ハヅトハ、何ヲ心得テ書タルヤ、下髮ニ結コトハ位ニテ、常ノ人ハムザト不レ成事ナリ、今世上ニテ嫁ノ夜バカリ白衣下髮ニ結事アリ、常ニハ必不レ結モノ也、若シ古記ニ有事ナラバ、夫レハ上人ニテ位有ル女中ノ事ト思フベシ、禁裏ノ下女モノハ皆々カウガイカラワヨリ外ニハ結事不レ成方式ナリトカヤ、禁裡ニテハ下女ノ髮ヲシマダニ結事モ不レ成、是古ヘヨリノ方也トゾ、下ゲ髮ニ結事ハ位有ル上人ノ結玉フ事ナリ、斯有ニ法式ヲモ知ラズシテ、物知リ顏ニ書記スハ、却テ作者ノ愧ヲ顯ハス井ノ內ノ蛙ナルベシ○寬永癸未ノ歲、朝鮮人供奉ノ官人小童ヲ見テ、女ノ髮ノ結ヤウ色々始ルトハ、扨モ扨モ愚蒙ナル事ナリ、扨ハ寬永二十年ヨリ先ノ日本人ハ、髮ノ結樣モ知ラズ、ミダシ髮ニテ居タルト思フカヤ、寬永二十年前ノ昔ノ女ノ髮結ヤウモ、色々時ノ風有シ事、老女ノ語リシ事ヲ聞、亦女ノ圖繪ヲ見テモ知ルベシ、古ヨリ櫛釵ノ有ルニテモ考知ル事ナリ、特ニ朝鮮人ノ小童ハ、髮ヲ組テ下ゲ髮ニスルモノナリ、日本ノ女ノ髮ノ結ヤウトハ大キニ變タル物也、疑アラバ朝鮮人ノ通ルヲ見物スベシ、何事ニ嫗カヽアノ茶呑雜談ヲ書テ人ヲ誑ゾヤ○又曰、寬永二十年癸未ハ享保八年卯迄八十一年ニナル、予父方ノ祖母亦母方ノ祖母、又予母ノ壯年ノ比ナリ、予伯母ドモノ言シ事ヲ聞處有リ、寬永二十年ヨリ前ニ髮ノ結ヤウ色々アリ、遠キ事ニモ

アラズ、其外慶長元和ノ髪ノ結樣品々聞シ事有リ、他ニモ老人ハ此段ヲ知ル人モ可レ有事ナリ

○又曰、寛永二十年前ハ云ニ不レ及、前代ヨリカウガイカラワニ結ビタルト、昔ノハヤリ風ノ噺ヲ憶ニ聞事アリシ、昔予四代先ノ祖母、當國ノ掛川ノ御城主山内對馬守殿御息女方ヘ、女ノシツケ方諸禮ノ御指南ノタメ客人分ニ召出サレ、土佐ノ國マデ參リシナリ、其諸禮ノ書一卷有レ之、是ヲ見レバ女ノ髪ノ結樣色々有ル事ナリ、仍テ此作者虛誕ノ說ヲ書記ス事ヲ知也○或人ノ曰、此作者如何ナレバ斯陋巷ノ非說ヲ書アラハスヤ、予曰、此人聞取法問ノ無本學ナリ、五雜組ヲ見ルニ、今人爲レ文、旁採二謳諺一、而不レ知レ引レ經、是爲二無本之學一矣云々、此作者ハ爲レ文事ハ成マジケレドモ、先此タグヒト知ベシ

○日本衣服裁縫ノ初ハ、應神天皇ノ代ヨリ始リ、元正天皇養老三年ニ男女ノワカチアリ、少年腋明ケ、男子ハ十七歲ノ春丸袖ニナリ、女ハ十九歲ノ秋丸袖ニナル掟ナリシモ、今ハ知ル人モナシ

評ニ曰、誤ナリ、本書ノ理ニテ云時ハ、日本人ハ衣服ヲ裁縫ナシニ著シタルト思フカ、神代ヨリ人王ニ成テモ、應神天皇マデ九百三十年餘、長布ニテ身ヲ卷居ケルヤ、神功皇后三韓攻ノ時、サゾ〱不自由ニテ、上下迷惑イタサレタルラント。思ヒヤラレテ笑止ナリ、又神代ヨリ是マデ裸ニテ居ト思フヤ、古記ヲ見ルニ、應神天皇十四年癸卯、百濟ヨリ貢ニ裁縫女工トアレドモ、是ハ上ツ方宮位ノ服ヲ縫、今ノオモノ師ト云フ心ナリ、右裁縫ノ女工ノ事ヲ聞テ、上下ノ衣服此時ヨリ裁縫ト思フ事、

是作者ノ文盲ナル所、膠レ柱鼓レ瑟ト云フ譬ノゴトシ、又日本紀ニ據バ、應神天皇三十三年春二月、阿智使主都賀使主ヲ呉ニ遣シ縫工女ヲ求シム、二使者高麗ニ渡リ、呉ニイタラントスルニ道路ヲシラズ、道ヲ知ル者ヲ高麗ニ乞、高麗ノ王スナハチ久禮波・久禮志二人ヲ添ヘテ郷導トス、コレニヨッテ呉ニ通ル事ヲ得タリ、是吾朝ヨリ呉ニ通ズルノ始ナリ、呉王工女兄媛弟媛呉織穴織四人ヲアタフ、今呉服ト云フオコリト見エタリ、日本ニハ神代ヨリ衣服ヲ裁縫ヒ着ルト思フベシ、異國ニテ衣服ノ始ハ、周易ノ繋辭傳ニ曰、「黄帝堯舜、垂二衣裳一而天下治」ト云々、事物紀元ニ曰、「上古衣レ毛、後代以レ麻易レ之、先知ニ爲レ上以制レ衣、後知ニ爲レ下以制レ裳」ト云々、白虎通ニ曰ク、「衣者隱也、裳者鄣也、所三以隱レ形自鄣閉一也」ト見エタリ、考知ベシ○元正天皇養老三年ニ、男女ノワカチアリト云事、評ニ曰、此時マデ人王ヨリ千三百七十九年ノ間、男女ノワカチナクテハ有マジ、若男女ノワカチナクバ、タドリ／＼男女ヲ探知ル事ニテ、サゾ不自由ナル事ニテ可レ有、今思フニ「養老三年已未、定二婦女衣服様一」ト古記ニ見エタリ、是ハ禁裏女官ノ衣服、位ノ高下ニヨッテ品ヲ定ムル事ナリ、是ヲ作者愚蒙ナル故ニ、男女ノ衣服ノワカチト思ヒ書ト見エタリ、又男女ヲワカツトモ聞エテ慥ナラズト書、文體無調法ニテ文不レ通、笑フベキ事ナリ○少年脇明ケ、男子ハ十七歳ノ春丸袖ニナル掟ナリシモ、今ハ知人モナシト云事、評ニ曰、此掟何レノ御代ニ定メ玉フヤ、元正天皇ノ御時ノ事ノヤウニモ聞エ、タシカナラズ、是ハ虚說ヲ作者愚意ニテ拵ヘテ書ト見エタリ、仔細ハ日本ハ大方異國ノ法ニ准ズル

事ナリ、禮記ノ內則ヲ視ルニ、「男子ハ二十而冠、始學レ禮、三十而有レ室、始理ニ男事一、女子十有五年而笄、二十而嫁、有レ故二十三年而嫁」ト見タエリ、小學內篇巻ノ一十一丁ニモ出タリ是ニ准ジ男ヲ跡ニ女ヲ先ニ、袖止メ可レ然、又內經ノ上古天眞論ニ曰、「女子ハ七歲腎氣盛ニ、齒更リ髮長シ、二七而天癸至リ、任脉通大冲脉盛ニ、月事以レ時下、故有レ子、丈夫八歲腎氣實、髮長齒更、二八而腎氣盛、天氣至精氣溢、寫陰陽和、故能有レ子」ト云々、是女ハ陰ナレバ少陽ノ七ノ數ヲ用、男ハ陽ナレバ小陰ノ八ノ數ヲ用、陰陽老少ノ數互ニ相用テ、生々化々ノ妙用ヲナス、天地自然ノ理ナリ、大極圖說ニ曰、「陰根レ陽陽根レ陰」ト云々、作者如レ此此理アル事ヲ不レ知シテ、本書ニ男十七ノ春丸袖ニナリ、女十九ノ秋丸袖ニナル掟ナリト書事可レ笑、縱何レノ書ニ有トモ、儒道醫道ノ敎ニ不レ合事ナレバ、儒者醫者ハ決シテ用ユマジキ邪說ナリ○或人ノ曰、七ヲ少陽ノ數トシ、八ヲ少陰ノ數トスル事、如何ナル故ゾ、予答テ曰、入學圖說ヲ考ルニ、生數ノ陽數一三五ヲ合セテ九トナル、是ヲ老陽トス、生數ノ陰數二四ヲ合テ六トナル、是ヲ老陰トス、二四ハ陽中ノ陰ナリ、又一三四ヲ合テ八トナル、陽多ク陰少シ、是ヲ少陰トス、一二四ヲ合テ七トナル、陰多ク陽少シ、是ヲ少陽トス、五ツノ成數七九ハ陰中ノ陽ナリ、陽ハ左ニ居テ陰ヲ兼、故ニ一ヨリ七ニ至テ少陽トナシ、九ニ至テ爲ニ老陽一ト、陽ハ饒、故ニ左ヨリ進テ九ニ極ル、陰ハ右ニ居テ陽ヲ兼ル事ヲ不レ得、故ニ十ヨリ八ニ至テ少陰トナシ、六ニ至テ爲ニ老陰一、陰ハ乏故ニ右ヨリ退テ六ニ窮マルト見エタリ、又曰、河圖中宮ノ數天五地十、合テ十五ノ內ニテ、九

ヲ老陽トナシ、餘リノ六ヲ老陰トナス、又十五ノ內ニテ七ヲ少陽トナシ、餘リノ八ヲ少陰トナス、陰陽ノ數六九ヲ老トスルハ、天ヲ三ツニス、三三ノ九ナリ、地ヲ兩ニス、三二ニシテ六也、故ニ蓍ヲ揲ニ三變ノ後餘リ三奇ナルトキハ、三三ニシテ九ナリ、餘リ三偶ナルトキハ、三二ニシテ六ナリ、三ハ三才ノ道ヲ備フ、故ニ三三ニシテ九、三二ニシテ六ナリト知ルベシ、其數ノ變往トシテ不レ合事ナシ、周易ノ繫辭傳ニ、子曰、天一地二、天三地四、天五地六、天七地八、天九地十、天數五、地數五、五位相得、而各有レ合、天數二十有五、地數三十、凡天地之數、五十有五、所下以成二變化一而行中鬼神上也、云々、是ノ一三五七九ハ天ノ數陽ナリ、二四六八十ハ地ノ數陰ナリ、天地ノ積數合五十五ハ河圖ノ數ナリ、天數二十五ニ（私曰、一三五七九トオキ、合テ二十五ニナル）二四六八ノ地數（私曰、二四六八トオキ、合テ二十トナル）ヲ加、合四十五ハ洛書ノ數ナリ、地ニ配當スルトキハ、北ハ天一地六ノ水、南ハ地二天七ノ火、東ハ天三地八ノ木、西ハ地四天九ノ金、中ハ天五地十ノ土ナリ、八卦ヲ以云フトキハ、一ヲ乾トシ、二ヲ兌トシ、三ヲ離トシ、四ヲ震トシ、五ヲ巽トシ、六ヲ坎トシ、七ヲ艮トシ、八ヲ坤トス、啓蒙ニ、朱子ノ曰、一箇天、參レ之而爲レ三、一箇地、兩レ之而爲レ二、三三爲レ九、三二爲レ六、兩二其三一、一二其二一、而爲レ八、兩二其二一、一二其三一爲レ七、又七八九六ノ數所二由起一也ト見エタリ、考知ベシ

理交私ニ曰、河圖洛書ノ事ハ前ニ詳ニ記スガ如シ、天ノ數一三五七九ハ、奇ニシテ陽ノ數ナリ、是ヲ奇數ト云、地ノ數二四六八十ハ、偶ニシテ陰ノ數ナリ、是ヲ偶數ト云〇四象之說尙友軒傳ニ曰、

太陽一⚌、少陰二⚍、少陽三⚎、太陽四⚏、右ヲ四象ト云、易ノ蓍ヲ揲ル、其餘ル所五本四本ヲ奇ト云、八本九本ヲ偶ト云

五本九本ハ陽數ナリ、四本八本ハ偶數ナリ、然ルヲ四ヲ奇トシ、九ヲ偶トスルハ何ゾヤ、答曰、蓍ハ四本ヅヽカゾエレバ、四ヲ一トスル心ナリ、八ヲ二トスル心ナリ、五ハ初メニ小指ニ掛ル、一本ヲ除テ四本ナリ、一本ヲ除テ八本ナリ、四ヲ奇トシ、八ヲ偶トス

奇數爲レ爻之說、易ノ蓍ヲ揲ルニ、偶數二ツ、奇數一ツナレバ少陽トス、其畫ヲ爲レ一ト、奇數二ツ、偶數一ツナレド少陰トス、其畫ヲ爲レ--ト、三奇ナレバ老陽トス、（太陽ト云モ同）其畫爲レ□ト、三偶ナレバ老陰トス、（太陰ト云モ同）其畫ヲ爲レ×ト、老陽變ジテ--、少陰變シテ一少陽トナル、少陽少陰ハ變爻ナシ、陽ハ進ム、一ヨリ進テ十ニ至ル、陰ハ退ク、十ヨリ逆ニ算テ一ニ至ル、此外口傳有リ、略レ之

或人ノ曰、日本ノ禁裏ノ衣冠ハ、何レノ御代ニ定マルカ、予曰、舊記ヲ見ルニ、人王四代ノ帝懿德天皇ノ御宇ニ、三冠一服ヲ制シ玉フ、三冠ト云ハ、天冠地冠人冠ナリ、一服トハ七布ニシテ、中ヲ三布、衫ヲ四布半身トス、上衣ナリ、龍ヲ畫、第九代ノ帝開化天皇ノ御宇ニ、冠服ヲ制シ玉フ、其冠又三等アリ、第一上等ノ冠ヲ典ト云、第二中等ノ冠ヲ傅ト云、第三下等ノ冠ヲ正ト云、其後代々ニ服ヲ制シ玉フ事アリ、第四十二代ノ帝文武天皇ノ御宇ニ、冠服ヲ制シ玉フ、其冠又三等アリ、第一ノ冠ヲ鳥頭ト云、今ノ烏帽子是ナリ、第二ノ冠ヲ冕腰ト云、第三ノ冠ヲ蟾項ト云、是ヲ加ヘテ九冠

ナリ、是ヲ或ハ左右トシ、或ハ緒ヲ加ヘテ、何レモ二ツニ分ル、故ニ冠ノ品十八樣トナル、或ハ冠ヲ許可シ、或ハ服ヲアタヘテ恩惠トスルナリ、人ニ向フ時冠服衣裳ヲ見テ、互ニ位ヲ知テ、互ニ無禮媚禮ノ失ナキ事ヲ以要トスル方式也ト見エタリ

○五月五日ニ、都鄙ノ童子菖蒲刀ヲ祝、紙旗ヲ立テ甲鎧長刀ヲ戶外ニ飾ル事ハ、昔光仁帝ノ天應元年ニ異國ノ賊船襲來ス、第三太子早良親王ヲ以大將軍トナシ、退治有ベシト宣旨アリケレバ、親王則山城國藤ノ森ノ神ニ祈誓アリテ、五月五日ニ出陣シ玉フ、神感シルシアリテ、我ニ大風吹來リ、大□□ヲヒルガヘシ、異賊一戰ニモ不レ及悉ク亡、其時親王出立玉フ軍勢ノサマヲマナビテ、戶外ニ兵具ヲ飾ル例トナレリ、異國襲來之賊退治ノタメ、出陣ノ體相ナレバ、日本國中男子ノ輩勇進出陣致スベシトノ祭ナリ、今以藤ノ森ノ祭リニ甲冑ヲ帶セシハ、此故事也

評曰、此說ハ貝原好古ガ編シ日本歲時記ヲ見テ書ト見エタリ、歲時記ニハ、天皇第二ノ御子早良親王ト記セリ、然レドモ此說誤ナリ、井澤長秀ガ曰、天應元年蒙古來ル事、正史實錄ニカツテ見エズ、是文永弘安年中（文永ハ八十九代龜山院ノ年號、弘安ハ九十代後宇多院ノ年號ナリ）蒙古襲來ノ事ヲ誤リ傳フノミ、又藤ノ森ノ社ハ舍人親王ヲ祀、早良ノ太子ヲ相殿トス、又曰、端午ノ菖蒲冑菖蒲傍當社ノ祭禮ニ起ト云事非ナリ、續日本紀ニ聖武天皇天平十九年五月五日、天皇南殿ニ出御、騎射走馬ヲ見玉フ、此日太上天皇詔シテ曰ク、昔五日ノ節常ニ菖蒲ヲ用ヒテ縵トス、此コロスデニコレヲトヾム、今ヨリシテ後菖蒲傍リニアラザル

者ハ、宮中ヘ入事ナカレトアレバ、天應年中ヨリ前ニコレラノ事有ト見エタリ、花鳥餘情ニモ、五月五日ノ節、帝アヤメカヅラヲカケ玉ヒ、武德殿ニ行幸アツテ、六府騎射ノ事アリ、五日ハ五位以上ノ人ノ奉レル馬ニノル、六日ハ寮ノ御馬ニノツテ競馬ノ事アリ、本朝端午ニ、紙ヲ以冑及人形ヲ作リ、丹青ヲ施シ門戶ニカクルハ、太平御覽ニ、引荊楚歲時記曰、「採レ艾以爲レ人、懸ニ門戶上一」書言故事ニ、引ニ歲時雜記一曰、「端午採レ艾、結爲レ人懸ニ門戶上一以避ニ毒氣一」トアルニモトヅケルモノナリト云、是等ノ說ヲ考知ベシト云々○藤ノ森ノ社ハ、延喜式ヲ見ルニ、山城國紀伊郡眞幡寸ノ神社トアリ又神社考ニ曰、山城國藤ノ杜社者、舍人親王之廟也、勅諡ニ崇道盡敬天皇一、是乃天武天皇之子、淡路廢帝之父也云々○蒙古來ル事ハ、人王八十九代龜山院文永九年壬申、蒙古來ルト云々、「同十一年甲戌、蒙古到ニ對馬一」トアリ、九十代後宇多院弘安四年辛巳五月廿一日、蒙古來ル、船四千艘、二十四萬人、同年七月朔日、大風吹ニ破賊船一ト見エタリ

理交私ニ曰、大元國ヨリ日本ヲセムル事、太平記卷ノ三十九卷ニ委ク出タリ

五月五日ノ事、五雜俎曰、「古人歲時之事、行ニ於今一者獨端午、爲ニ多競渡一也、作レ綜也、繫ニ五色糸一也、飮ニ菖蒲一也、懸レ艾也、作ニ艾虎一也、佩レ符也、浴ニ蘭湯一也、鬪レ草也、采レ藥也」云云、書言故事曰、京師人以ニ五月一日一爲ニ端一一、二日端二、三日端三、四日端四、五日端五、又曰、屈原五月五日汨羅

ニテ死セシニヨリテ、後人舟檝ヲ以救レ之、今ニ至テ競渡ハ其遺風ナリ、又都ノ人天師ヲ畫テウル、又土ニテ天師ヲ作リ、（歳時記ニ後漢ノ張陵ヲ天師ト稱ス）艾ヲ鬚トナシ、蒜ヲ以テ拳トナシ門上ニオク、又艾ヲ採結ンデ人ノ形ニ作リ、門戶ノ上ニカクレバ避ニ毒氣一、又艾ヲ以虎ノ形ヲ作ルト見エタリ、五雜俎曰、月ノ五日ヲバ皆端午ト云ベシ、古人午五ノ二字通ジ用シナリ、端ハ始ナリ、端午ハ猶レ言ニ初五一耳ト見エタリ、菖蒲ノ古歌、「萬世ニカハラヌモノハ五月雨ノ、シヅクニカホルアヤメナリケリ」「ケフトイヘバアヤメハカリゾフキソフル、軒生フルヨモギフノ宿」「サラヌダニ草ノ庵ト成ル宿ニ、ケフハアヤメヲフキソフル哉」風土記ニ、五月五日ヲ天中ノ節トス、五雜俎ニ、五月五日ニ生ル、子、唐ヨリ以前ニハ忌レ之、今ハシカラズト見エタリ

○政常ノ小刀世ニ名高キ事ハ、太閤秀吉朝鮮征伐ノ時、日本ノ武士敵ノ首捕ニ不レ及、馘ヲ以テ後日ノ證據ニナスベシトノ定ニ依テ、諸士敵ノ耳ヲ割ニ、外ノ小刀ニテハ存分ニ截ザリシ、政常ノ小刀ニテハ思フマヽ割シコト、諸人見聞セシ所、故ニ世人稱美ス、後ニ入道シテ政常入道ト云、永正祐定ノ刀モ此時ヨリ稱美セシナリ

評曰、朝鮮征伐之事ハ、文祿元年壬辰ヨリ始リ、慶長三年戊戌迄七ケ年ノ間也、朝鮮征伐記ヲ見ルニ、日本人朝鮮ヨリ歸テ後、朝鮮ノ馘劓ヲ車ニ載、大阪伏見洛中ヲ渡シ諸人ニ見セ、東山大佛殿ノ前ニ塚ヲツキ納メ入、僧ヲ供養シ弔ヒ玉フ、日本末代マデノ威光赫々タレバ、鼻塚ト名ヅケ（今世人耳塚ト云、塚ノ前ニ）

屋チ耳塚町ト云兒童モ其德ヲ賞セリ、朝鮮人來朝ノ時ハ、國ノタメニ死セシ者ナリトテ、コレヲ祭リケルトゾキコエシト云、政常ノ小刀ニテ耳ヲキリシヤ、其證據ヲ知ラズ、朝鮮ニテ人ノ耳能クキレタルニテ、其名高シト云事ハ、政常モヨロコブマジ、是ハ下賤ノ說ナリ、政常ハ第一鐵ノキタヒ比類ナキ上手ナリ、名人細工ノ所コソ、知人ゾ知ルト云譬ノ如シ、耳ノキルヽヲ以云バ、伊勢川崎ノデバホウテフモ切レ物ナリ、是ヲモ上人ノ器物トシテ賞翫アランヤ、此作者カヽル賤キ說バカリヲ用ルハ、可レ笑事也○又曰、人ノ業ニハ心得アルベキ事ナリ、古ヨリ譬ケル如ク、楯戈ノ細工人鎧ト矢ノ根ノ細工人、又手ノコヾエル時ノ藥ワツガ布ヲサラス、小事ニ用ル時ハ其益ナキガ如シトイヘドモ、黃金ニカヘテ寒氣ノ時ノ軍ニ用タル時ハ、大ニ人ノ助ニナリ、其益廣大ナリ、政常モ小刀ニテ名ノ高キ程太刀刀ニテ名人ノ名ヲトラバ、末代マデ其名高ク、正宗ニモオトルマジキモノヲ、ケ樣ノ名人其名小ナル事惜キ事ナリ

○右者古老之物語ヲ聞傳ヘ、子孫之輩ヘ爲レ知書記者也、享保七寅歲九月日

評曰、子孫ヘ知セン事ハ、聖賢君子ノ教ヲ書テ、身ヲ脩メ家ヲ齊ル道ヲ記シ、儉約ヲ守リ、慈愛有テ不レ驕誡ヲ殘シ置ハ、誠ニ子孫ノ爲ニモ成ベシ、カヽル賤キ奴婢ノ雜談、陋巷ノ非說ヲ書テ、子孫ニ見セントハ、腹筋ノ痛キ事ドモナリ、却テ子孫ノ讐ト成ベシ、子孫ニハ禮義ヲ敎ヘ、書ヲ讀シムルコソ、誠ノ道成ベシ、白樂天ノ勸學ノ文ニモ、「有レ田不レ耕、倉廩虛、有レ書不レ敎、子孫愚」ト見エ

タリ、孔夫子ハ伯魚ニ詩禮ノ學ヲ勸メ給ヒ、周南召南ヲ學ズンバ、牆ニ面シテ立テルガ如シト宜ヘリ

理交私ニ曰、論語陽貨篇曰、「子謂ニ伯魚一曰、女爲ニ周南召南一矣乎、人而不レ爲ニ周南一、其猶ニ正墻面而立一也與、朱子爲猶レ學也、周南召南、詩首篇名、所レ言脩身齊家之事、正墻面而立、言卽ニ其至近之地一、而一物無レ所レ見、一歩不レ可レ行云云

今子孫ニ敎ルヲ庭訓ト云事モ、此事ニヨルトカヤ、又烈女傳ヲ見ルニ、孟子ノ母其舍墓ニ近シ、孟子少シ時遊ビ戲レニモ、人ヲ葬ルマネヲセラレシカバ、孟母コレヲ見テ、吾子ヲ置ク所ニ惡シト思ハレ、舍ヲ去テ市ノ傍ニ引越テ住居ス、孟子又商人ノ眞似ヲシテ物ヲ賣リ、街事ヲシテ戲レアソブ、孟母又此所モ吾子ヲ置ク所ニアラズト思ハレケレバ、外ヘ徙テ學官ノ傍ニ家ヲ建テ住所ス、孟子ノ嬉遊ビニモ、禮ヲナシ人ヲ敬ヒ、先祖ノ祭リヲナス事ヲセラレシカバ、孟母ノ曰ク、マコトニ吾子ヲ置ク所ニ善シト、遂ニ此所ニ住所ヲ定ム、孟子長ニ及テ六藝ヲ學ビ、卒ニ大儒ノ名ヲ得テ、賢人ト成リ玉フモ、偏ニ母ノ敎ノ能キ故ナリ

理交私曰、孟母隣リヲウツス事、蒙求ニモ見エタリ、曰、烈女傳、「鄒孟軻其舍近レ墓、孟子少好レ遊、爲ニ墓間之事一、孟母曰此非ニ吾所ニ以居ニ處子一也、乃去舍ニ市傍一、其嬉戲乃賈人衒賣之事、又曰、此非ニ吾所ニ以居ニ處子一也、復徙ニ舍學官之旁一、其嬉戲乃設ニ俎豆一揖讓進退、孟母曰、眞可ニ以居ニ吾子一矣、遂居、

及ニ孟子既學而歸一、孟母問ニ學所一レ至、孟子曰、自若也、孟母以レ刀斷ニ其織一曰、子之廢レ學、若ニ吾斷ニ斯織一也、孟子懼、旦夕勤學不レ息、師ニ事子思一、遂成ニ名儒一、君子謂、孟母知下爲ニ人母一之道上」云云、又隣ヲウツス事小學卷之四ノ二丁ニモ見エタリ、其文大ニ同ジクシテ少シク異ナリ、詳ニ、「坐而賣曰レ賈、行而賣曰レ衒、徙選也、俎豆禮器、揖讓進退禮容也（俎豆ハ祭祀ノ器）○又曰、記故事卷ノ二曰、孟軻字子輿、三歲喪ニ父激公宣一、母仉氏有ニ賢德一、軻長、既學而歸、母問曰、學何所レ至矣、軻曰、自若也、母以レ刀斷レ織、軻惧問ニ其故一、母曰、子廢レ學、若ニ吾斷ニ斯織一也、軻乃旦夕勤レ學不レ息、受ニ業子思一、遂成ニ大賢一、游ニ齊梁諸國一、與ニ萬章公孫丑之徒一、作ニ孟子七篇一」ト見エタリ○又同書ニコレニ似タル事アリ、筆ヲ勞シテ左ニ記ス、後漢樂羊子（魏人）遠尋レ師、學一年來歸、妻問ニ其故一、弟子曰、久行懷思、無ニ他異一也、（言ニ思レ家之久、無ニ他故一也）妻乃引レ刀、趨レ機而言曰、此織生レ自ニ蠶絲一、成ニ於機杼一、一絲而累以至ニ於寸一、累レ寸不レ已、遂成ニ丈疋一、夫子積レ學（夫子、夫也）當日就ニ懿德一（懿、美也）若中道而歸、何異下吾斷ニ斯織一、而損中失成功上乎、羊子感ニ其言一、復還終レ業、七年不レ返（感之妻去言而復從師也）

又吾朝ノ楠正成ハ死ヲ決シテ兵庫ニ征トキ、櫻井ノ宿ニテ正行ニ誨テ曰、汝幼年ノ際ハ和田恩地矢尾等ヲ父ト思ヒ事ベシ、毎事母ニ謀事ナカレ、又學問ニ懈ベカラズ、已ニ十五ニ至ラバ、専ラ義理ヲ聞ベシ、字ヲ識語ヲ記スヲ要トスル事ナカレ、只父意ヲ□ニ內ニ精熟セシムベシト云云、櫻井ノ宿ニテ一卷ノ書ヲ與フ是ヲ世ニ櫻井ノ卷ト云フ、又兵庫ヨリ恩地ヲ歸シケル時、一卷ノ書ヲ正行ニ

讓ル、是ヲ兵庫ノ記ト云、皆聖賢ノ道ヲ守リ、忠義ヲ專ニスベキ事ヲ書テ、軍法ノ秘傳ヲ記セリ、揚子法言ニ、「學以治レ之、思以精レ之、朋友以磨レ之、名譽以崇レ之、不レ倦以終レ之、可レ謂好レ學」ト見エタリ、後世子孫ニ敎ルハ、正成ヲ以手本トスベシ、抑正成ハ其形瘦テ骨細ク色黑シ、其丈ケ五尺ニ不レ足シテ、言語不レ猛、然レドモ其德至テ高ケレバ、威ヲ敵軍ニ振ヒ、譽ヲ古今ニ傳フ、勇智仁義ノ器用アツテ、諸人ノ上ニ將トシ、天子ヲ佐テ功ヲ成ス、人ヲ執ニ形チヲ以ス可カラズト、古人ノ一句尤ナリト云云○或人ノ曰ク、此作者ハ聖賢ノ語ヲ一句ニテモ記シ、子孫ニ知ラセントハ不レ思、下賤ノ邪說雜談バカリヲ書記ス事、文盲ナル事ナリ、誠ニ金ハ火ヲ以試ミ、人ハ詞ヲ以其器量ヲ知ルト云フ金言思ヒ當リタリ、此書ニテ作者ノ愚蒙ハカリシラレタリト一笑ス

理交私ニ曰、楠正成子息正行ニ櫻井ノ宿ニテ遺言ノ事、太平記評判卷ノ十六ニ出タリ、文長シトイヘドモ殊ニスグレテアハレナル事ドモナレバ、左ニ記シテ童蒙ノ眠リヲ覺サセントス、傳ニ曰、正成京ヲ立シ時マデハ、兵凡六千餘騎ナリ、河內ヘ人ヲ下シテ子息ノ正行十一歲ニ成リヌルヲ、櫻井ノ宿ニテ出相給ヘ、申ベキ事有リト謂遣シケレバ、千劒破ニ殘シ置キタル郞從其八百餘騎供シテ來レリ、楠櫻井ノ宿ニテ正行ニ對面シテ、何ヨリモムツマシゲニ傍近ク呼寄、ビンノカミヲナデ擧テ申ケルハ、今汝ヲ呼ビ寄シ事ハ、某最後ノ對面ノ爲也、味方軍勢ノ軍仕タル有樣、如何トシテモ朝敵ヲ難レ亡、又君ノ仰モ謀ヲ回シ敵ヲ亡シ、味方ヲ進メ太平ヲ可レ被レ致ニ非、無二ノ忠臣ニ大敵ニ相向テ

合戰仕レトノ宣旨ゾカシ、此度バカリノ仰侍ラバ、兎モ角モ有リナマシ、向後トテモ不レ被レ賴御行ヒ共多ケレバ、太平ヲ被レ致事難レ叶、正成今度討死シテ候ハゞ、天下ハ尊氏ガ代ト成ンズルゾ、然リト云ドモ一旦爲二家立一、爲レ助二身命一、父ガ忠烈ヲ捨テ、降人ニ出ル事有ベカラズ、爲レ其一族若黨餘多付置侍レバ、彼等ヲ召具シテ、敵寄セ來ラバ、金剛山ノ城ニ籠リテ戰フベシ、凡取領ノホシキト云モ、家ノ榮ヲ好ムモ、人ニ人ト被レ呼爲ニ候ゾ、苟モ降參不義ノ行跡有リナバ、榮エテ人ニ指ヲサヽレナンズルゾ、領主ニ成リタリ共何ニカセン、無道ノ富貴ハ恥タリ、相構テ相カマヘテ君ニ奉レ對、後メダキ分野ユメ／＼不レ可レ有、是汝ガ孝行タルベシ、是一ツ、幼キ弟共ヲモ不便ニシテ、水魚ノ思ヒヲナスベシ、是二ツ、家子郎從共ヲ扶助スル事如二正成一ニセヨ、我ハ富テ郎從ニ辛目ヲ見スル事不レ可レ有、郎從ハ我レヲ賴ミ、我郎從ヲ賴ミテ、君ノ御大事ニモ相フ物ゾカシ、是三ツ、汝ガ長生ナランマデハ、諸事和田殿恩地殿矢尾殿ヲ以テ父ト思ヒ、毎事母ニ誅ズル事ナカレ、女性ハ愚カナル者ゾカシ、是四ツ、又學文ノ事怠事ナカレ、十五ニ成リナバ物ノ義理ヲ聞ケ、穴勝ニ文字知リ諸語ヲ覺レト不レ可レ思、文ノ義理ヲ可レ知、是五ツ、國ヲ政ルノ道數十ケ條、法禮ノ事自筆ニ書置キ給ヌ卷物一卷箱ニ入テ正行ニ渡ス、和田恩地其外ノ郎從數百人、新シキ事ノ出來タル樣ニ色ヲ失ヒ、物モ不レ謂顏ヲモモチアゲズ、ウツムニ成リテ歎居タリ、正行モ父ガ謂置シ事共肝ニメイジケル上、卷物ゾトテ渡スヲ見テ、聲ヲ發シテハツトサケビケリ、父モ郎從共モヤウ／＼ニスカシ諫ヌ、

正行申ケルハ、父ニ離レ參セテ河内ヘハカヘルマジ、是非トモ軍ノ御供仕候ト申ケレバ、正成大ニ諫メテ云ク、良汝ヲ留メ置ク事ハ不便也ト許ニハ非ズ、君ノ御爲ナルゾ、此程ノ事聞入ズンバ最愚カ也、君ノ御用ニモ難レ立、後ニハ降參不義ノ心ヲヤ可レ持ナンド、或ハイカリ或ハ和シテ申ケレバ正行幼心ニモ是ヲ聞入ケルカ、去ラバ仰ニ隨ントゾ申ケル、父大ニ喜ビ、祖父正晴ヨリ持來タル刀也、我レ今マデ身ヲハナサデ持シゾ、我レヲ戀敷ト思ハン時ハ、是見給ヘト遣シヌ、又恩地左近太郎和田和泉守湯淺孫六矢尼ノ別當呼寄テ、和人達ハ是ヨリ正行ヲ召シ具シテ、千劍破ヘ被レ歸候ヘ、某ガ手ノ軍勢モ大勢ハ無益タルベシトテ、馬ヤ人ヲ勝テ五百餘騎ヲ召シ具ス、凡手ノ郎從三千八百餘人ノ内、五百人ハ今度召具スベシ、其外ハ皆正行ニ可レ隨、和田殿恩地殿能々聞給ヘ、正成討死ノ後ハ、必尊氏ノ代ト成リナン、然ラバ彼兄弟ヨリ樣々ノ謀ヲ以テ、當家ノ事味方ニ屬セヨト可レ宣、國ヲ給ハリナン、家ヲ富センナント思ヒテ、朝敵ト成リ給フナ、尊氏兄弟トテモ古ヘ如ニ賴朝ニ天下ヲ政ルノ器ハナキ人ナリ、天下暫シ靜マルト云共、長ク靜ル事ハ不レ可レ有、君ヲバ失ヒ奉ルマデノ事ハヨモ有ルマジケレバ、如何ニモシテ謀ヲ回シ、時至リヌト見バ君ヲ御代ニ付ケ參セ給ヘ、事不レ叶ニ於テハ、君ト當家ト共ニ可レ亡、正成數代國民ト成テ、相州ガ下知ニ隨ヒキ、然ルニ今朝家ノ臣ト成リ、一門守護ノ國四ケ國、其外數ケ所ノ領ヲ給リシ事、皆君ノ御恩ニ非ズヤ、カヽル大恩ヲ忘レテ、無道極惡ノ尊氏ニ屬セン事、大ニ可レ禁事ナリ、不レ久世ノ中ニ家ヲ不義ニ富シテハ、何ニカハセンナレバ、

義ニ一命ト家トヲ替ヘテ、名ヲ後代ニ殘ンニハ不レ如、相構々々此旨忘レ給事不レ可レ有ト申タリケレバ、和田和泉守申ス、恐レ有ル申ヤウニテ侍レ共、四ケ國ノ勢夜ヲ日ニ繼デ馳參ラバ、明日明後日ノ程ハ是ヘ可レ參ニテ候、然ラバ御勢ハ一萬五六千二萬程ハ侍ルベキナレバ、勢ノ不足ハ侍ルマジ、海陸ノ敵ヲ防ニハ、兵庫ハ地ノ形狀惡敷侍ルベキナレバ、少シ引退カセ給ヒテ、伊丹尼ケ崎ノ邊ニテ御合戰侍ラバ、味方勝軍トコソ存候ヘ、又此軍難儀ニ思召候物ナラバ、病フト號シテ御出陣ヲ被レ止、殿ハ千劒破ヘ引籠ラセ玉ヘ、正遠御名代トシテ罷向ヒ、義貞ニ威ヲ加ヘ隨分謀ヲ以テ戰ヒ候ベシ、不レ叶ニ於テハ河内ヘ引歸ンニ、何ノ事カ可レ侍、然ラバ新田殿ハ山門ヘ行幸ノ供奉ニテ侍リナン、殿ハ謀ヲ以朝敵追罰如レ意仕給ヘ、五十日共尊氏ニ足ヲ都ニハタメサセ間敷物ヲト申ス、恩地此由ヲ聞イテ正遠ノ御ハカラヒコソ最由々敷、實ニ名將今死ヲカル〳〵敷ク仕給ンハ、忠モ少ク侍ンカ、今度尊氏ヲ防ガセ玉フ方便ハ如何程モ多シ、正遠ノ如レ被レ仰ニ候軍勢二萬ハ候ベシ、然ラバ陸ヨリ向ハン敵ヲバ、義貞ヲ受ケ手ト定テ、舟ヨリ上リ候尊氏ヲバ、殿請ケ手タルベシ、去年ヨリ御用意ノ大船三艘、乍レ恐今度上京ノ舟數千艘共、是ニ越タル大船ハ可レ有共存候ハズ、其上紀州泉州攝州ノ舟ヲソロヘテ、野伏共ノ中ニ船軍ニナレタル兵ヲノセテ、某能リ向フベシ、舟ヲバ尼ケ崎難波ノ浦ニソロヘ、殿ハ西ノ宮兵庫ノ間ニ御陣ヲ被レ召、謀ヲ以戰ヒ給ンニ、何條事ノ侍ルベキト存候、但シ尊氏上京五日延引アラバ可レ調ト也、楠尊氏ガ上京五日延引セサセンハ安キ謀アリ、朝家ヲ謂ヘ

ン二、望ミ請ニ依テ奏聞ヲ經ント使ヲ遣サバ、尊氏如何樣ニモ申請ル旨可レ有、使、往返ノ五日十日ノ過ンハ最安カルベシト也、和田恩地最ニ候、兎ニモ角ニモ御謀ヲ回サレレ事コソ、家ノ爲君ノ御爲、國ノ爲ニ候ベシト也、正成申ケルハ、今度ノ朝敵ノ事ハ、善々討死ヲ遁ンン謀有ナン、又勝ナン謀モ可レ有候、和田殿恩地殿ノ如ニ宜所一侍リテ宜シカリナン、君ノ御行ヒヲ見ルニ、叡智ノ淺キ事多ケレバ、今尊氏亡タリ共、又義貞天下ヲ奪ナン、尊氏ニモ御コリナク、早々見給へ、新田二十六國ノ官領ヲ被レ下、尊氏亡ビ代靜リテ後召擧ラレンニハ、新田恨ヲ不レ含ヤ、召シハナサレザランニ於テハ、頼朝ガ惡行ヲ取テ義貞ニ當ル物ナルベシ、又某ニモ九國ノ官領ヲ被レ下トナリ、此兩家九國中國ヲ官領セバ、今度軍忠アリシ諸軍勢ニハ、何ヲ以テ忠賞被レ行ヤ、是一ツ、然バ彌諸國ノ士ハ朝ノ御政ヲ恨テ、新田ニ今ノ如尊氏諸國ノ士思ヒ付ナバ、官軍利ヲ得ル事不レ可レ有、是二ツ、此程ノ行跡ヲ見ルニ、新田トテモ忠臣ニ非ズ、至極見スカシ侍ルニ、何トシテモ今ノ君ノ御政ニテハ、天下ハ武家ノ有ト可レ成、又新田天下ヲ奪ヒナバ、如ニ頼朝一世ヲバ政スル男ナリ、公家へ取リ王ハン事ハ難レ成、是三ツ、尊氏新田ヲ亡シナバ、直義コソ少シ智ノ有ルヤウナレ共、尊氏愚也、又執事師直ガ行跡ヲ見ルニ、侈高フシテ世ノアザケリヲ不レ知、彼等ガ愚ナル分野ニテハ、天下ハ一日モ靜ル事有ルマジケレバ、公家ヨリ被レ亡ニ便リ有リ、正成生テ有ンニハ尊氏ハ可レ亡、新田ガ手ニ死ン事無レ疑、家共ニ亡ナン、王法モ亡給ヒナンズルゾ、然ラバ正成死スベキ時ハ今也、身ヲ山林ニ隱シテモ、ナガラ

ヘントモ存ズレドモ、一日モ君ヲ奉レ背事、和朝ノ例トシテ古今ニ善トセズ、又此後トテモ奉レ諫タレバトテ御承引有ベシトモ不レ思也、正行ヲ留置キ、恩地殿和田殿、其外宗徒ノ人々ヲ留申事ハ、此時ノ用也、正成討死セバ、今年ノ内ニ天下ハ尊氏奪ヒナン、新田可レ亡、尊氏兄弟大様ナレバ、子孫ヲ尋根ヲ枯ス謀ヲバヨモ不レ成、侈リテウカ〳〵トシテゾ居ンズラン、君ヲモ奉レ失程ノ事ハ有マジ、然バ國々新田ノ子孫殘ツテ、軍ハ暫シモ斷間敷ゾ、宍賢、其内ニ方便ニ及ビ給フナ、味方必負ナンズルゾ、宮方亡ビ果テナバ、尊氏ガ一家ノ人々侈リヲ極テ、同志軍出來ンズルゾ、其時謀ヲ回ラシ給ヘ、二十年ヲバ不レ可レ過、悲哉叡智ノ淺キガ故ニ、此世如レ是ニナレリ、賴ミ給フ義貞先以テ朝敵、何トモ難レ納世ノ中ゾカシ、此事宍賢、人ニ語リ給フナ、年月ヲ送ルニ付ケテゾ、正成左謂シ物ヲト思ヒ給フラメト、淚ヲ流シテ申ケリ、和田モ恩地モ別ニ可レ申樣ナケレバ淚ヲ流シテケリ、以下文意長キ故略ス正成今ハ思ヒ殘ス事ナシトテ打立ケルガ、正行ガ手ヲ取テ最名殘惜ゲニテ相構テ郎從共ヲ能ク扶助セヨ、此事肝要也、郎從ニウトマレナバ、弓矢ヲ取ル事難レ叶ト申ケルガ、弟共ノサゾシタヒナンズルゾトテ出ヌ、正行ハ淚ニ關テ顏ヲモモタゲズ、ハルカニ道マデ出タレ共、淚ヲ耳ゾ拭ヒケル、メノトニ安間七郎御門出ノ忌々敷ク候ト諫メケレ共、用ル事ナシ、和田モ恩地モ是ヲ最後ノ別レト思ヒケレバ、忍ノ淚セキアヘズ、此間略ス正行ハ七千六百餘騎ヲシタガヘテ河內ヘ歸レバ、正成ハ五百餘騎ニテ兵庫ヘゾ向ヒケル、舍弟ノ正氏モ妻子ノ方ヘ文細々ト書遣シ、二千餘騎ガ內ヨリ二百餘騎引

勝テゾ向ヒケル、正成兄弟郎從トモ志貴右衛門生地高安安間平野丹下等ヲ先トシテ都合七百餘騎、皆義ヲ金石ニ類シテ、骸ヲ戰場ニサラサントテ向ヒケル、最アハレ也○僕三年以前己年西國行脚セシ時、攝州矢田部郡生田ノ森ヨリ直クニ前ヘ出テ、本道ヲ行キ神戸町二ツ谷町ヲ過テ、往還ヨリ右ノ方一町バカリ隔テ楠公ノ石碑アリ、三間四方程ノ堂ノ内ニ大ナル石塔ミユル、昏黒時ノ事ナレバ堂ノ内ノサマサダカニ見エズ、堂ノ前左右ニ石燈籠二ツアリ、尼ケ崎ノ御城主御寄進也、次ニ湊川ヲ越ルニ、此所楠公最期合戰ノ場ナリト聞バ、ソヾロニ涙ヲ催ス、扨楠公ノ石碑ニ對シテ忠ニ凝カタマルニヤ、鐵線花ト云フ一章ヲ云ヒ捨テ通リシガ、此ゴロ或書ヲ見侍リシニ、石碑ノ圖幷碑文等クハシクアリ、其書ニ曰ク、元祿四年水戸貴君追慮ノ積在テ、正成ノ古墳ヲ再興シテ碑石ヲ立給フ、

其圖ニ曰ク

一　塔石高サ三尺八寸、横一尺六寸、腹一尺五寸　和泉石

一　龜形幅二尺、長サ三尺、其幅同ジ面、臺輪石高六寸

各京白川石

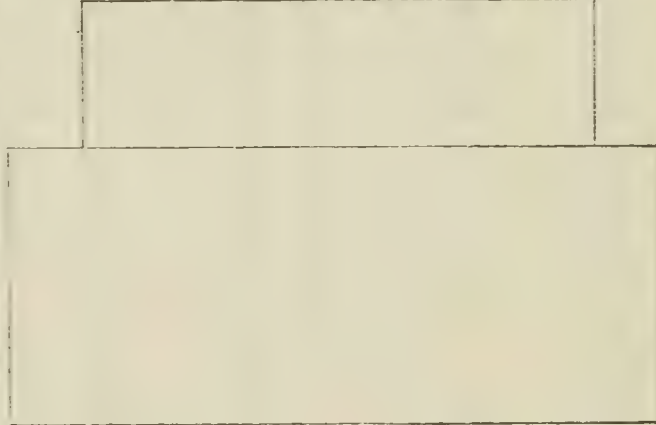
一　中段石高サ二尺、幅五尺四寸四方　當國御影石

一　土臺石ハ四石ヲ以摺合、高五尺、方一丈四面　同所石

碑石裏之文云

楠正成靈

源光國造立

忠孝著二乎天下一、日月麗二乎天一、天地無二日月一、則晦蒙否塞、人心廢二忠孝一、則亂賊相尋、乾坤反覆、吾聞、楠公諱正成者、忠勇節烈、國士無雙、蒐二其行事一、不レ可二概見一、大抵公之用レ兵、審二强弱之勢一於二幾先一、決二成敗之機一於二呼吸一、知レ人善任、體レ士推レ誠、是以謀無レ不レ中、而戰無レ不レ克、誓二心天地一、金石不レ渝、不三爲レ利回一、不三爲レ害怵一、故能興二復王室一、還二於舊都一、諺云、前門拒レ狼、後門進レ虎、廟謨不レ臧、元兇接レ踵、構二殺國儲一、傾二移鍾簴一、功垂レ成而震レ主、策雖レ善而弗レ庸、自レ古未レ有下元帥妬レ前、庸臣專斷、而大將能立二功於外一者上、卒レ之以レ身、許レ國之死靡レ佗、觀三其臨レ終訓レ子、從容就レ義、託レ孤寄レ命、言不レ及レ私、自レ非二精忠貫一レ日、能如レ是整暇乎、父子兄弟世篤、忠貞節孝、萃二於一門一、盛矣、至レ今王公大人、以及二里巷之士一、交口而誦二說之一不レ衰、其必有二大過レ人者一、惜乎、載レ筆者無レ所二考信一、不レ能レ發二揚其盛美大德一耳

有故河攝泉三州守贈正三位近衛中將楠公贊明徵士舜水朱之瑜字

魯璵之所ニ撰勒ノ、代ニ碑文ニ以垂ニ不朽ニ

補選　是ハ前々評ノ内ニ漏タルヲ評ヲ加フ、次第ニカマハズ記ス、見ル人是ヲ赦スベシ

○牝鷄鳴ㇾ晨ト云事、書言故事ノ二卷婦人類ニ見エタリ、妻夫ノ權ヲ奪ヲ云、書經ノ牝誓ノ編ノ語ナリ

理交私ニ曰、牝誓ノ編ハ牧誓ノ篇ノ書誤リナルベシ、牧誓ノ篇ニ云ク、王曰、古人有ㇾ言、曰、牝鷄之晨、惟家之索」下略

京都將軍家譜ヲ見ルニ、足利義政其弟義視ヲ養子トス、今出川殿ト號ス、細川勝元ヲ執事トナス、寛正六年十一月、義政ノ御臺所藤ノ富子男子ヲ誕、義尙是ナリ、仍テ富子密ニ書ヲツカハシテ山名宗全ヲ頼ム、山名則命ニ從フ、是ヨリ細川山名威ヲアラソヒ、應仁ノ亂オコルト見エタリ

○屋形ト云事、將軍家譜ヲ見ルニ、永正五年十二月十九日、將軍義尹對馬嶋主宗義盛授ニ於屋形號ヲト云々

○笏ノ事、和漢合運ヲ見ルニ、人王四十四代元正天皇養老三年己未諸官ニ使ㇾ把ㇾ笏ト云云

○樣ト云事、太平記十八金ガ崎ノ城落ル時、新田越後守義顯一ノ宮ノ御前ニ參テ、上樣ノ御事ハト云事見エタリ

理交私ニ曰、樣ト云事、太平記ニ所々ニ出タリ、同七卷先帝隱岐ノ國ニ御座有シ時、中門ノ警固ニ

テ有ケル佐々木富士名判官、ヒソカニ官女ヲ以申入ケル、上様ハイマタシロシメサレ候ハズヤ、楠兵衛正成金剛山ニ城ヲカマヘテ栖籠リ候ヒシ所ニ、東國勢百萬餘騎ニテ上洛シ、去二月ノハジメヨリ攻戰ヒ候トイヘドモ、城ハ强クシテ寄手既ニ引色ニ成テ候トアリ

○禁中ト云事、蔡邕獨斷ニ曰、「禁中者門戸有レ禁、非ニ侍御ニ者不レ得レ入、故曰ニ禁中ニ」云云

○太上皇ト云事、蔡邕獨斷ニ曰、「漢高祖得ニ天下ニ、而父在、上ニ尊號ニ、曰ニ太上皇ニ、不レ言レ帝、非ニ天子ニ也」云云

○松野氏ノ事俗說辨一曰、「異域ノ人我國ニ來テ臣民トナル者アリ、其氏族ヲ蕃別ト云、蕃別種類甚多、其中ニ松野氏アリ、新撰姓氏錄云、松野ハ吳王夫差ノ後ナリト云云、同十九卷曰、允恭天皇ノ御宇諸臣ニ勅シテ湯ヲサグリ、神ニ誓ハシメテ姓名ヲタヾサル、其後萬多親王姓氏錄ヲ輯メラレシマデハ、猶イマダ一千一百八十二氏アリシガ、世クダリ人オトロヘテ己ガ姓氏ヲ取リウシナヒ、源平藤橘ノ四姓ナラデハナキヤウニ覺エ、我コソ其人ノ季ナレト僞リ、系圖ナドヲ妄作シ、ミズカラ欺キ他ニ衒フモノ多シト云云

○濫觴ト云事、孔子家語二卷三恕ノ篇ニ曰、「夫江出ニ於岷山ニ、其源可ニ以濫觴ニ」ト云云、物ノ始ル事ヲ濫觴ト云

○權輿ト云事、詩經三秦風權輿章ニ曰、「今也每食無ニ餘于ニ、嗟乎不レ承ニ權輿ニ」云云、物ノ始ル事ヲ權輿

ト云也

○穀旦ト云事、詩經陳風東門之枌ニ曰、「穀旦于差、南方之原、不ㇾ績二其麻一」云云、吉日ヲ穀旦ト云ハ是ヨリ始マレリ

○衒ト云事、論語子罕ノ篇註ニ、「不ㇾ枉ㇾ道以從ㇾ人、衒ㇾ玉而求ㇾ售也」ト云云、諸商人賣物ノ惡キヲモ能キト云ヒテホメニシテ價ヲ高シテ人ニ賣ルヲ衒ト云ナリ

理奐私ニ曰、此註ハ「子貢曰、有ㇾ美二玉於斯一、韞ㇾ匵而藏諸、求二善賈一而沽諸」ト云所ノ註ニ出タリ、道春訓點ニハ、匵ニ韞テ藏シタリ、善キ賈ヲ求メテ沽メヤ、子ノ曰、「沽ㇾ之哉沽ㇾ之哉」トヨマセタリ、春臺先生ノ曰、「韞ㇾ匵而藏諸、求二善賈一而沽諸」、ヒツニヲサメテ藏シタリ、善賈ヲ求テ沽メヤト讀ム誤ナリ、カクサンヤ、ウランヤト讀ベシ、此二句ハ子貢二端ヲ設テ問ヘルナリ、サレバ二句ノ末ニ皆諸字アルハ疑詞ナリ、沽ㇾ之哉ヲウラメヤト讀ムモ誤ナリ、哉ハ嗟嘆ノ詞ナリ、孔子ノ意ハ美玉ナラバ、善賈ヲ待テ沽ルベキコト勿論ナル故ニ、必沽ランドイフコトヲ甚タイハントテ、コレヲ沽ンカナ、コレヲ沽ンカナト重テノタマヒシナリ、此哉ノ字ハ左傳ニ、「可哉諸哉、與二君王一哉、畏二君王一哉」トイヒ、孟子ニ、膾炙哉トイヘル哉ノ字ト同ジ、皆人ノ言ニ深ク應ズル詞ナリ、然ルヲウラメヤト讀トキハ、疑フ詞ニナリテ答語ニナラズ、子貢ガ沽ンヤト問タルニ當リテ、コレヲ沽ンカナト答タマヘルヲ、沽諸ヲモ、沽ン哉ヲモ倶ニウラメヤト讀ム、故ニ問ト答ト倭語ニテ混同スル

ナリ、先輩文義ニ昧コトカクノ如シト云云

○陶尾張守ガ事閑際筆記ヲ見ルニ、大内義隆累代ノ臣陶某入道道喜、既ニ老テ家ニ居ス、唯一子アリ、五郎義清ト號ス、少シ才アリテ未ダ道ヲキカズ、道喜コレヲシテ義隆ニ仕ヘシム、義隆コレヲ親信ス、或時義清父ニ語テ曰フニ、義隆ノ行跡惡キ事ヲ談ズ、其詞悖、道喜カレガ謀反ヲ起サンコトヲ知テ、潜ニ家人ニ命ジテ義清ヲ殺スニ因テ、通家ノ子ヲ養テ己ガ家嗣トス、是ヲ尾張守隆房（將軍家譜ニハ晴賢トアリ）ト云フ、道喜死シテ隆房逆心ヲ起シ、義隆爲レ之弑セラルト云云

○朝三暮四ト云事、莊子齊物論ノ篇ニ、猿ヲ養人栗ヲ一日ニ七ツ宛猿ニアタヘシニ、朝三ツ暮ニ四ツ與ヘントイヘバ、猿ドモ皆怒ル、然ラバ朝四ツ暮ニ三ツアタヘント云ヘバ、猿ドモ皆悅ブ、栗ノ數ハ同ジ事ナレドモ、始ニ多ク取ルヲ悅ブ、是ヲ猿利根ト云ナリ、此事列子ニモ見エタリ

理交私ニ曰、列子ニ出タルハ文長シ、莊子ニハ略シテ書ク、莊子ニハ偏屈ナル人ノタトヘニ書タリ、曰、「何謂二之朝三一、曰、狙公賦レ茅（橡ナリ、山栗也）曰、朝三而暮四、衆狙皆怒、曰、則朝四而暮三、衆狙皆悅、名實未レ虧、而喜怒爲レ用、亦因レ是也」ト見エタリ

右本書幷ニ評判ノ內ニ漏タルヲ加ヘテ參考ニ備フ、前ニナキコトヲ新ニ出セルモ有リ、不レ拘二次第一記レ之、猶追テ考加ベシ、此評判ニ引所ノ書奥ヘ錄シテ出ス

右金銀通用記ノ書ヲ、或人予ニシメシテ評ヲ加ヘン事ヲ乞、予辨ヲ不レ好トイヘドモ、童蒙ノ輩コレヲ

視テ、故實ヲ誤リ邪路ヲ傳ヘン事ヲ畏レ、予ガ鹵莽ナルヲ不レ愧、其善惡可否ヲ評判シ、九牛ガ一毛ナリトモ佐ニヤナラント筆ヲ勞ス、然レドモ君子ハ人ノ美ヲ成シテ、人ノ惡事ヲ不レ成トハ聖人ノ敎ナルヲ、厚ク人ヲ責ルハ智者ノ誹ヲ招ク成ベシ、評ノ不レ當所、文字ノ差ハ見ル人是ヲ正シ玉ヘ

享保八癸卯歲九月穀日

先障堂不聰　評書

門人　探緒軒　增補

新增

○此書ノ發端ニ、以レ貝爲レ寶ト書ル事

理交私ニ曰、頃日浪花ノ沙門子登ノ著ス所ノ世說故事苑ヲ見ルニ、此事出タリ、シバラク左ニ記シテ以テ童子ニ便リアラセントス、然レドモ孟子ニ「盡信レ書則不レ如レ無レ書、吾於ニ武成ニ取ニ二三策ニ而已矣」トノタマヘバ、今此書ノ說ノ善惡邪正モ、明哲ノ人コレヲ訂シ玉ヘ○世說故事苑ニ曰、事文類聚ニ云、古貨貝而寶龜、至レ周而有レ泉、到レ秦行レ泉（字彙、貨泉ハ錢ノ別名）○紀原曰、形圓ニシテ孔方ナル錢ハ、周ノ太公ノ時始ル、此時始テ錢ト名クルナリ、是レ禹王湯王ノ時、金ヲ通用シテ民ノ水旱ノ苦ヲ救玉

フニ效テ錢ヲ造レルナリ、又後魏高謙之ガ說ニハ、錢ハ堯ノ時ニ起ルト云ヘリ〇國語ニ曰、周景王ノ時、錢ノ輕キヲ患テ大錢ヲ鑄、韋昭注ニ云、徑一寸二分、重サ十二銖、文字寶貨ナリ、是ヲ以テ農ヲ勸メ不足ヲ贍ケレバ、百姓利ヲ蒙レリ、後世時ノ用ノ爲メニ、或ハ通用シ、或ハ罷ナドスルハ民ニ利アラズ、（紀原十）吾朝廢帝ノ時新錢ヲ鑄テ、一文ヲ舊錢ノ十文ニ當テ通用スト、是レ謂ニ大錢ニナリ〇又曰、錢ヲ用ル、價高下アルコト異域モ同ジ、事物紀原曰、古ヨリ錢ヲ用ルニ皆千文ヲ以テ一貫文トセシニ、梁ノ武帝ノ時、破嶺ヨリ東ハ錢八十ヲ百トシテ通用ス、是ヲ東錢ト名ヅク、江郢ヨリ上ハ七十ヲ百トス、是ヲ西錢ト名ヅク、京師ハ九十ヲ百トス、是ヲ長錢ト名ヅク、（吾俗長百ト云、是也）大同元年詔アリテ、古ノ如ク長百ニ足シテ通用セヨト有ケレドモ、人不レ從、益少錢ヲ用ヒタリ、大同年中ノ末ニハ、遂ニ三十五文ヲ百ト爲ス、其ノ八十ヲ百トスルハ梁ヨリ始マルコト通典ニ見エタリ、唐ノ昭宗ノ時、京師ハ錢八百五十ヲ一貫トシ、河南府ハ八百ヲ一貫トス、筆談ニ曰、漢ノ隱帝ノ時三司使王章ト云人官錢ヲ出ス、每ニ七十七文ヲ百トス、是ヲ省百トス、（吾俗錢百ト云是也、省百ト云ナ誤テ錢百ト云ナルベシ）蓋自ニ五代漢ニ始也ト見エタリ、

右評判引用書目（次第不レ拘）

日本紀　日本紀纂疏　延喜式　神社考

王代一覽　論語　孟子　大學

四書索引　詩經　書經　周易
禮記　春秋左氏傳　孔子家語　事物紀原
小學　白虎通　五雜俎　風俗通
書言故事　揚子法言　蔡邕獨斷　易學啓蒙
入學圖說　大極圖說　素問　古文前集
烈女傳　莊子　列子　淮南子
法華經　從容錄　六韜　尉繚子
字彙　玉篇　和漢合運　和漢名數
禁中方名目鈔　日本歲時記　明題和歌集　俗說辨
東鑑　源平盛衰記　太平記　太平記評判
京都將軍家譜　北條五代記　朝鮮征伐記　閑際筆記
玉露叢　武用辨略　下學集　式目

總計五十六部

金銀通用記評判下終

宮崎幸麿
小西武治　校

大正五年十一月二十八日印刷
大正五年十一月三十日發行

日本經濟叢書
卷三十

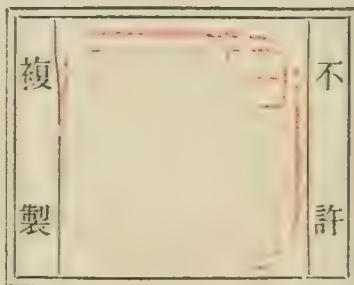
非賣品

不許複製

編者　瀧本誠一

發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所　東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八一〇番

理事　高木範之丞
佐藤卯兵衛

CONTENTS

of the thirtieth volume

BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XXX

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1916.